法務省委託

平成25年度人権シンポジウム

石巻会場　東京会場
神戸会場　長崎会場

報　告　書

公益財団法人 人権教育啓発推進センター

目　　次

＜石巻会場＞
結果報告 ……3
プログラム ……4
主催者挨拶 ……5
会場風景 ……7
登壇者プロフィール・パネリストレジュメ ……9
第１部　シンポジウム「震災と人権 〜一人一人の心の復興を目指して〜」
パネリストによる基調報告
●奥田　知志（公益財団法人共生地域創造財団代表理事）……39
●友廣　裕一（一般社団法人つむぎや代表理事）……43
●近江　弘一（株式会社石巻日日新聞社代表取締役社長）……47
●鈴木るり子（岩手看護短期大学専攻科地域看護学専攻教授）……50
パネルディスカッション ……54
第２部　コンサート
●友石　竜也（劇団四季出身）……64
共演者：金平　真弥（劇団四季出身）
和田さやか（ピアニスト）　安達　星来
アンケート集計結果 ……73
広報内容 ……78
実施内容の周知 ……80

＜東京会場＞
結果報告 ……85
プログラム ……86
主催者挨拶 ……87
会場風景 ……89
登壇者プロフィール・パネリストレジュメ ……91
第１部　シンポジウム「インターネットと人権 〜今、ネットで何が起きているのか〜」
パネリストによる基調報告
●安川　雅史（全国ｗｅｂカウンセリング協議会理事長）……125
●吉川　誠司（ＷＥＢ１１０主宰）……131
●渡辺真由子（メディア・ジャーナリスト）……138
パネルディスカッション ……144
第２部　講演（トークショー）「インターネットが授けてくれた10の大切なこと」
●古新　　舜（コスモボックス株式会社代表取締役社長ＣＥＯ、映画監督）
……160
アンケート集計結果 ……173
広報内容 ……178
実施内容の周知 ……180

＜神戸会場＞
結果報告 ……185
プログラム ……186

主催者挨拶 ……187
会場風景 ……189
登壇者プロフィール・パネリストレジュメ ……191
第１部　シンポジウム「震災と人権 〜阪神・淡路大震災から『心の復興』を学ぶ〜」
パネリストによる基調報告
●加藤　　寛（兵庫県こころのケアセンターセンター長）……215
●冨永　良喜（兵庫教育大学大学院学校教育研究科人間発達教育専攻臨床心理学コース教授）……219
●小林　郁雄（兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科特任教授）……223
●菅野　澄枝（岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会代表）
緑上　浩子（岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会メンバー）……226
パネルディスカッション……231
第２部　映画上映　映画『雄勝〜法印神楽の復興』
監督によるトークショー　「被災地の祭から見えてくる心の復興」
●手塚　　眞（ヴィジュアリスト、有限会社ネオンテトラ代表取締役）……243
アンケート集計結果 ……249
広報内容 ……254
実施内容の周知 ……256

＜長崎会場＞
結果報告 ……259
プログラム ……260
主催者挨拶 ……261
会場風景 ……263
登壇者プロフィール・パネリストレジュメ ……265
第１部　シンポジウム「子どもと人権 〜いじめ･体罰･虐待のない社会を目指して〜」
パネリストによる基調報告
●小森美登里（特定非営利活動法人ジェントルハートプロジェクト理事）……323
●菅原　哲朗（弁護士、日本体育協会国民体育大会委員会委員）……328
●山口由美子（親の会「ほっとケーキ」代表、子どもの居場所「ハッピービバーク」代表）……345
●吉田　恒雄（駿河台大学法学部教授、特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク理事長）……350
パネルディスカッション……355
第２部　講演（トークショー）「いじめを乗り越えた 子どもの明日はすばらしい！」
●志茂田景樹（よい子に読み聞かせ隊隊長、作家）……368
アンケート集計結果 ……377
広報内容 ……382
実施内容の周知 ……384
人権シンポジウム開催実績一覧 ……385

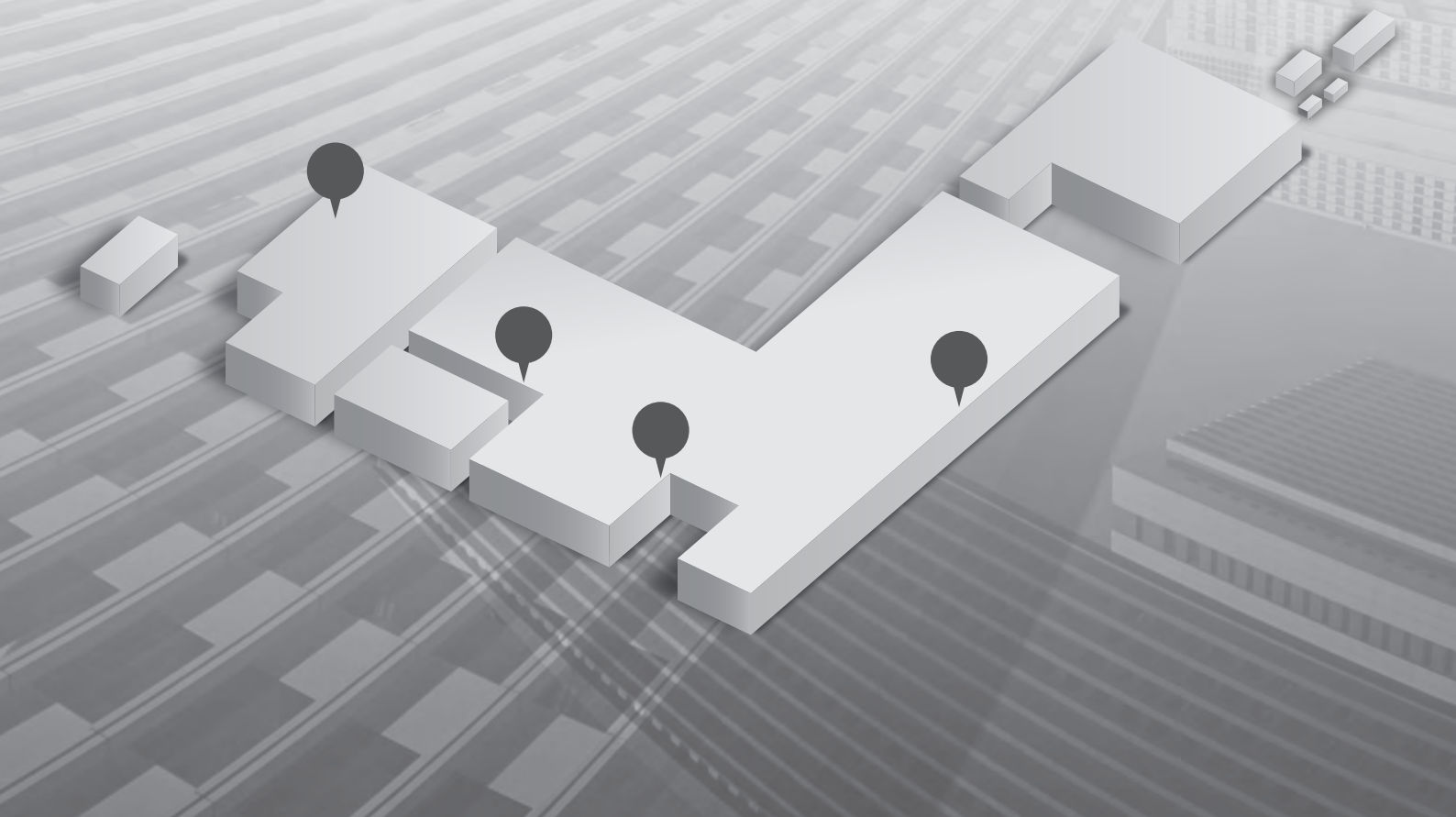
平成25年度
人権シンポジウム

石巻会場

東京会場

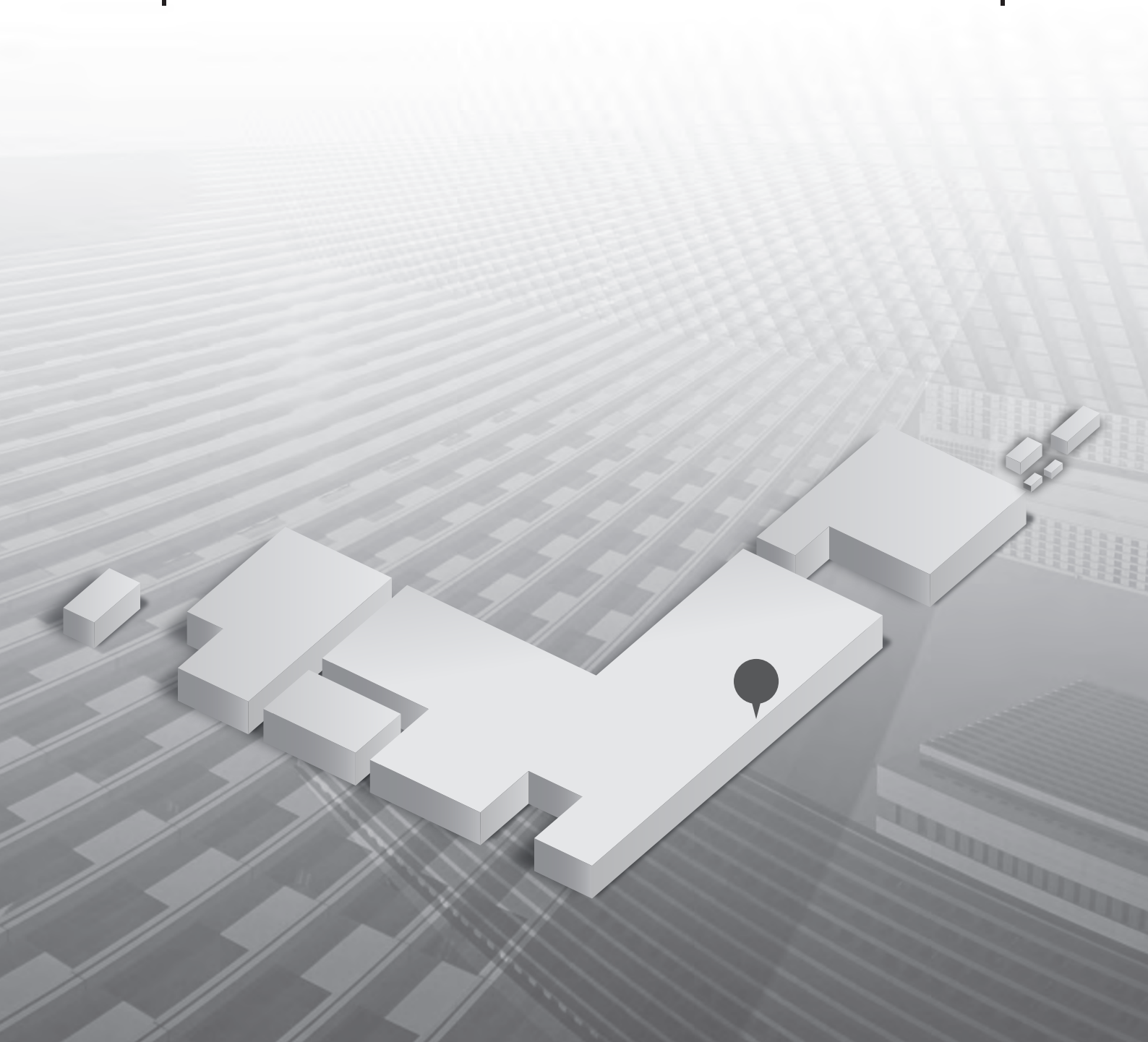
神戸会場

長崎会場



シンポジウム報告

石巻会場



会場結果報告

【名　　称】　人権シンポジウム in 石巻

【地域テーマ】　震災と人権 ～一人一人の心の復興を目指して～

【日　　時】　2013（平成25）年8月31日（土）　13：30 ～ 17：30

【会　　場】　石巻市遊楽館・かなんホール
（宮城県石巻市北村字前山15－1）

【来 場 者 数】　208人

【主　　催】　法務省、全国人権擁護委員連合会
仙台法務局、宮城県人権擁護委員連合会
公益財団法人人権教育啓発推進センター

【後　　援】　宮城県、石巻市、宮城県市長会、宮城県町村会、石巻日日新聞社、河北新報社、読売新聞東北総局、朝日新聞仙台総局、毎日新聞仙台支局、産経新聞社東北総局、日本経済新聞社仙台支局、ＮＨＫ仙台放送局、仙台放送、ＴＢＣ東北放送、ＫＨＢ東日本放送、ミヤギテレビ、Date fm、共同通信社仙台支社、時事通信社仙台支社

プログラム

13：30～13：35

主催者挨拶　　佐生　道夫（仙台法務局人権擁護部長）

13：35～15：05

第１部　　シンポジウム「震災と人権 ～一人一人の心の復興を目指して～」

＜パネリストによる基調報告＞

■パネリスト

奥田　知志（公益財団法人共生地域創造財団代表理事）

友廣　裕一（一般社団法人つむぎや代表理事）

近江　弘一（株式会社石巻日日新聞社代表取締役社長）

鈴木るり子（岩手看護短期大学専攻科地域看護学専攻教授）

■コーディネーター

稲積謙次郎（ジャーナリスト、元西日本新聞社編集局長）

15：05～15：20　～休憩15分～

15：20～16：15

＜パネルディスカッション＞

（会場からの質問を中心にコーディネーター主導による自由討議）

16：15～16：30　～休憩15分～

16：30～17：30

第２部　　コンサート

友石　竜也（劇団四季出身）

共演者：金平　真弥　　ピアニスト：和田　さやか　　安達　星来

主催者挨拶

仙台法務局人権擁護部長
佐　生　道　夫

本日は、お忙しい中、多数の皆様に御来場いただきまして、誠にありがとうございます。

平成23年3月11日に発生しました東日本大震災におきまして亡くなられた方々、御遺族の皆様に対しまして、深くお悔やみを申し上げます。

また、被害に遭われた皆様には、心からお見舞い申し上げます。

本日、震災に関する人権シンポジウムが、被災地である宮城県石巻市におきまして開催されますことは、誠に意義深いものであると思っております。

御承知のとおり、東日本大震災は、地震そのものに加え、その後の大津波、そして、これに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故により、東北地方を中心として甚大な被害をもたらしました。既に、震災から2年5か月が経過しましたが、ここ宮城県においても、約9万7千人という大変多くの方が仮設住宅等での避難生活を余儀なくされており、震災に起因する生活不安・ストレス等の影響による様々な人権問題が生じています。

このような中、全国の法務局、地方法務局及び人権擁護委員を中心とする、法務省の人権擁護機関は、原発事故に伴う風評に基づく差別的取扱い等、震災に伴って生起する様々な人権問題に対処するとともに、新たな人権侵害の発生を防止するため、震災に関する人権シンポジウムの開催を始め、各種の人権啓発活動に取り組んでおります。また、仮設住宅を訪問するなどして、被災者の心のケアを含めた様々な相談にも応じており、このような活動を通じて、人権侵害の疑いのある事案を認知した場合には、被害者の救済のため、速やかな対応をすることとしております。

さて、本日の人権シンポジウムのテーマは、「震災と人権～一人一人の心の復興を目指して～」です。被災地の被害は、目に見えるものだけではありません。物質面の復興はもちろんですが、被災された皆様へ「一人ではない」ということや、「共に頑張っていこう」というメッセージを発信するとともに、全ての国民の皆様に、思いやりや支えあいなど、心のつながりが大切であることを伝え、被災された皆様の、一人一人の心の復興を目指したいとの思いから、このテーマを選定いたしました。

本日のシンポジウムのパネリストは、復興支援に関わっている学識経験者など、このテーマの議論をするのにふさわしい方々であります。また、第二部として、音楽を通して被災地への支援活動を行っている友石竜也さんのコンサートも予定されています。どうか最後まで御参加いただきますよう、お願いします。

なお、本日のシンポジウムの模様は、後日、インターネット上のYouTubeの人権チャンネルなどに掲載することを予定しています。本日この会場にお集まりいただいた皆様だけでなく、更に多くの皆様に、本シンポジウムの内容を共有していただきたいと思っております。

最後になりますが、本日のシンポジウム開催につきまして、各方面から賜りました多大の御支援、御協力に対し、心から感謝申し上げ、私の挨拶といたします。

石巻会場



広報用チラシ



受付風景



石巻人権擁護委員協議会による展示



石巻日日新聞社壁新聞の展示



石巻の子どもたちが作った震災紙芝居＆メッセージパネルの展示

第1部　シンポジウム



会場風景


コーディネーター
稲積謙次郎さん


パネリスト 奥田知志さん


パネリスト 友廣裕一さん


パネリスト 近江弘一さん


パネリスト 鈴木るり子さん

第2部　コンサート

金平真弥さん



ピアニスト：和田さやかさん
譜めくり：安達星来さん



友石竜也さん



石巻会場

登壇者プロフィール



第１部
シンポジウム「震災と人権 ～一人一人の心の復興を目指して～」



パネリスト

奥田　知志（おくだ　ともし）

公益財団法人共生地域創造財団代表理事
日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師
特定非営利活動法人北九州ホームレス支援機構理事長
特定非営利活動法人ホームレス支援全国ネットワーク理事長

1990年　日本バプテスト連盟東八幡キリスト教会牧師就任　現在に至る
1990年　ホームレス支援組織　北九州越冬実行委員会に参加
　　事務局長就任
2000年　NPO法人北九州ホームレス支援機構設立　理事長就任
2006年　NPO法人ホームレス支援全国ネットワーク設立　理事長就任
2011年　一般社団法人共生地域創造財団設立　代表理事就任
　　※2012年10月より公益財団法人に組織変更

【主な著書】
「ホームレス自立支援」（共著）（明石書店）
「主の招く声が」（共著）（日本キリスト教団出版局）
「もう、ひとりにさせない」（いのちのことば社）
「助けてと言おう」（日本キリスト教団出版局）　ほか



パネリスト

友廣　裕一（ともひろ　ゆういち）

一般社団法人つむぎや代表理事

持続可能な社会について探求する中で、今でも石貨が価値を持つミクロネシア連邦ヤップ島を訪れて自給自足の暮らしを経験。その後、新潟の中山間地域の小規模集落を訪ね、継続的に関わる中で“豊かさ”について身体で考える。2009年「ムラアカリをゆく」と題して、日本全国の農山漁村を訪ねながら各地でお手伝いをさせてもらいながら泊めていただく旅を実施。約70か所の日本の農山漁村に滞在しながら、たくさんの人の暮らしや仕事に触れ、そこで生まれたご縁をもとに自分の役割を全うするべく旅するように働く。2011年3月17日から宮城県入りし、現在は石巻市･牡鹿半島の漁家の女性たちと「ぼっぽら食堂」「OCICA」の事業を立ち上げ、運営している。

【主な著書】

「クリエイティブ・コミュニティ・デザイン」（共著）（フィルムアート社）
「シゴトとヒトの間を考える」（共著）（シゴトヒト）
「OCICA　～石巻 牡鹿半島 小さな漁村の物語～」（一般社団法人つむぎや）



パネリスト

近江　弘一（おおみ　こういち）

株式会社石巻日日新聞社代表取締役社長
有限会社コバルトーレ（Cobaltore 女川）取締役社長兼GM

1981年 4月	株式会社宮城スズキ販売入社、同年12月退社
1981年12月	有限会社東北ダイビングセンター入社、営業担当
1984年	営業部門独立により株式会社モビーディック転籍入社
1999年 4月	株式会社モビーディック専務取締役就任
2004年10月	有限会社ファン・クリエーション取締役社長就任兼務
2006年 3月	有限会社コバルトーレを設立、取締役社長に就任 新しい町づくりを提案する活動を開始
2006年 5月	株式会社モビーディック、有限会社ファン・クリエーションの全職位を退任
2006年 6月	株式会社石巻日日新聞社　取締役総務局長に就任
2007年 6月	株式会社石巻日日新聞社　専務取締役に就任
2009年 6月	株式会社石巻日日新聞社　代表取締役社長に就任

【1981年】
大学卒業。鈴木自動車工業において入社研修後、2か月で営業現場に配属され、自転車店等を中心とした新規小規模取次店を担当し、新人ながら全国優秀営業所の一員となる。
【1981 ～ 1982年】
東北地区の漁協等へ漁具の営業を担当。
【1983 ～ 2006年】
モビーディックの創成期において、特に当時成長過程にあったウインドサーフィン店におけるマーチャンダイズ指導を軸とした営業の先頭に立ち、販売実績を6年で約5倍にし、業界における地位を確立した。その後は、社内組織の整備、情報システム、会計システムの導入など業務処理システムの刷新に注力し、現在の社内業務システムの骨格を整備した。また、ファン・クリエーションにおいては社内改革を断行し、数年来、赤字で推移してきた業績を単年で黒字化へ改善した。
【2006年～】
地元貢献を人生の活動テーマの軸と決め、約百年もの間、地元に根ざして活動を続ける石巻日日新聞社と有限会社コバルトーレの経営を軸とし、地域活性化の活動を開始。石巻日日新聞の赤字体質を単年で改善、東北リーグに昇格したコバルトーレ女川をベースにスポーツ育成活動を展開。
2011年3月11日の震災に際して、手書きの新聞で注目される。現在、地域内への活動を継続しながら、震災を風化させない活動を展開中。

【主な著書】
「6枚の壁新聞　石巻日日新聞・東日本大震災後7日間の記録」
（角川マガジンズ）



パネリスト

鈴木　るり子（すずき　るりこ）

岩手看護短期大学専攻科地域看護学専攻教授
専門：公衆衛生看護学

2004年　岩手看護短期大学教授（現職）
　　一般社団法人全国保健師教育機関協議会理事
2005年　岩手公衆衛生学会理事　※第24期岩手公衆衛生学会長
2010年　日本公衆衛生学会認定専門家に認定
2011年　大槌町復興まちづくり創造懇談会アドバイザー

【主な著書】

「地域医療テキスト　Ⅲ地域医療を支える人材21看護職」（医学書院）
「吾が住み処ここより他になし―田野畑村元開拓保健婦のあゆみ」（編）（萌文社）
「大槌町保健師による全戸家庭訪問と被災地復興」（共編）（明石書店）
「岩手県沢内村の保健医療福祉の統合，ふみしめて七十年」（日本公衆衛生協会）
「全国保健師教育機関協議会　保健師教育の質向上に邁進した30年，ふみしめて七十年」（共著）（日本公衆衛生協会）
「災害と孤立問題」※「社会的孤立問題への挑戦」（共著）（法律文化社）



コーディネーター

稲積　謙次郎（いなづみ　けんじろう）

ジャーナリスト
元西日本新聞社編集局長
元総務庁地域改善対策協議会委員
福岡県人権施策推進懇話会会長

1956年　西日本新聞社入社
1980年　〃　社会部長
1986年　〃　東京支社政治部長
1987年　〃　取締役編集局長
1991年　〃　常務取締役
1995年　株式会社西広代表取締役社長（2002年退任）
1993年～ 総務庁地域改善対策協議会委員（～ 1996年）
現在　北九州市人権施策審議会会長
福岡県人権施策推進懇話会会長
人権文化を育てる会代表世話人
太宰府市教育委員会委員長
鳥取県人権文化センター客員研究員

1956年西日本新聞社に入社。社会部長、政治部長、常務取締役編集局長などを歴任。1981年西日本新聞で展開した同和問題キャンペーンで、マスコミ界のタブーを打ち破ったとして日本新聞協会賞を受賞。
公職として、政府の地域改善対策協議会委員を務め、1996年、国の新しい同和行政の基本方策についての意見具申に関わる。その後、多くの自治体の人権行政指針の策定に関わってきた。
現在、福岡県人権施策推進懇話会会長、北九州市人権施策審議会会長、人権文化を育てる会代表世話人、鳥取県人権文化センター客員研究員、太宰府市教育委員長などを務める。

【主な著書】
「君よ太陽に語れ―差別と人権を考える」（西日本新聞社）
「ここにも差別が―ジャーナリストの見た部落問題」（共著）（解放出版社）
「ヒューマンライツは複数形―ジャーナリストの直眼斜眼」（西日本新聞社）
ほか

第２部
コンサート



友石　竜也（ともいし　たつや）

ミュージカルソウルキャンプアカデミー主宰
元・劇団四季所属

愛媛県出身。大阪芸術大学舞台芸術学科ミュージカルコース卒業。
1999年劇団四季研究所入所。
入団1年目にして「ライオンキング」主演シンバ役を射止め通算1,200回の出演を誇る。

「アイーダ」ラダメス役も演じるが、2006年退団。
退団後は、TSミュージカル「calli ～炎の女カルメン～」「AKURO」「天翔ける風に」三作続けて出演。

その後、「ニューブレイン」「音楽劇赤毛のアン」「サイドショウコンサート」「ビクタービクトリア」「カラミティ・ジェーン」「ルルドの奇跡」「環境ミュージカル　青い地球は誰のもの」などに出演。コンサート活動多数。

宮城県石巻市や東松島市など東日本大震災被災地でのコンサート活動も多数行う。

石巻会場

レジュメ



レジュメ　　奥　田　知　志

相互多重型支援とは何か

奥田 知志
公益財団法人共生地域創造財団代表理事

東日本大震災における産業復興支援および生活困窮者支援相互多重型支援事業



共生地域創造財団の概要

■共生地域創造財団は、震災支援と現地の復興と、未来に向けた共生地域の創造を目的としてNPOと2つの生協が協働して設立
■発起団体
NPO法人ホームレス支援全国ネットワーク
生活協同組合　グリーンコープ共同体
生活協同組合　生活クラブ生協
■2012年10月　公益財団法人認可

理事会

代表理事　奥田 知志　NPO法人　ホームレス支援全国ネットワーク　代表
NPO法人　北九州ホームレス支援機構　代表理事
日本バプテスト連盟　東八幡キリスト教会　牧師
理事　水内 俊雄　大阪市立大学　教授
理事　渡部 孝之　生活クラブ事業連合生活協同組合連合会　代表理事常務
理事　荒井 勇　生活クラブ事業連合生活協同組合連合会　総務部長
理事　片岡 宏明　生活協同組合連合会グリーンコープ連合　専務理事
理事　村上 省三　生活協同組合連合会グリーンコープ連合　常務理事
監事　赤坂 禎博　生活クラブ生活協同組合東京　常務理事
監事　内村 紀子　グリーンコープ福祉ワーカーズ連合会　理事長
評議員　森松 長生　NPO法人北九州ホームレス支援機構　常務理事
評議員　立岡 学　NPO法人ワンファミリー仙台　代表理事
評議員　加藤 好一　生活クラブ事業連合生活協同組合連合会　代表理事
評議員　福岡 良行　生活クラブ事業連合生活協同組合連合会　専務理事
評議員　田中 裕子　生活協同組合連合会グリーンコープ共同体　代表理事
評議員　東原 晃一郎　生活協同組合連合会グリーンコープ共同体　専務理事

活動の4つの柱

- 見守り・生活伴走支援活動
  制度の狭間の方、支援の行き届かない被災者を中心に
  →女川、大船渡における在宅避難者支援
- 産業復興支援
  人的支援、機材・備品支援、販路開拓など
  →宮城亘理、牡鹿半島蛤浜折浜
- 仕事つくり支援
  コミュニティー形成、生き甲斐づくり、小さな起業
  →宮城・亘理の手仕事（ワタリス）
- 福島支援
  一次保養や遠隔地避難の支援
  →NPO法人　シャローム支援

設立目的と基本コンセプト

【目的】
①東日本大震災の被災者の復興を支援する
②福島原子力発電所事故の被害者を支援する
③生活困窮状態に置かれた者を支援する
④上記支援をすることにより新しい共生社会の創造を目指す

【基本コンセプト】
①もっとも小さくされた者への偏った支援を小さくかつ継続的に行う。
②当事者から聴き、学ぶ姿勢を持つ
③困窮者の課題を経済的困窮と関係的困窮として捉える―伴走型支援の実施
④絆の相互性を尊重する―助ける側と助けられる側の固定化の克服
⑤自尊感情と自己有用感を尊重する―相互多重型支援の実施
⑥官民の支援活動・団体との連携を図る
⑦復興ではなく新たな共生社会の創造を目指す。

相互多重型支援事業
漁業復興支援

蛤浜　折浜における復興支援とビジネスモデル



被害の状況

折浜（おりのはま）	蛤浜（はまぐりはま）
・世帯数19戸，住民62名	・世帯数９戸，住民29名
・震災により住宅4戸が全壊。共同加工場も津波により全壊	・震災により住宅５戸が全壊。加工場も津波で全壊
・現存住宅12戸，住民22名	・現存住宅3戸，住民8名
・底引きトロール船以外の漁船が津波の影響により所在不明。	・牡蠣漁船、ワッパ船共にすべてが流失
・漁業者（震8戸/現4戸）	・漁業者（前2戸/現1戸）

蛤浜・折浜における活動



支援開始後3か月目の出来事

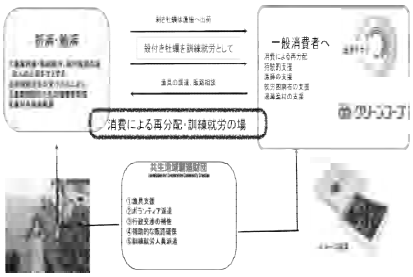
亀山区長
⇒「ありがたかったけど、重かった・・・」

絆とは何か？
相互性（同時性）
可逆性
負荷性（絆は傷を含む）

相互多重型支援とは何か？

①相互性
⇒助けられた者は、同時に助ける者
②多重性
⇒一つの事柄に二つ以上の意義を込める

相互性と多重性
①漁師　自らの復興⇔困窮者支援
②困窮者　自立⇔震災復興支援
③消費者　自立支援と復興支援
消費による富の再分配構造
④漁村後継者問題
出会いの場面・・・後継者の発掘
※相互的であり、かつ多重的
⇒一粒で二度三度おいしいカキ



相互多重型支援事業
漁業復興支援

宮城県亘理町における
復興支援とビジネスモデル



現地の状況

- 被災沿岸部はイチゴ栽培が盛んだった。
- 一面のビニールハウスがすべてなくなり、畑を掘り起こすと瓦礫がでてくる状況
- イチゴ栽培には多額の費用で設備を整える必要がある。
- また、大規模区画整理対象地域であるので、自由にハウスなどを立てられない。

仙南エリア　亘理町、山元町での
イチゴ農家支援　津波の後の風景



一面トマト畑になりました！
加工用トマト事業

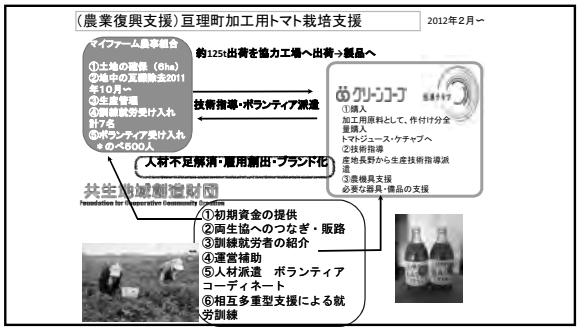


一杯収穫できました！1300トン



働いています！！





困窮者支援とソーシャルビジネス

①相互多重型であること
②意義のインセンティブ
③クオリティーとストーリー
④選択的消費者の確保
⑤消費における富の再分配
⑥資源創造と人材育成

生活困窮者とは？

経済的困窮

社会的孤立

課題の抽出⇒診立ての重要性

- 住居がない
- 食べる物がない
- 着る物がない
- 病院にいけない

⇩

ハウスレス
（経済的困窮）

- 家族がいない
- 心配してくれる人がいない
- 心配する相手がいない
- 覚えてくれる人がいない

⇩

ホームレス
（関係性の困窮・孤立）

2つの困窮⇒困窮・孤立者支援

支援の両輪

・経済的困窮・ハウスレス支援・・・なにが必要か
（衣・食・住・医療）
・関係的困窮・ホームレス支援・・・だれが必要か
（絆の回復、人とのつながり）




困窮概念の見直し

従来の困窮概念
①経済的困窮
⇒ハローワーク・年金制度・生活保護など
②身体的困窮
⇒病院・健康保険・障害福祉・老齢福祉・介護など

さらに、第三の困窮 ③関係的困窮

※これまで困窮者の横には「誰か」がいた。その「誰か」が社会的資源につないだ。
⇒三つの縁・・・地縁、血縁、社縁・・・脆弱化
⇒第4の縁の必要
※第1、2、3の縁に代わる第4の縁ではなく、第1、2、3の縁、さらに既存の社会支援をコーディネートする第4の縁が必要・・・・伴走型支援

伴走型支援の方向性

参加と自立

従来⇒自立した者が社会に参加できる
しかし･･･参加は、自立の前提

伴走型支援の必要
モデルとしての家庭

家庭が持つ4つの機能

①受け皿的機能ー家庭内サービス提供
住居、食事、睡眠、看護、教育、服飾･･･
②記憶
出来事・経験・思い出････
③持続性のある伴走的コーディネート機能
家族の成員のニーズに応じた社会的資源との連携をコーディネートする。家庭外サービスの確保。
④役割の創出････自己有用感

自尊感情

26

しかし、家庭が崩壊した

①受け皿機能・サービス提供
→既存の社会的資源の活用で対応
････例えば、介護事業等・コンビニなどなど
②記憶
③伴走的コーディネート機能
④役割

この3つは欠落！

社会的創造する



家族・家庭は、機能を果たすと以前に
「存在そのもの」であった
⇓
伴走型支援の二本柱
①処遇の支援･･･点の支援
②存在の支援･･･線の支援
※これまでの支援現場の多くは処遇中心
※処遇を円滑に図るためにも存在は重要
※存在の支援は、支援の相互性を可能にする

困窮者支援の三つの要素(DSP)

①データベース(DB)
②サポートプラン(SP)
③パーソナル・サポート・パーソン
―伴走型支援
(PSP:PSSではない！)
→人を支援するのは人である
→パーソナルは、「個別」のみならず、
人格(ペルソナ)に対する支援･･･全人支援

伴走型支援における
二方面戦略
①ひとりの路上死も出さない
②ひとりでも多く一日でも早く
路上からの脱出を
①と②⇒対個人
③ホームレスを生まない社会の創造
⇒対社会

貧困は社会そのものの問題

①「困窮者の社会復帰支援」ではない
②そもそも復帰したい社会か？
③歪んだ社会の補完的活動への転落を防ぐ
④新しい社会（地域）の創造へ

レジュメ　友 廣 裕 一

「宮城県石巻市・牡鹿半島 小さな漁村の物語」

友廣 裕一

一般社団法人つむぎや代表理事

・ 避難所のアセスメント調査のため 2011 年 3 月 17 日現地入り

- 石巻を中心に、宮城県内の避難所を回る
- 「被災地」「被災者」という言葉の違和感

・ 牡鹿半島・鮎川浜のお母さんたちとの出会い

- 漁網の補修糸によるミサンガづくり
  - 団体名は「マーマメイド」
  - 販売するにあたって決めたこと
- 浜のお母さんのお弁当屋さん「ぼっぽら食堂」
  - 雑魚を中心に使用し、家庭料理を応用したお弁当
  - 地元の仕事として定着させることが目標

・ 牡鹿半島・牧浜のお母さんたちとの出会い

- 地元に生息する鹿の角と漁網の補修糸でつくるアクセサリー「OCICA」
  - 牡蠣の浜で、牡蠣剥きの代わりになる仕事をつくる
  - 地元の素材＆地元の技術との出会い
  - 物語が手渡されていくように国内外への広まり

・ 役割としての「仕事」の大切さ

- 与えられるより、与えることの喜び
- 自己肯定感や尊厳は言葉を重ねても限界がある
- 「つながる」ことの価値

レジュメ　近 江 弘 一

2011.03.11　東日本大震災　～石巻地域で起きたこと～

近江 弘一
株式会社石巻日日新聞社代表取締役社長

①震災と石巻日日新聞

②生きていくために

③復興と地域貢献事業

レジュメ　鈴 木 るり子

—岩手県大槌町保健師による全戸家庭訪問調査から見えてきたこと—

～心のスイッチは、いつも 3・11 のまま、繰り返し押し寄せた津波のようにいつも顔を出す～

鈴木 るり子
岩手看護短期大学専攻科地域看護学専攻教授

岩手県大槌町は、地震による大津波、その後の火災により、市街地の 52%を喪失し、人口の 7.8%を失った。さらに、役場の流出による行政機能も失われ、岩手県で最も人口当たりの被災者の多い自治体である。津波は、大事な人も財産も一飲みにして立ち去った。その後の人々に「あとは任せたよと言いながら」残された私たちは、ただ茫然と心を亡くしたように過ごした。2 日後に、我が家を見に行った。寸断された道。瓦礫と化した街。私たちの暮らしはどこに消えたのか・・。会う人会う人に涙でぐちゃぐちゃになった目で会話するしかなかった。「良かった」「生きていてよかった」「ウンウン・・」声にならないうなずきだけの会話だった。「できることをしよう」「advocator 代弁者になろう」「大事な人に別れを告げることも許されず命を失った人々の・・。」誰にでも起こる災害死だとしても約 1,300 人の尊い命はあまりにも重いものだった。

大槌町で 28 年間保健師として勤務していたこともあり、「待っていたよ」「やっぱり来てくれた」「来ると信じていた」との住民の声に励まされ、全国の保健師に全戸家庭訪問を呼びかけた。大槌町までの交通は遮断され、朝夕は氷点下になる寒い時期に全国から 137 人（延べ 555 人）の保健師が集結し、2011 年 4 月 23 日から 5 月 8 日までの 16 日間、農家の作業小屋で寝袋に寝て、自炊をしながら家庭訪問は開始された。黄色いベストを着た保健師たちは、見るみるうちに住宅地図を黄色のペンで塗りつぶしてくれた。津波で全壊した家屋を除く3,728 戸、5,082 人の健康調査をした。全住民の安否確認は被災前の住民基本台帳人口 16,054 人中 13,935 人（86.8%）を把握した。調査で際だった健康課題は高血圧だった。全国平均より高血圧症有病率が高く、とりわけ若い世代、働き盛りの世代に顕著だった。また、「不眠」の訴えが多く、自覚症状では精神面の症状についての訴えが高率だった。要フォロー者の支援必要理由で最も高かったのは「心のケア」で 37%だった。住民の安否確認結果を人口ピラミットにし、健康課題をまとめ町の復興計画の参考にしてほしいと 5 月 7 日に町への提言書第一報を提出した。9 月 6 日には第二報の提出、10 月には住民の方々への説

明会を開催し、住民とともに健康課題解決の行動計画を立てた。

2012年、講演のため、鹿児島空港に着いた。迎えの車に乗り、街路樹の中に1本咲いている百合の花を見た。「鹿児島の季節は岩手より2か月早いんだ」そう思ったとたん、私の脳裏に津波ですべてを失った我が家の庭が現れた。家の守り神だった伽羅の大木の傍で咲く百合の花は、毎年入盆に、我が家の８人の仏様をお迎えする役割を担っていた。美しい百合の花の周りには、アゲハチョウが飛び交い、まるで仏様の話し相手をしているようで、私は好きだった。私は、2、3回瞬きをして、「ここは鹿児島、今は6月、津波から1年3か月過ぎている」呪文のようにつぶやきながら、外の景色に目をやった。これが「心のスイッチは、いつも3・11」である。突然襲い掛かる喪失感に始めは戸惑った。何気ない会話の中で、食事中に、書店等で全く予測なく現れる。しかし、東日本大震災から2年過ぎても進まない復興の遅れが、この「心のスイッチは、いつも 3・11」を活発に動かしているように感じている。復興の遅れは「心」や「身体」の復興も遅らせている。

平成25年度 人権シンポジュウームin 石巻　震災と人権

―岩手県大槌町保健師による全戸家庭訪問調査から見えてきたこと―

～心のスイッチは、いつも3･11のまま、
繰り返し押し寄せた津波のようにいつも顔を出す～

2013年 8月 31日 （土）
石巻市 遊楽館 かなんホール
岩手看護短期大学　鈴木るり子

本日の内容

- 2011･3･11 東日本大震災の被災状況
- 岩手県大槌町の全戸家庭訪問健康調査から見えてきた、健康被害
- 復興に向けた街づくり･ 健康づくりとは

2011年3月11日津波が来ました。

大事な人も財産も一飲みにして立ち去りました。

その後の人々に「あとは任せたよと言いながら」残された私たちは、ただ茫然と心を亡くしたようにその後を過ごしました。

2日後に、我が家を見に行きました。寸断された道。瓦礫と化した街。私たちの暮らしはどこに消えたのか‥‥。会う人会う人に涙でぐちゃぐちゃになった目で会話するしかありませんでした。

「良かった」「生きていてよかった」「ウンウン･･･」声にならないうなずきだけの会話でした。「できることをしよう」「advocator、代弁者になろう」「大事な人に別れを告げることも許されず命を失った人々の･･･。」

震災は誰にでも降りかかるとは言っても、1.400人の命はあまりにも尊く重いものでした。

東日本大震災の被災状況

- 巨大地震とその後の大津波、さらに放射能汚染によって戦後最悪の被災となった。
- 死者：12都道府県：1万5854人
  （60歳以上：65．0%）
- 行方不明者：3155人
- 避難者：34万3935人
- 全半壊家屋：37万2974戸
  （2012年3月10日警視庁まとめ）

津波による健康問題

- 破傷風･レジヲネラ症
- ウイルス性腸炎
- 肺炎･マイコプラズマ肺炎
- 低体温

（水温5度以下：30分で意識不明、90分で死亡）

溺死（岩手県：89.9%、宮城県：91.4%、福島県：88.5%）
トリアージ黒か緑の被災者が多く、トリアージ赤や黄色はほとんどが慢性疾患との関連

危機の結果に影響する3要素

①緊急対応行動の適切さ
②効果測定
③決断と行動のスピード

状況に応じたマネジメント

プランニング

①平常の準備
　悲観的に考え楽観的に行動できる体制
②初動対応能力：情報収集･判断･実行力
③再発防止ができる体制を作り上げる

大槌町の概要

人口:1万5276人
世帯数:5689世帯
（岩手県人口:133万147人、世帯数:48万3971世帯）

【人口構成】
年少人口11.4%
労働人口56.2%
老年人口32.4%(全国23.1%)
平成22年10月1日国勢調査より

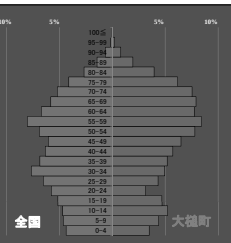


図:年齢別人口分布（2005年）
ピンク:大槌町
灰色:全国



【土地利用】
・総面積の83%は山林
・田畑　3%、住宅1.24%

【産業】
・主要産業:漁業
・1人あたり所得:170万円(岩手県平均:236万円)

大槌町の被災状況

11/10現在の人的被害状況
死亡者　802名
（うち身元が確認された遺体　676名）
行方不明者　505名（死亡届受理者466名含）


民宿に打ち上げられた観光船

被災前人口に対する死亡者＋行方不明者の割合は、8.9%と、岩手県内で最も大きい


大槌町役場

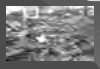
行政や医療・保健の機能を担う施設（町役場、県立病院、診療所）は沿岸部に集中し、壊滅的な被害を受けた
津波浸水面積　4平方キロメートル
（住宅地・市街地面積の52%　岩手県内で最も大きい）

被災状況によって抱える問題の違い

被害なし
被害が大きかった親戚・知人の受け入れ
→食事等の準備、人目を気にして布団が干せない
　自分達に被害がなかったことによる罪悪感

浸水
生活エリアであった1階部分の損傷、泥の汚れと臭い
→住宅基礎の腐敗、風呂場、台所等の水周りのリフォーム

半壊
避難所もしくは、避難所と自宅の行き来
→住宅改修・建替え等の費用がかさむ
→危険地域で暮らすことの不安と自己責任



全壊
避難所、町内外の親戚の家に身を寄せている
→肩身の狭さ、喪失感、絶望感

大槌町の人口の変化　（人）

	震災前	震災後	増減
40歳以上	10,704	8,937	△1,767
65歳以上	5,069	4,047	△1,022
全人口	16,054	13,803	△2,251

資料:大槌町

避難者の推移（生涯学習課調）

区分	3月11日	3月18日	4月10日
避難所数	集計不能	38	38
避難者数	1,128＊（城山体育館のみ）	5,144	6,173
備考	初回	避難所数最大	避難者数最大

大規模災害時の避難所の問題

1. 避難所数の不足
2. 水・食料等の不足
3. 感染症の問題
4. トイレの問題
5. ペットの問題
6. 情報不足による混乱
7. 認知症・要援護高齢者・障害者の問題
8. 霊安室の必要性

応急仮設住宅の入居状況

（2011・11・30現在：資料大槌町復興局被災者支援室）

区分	内容
団地数	48団地
住宅戸数	2,106戸
うち入居世帯数	2,074世帯
うち入居者数	4,687人
高齢者等共同仮設住宅	40戸
うち入居者	17人

全戸家庭訪問健康調査活動概要

1　調査目的
- ①安否確認による住民基本台帳の整備
- ②住民の健康問題の明確化
- ③早急対応・支援者への支援と町保健師への連携
- ④町の復興に向けての提言
- ⑤町の保健福祉計画などの将来策定への活用

2　実施方法
- ・調査A：保健師による全戸家庭訪問（避難所含む）
- ・調査B：フォーカスグループインタビュー
  青年団・婦人会・消防団
- ・調査C：保健福祉関係の社会資源に重点を置いた地区診断。特に福祉避難所となった施設6法人

3　実施日程:2011年4月23日（土）～5月8日（日）

4　参加者
全国保健師教育機関協議会・NPO法人公衆衛生看護研究所・全国保健師活動研究会の呼びかけで集まった保健師　全国から137人、延べ555人参加

5　調査結果
- ・調査A：訪問件数：3,728件、相談件数：5,117件
  早急に対応が必要：53人（1%）、要支援：229人（4.5%）
  要経過観察580人（12.6%）
  ＊きょうされんの実態把握：113人
  人口ピラミット作成：入力済13,935人（86.8%）
- ・調査B：5月5日実施
- ・調査C：5月5・6日　6法人実施

6　町への提言
5月7日：副町長へ、5月8日：総務課長・地域整備課長

7　復興委員会への参画
大槌町復興まちづくり創造会議メンバーとして10月13日参加

調査の実際



●朝・晩：ミーティング＋御飯　　昼：調査
新しい情報・資料・訪問地域・受持ちの確認

●調査内容
- ・震災当日～現在の経過
- ・家族の安否情報
- ・健康状態
- ・自宅被害状況
- ・町への問合せ・要望等

●調査対象者を、フォローの必要性について区分
- ・要緊急対応（2週間以内）
- ・要支援（3か月以内）
- ・要経過観察（6か月以内）

→緊急対応・要支援事例は、直ぐに大槌町保健師に報告



大槌町への提言書の提出

「岩手大槌町民の健康状況把握のための訪問調査」に基づく提言（第一報）

平成23年5月8日（日）

提言者
- ・鈴木るり子（岩手看護短期大学・教授、元大槌町保健師）
- ・村嶋幸代（一般社団法人全国保健師教育機関協議会・会長）
- ・他、調査に参加した保健師141名

協力団体
- ・NPO法人公衆衛生看護研究所
- ・全国保健師活動研究会
- ・一般社団法人全国保健師教育機関協議会

提言書

①医療サービス･･･入院ベットが確保できる県立大槌病院の重要性（高血圧、脳卒中の発症、整形外科的疾患が多い）
②保健サービス･･･生活習慣の予防、自殺予防、孤立化予防（人口に約半分が住むことになる仮設住宅における健康管理の充実）
③職･･･働く場の確保（復興計画）、地場産業及び商店の復興
④住･･･早期危険区域の指定、質の高い仮設住宅の確保
⑤教育･･･学童・思春期に対してのこころのケア、社会教育の集える場の必要性
⑥交通アクセス･･･通院の足の確保、通学バス、JRの復活



岩手県大槌町民の健康状況把握のための訪問調査
（第二報 分析結果と復興計画への提案）



平成23年度厚生労働省老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）
「地震による津波で被災した一人暮らし高齢者・高齢者世帯の生活再構築のための支援過程の構造化」事業班

平成23年9月6日

1.町民が元気になる保健医療福祉活動を！

- 1）こころの元気のために
- 2）からだの元気のために



■メンタルサポートと治療体制の確立
■今こそ「予防」、改めて「予防」！
■経年の健診・健康チェックの必要性
■町民が高血圧予防に本気で取り組む強い町に！　とりわけ減塩！
■「健康格差」を認識する必要性
■予防の要は「原因と向き合い」「変われる住民を信じる」保健師活動
■ひいては生活習慣病、脳血管疾患 そして認知症の予防になる。
■こども、若者世代から取り組
■医療・福祉機関の充実
■的確な治療、入院ができる病院を
■内科、整形外科・精神科等
■福祉施設に加え、小規模多機能等様々な住まい方の支援機能が必要

被災後の高血圧発症や悪化が顕著

血圧値の分類と「高血圧の既往歴・現病歴あり」「生活習慣病の現病歴あり」の関係

血圧値の分類	合計	高血圧の現病歴・既往歴 なし	高血圧の現病歴・既往歴 あり	現病歴生活習慣病関連疾患 なし	現病歴生活習慣病関連疾患 あり	高血圧の現病歴・既往歴 なし	高血圧の現病歴・既往歴 あり	現病歴生活習慣病関連疾患 なし	現病歴生活習慣病関連疾患 あり
						人			
1 至適血圧	85	69	16	63	22	6.2	1.4	5.7	2.0
2 正常血圧	155	104	51	89	66	9.3	4.6	8.0	5.9
3 正常高値血圧	185	85	100	76	109	7.6	9.0	6.8	9.8
4 Ⅰ度高血圧	138	72	66	67	71	6.5	5.9	6.0	6.4
5 Ⅱ度高血圧	133	50	83	48	85	4.5	7.5	4.3	7.6
6 Ⅲ度高血圧	70	24	46	25	45	2.2	4.1	2.2	4.0
7 収縮期高血圧	347	170	177	137	210	15.3	15.9	12.3	18.9
							36.0%		11.9%
合計	1113	574	539	505	608	51.6	48.4	45.4	54.6

高血圧症の有無と自覚症状・心理的初期対応を要する状況との関連（有意差・傾向ありの抜粋）

		不眠 なし	不眠 あり	1過去のトラウマ・心理的問題 なし	1過去のトラウマ・心理的問題 あり	2災害による負傷 なし	2災害による負傷 あり	5経済的な問題 なし	5経済的な問題 あり	合計
血圧の分類 1至適血圧	人	386	39	418	7	425	0	406	19	425
2正常血圧										
3正常高値血圧	%	90.8	9.2	98.4	1.6	100.0	0.0	95.5	4.5	100.0
4～6.Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ度高血圧	人	593	95	658	30	680	8	642	46	688
7.収縮期高血圧	%	86.2	13.8	95.6	4.4	98.8	1.2	93.3	6.7	100.0
カイ2乗検定有意確率		p=0.013 *		p=0.009 **		p=0.021 *		p=0.079 +		
合計	人	979	134	1076	37	1105	8	1048	65	1113
	%	88.0	12.0	96.7	3.3	99.3	0.7	94.2	5.8	100.0

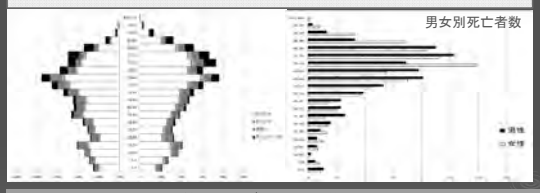
p<0.1 +　p<0.05 *　p<0.01 **

既往がなくて震災後発症者が多数

心身や社会的問題が高血圧の引き金に

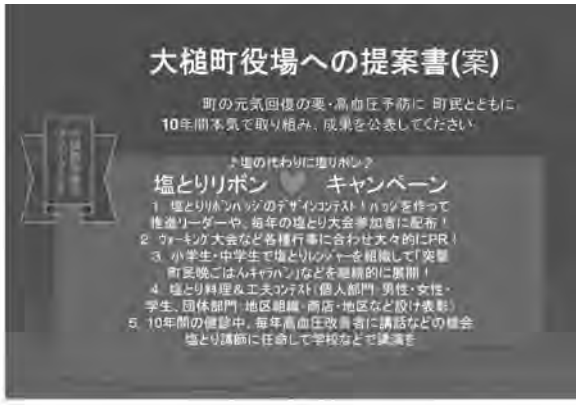
地震･津波災害後の大槌町人口ピラミッド

- 1）高齢者、働き盛りの方々を多く亡くしました。
- 2）町外に行かれた方は各年齢層に渡っています。



■力のある町民を増やしたい、魅力ある町づくりを重点施策に。
■震災によって町外にて出ることになった人たちを町の資源と考え、彼らが力を蓄えて戻って来ることができる基盤整備を。
■そして新たに若い人が入ってくる町づくりと広報。
■その人びとが新たな物流や産業を大槌町にもたらすように。
■大槌町の文化を踊りながら、これからの健康で安全な暮らしを皆で築きたい。





被災地に必要とされる保健師活動

1）支援については住民基本台帳との統合を考える
2）住民の健康情報は、すべてデータ化し、早急に被災地へ情報提供する
3）被災地支援をするためには、被災地と連絡調整の取れるコーディネーターの配置（教育の充実）
（各県1人　例：環境研究センターに配置）
4）被災派遣保健師（DPHNT DisasterPublicHealthNursingTeam）の 創設
5）被災地における被災前の保健師活動の評価
（地区担当制によるポピレーションアプローチの有無）

東日本大震災被災者の健康状態に関する調査（厚生労働省科学特別研究事業）

概要：東日本大震災被災者を対象に、心血管疾患やPTSDなどに関する長期間追跡調査を行い、被災者の健康管理ならびに今後の施策立案に活用する
1　調査対象者：被災3県（岩手・宮城・福島）3万人
2　内容：聞き取り調査、血液検査、血圧測定等
10年間追跡、18歳以上はアンケートと健診、18歳未満はアンケート調査のみ

岩手県の調査

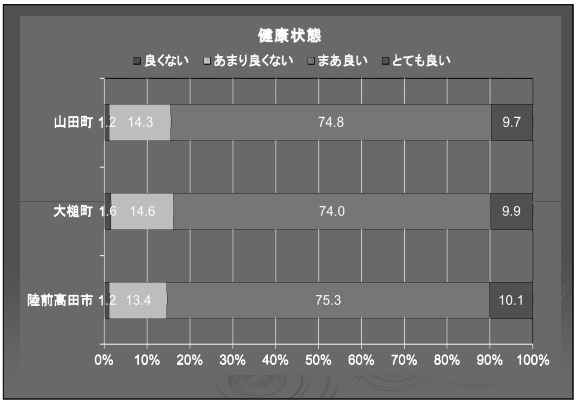
1）対象地区：大槌町・山田町・陸前高田市
2）対象住民：3市町村全住民
3）期間：10年間
4）内容
①アンケート：0－2歳、3－6歳、小・中・高校生、18歳以上。追加調査：高齢者、アレルギー、特定疾患、透析、障害者、がん患者
②健康診断：18歳以上、大槌町は歯科健診実施
5）大槌町：12月8－22日実施、受診者2,112人

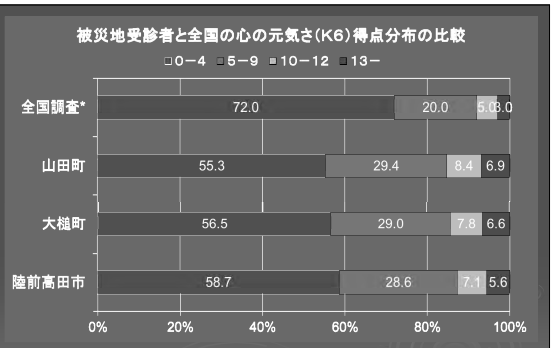
追跡調査（10年）

1）ベースライン調査の繰り返し（6ヶ月ごと）
2）長期追跡
・住民基本台帳の閲覧による転居・死亡の確認
・死亡者については、死亡小票の閲覧による死因調査
・脳卒中罹患調査
・心疾患（心筋梗塞、心不全）罹患調査
・介護保険の認定状況：認定区分と認定月日
・医療の受療状況：医療費データ（国民保険と後期高齢者医療保険のみ）

被災者健診実施市町村の受診状況

市町名（実施時期）	18歳以上人口（10月1日現在）	受診者数（受診率）	同意者数	同意率
山田町（9/5～11/15）	14,270人	3,436人（24.1%）	3,216人	93.6%
大槌町（12/8～22）	10,788人	2,171人（20.1%）	2,079人	95.8%
陸前高田市（10/3～12/16、2/1～2）	17,228人	4,953人（28.7%）	4,908人	99.1%
合　計	42,286人	10,560人（25.0%）	10,203人	96.6%





*全国から多段無作為抽出された20歳以上の住民2000名（回答1183名）川上他:2007

テーマ：東日本大震災住民（大槌町民）におけるソーシャルキャピタルに関する研究

目的

岩手県で最も人口当たりの被災者の多い大槌町民のソーシャルキャピタル（以下、SC）について「ネットワーク（以下SN）「信頼」「互酬性」の3要素から成るとするputnamの「SC」の定義に基づき、東日本大震災で被災した大槌町民の「SN」と「周囲への信頼感・互酬性」について検討した。さらに被災後の「SC」の高低を左右する要因を明らかにし、今後の地域づくりに向けた支援策への示唆を得ることを目的とした。

ソーシャルキャピタルとは

ソーシャルキャピタルについては様々の定義や議論がある。例えば、パットナム（1993）は「ネットワーク、信頼、規範など協調的な行為を促すことによって社会の効率を高めうる社会組織上の特性」としている。信頼、規範などの従来の社会的結合を示す概念に加えてネットワークという、集団や組織を超えた個人間の関係性、例えば空間的には距離のある友人関係などに注目している点が現代社会の分析に適している。

Putnam, R.D. Making Democracy Work .Princeton, NJ: Princeton University Press.
ロバート・パットナム（河田潤一訳）哲学する民主主義－伝統と改革の市民的構造　NTT出版

方法

1．対象と方法

平成23年度にコホート調査に同意が得られた18歳以上の住民2,085人を対象とした（同意率96.0%）。調査は平成23年12月に行った。調査票は、健康診査の案内状に同封し、会場に持参するように依頼した。調査票を忘れた住民や、調査項目に不備のあった住民には専門の調査員が聞き取り調査を実施した。

2．倫理的配慮

対象者にはいつでも調査への同意を撤回できることを説明し、同意を得た。

本研究は、岩手医科大学医学部倫理委員会の承認（H23−69）を得て実施した。

結果と考察

本研究はSCの構成要素である「SN」と「周囲への信頼感・互酬性」に着目した。

SN調査項目

＊友人は、近くに住んでいる人を含むあなたの友人全体について考えます

		0人	1人	2人	3－4人	5－8人	9人以上
1)	月に1回、会ったり話をしたりする家族や親戚は何人いますか？	1	2	3	4	5	6
2)	月に1回、会ったり話をしたりする友人は何人いますか？	1	2	3	4	5	6
3)	個人的なことでも、気兼ねなく話せる家族や親戚は何人いますか？	1	2	3	4	5	6
4)	個人的なことでも、気兼ねなく話せる友人は何人いますか？	1	2	3	4	5	6
5)	手助けを頼める家族や親戚は何人いますか？	1	2	3	4	5	6
6)	手助けを頼める友人は何人いますか？	1	2	3	4	5	6

SCの調査項目

		強くそう思う	どちらかといえばそう思う	どちらともいえない	どちらかといえばそう思わない	全くそう思わない
7)	まわりの人々はお互いに助け合っている。	1	2	3	4	5
8)	まわりの人々は信頼できる。	1	2	3	4	5
9)	まわりの人々はお互いにあいさつしている。	1	2	3	4	5
10)	何か問題が生じた場合、まわりの人々は力を合わせて解決しようとする。	1	2	3	4	5

1. 対象者の特性

女性が62.2%であった。過半数が60代以上であった。避難所を含めた転居回数は、「一度も転居していない」「1〜2回」「3回以上」が約3分の1ずつを占めた。約半数は経済的な暮らし向きを「苦しい」と回答した。

2. SN

LSNS-6で12点未満だった対象者は42.4%で、平均得点は13.0点（標準偏差6.2）であった。SNは60代に比べ、50代で低値であった。また、「女性」、経済的な暮らし向きが「苦しい」と回答した者でもSNが乏しいことが示された。単変量解析では震災の記憶のうち「思い出すと体の反応が起きる」という群で、そうした経験がない群に比べSNが乏しいことが示されたが、多変量解析では有意な違いは見られなかった。

3. 周囲への信頼性・互酬性

周囲への信頼感・互酬性の平均値は15.6点であった。得点の比較は難しいものの低い値ではないと考えられた。関連要因を検討したところ、60代に比べ、70代、80代以上で得点が高かったが、50代では得点が低かった。また、「男性」、「自覚症状あり」、「思い出すと体の反応が起きる」、暮らし向きが「苦しい」で得点が低かった。避難所を含む転居をしていない群に比べ、転居回数が多い群で、得点が低かった。男性や心身症状のある住民の他、発災後転居した住民では「周囲への信頼感・互酬性」が感じにくい状況にあることが推察されるため、重点的な支援が必要と考えられた。

本研究の限界と今後の課題

本研究はSCを構成するSNと「周囲への信頼感・互酬性」の2側面に着目した。本研究には、SCが低く孤立している住民が調査に参加していないというサンプリングバイアスが考えられる。しかし、本研究は被災者の方々の協力を得て行われた数少ない大規模調査である。被災後の生活再建の基盤としてのSCに着目し、SCを高める環境を整えることが重要である。被災者が新しい地域社会を創造していくためのにも、SCを考慮に入れた政策的な取り組みが必要である。

津波は
ソーシャル・キャピタルを
低下させた
目指す地域づくりは
ソーシャル・キャピタル　を
向上させること

被災地のこれから

- 復興には、まず「健康」づくり
- 終の棲家づくり「安心」の提供
- **ソーシャルキャピタルを高める地域づくり**

優れたアクションリサーチャーの特徴（essential characteristic）

- **スタミナ（心理的・身体的）**
- **忍耐力**
- **成功するという決意**
- **他者を動機付け、励ます能力**
- **分析の手腕（これからは、すぐに磨きがかかる）**
- **研究対象への変わらない興味と好奇心**
- **他者への誠実さと感性**
- **優れたコミュニケーション能力（口頭・文書）**
- **他者の酷評や屈辱に対して容易に傷つかない人**
- **変えられないことを変える勇気**
- **専門家としての態度（物事を大局的にとらえる能力と専門家として自分の限界を認識する能力）**

17



石巻会場

内容紹介



第 1-1 部　パネリストによる基調報告

奥田　知志（公益財団法人共生地域創造財団代表理事）

【稲積】

皆さんこんにちは。それではシンポジウムに入りますが、東日本大震災からやがて2年半を迎えます。見た目には、少しずつ復興しているように見えますが、まだまだ本当の復興には程遠い感がいたします。真の復興とは何か。復興の主体は人間であります。その意味で、本日のシンポジウムの副題に「一人一人の心の復興を目指して」というテーマを掲げさせていただきました。

この度の震災は、戦後の日本人の価値観に根本的な転機をもたらしました。人権と申しますと、一口に言って、「人々が幸福を追求する権利」だと言われております。人間にとって本当の幸せとは何か。そのような問い掛けも今回の震災は私たちに突き付けました。戦後、日本では「無縁社会」という忌まわしい言葉が生まれましたが、震災後には「絆」という言葉が流行語大賞に選ばれました。別にケチを付けるわけではありませんが、流行語というのはいささか気になるところであります。この「絆」という言葉につきましても、人権という視点からもう一度問い直す必要があるのではないでしょうか。

私は遠く離れた九州の福岡から参りましたが、九州の地からも様々な支援の手が差し伸べられました。一方では、がれき処理などを巡って、あるいは被災地から避難された方を巡っても様々な問題が生じました。正直申しまして、遠くの理解者であっても近くの拒絶者という一面も残念ながら見てまいりました。

本日は、現地で身を粉にして復興支援に取り組んでおられますパネリストの皆さんから、自らの体験を通して考えられた肉声をお聞きしたいと思います。それでは、まず奥田知志さんからお願いいたします。

【奥田】

皆さんこんにちは。先ほど紹介いただきました奥田知志と申します。私が暮らしておるのは九州・福岡県の北九州市であります。本職はキリスト教会の牧師をしておりまして、永くホームレスの人たちの支援をしておりました。震災が起きた時は、仙台にもホームレス支援団体が何団体かありますので、そこと連絡･連携を取りながら何かできることはないかということでやってまいりました。そして、その中からホームレス支援全国ネットワークという組織と、生活クラブ生協と九州を中心に展開するグリーンコープ生協の2つの生活協同組合と連携をしまして、公益財団法人共生地域創造財団を立ち上げて、今、活動しております。今は仙台に事務所を置きまして、この石巻周辺、そして岩手県の大船渡、そして福島では、介護の初任者研修等の研修を開くなど、そういった働きをしております。

本日は時間が余りありませんので、その中の一つの取組、相互多重型支援のお話をさせていただきたいと思います。震災があった時、九州におりますと、ともかく東北にもしくは東へ「元気を届けよう」といったフレーズが空港などに書かれていることが続いておりました。しかし、私の実感から言うとこの被災の地から何を聞くかということが九州に住む私たちの課題だったように思うのです。私はそういう意味ではいろいろな出会いの中で、たくさんのものを教えていただきましたし、今、正にコーディネーターの稲積さんから定義がありましたように、人間にとって幸せとはなんなんだ、人が生きるってなんなんだということを、私は“東”から学んだように思います。ですから、これはある意味悔い改めでありました。キリスト教でいう悔い改めというのは、方向転換という意味があります。単に反省するということではなくて方向を変える。“東”へではなくて、“東”からということです。私たちの



奥田知志さん

財団は、今も「From East（フロム イースト）」という掛け声をインターネットのアドレスに使っていたりするのですが、この部分が非常に大きかったというのが一つの実感であります。

それでは、どのようなことをやってきたかという一つの例ですが、私自身が被災地に来ましたのは、2011（平成23）年3月の末でした。最初に入ったのは石巻でありました。ただ、私たちの財団の活動方針として、私が最初に活動理念としてあげたのは、「最も小さくされた方々に、偏った支援を小さく長く続ける」という、少し分かりづらい理念を掲げました。スタッフからは「偏った支援」と言っていいのですかという質問が出たのですが、私は人間とは出会いだと思うのです。ですから、その出会った人間に責任を持っていく。これはホームレス支援でもそうでしたが、ホームレスの人を支援しているってよく言われるのですが、世の中にはホームレスという人はいません。個別田中さんであったり山田さんであったり村上さんであったりするわけで、その出会ったその人とともに生きていくというだけの事でありますから、そういう意味では、被災者支援や被災地支援と言われますが、私にとっては出会ったその方との出会い。それはある意味偏った現実でありましたが、そこにとことん偏っていこうという考えがありました。ですから、大したことはできませんから一つの出会いを大事にしようと思いました。

それで、私たちが最初に行ったのは、牡鹿半島の小さな漁村集落の一つ、宮城県石巻市の蛤浜（はまぐりはま）と荻浜（おぎのはま）でした。私が到着する前に、既に当財団のスタッフが現地に入っておりましたので、九州からの支援物資はその集落に届いていました。もともと9軒しかなかった集落ではありましたが、そのうちの5軒が津波で流されている状態でした。私は、がれきの山となっている集落の中に入っていきました。集落の一番奥には、避難所として使用している集会所がありまして、そこで亀山（秀雄）さんという区長の御夫妻が迎えてくださいました。私は、がれきがそのままになっていましたので、「ここにはボランティアの人や行政の方々は来られていませんか」って聞いたのです。すると亀山さんが、「いやここには誰も来ていません」とおっしゃった。本当に小さな集落だったのです。私は、そのあと亀山さんから誰も来ないということに少し恨みめいたことを言われるかなと思っていましたら、亀山さんの第一声が「ここよりももっと大変な所がありますから―」とおっしゃってですね、私はこの出会いに胸がきゅんとしまして、ああもうこのおじさんと一緒に生きていこうと思いまして、それ以来2年半ずっとこの亀山さんの家を訪ねている状態が続いています。本当にがれきの山になっていたその中で、亀山さんのつれ合いのあきこさんが、私に支援物資の中に入っていたと言って、九州から来た一つの絵手紙を見せてくれたのです。その絵手紙は巻物みたいな手紙で、墨で描いてあるのですが、あきこさんいわく、「私たちは今回の津波で全部失った、本当に船も何もかも失ってしまった。でもね…」とおっしゃりながら、その絵手紙の真ん中辺りを見せてくれました。そこには、「生きていればきっと笑える時が来る」って書いてありました。それを見せながら「全部失ったけれども、今日私たちこれで生きているんです」って涙流しながらおっしゃりました。私はその時に、人間が生きるって何かなと本当に考えさせられたのです。私は、永くホームレス支援をさせていただきましたので、家がいる、食べ物がいる、仕事がいる、これは当たり前のことで、それはどうしてもそれをしなければならないというのはもう20数年やってきていますので、それが必要だっていうのは身に染みて分かっているのですが、あの極限の状況の中で、私は、今日これで生きているんだって言いきられたのが、その一通の手紙だったというのを聞いてですね、私は、支援の方向を定めることができました。何を今からしないといけないのか、ということを非常に考えさせられた場面でした。

そこで支援が始まるのですが、当初は九州からいろいろなものを運び込んでいました。3か月ほど経った時、この写真は当時の浜の様子ですが、がれきの真ん中にあるプレハブはボランティアの人たちが寝泊まりできるように九州から運んできたものです。この写真は牡蠣の種付けをやっているところです。これは初年度の写真です。本当は春に行う作業なのですが、7月辺りの暑い中で作業をしていました。3か月ほど経った時、亀山さんの所をまた訪ねていくと「本当に支援は助かった。本当に有り難かった」とおっしゃってくださったのですが、その後に、「でももう支援は断ろうと思う」っておっしゃりだしたのです。支援を始めて3か月、6月の頭頃でした。私がどうしたんですかって聞きますと、亀山さん

は「（自分は）ずっと漁師で、ある意味自分の力で生きてきた。ですけども3か月間、人からのもらい物で食べていると、それは有り難かったけど、つらかった。それと何のお返しもできないと思うと重い」とおっしゃったのです。支援が3か月経った時点でつらくて重いものになりだしていたようです。そして「もう支援は断ろうかなと思っているんだ」とおっしゃったのです。私、それにはすごく衝撃を受けました。これはホームレス支援でも同じなのですが、当時の“絆ブーム”もあって、やはりそうだった（重荷に感じていた）と思うのですが、どこかでゆとりのある人がかわいそうな人を助けているような非常に一方的な空気、憐れんでいるみたいな空気がまん延していたように思うのです。私もその（支援する側の）一員であったわけですが、いつも助けている人と助けられる人がいて、助けている人はいいことをやっていると思っているので元気がいいのです。気持ちがいいわけです。私どもが行っているホームレス支援の現場でも、お弁当を配っていると、助けている人はどうぞどうぞってやるのです。もらう人はいつもすみませんって謝っている。これが1年も2年も続いていくと、どんどん元気が無くなっていく。一体これは助けているのだか、元気を奪っているのだか分からないような支援活動がホームレス支援の現場にもあります。

私は亀山さんの言葉を聞いて全くそうだと思い、九州に戻りましていろいろと考え、そして持ち込んだのが「相互多重型支援」でした。具体的な活動としましては、財団で寄付を集めて、この蛤浜、荻浜の牡蠣（かき）養殖を復活させる取組なのですが、当時なかなか牡蠣の養殖のための部材もなかったので、生活協同組合さんを通じて北海道や九州の牡蠣業者を通じてロープなどを全部そろえました。そして、ともかく牡蠣の養殖を復活させ、ある意味自分たちの力で（収入を得て）食べていけるような状態なるようにしました。ただ、これで終わるとやはり助けられっぱなしになってしまうので、一つだけ条件を付けました。条件と言いますと語弊がありますが、一つ検討してほしいことがありました。それは、牡蠣が出荷できる状態になったら、その牡蠣の一部を、私たちに買い取らせてくださいということです。私がずっと関わってきたホームレスになってしまった青年たちを雇い入れ、買い取った牡蠣を加熱用の牡蠣にして、箱詰めし全国に販売する。そのために牡蠣を育ててもらえませんかと、今度は路上（ホームレス）の青年を助ける側に回ってもらえませんか、と提案しました。すると、その二つの村から、5人の漁師さんが、よし、分かったやろうと返事をしてくれましたので、復興の牡蠣のプロジェクトがスタートしたのです。

今年、初めての牡蠣販売を行いましたが、加熱用の牡蠣と言えども、やはりあたると少し怖いということで、最初は身内だけに売りました。今年は春から売り出して、約800箱完売しまして、5人の元路上（ホームレスだった）の青年たちが、荻浜にできた牡蠣のむき小屋に行って、来る日も来る日も牡蠣を洗っては出荷する作業を繰り返していました。

ですので、「相互多重型支援」というのはどのようなことを目指したかといいますと、漁師さんたちはある意味助けられながら自分たちの復興を目指し、復興を目指すと同時に路上（ホームレス）の困窮青年を助ける。困窮青年たちは自分たちが助けられて自立すると同時に、復興支援にも携わる。さらに、九州でその牡蠣を食べた私たちは一粒で二度おいしい牡蠣で被災地の復興支援と生活困窮者支援ができるのです。この牡蠣の名前は、「笑える牡蠣」にしました。「笑える牡蠣」って私が付けたときに、ふざけているのかと怒られたのですが、「生きていればきっと笑える時が来る」と書かれたあの手紙から、名前を付けました。今年の11月からは一般販売を始めますが、今シーズンは5,000箱が目標です。いよいよ今回携わる青年たちはそれで自立をすることになります。このように、絆というのは、やはり一方的に助けられるというのではなく、相互性が必要だと思うのです。助けると助けられるが相互に起こる。もしくは可逆性ですね。逆転できる。助けられていた人が、今度助ける側に変化できる。これが“絆”の中にはなくてはならないのではないかと考えてやりました。助けられたものは、同時に助けるものになれる、多重性。食べるほうは一つの牡蠣に多重の意味が込められている。

この牡蠣は、一粒で二度おいしいと始めたのですが、やっていくうちに、ある漁師さんから言われました。「奥田さん、これいくら復興復興って言っても、実は津波が来ていなくてもこの集落はあと10年後どうなっていたか分かりませんよ」と。それは、やはり後継者問題を抱えていたのです。それで

したら余計に、全く漁業なんて関わったこともない見たこともない町の青年たちをここに連れてくるから、100人に一人でも俺漁師やろうかなという人が出てきたら仕込んでもらえますか、と言いましたら、いいよという話になりまして、今、一粒に三度目のおいしさが出るかどうかの挑戦という段階に入っています。先ほども言いましたように、漁師さんは自らの復興と困窮支援に携わる。困窮者の青年たちは自立とともに復興支援に携わる。消費者は自立支援と復興支援の両方ともに携われる。

私は、国の一番の役割は富の再分配だと思っているので、ある意味税制というのは非常に大事だと思っているのですが、私たちのプロジェクトはある意味消費による富の再分配です。牡蠣を買うことによって、その利益の一部が困窮者に回っていくというソーシャルビジネスモデルを作ろうということでやりました。お陰様で、牡蠣は穫れています。

残り時間がありませんので、同じような形で（宮城県）亘理町（わたりちょう）という所で行っている支援について簡単にお話します。亘理は「もういっこ」というイチゴで有名な所でありましたが、ここも津波に飲まれまして、土地の塩分が高くなり、イチゴの栽培ができなくなってしまいました。今、国の復興交付金を使って「いちご団地」が作られましたが、私たちは、生活協同組合の生産者の話を聞いて、塩に強いトマトの露地栽培を行いました。これも、相互多重型でやっておりまして、トマトの収穫にあたるのは路上の青年たちも含めた困窮者の人たちです。この写真は、津波で何も無くなった亘理の被災地ですね。次は、地中がれきを取っているところですね。それが去年の夏で、この土地がここまで変化したのです。この写真、写っているのは全部トマトなのです。一面トマト畑になりました。今年できたトマトを少し持ってきたのですが、もしよかったら受付に置いておきますので、是非お持ち帰りください。加工用ですから、見た目は不恰好ですけれども結構おいしいです。ただ、今年は長雨が続き病気が発生してしまったので、去年の半分しか穫れませんでした。去年穫れた130トンは、トマトジュースを1万本とケチャップピューレを作りまして生活協同組合ルートで販売しました。今年2年目に入ってすごく期待していたのですが、今年の長雨でさっぱりでした。今年は60トンくらいしか穫れないというところです。現地のチーフをやってくださっているこの写真の人は、私どもの財団のメンバーですが、彼も元路上生活者です。彼は今、若い人たちのリーダーになってトマトの収穫にあたっています。私からの発表は以上です。ありがとうございました。

友廣　裕一（一般社団法人つむぎや代表理事）

【稲積】

ありがとうございました。それでは友廣裕一さんにお願いいたします。

【友廣】

改めまして、一般社団法人つむぎやの友廣と申します。よろしくお願いします。僕は今、石巻市の日和山（ひよりやま）に拠点をお借りしながら、先に御報告された奥田さんと同じ牡鹿半島で、浜のお母さんと一緒に小さな取組をいろいろとさせていただいております。インパクトの大きいどーんという立派な取組は何もできていないのですが、小さくても着実に続いていくような事業をしていきたいなと思いながら活動をしておりまして、本日はそのお話をさせていただきます。



友廣裕一さん

ざっくりと申し上げますと、現在2つの浜で3つの事業をやらせていただいております。牡鹿半島の雄鹿の角を使ったアクセサリーを「OCICA（おしか）」という名前のブランドで作っている事業と、漁師さんが使う網の補修糸でミサンガを作る事業、そして、その作った収益を貯めて、昨年（2012（平成24）年）の夏から「ぽっぽら食堂」というお母さんたちと一緒に運営しているお弁当屋さんの事業があります。

本日御来場された方は、石巻の方が多いとお聞きしているので、皆さん大体の位置は御存じだと思うのですが、牡鹿半島先っぽにある鮎川浜（あゆかわはま）という浜と真ん中位にある牧浜（まきのはま）という浜で行っています。

まず、鮎川浜のお話からさせていただきます。僕は2011（平成23）年3月17日に宮城県に来まして、3月18日に石巻市内に入りましたが、当初は、避難所にいらっしゃる健常者ではない方の状況を把握するプロジェクトの地域マネージャーとして入りました。しばらく各避難所を回らせてもらったのですが、その際、たまたま御縁があって鮎川浜にお邪魔しました。すると、牡鹿漁協の方から「女性部のお母さんたちが何かやりたいと言っているので、ちょっと会ってくれないか」という話をいただきました。そして、お母さんたちといろいろとお話をしました。やはり、皆さん船や漁具が流されてしまって、漁業の再開の目処が立たないと言っていました。そんな中、旦那さんはがれきの撤去作業などに行かれていたのですが、女性の皆さんは余りやることがなかったようです。漁業がいつ再開するのか分からない状況の中で、自分たちが手を動かして、少しでもちょっとした仕事が作れないか、何か力になってくれないか、という話をいただきました。せっかくやるのでしたら、この地域の資源で何か使えるものがないかなといろいろと調査などを行っていたのですが、その中で、たまたまミサンガ作りを趣味としているお母さんがいました。（1993（平成5）年の）Jリーグ開幕をきっかけに流行した「ミサンガ」です。そのお母さんは、以前から手作りミサンガを近所の子どもたちに配っていて、「ミサンガおばさんと呼ばれている」とのこと。そして、津波に流されずに家に残っていた網を補修する糸で、1度ミサンガを作ってみようと思っていることを話してくれました。その話のあと、すぐに作ってくれたのですが、それがとても綺麗で、他の多くのお母さんたちも一緒に作っていくことになりました。ミサンガ作りは、結構難しいので、練習しながら作るのは1か月くらい掛かるのですが、慣れてくると、皆さんはどんどん新しいミサンガを作っていきました。新しい編み方をどんどん考案していって、色合いが同じものはありませんでした。この事業は2011（平成23）年4月から始めて、6月には販売へと動き出しました。

当時はまだ、チャリティーグッズと呼ばれるようなものが余り世の中に出ていなかったので、しばらくは売れるだろうなと思っていました。しかし一方では、ずっと売れ続けるものになるかは分から

ないとも思っていました。このような話をお母さんたちとしながら、1本1,000円で販売することにしました。なぜこの価格なのかといいますと、このミサンガは、経費を差し引いた半分は作った人の給料にして、半分はみんなで貯めるためです。みんなで貯金して、いつか売れなくなった時や、ミサンガ作りは継続するけれども、他にやりたいことに出会った時に、少しでも自分たちの中で蓄えがあれば新しい事業を始めやすいのではないか、という考えから貯金ができる金額にしました。売り始めると、すぐに良い評判をいただいて、音楽イベントなどの大きなイベントでは、まとめ買いなどしていただき、たくさん買っていただきました。四国の音楽フェスでは、1日で300 ～ 400本売れました。そこにはお母さんたちは来られなかったのですが、高校生の娘さんなどに来てもらって一緒に販売しました。最初お母さんたちは、このミサンガが本当に売れるのかどうか疑心暗鬼な中で作っていたのですが、実際はみんな「超カワイイ」などと言いながら喜んで買っていってくれました。そのことを、販売を手伝ってくれた娘さんたちからお母さんに伝わると、お母さんたちはどんどんノってきて、思いを込めて作るようになりました。

すると、お母さんたちが作った団体の貯金通帳にも徐々にお金が貯まっていきまして、自分たちはこれで何かできるかもしれないと、結構前向きになってきまして、毎回話をしながらミサンガの次は何をしようかという話が出てくるようになりました。毎回出てくる話は、やはり漁師の奥さんたちなので、市場に出せない雑魚と呼ばれるような魚を、美味しく食べられるようにする料理の方法があるようでして、そういったメニューを中心とした飲食店をやってみたいというものでした。女性部のお母さんたちは、震災前から思っていたようで、そういう話もたまに出ていたみたいなのですが、震災前は震災前でやる機会がなかった。ですが、ミサンガの事業が始まると、お母さんたちが少しずつ結束していって、お金も少しずつ貯まってきたので、この飲食店の事業をやってみたいという気持ちが強くなりました。2011（平成23）年の秋は1,000本ほどしか売れてなかったので、店舗を建てるほどのお金は無かったのですが、それを元手に、主にアメリカの団体からお金を提供していただけることになりまして、鮎川浜の被災したエリアに小屋を建て、2012（平成24）年の7月末に「ぼっぽら食堂」という飲食店をオープンしました。今、お弁当屋さんとして営業しています。

開業当初は、皆さん素人でお店も経営をしたこともない人たちでしたので、まずは様子見で週2日営業から始めました。しかし、オープンしてみると、もともとあった飲食店が流されてしまったことや、復興に関わる工事関係者の方などがたくさんいらっしゃることから、多くの方がお店に集まりました。「もっとお願いだから開けてくれ」といった声もたくさん聞きました。オープンの翌月には週6日営業になり、今でもてんやわんやでやっています。「ぼっぽら」という言葉は、石巻の方でしたら御存じかと思うのですが、浜の言葉で「急に」とか「突然」という意味です。これはすごく浜のお母さんたちの性格を表している言葉だなと思います。お母さんたちは、柔軟に臨機応変にどんどん仕事をこなしていくような人たちなのです。お弁当を見るとよく分かります。ぼっぽら食堂のお弁当は一つしかメニューがなく、通称ぼっぽら弁当と呼んで500円で販売しているのですが、弁当の中身は決まっていないのです。大体そう言うと日替わり弁当を想像されると思うのですが、日替わりよりももっと変わります。材料に雑魚を使ったりするので、例えば50個のお弁当の注文があった場合、イワシが30匹あったら30個はイワシの弁当だけれども、次はサバを使い、サバも足りなくなったら次はサケを使い、でもサケだと少し小さいから卵焼いて入れようか、といった感じでお母さんたちがどんどん自分たちで工夫し、調整しながら、その時にあるものを最大限活用して作っていくのです。もちろん最初はメニュー開発をしようといろいろとやっていたのですが、なかなかメニューが決まらず、これは私たちにはできないかもしれないと、お母さんたちはすごく弱気になってしまいまして、そこでまずは週2日営業で調整していきましょうと言っていたのですが、気が付いたら取りあえずあるもので作っていく形が定番になってしまいました。お陰ですごく好評をいただいていて、先ほども申し上げたのですが工事関係者を始め、地元の公務員の方々も結構いらっしゃって、ここ数か月は月2,500食以上の売り上げをキープできています。牡鹿半島の先っぽですので、当初は売れても1日40食くらいだろうなと正直思っていて、そうすれば取りあえず何とかお母さんたちの最低限の人件費くらいは払えるかなという算段で始

めたのですが、お陰様で大変順調にやっていて、お母さんたちの会社も立ち上がり、僕らはほとんど経営から退き、適宜サポートする程度で、基本的にはお母さんたちが中心となり、どんどん元気に営業している形でやっています。これが鮎川浜での事業の話です。

もう一つの話は、先ほど簡単に触れたOCICAというアクセサリーの話です。これは牡鹿半島の真ん中くらいにある牧浜という所でやっています。ここの牧浜は先ほどの奥田さんが支援を行っている蛤浜と同じように、牡蠣の養殖で栄えていた浜です。牡蠣は殻つきで流通させるよりもむいて流通させる方が多いので、女性の方たちは皆さん牡蠣むきをする仕事に携わっています。シーズンになると、浜のお母さんたちが加工場に集まり牡蠣むきをし、それが終わると「お茶っこ（お茶飲み会）」して帰るという習慣があったようです。しかし、震災で加工場も牡蠣も全て流されてしまって、養殖自体は徐々に始まってきてはいるのですが、小さい浜ということもあり加工場再開の目処がなかなか立たない。今年の秋にようやく加工場ができるようで、現在工事を行っているのですが、当初はいつ再開できるか分からないといった状況でした。この牧浜の集落は半分くらいの方は家が残り、半分くらいの方は、津波で家が流されました。少し高台のほうに仮設住宅ができたのですが、もともとあったコミュニティがばらばらになってしまいましたし、特にお年寄りの方については、仕事も無くなってしまって家族もいないため、家を出る理由が無くなってしまい、どんどん家に籠もり、家に一人でいるといろいろネガティブなことを考え塞ぎがちになってしまっている。そこに、ボランティアの人たちが来て、「お茶っこ」やりましょうと集会所でやってくれるのですが、毎日お茶っこをやっていても、話すネタが無くなってくるし、続かないようで、何かみんなで集まって仕事をして、そのあとにお茶っこしてワイワイして帰る、そういう仕事が作れないかと話していたようです。

そんな時、僕は先ほどの鮎川浜の活動で動き出した後の2011（平成23）年9月ごろの話なのですが、地域の素材で何かできないかなと思い牡鹿半島を車で走っていると、「鹿飛び出し注意」みたいな看板をたくさん見掛けました。石巻の方はよく御存じだと思うのですが、牡鹿半島には鹿がたくさんいるのです。僕も鮎川浜まで車で走っていくと多い時だと20頭くらい見たりします。鹿の角は年に1回生え変わると知っていたので、この鹿の角を何かに使えないかなとずっと思っていました。すると、たまたま地元の猟友会の方とお会いすることがありまして、お話をさせていただきました。すると、牡鹿半島は現在、鹿がめちゃめちゃ増え、森が荒れて困っていること、その対策として県から依頼を受けて害獣駆除のようなことをやっていることを知りました。当然、駆除された鹿のほとんどはそのまま捨てられてしまっていて、角も特に活用されていませんでした。この鹿の角で、浜のお母さんたちの仕事を何か作れないかと思っていると、猟友会の方に話をしました。すると、そういうことなら俺が集めてきてやると言って、いろいろな猟師さんの所で眠っていた鹿の角を100本ほど集めてきてくれました。ただ、鹿の角って結構固くて、加工が難しく、僕ら素人が手を出すにはどうしたものかなと。そう思っていたところ、先ほどの鮎川浜という所がもともと捕鯨地で、鯨の歯を加工する技術を持っている方がいらっしゃいました。この方は、もともと捕鯨船に乗っていらした方なのですが、現在キャンプ場の管理人をされております。お会いしたところ、やはりキャンプ場内にも鹿の角が落ちていまして、それを加工して指輪や置物、キーホルダーなどを作られていました。切断面をピカピカに磨く技術を持っていらっしゃって、鹿の角とこの技術を活用した仕事を作れないかと思っているとお話しすると、そういうことなら俺が技術を教えてやると言っていただきました。

それから、素材を集め、牧浜のお母さんたちと一緒に、津波で流されなかった少し高台にある集会所に集まり作業をしました。最初は、先ほどの加工技術を持っている方に集会所に来ていただいて教えてもらいながら、ワークショップの形でシンプルなよくある角の形をしたホルダーなどを作りました。それらはボランティアの人にプレゼントしたり、孫にプレゼントしたり。また、作業後はみんなでお茶っこをしてとても楽しい時間を過ごしました。

ですが、僕らは今、3人で活動しているのですが、僕らもこの活動を続けていくには多少活動費を作っていかないといけません。国からの助成金だけで活動すると、それが無くなると関われなくなってしまうので、これ自体を事業にできないかなと考えるようになりました。そして、デザイナーさんを紹

介していただいて、ああだこうだやりながらできたのが今の事業の形です。これは鹿の角を輪切りにして漁網の補修糸を巻いています。ドリームキャッチャーというデザインで、ネイティブアメリカンの方たちのお守りのデザインをモチーフにしています。悪い夢をネットで捕まえて、よい夢を運んでくれるという意味が込められています。この鹿の角を輪切りにして表面を磨き、真ん中に穴をあけ、白い輪っかを作る作業までは僕らがやってきました。今は知り合いの職人にやってもらっているのですが、危ない作業です。その後、お母さんたちに輪切りにした角をお渡しして、紙やすりを3種類使ってピカピカになるまで磨いてもらいます。そして、それを電動糸のこぎりでミリ単位の切り込みを入れていきます。難しい作業ですが、お母さんたちは2年もやっているので職人技の域になっています。この作業は、最初は若いお母さんたちがやっていたのですが、今は年配のお母さんたちもどんどん自主的に練習されています。週2回の本作業以外の時間に皆さん練習してくださっています。最後はこの切り込みに糸を掛けてでき上がりです。

終わるとお茶っこタイムです。皆さん漬物などいろいろと持ち寄ってきまして、ワイワイしています。海外からもお客さんが来てくれたりするのですが、来てくれた人には一緒にOCICAを作って帰ってもらい、その後はみんなでお茶っこをします。そうすると、あんたどこから来たの?といった話で盛り上がります。いつも新しい、いいエネルギーをいろいろな人が運んで来てくれるので、これまですごく健やかで楽しい雰囲気できています。

OCICAのネックレスは、定番は赤青茶の3色、角の先端の細い所はピアスにして、これも3色販売しています。これは、手作りで作っているので時間も掛かりますし、安売りもできません。地元の人たちに見せると、こんな高くて売れるの?とよく聞かれるのですが、ネックレスは2,800円でピアスは5,800円で販売させていただいておりまして、そのうちの1,000円と2,200円がそれぞれ作り手のお母さんたちに入る仕組みになっています。お母さんの屋号のスタンプをパッケージの右下に押しているので、誰が何を作ったのかが分かるようになっています。そして、売ってくださった方には、何がどれだけ売れたのかを控えてもらっていて、入金があったらその分をお母さんたちに支払います。パッケージにもこだわりがありまして、地元の米袋を使って、1個1個ミシンで縫って作っています。今はお陰で国内外の40店舗以上で販売させていただいておりまして、大々的に営業活動みたいなことはしたことはないのですが、いろいろな方が紹介してくれます。購入してくださった方の中には、ここで売るべきだと行きつけのお店の人を口説いて営業までしてきてくれる方もいました。そのようなこともあり、どんどん縁を広げることができています。

今、12人のお母さんたちでやっていまして、2011（平成23）年の秋から平均して3万円くらいのお金を継続してお支払いすることができています。僕らは、事業規模を拡大するのではなくて、ここにいるお母さんたちのために事業を立ち上げているので、お母さんたちの笑顔が最大化できるような、最大化されるような事業にしていきたいなと思っています。ちなみに昨年（2012（平成24）年）、これまでの歩みを1冊の本にまとめて出版させていただきました。お手元の配布資料の中に小さいポストカードが入っていますので、よろしければそちらを御覧ください。自分が手を掛けて生み出したものを誰かに手渡す行為を通じてこそ、人は喜びを覚えたりするものだなというのを、こういう活動を通して感じていまして、それを実現するのがやっぱり仕事というものではないかと、意義なのではないかと思います。仕事というと、雇用の話がすごく多くなってくるのですが、自分が生きていてよいとか、自分が必要とされているといった自分の役割としての、自分を確認するという意味での仕事ということがすごく求められているのではないかなと、今感じています。

近江　弘一（株式会社石巻日日新聞社代表取締役社長）

【稲積】

ありがとうございました。それでは石巻日日新聞社の近江弘一さんどうぞ。

【近江】


近江弘一さん

石巻日日新聞社の近江でございます。奥田さん、友廣さんともに非常にいいお話で、僕も牡鹿半島の方の出身ですので、感謝申し上げます。本日は、震災時の話も含めながら、我々の新聞社や僕がもう一つやっている会社の活動などを通した話をしていきたいと思っています。

まず、石巻日日新聞社は昨年（2012（平成24）年）10月に創刊100周年を迎えた地域紙です。もともと、現在の石巻市のエリアではなく、2005（平成17）年の市町村合併前の、石巻市の中心市街地を中心とした1市9町の中で新聞発行をしておりました。我々の理念というのは、いかに地域に情報を通して貢献していくかということだけです。

私がこの日日新聞社に参画したのは7年前の2006（平成18）年6月です。それ以前は、この石巻市の河南町の鹿又地区にありますマリンレジャー用のウェットスーツを作る会社、株式会社モビーディックで働いていました。この会社は24歳の時に仲間と一緒に起業しまして、24年間営業担当の役員をしておりました。日本全国、海外を含めて営業活動をしている地元の人たちを雇用して、世界各地に商品を販売していました。先ほどの友廣さんのお話にもありましたように、OCICAがスペインでもアメリカでも売れているようですが、僕らの時代にもそのような気持ちがありました。その間、例えば1995（平成7）年の阪神・淡路大震災や、2001（平成13）年の9.11テロを経験しています。阪神・淡路大震災は、神戸の事務所で経験しておりますし、9.11では、たまたまその時はアメリカにはいませんでしたが、テキサスにある会社がテロの影響で営業不振に陥り閉鎖した事業経験を持っております。

その時代に何を感じたかといいますと、24歳からやってきた仕事というのは、基本的には広いマーケティングを行なって自分たちの製品を販売することで、自らの生きがいにしようと思っていました。しかし、阪神・淡路大震災や9.11などを経験して、自分たちに全く関係のない事件が自分たちの人生に関わってくることをよく知りました。そして、以前から問題にはなっておりましたが、2005（平成17）年頃のシンクタンクの資料で、30年後の東北の沿岸地区は人口が半分、高齢者の割合が40%近くなり、行政崩壊を起こすと書かれているのを見まして、石巻地域の少子高齢化、人口流出の現状を改善するため、CSR部門として地元で何か事業を作れないかと、プロジェクトのリーダーとして（宮城県）女川町を拠点とするサッカークラブを作りました。全国から若い人たちを呼び込んで、町民になってもらい、町の産業である水産業で働いてもらいながらサッカークラブを運営し、多くの人が活動しに来てくれるような拠点を目指しました。グループ会社の中での一事業として立ち上げようとしましたが、最終的には会社の中で利益を生まないということで、会社の事業としてはできなくなりました。

しかし、自分の生き様として、どうしても地域に貢献していく必要がある。大学卒業後すぐに入った会社は、サラリーを得るために入り、次に起業したウェットスーツの会社は自分の好きなことで何とか人生を楽しくしていきたい、生きていきたいということで作りましたが、私が48歳のときに親父が亡くなって、親父の写真を片付けているときに、48歳って人生のどの辺になるのかなと思いまして、そうすると時間が足りないと思うようになりましたし、もったいないと思いました。死を意識して生きていこうと、それまでの人生の自分で培ってきた事業を全部捨てて、まず女川町でスポーツを通して地域に貢献する、地域を活性化させる事業を始めました。

そうこうしていると、石巻日日新聞さんから、会社を立て直してほしい、6年後の創刊100周年を迎

えるために、力を貸してほしいとの依頼があり、企業再建のために石巻日日新聞に経営陣として入社しました。きっかけは先ほど申し上げた通り、徹底した地域貢献をしたいという思いがありまして、当時94年間も続いている地域紙の中に、何か継続する肝があるはずだと、何か必ずコアなものがあるはずだと思い、それを見付け出せば情報を通した地域貢献ができるのではないかと思い、参画を決めました。実際、石巻日日新聞は、非常に会社としては危ない状況にあったのは確かでした。多くの業務改革、業務の効率化、コストカットなどいろいろなことをしましたが、会社を立て直すのにやはり一番大事だったのは、地域に貢献する個々の能動的な活動を支えようということでした。2006（平成18）年までしばらく赤字体質だったのですが、2007（平成19）年から黒字体質に変わり、2009（平成21）年の暮れには念願の紙面カラー化のための輪転機を導入することができました。これは、本当に地域に貢献していく新たなステップとなりました。

まず、2011（平成23）年2月に地域の行政報道や市報等を新聞社の人員・設備などの能力を使って行えば、公務員のコストダウンにつながり、これも地域貢献の一つだろうということで、東松島市の入札に提案参加して受託しました。そして、2011（平成23）年4月からその事業が始まるという矢先に、3月11日の震災を迎えました。生命の危機が全ての人に迫ってくるくらいの震災でした。私たちには、人権という権利と、責任と義務、それから使命というものがありました。それは、どのような状況下であっても地域の人々に情報をしっかりと伝える使命です。

震災直後、多くの人が震災で何も分からない中で、やはり知る権利が多く奪われている状況でした。私たちは、まず命を助けるところから始め、そして、情報を伝える本来の事業を行うことにしました。ただ、非常に狭い地域が、それぞれ閉ざされていましたので、活動する内容もそれから質も量も範囲も全て制限を受けました。私どもの会社の立地している場所は、石巻市の双葉町という所でして、大きな被害を受けた南浜（みなみはま）や門脇（かどのわき）のすぐ隣です。私どもの会社は1階のフロアが浸水する程度で収まりましたが、これは海との間に日本製紙さんの大きな工場がありまして、本流のがれきが全てそこで止まったお陰で、私どものブロックだけが助かりました。社員の一人は、一昼夜流されて、何とかヘリコプターに命を救ってもらったという状況でしたが、特に報道の記者たちは、各々が各々の判断で、地域に貢献できる事業をしようと、活動しようと動いていました。2006（平成18）年から、古い新聞社の体質の形骸化された地域貢献という言葉を磨き直していたお陰で、それぞれが頑張ってやってくれたのだと思っています。

そしてもう一つ、先ほどお話しましたサッカークラブ・コバルトーレ女川についてもお話します。震災当時、この選手たちは女川の水産加工場で働いていました。彼らの中に、地元の人はいなかったのですが、地域の住民として活動しているので、3月12日から初期の救難活動に入りました。それは、やはり地元貢献をするためにその町に来て働かせてもらって、好きなサッカーをして、地域に溶け込んでいくという目的、理念がはっきりしていたからだと思います。

今、私どもは子どもたちに目を向けて、3か月に1回のペースで発行する石巻日日子ども新聞の製作を手伝っています。やはり子どもたちにも主張する場が必要だと思いますし、子どもたちにもこの地域を考える権利があると思いますので、多くの子どもたちがこの地域で参画できるような体制を整わせていきたいなと思っています。

人権という言葉を聞くと、非常に堅苦しいといいますか、とても重いものであるとの印象を受けます。私自身、浜から10メートルくらいの所で生まれ育っていますので、実家はもう完全にやられてしまいました。そこで、おふくろさんが一人暮らししていたのですが、幸い近所の方に助けていただいて、ついこの間まで仮設住宅に一人で住んでいました。しかし、特に老人だけの単独世帯、それからそういう独居の老人というのは、近所とのつながりがしっかりしているため、いつもいろんな情報が入ってくるのです。しかし、それらを有効活用するための体力とか意欲とかを継続することが非常に難しいのです。ですから、一人一人の復興を、人権で何とか守ろうという守ってあげようということについては、非常に難しい問題がいろいろあるのではないのかなと個人的にも思っています。現在、おふくろさんは高齢者向けのサービスがついた部屋を賃貸で借り、三度の食事を出していただいておりま

すが、多分もっともっと大変な人が一杯いて、自分の周りでも、同じようなことが起きているということを考えると、我々の新聞社は、多くの情報を新聞という形でなくても、何らかの形で発信していけないかと今みんなで話し合っています。

これからも、皆さんと一緒に地域のために生きていこうと決めていますので、今後ともよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

鈴木　るり子（岩手看護短期大学専攻科地域看護学専攻教授）

【稲積】

ありがとうございました。最後に鈴木るり子さん、お願いいたします。

【鈴木】


鈴木るり子さん

最後になりましたが、岩手看護短期大学で保健師の教育をしております鈴木と申します。私が保健師として28年間勤務していた岩手県大槌町が津波により壊滅的な被害を受けたことは、会場の皆さまも御存じだと思います。そこに、全国から延べ555人の保健師が入り、全戸を対象とした調査を実施しました。本日は、その調査結果についてと、今大槌町はどのような状態になっているかを、岩手県を中心に被災者支援を行っている立場からお話させていただきたいと思います。

まず、津波による健康問題とは、どのようなものがあるのでしょうか。一つは津波に飲まれ海水が肺に入ることで起きる津波肺炎でした。そして、多くの方が低体温症で亡くなっています。震災が発生したあの日、雪が降っていました。海水温が5℃の場合、30分で意識不明になり、90分で亡くなります。せっかく救助され、避難所に運ばれてきた方も、電気も通じていない状況下で、低体温のために亡くなってしまうことが多かったのです。私たちは災害看護などでトリアージ[1]を行いますが、今回の震災では、黒タッグ（カテゴリー０：死亡群）で助けることができない方が多く運ばれてきました。

このような大災害が起きたときに私たちが使うのは、危機の結果に影響する3要素です。災害時、非常にスピード感のある対応をしていかないといけない。そして、それをやったことの効果判定をし、効果があったかなかったかと評価しなければならない。今回の震災で多く言われたのが、平時の準備でした。岩手県の場合、沿岸部を走っている国道45号線の所に、“ここまで津波が来ますよ”という明示がされています。ところが、多くの人々がここまで来るはずがないと考え、高台などへ逃げなかったために、たくさんの尊い命を失う結果となりました。今日、石巻の海岸を少し走ってみたのですが、岩手県とは違うなと思いました。国道に先ほどの“ここまで津波が…”という標識が無かったのです。平時の準備がいかに大事かが、このことからも分かります。

千年に一度の津波でしたから、想定外の事が多々あったと報道されておりますが、今、私たちが今回の震災から学ぶものは、自助です。自分たちでできることは、やっていかなければいけないことと、それから後世に対して伝えていかなければいけないこと。もちろん私は看護職として教育を通しながらやっておりますが、この平時の準備が非常に大事です。

それから、初動の対応能力です。先ほどもお話がありましたが、十分な情報が入ってこない中で、適切に判断をし、実行をしていかなければいけない。そして、防災と減災をしていかなければいけない。

また、今、被災地で一番問題になっているのは、復興住宅をどこに建てるかということなのです。大槌町には我が家がありましたが、津波で失っております。親戚は7人亡くなっているのですが、人口15,000人の町で1,400人が亡くなっています。我が家は山を崩して建てる予定だったのですが、地権者の問題で建てられるようになるのは2016（平成28）年です。あと3年後です。

それから、岩手の沿岸部はもともと経済的に非常に貧しい所でした。そこが壊滅しました。今日、私は岩手から石巻まで車で来て、港などを見てきました。話では、復興が全く進んでないと聞いてい

1　識別救急：災害時などに負傷者等の患者が同時多発的に多数発生した場合に医療体制・設備等を考慮しつつ傷病者の重症度や緊急度によって分別し、治療や搬送先の優先順位を決定すること。日本では、カテゴリー０（死亡群：黒タッグ）、カテゴリーⅠ（最優先治療群：赤タッグ）、カテゴリーⅡ（待機的治療群：黄タッグ）、カテゴリーⅢ（保留群：緑タッグ）の４つのタッグに分類される。

ましたが、石巻では、復興関係の車やトラックが行きかい、そして工場からは煙が出ています。そのような光景は、岩手県の沿岸部ではほとんど見られません。そういった地域差を今日は随分と感じてきました。

この写真は、私が28年勤務した役場です。皆さん御存じだと思いますが、この写真は私が住んでいた大槌町の赤浜という所で、釜石の観光船が打ち上げられた所です。この民宿の隣が私の姉の家でした。多くの御遺体が流されたのではないかなと思っています。家が流された所、全壊になった所、また半壊、浸水、被害の無い所でも、大槌町全体が被災者であるということで、私たちはローラー作戦を実施しました。現在、11,000人しか大槌町にはいません。ただ私たちは、震災から1か月半後に全ての住宅を回って歩き、全体の86%の住民の安否確認をしました。町は壊滅、役場も無くなっていましたので、安否確認の調査依頼を受けた形で実施しました。避難所が何か所できたのか、そこに何人逃げたのか、震災直後には把握できない、そのくらい混沌としておりました。

避難所に身を寄せた方でしたら分かると思いますが、当時避難所は不足しておりました。町の人口の半分もの人々が避難しなければならない事態を行政は想定していなかったためです。もちろん、水や食料は不足していたのですが、トイレやペットの問題も多々ありました。また、非常に寒うございましたので、そのような中でノロウイルスやインフルエンザが発生したらどうしようという状況でした。今日はスライドの関係で現場の写真を全部抜いていますが、御遺体をきちんと安置することができない状況のなか、霊安室の必要性を感じた大規模災害でもありました。

今は、どこの自治体でも地域防災計画を作ることになっていますので、皆さんがお住まいになっている所にも防災計画があると思います。皆さんが災害に遭った時、誰が助けに来るのでしょうか。通常は隣近所の人々だと思います。皆さんは隣近所の方たちとはどのようにつながっておりますでしょうか。今回は震災前の近所付き合いも様々なところに影響を与えました。障がいのある方が直面する問題もたくさんあります。情報の問題もあります。災害発生時には情報はなかなか入ってきませんし、入ってきたとしても不正確な情報だったりします。このような状況の中で、私たち全国から集まった、延べ555人の保健師が調査を行いました。大槌町は近くに新幹線は通っていません。岩手県内唯一のいわて花巻空港は、震災発生後しばらくの間、民間航空便は利用できませんでした。遠方からいらっしゃる方は、石巻でも遠いなと思うかもしれませんが、岩手県は四国4県に匹敵するくらいの面積があります。もし、遠方から大槌町に来る場合は、当時新幹線も止まっていて使えませんでしたので、秋田空港を使い、新幹線で盛岡まで出、そこから車で120km走る必要があります。そのようなところに555人の保健師が全国から集まりました。保健師の被災地活動は、被災地の家庭訪問で住民の方々の血圧を計って帰ってくる、単にそういうことを行うだけではなく、この方々にどういうことが必要なのかを把握し、復興計画についての提言書を作るのです。

私たちは、この町にどのような人がいらっしゃるのか、調査して人口ピラミッドを作成しました。その結果、様々な問題が見えてきました。まず、住民の方々の血圧が高いことが分かりました。私たちは、早急にその血圧を下げるための10年計画を住民の方々と作りました。20歳代から40歳代までの幅広い年齢層の多くの人たちが、血圧が高かったのです。今、被災地では心不全で亡くなる方が多いです。それは三大死因（がん、心臓疾患、脳卒中）の一つだからでしょう、と思っていただいては困ります。岩手県の沿岸部にあった3つの県立病院は津波で破壊されました。特に、大槌町は全ての医療機関が津波で無くなりました。ですから、大槌町には入院ベッドが無いのです。心不全になった場合、隣の町まで救急車で運ばなければならず、そのため途中で亡くなってしまう場合もあるのです。医療状況というのは単に医者がいるかいないかだけの問題ではないです。看護師も看護職も含めて、人材をどう確保するかという問題、そして施設・設備の問題でもあるのです。これらの問題を含め、住民と一緒にどのようにして解決していくか考え、まず10年掛けて血圧を低くするための活動を展開していこうと考えております。それから被災地には、「DMAT」（ディーマット：災害派遣医療チーム）や「JMAT」（ジェイマット：日本医師会災害医療チーム）といった医師のグループも入ってきたのですが、やはり保健師の派遣チーム「DPHNT」（ディーフント：DisasterPublicHealthNursingTeam）が必要

だなと私は考えています。それは、2年3年と掛けて町の復興に関わる、長期間に渡って住民の健康を守るための計画に関わる、そういう職種が行政に必要だと思っております。

現在、関わっているのが、被災者検診（厚生労働科学研究費補助金10年間の岩手県における東日本大震災の支援を目的とした大規模コホート研究）です。2011（平成23）年からやっておりますので今年で3年目です。千年に一度の津波を体験した人たちがどういう状態にあるのか検診して調査しています。実は、被災地において心の問題を抱えている人の数は、全国平均と比較して約2倍という結果が出ています。これは震災直後から現在まで改善していないのです。それは、職業との問題にも関わっております。

ここで今日皆さんにお話ししたいと思っているのは、ソーシャル・キャピタル（人々の間の信頼関係や人間関係（社会的ネットワーク）、つながり）です。今回の大震災以降、“絆"という言葉がたくさん出てきたりしていますが、このソーシャル・キャピタルというのは私たちが暮らしていくために必要不可欠なことです。お手元の資料にもございますので見ていただければいいと思うのですが、ロバート・パットナム（アメリカの政治学者。ハーバード大学ケネディスクール教授）という人が提唱した概念です。これは、地域でのネットワーク、周囲への信頼感、そして互酬性（ごしゅうせい：ものの相互のやりとり、あるいはそれに基づく制度のこと）に着目しており、今回は約2,000人を対象とした調査結果を分析しました。その結果、このソーシャル・キャピタルは、避難所の転居回数と関係があることが分かりました。大規模災害発生直後というのは、身を寄せた避難所が1か所だけではない場合があります。多い人では、避難所を10か所も変えていました。そういう人たちは、ソーシャル・キャピタルが低くなり、夜眠れないといった症状などが出ています。ですので、避難所の転居回数は多くしてはいけないのです。多くの方が避難できる場所を作っておかなければいけないのです。

何を言いたいかといいますと、今後、私たちが目指していく地域づくりの重要なポイントは、ソーシャル・キャピタルを向上させる観点が不可欠であるということです。まず、第一は健康づくり。そして終の棲家、死に場所を確保するということが必要なのです。え?と思われるかもしれません。でも、私たちは家を流され、住む場所が定まっていない中でどうやってこれからの暮らしを支えていけばいいのでしょうか。単なる家ではないのです。死に場所として保障されている安心できる場所が必要なのです。

大槌町の復興の兆しは、今も見えていません。音が聞こえてこない。そのような大槌町の現状を見続けている私は、今日石巻の港に来てびっくりしました。石巻のような音がしたり、車が走っていたりすれば、大槌町の人たちももう少し勇気をもらえるのではないかなと思いました。しかし現実は、それが聞こえない中で、大槌町の人たちが何を支えにして生きていけばよいのだろうか。私たちができることは、安心を作り出すことなのではないか、と思います。

では、どうやって作っていくのかと言いますと、スタミナが必要です。あのような過酷な体験をして、頑張り続けると心が折れることもあると思います。ですが、一人でなくて誰かつるむ人がいれば、スタミナが強まるのかもしれない。私は、被災者の一人としてずっとこれからも地域づくりをしていこうと思っています。できれば本日御来場された皆さん方は地元の方ですし、被災者の方もいらっしゃるかもしれませんが、被災地がどうなっているのか、復興は進んでいるのか、お互いに声を掛け合っていただき、地域づくりをしていただきたい。

大震災から1年半が経過し、復興の先行きが見えない状態が続く中、被災地ではこれから自殺が増えていきます。これは阪神・淡路大震災後の研究などでも言われています。一見、復興が進んでいるように見えるかもしれませんが、既に存在する様々な問題、そして新たな問題も出てくるでしょう。

これからが私たちの正念場です。「自殺をしてはいけない」ということをはっきり口にして周囲の人々に伝えていただきたい。そういうことを言ってはいけないというのではなくて声に出して話をしてもらいたいと思います。

以上で終わります。

【稲積】

パネリストの皆さん、お一人お一人から自らの体験に基づく大変具体的なお話を頂戴いたしました。ここでコーディネーターである私から何か中間的なまとめをする必要もないと思います。皆さんの一声一声が聴衆の皆さんのお心にも響いたと思います。

今から休憩に入りますが、どうかこの休憩時間の間にフロアの皆さんから是非質問を出していただきたいと思います。第2部のパネルディスカッションをより活発なものにし、より響き合うものにするために、壇上におります私たちパネリストだけではなくて、会場に御来場の皆さんと御一緒に考える時間を持ちたいと思いますので、是非質問を出していただきますよう、御協力をお願いいたします。それではこれで第1部を閉じたいと思います。

＊このシンポジウムの「基調報告」の模様は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。
https://www.youtube.com/jinkenchannel

第 1-2 部　パネルディスカッション

【稲積】

皆さん。ただいまからパネルディスカッションに入りたいと思います。

休憩時間に皆さんから御協力をいただきまして、たくさんの質問をいただきました。時間に制約がありますので、全てにお答えできないのが残念ですけれども、どうかその点はお許しください。それではまず奥田さん、それから友廣さん、続けてお答えいただきたいのですが、お二人が「それぞれの支援場所、拠点を選ばれた理由を教えてください」という御質問でございます。まず奥田さんからどうぞ。



稲積謙次郎さん

【奥田】

はい。先ほども申し上げたのですが、支援場所、拠点などは選んでおりません。ちょっとしたきっかけがあって、たまたまそこになったということなのですね。私が最初に申し上げたように、偏った支援を行うという活動理念を書きましたので、現地のスタッフからも偏っていいのかという問いがあったのですね。そこで、私はそのスタッフに「君は彼女いるか」と聞きましたら、生意気に「いる」と答えまして、「では君はその彼女を客観的に選んだのかね。世界中の女性を順番に並べて一番いい人を選んだというのかね」と言いましたら、「いや例外です」と答えましたので、私は「そんなものだ」と言いました。

これと同じで、たまたま出会っただけなのです。理屈でいうと非常に小さな島だった、浜だったというのもあるのですが。ただその偶然の出会いにどう責任を取っていくかということが重要でありました。逆に言うと、その近隣の浜からは「なんであそこだけに支援が来るんだ」という声が当然上がりました。ですが、私は人と出会って一緒に生きていく上で、そういうリスクは負わなければならないと思っています。

綺麗に収まる出会いって危なっかしいと思っていますので、ある意味誰かと出会うと、隣の彼女から刺されるかもしれないという、そういうリスクも伴うということでやってきました。

【友廣】

はい。僕も先ほどの報告の中でお話しさせていただいたのですが、僕は、当初避難所をずっと回らせてもらっていたのですが、客観的に状況は分かってくるのです。数字的なものであったりとか、なんとなくこういう状況にあるという感覚的なものであったりとかで把握できるのですが、その中で一体、自分に何ができるのかとか、自分はどうすべきなのか、自分という人間がどう動くべきなのかは全然分からなくて、エネルギーの矛先をどこに向けていいのかも分からなくて、自分の中で焦燥感みたいなものがあった時に、たまたま僕のことを求めてくださる人たちに出会えたので、ここで一つ形にしたいなと思って動き始めました。

次の牧浜のほうは、僕が活動を初めて一度東京に帰った時に、石巻の河南出身で大学を9月に卒業して、春に就職するまでの半年間、地元で何か活動したいという女性に出会ったのですが、その彼女のお母さんが教師で、そのお母さんの初任地が牧浜の集落だったんですね。その彼女のお母さんといろいろと話をしていく中で、牧浜の人たちが何かこういう仕事を作れないかと思っているという話をお聞きして、それだったらということでお会いしに行き、そこでいろんなことが重なり支援につながりました。本当に御縁でしかないです。

僕らは本当に小さい、弱小なチームですので、たくさんの人に対して何かをするということはできません。自分たちでできる範囲のことしかできないということを、何かある種の諦めみたいなものを持った上で、できることをやっていこうというふうに動いてきましたので、この出会いは本当に御縁

だったと思います。

【稲積】

それでは次に鈴木さんです。「避難所を多くしてはならないという理由をもう一度お聞きしたい」とのことのです。

【鈴木】

ありがとうございます。スライドの枚数に対して、基調報告の時間が非常に短かったものですから、うまく伝わらなかったのではないかなと思います。

私がお伝えしたかったのは、避難所の数を多くしてはいけないのではなく、避難所の転居回数を多くしてはいけないということです。大規模災害発生時というのは、想定していた避難所が不足してしまいます。今回の震災では、海岸付近にあった指定避難所は全て壊滅しました。大槌町の場合、一番高い所で約22メートルの津波が来たのです。ですから避難所に指定されている公民館や小学校の多くは使えなくなりました。小学校については、5つのうち4つが使えなくなりました。

また、この3.11というのは非常にタイミングの悪い日だったなと思います。それは年度末を迎えて卒業式の練習を行っていたり、小学校1、2年生は午前中で授業が終わり、給食を食べて終わったらすぐに家に帰る日でもありましたので、小学校に子どもを迎えに来たお母様と一緒にお子さんが亡くなるケースがありました。話を戻しますと、公共施設がほとんど使えなくなってしまった状況で、8,000人もの人々が避難しなければいけないという事態に耐えられるような避難所はありませんでした。そのため、避難所に駆け込んだものの、ここは既に一杯だからと入ることを拒否され、もっと高い所に、山の奥の方の避難所に行ったりするなど、転々と移動せざるを得ない方がいました。

私たち保健師は、2011（平成23）年から今後10年間、被災者への健康診断とアンケートを継続的に実施することになっているのですが、今の時点で既に、多い人で避難所を10回転居していることが分かっています。ここは一杯だから駄目ですとか、町から出てくださいとか言われたようです。先ほど、岩手県は四国4県に匹敵する広さがあるとお話しました。沿岸部から盛岡市内の中心街に行くために110kmもの距離があります。その盛岡市には温泉があります。花巻温泉やつなぎ温泉などたくさんあるのですが、そういった所にも避難した方がいました。相当な距離を移動しております。

これまでの研究では、そういった転居回数が多いと、認知症の発症が10年早くなると言われています。ですから、私が先ほどお話したように、住む場所というのは単に私たちが寝たり起きたりするだけの場所ではないということです。生きていくために非常に大事な要素で、そこを転々とさせられた場合には健康障害が起きることが分かりました。

そこで、今研究を続けているのですが、例えば血圧が上がっている人は不眠になります。眠れないのです。それからトラウマが起こる。避難所のような鉄筋の丈夫な建物の中にいた時は震度3くらいの余震は余り感じなかった。しかし、仮設住宅に移ると、仮設の場合には余り土台がしっかりしていませんから、震度1であっても、お子さんがお母さんにしがみつかなければいけないような不安を感じるようです。あとはペットを連れている飼い主の方たちは、避難所に入ると他の人の迷惑になるというので野宿していました。そのような状態になりますと、震災によって財産を失った、また身内を亡くされただけではなく、その後のその人たちの置かれる状況や健康を阻害することなども問題となってくるのです。先ほどの私の基調報告では、非常に言葉足らずであったと思うのですが、避難所であっても、何か所も転々とさせることの無いように計画を立てなければいけないとお話させていただいております。

また、私たちが今住んでいる場所、住処ですね。そこを、本当に安心できる住処にしていかなければいけないなと思います。今、計画が思うように進んでいない復興住宅、災害住宅の建設。その工程が遅れれば遅れるほど住民の方たちの不安が募ってきますし、生きていることに対して自信を失う状態になってしまいます。転居回数だけを気にするのではなく、安心して住むことができる場所を確保

するということも考えていかなければいけないなと思います。以上でございます。

【稲積】

次は近江さんへの質問です。「新聞と言えばマスコミと言われるわけですが、あの大震災の極限状態の中で、あえて手書きの新聞を作られたその発想といいますか、その思い付きはどのようなところから出たのでしょうか」

【近江】

初めから手で書こうとは思っていませんでした。とにかく、当時社屋の2階から下を見たときに、多くの車やがれきを巻き込んだ1.5メートルぐらいの高さの津波を見ました。余震が続き、背後からも水が来ており、津波が行ったり来たりして潮が上がったり下がったりしている中で、潮の動きが止まった時がありました。潮が膝下くらいの高さでしたので、街でどのようなことが起きているのかを自分の目で確かめたく、社屋にあった自転車で山を登り、石巻駅周辺を見に行きました。駅からどの方向に行っても、多くの人々が水際まで被災現場を見に来ていました。次の日には駅前周辺は水没してしまったのですが、この時から増水が始まっていました。そして、日が落ちて暗くなってくると、寒くなってきました。駅前から社屋まで自転車で20、30分位の距離なのですが、ほとんど乗ることはできず、自転車を押しながら歩いていきました。途中、石巻市の総合体育館の前を通り掛かりました。そこは避難所に指定されていたのですが、天井が落ちてしまったことで、避難してきた人たちが外に出されていました。当然そこにはいろいろな方が寒さに震えながら身を寄せていました。そのような光景をずっと目にしながら社屋に戻ってきました。

そこで、せっかく生き延びた命を、また情報の無い中で、二次災害、もしくは命を落とすようなことが無いように、報道に携わる者として、何かをきちんと伝えなければならないと思いました。会社に戻っていろいろと考えていたのですが、断水、停電、輪転機が水没しているという状況の中、私たちが使えるものとして残っていたのは紙とペンしかありませんでした。

石巻の市街地で水に囲まれているエリアは大体把握していたので、そこにある大きな中学校が2つと、高校2つには、避難している多くの人々がいるのではないかと、容易に想像できました。ですから、最低限そのエリアだけでも、情報を発信することで守りたいと思い、手書きで新聞を作成しました。先ほども言ったのですが、我々には情報を発信し続ける責務があり、それをしないということは、平時でも我々が存在する意義が無くなるのではないか、という恐怖感がありました。ただ手で書くことについては、誤った情報を書けば手書きであるゆえに、本来の姿に戻った時に信頼を失うのではないかという怖さもありました。ですが、やはり先ほども申し上げたように、命に関わることでもあるので、手書きでの新聞の発行を決意しました。

【稲積】

ありがとうございました。もう一つだけフロアからの御質問させていただきたいのですが、これは友廣さんに対してです。

これは質問というよりも、うれしい木霊（こだま）がこの会場から帰ってきたと大変うれしく思っているのですが、千葉県の方からです。「（千葉県）船橋市のイベントで東北支援ブースがあります。物販で何かお手伝いができればと思っています。OCICAいいですね。でも少し高価かな。ストラップとかありますか。連絡取れたら助かります。石巻のいいものをたくさんの人に知ってもらいたいと思います」こういうお声もありますが、どうぞお答えください。

【友廣】

ありがとうございます。そういったお声をいただけることで、僕らの作っているものも広がっています。お手元の封筒に入っている私どものポストカードに、ホームページのアドレスやメールアドレ

スが載っていますので、よろしければそちらにお問い合わせください。少し高価だということにつきましては、浜のお母さんたちの収入となることを考えますとなかなか安くすることは難しい。先ほど紹介させていただいたミサンガも、実は鮎川浜のお母さんが一人だけで継続して作っていたりしていることもあり、大量生産はなかなか難しいものがあります。あと、先ほどの基調報告では触れませんでしたが､今東北で震災の後に始まった手仕事の動きを紹介するWEBサイト「東北マニュファクチュール・ストーリー」を立ち上げました。岩手から福島まで、それまで別の仕事をしていた方が、震災を機にもの作りを始めた方が結構いらっしゃいます。いろいろと失ったからこそ始まったもの作りの物語を、今一つ一つの現場を回りながら取材して発信しております。それらについても、一部御紹介できると思いますので、よかったら御連絡いただけたらと思います。

【稲積】

ストラップはどうですか。

【友廣】

ストラップについては、僕らが関わっていないところで作られていて、形も値段の幅もいろいろありますのでよろしければ御紹介します。このシンポジウム終了後、客席辺りにいますので、よかったらお声をお掛けください。ありがとうございます。

【稲積】

様々な御質問をいただき、御来場の皆様に御礼を申し上げます。

それではパネルディスカッションですから、ここではパネリストの皆さん同士でお互いに質問もあると思いますし、あるいは、それぞれの発言に対して、自分のお考えもあると思います。また、最初の基調報告が20分という限られた時間で、皆様の御体験、御活動の内容からすれば、まだまだお話しされたいことがたくさんおありだったと思います。ですので、補足も含めて結構でございますから、この時間を利用したいと思います。それではパネリスト同士で何か御質問なり補足がございましたらどうぞお願いいたします。はい、鈴木さんお願いします。

【鈴木】

補足をさせていただきます。被災状況によって抱える問題の違いについてお話させていただきます。本日のパネリストの方たちと同じく、外から被災地に入ってきた多くのボランティアの方たちが、どのようにして被災された人たちの心を勇気付けたかというお話の一篇です。

家が全壊してしまった方たちは、我が家もそうだったのですが瞬時に津波に流されましたので、我が家の跡地から見付かったのは仏壇のろうそく台1本だけでした。あとは、全て綺麗さっぱり無いですね。その失ったもの、喪失感とか絶望感というのは、レジュメにも書いてありますが、ふとした時にひょこひょこと顔を出します。ちょっとしたことで顔を出してくる。意図的に思い出そうとしなくても、ちょっとしたことをきっかけに外部から入ってくるのですね。例えば花が咲いているのを目にすると、ああ我が家の庭にもこの花あったよねとか。それから何か食べようと思った時に、あの皿があったよねとか。この会場にいらっしゃる被災された方も同様だと思うのですが、そういった喪失感とか絶望感というのは、水道の蛇口をひねった時に水が出てくるように、突然襲ってきます。これは消えることは無いだろうなと思っています。ただし、対処の仕方を工夫することはできると思います。

それから、家が半壊または浸水した方の場合です。半壊や浸水すると、家財などを全て外に出して洗浄したり、ヘドロや泥を掻き出すのに人手が必要でした。皆さんも被災されてお分かりになると思いますが、今回の震災は大規模災害ですから1階が天井くらいまで水に浸かってしまうと、大変な悪臭がします。高齢の方が住んでいる家は、大体1階は畳の部屋になっています。すると、畳の洗浄は非常に困難なため、なかなか後片付けができない家が多かった。住んでいる人も諦めてしまうのです。そ

こに、全国からボランティアの方たちが入ってきました。本当に有り難かったです。自分たちだけで畳を起こすといっても重くてもう外には出せませんし、家財道具を出すだけでも大変な重労働です。外に出すことができても臭いが取れなくて、絶望的な状況でした。そんなところに、たくさんのボランティアの方たちが来てくれて、家の後片付けを手伝ってくださった。そういうことができたのが、半壊や浸水の家でした。このことを教訓に最近では、1階をフローリングにして、2階を畳の部屋にしている家が増えました。

では、家が壊れていない所はどうなのか。この津波というのは、現場にいた方は分かると思うのですが、海岸線に近い同じ集落の一角であっても、海面からの高さ（海抜）が異なる所があります。わずか半径3メートルくらいの範囲に、全壊した家、半壊した家、全く被害が無い家が立ち並んでいるわけです。被害が無い家は良かったじゃないかと思いますが、そうではないんですね。罪悪感が生まれるのです。サバイバーズ・ギルト[1]に襲われるのです。なぜ我が家だけが残ったのだろう。罪悪感から、外から見える所に洗濯物が干せなくなったり布団も干せなくなる、そういう時期が長期間続きます。それから岩手でも、60年に1回は大きな津波が来るぞとずっと言われ続けていたこともあり、いつかは来ると思っていたのですが、まさかこんな大きな津波だと思っていませんでしたから、多くの方が命を失いました。「津波てんでんこ」という津波文化の言葉があります。こちら（石巻）にもあるのではないかと思いますが、津波が来たら人のこと考えないで逃げろよという意味です。高い所へ逃げるのだよと言われて育ってきました。ですが、それは50歳代後半以上の方しか知りません。若い方にとっては死語のようになっておりますので、そういったこともあって、たくさんの命が失われたのだと思います。最後に、私たちは「被災したのか?」「全壊したのか?」「半壊したのか?」「家助かって良かったね」という言葉は使えないなということが分かりました。そういう被災者の心の中を御理解いただければ有り難いなと思っています。

【稲積】

それでは、私からも一つ。どなたにお答えていただいても結構ですが、私は今、福岡県の太宰府市教育委員長を務めさせていただいております。太宰府市と宮城県多賀城市は古都ということで姉妹都市の関係にございます。昨年（2012（平成24）年）秋に私たち太宰府市教育委員会から多賀城市にお見舞いと視察と激励に参りました。その時に、多賀城市のある小学校の校長先生からお聞きしたことなのですが、その小学校も避難所になっておりました。震災直後には避難所でお弁当を配ったり、高齢者のお世話をしたり、かいがいしく働いている一人の青年がおりました。その青年は、震災の前は引き籠もりでずっと家にいたそうですが、震災後は部屋から出て、避難所でかいがいしく活動をされておりました。しかし、その避難所の生活が少し落ち着きましたら、またその青年は引き籠もりに戻ってしまったそうです。

また、震災直後は、不登校など子どもたちの様々な問題行動が無くなりましたが、2年近く経ちまして、また不登校などの問題行動が以前と変わらないように発生し始めたというお話を聞きました。

その話を聞いた時に感じましたのは、鈴木さんも先ほどおっしゃいましたが、これからは心のフォローアップをどのようにしていくかということを感じたのです。

2年半経ちまして、皆さま方は現地で何か感じておられることがありましたら是非教えていただきたいと思います。どなたからでも結構です。奥田さんいかがでしょうか。

【奥田】

そうですね。私どもは、野宿者の支援を、ハウスレスとホームレスは違うという考えを前提に25年間ずっとやってきました。今回の被災者支援においても、その考え方を念頭に活動を行っています。

1 Survivor's guilt: 戦争や災害、事故、事件、虐待などに遭いながら、奇跡的に生還を遂げた人が、周りの人々が亡くなったのに自分が助かったことに対して、しばしば感じる罪悪感のこと。

野宿者の支援をしていて大きく二つの課題があります。大体支援をするときには、まず見立てが大事で、何が困窮しているのかという、そこが勝負なのですが、今回の東日本大震災の被災状況は、二つの困窮がそこに絡んでいると思っています。一つは家が無い、野宿ですから食べ物が無い、着るものが無い、そもそも仕事が無い。家が無い状態で就職できる会社はありません。家が無くなるというのは決定打です。

野宿者支援でも、そういう方を長く支援してきまして、炊き出しから始めて再就職の支援等々、今は総自立者数が2,500名を超えました。しかし、実際アパートに入居された後が勝負です。つい先日まで数年間路上で暮らしていた人が、アパートに入って再就職するわけですから、訪ねていくと本当に見違えます。台所を見るとお味噌汁なんか作っていたりするわけですから、すごいなとびっくりします。真っ黒けの顔をしていた人がえらく美白になっていたりするわけです。ですが、良かったですねと言ってそのアパートを訪ねて帰る瞬間に、一人でポツンと座っているおじさんの姿が見える。それが数日前、路上で駅の通路で座っていた日の姿とかぶって見える。何が解決できて、何が解決できていないのかが問われていたのです。路上にいる時には畳の上で死にたいと、死に場所の話をされていて非常に印象的だった方でした。私たちの活動の「自立の概念」は五本柱で構成しているのですが、五本目の柱は「一人で死なない、一人で死なせないというのが自立だ」としています。20年ほど前に書いたことです。死ぬ時の話は、本当に大事なのですが、畳の上で死にたいと路上の時はおっしゃるが、アパートに入って「これで畳の上に上がってよかったですね」と言うと、次は「俺の最後は誰がみとってくれるだろうか」という話になるのですね。

そこに現れるもう一つの問題は、やはり“ホーム”の問題でありまして、これは“ハウス”ではない。“ホーム”と呼べる人間関係が無いのです。現在、様々な社会制度もありますし、社会資源もありますが、社会的関係資源というのは、極まるところはやっぱり人なのだろうと思います。最後死ぬ時に、誰が横にいてくれるのかということが、野宿者支援において勝負でありまして、そこにはハウスレス問題というものと、ホームレス問題の二つの問題がある。ですから私たちは、今回被災者支援とか被災地における活動においても、この人には今何が必要かということを一方で徹底的に追及しています。

例えば牡蠣の養殖を復興するにはまずロープが必要なのですが、ロープの切れ端をもらって帰って、あらゆる所に同じものがないかと注文を出して、何kmというロープを調達する。これは当時大変だったのですが、でももう一つの課題は、この人には「何が必要か」ということだけではなくて、この人には今「誰が必要か」という、この「何が必要か」というのと、「誰が必要か」というこの二つの問いに、同時的に答えることができるかどうかなのです。単に路上生活（ホームレス）の問題だけではなくて、私は被災地においてもそうですし、ひょっとすると家を失っているというような極限の状況ではないけれども、“ホーム”を失っているという状況がずっと続いている方は多くいると思います。

私は関西出身ですので、阪神・淡路大震災の支援にも関わっていたのですが、震災後、孤独死や自殺の問題がたくさん出てきました。例えば、阪神・淡路大震災の時には、共同型仮設住宅というものを作りました。居室の中に共同台所を一つわざわざ作って、そこで無理やり顔を合わせるような仮設の建て方をしていました。ですから、やはりこの“ホーム”の問題が大事なのです。

ただ、そこでもう一つの問題があるのは、私が先ほど言いましたように、誰かが私のために助けてくれるというのは、自尊感情と言いますか、自分が大事にされているという感情を得るにはすごくいいのですが、そればっかりやると助けられっぱなしで萎えてしまうのです。そうすると、もう一つの自己有用意識といいますか、自分は必要とされているという、その役割の確認がその誰という作業の中に非常に大事になるのです。

被災直後、引き籠もりの青年が避難所で暮らしていた話をしましたが、ひょっとしたらそこには役割があったのかもしれないなと思います。それが無くなった、見えなくなった瞬間に再び自分は必要とされていないのではないかという気持ちに戻ってしまう。今、私は九州で路上の青年たちの再就職支援に奔走しているのですが、それも助けられっぱなしの構造では絶対にだめで、彼らがどういう役割を担うかということが、非常に大事かなというふうに伺っておりました。

【稲積】

ありがとうございました。近江さんにお尋ねしたいのですが、近江さんたちが出された壁新聞ですね。壁新聞6枚とお聞きしましたけど、その6枚が海外でも高く評価されて、どこかに提示されている保管されているという話も聞いたのですが、今、6枚の壁新聞はどうなっているのでしょうか。

【近江】

そうですね。毎日6枚書いて、6か所に貼り出しておりましたので、本来6セット残っているはずなのですが。震災後、時間が経つにつれ交通の便が良くなってきて、もう少し掲示エリアを広げたいと、前日見ていただいたものを違う所に持っていったりしていました。また、当時車も人のものを借りたりしていたため、フロアマットを汚さないように壁新聞を下に引いていたりとか、避難所のゴミにならないように貼りっぱなしにしたりしていました。そのような中で、何とか3セットだけ押さえることができています。

ワシントンのニュージアムという新聞博物館に1セット、それから横浜の日本新聞博物館に1セット、それと石巻市に石巻ニューゼ（運営：石巻日日新聞社）という人が集まれる場所に無償で1セット展示して地域内外の皆さんに見てもらえるようにしてあります。

【稲積】

それから鈴木さんにもう一つお尋ねしたいのですが、御報告の中に全戸家庭訪問健康調査の結果、高齢者の支援必要理由で最も高かった「心のケア」が37%あったことについて、その心のケアというものは具体的にはどのようなケアなのでしょうか。

【鈴木】

宮城県の場合も立ち上がっていると思うのですが、大規模災害時には、いち早く心のケアが必要だろうということで、随分ディスカッションされて実現化しています。岩手県の場合では、沿岸の4保健所を拠点にしてこころのケアセンターを立ち上げています。

岩手県内の大学の精神科を中心に、全国から多くのスタッフを集めながら行っているのですが、この心のケアというのはなかなか進まないことはお分かりですよね。東北人は無口で控えめなのです。こういう場でお話をするのも非常に苦手なのですが、そういう心の問題というのは、特に浜の人たち、海で働いている人たちというのは、がらがらと元気よく話をしているようですけど、心の中は非常に控えめです。他人になかなか自分の心の中もお話しできないような状態だなと考えていました。

この度の津波というのは第一波で終わったわけではないですね。何回も行ったり来たりした波の中に、たくさんの人たちが流され飲み込まれていく姿も見ているわけですね。声も聞いています。「助けてくれ」って手を伸ばした人がいたのですが、自分も引き込まれてしまってはいけないと、その手を引っ張れなかった。そういう非常に重い経験をお持ちの方が多くいました。

私たちは、被災後2日目から入りましたので、その時はアドレナリンが出ていて興奮状態です。だから2～3日、70時間くらいは睡眠を取らなくても体が動きました。住民の方たちもそうでした。ですから直後はよく話をしてくれました。こうだったんだ、ああだったんだって。それが時間が経つに連れて、一旦心の奥に封じ込められていきました。

私は保健師でしたから、地元の人たちの声をたくさん聞いていました。そこで私は、住民に対するケアの問題だけではなく、支援に入った人たちの心のケアも必要だなと思いました。ケアラー（祖父母や親などの世話を行う無償の介護者）に対してです。彼らも、先ほどの話をしたような喪失感や絶望感を感じるのです。そこで、こころのケアセンターができました。その対応につきましては、非常に個別性が必要です。今私もやっているのですが、本当に寄り添って、隣にいて、このまま寝られる?とか、血圧測ってみる?ちょっと血圧高いけど何かあった?とか言いながら、日常生活の中での心の動きをキャッチすることが必要だなと思っています。

それから、震災発生直後の被災している方たちの心の問題が、みんな同じだったときはまだよかったのですが、2年半が過ぎまして、まだまだ住む場所も決まらない、働く場所も見付からない、といった多種多様なストレスが複合的に絡み合い、それが引き金でトラウマになっていることが出てくるようになりました。これはライフサイクルごとに出てきますので、対応は非常に大変です。ですので、この心のケアは、ずっと続けていかなくてはいけないことなのです。どこかで区切れるものではない。そして、その被災した人たちに寄り添い、どうですか?という言葉を掛けてあげること。日常生活の中で話せる環境を丁寧に作っていかなくてはいけない。非常に個別性に神経を使って見守りしていくことが必要なのです。また、これは4、5歳ぐらいの子どもたち全員にやらなければいけないと思います。私たちの行動研究の中で、お母さんが心理的に非常に弱っていることが分かりました。子どものサインに気が付けないお母さんたちがたくさんいる。子どもの声を聞けないのです。ですから先ほども言いましたが、仮設住宅での余震が避難所の時と違ってカタカタとすると、子どもはもう怖くてお母さんをつかみますよね。だけれども、それを振り払ってしまうお母さんの心情があるということを理解しなければいけない。

それから、大槌町の役場職員が40人亡くなったのですが、今残っている職員の方たちの多くがうつ病になっています。その人たちの心のケアをしていかなければいけないのですが、うつ病による負の連鎖を断ち切るためにも、家庭内のパッケージで心のケアが必要だということも分かってきました。ですから､非常に個別性で丁寧に見守る｡見ているよという言葉を掛ける｡そういうケアが震災に関わった全ての人に必要であると考えています。

【稲積】

ありがとうございました。最後に奥田さんと友廣さんにお尋ねします。先ほど奥田さんは、あえて「偏った支援」という言葉をお使いになりましたし、お二人とも小さな場所で相互交流して活動しているのですが、お二人がやられていることは、限定された場所に見えますが、私から考えますと大変普遍的な可能性を持っている取組ではなかろうかと思うのです。そういう意味ではそれはかなり壮大な実験であり挑戦であると感じますが、これからの日本社会全体で考えたとき、今取り組まれていることがどういう可能性を生むか。そういうことをお考えになっていただいているのかどうか。一言ずつお聞きしたいと思います。

【友廣】

はい、ありがとうございます。僕は、震災前は全国の農村や漁村を回らせていただきながら、そこで求められる役割をいろいろと果すようなことをしていました。フリーランスとして魚を売ったり野菜を売ったりなど、そういうことをやっていたのですが、その時から感じていたのは、地元の人たちが何かやってみたいと思ったとしても、「お金が無いからできない」となる。「国のお金が取れたらやれるんだけどね」みたいな、結構そういう言い訳のような考えになってしまうところがあります。

今回、OCICAの話の最後に、今回の支援活動の実質的な自己投資は5万円以下しか掛かっていないと紹介させていただきましたが、この震災の後、僕ら自身も何も持っていなくて、お母さんたちも何か持っているわけではなくて、そこにあるものでまず一歩踏み出してみよう、というところで始めたのですね。ホームセンターで糸のこぎりとか丸のことかを買ってきて、そこでまず手を動かし出した。そこから物語といいますか思いをきちんと伝えていくことで、どんどん人と人の縁が広がって、みんな無理なく差し出せるものを差し出してくださって、僕らも差し出していって、それで事業が形になっていった。このプロセスは今言っていただいたように、ほかの地域の人たちにも何か逆に参考になるというか希望になるようなことになればいいなと思って、そういう意味もあって去年本も書かせていただきました。ここから新しく生まれてきているこの動きは、また違う形で伝えていきたいなと思っています。

【稲積】

では、奥田さんどうぞ。

【奥田】

そうですね。私が「偏った支援」と言った時にやはり議論があったのですが、一人のスーパーマンみたいな人が100人の人に対応するのではなくて、100人の人が100人に対応したらいいのだ、と言いました。それが社会であって、1つの団体が100のプランをカバーするというのは実際できないし、一方でそういうことはやってはいけないのではないかなと思っています。それってどうしても支配の構造といいますか、力の構造が生まれてしまう。そうではなくて、小さな出会いが100生まれればそれでいい。友廣さんがされていることは素晴らしいと思うのですが、やはりモデルなのだと思うのです。先駆的なモデルをどうまねるか、そのまた隣のところでどうアレンジするかというのが非常に大事だと思いました。

それとこれはホームレスの人たちを見てもそうなのですが、少しロマンチックな言い方をしますが、ホームレス経験でさえ私は一つの経験談だと思うのです。困窮状況に追い込まれた人たちしか持っていないのです。先ほど「東へ」ではなくて「東から」という視点を自分自身学びましたと申し上げたのですが、何か悲しんだ人とか苦しんだ人、本当に心が傷ついて、それは本当に癒されなければいけないのだろうけれども、しかしそれにしても彼らしか見えていない世界といいますか、認識における特権性みたいなものがありまして、それがかたや関心を持っていない人たちが乗り込んでいって支援だ支援だと言っていても、決定的に見えていないもの、感じられないものがあるのです。私はそこからきちんと聞くことがこの国を変えていくと思うのです。本当にゆとりのある人が苦しい人を助けていくみたいな温和な国になるのではなくて、何かそこで悲しんだものしか持てない認識における特権みたいなものから、逆にどのようにして日本社会が復興するかというのが勝負なんだろうと思っています。

【稲積】

ありがとうございました。

それでは一言だけ締めくくりの言葉を述べさせていただきたいと思います。今回、「絆」ということが大きなテーマになりました。一言で「絆」とは言いますが、それは人権という視点で捉え直したときに、大変大きな意味を持ちます。奥田さんの言葉を借りれば、「絆」とは『相互多重性』であるという、大きなキーワードを示していただきました。昔から言われている「絆」というものは同質性を前提とした一面があるのですが、これからの「絆」というのは多様性を前提としたものでなければならないのではないかと私は思います。

特に震災時におきましても震災直後の皆が極限状態という同質性の上に立った「絆」から、その後、時が経つにつれて今こそ多様性を前提とした「絆」へ変化していくということの結び直しもまた大事ではないかと感じました。

そして皆さんの取組内容をお聞きしながら、私はマザー・テレサの言葉をずっと胸の中で反芻しておりました。マザー・テレサは「私たちのすることは大海のたった一滴の水にすぎないかもしれません。でも、その一滴の水が集まって大海となるのです」と言っておられます。このマザー・テレサの言葉を改めて私はかみしめたいと思っております。

これで今日のシンポジウムを終わりたいと思います。長時間皆さん熱心に御清聴ありがとうございました。

＊このシンポジウムの「パネルディスカッション」の模様は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。

https://www.youtube.com/jinkenchannel

●関連情報

＊公益財団法人共生地域創造財団　http://from-east.org/
＊北九州ホームレス支援機構　http://www.h3.dion.ne.jp/~ettou/npo/
＊東八幡キリスト教会　http://homepage3.nifty.com/higashiyah
＊奥田知志ツイッター　https://twitter.com/tomoshiokuda

＊つむぎや フェイスブック　https://www.facebook.com/TUMUGIYA
＊マーマメイド　http://mermamaid.com/
＊OCICA　http://www.ocica.jp/
＊東北マニュファクチュール・ストーリー　http://www.tohoku-manufacture.jp/
＊友廣裕一 フェイスブック　https://www.facebook.com/yuichi.tomohiro
＊友廣裕一 ツイッター　https://twitter.com/tomohy

＊石巻日日新聞　http://www.hibishinbun.com/
＊石巻日日新聞（号外）　http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/26
＊「石巻日日こども新聞とは?」　http://kodomokisha.net/kodomoshinbun/
＊石巻日日新聞 編集制作部 ツイッター　https://twitter.com/ishihibi_edit
＊石巻日日新聞 フェイスブック　https://www.facebook.com/hibishinbun

＊東日本大震災復興支援教育・研究プロジェクト
http://www.zenhokyo.jp/201103quake/ho...
＊保健師による東日本大震災復興プロジェクト
http://www.okayama-u.ac.jp/user/phn/i...
＊「岩手県大槌町民の健康状態把握のための訪問調査」に基づく提言（第一報）（PDF）
http://www.zenhokyo.jp/201103quake/do...
＊「大槌町　保健師による全戸家庭訪問と被災地復興」（PDF）
http://www.zenhokyo.jp/201103quake/do...
＊平成23年度東日本大震災復興支援教育・研究プロジェクト活動報告書
http://www.zenhokyo.jp/201103quake/do...
＊平成24年度東日本大震災復興支援教育・研究プロジェクト活動計画書
http://www.zenhokyo.jp/201103quake/do...
＊東日本大震災女性支援ネットワーク
http://risetogetherjp.org/?p=1660

第２部　コンサート

友石　竜也（劇団四季出身）

【友石】


友石竜也さん

皆さんこんにちは。第2部コンサート、スタートいたしました。先ほど御紹介いただきました友石竜也と申します。よろしくお願いいたします。

そしてピアニスト和田さやかさんです。そしてピアニストサポート安達星来さんです。

簡単にもう一度自己紹介をさせていただきます。プログラムにも書かせていただいていますが、私は愛媛県に本籍があるのですが、育ちは兵庫県宝塚市です。ですので、しゃべっているとだんだん関西弁が、どうしても出てきちゃうんです。

小中高とずっと関西で育ちまして、大阪芸術大学のミュージカルコースに進学し、劇団四季の研究所に大学を中退し入りました。そして1年目にミュージカル「ライオン・キング」のシンバ役をやらせていただいて、30歳までずっと「ライオン･キング」や「アイーダ」などに出演させていただきました。20歳代をずっと劇団四季で過ごしましたので、基本から多くのことを勉強させていただき、とても感謝しています。30歳で退団してから、少し充電期間を空けまして、舞台そしてコンサート活動を再開させていただき今に至ります。

石巻を訪れたのは、震災後は3回目になります。一昨年（2011（平成23）年)、石巻高校でのPTA主催のコンサートに呼んでいただいてコンサートをやらせていただきました。そして昨年（2012（平成24）年)、これも石巻高校の吹奏楽部の定期演奏会で、吹奏楽の生徒が「ライオンキング」の曲を演奏して、我々仲間で歌うという、夢のコラボレーションをやらせていただいて、とても本当の舞台にも引けを取らないくらいの演奏そして歌、素晴らしいコンサートになったと思います。そしてその年の11月と今年（2013（平成25）年）の6月に宮城県東松島市のコミュニティセンターで明日の力コンサートをやらせていただきました。ですので、東松島そして石巻は何度か来させていただいておりまして、石巻高校の先生方や地元の皆さまに背中を押していただいて、この活動を今後も続けていきたいなと思っています。今日もまたこのような機会に石巻に来られて本当にうれしく思っています。もう本当に気持ちを込めて全力で歌いたいと思っていますので最後までゆっくりとお楽しみください。よろしくお願いします。

皆さまにはちょっと馴染みのない曲、ミュージカルの曲が続くかもしれないのですが、一言一言メッセージ性のある歌詞が一杯出てきますので、我々歌い手も歌詞に気持ちを込めて歌いたいと思います。プログラムから順番が前後したり曲目が変わったりすることもあるのですが、説明しながら進めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

1曲前はですね「アイーダ」という作品から「勝利ほほえむ」という曲をお届けしました。次は2曲目3曲目連続で行きます。2曲目はディズニーのアニメの「ノートルダムの鐘」という作品から「僕の願い」。そして「ライオン・キング」ですね。僕がやっていましたシンバの役が歌う曲なのですが「終わりなき夜」という歌を2曲続けてお聴きください。

（コンサート）

【友石】

ありがとうございました。ここで本日僕を支えてくれる、もう一人の出演者をお呼びしたいと思います。金平真弥さんお願いします。

【金平】
皆さん始めまして金平真弥です。よろしくお願いします。

【友石】
昨年の石巻高校では、金平さんも一緒にコンサートに出演しました。

【金平】
そうですね。

【友石】
それから東松島、そして今日のコンサート。どうですか。

【金平】
そうですね。やっぱり皆さんの温かみをすごく感じます。
私も関西出身で今は東京に住んでいるのですが、石巻は人の温かみをすごく感じる町で、いつもいつもいろんなことを勉強させていただきながら、こうして友石さんと御一緒に公演させていただいております。

【友石】
初めて来た時はどんな感じでしたか。

【金平】
そうですね。一緒に石巻高校近くの丘の上から…

【友石】
日和山ですね。

【金平】
そうですね。初めて被災地を見させていただいて、本当になんというか、本当に言葉にならなくて、こっそりなんですけど友石さんの前でちょっと涙ぐんでしまったりだとか、という一面もあったり胸が一杯になりました。自分もそれを受けてどのようにして表現ができるかというところを毎日毎日挑戦し続けているところですね。

【友石】
他は何かありますか。大丈夫ですか。

【金平】
そうですね。自分のちょっとした自己紹介をまださせていただいてなかったのでここで。大阪音楽大学のミュージカル・コースを卒業させていただいた後に、大阪にあるユニバーサル・スタジオ・ジャパンでショーシンガーをさせていただいた後、劇団四季の研究所に入団させていただきました。初舞台が「ジーザス・クライスト・スーパースター」というロック・ミュージカルで、そのあとに「キャッツ」、猫のミュージカルなのですがそちらで初めてソロを歌わせていただける役をいただいて、そして友石さんと一緒なのですが、「アイーダ」や、「ソング&ダンス」という作品などいろいろ経験をさせていただいたのち、一昨年（2011（平成23）年）ですかね、退団させていただいて、今はこのようにライブ活動などを中心にやらせていただいています。

【友石】
　一昨年、去年と来させていただいて、やっぱり歌の力というのは本当に大きいなすごいなというのをすごく感じましたので、今日も頑張ります。

【金平】
　そうですね。音楽の力を借りて、自分たちもいい音楽を奏でられたらと思います。

【友石】
　では2曲続けて。

【金平】
　そうですね。

【友石】
「輝く未来」はなんという作品の曲？

【金平】
「塔の上のラプンツェル」というディズニーの最近のプリンセス作品なんですけど、そちらからラブソングを１曲。

【友石】
　そして次の「ゴッドヘルプ」もノートルダムの…

【金平】
　はい、「ノートルダムの鐘」のエスメラルダ、ヒロインの子が歌っている曲です。

【友石】
　2曲続けてお願いしたいと思います。



金平真弥さんと友石竜也さん

【金平】
はい、よろしくお願いします。

（コンサート）

【金平】
はい、ありがとうございました。2曲続けて歌わせていただきました。結構シリアスな曲が続いていますが、皆さま楽しんでいただけていますでしょうか。ありがとうございます。

【友石】
では次は「美女と野獣」という作品から「愛せぬならば」という曲をお届けしたいと思います。

（コンサート）

【友石】
ありがとうございました。
僕は高校3年生の時に阪神・淡路大震災で宝塚にあった家が半壊しまして、短かったのですが避難所生活を体験しました。そして、阪急電車が走れなくなって学校に登校できなくなったのですが、卒業式の少し前に、電車が復旧し、久しぶりにみんなと再会でき卒業したという経験があります。なんかその時とリンクすると言いますか、思い出すところもすごく強くて、やっぱりこういう時に助けていただいた分、何かでお返ししないとなって思いました。歌や舞台を生業としてやってきているので、歌うことで、恩返しではないのですが応援、励ますというか、そういうふうにできたらなと思いまして一昨年（2011（平成23）年）から歌わせていただいています。
その前から石巻高校と石巻工業高校で教師をしている知り合いがいまして、震災後、１か月後にようやく連絡が取れた際、何かあったら歌とか歌いに行くよと話をすると、「まだまだそんなものは必要ない、今欲しいのはそういうことじゃないよ」と言われて、何かもし次そういう歌が必要なときがあったら是非絶対声を掛けてと話をしました。すると、半年後に連絡をいただいたときに石巻高校のPTA主催のコンサートの話を進めてくれて、初めてそこでコンサートをやらせていただきました。最初はやっぱりどういう空気感でどういう感じになるのかなと想像もつかなかったのですが、コンサートをやり終えて結果的には逆にこっちが励ましてもらったという気持ちのほうが強かったのを、今は覚えています。
一方通行ではなくてお互いに心が通い合って一つのコンサートの空間が創り上げられたということをすごく痛感した初めての経験でした。歌うこと、今までやってきたことがこういうふうに少しでも役に立つのだなと感じましたし、僕は続けていく事に絶対に意味があると思ったので、いろんな人から協力をいただきながらできる限り、続けられるだけ続けたいなと思っています
ちなみに、本日、この会場に石巻高校吹奏楽部の武田先生に来てくださっております。

【金平】
ありがとうございます。

【友石】
石巻高校吹奏楽部の武田先生。もう武田先生にはいつも応援していただいております。今年の6月のコンサートの時は、武田先生のピアノ伴奏で我々が歌を歌って、コラボレーションという形で吹奏楽部のみんなも演奏してくれて、とても素晴らしい経験になりました。

【金平】
はい。なかなかできないですね。

【友石】
金平さんどうですか。

【金平】
そうですね。本当に石高のみんなはパワーが一杯で自分が本当に圧倒されたのを覚えています。そのオーケストラの演奏にどうにか頑張って乗っかれ乗っかれと思って一生懸命歌ったのがすごく印象的ですね。いつも素敵な演奏をくださってありがとうございます。

【友石】
武田先生にはステージに上がってきてもらいましょうか。ありがとうございます。先ほども先生と、「次じゃあ、いつやりましょうか」みたいな話をしながら進めていきたいなと思っていますので、その時はまたお越しください。よろしくお願いします。

【金平】
よろしくお願いします。

【友石】
では、その気持ちを込めて我々1曲ずつ歌いたいのですが、お手元に「翼をください」の歌詞を用意していただいています。皆さん御存じの曲だと思いますので、僕ももちろんギャーッと歌いますので皆さんも御一緒によろしくお願いします。そして金平さん。

【金平】
私は、皆さまは聞いたことがあるかどうか分からないのですが、MISIAさんの「明日へ」という曲を、心を込めて歌いたいと思います。これは震災復興のために書かれた曲でして、その歌詞がすごく心に響く歌詞だったので、自分も頑張って歌えたらなと思っております。よろしくお願いします。

【友石】
では僕からいきたいと思います。ではお願いします。

（コンサート）

【金平】
ありがとうございます。

【友石】
ありがとうございます。ではちょっと雰囲気を変えまして、ミュージカルナンバーにいきたいと思うのですが、「アイーダ」という作品から「迷いつつ」という曲、そして「ライオン・キング」ですね「愛を感じて　CAN YOU FEEL THE LOVE TONIGHT.」これは皆さんどこかで耳にしたことがあるメロディーだと思いますので。2曲続けて。

【金平】
はい、ラブソングです。お聞きください。

（コンサート）

【友石】
ありがとうございました。

【金平】
ありがとうございます。

【友石】
それでは残りあと2曲なのですが、次の曲は「Ｗｉｓｈ（ウィッシュ）」という曲です。とても歌詞にメッセージ性があります。何年か前に亡くなられたのですが、本多美奈子さんが亡くなる前に歌詞を書かれて、それにメロディーを作曲家の方が付けられた曲なんですけれども、生きる意味というか、生きるために、生きていることが本当に素晴らしい。当たり前のことがね。

【金平】
はい、普段気付かないようなことが本当は幸せなんだっていう曲、詩を書いてくださっています。

【友石】
その「Ｗｉｓｈ」という曲をお聞きいただきたいと思います。

（コンサート）

【友石】
ありがとうございました。

【金平】
ありがとうございます。

【友石】
次は最後の曲になります。次の曲はですね、我々の劇団の先輩が、僕らがある日その先輩とお会いしたときに、東北のほうで歌を歌わせてもらっているという話をしたときに、是非私が作った曲を歌ってきてくれと言ってくれた曲を歌いたいのですが、この曲は前回の東松島でのコンサートの時に、石高の吹奏楽部の武田先生に伴奏をしていただいて、みんな演奏をしてくれて、もう最大のコラボレーションで歌わせていただきました。武田先生もう最後の曲ですので、ステージ上に上がってきてください。

【金平】
お願いします。

【友石】
真ん中どうぞ。武田先生とはもう本当に友達みたいな感じです。先生とは最初にお会いしたときにミュージカルの話で盛り上がり、打合せに行ったときには何時間も保健室でずっとしゃべっていたよ

ね。もうそれくらいミュージカルの話とかいろんな話で盛り上がって、そこから毎回毎回一緒にやらせていただいています。先生一言だけお願いします。

【武田先生】
皆さんこんにちは、石巻高校の武田と申します。友石さんを始め、こちらの方々とは震災後からのお付き合いなのですけれども、音楽の力を始め、たくさん私も激励をいただいております。また、激励をいただいているだけではなくて、部員もいろんなところで一緒にコラボレーションすることで、お互いに元気になるような経験をさせてもらっています。一緒にいろんなことをやるたびに、本当に前に向かっていこうよとお互いに確認をすることによって、とても貴重な経験をたくさん与えていただいております。これからもまたよろしくお願いいたします。

【友石】
ありがとうございました。では最後の曲ですね。

【金平】
はい。

【友石】
「僕たちに今できること」という曲を最後にお届けしたいと思います。本日は最後までお聴きいただいて誠にありがとうございました。

【金平】
ありがとうございました。

（コンサート）

【友石】
ありがとうございました。

【金平】
ありがとうございました。

＜演奏曲目＞

・『勝利ほほえむ』（ミュージカル「アイーダ」より）
・『僕の願い』（映画「ノートルダムの鐘」より）
・『終わりなき夜』（ミュージカル「ライオン・キング」より）
・『輝く未来』（映画「塔の上のラプンツェル」より）
・『ゴッドヘルプ』（映画「ノートルダムの鐘」より）
・『愛せぬならば』（映画「美女と野獣」より）
・『翼をください』（赤い鳥）
・『明日へ』（ＭＩＳＩＡ）
・『迷いつつ』（ミュージカル「アイーダ」より）
・『愛を感じて／ Can You Feel The Love Tonight』（映画「ライオン・キング」より）
・『Ｗｉｓｈ』（本田美奈子）
・『僕たちに今できること』（オリジナル曲）

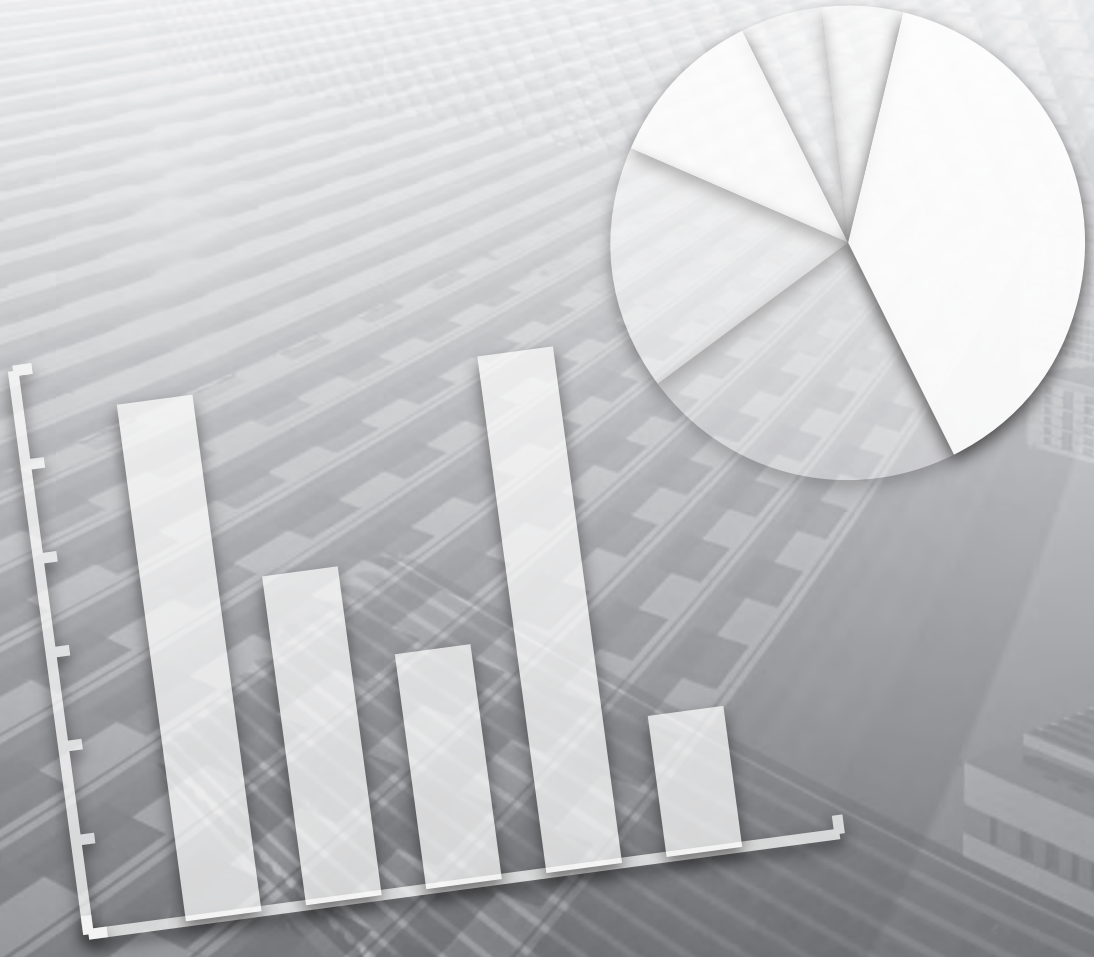
＊このコンサートの模様の一部は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。
https://www.youtube.com/jinkenchannel

●関連情報

＊友石竜也の新しいブログ
http://ameblo.jp/tomo-ishi0520/
＊ミュージカルソウルキャンプアカデミー
http://naitoacademy.com/course-detail-6867/

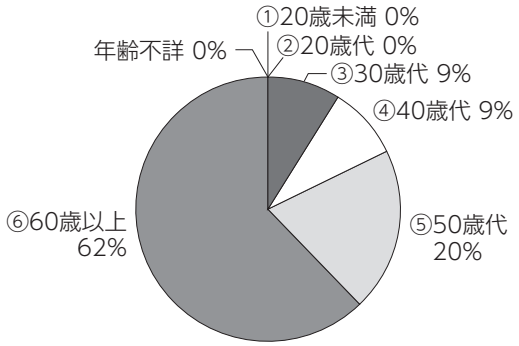
石巻会場

アンケート集計結果



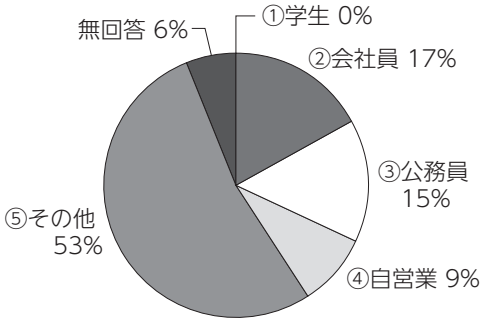
1　年齢構成

① 20歳未満	0 人
② 20歳代	0 人
③ 30歳代	3 人
④ 40歳代	3 人
⑤ 50歳代	7 人
⑥ 60歳以上	21 人
年齢不詳	0 人



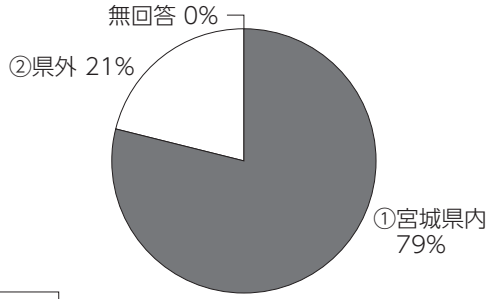
2　職業構成

① 学生	0 人
② 会社員	6 人
③ 公務員	5 人
④ 自営業	3 人
⑤ その他	18 人
無回答	2 人



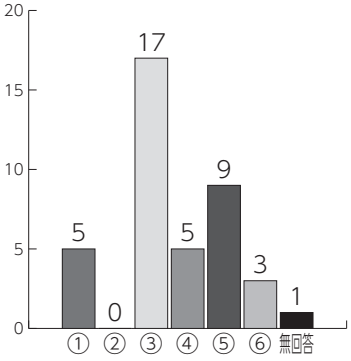
3　住まい

① 宮城県内	27 人
② 県外	7 人
無回答	0 人



4　本シンポジウムを知ったきっかけ（複数回答）

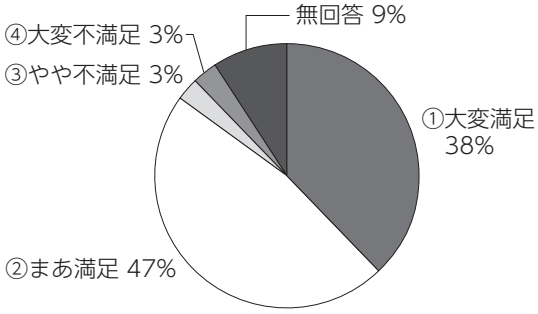
① 新聞	5 人
② テレビ	0 人
③ チラシ	17 人
④ インターネット	5 人
⑤ 知人・家族	9 人
⑥ その他	3 人
無回答	1 人



5　本シンポジウムについて

(1)　全体満足度

① 大変満足	13 人
② まあ満足	16 人
③ やや不満足	1 人
④ 大変不満足	1 人
無回答	3 人



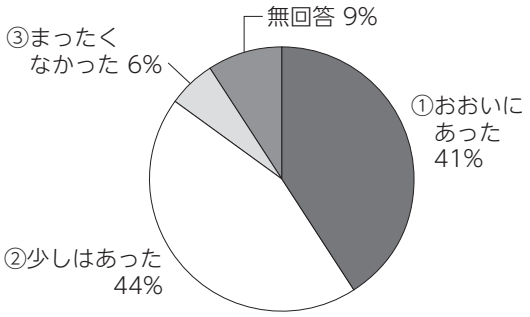
(2) 自由記入欄より

コンサート　力強い歌声に元気づけられました。ありがとうございました。
東日本大震災の岩手県の状況について、鈴木るり子様からの具体的な報告は大変有意義でした。自然の災害から我々は何を学ぶべきなのか、参考になる点が多々あった様に思います。ありがとうございました。
第1部シンポジウム　特に奥田さん、友廣さんの支援の仕方、方法がすばらしい。支援に対する基本的考え、理念に関心した。遠くから来てくださっている支援の方々に感謝したい。手話の人がすばらしかった。パソコン要約筆記の方々の仕事も正確でよかった。共にすばらしかった。
シンポジウムで絆の意味について実感しました。「Think Global, Act Local」の言葉を思い出しました。素晴らしい実践発表でした。
近江さんの「東日本大震災～石巻地域で起きたこと～」がよかった。石巻日日子ども新聞の発行はとても意義のある事と思います。子ども達の明るい未来の為に今後も継続して下さい。

※主な回答を抜粋

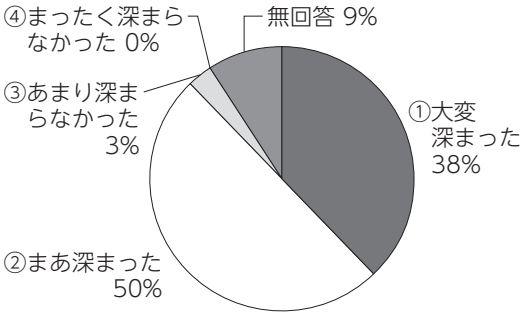
6　本シンポジウム参加以前に、人権問題についてどのくらい関心や理解があったか

① おおいにあった	14 人
② 少しはあった	15 人
③ まったくなかった	2 人
無回答	3 人



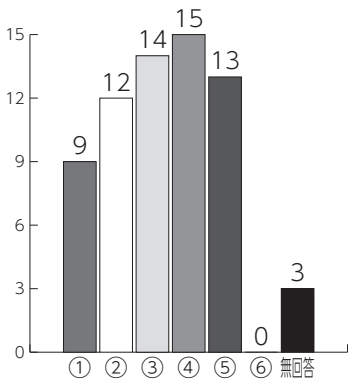
7　本シンポジウムに参加して、人権問題についての関心や理解は深まったか

① 大変深まった	13 人
② まあ深まった	17 人
③ あまり深まらなかった	1 人
④ まったく深まらなかった	0 人
無回答	3 人



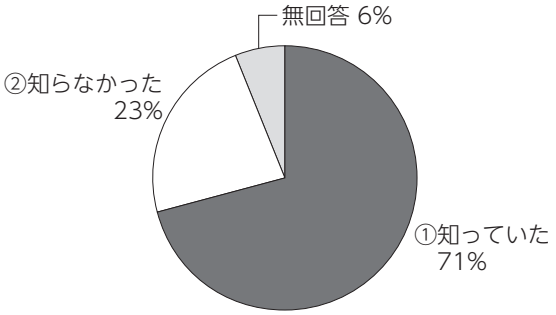
8 本シンポジウムに参加して、何か行動しようと思ったか（複数回答）

① 被災地支援を行いたい	9 人
② 人権問題に関心を持ち、偏見を持ったり、差別をしないようにしたい	12 人
③ 人権問題について、もっと知識を深めたり、勉強したりする機会をもちたい	14 人
④ 今回のイベントの内容を、友だちや家族に説明し、話し合いたい	15 人
⑤ ほかの人権問題に関するイベントにも、機会があれば参加したい	13 人
⑥ その他	0 人
無回答	3 人



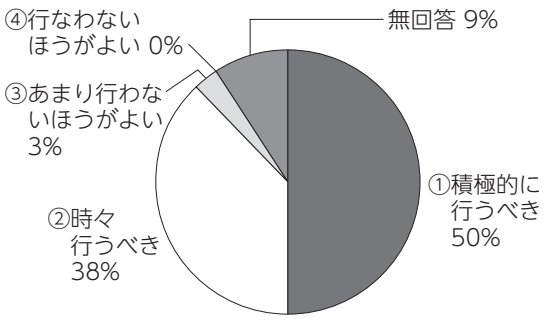
9 国や地方自治体が、広く人権啓発事業を行っていることは知っていたか

① 知っていた	24 人
② 知らなかった	8 人
無回答	2 人



10 今後、このようなシンポジウムを行なうべきだと思うか

① 積極的に行うべき	17 人
② 時々行うべき	13 人
③ あまり行わないほうがよい	1 人
④ 行なわないほうがよい	0 人
無回答	3 人



11 今回のシンポジウムについてのご意見や今後開催してほしいテーマなど（自由記入）

今回のテーマ「震災」と「人権」を結び付ける事に興味がありました。復興とは決して一方的なものではない事を改めて感じ、私自身も誰かの為に何をして行くかを真摯に考えてこれからも生きていきます。

東日本大震災の復興に向けて、さまざまな方々が関わり、力を注いで下さったと思うので、また、このようなシンポジウムが開かれればいいなと思いました。お一人お一人のお話が、心に深く響きました。ありがとうございました。パネリストお一人お一人の持ち時間が少なく、もっと聴きたいなぁと思いました。

パネリストの皆さんの体験談を拝聴し、様々な生き方が分かり共鳴したり、刺激をいただいたり、今後の生活の仕方の方向性にプラスになりましたので、又、いろいろな方々の体験談を拝聴したいと思います。

自分も被災しているのでという気持ちが強く、表面だけの理解だった。今回の数多くの支援とその効果や今後に望むことを知り、自分を反省し、今まで以上に関りをもつことの大切さ、必要性を感じた。今、実際に自分が行なっている支援や委員の仕事を継続していきたい。

事前広報にもっと工夫があってもよかったのではないか。稲積さん、奥田さんは北九州の方とのこと。私ども石巻の震災ガレキ処理にいち早く心あたたかい手をさしのべてくれたのが北九州市、ありがたい気持ちでいっぱいでいるところです。奥田さんから“きずな”について話をして頂きました。日本みんながもっともっと“きずな”が醸成されていくことを願うものです。

※主な回答を抜粋

広報内容

広報実績

No.	事　　項	実施内容
1	新聞広告	・3紙に半5段広告を掲載。 河北新報及び石巻日日新聞：平成25年8月17日（土） 石巻かほく：平成25年8月18日（日）及び8月24日（土） ・1紙に小枠広告を掲載。 読売新聞東京本社版：平成25年8月11日（日）
2	ラジオ広告	・TBCラジオに20秒CMを10本放送、60秒生CMを3本放送。 平成25年8月17日（土）～ 8月26日（月）の期間。
3	バナー広告	・開催2週間前よりMarketOne（宮城県内）を実施。 クリック保証型：1,000クリック／ 1,500,000imps
4	広報用チラシの配布	・広報用チラシを関係機関等に配布、掲出を依頼。 仙台法務局（4,000部） 全国の法務局・地方法務局（735部）※仙台法務局を除く 宮城県（1,000部） 石巻市（700部） 宮城県内市町村（690部）※石巻市を除く。 後援団体（255部） シンポジウム実施会場（30部） その他、全国の自治体などに配布。 ※チラシ印刷部数：12,000部
5	イベント情報サイトへの広報記事掲載	・インターネット上のイベント情報サイトに広報記事を投稿、掲載。全国イベントガイド、WAMNET（ワムネット）など計16サイトに掲載。
6	メールマガジンの配信	・本シンポジウムの開催を案内するメールマガジンを計3回配信。
7	人権ライブラリーホームページへの広報記事掲載	・人権ライブラリーホームページのイベント情報コーナーに広報記事を掲載。
8	人権センターホームページへの広報記事掲載	・人権センターホームページのイベント情報コーナーに広報記事を掲載。
9	各種ボランティア団体等への案内メール配信	・震災関係を中心とした各種ボランティア団体等に対して、案内メールを配信。配信先は約700件。

新聞・バナー広告



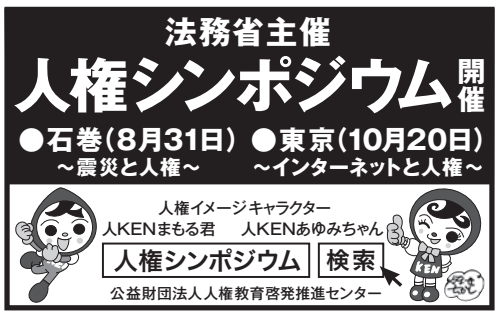




【半5段広告】
(左上)
河北新報　平成25年8月17日（土）朝刊掲載
エリア：宮城県
部　数：467,888部

(右上)
石巻日日新聞　平成25年8月17日（土）夕刊掲載
エリア：石巻市周辺
部　数：14,000部

(左下)
石巻かほく　平成25年8月18日（日）
　　平成25年8月24日（土）掲載
エリア：石巻市周辺
部　数：40,000部



【小枠広告】
読売新聞東京本社版　平成25年8月11日（日）朝刊掲載
エリア：茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県、静岡県、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県、新潟県、長野県
部　数：6,527,511部



【バナー広告】



実施内容の周知

YouTube 人権チャンネル

人権シンポジウム in 石巻の模様は、YouTube人権チャンネルにおいて、動画を配信した。
https://www.youtube.com/jinkenchannel













採録記事

読売新聞・朝刊において、人権相談窓口等の広報記事とともに、人権シンポジウム in 石巻の採録記事が掲載された。





【掲載日】
読売新聞西部本社版：平成25年10月12日（土）
北陸支社版：平成25年10月12日（土）
東京本社版：平成25年10月13日（日）
北海道支社版：平成25年10月13日（日）
中部支社版：平成25年10月13日（日）
大阪本社版：平成25年10月14日（月）



YOMIURI ONLINE（読売新聞）にて採録記事が掲載された。

採録記事・新聞広告の効果測定結果

読売新聞の採録掲載については、広告の効果を把握するため、首都圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）、近畿圏（大阪・京都・兵庫・滋賀・奈良・和歌山）、北海道、中京圏（愛知・岐阜・三重）、福岡県に居住し、読売新聞を定期購読する15 ～ 69歳の男女個人を対象にパソコンを利用したウェブ調査を実施した。調査結果の概要は以下のとおりである。

■接触度は、67.5％

※「確かに読んだ（見た）」又は「読んだ（見た）ような気がする」と回答

■理解度は85.0％

※設問「紙面（広告・記事）が理解できた」に対し「あてはまる」又は「ややあてはまる」と回答

■関心度は65.7％

※設問「紙面（広告・記事）に興味を持った」に対し「あてはまる」又は「ややあてはまる」と回答

■好感度は69.7％

※設問「紙面（広告・記事）に好感を持った」に対し「あてはまる」又は「ややあてはまる」と回答

■「人権シンポジウムin石巻」の記事内容についての理解度は58.4％

■「相談窓口やサイトなど」の認知度は「いずれもこの広告を見て初めて知った」が65.5％。

■人権イメージキャラクター「人KENまもる君」「人KENあゆみちゃん」の認知度は18.5％

※「具体的なキャラクター名まで知っていた」又は「見たことはあったが、具体的なキャラクター名について初めて知った」と回答

■人権シンポジウムへの参加経験者は1.3％

■人権シンポジウムへの参加意向者は65.0％。うち、参加意向の条件は、「自宅近くの開催なら参加したい」が38.2％、「興味のあるテーマなら参加したい」が29.0％、「一人ではなく、友人、家族、会社の同僚等と一緒ならば参加したい」が12.9％

■「広告閲覧後の人権問題に対する関心・理解度」は81.7％

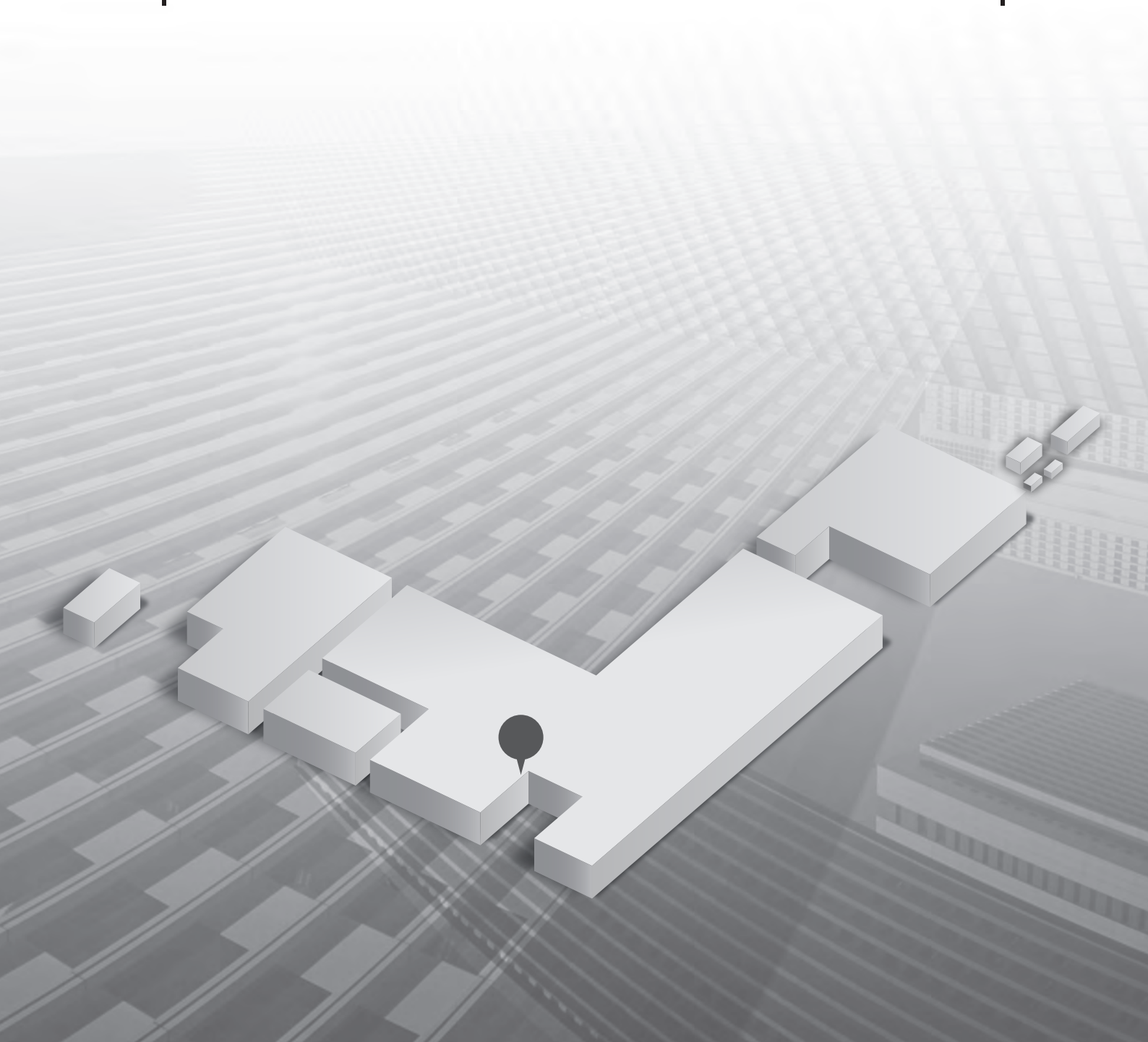
■設問「広告閲覧後、人権について何か行動をしようと思ったか」について、「人権に関する意識を深めたい」が72.8％、「人権に関するイベントに機会があれば参加したい」が51.5％

■「新聞広告の継続」について、「継続すべき」が89.4％

※「積極的に行うべき」又は「時々行うべき」と回答

シンポジウム報告

東京会場



会場結果報告

【名　　称】　人権シンポジウム in 東京

【地域テーマ】　インターネットと人権 ～今、ネットで何が起きているのか～

【日　　時】　2013（平成25）年10月20日（日）　13：30 ～ 17：40

【会　　場】　ニッショーホール（日本消防会館）
（東京都港区虎ノ門2－9－16）

【来 場 者 数】　197人

【主　　催】　法務省、全国人権擁護委員連合会
東京法務局、東京都人権擁護委員連合会
公益財団法人人権教育啓発推進センター

【後　　援】　東京都、特別区長会、東京都市長会、東京都町村会、朝日新聞社、毎日新聞社、産経新聞社、日本経済新聞社、東京新聞、共同通信社、時事通信社、ＮＨＫ、フジテレビジョン、テレビ東京、ニッポン放送、TOKYO FM、J-WAVE

プログラム

13：30～13：35

主催者挨拶　　萩原　秀紀（法務省人権擁護局長）

13：35～15：10

第１部　　シンポジウム「インターネットと人権 ～今、ネットで何が起きているのか～」

＜パネリストによる基調報告＞

■パネリスト

安川　雅史（全国ｗｅｂカウンセリング協議会理事長、第一学院高等学校統括カウンセラー、特定非営利活動法人日本青少年キャリア教育協会理事）

吉川　誠司（ＷＥＢ１１０主宰）

渡辺真由子（メディア・ジャーナリスト、慶応義塾大学ＳＦＣ研究所上席所員〈訪問〉）

■コーディネーター

横田　洋三（法務省特別顧問、国際労働機関（ＩＬＯ）条約勧告適用専門家委員会委員、公益財団法人人権教育啓発推進センター理事長、元・国連人権促進保護小委員会委員）

15：10～15：25　　～休憩15分～

15：25～16：30

＜パネルディスカッション＞

（会場からの質問を中心にコーディネーター主導による自由討議）

16：30～16：40　　～休憩10分～

16：40～17：40

第２部　　講演（トークショー）

「インターネットが授けてくれた10 の大切なこと」

古新　　舜（コスモボックス株式会社代表取締役社長ＣＥＯ、映画監督）

主催者挨拶

法務省人権擁護局長
萩　原　秀　紀

本日は、お忙しい中、多数の皆様に御来場いただきまして、誠にありがとうございます。

本日、インターネットと人権をテーマとする人権シンポジウムが、ここ東京都におきまして開催されるという機会を得ましたことを、大変喜ばしく思っております。

さて、昨年8月に、内閣府は、「人権に関する世論調査」を実施しました。この中で、人権問題について、関心がある項目を複数回答で聞いたところ、「インターネットによる人権侵害」を挙げた方の割合が36％で過去最高の割合となりました。インターネットによる人権侵害の具体的な内容としては、「他人を誹謗中傷する情報が掲載されること」を挙げた方の割合が58％と最も多く、以下、「プライバシーに関する情報が掲載されること」が50％、「出会いサイト等犯罪を誘発する場となっていること」が43％でこれに続いています。

このような中、全国の法務局、地方法務局及び人権擁護委員を中心とする法務省の人権擁護機関では、啓発活動の中でも、特に強調して啓発すべき課題として、「インターネットを悪用した人権侵害をなくそう」を含む、17の課題を掲げ、学校、地域社会、職場など様々な場面を通じて、各種の啓発活動に取り組んでいます。また、このような活動を通じて、人権侵害の疑いのある事案を認知した場合には、被害者の救済のため、速やかな対応をすることとしています。

本日の人権シンポジウムのテーマは、「インターネットと人権～今、ネットで何が起きているのか～」です。私たちの生活・文化・社会を豊かにする一方で、使い方によっては負の側面も見せるインターネットについて、専門家を招き、人権擁護の観点からこの問題を議論いただくことにより、御来場の皆様にもネット社会の在り方についての理解を深めていただきたい、との思いから、このテーマを選定いたしました。

本日のシンポジウムにおけるパネリストは、全国webカウンセリング協議会理事長で第一学院高等学校の統括カウンセラーの安川雅史さん、WEB110主宰の吉川誠司さん、メディア・ジャーナリストで慶応義塾大学SFC研究所上席所員の渡辺真由子さんです。いずれもその道で御活躍の、この問題に造詣の深い方々です。また、シンポジウムに引き続き映画監督の古新舜さんのトークショーも予定しており、インターネットに関連する御自身の体験談や将来について語っていただくこととしております。どうか最後まで御参加いただき、「インターネットと人権」という身近で大切なテーマについて改めて考えていただければと思います。

なお、本日のシンポジウムの模様は、後日、インターネット上のYouTube の人権チャンネルなどに掲載することを予定しています。更に多くの皆様に、本シンポジウムの内容を共有していただきたいと思っておりますので、本日この会場にお集まりいただけなかった方にも、是非お伝えいただきますようお願いいたします。

最後になりますが、本日のシンポジウム開催につきまして、各方面から賜りました多大の御支援、御協力に対し、心から感謝申し上げ、私の挨拶といたします。

東京会場



広報用チラシ



受付風景



全国の地方自治体等が作成した人権啓発資料の展示



会場の階段に掲示した人権啓発パネル（平成24年度制作）

第1部　シンポジウム



会場風景



コーディネーター 横田洋三さん



パネリスト 安川雅史さん



パネリスト 吉川誠司さん



パネリスト 渡辺真由子さん

第2部　講演（トークショー）

古新舜さん





東京会場

登壇者プロフィール



第１部
シンポジウム「インターネットと人権 ～今、ネットで何が起きているのか～」



パネリスト

安川　雅史（やすかわ　まさし）

全国ｗｅｂカウンセリング協議会理事長
第一学院高等学校統括カウンセラー
特定非営利活動法人日本青少年キャリア教育協会理事

ネットいじめ・いじめ・不登校・ひきこもり・少年犯罪に本格的に取り組む。全国各地より依頼を受け、年間200会場以上で講演会や研修会を行う。過去５年間での受講者数も20万人を超える。

＜最近の活動状況＞
- ○平成22年度　総務省　青少年インターネットWG　構成員
- ○平成22年度　横浜市子ども・若者支援協議会委員
- ○平成22年度　東京都港区子ども・若者支援対策検討委員
- ○平成22年度　東京都支援事業
  - ・東京子どもネット・ケータイヘルプデスクトータルアドバイザー
  - ・都内公立学校非公式サイトの調査・削除要請トータルアドバイザー
  - ・東京都教育相談センタートータルアドバイザー
- ○平成20年度・22年度　文部科学省「ネット安全安心全国推進会議」委員
- ○平成20年度・22年度　内閣府「ユースアドバイザー養成プログラム」（若者支援体制の確立）　テキスト制作委員
- ○平成21年度　参議院国会議員政策担当秘書研修出講
- ○平成21年度　文部科学省委託　学校における情報モラル等教育の推進事業企画委員
- ○平成20年度12月～平成22年度12月　東京都知事付属機関「東京都青少年問題協議会」委員
- ○平成20年度　文部科学省「学習指導要領 教育の情報化の手引き」検討委員
- ○平成20年度・平成２１年度　文部科学省委託「青少年を取り巻く有害環境対策の推進」事業企画委員
- ○平成20年度　文部科学省「先端的な情報通信技術を活用した教育・学習に関する調査」検討委員
- ○平成20年度　国立奈良教育大学　教育学部特別講師

【主な著書】
「家族とともに癒す不登校・ひきこもり」（文芸社）
「『ひきこもり』と闘う親と子を応援する本」（中経出版）
「『いじめ』と闘う親と子を応援する本～教室・ネットにはびこる悪魔とどう対峙するか～」（中経出版）
「『学校裏サイト』からわが子を守る！～ケータイ・ネット社会の落とし穴」（中経出版）　ほか

○全国webカウンセリング協議会　　http://www.web-mind.jp



パネリスト

吉川　誠司（よしかわ　せいじ）

ウェブワンテン
WEB110主宰

1996（平成8）年にボランティアサイト「WEB110」を開設し、ネット詐欺の告発やネットストーカーの調査をはじめ様々なネットトラブルの相談にあたってきた。
現在は警察庁の委託事業であるインターネット・ホットラインセンターのセンター長として違法・有害情報の対応にあたるかたわら、プライベートな活動として、ネットトラブルに巻き込まれないための消費者講座、メディアリテラシーや情報セキュリティ、ネットと人権侵犯などをテーマにした講演活動を行っている。

〔平成20 ～ 24年度の委員活動〕
- ○東京都携帯電話端末等推奨基準検討委員会
- ○警察政策学会正会員
- ○第28期東京都青少年問題協議会
- ○東京都消費生活総合センター委嘱相談員
- ○警察庁　総合セキュリティ対策会議
- ○総務省　インターネット上の違法・有害情報への対応に関する検討会
- ○「安心ネットづくり」促進協議会（児童ポルノ対策作業部会）
- ○「安心ネットづくり」促進協議会（調査検証作業部会）
- ○「安心ネットづくり」促進協議会（コミュニティサイト検証作業部会）
- ○児童ポルノ流通防止協議会（ブロッキング検討委員会）
- ○児童ポルノ流通防止協議会（リスト作成管理団体検討委員会）
- ○DIPEX－JAPAN情報倫理委員会（がん患者の語りをネットで配信するプロジェクト）

【主な著書】
「WEB110　これがネット犯罪の手口だ」（ソフトバンク・パブリッシング）

○WEB110　　http://web110.com/



パネリスト

渡辺　真由子（わたなべ　まゆこ）

メディア・ジャーナリスト
慶応義塾大学SFC研究所上席所員（訪問）

1998 ～ 2004年　　九州朝日放送　報道記者・ディレクター
2007 ～現在　　メディア・ジャーナリスト

○2007 ～ 2010年　慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
非常勤講師
○2011年～　　相模女子大学　非常勤講師
○2013年9月～　　慶応義塾大学SFC研究所上席所員（訪問）

【主な著書】
「オトナのメディア・リテラシー」（リベルタ出版）
「大人が知らない　ネットいじめの真実」（ミネルヴァ書房）
「子どもの秘密がなくなる日～プロフ中毒ケータイ天国」（主婦の友社）

＜論文＞
「性的有害情報に関する実証的研究の系譜：従来メディアからネットまで」
（情報通信学会誌 30 (2)）

○渡辺真由子公式サイト　　http://www.mayumedia.com/



コーディネーター

横田　洋三（よこた　ようぞう）

法務省特別顧問
国際労働機関（ILO）条約勧告適用専門家委員会委員
公益財団法人人権教育啓発推進センター理事長
元・国連人権促進保護小委員会委員

1969年　国際基督教大学教養学部専任講師
1971年　国際基督教大学教養学部助教授
1974年　世界銀行法務部法律顧問
1979年　国際基督教大学教養学部教授
1983年　アデレード大学客員教授
1984年　コロンビア大学客員教授
1988年　国連差別防止及び少数者保護小委員会代理委員
1991年　国連人権委員会ミャンマー担当特別報告者（1996年まで）
1995年　東京大学法学部・大学院法学政治学研究科教授
2000年　国連人権促進保護小委員会委員
2001年　中央大学法学部教授、国連大学学長特別顧問
2003年　ILO条約勧告適用専門家委員会委員
2004年　中央大学法科大学院教授
2006年　財団法人人権教育啓発推進センター理事長
2010年　ILO条約勧告適用専門家委員会委員長（2013年6月まで、同年7月からは委員）
2012年　公益財団法人人権教育啓発推進センター理事長

◆主な担当分野　国際法、国際機構論、国際人権法、国際経済法

◆研究テーマ　国際経済法と国際公共政策、国際機構法の体系的研究、国際人権法の強行法規性

【主な著書】
「歴史はいかに書かれるべきか」（翻訳）（講談社学術文庫）
「二〇世紀と国際機構」（国際関係基礎研究所）
「日本の国際法事例研究（1）～（5）」（共著）（慶應義塾大学出版会）
「新版国際機構論」（共著）（国際書院）
「国連再生のシナリオ」（共訳）（国際書院）
「国連の可能性と限界」（共訳）（国際書院）
「国際法入門」（共著）（有斐閣）
「国際組織法」（共著）（有斐閣）
「国際機構の法構造」（国際書院）
「日本の人権／世界の人権」（不磨書房）　ほか

第２部
講演（トークショー）「インターネットが授けてくれた 10 の大切なこと」



古新　舜（こにい　しゅん）

コスモボックス株式会社代表取締役社長CEO
映画監督

23歳から映画の業界に入り、埼玉県川口市SKIP CITYにてハイビジョンの映画制作手法を先駆的に習得する。

大学院時代に初監督した短編映画「サクラ、アンブレラ」がTSSショートムービーフェスティバルIV「グランプリ」、おくりびとの脚本家・小山薫堂氏が審査員を務める山形国際ムービーフェスティバル2008「準グランプリ（部門最高賞）」と「船越英一郎賞（最優秀俳優賞）」W受賞の他、多数の映画祭で受賞される。

短編2作目「ほわいと。ポーズ」にて米国アカデミー賞公認短編映画祭ショートショートフィルムフェスティバル&アジア／ジャパン部門二年連続の入選を果たす。

3作目「koganeyuki」では、NHK朝の連続テレビ小説「ウェルかめ」ヒロインの倉科カナを短編初主演に起用、JPPAアワードゴールド賞受賞。

4作目「わかれもの」で笹塚フィルムフェスティバル「奨励賞」を受賞。

最新短編作「えんがわ」は、プエルトリコ映画祭2012、台湾高雄映画祭2012入選と、過去の作品でのべ20以上の映画祭で受賞／入賞を果たしている。

コスモボックス株式会社の代表を務めると共に、専門職大学院、デジタルハリウッド大学大学院にてソーシャルメディアと映画を組み合わせた実践的な研究を行っている。

東日本大震災以降、福島県相馬市、南相馬市を度々訪れ、伝統行事「相馬野馬追」の記録撮影、上映活動を行っている。現在、“捨てられる命0を目指して”をテーマに掲げた劇場用映画「ノー・ヴォイス」の公開を2013年秋に控えている。

◯コスモボックス株式会社　　http://cosmobox.jp/
◯映画「ノー・ヴォイス」ホームページ　　http://no-voice.com/
◯ひきこもり卒・映画監督ブログ　　http://coneyshun.blogspot.jp/

東京会場

レジュメ



レジュメ　安　川　雅　史

全国 web カウンセリング協議会　安川 雅史

LINE について

LINE とは？

LINE（ライン）とは、携帯電話（スマートフォン・フィーチャーフォン）・パソコン向けのインターネット電話やテキストによるチャットなどのリアルタイムのコミュニケーションを行うためのアプリである。SNS、無料通話、ゲーム、チャットの機能があります。

LINE の特徴

スマートフォンを利用している場合はケータイ会社に関係なく無料通話が出来ます。パケット通信を利用したインターネット電話なのでパケット通信定額制に加入していれば無料で利用でき、最大 100 名までのグループでの通話が出来ます。友達とのトークの他にも、クラブ活動などにも利用出来ます。

LINE の使い方

トークしたい友達を選んで、一人なら 1 対 1 チャット、複数選べばグループチャットとなり、入力するボックスにメッセージを書いて送信すればメッセージを送ることができます。

LINE のスタンプ機能

LINE スタンプとは、テキストメッセージに挿入可能となっているイラストです。テキストメッセージにスタンプを加えることで、文字では表現しずらい気持ちを伝えることができます。

LINE の友達登録

フェイスブックのように専用ページに知り合いかもという項目が表示されます。その中に知り合いの可能性がある人、全く知らない人が表示されますので、申請することにより友達登録されます。通常は電話番号で検索されますので、知り合いの電話番号を検索してヒットすれば LINE 友達になります。スマートフォンのアドレス帳をアップロードして自動的に追加または招待することができます。QR コードからの追加、iPhone どうしを振り合って追加、ID 検索で追加する方法などがあります。

LINE で知らない人とやり取り出来る理由

LINE を使用する際には電話番号登録が必要となります。登録後、電話帳を送信した場合、自動的に LINE を利用している友人が登録されすぐにチャットやトークが利用できるようになります。しかし、これには「携帯電話番号の割り当て」が問題となります。現在、携帯番号不足で解約した携帯番号を約半年から 1 年で新規契約者に割り当てられています。

全国 web カウンセリング協議会　安川 雅史

このサイクルの速さが元で、以前使っていたユーザーの知り合い、友達、法人などから電話がかかってくるということが頻発し、消費者金融などから、とり立ての電話が子どもに持たしたケータイにかかってくるなど事例も発生しています。

LINEGAME

LINE POP、LINE まちがい探し、LINE ウィンドランナーなどに代表される LINE GAME は無料で遊べるため、世界累計で億のダウンロードを突破しています。また、LINE で繋がっている友だちといつでもゲームが楽しめますので、一緒に競ったり、闘ったりすることが無料で出来ます。

LINE が普及したのはいつ？

LINE は 2011 年 6 月のサービス開始から約 1 年程度で 5,000 万を超える会員数を獲得し 2013 年 1 月 18 日には、ユーザー数が 1 億人を突破したと発表されている。

LINE の日本の利用者数は？

LINE の日本での利用者数は、2013 年 1 月 18 日時点で、4151 万 1931 人と発表されている。

LINE コミュニティーで出会い

友達登録やチャット、掲示板などの機能が備えられているため、出会いに利用している人がいます。しかし、LINE を出会い系として使用するのは危険であり規約違反です。性的な書き込みや、荒しなどの悪質行為はアカウント削除となります。
非公式の LINE 掲示板がネット上に多数存在しております。それらの掲示板は公式ではありませんので、様々な悪質行為が行われているので注意が必要です。

なぜ LINE は広まったのか？

LINE の普及背景には、背景には登録の簡単さと、電話番号を登録するだけという単純性に加え、1 対 1 という閉じられた間でコミュニケーションができることから、facebook のようなオープンな SNS になじめないユーザーの心もとらえたことなども大きな要因といわれている。

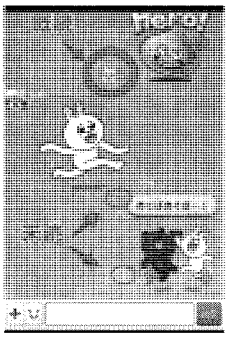
LINE はなぜ無料で利用出来るの？

LINE は、LINE ゲームというブランドネームで自社提供ゲームを供給したり、占いなどの自社提供アプリを提供したり、「スタンプ」の販売など、ユーザー課金を行い、さらには広告収益等を得ることにより、基本サービスを無料で提供している。

全国 web カウンセリング協議会　安川 雅史

LINE 依存はなぜ起こるのか？

LINE などの SNS は、スマートフォンが普及するにつれて、依存する傾向が益々高くなりました。特に LINE に依存する理由の大きな原因が【既読表示】と言われています。



自分が相手からのメッセージを読むと相手のスマートフォンに【既読】の文字が表示されるのが LINE の大きな特徴です。これによりすぐ返信をしないと読んだからには返事をしないといけないという心理が働くのです。

LINE のトラブル事例

- 2012 年 4 月 奈良市の会社員の男（32）が LINE を通じて知り合った中学 3 年の女子生徒(14)にみだらな行為をして滋賀県青少年健全育成条例違反容疑で逮捕された。
- 2012 年 7 月 「LINE」を通じて知り合った少女（17）に睡眠薬を飲ませて乱暴したとして準強姦（ごうかん）容疑で滋賀県湖南市の無職の男（32）が逮捕された。男は別の女子高生（16）にも同様の手口で乱暴していた。
- 2012 年 8 月 大阪府警柏原署地域課巡査（24）が、「LINE」を通じて知り合った高校 2 年の女子生徒（16）とホテルで淫らな行為をしたとして、県青少年愛護条例違反の疑いで逮捕された。
- 2012 年 11 月　男子大学生（22）から美人局（つつもたせ）の手法で現金を脅し取ったとして、無職少年（16）と女子高校生（16）が恐喝容疑で逮捕された。また別の無職少年（17）と女子中学生（14）が書類送検された。「LINE」の ID を教え合って会う約束をした女子高校生と男子大学生がラブホテルに行ったところ、駐車場に無職少年たちが待ち伏せをしており、現金 3600 円とキャッシュカードを男子大学生から奪った。
- 2013 年 1 月 「LINE」で知り合った 14～16 歳の少女と性的関係を持ったとして会社員の男 3 人が児童買春・児童ポルノ禁止法違反（児童買春）などの疑いで逮捕された。
- 2013 年 2 月　神奈川県寒川町の公立中学校の男子生徒が 1 月 30 日に小学生の男児を平手打ちする動画 iPad で撮影し、「LINE」に投稿。友人ら約 40 人に送信していたことが分かった。男子生徒と動画が閲覧できた約 40 人の生徒は退会させられた。
- 2013 年 2 月「LINE」を通じて男性会社員（27）から現金を脅し取ったとして、恐喝の疑いで無職少年（17）が逮捕された。「おれの女とチャットしたやろ。慰謝料を払え」と会社員に因縁をつけ、1 月中旬に 2 回にわたって計 15 万円を脅し取った疑い。
- 2013 年 3 月 「LINE」のチャットで女性を装い、知り合った男性から現金を詐取したとして、愛知県警は詐欺の疑いで住所不定の無職少年（19）を逮捕した。同様の手法で 7 人から計約 200 万円を詐取したと少年は説明している。
- 2013 年 3 月「LINE」で知り合った当時 15 歳の女子高生に佐賀市内のホテルでみだ

全国 web カウンセリング協議会　安川 雅史

らな行為をした疑いで、長崎県の会社員の男（32）が逮捕された。

- 2013 年 3 月　埼玉県東部の県立高校で 2 年生 322 人分の成績などの個人情報を含む資料が生徒の携帯電話で撮影され、「LINE」などで流出した
- 2013 年 3 月　「LINE」で知り合った中学校 3 年の女子生徒(15)に 2 万円を渡し、相模原市南区のホテルでみだらな行為をした疑いで学習塾講師(28)が逮捕された。
- 2013 年 4 月　「LINE」で知り合った無職男性(21)から美人局の手口で現金を脅し取ったとして、富山県東部在住の 14～16 歳の少年少女の計 4 人が恐喝容疑で逮捕された。4 人は同様の手口で 10 件ほど恐喝を重ねたと供述している。
- 2013 年 4 月　「LINE」で知り合った当時小学 6 年生の女児(12)にピアスの穴開け器具と消毒液（計２０４０円相当）を渡し、みだらな行為をしたとして会社員(26)が逮捕された。

LINE を利用する上での注意点

・アドレス帳は絶対に送信しない

LINE をスマートフォンにインストールすると、まず電話番号の認証による登録が必要となることに加え、アドレス帳の情報を利用するかどうかを尋ねられる。

アドレス帳の情報を LINE のサーバーに送信すると、アドレス帳に登録されている人（電話番号）のうち LINE を利用している相手をサーバーが見つけ出す。その結果が LINE の「友だちリスト」として自動でまとめられ、すぐにトークや通話などでやりとりができるようになる。

たとえば、ユーザーの A さんが送信した自分の電話番号と、A さんの知り合いである B さんが送った A さんの電話番号は、同じ文字列となる。LINE ではこのデータを使って、「友だち」同士であるということを割り出している。

この「友だちの自動追加」機能を利用するか否かは必須でなく任意であり、登録時に利用しないことも選択できる。

LINE でなぜ知らない人とやり取り出来るのか？

LINE を使用する際には電話番号登録が必要となります。登録後、電話帳を送信した場合、自動的に LINE を利用している友人が登録されすぐにチャットやトークが利用できるようになります。しかし、これには「携帯電話番号の割り当て」が問題となります。現在、携帯番号不足で解約した携帯番号を約半年から 1 年で新規契約者に割り当てられています。このサイクルの速さが元で、以前使っていたユーザーの知り合い、友達、法人などから電話がかかってくるということが頻発し、消費者金融などから、とり立ての電話が子どもに持たした携帯にかかってくるなど事例も発生しています。

LINE いじめ

LINE は電話番号を知っている人たちだけがつながって無料でやりとりするアプリです。世界で 2 億人、日本でも 4500 万人が登録しています。最近では、LINE によるいじめが頻繁に起こっています。LINE には、メンバーを強制退会させる機能がありますが、グループ

全国 web カウンセリング協議会　安川 雅史

メンバーを強制退会させて仲間はずれにするなどのいじめも横行しています。LINE でブロックされたりグループに入れてもらえないといういじめもあります。既読なのに返信がこないので学校でも無視されたり、嫌がらせを受けるなどのいじめの相談もあります。スマートフォンを持っていなくて、LINE 仲間に入れず、現実でも外しにあったり、LINE で既読無視だと、いじめにあったり、既読がつかなくてもおかしいと言われたり、強制退会させられたり、自分を外した別な LINE グループを他に作られたり LINE に疲れたと言う声もよく聞きます。LINE_ID を出会い系掲示板に書かれ、知らない人からメッセージが多数届いて困っているという相談もあります。また LINE を始めてからどこで止めていいかわからず、自由な時間が作れない、勉強に集中出来ない、睡眠不足に
なったという中高生も多いです。
また、LINE がらみのトラブルも多発しています。
LINE アカウントの漏えい、友人・知人に個人情報を知られた、友人・知人に個人情報を広められた、自分の友人や知人の個人情報を抜き取られた、ネットストーカーにあった、知り合いかも表示で友達になり詐欺に巻き込まれた、Facebook を荒らされた、社内で利用していて情報が漏れた、安易な書き込みにより刑事事件に発展してしまった。

LINE を安全に使うために

●電話帳の自動登録を行わない
●知り合いかも表示を「しない」に設定する
●友だち自動追加設定を「オフ」にする
　※「友だちの自動追加」機能を利用するか否かは必須でなく任意で、
　　登録時に利用しないことも選択できる。
●友だちへの追加設定の許可を「オフ」にする
●ID の検索を許可設定を「オフ」にする
●メッセージ通知の内容表示設定を「オフ」にする
●タイムラインを新しい友だちに自動公開する設定をオフにする
●メールアドレスなど個人情報を記載しない
●信用できる友人ごとに公開設定を行う
●メッセージブロック・友達ブロックを有効に使う
●非公式 LINE アプリ・掲示板は利用しない
●迷惑行為を受けたら通報する
●LINE アプリは最新状態を保つ
●非公式 LINE アプリ・掲示板は利用しない
●出会い目的での利用は行わない
●LINE に設定した個人情報がどのように使われるかわからないので、初めて利用するときには、ケータイ電話番号の承認ではなく、Facebook アカウントでの承認がよい

レジュメ

吉　川　誠　司

人権シンポジウムin東京

インターネット上の人権侵害の現状と課題

2013年10月20日

WEB110.COM
吉川誠司

配布資料につき、事例の画像等は省略しています

直接的に人権侵害に繋がる違法・有害情報

- プライバシー侵害
- 肖像権侵害
- 名誉毀損
- 脅迫・嫌がらせ

直接的に人権侵害に繋がる違法・有害情報

無許可の撮影による肖像権、プライバシー件の侵害と名誉毀損

事例

無許可の撮影-LV.1
　グーグルストリートビューによる無許可の撮影
無許可の撮影-LV.2
　街行く少女を性的嗜好で盗み撮り
無許可の撮影-LV.3
　トイレ、脱衣場等における盗撮

要因

●カメラの小型高性能化
●画像掲示板や動画配信サイトの存在

直接的に人権侵害に繋がる違法・有害情報

加害者情報の暴露による名誉毀損

事例

いじめ自殺の加害者情報を動画配信サイトで公開

要因

●匿名報道により加害者への好奇心が増幅
●被害者より加害者の人権が重視されていると感じることでの反感
●加害関係者の処罰が軽い事に対する義憤

直接的に人権侵害に繋がる違法・有害情報

いじめや虐待動画の公開による名誉毀損

事例

●いじめの様子を撮影して動画配信サイトで公開
●幼児虐待の様子を撮影して動画配信サイトで公開

要因

●カメラ付き携帯の普及
●動画配信サイトの存在
●SNSの普及
により、これまで秘匿されていた行為が顕在化した

直接的に人権侵害に繋がる違法・有害情報

流出画像の転載による名誉毀損

事例

●暴露ウィルス感染により流出した素人のわいせつ画像が広範囲に拡散
●被害者の個人情報を収集して隣人、職場などに告げて回る集団ストーカー行為

要因

●デジカメの普及
●ファイル交換ソフトの利用
●SNSの普及により個人の特定が容易化

直接的に人権侵害に繋がる違法・有害情報

なりすましによる名誉毀損

事例

●ツイッターで他人なりすまして、その人の人格が疑われるようなツイートをする
●他人になりすましてFacebookアカウントを作り、勝手に個人情報を公開する

要因

●外国企業によるSNSの普及

直接的に人権侵害に繋がる違法・有害情報

実名報道が残す爪痕

事例

●不起訴となった後もネット上に転載されたままになっている実名報道記事
●罪を償った後もネット上に転載されたままの実名報道記事

社会復帰の妨げとなる

実名報道がネットに落とす爪痕

問題提起①

●「逮捕＝犯人」とみなすかのような**心証報道**は、裁判の結果を待たず報道が実質的な刑を宣告することに等しい（ペーパートライアル）。
●不起訴や無罪判決を記事にしても全読者が読むわけでなく、回復は**不完全**なものでしかない。



➢「**無罪推定の原則**」は、メディアにおいても強く意識すべき。
➢実名報道の時期は、「逮捕時」から「**起訴時・判決時**」へと後ろへずらすことが望ましい。

実名報道がネットに落とす爪痕

問題提起②

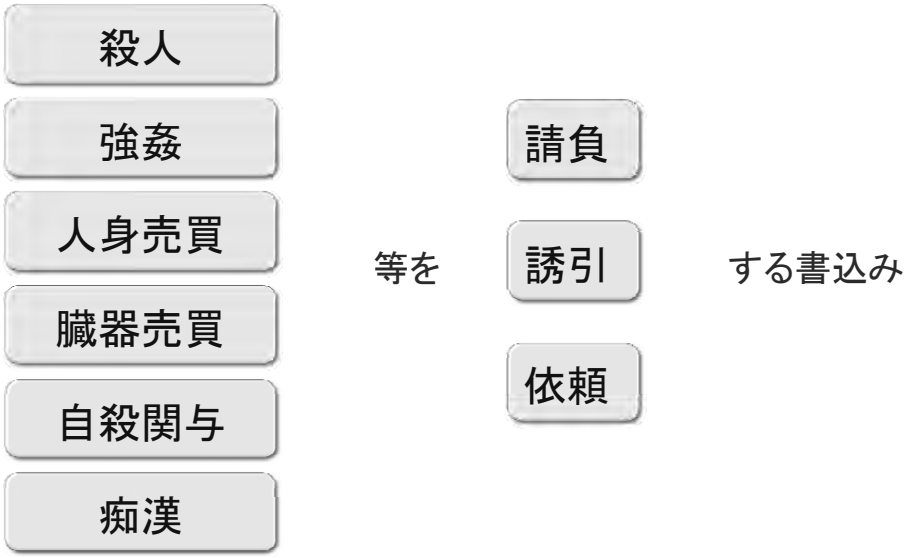
実名報道の**必要性と有益性に疑問**

●実名でなければ事件の内容や本質が伝わらないのか
●実名報道された被害者・加害者の、将来の生活への影響は測り知れない



➢ネット上に転載されたまま放置される記事が膨大にあることを考慮すれば、はじめから**原則匿名報道にすべき**ではないか。

間接的に人権侵害に繋がる違法・有害情報



ネットを使った人権侵害の特徴と問題点

●地理的・時間的制約がない

- 昼夜を問わずどこからでも嫌がらせが可能（深夜に布団の中からでも）
- 瞬時に広範囲に害悪を及ぼすことができる
- 全く面識のない相手から標的にされる可能性がある

攻撃者には**効率的**かつ**経済的**。**被害者**はその**逆**

ネットを使った人権侵害の特徴と問題点

●匿名性

- 誰が敵で誰が味方か分からない
- なりすましも容易
- 身近な人も信じられなくなる



対抗言論や**話し合い**による解決が**困難**

ネットを使った人権侵害の特徴と問題点

●被害回復が困難

- 一旦流出した情報を完全に消すことは不可能
- 一旦損なわれた名誉を回復することは困難

●法律の適用範囲の限界

- 国家主権の縛り
- プロバイダ責任制限法の適用範囲
- 犯罪を請負っているだけでは取り締まりが困難

ネットを使った人権侵害の特徴と問題点

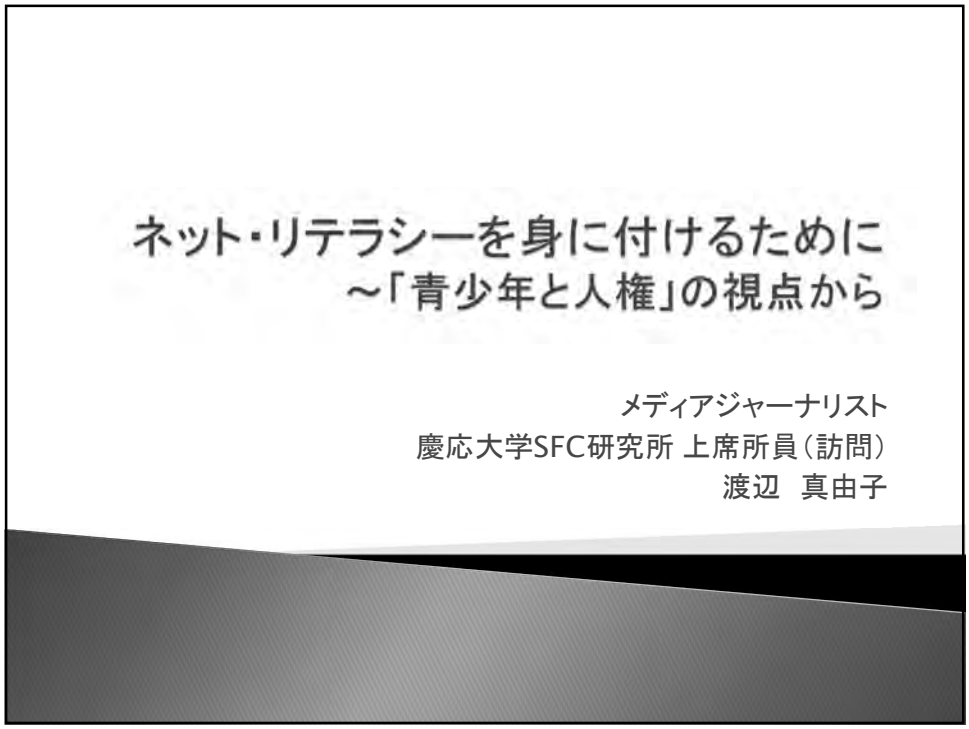
●管理人の規範意識に左右される

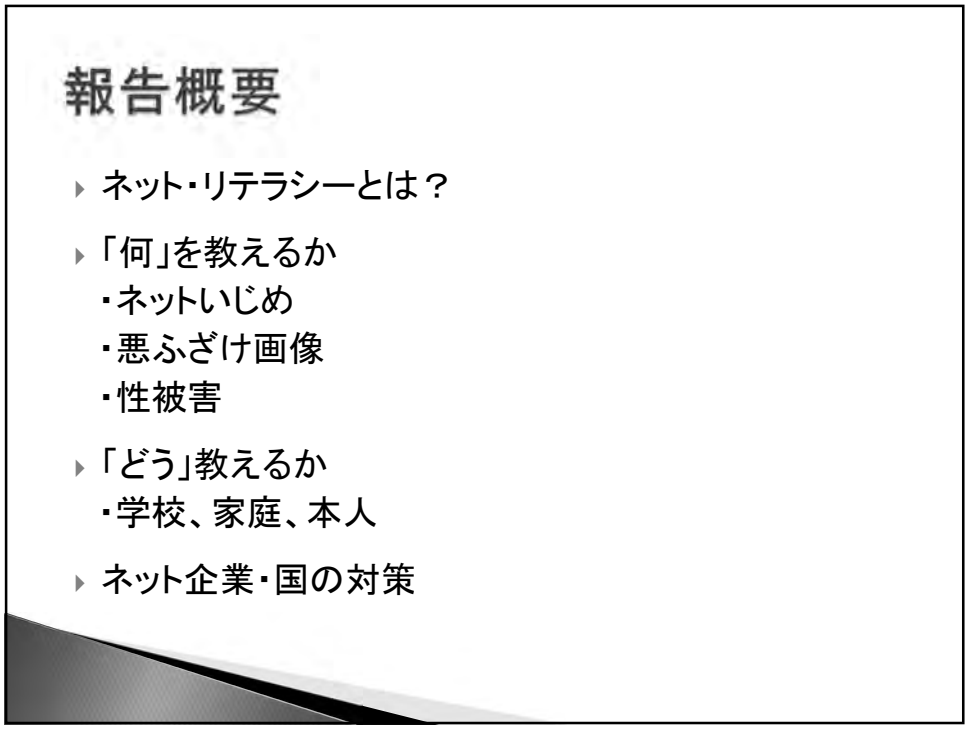
- 削除依頼に応じない掲示板管理人
- 判決による削除命令も効果なし
- 損害賠償請求も効果なし

被害者が**泣き寝入り**せざるを得ない場合が少なくない

レジュメ

渡　辺　真由子


ネット・リテラシーを身に付けるために
～「青少年と人権」の視点から
メディアジャーナリスト
慶応大学SFC研究所 上席所員（訪問）
渡辺　真由子


報告概要
ネット・リテラシーとは？
「何」を教えるか
・ネットいじめ
・悪ふざけ画像
・性被害
「どう」教えるか
・学校、家庭、本人
ネット企業・国の対策

ネット・リテラシーとは？

- ネット・リテラシー：
  ・インターネットが持つ特質を理解する
  ・ネット情報の善悪・真偽を判断する（受信）
  ・効果的なコミュニケーションに活用する（発信）
- 海外のネット・リテラシー教育
- 国内のネット・リテラシー教育

何を教えるか：「ネットいじめ」のリテラシー

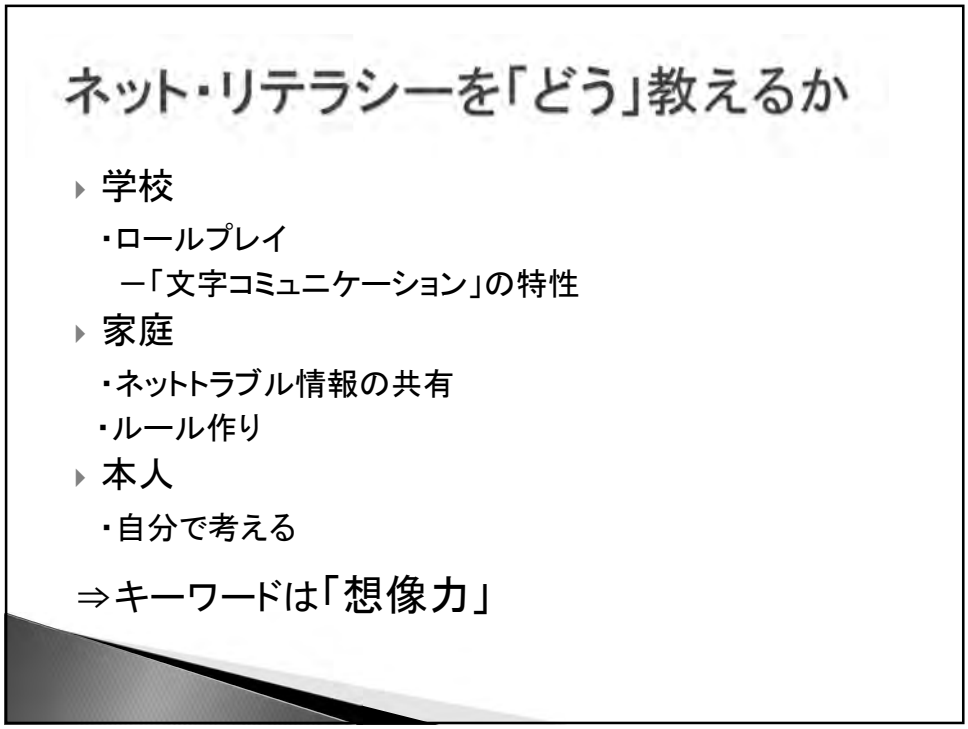
- 発信
  ・匿名ではない！
  ・保存性と拡散性
  ・犯罪可能性
- 受信
  ・証拠保存→相談
  ・「お互い尊重」のルール決め

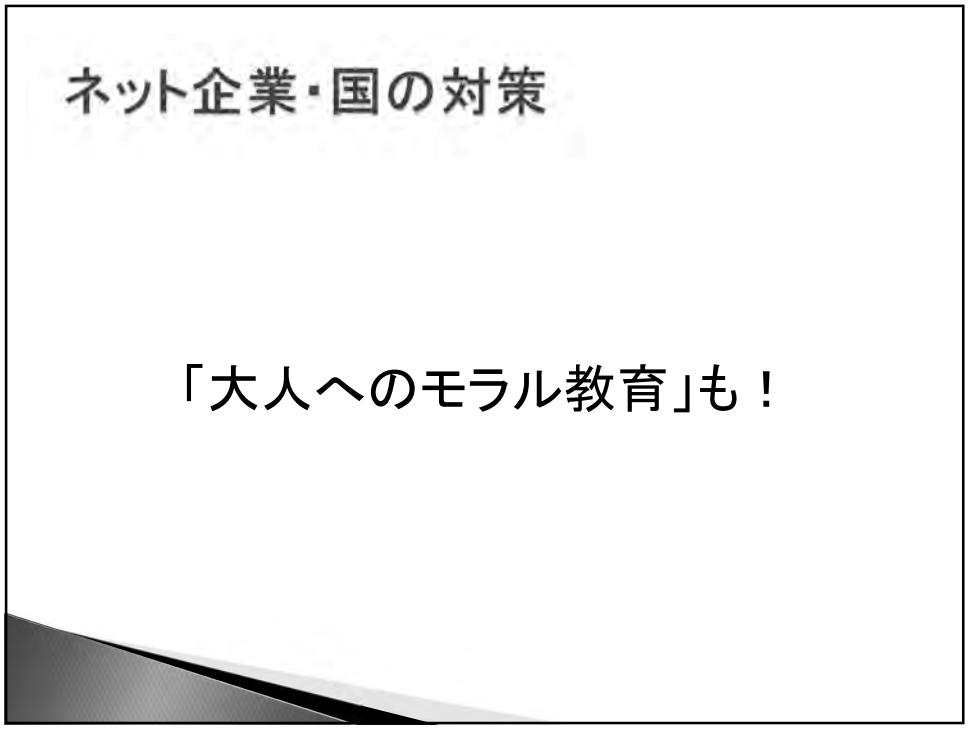
何を教えるか：
「悪ふざけ画像」のリテラシー

- 発信
  - ・世界中に公開！
  - ・集団心理の罠
- 受信
  - ・煽らない
  - ・拡散していいのか？

何を教えるか：
「性被害」のリテラシー

- 発信
  - ・個人情報は簡単に特定可能
  - ・「性的画像」を送るとどうなる？
- 受信
  - ・その年齢、性別、職業は本当？
  - ・子どもを狙う大人の手法


ネット・リテラシーを「どう」教えるか
学校
・ロールプレイ
ー「文字コミュニケーション」の特性
家庭
・ネットトラブル情報の共有
・ルール作り
本人
・自分で考える
⇒キーワードは「想像力」


ネット企業・国の対策
「大人へのモラル教育」も！

レジュメ　古新　舜

インターネットが授けてくれた
１０の大切なこと

古新　舜

自己紹介



古新　舜（こにい　しゅん）
映画監督/コスモボックス株式会社代表取締役

２３歳から映画の業界に入り、埼玉県川口市SKIP CITYにてハイビジョンの映画制作手法を先駆的に習得する。

大学院時代に初監督した短編映画「サクラ、アンブレラ」がTSSショートムービーフェスティバルIV「グランプリ」、おくりびとの脚本家・小山薫堂氏が審査員を務める山形国際ムービーフェスティバル2008「準グランプリ（部門最高賞）」と「船越英一郎賞（最優秀俳優賞）」 W受賞の他、多数の映画祭で受賞される。短編２作目「ほわいと。ポーズ」にて米国アカデミー賞公認短編映画祭ショートショートフィルムフェスティバル＆アジア／ジャパン部門二年連続の入選を果たす。３作目「koganeyuki」では、NHK朝の連続テレビ小説「ウェルかめ」ヒロインの倉科カナを短編初主演に起用、JPPAアワードゴールド賞受賞。４作目「わかれもの」は笹塚フィルムフェスティバル「奨励賞」を受賞。

最新短編作品「えんがわ」がプエルトリコ映画祭2012入選、台湾高雄映画祭2012入選、ショートピース！仙台短篇映画祭「新しい才能」部門入選と、過去の作品でのべ２０以上の映画祭で受賞／入賞を果たしている。

コスモボックス株式会社の代表を務めると共に、専門職大学院・デジタルハリウッド大学大学院にてデジタル技術やソーシャルメディアの理論を駆使した実践的な映画製作を研究している。

東日本大震災以降、福島県相馬市、南相馬市に頻繁に訪れ、伝統行事「相馬野馬追」の様子を撮影し、上映・配信する活動を行っている。

１１月に公開を控えた〜捨てられる命０を目指して〜がテーマの劇場用映画「ノー・ヴォイス」は長編初監督作品。 http://no-voice.com/

インターネットからの授かり物１０

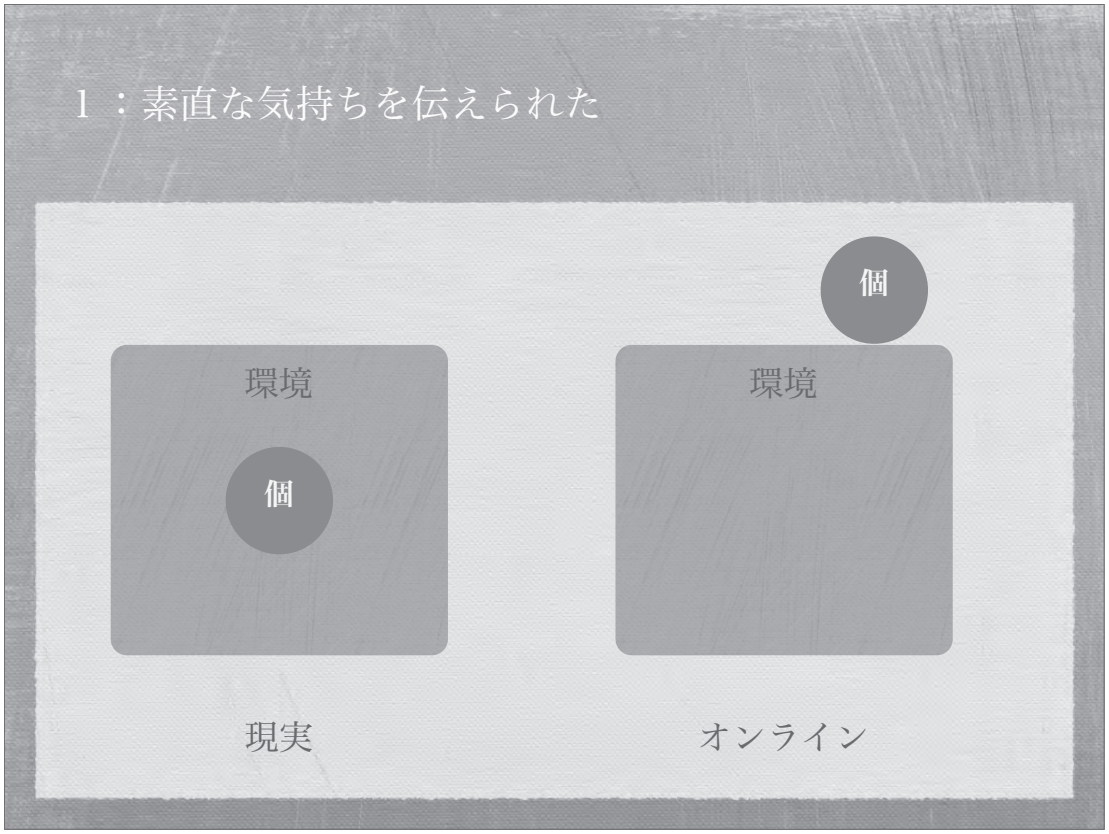
- １：素直な気持ちを伝えられた
- ２：世代や場所を越えた仲間を見つけられた
- ３：自分のことを知ってもらえた
- ４：学校では教わらない知識を学べた
- ５：インターネットでしか出来ない出会いと別れ
- ６：小さい頃からやりたかった夢の気付き
- ７：他者を知ること、自分を知ること
- ８：学校で見つけられなかった仕事の選択
- ９：踏み出す勇気
- １０：コミュニケーションの可能性

2000年当時遊んでいたチャット

ポストペットのアイコンが付けられる可愛いチャットでした

※当時のものがないので、近しいチャットを引用しております




1：素直な気持ちを伝えられた
個
環境
個
環境
現実
オンライン


2：世代や場所を越えた仲間を見つけられた
個
個
個
個
個
個
個
個
個
個
個
個
個
個

３：自分のことを知ってもらえた

趣味は？　好きな教科は？　出身は？

問いかけてくれることが何より嬉しかった

４：学校では教わらない知識を学べた

html,css,cgi……インターネットの構造の世界

```
<div id="headWrapper">

    <div id="headContainer">

        <div id="headerTop">

            <div id="logoArea" class="boxL">
                <h1 id="headerLogo"><a href="./"><img src="images/header/logo.gif" alt="コスモボックス株式会社" border="0" height="110" width="90" /></a></h1>
            </div>

        <div id="headerSub" class="boxL">
                <h2>あなたの魅力をストーリーで映し出す映像制作会社</h2>
        <div id="companyNameArea"><img src="images/header/companyName.gif" alt="コスモボックス株式会社" border="0" /></div>
            </div>

        <div class="boxC"></div><!--//contents clear  (if finish constraction, please comment out!)  -->

        </div><!--//headerTop end-->

        <div id="mainNavigationTop">

            <ul id="mainNavi">
                <li class="naviO1"><a href="./concept.html"><img src="images/mainnavi/conceptBtn.gif" height="40" width="161" alt="経営理念[CONCEPT]" border="0" class="naviBtn" /></a></li>
                <li class="naviO2"><a href="http://cosmobox.jp/portfolio/" target="_blank"><img src="images/mainnavi/worksBtn.gif" height="40" width="161" alt="事業紹介[WORKS]" border="0" class="naviBtn"
/></a></li>
                <li class="naviO3"><a href="./outline.html"><img src="images/mainnavi/companyBtn.gif" height="40" width="161" alt="会社概要[COMPANY]" border="0" class="naviBtn" /></a></li>
                <li class="naviO4"><a href="./information.html"><img src="images/mainnavi/newsBtn.gif" height="40" width="163" alt="ニュースリリース[NEWS RELEASE]" border="0" class="naviBtn" /></a></li>
                <li class="naviO5"><a href="./staff.html"><img src="images/mainnavi/recruitBtn.gif" height="40" width="160" alt="スタッフ募集[RECRUIT]" border="0" class="naviBtn" /></a></li>
                <li class="naviO6"><a href="./contact.html"><img src="images/mainnavi/contactBtn.gif" alt="お問い合わせ[CONTACT]" height="40" width="164" border="0" class="naviBtn" /></a></li>
            </ul>

        </div><!--//mainNavigationTop end-->

    <div class="boxC"></div><!--//contents clear  (if finish constraction, please comment out!)  -->

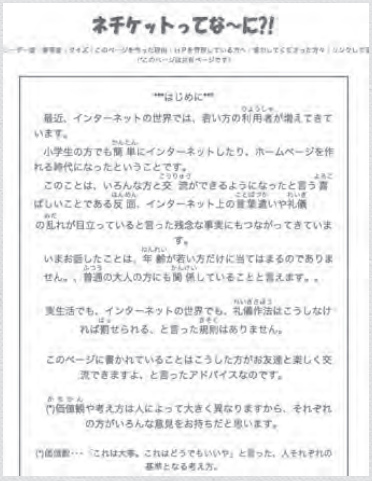
    </div><!--//headContainer end-->
```

5：インターネットでしか出来ない出会いと別れ

初めて出来た学校の先輩と
「初めまして」を棺の中で。

6：小さい頃からやりたかった夢の気付き

「ネチケットってな〜に?!」
小学生でも読めるよう、ルビを振り分かりやすく説明することで、教育機関や
個人サイトなどで多数引用されました。



ネチケットってな〜に?!

はじめに

最近、インターネットの世界では、若い方の利用者が増えてきています。

小学生の方でも簡単にインターネットしたり、ホームページを作れる時代になったということです。

このことは、いろんな方と交流ができるようになったと言う喜ばしいことである反面、インターネット上の言葉遣いや礼儀の乱れが目立っていると言った残念な事実にもつながってきています。

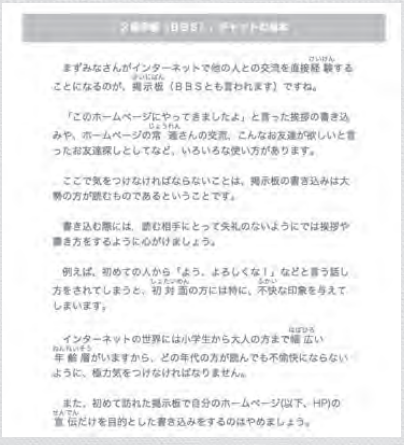
いまお話したことは、年齢が若い方だけに当てはまるのでありません。、普通の大人の方にも関係していることと言えます。。

実生活でも、インターネットの世界でも、礼儀作法はこうしなければ窮せられる、と言った規則はありません。

このページに書かれていることはこうした方がお友達と楽しく交流できますよ、と言ったアドバイスなのです。

(*)価値観や考え方は人によって大きく異なりますから、それぞれの方がいろんな意見をお持ちだと思います。

(*)価値観・・・「これは大事。これはどうでもいいや」と言った、人それぞれの基準となる考え方。



まずみなさんがインターネットで他の人との交流を直接経験することになるのが、掲示板（日ＢＳとも言われます）ですね。

「このホームページにやってきましたよ」と言った挨拶の書き込みや、ホームページの常連さんの交流、こんなお友達が欲しいと言ったお友達探しとしてなど、いろいろな使い方があります。

ここで気をつけなければならないことは、掲示板の書き込みは大勢の方が読むものであるということです。

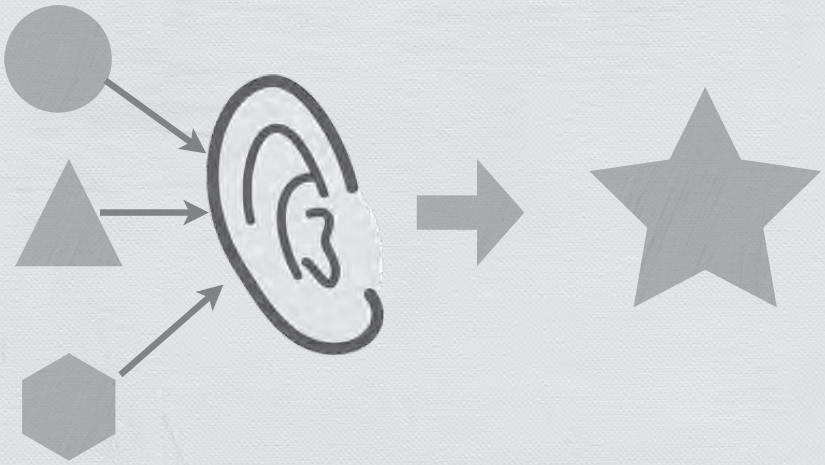
書き込む際には、読む相手にとって失礼のないようにでは挨拶や書き方をするように心がけましょう。

例えば、初めての人から「よう、よろしくな！」などと言う話し方をされてしまうと、初対面の方には特に、不快な印象を与えてしまいます。

インターネットの世界には小学生から大人の方まで幅広い年齢層がいますから、どの年代の方が読んでも不愉快にならないように、極力気をつけなければなりません。

また、初めて訪れた掲示板で自分のホームページ(以下、HP)の宣伝だけを目的とした書き込みをするのはやめましょう。

7：他者を知ること、自分を知ること



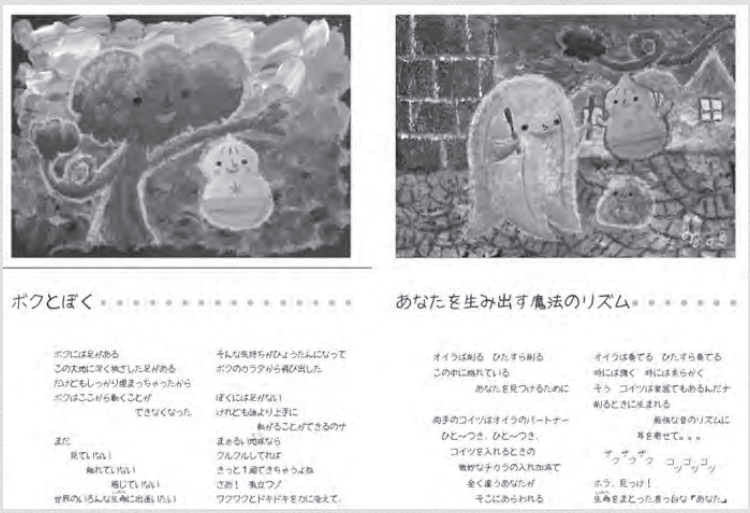
8：学校では見つけられなかった仕事の選択

身近な職業…学校の先生、父親の職業

ライター、デザイナー、建設労働者、
俳優、プログラマー、絵描き……

９：踏み出す勇気

「ホシのリズム」（絵：村田のりみちさん）



１０：コミュニケーションの可能性

オンラインの世界から映画の世界へ！
「やっぱり人が好き」







連絡先

コスモボックス株式会社

http://cosmobox.jp
03-6321-7368
info@cosmobox.jp

本日はご清聴誠にありがとうございました！

東京会場

内容紹介



第 1-1 部　パネリストによる基調報告

安川　雅史（全国 web カウンセリング協議会理事長）

【横田】

皆さんこんにちは。今日はお休みの日でしかも非常に天候の悪い中、このシンポジウムにお集まりいただきまして心より感謝申し上げます。私は進行役を務めさせていただきます公益財団法人人権教育啓発推進センターの理事長を務めております横田洋三と申します。今日は一人権の専門家というか、人権に関心のある一人として進行役を務めさせていただき、パネリストの皆さん、そして会場の皆さんと本日のテーマについて考えていきたいと思っております。

今日のシンポジウムのテーマは、「インターネットと人権～今、ネットで何が起きているのか～」でございます。最近、東京の三鷹で、女子高生が殺害されてしまうという残念な出来事[1]がございました。そこでネットが一定の悪しき役割を果たしてしまったという報道がありまして、そのこともこの後のパネリストの皆さんのお話の中で出てくるかもしれませんが、それだけではなくて、同じような、また関連する様々な問題がネットの世界の中で起こっています。ところで、ネットの中で、一体何がどういうふうになっているのかっていうことが、なかなか一般の人、それから私のような素人の場合には分からない部分も多いのです。しかし、大変重要な問題なので、このことについて私どももしっかり理解する必要があります。インターネットというのは決して悪いことばかりではなくて、むしろ私たちの生活をより良くするために役立っているところも数多くあります。人権を促進する上でも役立っているところがあります。先ほど主催者挨拶の中で人権擁護局長がおっしゃられましたように、今日のこのシンポジウムが終わった後に、この会場に来ることができなかった多くの方々にも、（動画共有サイト）YouTube（ユーチューブ）などを通じて、内容をお伝えすることができるようになってきております。

このように、ネットには人権にとって非常にプラスになる側面もあるのですが、その一方でいじめや犯罪、そしてプライバシーの侵害など、インターネットが人権にマイナスに作用する、そういう側面も出てきているように思います。本日はインターネットに関連する様々な分野で大変造詣が深く、また実際にいろいろな問題を通じて実践活動に関わっておられる3人のパネリストにお越しいただきました。

この3人の方に、お一人当たり約30分という短い時間ではありますが、それぞれの御専門の立場からお話を伺って、そのあと会場からの御質問や御意見を集めて質疑応答に移らせていただこうとこう思っておりますので、会場の皆さんも私たちと共に考えるということで御協力をお願いしたいと思います。

それでは最初の発題をしていただきます。安川雅史さん、よろしくお願いいたします。

【安川】

全国webカウンセリング協議会に寄せられるLINE（ライン）絡みの相談は、2013（平成25）年度は、2012（平成24）年度の10倍を超えました。

LINEとは、携帯電話（スマートフォン・フィーチャーフォン）・パソコン向けのインターネット電話やテキストによるチャットなどのリアルタイムのコミュニケーションを行うためのインスタントメッセンジャーのことです。無料で利用できるサービスが多いこともあり、日本だけではなく、世界中で3億人を超える利用者がいます。中高生をはじめ、幅広い年齢層にLINEを介して発生するいじめ

1　2013（平成 25）年 10 月 8 日、東京・三鷹で、かつての交際相手から女子高校生が刺殺された事件。三鷹女子高生ストーカー殺害事件。


安川雅史さん

や援助交際、恐喝などといった事件は2012（平成24）年頃から多発傾向にあります。

最近では、地下鉄や電車に乗っていると、小学生、中学生でもスマートフォンを持っていることに驚きます。また、LINEをやっている子も多数見掛けます。スマホ片手にLINEやゲームをやりながら御飯食べている子も多いようです。子ども部屋までスマホを持ち込んでLINEをやりながら勉強している子もいます。夜中の2時3時になってもずっとLINEをやっていて睡眠不足になる子も増えています。子どもたちから「LINE ってどこでやめればいいのですか？」といった相談も増えています。人の気持ちが分からなくなったら、このようなことやってしまうのです。親の気持ちが分からないからずっとLINEをやりながら御飯食べているのです。夜中までLINEをやって、お互いに成績を落とし合うのは、表面上だけ友達のふりをしている人がやることです。

深夜の2時3時までLINEをやっていて、学校では居眠りする子も増えています。先日、ある学校の保健室の先生に聞いた話です。「今、保健室が夜遅くまでLINEをやっている子の睡眠の場所になっている。本当に具合の悪い子が保健室を使えなくなっている。どうしたらいいですかね」なんてことを言っていました。これは明らかにおかしい状況です。親は、御飯の時でも「お母さん、毎日一生懸命御飯作るからちゃんとお互いに顔を見ながら御飯を食べよう」と言うべきです。「友達に言っておきなさい。うちの母親は鬼婆だと言っていいから、この時間はLINEできないから御飯食べ終わってからやろうよ」と。勉強の時も「本当に裕子はトモちゃんのこと大切に思っている、ユキちゃんのことも本当に大事。本当に大事だったらお互いに成績落とし合うようなことしないでしょ。夜中の2時3時までLINEやっていて学校で居眠りしているのは、友達とは言えないでしょ？友達のふりをしている人がやることでしょ。お母さんはあなたにちゃんとした友達を作ってもらいたい。友達だったらちゃんと言えば分かるはずよ。そんなことも言えない時点で、友達とは言えないよ」と、きちんとと言える親にならなくてはいけないのです。

では、LINEをやり始めると、なぜ子どもたちはハマるか。LINEを介したコミュニケーションは1対1でもできますけども、最高100人まで登録することができて、グループチャットで大人数でも同時にやり取りができてしまうのです。一人一人が書き込むメッセージは短文です。その書き込みを読んだら「既読」という文字が付いてしまいます。既読という文字が付いたのに返信しなかったら、『無視しているの？』っていうことになって、学校に行っても無視されてしまう。さらに短文で書き込まれたメッセージは、感情的にもなりやすいですね。人間は、顔を見合せて話をしていると、「ああ、こういう気持ちで言っているのだな」という細かなニュアンスが相手に伝わりますが、短文の場合は誤解を招きやすいと言えます。書き込んだ人は冗談のつもりでも、読む人によっては冗談だと受け止めない場合もあります。子どもたちに話を聞くと、授業中でもLINEをやっている子が結構いるとのことでした。携帯電話でメールを入力している場合は、先生たちは気付くようですが、スマートフォンを机の上において指で操作していても、先生から見たら勉強しているようにしか見えないようです。学校の先生方もみんな授業中静かだって言っています。それは、LINEに夢中になり話をする子が減っているからです。そのことを、LINEの中で注意した子がいました。「ねえ、みんな、授業中LINEやめようよ」と。そうしたら、「お前、うざいよ。むかつくんだよな。お前死ねよ」と一気にその子が誹謗中傷されてしまいました。注意した子は、その後、精神的に参ってしまって学校に行けなくなってしまいました。この子の言っていることが正論です。しかし、「授業中のLINEはやめようよ」とつぶやいたことが原因で、「お前死ねば」などと言われるようになってしまう。これは、面と向かって言葉で言われるよりもつらいです。文字として残ってしまうと、一斉にみんなの目にさらされてしまうのです。

夏休みの期間中に、このようなことがありました。海の家で短期のバイトをやっていた高校生の子がいたのですが、バイトに集中したいからスマートフォンを持たないで海の家に行ったのです。持って行ったらどうしてもそれにハマってしまうからということで、あえて持たないで行ったのです。バ

イトをしている期間中もほかの子たちは、みんなでいろいろとLINEでやり取りをしていて、「あいつ、一体どうしたんだ？あいつLINEに入ってこないよな」という話になりました。すると誰かが、「あいつ死んだんじゃないの？」なんてつぶやいたのです。そうすると、「ああ、あいつ死んだんだ。だから連絡来ないんだ。花でも添えておいてやろうか」なんてことになってしまいました。その後、バイトを終えたこの子が、海の家から帰ってきて、みんなに連絡を取ろうと思ったけども、みんなから一斉に無視をされてしまいました。学校に行くとその子の机だけが教室の外に出されていました。花瓶に入った白い花までが添えられていたのです。その子がクラスメイトに話し掛けても、みんな聞こえないふりをして無視したのです。この子は精神的に参ってしまって、すぐに私たちのところに相談に来ました。「これから先、僕はどうしたらいいんでしょうか」という相談でした。その子は、それ以降スマートフォンは怖くて持たなくなりました。スマートフォンを解約して普通の折り畳み式のケータイに変えてしまいました。

また、このようなケースもありました。LINEのグループで自分が発言すると、みんなから一斉に無視をされる。誰かが何か発言（書き込み）すると、そうだよね、そうだよねってリアクションがあるのに、その子が発言するとみんな一斉に無視して別の話題に変わってしまうのだそうです。そしていつの間にか学校でみんなと一緒に御飯を食べていても、どうも会話がかみ合わない。それは友達同士でその子だけを除外して、もう1つ別のLINEのグループを作っていてそこでみんなやり取りしていたのです。このように子どもたちの中でもLINEにハマってしまって、それによっていじめに遭っている子どももいるのです。既読という表示が出ているのに返信がなかったら、「私のことはどうでもいいと思っている……」と悪いほうに考え人間関係が悪くなってしまうケースも多いです。また、未読のままでも、「なんであいつは、未読のままなんだ」とイライラしてしまう子も多いようです。

全国の各地に講演活動等で訪れますが、学校によっては、「LINE禁止」なんて言っているような学校もあります。しかし、それでは、かえって問題が見えづらくなってしまいます。「LINE禁止」といくら言っても、子どもたちがLINEを素直にやめるわけがありません。そのような状況の中で、仮にいじめが発生したとしても、禁止されてしまっているがゆえに、学校の先生にも相談できない状況になってしまい、いじめがより陰湿化してしまいます。「お前、学校でLINEやるのは禁止しているだろう」と。「なんでLINEなんてやっているんだ。だからそういう目に遭うんだ」と怒られる。だから相談もできずに追い込まれていくのです。

関東の高校生のカップルがいました。この二人は互いの写真をやり取りしていたのですが、だんだんエスカレートしていって、キスをしている画像などもブログ[2]等にアップロードしていて、さらには裸の画像も送り合っていました。その後、そのカップル別れました。男の子は、当時付き合っていた女の子の裸の画像や局部のアップの画像をクラスの男の子のLINE仲間にみんなに回してしまったのです。LINEで画像が回ってしまうと対応が本当に難しいです。ネット上にアップされたものであれば、管理者に削除依頼を送れるかもしれませんが、LINEは閉じられた空間です。学校関係者もどうしようもないと言います。一人一人のスマートフォンを取り上げて、「お前、画像を削除したのか」なんて問いただすことはできないと。プライバシーの問題もありますからね。本人が削除したと言ったらそれを信じるしかないと。学校側ももうお手上げ状態だと言っていました。

また、スマートフォンを買い与えた親に、「スマートフォンを使いこなせているのですか？」と尋ねてみました。すると、親は「スマートフォンとか、私、そういうの分からないから、使いこなすのは無理、私はこれで十分」などと言って普通のケータイ使っているのです。スマートフォンは、小型のパソコンであって、もう単なる携帯電話ではないのです。もしも、包丁を使いたいって子どもが言ってきたら、「自由に使いなさい」なんて渡すような親はいませんよね。「包丁は使い方によってはとても危険だからこういうふうに使うのよ」とか、「お母さんもそれほど上手くないけど、一緒に勉強していこう

2　インターネット上に覚え書きや論評などを加え記録（log）しているウェブサイトの一種。もともとは「Web を Log する」という意味で Weblog（ウェブログ）と名付けられ、それが略されて Blog（ブログ）と呼ばれるようになった。

よ」と言って、使い方を教えますよね。包丁を子どもと一緒に使って、「リンゴはこうやってむくのよ」なんて言って包丁を渡すのは分かりますよ。親がLINEやスマートフォンの扱い方を理解もせずに子どもに使わせることは、「お母さん包丁ってあんまり使ったことないけど、あんたこれ自由に使いなさい」と言って刃物を渡すのと同じことです。親であれば自分の子どものやることに責任持たなくてはいけません。子どもたちが引き起こすトラブルは、放置しておくとどんどん大きくなり取り返しがつかない状況までいってしまいます。親としてやるべきことをやっていけば、人の気持ちが分かる子どもに育っていきます。 LINEをやりながら御飯食べている子どもは、人の気持ちが分からない子どもに育ってしまったということです。勉強するときもお互いに邪魔しながらずっと成績を落とし合う、そんな子どもに育てちゃいけません。親としてやるべきことをやっていないと、綻びはどんどん大きくなってしまうのです。

このようなトラブルを起こす子どもは、Twitter[3]などで同じようなトラブルを起こしています。Twitterの別名は「バカ発見器」とか「バカッター」とか言われています。何にも考えないで、相手のことを思いやることもなくつぶやき、取り返しがつかないことをしてしまう子どもは多いです。自分がつぶやくことによって、「みんなから反感を買わないかな」とか、「誤解を招くようなつぶやきしていないかな」とか、そのようなことは全く考えていません。何にも考えないでつぶやいたり、人のプライバシーに関わることを書き込んだり、画像を掲載したり、このようなことを平気でやってしまう。何も考えずにやってしまったことが、後々まで重大な重荷を背負うことになるのです。

震災（2011（平成23）年3月11日の東日本大震災）があった日、（東京）都立高校に通っている女の子が、下校途中、ケータイ片手にメールしながら、自転車で歩道を走っていました。向こうからおばあちゃんが歩いてきました。でも、その子はおばあちゃんのことを見てなかったのです。自転車ではねられたおばあちゃんは、車道の方に吹っ飛んでいきました。その子は、はね飛ばされたおばあちゃんに向かって「ババアむかつくんだよ」と悪態をついて、そのまま家に帰りました。

その途中で大地震（東日本大震災）は発生したのです。家に帰ると、家の中は足の踏み場もないくらい滅茶苦茶な状態になっていました。その子の家には同居しているおばあちゃんがいました。そのおばあちゃんは、何が起こったのか分からずに一人でパニックになっていました。その子は、自分のおばあちゃんに対して、また腹が立ったのです。「ババア仕事もしてないんだから片付けくらいやれよな」と罵声を浴びせ、自分のおばあちゃんを殴り始めたのです。 その時、友達から連絡がありました。「びっくりしたよね。すごい地震だったよね。こんなことめったにないから、せっかくだからみんなで地震の記念にプリクラ撮ろうよ」と電話がありました。「私たちまだラウンドワン[4]にいるんだけど、ここまだ閉まっていないから、早くおいでよ。早く来ないと閉まっちゃうよ」「電車とか全部止まっているみたいだから近いから自転車でおいでよ」と。その子は大慌てでラウンドワンに行って不謹慎なプリクラを撮ったのです。東北大地震と書き込んでピースをしたプリクラを自分のブログに貼ったのです。でも、親とか先生に見られちゃまずいと思っていたのでしょうね。友達しか見ることができないように、パスワードは掛けていました。しかし、世の中には、パスワードを解読することを趣味にしている人がいるのです。未成年がパスワード設けているということは、「どうせこいつら何か見られてはまずいことをやっているんだろう」と。この子のパスワードも解読されて中に入られて、それまでブログに書かれていた内容や画像などをすべてネット上に公開されてしまいました。「こいつ自分のおばあちゃんに虐待している」「ひき逃げの犯人だ」「高校生の分際でこいつタバコ吸っている、バカか」と叩かれました。当然、個人名や学校名もさらされていますから翌日学校には朝からクレームの電話が鳴りっぱなしになりました。一度このようにネット不謹慎な画像や書き込みが出てしまうと、あっという間に拡散されてしまいます。

この件について学校側から相談が来ました。私ども（全国webカウンセリング協議会）の方で管理

3　ツイッター：140 文字以内の短文を投稿できるブログ形式の情報サービス
4　ボーリング場などの複合エンターテイメント施設

者に削除依頼を送るなどの対応をして、なんとか、2ちゃんねる[5]の大元の書き込みは消すことができました。ただ、すでに情報が拡散し過ぎていて、お手上げ状態でした。大元を消しても問題解決にならないのです。この子は、学校から当然処分を受けました。それでは、処分を受けたらこの子の罪は許されるのかというと、そうはならないのです。この子は、この罪をずっと背負って生きていくことになるのです。ネット上で、画像検索とか名前検索すると、先ほどお話した内容が全部出てきます。 いろんな企業を回っていると、採用担当者の口からこういう話を耳にします。「今の若い子たちは、マニュアル本とか読んで、面接は完璧にこなせるように練習してくる。しかし、先生、今はそういうことだけで、その人を判断していませんよ」と言うのです。「今の子は、Twitterをやっていたり Facebook[6]をやっていたりするので、我々の企業サイドにとって、それらが判断材料になるんですよ」と言う。「さっきの子は、確かに面接の対応は完璧でした。しかし見てください。先生だったらこの子採用しますか？」と。「この子、高校生の頃からタバコ吸っているんですよ。Twitterの書き込みもずっと見せてもらったけど、この子はたばこの銘柄まで書き込んでいる。先輩とも酒を飲みに行ったりもしているんです。この子、多分どこの会社の面接受けても難しいと思いますよ」と。

SNS[7]などへのネット上の書き込みは、いつか消えるだろう、と多くの人は考えるかもしれません。しかし、それは甘いですね。ずっと残り続けていく可能性があります。先ほどお話した子が、将来結婚を考えた時に、相手が自分の恋人のことをネットで調べて、ひどい内容の書き込みを見付けてしまうと、結婚をためらってしまうかもしれません。また、将来その子が成人して母親となった時に、お子さんが何気なく自分の母親のことを検索して、ひどい内容の書き込みを見付けてしまったら、お母さんのことをどう思うだろうか。悪ふざけでは済まされないのです。余りにも重すぎる代償です。

ある親御さんが、亡くなられた息子さんのことで、私ども（全国webカウンセリング協議会）のところに相談に来られたことがあります。知り合いから「お宅のお子さんがネット上でさらし者にされている」と聞かされたのだそうです。かわいそうだから何とかしてあげた方がいいと。お母さんはまさかと思って自分の子どもの名前で検索をかけると、死亡記事だけではなくて息子さんの顔の画像や付き合っていた女の子の画像、そしてブログの書き込みの内容までネット上にアップロードされていました。子どもたちが書き込んだ内容やプロフィールサイトの内容などが、亡くなったからといって自動的に消えるものではないのです。死んでもこの世にずっと残っていく。それを元に批判されることもあるのです。

このようなことをやってしまう子どもに共通していること、それは親や学校の先生方の無関心です。子どもたちのSNSなどへの書き込みを例に取っても、「自分たちの学校は大丈夫」だとか、「そんなの学校と関係ない、家庭の問題だ」なんて、何の根拠もなく言い張っているのです。そのような学校ほど問題が起こります。

今の子どもたちに「学校を受験する上で何を一番参考にしている？」と聞くと、パンフレットや学校見学ではなく、「ネットの書き込み」という答えが多数を占めます。自分が受験したい学校の名前で検索をかけて、そこでタバコを吸っている画像や学校の先生の悪口などの書き込みを見付けると、一気にその学校を受けようという気持ちはなくなるといいます。さらに、LINEを使って、その悪評を友達に広めると言う子もいました。「あの学校やめておいた方がいいよ、評判悪いよ」なんてことを書き込むとあっという間に学校の評判なんて落ちてしまう時代なのです。

学校の先生方も、自分たちの学校を守ろうという意識を持たなければなりません。子どもたちもそうです。ネットで、たとえば「○○ちゃんこないだキスしているような画像載せていたよね」とか「先生の悪口書いていたよね」なんて。子どもたち同士では、結構分かっているのです。しかし、自分の

5　日本最大の電子掲示板サイト

6　フェイスブック：インターネット上のソーシャル・ネットワーキング・サービスの一つ。実名登録制で個人情報の登録が必要。13歳以上であれば無料で参加でき、利用者は全世界で10億人を超える。

7　Social Networking Service：社会的ネットワークをインターネット上で構築するサービス。代表的なサービスとして、日本ではmixi、GREE、Mobage、Ameba、世界ではFacebook、Twitter、Google+、Myspace、LinkedInなどがある。

ことでないと思い込んでいます。自分の通っている学校の評判が落ちるということは、自分の評判を落としていることになるのです。「ああ、あの学校の出身者すごいね」って言われるのと、「ああ、あの学校ね。最近ネットでいろいろ叩かれているよね。なんかまずい書き込みも多いしさ」と言われるのは全く違うのです。しっかりと子どもたちにも、みんなで自分たちの学校を守っていこうという意識も持たせなければならないのです。親の無関心と学校の先生方の無関心によりネットトラブルは発生するのです。しっかりと大人が教えてあげればこのようなトラブルもなくなっていくし、ネット上でのいじめというのも少なくなっていくはずなのです。

【横田】

安川さん、どうもありがとうございました。具体的な例を挙げてインターネット、LINE、Twitterなどの子どもたちの利用の仕方の中にある問題点を私たちに教えてくれまして、同時に、それにどう親や学校が対応すべきなのかというようなことについて、非常に分かりやすくお話が伺えたと思います。



会　場　風　景

吉川　誠司 (WEB110 主宰)

【横田】

続きまして吉川さんに問題提起をしていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

【吉川】


吉川誠司さん

私の方からは、インターネット上の人権侵害の現状と課題についてお話をしたいと思います。

人権といいますと、女性の人権や子どもの人権、犯罪被害者の人権など様々な客体といいますか、その属性の方々の人権というのが存在して、それぞれにいろんな問題があるということは御存じの通りだと思いますが、インターネットと人権という関係でいうと、インターネットそのものは人ではありませんから人権を持っていません。ですから「ネットが人権侵害の道具として使われたときの問題」というふうに捉えることだと思っているんですね。

インターネットが人権侵害の道具として使われるというのはどういうことかというと、例えばある人が別の人を誹謗中傷したという時には、それはその書き込みという情報が直接的に名誉毀損にあたるということですね。つまり情報そのものが、誰かの権利を侵害する違法情報になるというものが一つあります。

それからもう一つは直接的ではないのですが、情報そのものが間接的に犯罪につながって、ひいては誰かの人権が侵害されるというものがあります。例えばネット上で「殺人請け負います」という書き込みがあって、それを見て誰かが殺人を依頼したりしますと、殺人事件になって人の命が奪われてしまう。

ですから、私の中では、大きく分けると直接的に人権侵害につながる違法・有害情報と、間接的に人権侵害につながる違法・有害情報があるというふうに、整理しております。

では、まず最初に、直接的に人権侵害につながる違法有害情報にはどのようものがあるのかをお話しします。それに際して法律の部分から見ていきますと、直接的に人権侵害につながる違法情報としては、例えば「名誉毀損」に該当するような書き込みがあります。それから違法というのはちょっと違うのですが､不法行為に近いものとしては「プライバシー侵害」の形で人の肖像を掲載したりだとか、盗撮したりだとかそういうのがあります。また「脅迫・嫌がらせ」などは、いじめの場面でもよく使われるものだと思いますね。それらについて、いくつか事例を御紹介していきます。

まず「肖像権侵害」とか「プライバシー侵害」に当たるような情報としては、他人の知られたくない様子を無断で写真撮影して公開するというものがあると思います。その無許可の撮影でもレベルがいくつかあるわけでして、比較的権利侵害の度合いの低いレベル1としては、有名なグーグル･ストリート・ビュー[8]による街頭の撮影というのがあるかと思います。

スクリーンで御覧いただいている事例のうち、右の上と左の下の例は、御本人は撮影されていることはもとより、こういう形で地図と連動して自分の姿が世界中の人に見られていることを知らないと思うのですが、いずれも余り、人には知られたくない場所にいるわけですので、本人の気持ちを考えると、これはプライバシー侵害に当たるのではないかと思います。

8　2007（平成 19）年にスタートした、Google がインターネットを通じて提供している Web サービス。世界各地の大都市圏を手始めとし、カメラを地面から高い位置に搭載した車両を多数走らせて撮影した道路沿いの風景が、Google マップで表示される。

左下は、私がたまたま会社に出社してから近所の喫茶店にコーヒーを買いに行く途中で撮影されていたものでして、私は全然気付いていなかったのですが、会社の同僚に教えられて初めて知ったわけです。私の場合は、コーヒーを買いに行く途中だったからまだよかったです。この右の写真のように、ロマンポルノの劇場に入るところだったら恥ずかしくて、こんなところで紹介できませんけどね。

問題は、軒並み無許可で撮影しているということと、それから削除するための手段がサービス開始当初はかなり限定されていまして、削除するためにはGoogle（グーグル）の本社に英語で削除依頼の要請を直接送らなければならなかったんですね。ネットを使っていない人はどうやって削除要請するんだって話だったわけですが、その後、いろいろと苦情がグーグルに寄せられて、現在では画面上で簡単に報告フォームが送れるようになっています。本来であればこういう、人々のプライバシーに関する情報を公開するのであれば、あらかじめ撮影にあたって事前に説明して許諾をとり、極力プライバシー侵害につながるような場所での撮影は控えるだとか、そういった想定される問題点を十分検討した上でサービスを開始すべきところ、結果的に事後的な対応になってしまったことが問題ではないか、と言われております。

それからレベル2になってきますと、少し権利侵害の度合いが上がってきます。左側の写真は、街行く女子高生の姿をこっそり撮影して、ネット上のサイトにアップしていたというものです。中には、生徒の顔がはっきり分かるようなものもありました。これは後に、迷惑防止条例違反ということで検挙もされておりまして、サイトはもう無くなっております。右側の写真は、最近問題になっていますけれども、他人の迷惑行動を撮影して「こんな迷惑なやつがいたよ」という形でTwitterに投稿する行動ですね。ところが、結果的にその行動自体が新たな加害行為になっているということに、投稿した本人は気付いていないのかなというところですね。もちろん電車の中で宴会騒ぎするという行為自体は迷惑な話ですけれども、だからと言ってそれを勝手に撮影して、ネット上に公開していいという話ではない、ということです。

それからレベル3は、完全に犯罪の域に達しておりまして、いわゆる盗撮です。軽いものではスカートの中を隠し撮りといったものから、悪質なものではトイレの盗撮というものまで、女性にとっては非常に由々しき問題があります。ネット上には、そういう盗撮された写真を専ら投稿するための画像掲示板などもありまして、スレッドのタイトルを見ただけでも、どういうものが投稿されているのかが容易にうかがえます。

この盗撮に関しては、最近特に顕著になってきたわけですけれども、その要因として考えられるのは、一つはカメラの小型・高性能化だと思います。以前は盗撮するとしたらフィルムカメラかビデオカメラだったんですけど、目立つので盗撮には不向きですよね。ところが技術の進歩に伴い、携帯電話にカメラが付くようになり、スマートフォンでは音を消して撮影できるようになり、果ては最初から盗撮するために作られたような偽装型のカメラが、ネット上や店頭などで販売されております。また最近では、グーグルがグーグル・グラス[9]というのを開発して、そう遠くない将来、市場に投入されるそうですが、それを使えば、撮影した写真や動画を、その場ですぐにネット上にアップするということも容易にできてしまうんですね。ですので、使い方を間違えると、これもまたプライバシー侵害の道具として悪用されかねない、といったことを危惧しています。そして、ネット上にそういう画像等を投稿できるような、動画配信サイトや画像掲示板などがあるということも要因の二つ目にあるかなと思います。

次に、同じプライバシー侵害とか名誉毀損の事例ではありますけれども、こちらは犯罪の加害者になった方々の身元を特定して暴露するという類の行動です。スクリーンで御覧いただいているのは、大津のいじめ自殺事件[10]で加害者となった生徒と、その担任の先生の写真がアップされているサイトの様子です。少年犯罪の場合には匿名報道が原則ですから、マスコミによる報道では加害者の情報は表

9　グーグル社が開発しているメガネ型のヘッド・マウント・ディスプレイ（HMD）方式の拡張現実ウェアラブルコンピュータ。

10　2011（平成23）10月11日に滋賀県大津市内の市立中学校の当時2年生の男子生徒が、いじめを苦に自宅で自殺するに至った事件。事件前後の学校と教育委員会の隠蔽体質が発覚、問題視され、大きく報道された。翌年には本事件が誘因となっていじめ防止対策推進法が国会で可決された。

には出てこないんですけれども、この事件の関係者を知っている人などが情報をさらしあうことであっという間に個人が特定され、ネット上で公開処刑（私刑）の状態にされてしまうんですね。先ほど安川さんの方からも「炎上」[11]の話がありましたけれども、ああいった炎上騒ぎになるようなことをした本人に関しても同じように個人特定が行われて、さらしものになることが最近多いですね。それから、いじめそのものはインターネットが手段として使われているのではなくても、そのいじめている様子をカメラで撮影してネット上にアップするとなると、それはネットを使った人権侵害になってくるわけでして、御覧いただいている画像は、そういう類の動画の一例であります。

また、いじめと同様に児童虐待というのも児童に対する著しい人権侵害ではありますが、それ自体は従来からありました。しかし先ほどのいじめと同じように、それを撮影してネットにアップするとなるとまた別の問題が発生してくるわけですね。例えば先ほどのいじめの動画もそうなんですが、ネットにアップされなければ、いじめはその場で終わって、それ以降いじめを繰り返さないようにすれば人権侵害はそこで止まるわけですけれども、ネット上に出てしまいますと、いくら元のいじめが収まっても、その動画自体が新たに名誉毀損という人権侵害として継続し続けるという問題があります。ですので、従来からあるいじめと、いじめの様子を撮影してネット上にアップすることの二つについては対応を分けて考える必要があります。

そして、個人的に最も深刻だなと思う問題としては、素人の女性の裸の写真が何らかの理由でネット上に流れてしまって、そこからこれは誰だということで本人探しが始まって、個人情報と紐付けられた形でネット上にさらされてしまうという流出事件が挙げられます。一番多いのは、ファイル交換ソフト[12]を使っているユーザーが暴露ウィルス[13]に感染して、その人のパソコンの中の画像データや個人情報、様々なものがファイル共有ソフトのネットワークに流出してしまうことです。それを知った人が、たちまち2ちゃんねる掲示板のニュース速報等に書き込んで一報報じることで、インターネットの利用者が知ることになります。画像が電子掲示板に貼られますと、多くの方の目に触れることになりますし、ダウンロードされてまた別の所に転載されてしまいます。

さらに、騒ぎが大きくなると、必ずマスコミもそれを嗅ぎ付けますので、新聞や週刊誌に掲載されてしまったりするわけですね。その記事の中では、流出した写真にぼかしやモザイクが入れられているとはいえ、その画像が転載されることによって、人々の興味をあおって、どこにあるんだ？ってことで新たにその画像をネット上で探すという行動のきっかけを作ってしまったりすることもあります。

つまりもともとは、ファイル共有ソフトのネットワークに流れていただけだったものが、わざわざそのことをネット上で多くの人々に知らせる人がいたり、個人が特定された挙句、その方の学校だとか勤め先だとか友人に教えて回ったりしたり、画像を拡散したりしてしまう。要は、その後に様々な人が被害拡大に加担していくことにより、どんどん被害は深刻になっていくということなので、対処法として一番いいと思われるのは、騒がずにそっとしておくのが被害を最小限に抑える方法であるということになりますよね。

では、なぜ流出した画像に写っている人や少年犯罪の関係者の個人が特定されてしまうのかといいますと、最近では一人で複数のSNSなどを利用している人が少なくありませんから、そういうサイトで公開しているプロフィールやその人がつぶやいた内容などといった断片情報を集めていくことで、おおよその人物像ができ上がってしまうんですね。もちろん中にはマスコミの方が事件の取材でするように、対象者の知人などに「この人の写真を持っていませんか？」と聞いて回って、過去の卒業アルバムの写真などを入手してそれをネットにアップするというケースもあると思います。

ですから、いくら本人がTwitterやFacebookなどを一切やっていなくて、写真もネット上にアップ

11　なんらかの不祥事等をきっかけに、インターネット上で爆発的に注目を集める事態または、状況を差す。

12　インターネットを通じてファイルを不特定多数で共有することを目的としたソフトウェア。ファイル共有ソフトとも呼ばれる。代表的なものとして、Winny、WinMX、BitTrrent などがある。

13　感染するとコンピュータ内部の情報をファイル共有ソフトのネットワークやインターネットにおいて不特定多数の人が見られるようにするコンピュータウイルスの総称。代表的なものとしてトロイの木馬などがある。

していなかったとしても、アルバムを持っている同級生等がスキャンして画像データとして送ってしまいますと、それがネット上に出てしまうということもありますから、被害者としてはもはや自分の情報が出ていくのを完全に抑え込むのは難しい。そうするには社会的な関わりを一切立って、誰とも付き合わないってことしかないわけですけれども、それは現実的な話ではないですね。

それから、なりすましの問題があります。これはインターネットが厳格な本人確認を必要とせず、いろんなサービスを利用できるというところに端を発していると思うのですが、例えばTwitterで簡単に学校の先生になりすまして、保護者だとか生徒の悪口なんかを書いたりできるわけで、本当にその先生が作ったアカウントだと信じた人から見ると、その先生の信用は失墜してしまうんですね。書き込まれている内容が余りにも露骨な場合には、ちょっとおかしいなということで、見た人が本人（先生）に「こんなTwitterがあるけども、本当に先生がやっているんですか？」と聞くこともあるでしょうが、微妙な中傷の場合にはそういう確認すらしてもらえないまま、「もうあんな先生無視しようよ」ということで本人が知らないところで、自分の知らないところで自分になりすました人によって、自分の人格がおとしめられてしまっていることもあり得るんですね。なりすましの被害に遭った時に、自分が本物です、書き込んだ人は私ではありませんということを証明するのもなかなか難しいですね。もともとアカウントを登録するときに本人確認が必要なくて匿名で手続きできる場合、なりすまされた自分が本人が身分証明書で証明しようとしても事業者としては、突き合せて確認するデータをそもそも持ち合わせていないということになります。なりすましというのは攻撃の手法、他人をおとしめる手法としてはそれほど強力なものではないにしても、じわじわとボディブローのように効いてくるやり方かなというように思っています。

それから、今日はマスコミの方もこの会場にいらっしゃっているかと思われますので、なかなか申し上げにくい話しではありますが、実名報道がインターネット上に大きな爪痕を残すということについて、私が思うところをお話したいと思います。例えば誰かが逮捕されましたとすると、容疑者が成人の場合、基本的には新聞などで実名報道されますよね。インターネットがない時代であれば、新聞記事を見た人は、一度見れば次の日にはもう古新聞の束に積み重ねて、1か月も経てば誰が逮捕されたかなんて忘れてしまうと思います。しかし、今はネットがありますから、ネット上に出た実名報道の記事がブログや掲示板などのいろいろなところでそのまま複製されて残ってしまうんですね。そうすると後で不起訴や無罪になったとしても、その逮捕されたときの情報だけがネット上にずっと残り続けてしまうことになります。有罪になったとしても、刑期を終えて罪を償って社会復帰しようとする段階で、逮捕時の情報が残ってしまっているがために、再就職、社会復帰の際に妨げになったりするという問題があります。

スクリーンで御覧いただいているのは、育児ノイローゼになった母親が自分の子どもを殺してしまった、ということで報道された毎日新聞の記事です。この記事自体は別に悪いとは言わないのですが、ネット上の様々な掲示板でその当時の記事が残ってしまっていました。この記事について、この加害者である母親のお兄さんから相談がありました。自分の妹はこういう事件を起こしてしまって、ショックで自分も自殺を図ろうとしたくらいであったという話でした。この当時のことについて、本当は触れたくないんだけれども、今でもネット上に妹の実名が記載されたままのニュースが残っていることを危惧していました。もしこの記事を妹が目にしたら、またショックで自殺を図ってしまうんじゃないかと思うので何とか消したいといった内容の相談でした。本日、私はこのスライドに記事を掲載するに当たって、実名の部分をスミ消しで見えないようにしております。どのような事件が起こったかというのは、必ずしも実名を載せなくても分かると思うんですね。

そこで問題提起が二つあります。1つは「逮捕」＝「犯人」とみなすかのような心証報道が、結果的にその裁判の判決を待たずして、その方に対して刑の宣告をしているのと等しいのではないかということです。逮捕されても、その後不起訴になったり無罪になったりすると、それは犯人でもなんでもないわけですが、テレビなどでセンセーショナルに報道されたものを多くの人が目にしますよね。逮捕されたってことは、多くの人々はこいつが犯人だっていう印象で見ますから、その後どうなったか

というのはよほど社会的関心が高い事件であれば追加で報道されて、身の潔白も伝わるんでしょうけど、小さな事件なんかの場合には、「逮捕」＝「犯人」の印象だけで終わっちゃうんです。いくら後で本人が不起訴になりましたと自分のブログで言おうが、見ているのはごく一部の人々なので、名誉の回復は不完全なものにしかならないだろうと思われます。

裁判では「無罪推定の原則」というものがありまして、証拠を精査していった上で有罪がどうかというのを決めているわけですね。その原則から考えますと、報道も本来は逮捕時にやるのではなくて、起訴された後や判決で有罪が出た後などにやれば、無実な人の実名が多くの人びとの目に触れるということは防げるのではないかと思います。

ただ、そうはいっても報道は鮮度が命ですから、逮捕されたことを報道せずに裁判の判決を待ってなんていうのは、恐らくできないのでしょうね。であれば、せめて実名報道じゃなくて原則匿名報道にしておけばいいのではないかと思うのです。実名報道をする必要性としてマスコミの方々が言うには、その記事の真実味が増すということが言われるのですが、別に実名だから真実味が増すとは、私は個人的には思えないです。新聞記事にどこの誰それって書かれていても、本当にそういう人がいるのかなんて分からないわけですから、仮に偽名だったとしても本質は何も変わらないと思います。事件の内容だとか本質は匿名報道でも十分に伝わると思っています。

例えば育児ノイローゼの果てに子どもに手をかけてしまったという事件について、私たちに関係があるのは、誰が犯人か？ではなくて、どうしてそういうことが起こるのか、繰り返さないためには何が必要なのかということだと思うのですね。加害者が実名表記されている必要は全然ないのではないかと思います。むしろそういう実名報道がネット上に放置されることの弊害の方が問題ではないかと思います。

新聞の場合、後に不起訴や無罪になった場合には、アーカイブ[14]される記事からは実名の部分は消すという方針を取っているらしいのですが、一般のネットユーザーがネット上にある記事情報を転載していくということを考えますと、その原因の発端となる記事自体、最初から原則匿名報道にしておけばいいのではないかと考えます。

次は、間接的に人権侵害へとつながる有害情報の話しをさせていただきます。様々な事例がありますが、冒頭でも少し御紹介したような殺人請負というものが挙げられます。振られた腹いせに、片思いの相手を殺してくださいといった依頼なんかもありますし、自分の恋人をほかの人に盗られたという女性が、盗った女をレイプしてくださいといったような強姦の依頼などもあります。

また、人身売買、臓器売買の事例ですが、「いらなくなった赤ちゃんや子どもはいませんか。高額で買取します。健康体の体であればあるほど高値で買取いたします。部分買いもいたしております」ということで身体や臓器などのパーツごとの買い取り価格が載っています。こんなことが日本で実際に行われているのがにわかに信じ難いわけですけれども、日本で売買されていなくても、ほかの国に売られていくことはあるのかなと思われます。この情報自体は、誰かの権利が侵害されているわけではないので違法情報ではないのですが、場合によっては名誉毀損のような違法情報以上に、重大なダメージを与えますね。人が殺されたり人身売買されるということになるので。ですので、有害情報というと違法情報よりも一段軽く捉えられるイメージがあるかもしれませんが、その情報から派生する犯罪という部分ではむしろ凶悪なものが多くなるのですね。

先ほど、強姦を依頼する書き込みの話しをしましたが、ネット上にはレイプ仲間募集のような掲示板もあり、日々こういったところで同士を募集して、あとは電子メールや実際に会うなどして具体的な計画の打合せなどのやり取りに移っていくのだと思われます。具体的な計画まで進んでしまうと後は実行するのみですので、本来はこういう仲間を募集している段階で有害情報として削除して被害を防止すべきですね。

14　Archive：本来の意味は、公記録保管所、公文書、または公文書の保存所、履歴などを指す。重要記録を保存･活用し、未来に継承することをいう。

それではまとめに入ります。ネットを使った人権侵害の特徴と問題点の一つ目に、地理的、時間的な制約なしに相手を攻撃できるということがあります。例えば、自分の子どもが布団に入って寝ていると思っていると、実は布団の中で携帯電話を使って友達に嫌がらせのメールを送っているというようなことが十分あり得ます。それから実社会では全く面識のない人から、いきなり攻撃の標的にされるということがあります。その最たる例が、数年前に名古屋のOLの方が、帰宅途中に襲われ殺害されてしまうという事件がありましたが、その時の加害者たちがネット上の「闇の職業安定所」で知り合った、それまで全く面識のない連中だったのです。

こういった場合に、被害者と加害者の間には現実社会での接点がありませんから、殺人事件で警察が捜査するにあたって、交友関係や怨恨などから犯人を辿っていっても絶対に行きつくことはありません。そういう意味では、犯人の捜査にあたってもかなり困難な状況になりうるのかなと思います。ですので、ネット上のこういった掲示板などは、攻撃者にとっては非常に効率的で経済的な道具であると言えますが、被害者にとっては全くその逆のものになってしまうということですね。

それから二つ目として匿名性が挙げられます。たとえば学校裏サイトで誰かを誹謗中傷する書き込みがされたという場合、従来のいじめであれば、誰が自分の悪口を言っているのかは聞いていれば分かりますが、ネット上に書かれた場合には誰が書き込んだのか分かりませんよね。私自身も、このような活動をしていて名前がある程度知られてくるようになると、ネット上でいろいろ叩かれたりしたこともありましたが、よもや私がその掲示板に反論を書き込んだところで、私になりすました誰かが私のふりをしていろんなことを書いたりすると収拾がつかなくなるので、その場での反論はしないことにしています。対抗言論という法理は、なりすましが可能なネットでの誹謗中傷には通用しなくて、言いたいことがあれば自分のサイトでやることくらいしかできないんですね。またネットいじめの場合は誰が自分を攻撃しているのか分からないので、親友だと思っている友達にもうかつに相談できずに人間不信に陥ってしまうこともあります。これが犯罪の場合には警察が捜査すれば、ある程度は匿名性は打破できるんですけれども、一般市民から見れば、その誹謗中傷などが書き込まれた段階では、誰が加害者なのかが分からないという意味で匿名性が問題になるということですね。

そしてもう一つは、被害回復の困難性です。特に個人情報や画像などは、一旦ネット上に流出してしまうと、その回収や被害の完全回復は不可能です。名誉毀損の場合も、いくら掲示板などに謝罪広告が掲載されたとしても、そのことを知っている全ての人が見るわけではありませんので、完全な名誉回復は期待できません。ある掲示板管理人は、「嫌なら見なきゃいい」といった主旨のことを言っていましたが、自分の個人情報がネット上に書き込まれているのに「見なきゃいい」で済むわけがありませんから、やっぱり消すべきものは消す必要があると思います。

それからもう一つ、インターネットには国境がありませんが、法律は国によって違いがあります。また、プロバイダ責任制限法[15]があるものの、国内でしか通用しないという問題があります。そして、インターネットのプロバイダや掲示板などの管理人側の規範意識に、被害救済が大きく左右されるというところがあり、管理人が善良な人であれば誹謗中傷の書き込みがあったら速やかに消してくれるのですが、管理人が反社会的な思想の人の場合には判決が出ても無視するというようなことがあって、被害者が泣き寝入りせざるを得ない場合があるということです。

以上、インターネット上の人権侵害の現状と課題についてのご報告でした。

【横田】

吉川さん、ありがとうございました。吉川さんの場合には、具体的に違法・有害情報、これが直接的に人権侵害になる場合と間接的に人権侵害になる場合とがあって、しかもその中には犯罪性の濃い

15　インターネット上でプライバシーや著作権の侵害があったときに、プロバイダが負う損害賠償責任の範囲や、情報発信者の情報の開示を請求する権利を定めた法律。正式名称は「特定電気通信役務提供者の損害賠償責任の制限及び発信者情報の開示に関する法律」（2002（平成 14）年 5 月 27 日施行）。

もの、それから犯罪性は濃くないけれどもいろんな形で被害を受ける場合があるということを、非常に分かりやすく例を挙げて示していただいたと思います。その問題性の中には、加害者がはっきり分からない匿名性がある、あるいは名誉回復が簡単ではないといったことがある。そして、国を越えてのインターネット上での加害情報の提供ということになると、これは現段階ではきちんとした対応が難しい状況であるといったような、様々な問題点があるということを含めてお話しをしていただきました。

後ほど、会場からの質問等を含めて、また問題点を深めていただきたいと思います。

渡辺　真由子（メディア･ジャーナリスト、慶応義塾大学 SFC 研究所上席所員〈訪問〉）


渡辺真由子さん

【横田】

それでは、最後に渡辺さんからネットリテラシーを中心にお話を伺いたいと思います。お願いいたします。

【渡辺】

皆さんこんにちは。渡辺でございます。恐らく今回の登壇者の中で私が一番若いのではないかと思いますが、あえて年齢は伏せさせていただきますけれども、私も子どもに割と近い立場であるということで、これまでいろいろと子どもによるネットの利用実態というものを取材してまいりました。今日はそうした経験に基づきながら、子どもたちに今求められているネットリテラシー教育とは何なのか、という点をお話しさせていただきます。

本日の報告概要は、まず、そもそもネットリテラシーというのは何なのだろうか、ということをお話させていただきます。次に、ではネットリテラシーと言っても何を教えればいいのかということ、そして青少年が巻き込まれやすい人権問題、この3つに焦点を絞ってお話をさせていただきます。ネットいじめ、悪ふざけ画像、性被害などについて、そしてネットリテラシーを子どもたちにどう教えるかということで、学校、家庭、本人の教えるべき方法についてお話させていただきます。最後にネット関連企業や国の対策の在り方についての提案をさせていただければと考えております。

ではまず、ネットリテラシーって何なのだろうということで、あまり聞き慣れないという方もいらっしゃるかもしれません。これは、大きく二つの能力に分けられるんですね。基本的にはインターネットが持つ特質。つまり従来のテレビや新聞などとネットはどのように違うのか、どんな特性を持っているのか、という点を理解する。その上で、そのネット上の情報の善悪や真偽といったものを自分の頭できちんと判断できるという、受信者としての能力ですね。もう一つは、ネットを効果的なコミュニケーションに活用するという、発信者としての能力。この二つに、分けられるんですね。そしてこのネットリテラシー教育というのは、海外ではかなり活発に進められているものです。

例えば、OECD[16]では、昨年（2012（平成24）年）2月にオンラインにおける青少年保護による勧告というものが採択されまして、その中でネットリテラシー教育を今後推進していこうということを提言しています。またカナダやイギリス、フィンランドといった、以前からメディアリテラシー教育に比較的積極的であった国においては、義務教育の段階からかなり力を入れています。一方、日本国内に関してはどうなのかということなのですが、総務省において昨年から青少年のネットリテラシー指標を作るための調査を行っています。また学校現場でも、文科省が2008（平成20）年から学校指導要領において情報モラル教育を小学校から行っていこう、ということを盛り込んでいます。私は仕事柄、全国の教育委員会や学校の先生方にお話を聞く機会があるんですが、現場の先生の中には、特に年配の方になると、ネットリテラシーと言われても何をどのように教えればいいのだろうか、いまいちよく分からないという方もまだまだ多いんですね。ですので、今日はそういった点についてより具体的にお話をしていきたいと思います。

16　Organisation for Economic Co-operation and Development：経済協力開発機構。ヨーロッパ諸国を中心に日・米を含め 34 か国の先進国が加盟する国際機関。OECD は国際マクロ経済動向、貿易、開発援助といった分野に加え、近年では持続可能な開発、ガバナンスといった新たな分野についても加盟国間の分析・検討を行っている。

では、はじめにネットいじめに関して、どういったことを子どもたちに教えていけばいいのかについてお話をさせていただきます。ネットいじめにおける加害者にならないための情報発信を行うに当たっての注意点として、3つの点を挙げております。

まず、ネット上に書き込む情報は匿名ではないということです。よく子どもたちの中では、ネット上への書き込みというのは自分の身元がばれるわけではないだろうと思われているんですね。だからこんなことを書き込んでしまっても大丈夫だろうとか、こんな画像を載せちゃっても問題ないだろう、というふうにどんどん過激になっていく、エスカレートしてしまうということがあります。しかしネット上への書き込みというのは、しかるべき手段を取れば、ほとんどの場合は誰がそれを行ったのかということは、特定可能です。だからこそ、度々問題になりますけれども、犯罪予告のネット上への書き込みで逮捕されているわけですよね。そういった意味で子どもたちには、ネット上への書き込みというのは誰が書き込んだものなのかばれるんだよ、君がやったっていうことは、いずればれてしまうんだよということをはっきりと伝えておく必要があります。

さらに2点目として、ネットの保存性と拡散性というものを子どもたちに理解をしてもらう必要があるということですね。と言いますのも、ネット上にいったん投稿された文字や画像というものは、これは削除されない限りは、半永久的にそこに保存され続けてしまうわけですね。さらにそれは簡単にコピーしてペースト、つまり別のサイトに貼り付けることができてしまう。ですから非常に短期間のうちに特定の書き込みや画像が無数のサイトに広がってしまうということがあります。そうしますと被害者側としては、これはもう一生消えないダメージになってしまいます。自分が小学校の時に受けたネットいじめで書き込まれた自分の実名と自分の悪口などが、大学生になっても結婚後もずっとネット上に残っている。これは非常につらいことですよね。自分が過去にいじめられていたという記録が、新しく出会った人たちの間にも知られてしまうということ、いじめられっ子のレッテルが、一生剥がされないということなんですよね。ですから子どもたちは、もしかしたら本当に軽い気持ちでこういう書き込みをやってしまうのかもしれません。でもそれは決して一時の冗談では済まされないんだよ、ということを伝えていく必要があります。

そして3点目ですが、犯罪になる可能性があるという点ですよね。たとえ子どもが行ったいじめであっても、ネット上で他人の実名をさらして、さらに誹謗中傷の書き込みをしたということになりますと、場合によっては名誉毀損罪が適用されることがあります。実際にそうして逮捕されたケースもありますね。あるいは相手を脅すような内容のメールを送りつけるような場合であれば、脅迫罪に当たる場合もあります。ですから子どもたちというのは、まさか自分のちょっとした行為が犯罪になるわけないと思ってやっているわけですが、君たちそんなの調子に乗ってやっていると捕まるよ、ということを、周囲の大人たちがしっかり教えていく必要があるんですね。

一方で受信者、つまりネットいじめの被害者になってしまった場合のリテラシーとして知っておくべきこととしましては、これはネットいじめに関しては不幸中の幸いとでもいうべきなのですが、従来のいじめと比べて記録が残りやすいという特徴があるのですね。文字であったり画像であったり、何らかの形でいじめられたという形跡がネット上に残るわけです。ですから、まずはそれをいじめの証拠として保存するということなのですね。例えばメールの文章を印刷しておくとか、嫌がらせの証拠画像を撮影しておいたり、パソコンの画面のスクリーンショット[17]を保存しておいたりということが考えられます。その上でそうした証拠を持って、例えば法務省のインターネット人権相談窓口のようなところに相談してみるとか、あるいは全国の都道府県警察のサイバー犯罪相談窓口がありますので、そういったところに対応を求めるといったことになります。

さらに、そもそもネットいじめを子どもたちの間で、子どもたち同士で予防するための方法として、仲間内でお互いを尊重しようというルール決めをさせるということが必要になってくると考えられま

17　screenshot：コンピュータのモニタなどの視覚出力デバイス上に表示されたものの全体または一部分を写した画像のこと。

す。ネットを使う時、携帯を使うとき、まず親子の間でルールを決めましょうというのはよく言われますが、しかしより重要なのは子どもたち同士の中で、仲間内でルールを決めるということです。例えば、私たちの仲良しグループではメールのやり取りは何時までにしようとか、LINEを使う時はすぐに返信しなくてもいいよとか、そういうルールを決めるということなのですね。特にLINEの場合ですと、先ほど安川さんのお話にもありましたように、既読という表示が出てしまいますので、そうなるとすぐに返信しなければいけないという心理的プレッシャーに子どもは追われることがあります。しかし、お互い勉強している時やお風呂に入っている時、食事をする時など、忙しい時はすぐに返信しなくてもいいようにしようと決める。すぐに返信しないからと言って、別にお互い嫌い合っているわけじゃない、ということを子どもたちの間でルールとして確認をしておくということなのですね。子どもがLINEなどですぐに返信が来ないといって腹を立てるのは、自分が軽く見られている気がして不安になるからなんですね。ですからそのようにすぐに返信しなくても、決してお互いに軽んじているわけじゃないんだよ、ということを事前に了解を取っておくという点ですね。

さて続きまして2点目は、悪ふざけ画像に関してのリテラシー教育は、どんなものを行えばいいのかということについてお話をさせていただきます。悪ふざけ画像というと、皆さんも最近の報道で耳にされているかと思いますが、たとえば飲食店の従業員がお店の冷凍庫に入って、それを嬉しそうにSNSで披露するということが最近相次いで報じられていますよね。こういったものは、場合によっては他者の人権を侵害してしまうような投稿にもなってしまうこともあります。そこでこのような発信者にならないためのリテラシーということで、今回は2つの点を挙げております。

まず、子どもたちは、自分が仲間内のSNSに投稿している画像とか文章というのは、本当に親しい友達しか見ていないと思い込んでいるんですね。しかし実際は、いったんネットに投稿したものは世界中に公開されてしまうということが分かっていない。例え子どもたちの間でパスワードを設定された特定のコミュニティの中で、外から見えない形で運営しているとしても、もしもその中のメンバーの一人がこの画像をほかのみんなにもっと見せてやりたいということで画像をコピーして別の仲間たちに広めてしまったりすると、あっという間にネット上に拡散していきます。ですからとにかく自分が投稿する画像や文章は、世界中に公開されるものであるという意識を常に高く持つということなんですね。

そして二つ目は、集団心理の罠に対する自覚を持とうということです。これはどういうことかと言いますと、大体子どもたちが行っている仲間内でのSNSというのは、過激な写真ほど評価されるという傾向があります。それは集団特有の規定というものがあって、その中においては過激な画像ほどすばらしいと考えられているという場合があります。だからこそ、そうした仲間内のSNSに投稿する際には、もっとみんなに自慢したいとか、もっとすごいと思われたい、あるいはもっと人気を集めたいと考えて、画像の内容がどんどん過激な方向へエスカレートしてしまうということが、あるのですね。「俺こんなことしたんだぜ、すごいだろう」というようなことを言いたくなってしまう。そのような心理があることを、あらかじめ子どもたちに自覚させるということが必要です。君たちが集団でSNSを使う際には、こういう心理が働くことがあるんだよと。それをあらかじめ知った上で使いなさいね、ということなんですね。つまり、子どもに客観視する眼を持たせるということです。特に集団の常識というのは世間の非常識ということもありますので、その辺りをしっかりと理解させておくということですね。

さて一方で、その悪ふざけ画像を受信した場合にはどうすればいいかという点ですけれども、これに関するリテラシーとしては、あおらないということなんですよね。やっぱりそういう仲間内でそういう面白い画像が回ってくると、もっと面白いことやれよとか、もっと過激な画像ないのかよ、ということで、ついつい相手に催促してしまう、あおってしまうということがあります。そうするとあおられた相手もなんだかある意味プレッシャーを感じて、もっと仲間を笑わせないといけないというような強迫観念にかられて、より過激な行動に走ってしまうことがあるんですね。そうなってくると、あおってしまった側もある意味共犯者なんですよね。だからこそ、そういった画像が届いても、まず

自分からあおるようなことはするなという点を教える必要があります。さらに、自分がそのような画像を受け取った場合に、不特定多数の人々の目に触れるようなところに拡散してしまって良いのかということを、まず自分自身に問い掛けようということですね。この画像を自分がさらに別のサイト、あるいは別の人に知らせるということは、誰かに迷惑が掛かることなのではないだろうか、そういうことを考える一呼吸を置こうということが必要です。こういったことを、そのような画像を受け取った時のリテラシーとして、子どもたちに教えておくということなんですね。ただ、こうした悪ふざけ画像の場合というのは、そもそも論として、何故そういった行為をしてはいけないのか、ということすら子どもたちは分かっていないということが、一番の問題でもあるわけです。残念ながら「どうしてお店の冷蔵庫に入っちゃいけないの？」というようなレベルであるというのが実態ですので、その辺はまず家庭教育から見直す必要があるのではないかと考えられます。

そして青少年の人権侵害に関する3点目として性被害に関するリテラシーについて、簡単にお話をさせていただきます。ネット上での行動がもとで性的な被害に遭ってしまうというのは、特に女子の間では非常に多いです。ではなぜ女子が性被害に巻き込まれやすいのか、情報を発信するときにどんなことを注意すべきなのか。まずは個人情報、これを子どもたちはかなり安易にネット上に投稿してしまう傾向が見受けられます。自分の顔の画像も本当に素顔丸出しで載せてしまいますし、さらに本名、学校名、住所といったところまで、全部正直にプロフィールに書いてしまうということが決して珍しくないですね。そうなってきますと、子どもたちは自分の詳細なプロフィールが、周りの友達にしか見られていないと思っていても、子どもを狙う大人というのはむしろそういったプロフィールを非常に注意深く見て、自分の好みの子どもはいないだろうか、近くに住んでいる子どもはいないだろうかということを探し出しているわけです。子どもによっては、「別に私そんなに詳しい個人情報は書いていないし」と言う子もいるのですが、実際には過去の書き込みの中で、今日は最寄駅から何々線に乗ったとか、私の部屋からこういう看板が見えるとか、あるいはバイト先はどこどこだよとか、何とか先生のゼミが超ウザいとか、何気ない書き込みで個人情報を推測できる情報を出してしまっている。そういったものをつなぎ合わせれば、どこの誰かというのが特定されてしまうという怖さがあるんですね。そうしますと、当然ストーカー行為もおびき寄せてしまうということにもつながっていきます。

この情報発信に関する2点目として、性的画像を送ってしまうという問題があります。これは海外では特にアメリカ、カナダ辺りでは、以前から恋人間で性的画像を送るということは、かなり問題行動として認識されていますが、近年日本でも割とそのような行為が見受けられるようになっています。いったん恋人にそのような性的画像を送ってしまうと、その時はラブラブだからいいけれども、別れてしまったら腹いせにその性的画像をネット上に投稿されてしまうということも、最近ではよく起きているのですね。海外ではこれ、「リベンジポルノ[18]」と呼ばれておりまして、アメリカなどでは最近違法化された州もありますけれども、恋人間などの非常に親しい間柄であっても簡単にそういう画像を撮らせるべきでないということでしょう。さらにネット上で知り合った人から、「お小遣いあげるから君の裸の画像送ってよ」と言われることもよくあります。ではお小遣い欲しさに裸の画像を送ってしまうとどうなるのか。「お前のこの画像をネットに載せちゃうぞ、ばらまくぞ」ということで脅されて、「もし、ばらまかれたくなかったら外で直接会え」と言われて、外で会ったらホテルなんかに連れ込まれて、性的な被害に遭ったというようなケースも発生しているのですね。一旦他人に自分の性的画像を渡してしまえば、それはどのよう使われようと、自分でコントロールができなくなってしまうわけです。ですから一生その画像をネタに脅され続けることもありますし、ネット上にばらまかれてしまったら、ほぼ回収が不可能になってしまうというような非常に重大な影響が出てくる。だからこそ、親しい間柄であっても、安易にこういった画像を送るべきではないということですね。

さて一方で、この受信に関して、性被害に関しての受信編ということになりますが、女子中高生の

18　Revenge Porn：離婚した元配偶者や別れた元恋人の裸の写真・動画などをインターネット上に流出させる嫌がらせ行為のこと。

SNSにいろんな人からの誘いのメッセージというものが、毎日のように届いています。しかし、ネット上では年齢も性別も職業も簡単に偽ることが可能です。例えばつい先日発生した三鷹の女子高生ストーカー殺人事件でも、加害者と被害者はFacebookで知り合っているんですね。その際に加害者は、自分の職業を偽って被害者の女性に近づいたということが報じられています。このようにネット上で知り合う場合というのは、相手がどこの誰かという素性ははっきりとは分からない。それはもう誰も保障してくれるものではない。だからこそ簡単に信用すべきではない、ということなんですね。さらに、例えばネット上で、ある女子中学生に対して、「私も同じ14歳の女子中学生だよ。仲良くなろうよ」ということで近づいてきて、どこに住んでいる？本名何なの？学校名は？といった具合に、どんどん個人情報を聞き出そうとするケースもあります。では、その聞いてくる相手が本当に14歳の女子中学生なのかと言えば、実は53歳のオジサマだったというようなこともあるわけなんですね。そんなふうに、とくにネットを介して親しげに個人情報を聞き出そうとしてくるような人は、まず一度疑ったほうがいいということですね。

さてこの受信に関して2点目は、子どもを狙う大人の手法です。どのようなテクニックを使って大人が子どもに近づいて来るのかということも、あらかじめ予備知識として子どもに知らせておいた方がいいです。特に大人の近づき方として典型的なのは、子どもの悩みにつけ込むということです。よく親との関係がうまくいっていないとか、学校でいじめにあっているとか、友達との関係がこじれている、というようなことをネット上に書き込む子がいるんですね。そうすると、「どれどれ僕が相談に乗ってあげるよ」ということで大人が近づいてきます。子どもとしても自分のことをやっと理解してくれる人が現れた、優しい人だ、ということで一気にその人に心を開いてしまう場合があります。子どもの悩みにつけ込む。まず悩んでいる子どもを探した上で、じわじわと誘い出していくというのが大人が取る典型的な手法として、まず知っておいた方がいいですね。やたらと相談に乗るよと言ってくるような人は、一旦は疑った方がいいですね。

さらにもう一つ、子どもへの誘い方として多いのはモデル事務所。「モデル事務所を紹介してあげる」とか、「新しいモデルさんを探している」ということで、子どもをおびき出そうとするようなメッセージが、子どもたちへのSNSに多数書き込まれています。しかしながら、実際そういうモデル募集というメッセージに誘われて出掛けて行ったところ、実はわいせつな撮影だったというようなケースもあるのですね。特に女の子というのは読者モデルとかファッションモデルという言葉に非常に弱いため、そこにつけ込まれてしまうということがあるわけです。

というわけで、ここまで大きく3つの被害に関してお話をさせていただきました。

続きまして、では、そのようなテーマに関するネットリテラシーをどのように教えれば良いのかということについてお話をさせていただきます。

まず学校の場合ですが、ロールプレイという手法がおすすめです。ロールプレイというのは、与えられた役のそれぞれの立場になりきって何かを演じるということですけれども、これをネット上で行う。例えばネット上のチャットで、教室の生徒たちの間でいじめる側・いじめられる側に分かれていろいろと文字を送り合ってみる。文章をやり取りしてみる。そうすると授業中であるということを忘れて、本気で怒り出したり傷ついたりするような子どもたちもいます。こういうことを体験することによって、文字によるコミュニケーションの特性というものを学ぶことができるという効果があるんですね。たとえ画面上の文字であっても言葉と同じように暴力になるんだよということが理解できる。さらに相手の反応に対して、間を置かずにどんどん自分も書き込んでいくと、本当に考えを深める暇がない。ぱっと思い付いたことを直感的に文字にしてしまう、そういうような傾向にも気付くかと思います。

さらに家庭の場合には、ネットトラブルの情報を是非親子間で共有していただきたい、ということです。これはそんなに難しい話ではありませんが、日頃ニュースでネットやケータイに関するトラブルは日々報じられていますので、それを親と子どもの間でネタにする。「この事件はインターネットをどんなふうに使ったから被害に巻き込まれてしまったんだろう」とか、「じゃあ被害に巻き込まれない

ためには、ケータイをどんなふうに使えばよかったんだろう」とか、そのようなことを親子で話し合うということなんですね。それによって子どもにとっても親に相談しやすい家庭環境というものが生まれてきます。「ああ、うちの親は私のネット利用を気に掛けてくれているんだな」ということが子どもに伝わるんですね。さらにルール作り。よく多くの御家庭で決められているルールというのは、「余り利用料金高くなっちゃだめよ」と、お金に関するものが結構多いんですね。でも、それよりももっと必要なのは、例えば「人を傷付けるような書き込みはしたらダメ」とか、「個人情報を書き込まない」とか、「フィルタリングを付ける」とか、「何かあったらすぐに相談してね」といったことです。こういったトラブルを防止するためのルールが重要です。これを家庭内でちゃんと設けましょうということですね。

そして最後に子ども本人の場合です。本人の場合は自分で考える、ということですね。親が子どもに携帯電話を与える前に、まず子どもに、ケータイを持つ必要性、さらにケータイを持つことによるメリット、デメリット、危険の回避方法ということをプレゼンさせる。そうすることによって、子ども自身が自分でケータイを持つべきかどうかを考えられるようになってきます。これは、親から頭ごなしに言われるよりもずっと効果的ですね。そういった意味でキーワードは、「想像力」だと言えるかと思います。

さて、最後にネット関連企業や国の対策として一点御提案しておきたいのが、大人へのモラル教育というのも、是非行ってほしいということです。ネットの利用に伴う青少年保護対策は、様々な取組が行われており、大多数の子どもたちは安心安全にネットを使いたいと思っています。しかし、下心を持った大人が子どもに近づいてきて、いろいろとちょっかいを出してくる。これは、子どもにとっては非常に迷惑な話ですよね。だからこそ、例えば大人のモラルを育てるために、大人がケータイを買う際には青少年健全育成条例に関するパンフレットも一緒に渡すとか、メディアが発信する性情報を鵜呑みにしないようなリテラシーを、大人にも養うための研修を行っていくといった、大人への啓発というものも是非一度考えていただきたいなということを、最後に御提案させていただいて、私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

【横田】

渡辺さんありがとうございました。

最初に安川さんから、子どもたちは気が付いていないけれども、無防備にLINEを使うことによって様々な被害を受けることがあるということを具体的な事例を交えてお話しいただきました。そのあと吉川さんから、とりわけ有害な情報、犯罪性のある情報の公開等についてお話がありました。その場合に特に犯罪性があるものについて、それがなかなか取締りが難しい。誰がそういう犯罪性のある情報を提供しているかについての特定が難しい。したがって取締りも難しい。それが国際的なものになるともっと難しい。しかも失った名誉なり、あるいはその損害について、それを回復する方法というのも非常に困難である、といったお話がありました。

そうなると、特に子どもたちを中心に、インターネットを通じての有害な情報に関わらないようにすることができるのかということが重要であり、それを最後に渡辺さんが加害者にならないためと、被害者にならないための発信受信の両方から具体的な例を挙げてお話いただき、最後に具体的にどういう教育をしていったらいいかというお話がありました。

3人のパネリストの発題を通じて、インターネットを巡る人権侵害の状況、とりわけ子どもがその被害者になり、また加害者にもなっている状況ですね。これは考えさせられるところがたくさんあったと思います。

＊このシンポジウムの「基調報告」の模様は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。

https://www.youtube.com/jinkenchannel

第 1-2 部　パネルディスカッション

【横田】


横田洋三さん

会場の皆様からたくさんの御質問をいただきました。御質問を御提出いただいた皆様にお礼申し上げます。パネリストのお三方それぞれに対しての御質問になっておりますので、今度は先ほどの発題の順序とは逆に渡辺さん、吉川さん、安川さんという順番で、まずそれぞれの方に対する質問に対応していただくというところから始めたいと思います。その上で、もし時間に余裕がありましたら、そのほかのことについても御発言いただこうと思います。そして、最後にお一人5分位ずつ3人のパネリストにまとめの発言をしていただきますので、その時間を取っておきたいと思います。

それでは、渡辺さんに対する御質問です。「ネットリテラシー教育においてロールプレイが有効であるということをお話しされていましたが、もう少し詳しく説明してほしい」という御質問です。そして、もう一つは「ネットリテラシーについて、青少年に啓発するときにロールプレイというのは、非常に効果的な1つの手段だと私も思います。というのは渡辺さんがおっしゃっていた通り、自分自身も瞬発的な言葉を発してしまうということを自覚できるからです」とこういうことが書いてあって、「しかしながら画像などが長く残る、あるいは一生に渡って残り続ける。それが将来的に自分の経歴を汚すものとして残ってしまう可能性があるということを教える場合、ロールプレイではなかなかカバーできないように思います。また思春期の子どもたちには、ディスカッションという手段は、なかなか使いにくいという点もあると思います。こういったことについて青少年にどう教えたらいいか、御教示いただけますでしょうか。」という趣旨の御質問です。渡辺さんお願いいたします。

【渡辺】

はい、御質問ありがとうございます。まずロールプレイについて詳しく説明をということですが、例えば私が以前取材した事例では、ある中学校で情報モラルを教える時間に生徒たちにネットを使ってチャットをやっていたのですが、その際にチャットのコミュニケーションを荒らす役の生徒を先生が指定しておくのですね。一人の生徒に対して「君、このチャットのやり取りの中で、できるだけいろいろな人の揚げ足を取ったり、馬鹿にするような発言をわざとやってくれ」というふうに頼みました。先生に指定されたその一人の生徒が、いろいろな人たちの会話に入り込んで、「お前そんなこと言っているけどわけ分かんないよな」といったようなことをバンバン言っていきました。そうすると言われた側の子どもたちは、本当に非常に腹を立ててしまったり、キレてしまったり、すごく傷ついてしまったりというような反応を示しまして、そこから言われた子どもたちもさらに言い返すんですね、ひどいことを言われたから言い返す。でもまた相手も言い返すということでどんどん応酬が続いていって、収拾がつかなくなる位になってしまいました。そういうことを経験することによって、実際その授業の後の子どもたちからは、「文字のやり取りでこんなに感情的になるということが分かった」とか、「面と向かって相手としゃべらないだけに、相手がどういう意図を持ってその言葉を発しているか分からないので、非常に悪い方に受け止めてしまう、あるいは敏感に反応してしまうということを実感として理解できた」という声が挙がっていました。

そして二つ目の御質問として、授業の中でのロールプレイでは、ネット上への画像の流出や残り続けることの危険性というのが理解しにくいのではないかということでしたが、確かに画像の保存に関しての危険性については、ロールプレイではなかなか教えにくいのかな、と私も思います。こうしたネット上でよく見かけるような画像とか性的な被害とかといったものに関する危険性については、今啓発ビデオなどがありますので、そういったビデオを見せた上でディスカッションを行うというのが有効だと思います。御質問の中で、思春期の子どもにディスカッションさせるのは難しいのではないかと

いうお話があったかと思いますが、実際には、いくつかの学校で子どもたちにディスカッションをやらせることによって、非常に子どもたち自身に気付きが芽生えているという事例があります。よくありがちなのが、取りあえず学校で啓発ビデオを見せて、作文を書かせて終わりというパターンですね。作文を書かせるだけだと、自分の気持ちを一方的に書くだけなんですね。ですから、周りの友達が同じビデオの内容に対して、どう思っているのかというのが分からない。だけれどもディスカッションをしてやり取りをすることによって、ああこういう見方もあるんだ。ああいう考え方もあるんだということを、子どもたちがそれぞれ認識していく。その思いを共有することによって、それ以降クラスの雰囲気が良くなっているということもあるんですね。そういった意味で、このディスカッションというのは十分使える手段ではないかなと考えております。

【横田】

ありがとうございました。もう一つ渡辺さんへの御質問があります。「やはり家庭でのネットリテラシー教育には限界があると思います。そこで学校での教育が重要になると思いますが、学校でのインターネットのリテラシーに関する教育の現状はどうなっているのでしょうか」ということですが、渡辺さんいかがでしょうか。

【渡辺】

御質問ありがとうございます。学校でのネットリテラシー教育の現状といいますと、学校によってかなりばらつきがあるんですね。例えば学校の先生で、従来からある道徳教育などではベテランであっても、ネットが絡むともう何をどう教えていいか分からないという方はたくさんいらっしゃいます。しかもベテランの先生ほど、新しい分野に手を出して失敗したくないんですね。それは自分の今後の出世にも関わってきますから。ですから若い世代の教師にばかりに押し付けてしまって、若い世代の教師の負担が非常に増えているという現状がまずあります。

さらに教える内容に関しても、先生方がいろいろな教材手探りで作ったり、使ったりしているような状況ですので、かなり温度差があります。それと学校教育の中で子どもたちに不評なのは、大人が上から目線でものを言ってくるということなんです。お前たちSNSなんかやったらいじめが発生するからもうやるなということで、先生が一方的に子どもたちの間でのSNSの利用禁止を命令するんですね。でも、子どもたちの間では、どうして先生に言われたからってやめなければいけないんだ、と当然のごとく反発をするわけです。すると教師の側が、言ってもやめない子どもたちのSNSの書き込みを印刷したものを、学校集会の中で全生徒に配ったというようなケースもありました。こういう非常に高圧的な教え方というのは、逆に子どもたちの心が離れていってしまいます。

ですから、やはりまずは先生方が、子どもたちが実際にどういう気持ちでネットを使っていて、そこには悪い面もあるけど良い面もあるということを理解した上で、現状に即した形で教えていくということが必要かなと考えています。

【横田】

ありがとうございます。今のお話は、学校教育におけるネットリテラシーについてでしたが、次の質問は「こういったネットの危険性についての教育は、学校教育は良いのでしょうが、同時に市町村の広報誌などを通じての教育、あるいは会社、企業などに対しての教育なども考えていくべきではないでしょうか。そういった場合に優先順位というものはどうなるでしょうか」というお尋ねですが、渡辺さんいかがでしょうか。

【渡辺】

御質問ありがとうございます。まず市町村における広報誌による啓発というのは、これは残念ながらかなり望み薄ではないかなというふうに思います。と言いますのは、もともと関心がある方はそう

いう広報誌もむさぼるように読まれますけれども、関心のない方というのはそもそも、まずそういったものはまず手に取らないですよね。ですから関心のない方にどう教えていくかというのが、これは非常に重要な問題です。

例えば学校の入学式や卒業式などのような保護者が必ず集まるような場で、半強制的にネットリテラシーに関する研修を受けてもらうというようなことが必要になってくるでしょう。

もう一つの企業における教育に関してですけれども、こちらはかなり有効ではないかと私は考えております。従業員にとって企業研修は、参加せざるを得ない義務として課せられています。ですから企業において、例えば社員たちに保護者としての責務、そのネットリテラシーの身に付け方というのを教えるのもいいでしょうし、あるいは先ほど申し上げましたように、大人自身のモラルを高めるための研修というものも、企業で行っていくと非常に有効ではないかと思います。

【横田】

今のお話にも関連しますが、「ネットトラブルの加害者・被害者にならないためには、家庭や本人そして友達間のルール作りの大切さを実感しました。さらにネットトラブルを防ぐために地域や社会で成すべきことがあったら教えてください」という、少し大きな質問ですが、渡辺さん何か示唆していただけますでしょうか。

【渡辺】

そうですね、地域社会の中で、同じ学校の同じクラスの家庭同士が連携して、同じようなルールで統一するというのは一つの方法かもしれないですね。

例えば子どもの場合、仲間内でSNSでやり取りをしていると、自分の親が夜10時以降はやっちゃダメと言っているからといって、ほかの家の親がそういうことを子どもに言っていなければ、どうしてもほかの友達たちに合わせざるを得なくなってくるわけです。しかし、全ての家庭で統一したルール作りをすれば、子どもたちの間でも変な心理的プレッシャーを受けることなく、同じようにネットを快適に使うことができるということがあるかと思います。そういった意味で統一したルール作りというのは、ぜひ試してみる価値はあるのではないかなと考えています。

【横田】

はい、恐らく学校で、地域社会で、あるいは家庭でも、もっとこの問題を話し合うことが大事だというのは、渡辺さんのお話全体を通して分かったことですね。その場合に、ルール作りというのは、あまり堅苦しく捉えるのではなくて、お互いに話し合ってじゃあこういうふうにしていきましょうと申し合わせるということがあるだけでも、かなり違ってくるのではないかというお話だったと思います。

次に、吉川さんにいくつか質問が来ています。まず、「実名報道を規制したり、それからルール化をするという国の動きはないのでしょうか。また例えば報道側の自主規制、あるいは報道基準のようなものはないのでしょうか」という点についてお答えいただけますでしょうか。

【吉川】

まず実名報道の規制の動きは、私が聞いている限りは「ない」かと思います。もともと報道のルールに関しても、マスコミ側の自主的なそのルールとして定めているもので、日本では、たまたま少年報道に関しては原則匿名だが、それ以外は原則実名というふうになっています。これを変えていくには、まず法律よりも先に、原則実名報道によりどういう問題が発生しているのかをマスコミの方々に認識していただいて、自ら考え直していただく必要があるのかなと思います。

【横田】

今のお話に関連して、「法的規制がある部分とない部分があるということですが、実は法の規制から

漏れているところが随分あるのではないでしょうか。これについて、どういうふうに考えれば良いでしょうか」という質問が来ていますが、いかがでしょうか。

【吉川】
それは、実名報道に関連する部分でですか。

【横田】
もう少し広い範囲であると思われます。例えば名誉毀損などについて触れられた部分も含まれていると思います。その様には書かれていないのですが。

【吉川】
そうですね。被害救済をするにあたって、警察の場合は法律に基づいて法を執行する機関ですから、もともと法律で禁止されていなければ警察は動けない。そこに現在のインターネット上で発生している実際の事例と現行法が対応していない隙間が生じてきているというのは、過去から現在までずっと続いてきていることなのですね。それは、その都度そういう問題を立法事実としての法律の改正であるとか、新しい新法の成立につなげてきている、ということの繰り返しだと思いますから、現に隙間が生じているものに関しては、それについて改正するための提言などをしていく必要があるのではないかと思っています。

【横田】
次に、御本人の経験を基にした具体的な質問があります。「私は実名報道されたために犯罪を犯したことが社会に広まってしまった。協力者であった友人がブログに載せた内容が今でもネット上に残っています。現在、社会復帰をしようと何かやり方を探そうとしているところですが、そのブログに掲載された内容が足を引っ張っているような気がしてなりません。どうしたら削除してもらえるのでしょうか。どういう所に行って相談したら良いでしょうか」という非常に具体的な質問なのですが、吉川さんいかがですか。

【吉川】
個別具体的な相談に関してのアドバイスというのは、その方とブログに書き込まれた方との関係性や、報道の内容、そしてその事件からどれくらい年月が経っていて、それがネット上に残っていることによってどのくらいの損害があるかとか、そういったことを一つ一つ精査した上での助言になるかと思いますので、この場ではお答えしづらいのですが…。実名報道の内容がネット上に残っていることによって、後々の社会復帰の妨げになっているということが、正に私が今日申し上げたかったことの一つであって、そのために一番重要なことは、そのきっかけとなっている最初の第一報の部分から匿名報道にしておかなければ、こういう問題がこれからも出てくるということだと思います。

現時点で、実名報道がそのまま名誉毀損になったということに関しては余り聞いたことがないので、最初の第一報に関しては社会的関心も高いことから、例えその人の社会的信用を損なうことが書いてあったとしても、法的には違法性が阻却（法律上、違法と推定される行為であっても、正当防衛や緊急避難を要する場合などの特別の事情がある場合には違法とはされないこと）されることになるのだと思います。しかし、それが何年も経って罪を償い終わった後で、ネット上の様々なサイトに転載されているような状態に至っては、もはや公共の関心も利益もないでしょうから、違法であると認定される可能性があると思われますので、被害者の方が転載している方を相手取って民事的に損害賠償請求の訴えを起こしたり、刑事的にも名誉毀損で訴えたりして、その判例を積み重ねていかないことには、なかなか世の中動かせないのかなと思っております。

【横田】

もう一つ吉川さんへの御質問です。「お話の中で、一度ネットに流出してしまった情報は騒ぐともっと拡大してしまうとおっしゃっておられました。学校裏サイトに掲載された情報などは削除依頼しても、そのことを特定されるとまたそれを突き止められて被害が拡大するということで、本当に子どものためを思ったら結局削除依頼はしないでいいのではないかと思われますが、この点について吉川さんは、どうお考えになりますか。それからネットリテラシーとの関係で渡辺さんの御意見を伺いたい」と書かれておりますので、もし御意見がありましたら渡辺さんにも御回答をお願いいたします。最初に吉川さんどうぞ。

【吉川】

削除を要請する必要性が高いか低いかは、その書かれている内容によると思います。先ほどの私の報告の中でも触れましたが、個人情報や画像に関しては、やはりネット上に存在し続ける限りは被害につながりますから、これは直ちに削除すべきだと思います。ただし誹謗中傷は、それによって本人がものすごく精神的にダメージを受けている、というのであれば削除しなければいけないのでしょうが、本人はそれほど気にしていないというのであればあえて無理に削除の手段に出る必要はないのかなと思っています。

私のこれまでの経験上、被害者が削除依頼を行なっていること自体、相手が面白がって余計に加害行動が強まるってこともありますから、本人（被害者）の捉え方次第なのでしょうね、名誉毀損に関しては。

【横田】

実害が出ている可能性はあるのだけれども、余りそれを深追いすることはかえって被害を大きくしてしまうような場合もあるのではないかということですね。

【吉川】

はい。こういうことというのは差別発言などにも共通する問題ですが、差別的な書き込みに対して1個1個削除していっても、それは結局対処療法にしかすぎなくて、書き込んだ人が認識を改めない限り、イタチごっこになってしまうのですね。ですから、学校でのいじめの一環として悪口をネット上に書き込んでいるのであれば、やはり現実社会の中でその誤解を解いたり、人間関係を良好にするといったことを優先しないと、ネット上の表面に見える書き込みだけに翻弄されても根本的な解決にはならないのかなと思います。

【横田】

分かりました。この点について、渡辺さんの御意見はいかがでしょうか。

【渡辺】

はい、画像などの削除に関しては、やはりその前提となるネットリテラシー教育としては、とにかくそういう画像を撮らせないということが最優先になってくるんですね。例えば性的画像におきましては、恋人間であっても安易に撮らせるべきではない。そうは言っても無理やり撮られてしまったというケースもあります。そうなりますと、もうこれは被害者側への教育ではどうにもならないですね。そうなりますと、加害者をどう教育するかという視点が必要になってきます。つまりそういった相手を痛めつけるような画像というものを撮るような子どもを育てないために、どのような教育が必要なのだろうかということです。

私が特に着目しているのは、一つ目が「想像力」なんですね。自分の行為が相手にどのようなダメージを与えるのか、自分がやったことで相手はどのような痛みを持つだろうか、そういった点を想像で

きるような力を育む。これはネット上で起こる問題であるかどうかに関係なく、いじめの問題にも共通することですが、自分がやることが相手にどのような効果を働きかけてしまうだろうかという点での想像力を育むための教育に、もっと力を入れていかなければならないと考えております。

それと二つ目は「加害者ケア」です。誰かを攻撃したいと考える子どもは、大方の場合、心の中に何らかの非常に満たされない思いというのを抱えています。例えば、その子自身が家庭では虐待を受けていたり、学校とは別の場所でいじめを受けていたり、あるいは何らかの非常に強いストレスを受けていたり、といったような心理状態にあることが多く見受けられます。ですので、加害者の子どもがそのような攻撃行動を取ってしまう背景に何があるのかという点まで掘り下げていった対策が必要になってくるのではないかと考えております。

【横田】

ありがとうございました。それでは、次に安川さんに寄せられた質問をいくつか御紹介します。

最初の質問は、「中学生の子どもがLINEに夢中で夜中までやっており、親子間のトラブルになっています。パスワードもしょっちゅう変えられて、画面（内容）を見ることができません。『既読無視』がどういうことなのかよく分からないので、もう一度スライドで解説していただきたい」ということと、「家庭でのルール作りについて御指導ください。アドバイスいただければ幸いです」という質問です。安川さんよろしくお願いいたします。

【安川】

まず親御さんたちも一度LINEをやってみたほうがいいと思います。親と子どもとの間で温度差があると、なかなかコミュニケーションって先に進まないんですね。分からない、と言う前に、まず親の方も分かる努力をすることが必要だと思いますね。

さらに、家庭の中で当たり前のことが当たり前にできているのかということです。先ほどもお話しましたが、食事中にLINEをやっていて、それを止められないような親になってはいけません。本当に自分の子どものことを想うのであれば、きちんと子どもと向き合って話をすれば分かってくれるはずです。「お母さんも毎日一生懸命御飯作るから、だから御飯の時はLINEとかやめよう」と、きちんと伝える。

勉強についても、「本当に友達のことを想うのであれば、お互いに勉強の邪魔はしないで、寝る前もずっとLINEにハマって寝不足になって学校で居眠りするとか、これは友達の足を引っ張り合っているだけでしょ。お母さんはちゃんとあなたに本当の友達を作ってもらいたいの」と伝える。本気で子どもと向き合って話をしたらちゃんと子どもに伝わるんです。感情的になってきつい言葉を浴びせ掛けても、絶対に子どもの心は動きません。本気で親が子どもと向き合うことが大切だと思います。それによって子どもが、「ああ、お母さんの言うこと分かるな」と思ったら、今度は子どもたち同士で話し合うんですよ。

子どもたちも、「なんかLINEやっていて疲れるよね。なんかLINEに縛られているな」って分かっている子どもたちはたくさんいるんですね。でも、友達を目の前にするとそういうことは話せないと言うんですね。1日中LINEやっている子どもは、学校に行ってから友達との会話がないと言います。LINEで前日にテレビの番組とかの話をしているんですね。テレビを見ながらLINEでやり取りする。本来は、学校に行って友達同士で話をすることって楽しいはずなんですよね。でも前日に、ずっとLINEでやり取りしているし、授業中もLINEでやり取りしているから、実際に顔と顔を合わせてのコミュニケーションが苦手になっている子どもたちがたくさんいます。これは親の責任でもあります。分かっているのに注意もできないような親になっちゃいけません。当たり前のことを言うだけなのです。当たり前のことが当たり前にできていれば、人の気持ちが分かる子どもに育っていくはずであると思います。

【横田】

ありがとうございました。もう一つ安川さんへの質問です。「女子に対する児童ポルノ、子どものポルノの問題について触れられていますが、逆に女子が男子の裸を盗撮し、ネットで拡散させるというようなことはあるのでしょうか」という、そういう事実があるのかどうかを確認する質問ですが、安川さんいかがでしょうか。

【安川】

これまでに私ども（全国ｗｅｂカウンセリング協議会）に寄せられた相談の中ではありません。男子同士が面白がって、ということはありました。修学旅行の時に隠し撮りしたのをネット上で拡散したというケースはありましたね。ただ、一度ネット上に他人に見られたくない自分の画像を拡散されてしまうと、精神的に弱い子の場合は大きなショックを受けて、それが原因で学校に通えなくなっているという相談は寄せられています。

【横田】

私自身は、これまで国連（国際連合：United Nations）やILO（Internationl Labour Organization: 国際労働機関）などの国際的な場において、人権の問題に関する議論に参加する機会を何度も持ってきました。今のお話にも関係があるのですが、国際的な議論の場では、男の子のポルノというのが非常に深刻な問題として挙がっています。このことについて、日本の国内ではあまり問題にされていないのですが、実は日本発の男の子のポルノが海外で利用されているのですね。ですからこれは、吉川さんのお話の中で触れられたように、国際的にそういう問題が起こって、加害者と被害者が国境を挟んで別々の国にいるような場合、しかもプロバイダがまた別の国にあるというような場合には、被害者はいるし、加害者もいるのですが、なかなか手の施しようがない、というような問題が国際的な人権の議論の中ではかなり出てきています。これに対してどう対処すればよいのかという答えはないのですが、国際的に日本政府に対してきちんと取り締まってほしいという声も挙がっているということを紹介させていただいて、そういう問題があるということだけ指摘させていただこうと思います。

さてここで吉川さんへの質問が来ております。「有名人が、その人にとって人々に知られたくない内容について実名報道されて、本人がその事実を認めている場合、名誉毀損になるのでしょうか」という質問なのですが、いかがでしょうか。

【吉川】

ちょっとイメージが湧きづらいのですが、有名人本人がその事実を認めている場合は名誉毀損にはならないのかなという印象はあります。ただ、名誉毀損に当たる場合としては、書いてある内容が真実であったとしても、それによってその人の社会的評価が損なわれる恐れがあれば違法は違法なんですね。例えば誰かと浮気したというような事実が報道されて、本人がそれを認めたとしても、認めたからと言ってネット上でそのことを書かれることについて許容しているわけではない。となると、それはそれで名誉毀損に当たる可能性はあると思います。

【横田】

その辺りの線引きは恐らく難しい部分もあって、具体的な事例の中で、裁判等で明確になる場合もあるのだろうと思いますが、一般的にはやはりその人の尊厳が傷つけられるような報道があれば、本人がその事実を認めたとしても、やはり名誉毀損は名誉毀損に当たるかも知れないという印象はありますね。

【吉川】

もう一つだけ付け加えると、有名人の場合と一般人の場合とで、若干やっぱり違法性の阻却される

要件が変わってきます。政治家や芸能人というのは、有名である分、国民の関心も高いわけですから、特にプライバシーに関わらない限りにおいては多少のことが暴露されたとしても、それが違法だとして訴えたとしても、罪に問われないケースの方が多いですよね。特に政治家なんかの場合に、政治家がどういう方たちと付き合いがあるのかというのは、その方の政治家としての活動にも関わったりすることだったりしますから、報道される内容によって受け取り方も変わってくるのではないかと思います。

【横田】

ありがとうございました。渡辺さんにも追加の質問が来ています。「悪ふざけ画像について、自分が受信したという時に、その受信したということを悪ふざけの対象になった人（被害者）に知らせることについては、どう考えたらいいのか」という質問です。

それから「また自分が受信したものをほかの所に発信することについても、拡散することについても本人（当事者）に伝えればいいのかどうか」という質問なのですが、その点についていかがでしょうか。

【渡辺】

本人（当事者）に伝えるべきかどうかということですが、とりあえず自分が受信したということは、わざわざ自分から伝えなくても、もしかしたら相手は知っているかもしれませんが、やはりこれは伝えるべきではないと思います。さらに自分が、拡散すべきかどうかっていうことに関しても本人に確認を取るべきかということですが、「これは拡散すべきではない。それが自分にとっての正義である」と考えるのであれば、仲間に対してもこういう画像は拡散すべきではないということは伝えるべきだと思いますが。一方で発信者との仲がこじれてしまうことがどうしても怖いということであれば、たとえ拡散はしないよということを相手に伝えないにしても、相手に知らせないままでも拡散は自分の中ではしないようにとどめるというのも、良いのではないかなと考えています。

【横田】

次の質問です。「個人名を出した情報というのは、その人の名誉を傷つける場合もあって、名誉毀損になる場合もあるということですが、個人名を出さなくてもその人だと分かる間接的な表現をしている場合にはどうしたらいいのでしょうか」という質問ですが、吉川さんその点についてお話しいただけますか。

【吉川】

例えば有名な方が使っているハンドル名[1]や芸名などは、それだけで十分誰かが特定できますから名誉毀損に当たるケースが多いですね。ですから、どの位の数の一般の方々がその情報を知っていて、どこの誰のことを言っているのかが分かるかどうかの度合いによって、名誉毀損に当たるか否かの判断の分かれ目になると思います。

【横田】

そうしますと、仮に間接的な表現だったとしても、誰が見ても分かる表現であれば、やはり名誉毀損などの問題として取り上げられる可能性があるということですか。

【吉川】

そういうことだと思います。

1　インターネット上の掲示板などで使用するニックネームのこと。ハンドルネームとも言う。

【横田】

分かりました。ありがとうございます。次の質問は、これは一般的な話になりますけれども、「今日の内容は、比較的インターネットのネガティブな面がいろんな形で紹介され、これはこれで非常に大事なことで我々も知っておく必要があるし、またそれによって対応を適切にする必要があるわけですが、人権に関連してインターネットがポジティブな方向に進んでいる面もあるのではないかと思います。そういった事例があったら教えてください。それが、学校内や世界中で、そして家庭内で、インターネットがどういうふうにポジティブに機能しているかということについて、具体例があったら教えてください」ということですけれども、どなたからでも結構ですので、御回答頂ければと思います。それでは、渡辺さんから口火を切っていただけますか。

【渡辺】

インターネットが人権に関してポジティブに機能した例ということで、私が過去に観察したケースを御紹介します。まず、学校裏サイトのような掲示板で、ある一人の女子生徒に対していろいろな生徒から誹謗中傷の書き込みが行われていたんですね。すると、次第にその中の一人が「こんな書き込みをするっていうのは卑怯だよ、やめようよ」ということを言い出したんですね。するとまた別の人が「そうだ、そうだ」という形で、「相手に言いたいことがあるんだったらちゃんと面と向かって言おうよ。言えないことはここに書き込んだらだめだよ」ということをまた書き込みました。その流れが広がってくると、誹謗中傷されていた被害者である女子生徒も「私に言いたいことがあるんだったら直接言ってよね」ということを書き込み始めたんですね。

このようにネットの中であっても、子どもたちの間で自浄作用が働くというケースがあります。というのもネットの中では匿名で発言ができますので、もちろん問題発言の場合は突き止められる場合もありますけれども、ですので自分の身元がばれないという気安さから、被害者をかばうということも実はやりやすいという点があるんですね。だからこそ、このような掲示板のやり取りの中で大人がわざわざ介入しなくても、時間を掛けて見ていると徐々に良い方向に変化していくケースもあります。

【横田】

今の点について、吉川さんはどのように考えられますか。

【吉川】

私の場合、インターネットの光と影の側面であれば、仕事柄、どうしても影の方ばかり見ているもので、なかなか光の方が分からないのですね。特に人権という観点から、インターネットがポジティブな方向に働いているケースというのは、今渡辺さんの話でお聞きして、なるほどそういう側面もあるのかと初めて思ったくらいでして。

人権とはちょっと外れるかもしれませんが、たとえば東日本大震災（2011（平成23）年3月）の時でも、行方不明の方の情報がSNSなどに掲載された情報がきっかけとなって、居場所が分かったという良い部分もありましたよね。

ただどうなんでしょうか、人権に関してインターネットのポジティブな部分というのは、私は正直存じ上げていないですね。

【横田】

安川さん何かございますか。

【安川】

ろう学校（特別支援学校）に通っている生徒が、普段はやはり手話を使って会話をするのは、ハードルが高い（聴覚障害者の手話理解率は15％程度）と言うんですね。でもネットを通じてコミュニケー

ションを行うことで、普通に誰とでも会話ができる。だからネットの世界では、自分らしく生き生きとしていられる、という話をしてくれたケースがありますね。

あと、ある不登校の生徒の場合、クラスの中では誰も話をする人がいないけれど、唯一ネットの世界の人々が自分のことを理解してくれると言うんです。その人たちが私のことを一生懸命励ましてくれるから、今私は学校に通えているんだという話もありました。

【横田】

今のような話は本当にあることだと思います。私も人権に関することに長年携わってきたという立場上、これまで障害のある人を含めていろいろな人に話を聞き、インタビューするという機会がありました。そういう時に、障害のある人の中には、インターネットがあるお陰で自分が思っていることを表現できる。あるいは人が言っていることが自分に伝わってくる。言葉が口に出せない人や手が不自由なために書くことができない人なども、インターネットを使えば、時間は掛かるけれども、とにかく自分の表現ができるとおっしゃっているのですね。私は、これは技術革新が持っているすばらしい人権へのポジティブな面の一つだと思うのです。これはほかにもいろんな形で活用できると思います。

もう一つ私の方から紹介させていただきますと、国際的にインターネットが人権の促進に貢献している面として、例えば独裁政権の下で苦しんでいる人たちが国内で何が起こっているかを外に発信して、その情報を基に外から支援の手が差し伸べられ、そしてその国内にも外の人たちがその政権についてどのように考えているかということを伝えることができるのですね。こんなひどい政権はもう国際社会では認められないという空気があるとすれば、国内で黙っていた人や抵抗してもしょうがないと思っていた人々が、結束して立ち上がって政権を倒すという流れへとつながっていく。いわゆる民主化の流れですね。具体的な国名は挙げませんが、ここ十数年の間にいくつかの国で実際に起こっていることなのです。そういう意味でインターネットが、場合によっては独裁政権下の国の弱い立場の人々にとって貴重な情報源になると同時に、国外への情報発信の手段にもなっている。しかも、インターネットを利用した情報の送受信を独裁政権や軍事政権がコントロールできないということが、一つの強みになっている。本日の話の中に出てきたインターネットの問題点や弱点が、場合によると強みにもなるということですね。

要するに、インターネットをどういうふうに使うのかというところを、もっと考えていかなければいけない、使い方の問題になるのだろうと思います。人権的観点からインターネットについて論じる場合、どちらかというと問題点や負の側面ばかりが指摘されがちです。それはそれで大事なことなのですが、御来場いただいた方からインターネットのポジティブな面もあるのではないかという質問を出していただき、新しい気付きにつながったのではないかと思います。その点についてお礼を申し上げます。

次の質問は、御自身の経験に基づいた内容です。「『あなたのことを誹謗中傷する書き込みがブログに載ってるよ』と知り合いから言われ、見てみると確かに自分のことが書き込まれていました。しかも、その書き込みのことが周囲の人たちの間で噂になっている、とのことでした。なぜ、こんなことになってしまったのか、そして被害者としてその書き込みを削除してもらうために何をどうすればよいのか、分からなくて何もできないでいます。何か手立てがないものでしょうか」という御質問です。先ほどの吉川さんの報告の中で、被害者側が下手に反応すると、加害者側が面白がって、悪い方へさらにエスカレートすることもあるというお話があったかと思います。そこで吉川さんにもう一度確認のような質問になってしまうのですが、このような場合に加害者側にそういった行為をやめさせる方法がないのか、またどこに相談に行けば良いのか、といったことについて、コメントいただけないでしょうか。

【吉川】

加害者側が応じるかどうかは分かりませんけれども、まず書き込みを行なっている張本人に対して、

こういう理由でやめてほしいと言ってみるのが第一段階ですね。応じなかった場合には、次の段階として、そのブログを提供している企業に対して、この書き込みが権利を侵害する情報に当たるので削除してほしいということを、プロバイダ責任制限法などに基づいて働きかけることが正攻法ではあります。あとは、書かれている内容によっても、対応の仕方は変わってくると思います。その人のことを全く知らない不特定多数の人々にまでその人の名誉を害するような影響を与えているのか、それとも友達などのごく狭い範囲だけなのか、そういった違いによっても対処の仕方は違ってくるのかなと思いますね。誹謗中傷の内容が不特定多数の人々の目に触れるような場合は、やはり削除する、削除させることが最優先になってくるのでしょうね。

【横田】

ありがとうございました。いずれにしても、これという特効薬的なものを示すことは難しいですね。それから、それぞれのケースによって、取り巻く状況や加害者がどういう人なのか、また被害者がどういう人なのか、といった様々な要素が絡み合ってくるということになるので、最終的には全国の法務局・地方法務局にある人権相談窓口や弁護士などの様々な機関に相談することによって、それぞれの内容に応じた何らかの道が開ける可能性があるのではないかと思います。ありがとうございました。

それでは会場からの御質問はこれで終わりますが、少し時間がありますので、私自身が感じていることを、パネリストの皆様にお伺いしたいと思います。

まず、安川さんにお伺いします。携帯電話やスマートフォンのフィルタリング機能を設定すると、ほかの機能も使えなくなるからダメだと子どもたちは言いますが、子どもを守るためにはフィルタリングは絶対に掛けた方が良い、そのほうが安全である、しかし、子どもたちはなかなかそれをやりたがらないということをお話しされていました。コンピューターやタブレット端末、スマートフォンでもいいのですが、子どもに対して与えるインターネットに接続できる機器については、有害なサイトへのアクセスができないフィルターが無条件に掛かっているようなものにするということはできるのでしょうか。それともできないのでしょうか。私は素人考えながらに、そのようなものが世の中に出回って、フィルタリングを掛けるか、掛けないかの選択権が子どもにあること自体が、ちょっと不自然な感じがするもので、質問させていただきます。

【安川】

今の子どもたちは、いかにも“子ども子ども”しているものを欲しがりません。大人が使っているものと同じものを欲しがります。ケータイやスマートフォン、タブレット端末、DS[2]などのゲーム機でも同様です。ネットに接続可能な機器は、子どもたちが利用する場合は、やはりフィルタリングが必要になります。こういったものをフィルタリングも掛けないで子どもたちに使わせて、理解のある親を演じている場合ではない。本気で自分の子どもを守りたいと思うのであれば、犯罪に巻き込まれることのないようにフィルタリングを掛けることが、親として最も大切なことだと思います。

【横田】

分かりました。どうやっても、今の子どもにフィルタリングのような制限を加えたようなものを渡しても喜ばないということですね。そういったことがある以上、やはりインターネットの危険性を子どもに理解させ、同時に親にも理解させて、問題があることを親子で共に考えてフィルターを掛けるようにするというのが、安川さんからの御提案ですね。

次に吉川さんへの私からの質問です。つい先日三鷹で起こった女子高生が元交際相手によるストーカー行為の後に殺害されてしまうという大変残念な事件がありました。この三鷹女子高生ストーカー

2　Nintendo DS：任天堂が開発、販売している携帯型ゲーム機シリーズの略称。Wi-Fi（ワイファイ）を通じてインターネットに接続することで、遠方の人々とのコミュニケーションやゲームの対戦などが可能となる。

殺害事件でもそうでしたが、近年、インターネットが絡んだ犯罪が報道等でも多く取り上げられます。一方で、犯人が比較的早い段階で特定される要因として、やはり監視や防犯のためのカメラ等の最新の情報収集の手法が使われているわけですね。これは、イギリスのように個人情報の保護に非常に敏感な国民性の国でさえ、犯罪防止のためにかなりの数の防犯カメラがロンドンの街中のあちこちに張り巡らされて、テロなどの防止に役立っているということも新聞等で報道されています。犯罪防止のために防犯カメラはかなり活用されていて、ある一面においては凶悪な犯罪がある分だけ、それを容認する雰囲気もあります。しかし他方では、先程の報告の中にもありましたように、どこを歩いていても全部チェックされているといったような個人のプライバシーに関する問題があります。この問題について、吉川さんはどういうふうに考えたら良いと思われますか。

【吉川】

犯罪抑止効果として、確かに防犯カメラなどは非常に効果があると思います。一方、街中への防犯カメラの設置について反対する人々はプライバシーが侵害されると言うのですが、基本的に外を歩いているのにプライバシーもなにもないだろうということがありますよね。カメラで記録された映像が、やみくもに誰でも見ることができる状態だとまずいと思いますが、その映像の使い方についてきちんとルールを設けておけば良いのではないでしょうか。例えば、コンビニの防犯カメラは、アルバイトの店員は容易に操作することができず、警察などが犯罪捜査の関係で照会や差し押さえした場合のみ使うことができるようにするなどというルールの上で管理しておけば、プライバシーは守られつつ、いざ犯罪が起こった時には、その映像が証拠となって犯人特定につなげることができる。また、カメラがあることによって、ここでの強盗はやめておこうというような犯罪の予防効果もあると思いますので、インターネットも防犯カメラと同じ様にきちんとしたルールの下で管理された上での犯罪抑止的な機能の要素は、絶対に必要だと思います。

現に、誰がどんな書き込みをしてもばれないという完全匿名掲示板には、よからぬことを考えている人々が集まってくるという現実がありますしね。その反面、本人確認が厳密なサイトなどでは、やはり悪いことはしないわけです。仮に悪いことを書き込んだりしたとしても、容易に特定できますから、対策としては十分だと言えると思います。

【横田】

ありがとうございます。本当によく分かりました。やはり犯罪抑止のための防犯カメラというのは重要だけれども、それを実際にどう使うか、誰に対してどういう手続きで使わせるかという辺りのことを明確にすることが大事ですね。

【吉川】

運用ルールをしっかりと決めておくこと、ですね。

【横田】

ありがとうございました。

それでは、もう一つ渡辺さんにお聞きします。子どもたちへのネットリテラシー教育の重要性ということについて、私も全く同感なのです。しかし、それが大事だということは皆分かるのですが、日本の場合、小・中学校でこれを教えるということになりますと、どの教科でどういう形でそれを入れ込むかっていう具体案がないと、実現が難しいのではないかと思います。実際、現場でどのように取り組むのかというと、先生方に任されるということになるのでしょうが、現実問題としては授業のカリキュラムはほかの教科が一杯一杯になってしまっているということで、ネットリテラシー教育などは隅に追いやられてしまうという、そういう心配があるのですね。

先ほど、欧米におけるネットリテラシー教育への取組についてお話されていましたので、外国の例

でも良いのですが、子どもたちに対して、どのように教科の中に入れて教えているのか、そして日本の場合はどのようににしたら良いのか、お聞かせいただけますでしょうか。

【渡辺】

日本では、文科省の学習指導要領において、情報モラル教育については、中学校であれば家庭技術科、また高校であれば情報科で教えようというふうに、一応定められているわけですね。しかし、その中でどのようにして、どの程度教えるかというのは、それぞれの学校や先生の裁量ということになってくると思います。

海外のケースでは、私が知る限り、例えばカナダの場合は政府が市民団体と連携してネットリテラシーの授業を学校現場に出向いていって実施する。あるいは、その市民団体が作った教材を学校現場で使用するといったことが行われています。これは、デジタルリテラシーという形で一つの教科として確立しているケースですね。

【横田】

ありがとうございました。

残り時間が約15分となりましたので、パネリストの皆さんの中で、言い足りないことや、ほかのパネリストのお話について、ちょっとコメントしたいというようなことがあるかもしれません。ここでお一人3分ずつまとめの話をしていただこうと思います。それでは、安川さんからお願いいたします。

【安川】

本来、親であれば、子どもの異変に気が付かなければならない。例えばネット上に悪口を書かれている子どもの場合、そのほとんどは自分の親には相談していません。親にだけは知られたくない、こんな書き込みされているなんて親に思われたくないと。でも、よく見ていたら分かりますよ。表情が違いますもの。何かあるなって、親であれば子どもの異変に気が付かなければならない。それがケータイに縛られて普段から子どもとコミュニケーションをしていなければ、子どもの異変にすら気が付かない。これではまずいですよ。ちゃんと子どもの異変に気が付くことができる親にならなければならないのですね。

そういう時に例えば子どもの名前出して、ゆかという名前であれば、「ゆか、どうしたの。何かあったら何でもお母さんに言って。お母さんね、どんなことがあってもゆかのこと守っていくから。ゆかはお母さんの大切な子なんだから」と言ってあげる。子どもは、気が楽になったら本音が出てくるんですよ。「ネットに自分の悪口が書き込まれている」――と子どもの本音が出た時、ほとんどの親は「そんなの気にするんじゃない」とか「見るんじゃない」って言ってしまうんですね。これは絶対に言わないでください。悩みを抱えた子どもから親が相談を受けた時に、「見るんじゃない」とか「放っておきなさい」と。本気で子どものことを考えていたら、そういう言葉って出ないはずなんです。今日この会場にお越しの方々の中にも、ネット上にひどいことを書かれたことのある人はお分かりになると思います。ネット上に自分の悪口を書き込まれる――これは面と向かって言葉で言われるよりも、本当に傷付くんですね。「見るんじゃない」なんて、絶対に言ってはいけません。学校の先生方も同じです。「気にするんじゃない」なんてことを生徒に対して言っている先生がいます。きちんと生徒の立場になって、子どもの立場になって考えてあげてください。

私ども全国webカウンセリング協議会でも相談を受けています。先ほど、削除依頼はしない方が良い、かえって炎上する場合がある、といった主旨のお話が出ていましたが、子どもが被害者である場合、その子の個人情報や誹謗中傷が書き込まれていたら、すぐに対応してあげてください。そうしなければ、書かれている子どもたちはたまったものではないですよ。サイトごとに、ガイドラインは決まっています。ちゃんと子どもたちのことを考えて、無責任な言葉だけは掛けないであげてください。

【横田】

今のお話非常に大事だと思います。私はもうかなり年齢を重ねておりますので、子どもから「お父さんはアナログ人間だから」とデジタル音痴の部分を冗談半分にからかわれることもあるのですけれども、これまで私なりにインターネットと人権の問題を考えてきて感じることは、デジタルあるいはインターネットというものは一つの手段であって、それは人間の生活を豊かにしている、便利にしているというところがありますけれども、一番大事なことは、人と人の、目と目の、肌と肌の触れ合いの部分だと思います。先ほど、安川さんがおっしゃったことは、その人と人との触れ合いの部分を押さえた上で、インターネットの問題に取り組んでいくことが大事だとおっしゃっているのではないかと思いまして、私も若干我が意を得たりと思いました。

それでは、吉川さんお願いいたします。

【吉川】

人権施策とは、対処療法としての人権救済と根治療法としての人権啓発であると言われます。これらが、有機的な関係を保ちながら推進していくことが重要だと言われているのですが、私はそれに加えてもう一つ予防的対策というのが欠かせないのではないかと思います。救済とか啓発だけでは、実際に違法なことをした人の検挙とかの話しが出てきませんので、予防対策が必要だということです。その予防対策には、特別予防と一般予防というのがあります。特別予防というのは犯罪者の検挙です。ネット上で違法情報を発信したりした人は、海外のサーバーを使ったり通信経路を偽装するなどして、様々逃げようとするわけですが、逃げ得を許さないためには、悪質なものに対してはやはり徹底的に検挙して広報していく必要があると思います。絶対に捕まるんだよということを知らしめることが、間接的な予防効果もあるのですね。

その上で必要なのは、やはり国際的な捜査共助だと思っていまして、いま国内に関してはほとんどのプロバイダは警察の捜査に対して協力しますし、削除依頼への対応に関しても日本の法律に基づいた削除のルールを持っていますから良いのですが、アメリカのプロバイダなどの場合は、法律の違いがあったりそれから国際的な捜査共助が取れたり取れなかったりしたりする国もありまして、そこで捜査が途絶えてしまうということがあります。これはどの国でも同じような悩みを抱えていると思いますので、インターネットに関しては国境がないということを強く意識して、捜査に関しても国際的な協力をより高めていく動きが必要であると思います。

そして一般予防の部分では、おおむね2つの要素があるのですが、1つがサービスの悪用防止対策です。例えば今問題になっているLINEでは、LINEのIDを交換することで、児童が大人と出会って援助交際に走ったりするということが起きていることから、18歳未満の利用者のIDを検索できないような規制がようやくスタートしたばかりです。そういう悪用防止対策を事業者が自主的に行うことで防げることが多々ありますので、まずはそういった部分についてきちんと対応していくことが、子どもたちの被害を未然に防止するという意味で大きな効果があると思います。その上で、悪用防止という点では本人確認なども重要になってきますので、これまでインターネットカフェに対して利用者の本人確認をちゃんとやって、どういう端末を利用したのか記録して、不正利用したときに後から分かるようにしてくださいねと働きかけをやってきて、ここへきて東京都が条例でそれを義務付けておりますけれども、プロバイダに対してもきちんと利用者の本人確認をやって、ログ（利用履歴）もちゃんと残して、警察から照会があればちゃんと答えられるようにしておきましょうということも、検挙という特別予防の効果を上げる意味で必要になってくるのかなと思います。

あとはサイバーパトロール[3]のような形で、事業者が自ら自分たちのサービスの中を見て回ることはもちろんのこと、ボランティアの方々を始め多くの方がインターネット上に違法な情報がないかどうかを見て回って通報するということも、様々な被害や犯罪予防のためには必要になってくると思い

3　インターネット上のウェブサイトを巡回し、犯罪や自殺幇助などの有害情報をはじめ、著作権侵害やわいせつ物の頒布、薬物の売買などの違法行為を見つけ出すこと。

ます。

【横田】

ありがとうございました。予防という観点の重要性というのを指摘して頂いたのは、大変大事だと思います。恐らくこのことは、渡辺さんの言っておられるネットリテラシー教育にも当てはまりますね。ネットリテラシー教育そのものが、正にネット犯罪から子どもを守るための予防ということにつながると思います。

その点も含めて今度は、渡辺さんお願いいたします。

【渡辺】

ネットリテラシー教育における予防の側面ということで特に強調させていただきたいのは、先ほどの私の報告の最後にも申し上げましたが、大人に対するモラル教育という部分なのですね。といいますのも子どもの性被害事件の場合、その加害者のほとんどは大人なんですよね。青少年保護というのは非常に便利な言葉で、子どもたちっていうのは判断能力も低いから弱いから守ってあげなきゃいけない存在なんだと、いろんな縛りを掛けなきゃいけないんだということで、青少年の側にはいくらでも縛りを掛ける、保護を理由に規制を掛けるということをこれまでやってきたかと思います。その一方で、加害者の大部分が大人であるというこの現状をどう考えるのか、ということなのですね。

私は以前、国の青少年保護担当の方に大人への対策についての話をお聞きしたことがありまして、その時は「いやぁ、大人に対して何か対策を取るのはあんな理由やこんな理由もあって、いろいろ難しいんですよね」ということで話が終わってしまいました。今の話のように、できない理由を探すばかりでは、何も前に進まないんですね。現行の制度の枠の中でどのような対応ができるのかを考えるよりも、より良い対応をするために現行の制度をどう変えていくのかという視点が、非常に重要になってくると思います。ですので、青少年保護というのはもちろん必要ですが、一方で大人に対する対策というものをどう考えるのかっていうことに取り組んでいただきたいと思います。その実現のためには様々な障害があるかと思いますが、万難を排してもし、青少年の保護を本当に重要であると考えるのであれば、大人に対するモラル教育について取り組んでいただきたい課題であると考えております。以上です。

【横田】

ありがとうございました。3人のパネリストにきちんと時間を守りつつ、内容のあるお話をしていただき、さらに会場からの質問にも適切に答えていただいたことを感謝したいと思います。

残りの時間で少しだけ私からコメントをさせていただいて、今日のシンポジウムを終えたいと思います。

1つは先ほどパネリストの皆様もおっしゃられていたことなのですが、予防対策と教育の重要性と同時に、その点で恐らくメディアが重要な役割を果たすだろうと思います。例えば吉川さんが先ほど予防対策のお話をされた中で、インターネットを使った犯罪を行えば、必ず捕まるということを知らせること自体が予防になるとおっしゃっていましたが、それを周知する方法として、やはりメディアの役割は大きいであろうと思うのですね。ですから、そういうことを含めて、サイバー犯罪を防止するためにどのように取り組めば良いのかということについて、メディアの立場で考えていただけると良いのかなというふうに思いました。

もう一つは、今日は主に子どもたちとインターネットに関連する内容を中心に話を進めさせていただき、これは今日のシンポジウムの目的の大きな柱でした。それと同時に、人権的観点から、子ども以外にも様々な形で「弱者」と言われる立場の人がいるわけなのですね。例えば高齢者。私も年齢を重ね、だんだんそのカテゴリーに入ってきましたが、インターネット社会に入れないことから来る高齢者の様々な問題があります。最近では、これまで役所に行かないとできなかった様々な手続きが、

御存じのとおりインターネット上でできるようになっています。中には、インターネット上でないとできないような手続きもありまして、私のように少しだけインターネットに触れる者でも、どのようにすれば良いのかということを学ぶだけでも、若干時間が掛かるようになりました。私より上の世代の方々は、恐らくコンピューターを使えない方がかなり多いのではないかと思われます。しかし、様々な会合に出席する場合でも、インターネットを通じての予約しか受け付けないということが増えてきています。そういう問題があって、社会的弱者が被るインターネット時代の様々な制約という被害もあります。恐らく「オレオレ詐欺（振り込め詐欺）」などについて、これだけ様々な媒体を使って注意されているにもかかわらず、被害が後を絶たないという状況があるということを考えると、インターネットを通じての犯罪の被害者として高齢者が増えていく可能性があります。例えば、投資話とかそういう類いのことですね。実際に私のところに、インターネットを通じてのいい加減な投資話の呼びかけが来ています。もちろん、私はそれを無視しますけれども、インターネットを利用し始めて日の浅い高齢の方が、ひょっとするとなりすましの人にだまされるという危険性もあるような気もしています。そういったことも、今日のこのシンポジウムをきっかけに、子どもの人権を考えるということで始まったシンポジウムですけれども、社会的弱者が抱えるインターネット時代の問題点についても、今後は考えていきたいと思っております。

私の方からは、インターネットを利用するにあたっての犯罪等の被害に合わないための予防対策と教育を推進する上でのメディアの役割、そして子どもや高齢者などの社会的弱者の問題を指摘させていただき、「インターネットと人権」のシンポジウムを終えたいと思います。長時間御清聴いただきありがとうございました。

＊このシンポジウムの「パネルディスカッション」の模様は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。
https://www.youtube.com/jinkenchannel

●関連情報

＊全国ｗｅｂカウンセリング協議会　http://www.web-mind.jp/
＊日本青少年キャリア教育協会　http://www.kyousei-kyouiku.or.jp/care...
＊安川雅史 Official Website　http://www.yasukawa.info/
＊不登校・ひきこもりと闘う！！～心理療法カウンセラー 安川 雅史のブログです～
http://www.hikikomori-navi.com/weblog...

＊ＷＥＢ１１０（ウェブ ワンテン）　http://web110.com/
＊インターネット・ホットラインセンター　http://www.internethotline.jp/

＊MAYUMEDIA-渡辺真由子 公式サイト　http://www.mayumedia.com/
＊渡辺真由子のメディア・リテラシー評論　http://mediaw.cocolog-nifty.com/
＊渡辺真由子 フェイスブック　https://www.facebook.com/mayumania

第２部　トークショー／講演
「インターネットが授けてくれた 10 の大切なこと」

古新　舜（コスモボックス株式会社代表取締役社長 CEO、映画監督）

【古新】


古新舜さん

皆様、本日はお足元の悪い中こちらまでお越しいただきましてありがとうございます。映画監督の古新舜と申します。本日はこのような貴重な機会をいただき、私自身もとても楽しみと言いますかワクワクしております。

私は現在、自分の会社を経営しながら映画監督として活動しております。実は、私にとって初長編作品となる映画「ノー・ヴォイス」（http://no-voice.com）が、来月（2013（平成25）年11月）劇場公開されることになっております。ですので、まだまだ駆け出しの映画監督でございます。そんな私が、映画監督になって10年目にして長編作品の劇場公開に至ることになったのですが、そのきっかけが実は19 歳から22・23歳の頃のインターネットとの出会いでした。この自分自身の10年間を振り返りながら、インターネットを通じて私がどのような体験をしたのか、どんなことがあったかということを皆様にお伝えできればと考えております。先ほどのシンポジウムの中でパネリストの皆様がおっしゃられていたのは、LINE（ライン）のことやセキュリティの問題といったように、インターネットのネガティブなところが多かったのですが、この講演への登壇依頼をいただいた際に、御依頼主（人権教育啓発推進センター）からは、インターネットのポジティブな側面について話をしてほしいということでしたので、ポジティブな側面を皆様にお伝えしたいと思っております。

私のプロフィールについては、皆様のお手元のプログラムに書いてあるかと思いますが、私は正にデジタル世代と言えるかと思います。1981（昭和56）年生まれでございまして、ちょうど2000（平成12）年が二十歳でございました。私のレジュメの中にも一つのキーワードとして書かせていただいておりますが、私が二十歳になった頃にインターネットと出会ったことによって、私は自分の人生を救われたという経験をいたしました。インターネットに人生を救われたなんて、そんな仰々しいことがあるのかと思われる方も多いと思いますが、デジタル世代からするとインターネットというものは切っても切れない関係、それが正に私の世代であると考えております。

そして、二十代では不思議な巡り合わせから映画の業界に入りまして、映画のジャンルで言いますと短編映画を学ぶことになりました。この短編映画というものは皆さんにはなかなか認知していただきづらい分野ではあるのですが、ジョージ・ルーカス監督[1]といった人たちも必ず通っている短い尺の映画を作るというようなジャンルを、二十歳代ではやらせていただきました。

そのような中で様々な映画祭に参加して賞をいただきながら、短編映画や地域に密着した映画、そしてそういう所での人々との交流を通じて、地域の方々が暖かさに触れるといったことを経験してきました。そして昨年（2012（平成24）年）は、海外の映画祭でも賞をいただきまして、今年（2013（平成25）年）は晴れて劇場公開の栄冠を勝ち取ることとなりました。

また東日本大震災（2011（平成23）年）直後は、これも不思議な御縁から、福島県の相馬市と南相馬市を訪問し、相馬野馬追[2]という平将門の時代から1000年以上続く行事を撮影させていただいて映像化し、無償のDVDの配布活動に携わらせていただきました。この要素においても映像や、あとはソーシャ

1　アメリカの映画監督、映画プロデューサー、脚本家。代表作として「スターウォーズ」シリーズや「インディ・ジョーンズ」シリーズなどがある。

2　そうまのまおい：福島県浜通り北部（旧相馬氏領。藩政下では中村藩）で行われる、馬を追う神事及び祭りで、神事については国の重要無形民俗文化財に指定されている。

ルメディア[3]やインターネットがもたらせてくれた出会いというのが、不思議な御縁でつながっているなということで、お話をさせていただきたいと思います。

それでは、ここで私がこれまでどのような映像を作ってきたのかということについて紹介させていただきます。私は映像屋でございますので、やはり映像で皆さんに御覧いただいた方が早いと思いますので、自己紹介代わりに、私が会社を立ち上げてから6年間の作品をまとめたデモリール[4]を、今日は3分のものを持ってきましたので、御覧いただきたいと思います。

＜デモリール映像上映＞

御覧いただきましてありがとうございます。私は、大学時代は物理を専攻していたのですけれども、不思議な御縁から映画の業界に入って、自身の会社を立ち上げて、そして短編映画を通じて学んできたことをどういうふうに社会につなげていくかということで、現在は企業様のブランドをはじめ、商品PRのためのショートフィルム化といったところで会社の事業の一つの柱として考えておりまして、それと並行して映画を作っております。

今回の講演の御依頼を受けた際、インターネットのプラスの面、ポジティブな側面について話をしてほしいと言われましたので、どのようなことが良いのかと自分なりに考えました。そのような依頼は初めての経験だったのですが、様々な観点から改めて考えてみて、10個のちょっといいことを挙げてみようかなと思いました。インターネットからの10の授かりものということで、こんなふうにちょっとラインナップを挙げてみました。

＊　インターネットからの授かり物10　＊
1：素直な気持ちを伝えられた
2：世代や場所を越えた仲間を見つけられた
3：自分のことを知ってもらえた
4：学校では教わらない知識を学べた
5：インターネットでしか出来ない出会いと別れ
6：小さい頃からやりたかった夢の気付き
7：他者を知ること、自分を知ること
8：学校で見つけられなかった仕事の選択
9：踏み出す勇気
10：コミュニケーションの可能性

先ほども申し上げました通り、私は大学生時代に物理を専攻していました。ちなみに、大学2年生の時の担任は、プラズマやUFOでおなじみの大槻義彦教授でした。そして、大学で物理を勉強しながら、4年生の時にはカウンセラーを目指して心理学を勉強していました。そのカウンセラーを目指すきっかけになったのも、インターネットが授けてくれた御縁でした。

私は、実は幼少期から結構いじめられていて、クラスの学校の子とはなじめませんでした。学校の先生にもなじむことができませんでした。そして、一番大きかったのは両親です。今となってはもうこの年ですので、両親に対しては感謝の気持ちが絶えません。ただやはり小さい頃の自分の気持ちを

3　Social Media：インターネット上で展開される情報メディアのあり方で、個人による情報発信や個人間のコミュニケーション、人の結びつきを利用した情報流通などといった社会的な要素を含んだメディアのこと。利用者の発信した情報や利用者間のつながりによってコンテンツを作り出す要素を持ったWebサイトやネットサービスなどを総称する用語で、古くは電子掲示板(BBS)やブログから、最近ではWikiやSNS、ミニブログ、ソーシャルブックマーク、ポッドキャスティング、動画共有サイト、動画配信サービス、ショッピングサイトの購入者評価欄などが含まれる。

4　過去の映像作品をダイジェスト風にまとめたもの。

振り返ってみると、かなり両親とズレがあったなと思います。どうしてこう親子というのは気持ちのすれ違いがあるのだろう、ということにずっと悩んでいました。このように、学校にもなじめない、家庭でも両親となじめないということで、自分がダメなのかな、生きていてはダメなのかな、という気持ちを持っていたのが、幼稚園から大学生の頃までずっと続いていました。

私は、大学を受験した時、第一志望が不合格でした。第一志望に落ちて、第二志望、第三志望には受かって、その学校に入学しました。しかし、「第一志望校に落ちた」＝「自分の人生はもうだめだ、失敗だ、落第だ」みたいな考え方していたのが19歳の頃でした。当時の自分にとって大学受験は1つの大きな目標で、幼少期からの両親の強い希望として大学は第一志望に受かってほしいというのがあったんですね。しかし、それに「失敗してしまった」＝「自分はダメなんだ」という思いに打ちひしがれていた時に、インターネットに出会って、そこでの人々との交流の中で自分自身の考え方が大きく変わりました。そういう私にとってのインターネットに対する感謝という部分について、今日はお伝えできればと考えています。本当にインターネットが自分の人生を救ってくれたと、今でも強く思っております。

それでは、今日お話する10の項目のうちの1つ目の「素直な気持ちを伝えられた」についてお話させていただきます。当時、大学生だった私は、いわゆる引き籠もりだったのですが、その時に遊んでいたのはインターネット上のチャットでした。チャット[5]というのは日本語に直訳すると“おしゃべり”とか“雑談”という意味になるのですが、当時（2000（平成12）年）は、まだインターネットの回線速度がさほど早い時代ではありませんでした。ISDN[6]からADSL[7]に変わり、電話の固定回線によるものからインターネットの専用の回線が増え始めた頃で、テレホーダイ[8]なんていうサービスもありました。

当時、僕は第一志望の大学に落ちて、「もう人生終わった」なんて思いを抱えつつ、一方で小さい頃から何かを外に発信したい、外に出たいという気持ちを強く持っていました。うちの父親は岩手県の釜石市の出身で、堅実かつ真面目な人です。そんな親に私は、長男だということもあり、過保護に育てられたと思います。堅実な考え方の親がいるために、私自身は、新しい発想を持っていても、どうしてもそれを押し殺さなければならず、いい子でなければいけないと思い続けていたのが、18歳までした。

そして大学受験に失敗し、どこかに自分の思いを吐き出せる場所がなければ息苦しい、いじめられている自分はダメなんじゃないかと思っていた時に、インターネットに、チャットに出会ったんですね。その当時は、先ほどもお話しました通り、インターネット回線速度はまだ早くなかったですので、今のTwitter（ツイッター）やFacebook（フェイスブック）などは全然できない時代ですね。そんな時に、当時としては珍しかったかわいらしいアイコンが付いているチャットを見つけたんですね。その時はまだ文字だけしか入力できないチャットがほとんどでした。昔からこういうかわいらしいデザインが好きでした。こういうチャットを見付けて、24時間チャットに入り浸っていたのが19歳の頃でした。

当時は、第2志望だった早稲田大学に入ったのですが、授業にはほとんど出ておらず、インターネットの“教室”に24時間入り浸っていたというのがその頃の思い出です。

幼少期からずっと、私には自分の“個”というものが強くあって、学校の空間や家庭の空間というものにどうしてもなじむことができないでいました。もちろん学校や家庭になじむということも大事なのですが、私の場合はいかんせんなじめなかった。例えば、小学1年生の時に算数が得意でしたので「5年生の算数の勉強をさせてくれ」と親や先生に頼んでも、「いや、お前は1年生なんだから1年生

5　Chat：インターネットなどのコンピュータネットワーク上のデータ通信回線を利用してリアルタイムにコミュニケーションを取ることができる手法。

6　Integrated Services Digital Network の略：電話や FAX、データ通信を統合して扱うデジタル通信網のこと。通常、電話回線を介して提供されるサービス。

7　Asymmetric Digital Subscriber Line の略：電話線を使い高速なデータ通信を行う技術。音声通話では使われていない高い周波数を使用してインターネットに接続する。ISDN と比較して通信速度が速い。

8　固定料金を支払うことにより、23 時から翌日の 8 時までの間、あらかじめ登録した 2 つの電話番号まで接続し放題になる定額システム。

らしくしなさい」といったように、自分がやりたいと思う発想を受け入れてくれる環境が家庭にも学校にもなかったというのが、小さい頃の思い出ではあります。しかし、インターネット上では、自分がやりたいことができなかった、受け入れてもらえなかった既存の環境にいなくてもいいわけであって、自分の個というものを受け入れてもらうことができるのですね。自分にとっての居心地のいい環境が、インターネットの中にはあった。これはチャットでも同様ですね。ある特定の話題をするチャットであれば、その話題は苦手だなと思ったら退席して構わないわけであって、自分が好きだなと話題のチャットやホームページに集まって交流することもできる。これは、それまでの18年間の人生の中では全くなかった経験で、真逆の環境だったのですね。それで、インターネットにハマってしまった。

また私はちょっと癖がある人間でして、幼少期から本当にテレビっ子でした。両親が夜遅くまで仕事をしていたこともあり、おばあちゃん子でずっと家でおばあちゃんとテレビを見ていたんですね。それで、幼稚園や小学校の頃に見ていたのは、月9と言われるドラマであったりとかバラエティー番組でした。そんな余り子どもが好まないような番組ばかり見ていたので、周りの子たちに「こういうバラエティーが面白いよ」とか、「こういうトレンディードラマ見てる」なんて話しても、みんなの顔は「？」が付くんですね。当時の私の話っていうのが、ほかの子たちとはちょっと変わった視点だったんだなと思います。ほかに、当時考えていたことを例に挙げても、例えば「こういうお話を作ったんだよ。みんなで劇やろうぜ」と言っても、周りからは「ちょっと複雑すぎて分からないよ」という反応をされていたので、自分でも考えていることや見ている視点が、ほかの子たちとはちょっとズレているのかなと思っていました。

でもインターネットのチャットをするようになって気付いたのが、世代を超えて話ができることでした。皆さんも子どもの頃や若い頃に、こういうドラマやバラエティーをよく見ていたなとか、っていうのはあると思います。例えば80年代のトレンディードラマやバラエティーの話をしようとしても、同世代はリアルタイムで見ていなくていまいち話が通じなくても、ちょっと歳が上の先輩や私の親の世代だともちろん見ているわけなんですね。あの番組が面白かった、こういう番組といった話をすると、「ああ、俺も見ていたよ」というように話し合えると、私はすごくうれしくなりました。同世代とは合わなかった話が、チャットだと話が盛り上がる。ようやくしゃべれる相手が見付かった、と感じたのが19歳の時でした。

そしてやはりうれしかったことは、私に問い掛けてくれることですよね。先ほどお話したチャットに入ると、そこにいる人たちは皆優しくて、こんにちはとか、名前はなんなのとか、どこからアクセスしているのっていうふうに問い掛けてくれる。学校の中だと、もう既に名前が分かっていて、どういう属性の人が教室に集っているかっていうのも分かっているような状況ですので、そういう当たり前の質問を問い掛けてくれるという環境がないですよね。家なんかでも同様です。私自身が父親から言われていたことは、大学には入れとか、勉強がとても大事なんだっていうようなことがほとんどで、私がドラマやお笑いが好きなんだというような話は一切したことがありませんでした。母親もかなり厳しい人でしたので、幼稚園から塾に通わされていましたので、僕は家族と本音で話したっていうのは、実は今この歳になってもありません。そんな自分が本音でしゃべることができる唯一の場所がチャットだったなと思っています。チャットの中で話をしている時にうれしかったのは、いろいろなことを尋ねてくれることですね。親なんかは「仲間というのはこういうものだ」みたいなことを言うのですが、チャットの中の人たちは、まず私の話を聞いてくれて、そのことによって自分自身のことを話すきっかけを与えてもらえた。これは相手の顔が見えないチャットだからこそ、と言えるかもしれません。先ほども学校とか家とかでいうとやっぱりフェイス・トゥ・フェイスで見えてしまう。もちろん家や学校などでのフェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションは大事なのですが、顔が見えないコミュニケーションの良い意味での特性というのもあるのではないかなと感じています。チャットの中で、いろいろな人たちが問い掛けてくれる何気ない言葉がとてもうれしかったです。

それから、私は大学で物理学科に入ったのですが、私はちょっとひねくれ者でして、実は物理は受験科目の中では一番苦手でした。でも私自身、物理という教科がどうしてこんなに苦手なのかが分か

らず、それで物理の先生になってみようかということで、物理学科に入ったという経緯があります。

ホームページというのは、英数字や記号の組み合わせのソース[9]で構成されているということを、大学のパソコンルームで知りました。でも、こういうことは、学校の授業の中では教えてくれませんでした。ソース（コード）は、見た目は何だか英語の文章のようですが、英語とはまた全然違うんだなといった、驚きがありました。インターネット、ホームページというのは、表面上はこんなふうに見えていますが、実は裏では全部こういうような言葉（ソースコード）で書かれている。私たちが使っているメールなども同じようなソースで構成されていて、暗号化されている。私自身、小さい頃からこういう世界に興味はありましたが、19歳になって初めて知ったんですね。大学のパソコンルームで、ああもっと早く知りたかったなと感じていました。

さて、私がインターネットの世界にハマっていく背景には、不思議な御縁がありました。「第一志望の大学に入れなかった」＝「目標がなくなってしまった」という状態でしたので、19歳の私は、インターネットの世界で自分探しをしていたのですね。チャットの中では、例えば大工さんや、女子高生、女子大生、ニート[10]といったように、本当に様々な属性の方々と出会うことができました。私自身が進学校に通っていたというのもあると思いますが、目指すはなんとか大学とかお医者さんだというような、かなり目標が限定された世界の中にいたこともあり、小さい頃はテレビっ子で俳優になりたいとか物書きになりたいといった気持ちがあったにも関わらず、知らず知らずの内に十数年に渡ってその感情を押し殺してきたのだと思います。

そのインターネットの、チャットの友人たちは、先ほどもお話しした通り、私にいろいろなことを尋ねてきてくれたんですね。どんな夢があるの、何がしたいの、どんなことが好きなの、と。これは、それまでの18年間、私にとって経験のなかったことでした。今の私のように30歳を超えたいい大人になると、当時自分が置かれていたのは、普通とは違う特徴的な環境だったんだな、ちょっと一般的じゃなかったのかな、と振り返ることができるのですが、正に今受験勉強を一生懸命やっておられる学生の皆さんの中には、当時の私と同じような方もいらっしゃるのではないかと思います。

その当時、ネット上での私にとっての重要な出会いが、「テリーズワンダーチャット」というテリーさんという方が管理されているチャットでした。そのチャットはかなり人気のあるサイトでした。YAHOO！などの人気ランキングで十何位に入るようなサイトで、そこに私は24時間入り浸って、楽しくやっていました。チャットに一日中いたので、あいつはいつもここにいるメンバーだなということで、常連としてかなり認知されるようになりました。その中で、このテリーチャットを作っている管理人のテリーさんはすごい人なんだよっていう噂が出てくるんですね。そう言われてみると、僕が入り浸っているチャットはそもそも作っている人がいて、もともと存在していたわけではない。このテリーさんっていう人はどんな人なの？とチャットの中の人たちに聞いてみると、自分が通っている大学の政治経済学部の1学年上の先輩だということが分かったんですね。チャットにこのかわいらしいポストペットをあしらって、しかも大勢の人たちがアクセスするようなサイトを作る人って、とても頭が良くてすごい人なんだろうな、と自分の中の憧れの人が管理人のテリーさんでした。

そのような感じで私はチャットで遊んでいて半年ほど経った2000（平成12）年の10月か11月頃、ちょっとした事件が起きました。どんな事件かといいますと、いろいろな掲示板で私のハンドルネームのことが書かれていて、中傷されていたんですね。私が小学校の頃から中学・高校といじめられてきたので、本当にいじめられっ子のある意味代表格みたいなものなのですが、いじめに関しては慣れていたわけですね。揶揄されるとか、ワイシャツが汚されるとか、物が隠されるなんて言うのはずっとやられて来たので、いじめられることってこんなものだよな、というふうに感じていました。でもインター

9　＝ソースコード：プログラミング言語を用いて作ったコンピュータープログラム。ソフトウェアの元となる一連の文字の羅列。

10　NEET = Not in Education,Employment or Training：日本では、厚生労働省『特定調査票集計』の中の「詳細集計」（総務省労働力調査）に基づいており、そのうち、15～34歳の非労働力人口の中から学生と専業主婦を除き、求職活動に至っていない者と定義している。

ネットの世界は、自分にとって居心地の良い場所なのでいじめられることはないだろうなと思っていたら、いろいろな掲示板で私のハンドルネームが書き込まれていた、荒らされていたわけです。その時にチャットにいつものように遊びに行くと、「おい、お前の名前がいろんな掲示板で書かれているよ。これいじめじゃないか」とか、「お前、誰かに狙われているんじゃないか」と、チャット仲間が聞いてくるんで、びっくりしたんですね。ずっと学校でいじめられ続けてきて、ようやく自分の世界ができたのに、インターネットの世界でもいじめられるようになっちゃったかということで、その時はかなり苦しみました。ところが、それは女の子からの書き込みで、しかもその中に携帯電話の番号が書かれていたんです。今の感覚だとちょっと怪しいなという感じもしなくはないのですが、チャット仲間が言うには、その書き込みは女の子の苦痛のメッセージで、お前のこといじめているんじゃなくて、どうしてもこの電話番号に掛けてほしいみたいだから、ちょっと電話を掛けてやれよ、と言うんですね。

本当かなと思いながらも、半信半疑でその番号に電話を掛けると、女の子が泣いていたんです。その子は、愛知県に住んでいて、管理人のテリーさんのお友達だと言うんですね。そして、テリーさんが昨夜事故で亡くなられた、御家族からお通夜のお知らせを受けて、あなたに連絡が取りたくていろいろな掲示板に書き込みをしたということでした。東京の高田馬場にあるビルの5階から落ちて亡くなったということだったのです。それを受けてその女の子は急遽誰か東京の仲間を呼び出さないといけないということで、私がテリーさんの後輩だということを風の噂で聞いて、それで私に直接連絡を取ろうとしたそうなんですね。私もそれを聞いて非常に驚きました。テリーさんという方は、バイトなどでかなりお忙しい方だったので、家に帰ってくる時間はいつも深夜の2時や3時なんですね。ですので、テリーさん御本人は、皆がやり取りしている時間帯にはチャット上には現れないのですが、掲示板に書き込まれた女の子たちのメッセージや、このサイトかわいいですねといった小中学生からの書き込みをに対して、テリーさんは深夜の3時や4時といった時間帯に、きちんと返事を書き込んでくれるのですね。なんて優しい人なんだと思っていたら、亡くなってしまったというのです。

実はテリーさんが亡くなる5日前、私とテリーさんは、メッセンジャー[11]というものでやり取りしました。いつものように、私がネット上で深夜2時・3時頃に遊んでいると、伝説の管理人のテリーさんが、メッセンジャーの中に現れて、「僕は君のことをよく知っているよ。僕はチャットには現われないけれども、毎晩家に帰ってきてから君の書き込みを見ているんだよ」「君は大学の1歳下の後輩なんだね」といったことを、全部チェックされていたんですね。ああ、この管理人さんすごいな、全然チャットには遊びに来れないのに、自分チャットを訪れる常連たちのことをちゃんと分かっていてくれている。暖かい人がいるものだな、と感じました。

興奮しながらメッセンジャーを通じて会話をしていると、テリーさんは同じ大学の一歳年上の先輩ということもあり、近いうちに大隈講堂で直接会って食事を御馳走してあげるよと約束してくれたんですね。一週間後に御飯を御馳走してくれると。私は小中高とずっといじめられていて社交的ではなかったので、仲のよい先輩もできませんでした。私とテリーさんは、大学の学部は理工学部と政治経済学部で全く違うんですけれども、チャットを通じて、一歳年上の学年の先輩、しかも自分自身が憧れるような頭とデザインのセンスを持っている人と知り合うことができて、僕の心の師としていろいろなことを教わりたいなと思っていたのが、亡くなる5日前のことでした。

そんなやり取りがあった僅か5日後に、愛知の女の子から事故で亡くなってしまったと聞かされました。テリーさんが亡くなられた原因については、過労による事故なのか、自殺なのか、詳細なお話を御家族にお聞きすることができなかったので分かりません。でも、僕は、恐らく事故なんだろうな、と考えています。なぜかと言いますと、私がテリーさんの亡くなる2日後に会う約束をしていたからなんですね。テリーさんのお通夜に、喪服を着て埼玉の大宮の方に行ったのを覚えています。

不思議な感覚でした。2日後に「初めまして」をしようとしていた人のお通夜に喪服を着ている自分…。

11　＝インスタント・メッセンジャー：インターネットを介して、チャットや複数人又は個人間でのメッセージのやり取りを行うためのアプリケーション。

お通夜の会場に着くと、テリーさんの遺影があって、そこには若々しくてイケメンな男性の姿があるんですね。インターネット上でテリーさんが亡くなったという話をいろいろと聞いているけれども、もしかして亡くなってないのではないかと思いつつも、やはりその遺影を見ると悲しみが込み上げてきました。最後お見送りのところで、棺の蓋を開けて皆さんとお別れする際に、そこで「初めまして」と伝えました。私を救ってくれたチャットのサイトを作ってくれた管理人さんと、もう少しで直接お会いできるはずだったのに、初めての出会ったテリーさんは棺の中だった。それが2000（平成12）年の12月でした。ですので、21世紀というのは不思議な時代なんだなと思います。直接会ったことのない人のお葬式に行く、そういう時代なのかな、と。そんな不思議な経験をしたのが、19歳の頃でした。

私は、先ほども申し上げたとおり、物理を勉強するために物理学科に入学したのですが、テリーさんが亡くなったことを期に、この素晴らしいサイトがなくならないためには、テリーさんのホームページを引き継ぐためにはどうしたらいいのだろうと考え、インターネットの言語であるHTML[12]やCSS[13]などを勉強したりして、大学のパソコンルームに入り浸っていた19歳でした。

そして私は、テリーさんが作っていたポストペットのサイトやチャットのサイトの管理を引き継ぎ、更新等を続けていく中、徐々に小中学生の子どもたちが遊びに来るようになったのですね。その子どもたちの書き込みを見ると、言葉遣いもマナーもできていない。「オッス」とか、「オレも混ぜろよ」といった具合で、私自身、大人の世代と小中学生の世代の会話がかみ合っていないということを感じていました。これはちょっとネットの使い方に関するマニュアルを作らなければいけないなと思いまして、22歳の時に作ったのがこの「ネチケットってな〜に？！」というウェブサイトでした。インターネットのチャットを通じて、挨拶の仕方とか、あとはリテラシーというかマナーなどについて、どうすればにしたらいいのかというサイトがなかったので、それでは自分で作ってしまおうということで、小学生にも分かりやすいようにルビを振るなどして作りました。

そのサイトを作って半年くらい経った頃、とあるテレビ局から私のところへ電話がありました。皆さんも覚えていると思いますが、長崎で掲示板に悪口を書かれた女の子が同級生を殺してしまうという事件[14]が起こったんですね。それが2004（平成16）年のことだったのですが、インターネットの掲示板で何が起きているんだ、同級生から悪口を書かれて小学生が殺し合うというのは、一体どういうことなんだということで、「ネチケットってな〜に？！」（現在のURL⇒ http://cosmobox.jp/netiquette.htm）の管理人である私のところに問い合わせてきたんですね。私は、そのサイトを作るに当たって、小学生でも読めるようにルビを振ったり、分かりやすい言葉を選びながら、優しい表現を心掛けていたのですね。していたんですね。そのようなこともあってか、是非取材をさせてほしいということで、そのテレビ局から急遽取材を受けることになりました。

私は、幼少期から憧れていたテレビの世界の人たちと、突如間近に会うような状況になってしまいまして、気分がとても高揚するとともに、自分が書いた文章に対して世の中の人々からこんなに反響があるということが、とても嬉しかったんですね。子どもの頃に自分がやりたかったのは、俳優や脚本家などの物作りでした。それが、22歳で自分が作ったサイトが、テレビ局からの取材を受けるというのは、とても不思議な感覚でした。その頃から、いろんな方からメールが来るようになりました。例えば恋人と別れたいがどうしたらいいかとか、今いじめられているのだけれどどうしたらいいかとか、様々な悩みの相談を受けるようになったんですね。

このようにいろいろな悩みの相談を受けるようになった時に、私が感じたのは、いろいろな人の話を聞くということがとても大事なんだと感じました。私は幼少期から「目指せ○○大学」といった形

12　Hyper Text Markup Language：Webページを記述するためのマークアップ言語。文書の論理構造や表示の仕方などを記述することができる。

13　Cascading Style Sheets：ウェブページのスタイルを指定するための言語。

14　佐世保小6女児同級生殺害事件：2004（平成16）年6月1日、長崎県佐世保市内の小学校で、6年生の女子児童が同級生の女児にカッターナイフで切り付けられ、死亡した事件。被害女児が加害女児の身体的特徴などをネット掲示板に書き込んだことが犯行の動機とされている。

で、勉強ばっかりさせられてきた人生だったと思います。その中で、自分自身がやりたいことを見付け出せないまま過ごしていましたが、19歳の時にインターネットに出会って、テリーさんが亡くられて、22歳の時に自分が作ったホームページ「ネチケットってな〜に？！」がヒットしました。そしていろいろな方がメールを送ってきてくださって、うれしい反面、その頃もインターネット上で誹謗中傷を受けたがどうすれば良いか、というような深刻な内容の相談メールももらっていました。

そのようなこともあり、私自身、これだけ人の話を聞くのであれば、カウンセラーになろうかと思い立ちました。もともと人の話を聞いたり、話をかみ砕いて分かりやすく伝えるということが子どもの頃から好きでしたので、カウンセラーを目指そうと考えたのですね。そこで、早稲田大学の臨床心理学部の授業を無理やり聴講して、カウンセラーの勉強をしていました。インターネット上で子ども同士が悪口を書き込みあって、殺人事件が起きてしまうような時代だからこそ、人の話に耳を傾けることや、その人の立場になって考える、感じるということが大切なのではないかと思い、22歳の私はカウンセラーを目指していたんですね。私自身が子どもの頃にいじめられていた経験を持っていたせいもあって、なおさら強くそう思ったのかもしれません。

先ほどもお話しましたが、私は東京大学を第一志望校として目指していたのですが、今振り返ってみると、なぜ東大に行くのか、目的は何なのかということについては、正直なところ余り考えていなかったと思います。それから、将来どんな仕事に就くかということを考えた時に、やはり身近な大人たちからの影響は大きかったと思います。私にとって身近な仕事ということで、まず小学校の先生、そして建築士である父親、そして予備校の物理の先生などがありました。私自身、人に何かを教えることが好きでしたので、予備校の先生になるとか、建築士の父をずっと見てきていたということもあり、なんとなく理系の仕事に就かなければということで、物理学科に進んだというのがあります。

そのような中で、私は、インターネットというのは、本当にいろいろな職種の方と出会えるなと感じていました。インターネットの世界を通じて、ライターやデザイナーの方々、建設業者、俳優、プログラマー、そして絵描きさんなど、それまでの18年間の私の人生、学校の中では出会うことがないような人たちとコミュニケーションを取ることができた。このことは、当時の自分にとっては大きな驚きでした。私は、仕事というものに対する関心は高かったのですが、何かを成し遂げるために東大に行くのではなく、東大に行くこと自体が目的になってしまっていた。「東大に入ること」＝「幸せ」なんだと漠然と思っていた。そして、私が19歳の頃にインターネットに出会って社会のいろいろな人たちとの接点を授かり、その人たちと会話ができた。世代や肩書き、社会的地位を超えて話をすることができる場所というのは、とても貴重な場所だと思います。

私は、幼少期から人と接するのがすごく好きだったのですが、学校や家庭ではなじめず、引き籠もっていた自分にとって、チャットというのは本当に時間や場所を問わずに、いろんな人と出会うことができる大切な場所だと感じていました。そのような中で、私自身世の中に踏み出そうということで、カウンセラーを目指していたのです。

また、インターネットの世界ではオフ会というのがありまして、オンライン上ではなく、実際に顔と顔を合わせて集まるのですね。それまでチャットなどでやり取りをしていた人々とオフ会で会うと、ネット上ではかわいらしいアイコンを付けた人たちが、実際に会ってみると全然違う顔なんですよね。びっくりするわけです。ああこの人のハンドルネームはかわいいのに、こんなにごつい体しているんだなんて。このようにオフ会を楽しみながら外を出歩くようになったのですが、19歳の私は、その中で最年少の部類だったのですね。私の中学・高校時代は基本的に同じ年齢層の人としか会話ができなかったのに、チャットの人たちは30歳代や40歳代が多く、オフ会に行くと10 〜 20歳も年齢差がある人たちといろいろな話ができる、とても楽しい空間でした。ずっといじめられていた私が、オフ会に出ることによって少しずつ社交的になっていった。ありのままの自分を受け入れてくれる存在がチャットの空間にいた、そのことが私にとっての大きな気付きでした。私の話を聞いてくれる人生の先輩方がたくさんいたということが、当時の私にとってはとてもうれしかったです。

こういった出会いをきっかけにして、少しずつ社交的になっていく中で、受験勉強以外に何かでき

るのではないかと思って作ったのが絵本でした。渋谷で絵を売っていた露天商の方に話し掛けて、「あなたの描いた絵はとてもかわいらしくて素晴らしい。僕が詩を書くので、あなたの絵を使って絵本を作らせてほしい。僕は絵は描けないけれども、詩は書けます」としつこくお願いしました。その方は村田さんという方なのですが、プロの絵描きさんなんですね。ただ、いろんな経緯があってその時は渋谷で露天商をやられていたんです。村田さんは「僕は、これまでもそういう誘いは受けてきたんだけれど、これまで余り関心はなかったんだよね。でも、古新君しつこいから僕の絵を使ってくれていいよ。君がこれを商売抜きで自分自身の作品として持ち歩くのであれば僕自身の絵を貸してあげよう」ということで、絵をお借りして絵本を作ることになりました。

ちょうどその頃、高校時代の同窓会があって出席したんですね。これも社交的になったからこそ踏み出せた一歩だと思うんですけれども、その同窓会で作った絵本を見せたところ、「実は俺は映画製作会社の社長をやっていて、脚本家を探しているんだ」という同級生がいたんです。すごいなぁ、まだ若いのに社長やっているんだと思いました。その時、僕は、絵本を作るように、言葉をつづることはできるけども、もっとやりたいことがあるんじゃないか、と考えたんですね。そして、映画の脚本を書いてみないかということで、その同級生に誘われたことをきっかけに、映画の業界に足を踏み入れ、下積みを始めたのが23の頃でした。

そのような経緯があって、私は映画業界に入り現在に至るのですが、今になって改めて思うのは、インターネットは現代の寺子屋なのではないかということです。インターネット上には、本当に様々な情報があふれています。まずはホームページに掲載された情報がある。そして、ブログによる情報発信が出てくる。更に時代が進むと、今度はFacebookやTwitterなどが出てきた。このように、どんどん情報を発信する手段も量もどんどん大きくなっていって、しかも通信速度もどんどん速くなっている。そこで私が感じるのは、旧来からある情報を発信するための媒体は、新聞やテレビ、ラジオといったマスメディアなどからのほぼ一方通行のものであった。ところが、IT（情報技術）の進歩に伴い、個々人が、私たち一人一人が情報の発信者になることが可能な時代になっているのですね。

そういう時代、世の中にあって、とても重要だなと思うのは、情報過多になっている今、相手の話に耳を傾け、その内容をかみ砕き、取捨選択などの適切な判断を行うことだと思います。その上で、情報を受信し、発信する必要があるのですね。これはネット上で互いに教え合いっこしている、とも言えます。そういう意味で、インターネットというのは、現代の寺子屋になり得るんじゃないかと思います。

私自身Facebookがとても好きで、このトークショー（講演）が始まる前にも、これから登壇しますよ、といったことを書き込ませていただいていますが、自分の身の回りのことをリアルタイムで発信することができます。既に4名の方が「いいね」を押していただいています。このように、情報が拡散してリアクションが来るのが早いですね。

余談になりますが、先ほども御紹介しましたが、私が最初に作ったホームページ「ネチケットってな〜に？！」を立ち上げたのが2004（平成16）年でした。今日のシンポジウムに御登壇されていた吉川誠司さんのWEB110（ウェブワンテン）の活動については、その当時から注目しておりまして、先ほど初めて直接お目に掛かれて嬉しかったです。

さて、インターネットが普及する前は、情報というものはたくさんあればあるほどうれしいものでした。情報の発信者がマスメディアなどに限られていたということもあります。それが、今では個々人が発信者になることができるというお話をしました。FacebookやTwitter、そしてYouTube[15]などは、情報を発信するツールとしては非常に使いやすいです。これらの媒体を多くの人が利用して情報を発信し、ネット上に情報があふれかえっている中で、情報を絞り込んでいくというのは重要なキーワードになると思います。

あとは、教育というものを改めて振り返ると、私は答えの出し方も重要ではないかと考えています。

15　ユーチューブ：世界最大の動画共有サイト。

例えば、教室で先生が「1＋1＝2」なんだよ、と教えますよね。先ほどのシンポジウムの中でもパネリストのお一人が話されていたと思いますが、これからの時代は複数人でディスカッションを行い、一緒に考えていくことがとても大事ではないかと思います。これはインターネットを通じて様々な人々との交流を通じて感じたことでした。自分がいじめられて「お前はダメだ、お前は違う」と一方的に決めつけられて塞ぎ込んでいても、ネット上の人たちは話を聞いてくれる、尋ねてくれるんですね。この経験から、私はみんなで話し合って、一緒に考えるというプロセスを大事にしています。

この共に考えるプロセスの大切さを理解するためには、子どもたちが複数人で話し合いながらホームページを作ったり、世の中の様々な疑問を学級新聞みたいなものに書いたり、映画などの映像を作る、といったことが効果的かもしれません。そのためには、先生や周囲の大人のサポートが必要だとは思うのですが、子どもたち自身が主体となって、チームとなって社会の“なぜ？”を考えていく、その手助けをインターネットがしてくれるのではないかと考えています。

インターネットを介したコミュニケーションでは、文字情報はもちろんのこと、チャットなどでよく使われるアイコンや顔文字、最近ではLINEのスタンプなどが使われます。例えば、「ありがとう」と書き込んだとしても、その後ににっこり笑った表情のアイコンが付いている場合と、怒った表情のアイコンの場合では全く違った意味合いとして受け止められ、大きな差がある。このように、文字だけでは表現し切れないものを、かわいらしいアイコンやスタンプ、顔文字などで感情まで伝えることができるというのは、すごく面白い表現方法だなと思いました。

私は映画の仕事をやるようになってから海外の友人ができました。そこで思ったのは、日本は良い面がたくさんあるのですが、コミュニケーションの部分では世間体やその場の空気を大事にする、気にしすぎる、とても特徴的な国なのかなと思っています。私がいじめられていたのも、学校や家庭という空気を大事にするあまり、そこになじむことができず、自分をうまく表現できなかったからではないかと思っています。

僕と同じように、日常生活の中で感情表現が苦手な子の場合、言葉をどういうふうに使ったらいいのかとか、いじめられちゃうんじゃないかと、結構戸惑うことが多いと思うんですね。そういう子どもたちが文字だけではなく、顔文字を使ったりLINEのスタンプなどを使ってコミュニケーションをすること。このように、あたかも右脳で会話をするのは、インターネットならではのコミュニケーションではないかなと思っています。

私は、これからは左脳[16]と右脳[17]の掛け算のバランスの時代ではないかと思っています。学校で勉強した後は、ホームページを作ったり、映画や映像を作ったり、言葉をつづるでも良いのですが、デザインをしていくという時代に入ってきたんじゃないかなと思っています。

あと、私がインターネットを通じて、「3つの『かん』」が大事なのではないかと感じています。私たちは何かを感じる時どうしても自分の主観から入ってしまいます。しかし、TwitterやFacebookなどを見ると、誰かが何かを発信しているという、まず「客観」から入るんですね。主観で俺はこうだ、私はこうだ、というのももちろんありです。でも、何がどのような状況になっているのか、何が起こっているのかということを、客観で物事を見ることができるというのは、今とても大事なのではないかと思っています。

次に「中間」というのもキーワードではないかと思っています。何かを発信する時に、俺はこうだ、あなたはこうだ、だから違う、これだとかつて私がいじめられてきたように、なじめないものは排除してしまう、いじめられてしまう。白か黒かどちらかに分類しようとするんですね。でも、もしかしたら赤と青の間には紫があるように、中間があるんじゃないか。この中間をもっと考えていけるような環境というのがインターネットでもどんどん増えていくといいなと思います。インターネットには、誹謗中傷の書き込みなど、まだまだ問題点があると思いますが、良い部分もあります。しかし、どう

16　文字や言葉などの思考や論理をつかさどるといわれる。
17　視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚などの五感をつかさどるといわれる。

しても悪い部分ばかりが注目されて多数派のような扱いになり、良い部分は少数派的な扱いになってしまうのですね。でも、少数派の中にも尊重すべき価値はあるはずです。インターネットの良い部分と悪い部分の両方の面を見て、その中間を考えていくことが大事なのではないかと思います。

そして、3つ目が「共感」です。一緒に感じていくこと。私は、これからは共感の時代だと思っています。以前は、新聞やテレビ、ラジオ等による一方通行の情報がほとんどでしたので、この情報になじめるかそうでないかという選択肢しかありませんでした。ところが、ソーシャルメディアの発達により、かつてマスメディアでなければできなかった10万人への情報発信が、個人レベルで10万人に発信できるような時代になっています。この個々人が発信する情報に共感していく、互いに感じていくということですね。インターネットは、先ほども申し上げた通り、顔が見えない媒体ですので、なかなか発信者のそして受信者の生身の感覚というのが理解し難いのかなと思うのですが、私は逆に顔を見ないで感じていくっていう所にも、1つのキーワードがあるのではないかと考えています。

あと、先ほどのシンポジウムでもお話がありましたが、これからはネット世代の翻訳家を育てるということが大事なのではないかと思っています。様々な情報が飛び交っている中で、言葉の意味であったり、マナー、セキュリティに関することなど、多くの分からないことがある。まずそれを一緒に考えていって、これはこういうことなんだよねっということで翻訳をしていく。恐らくこういう翻訳ができる人の数がまだ少ないと感じていますので、ネット世代の翻訳家を育てるということが、これからより一層重要になってくるのではないかと思っています。

私自身、インターネットによって救われたのは、ネガティブだった自分、あとはだめだった自分がポジティブに生きられるようになったことです。

学校ではいじめられて泣きべそをかいていて、家に帰ると両親からは勉強しろと言われるばかりで、自分の居場所がなかった中で、唯一心のよりどころはテレビの中の俳優さんたちでした。でも、自分みたいに勉強ばかりやっている人間が芸能界の人たちなんて接点はないだろうと思っていたのが、自分が作ったホームページを通じてテレビ局からの取材を受けた。その後、映画の世界に足を踏み入れ、小さい頃からの憧れであった芸能界に身を置くこととなった。振り返ってみると、インターネットとの出会いが大きな転換点であった、インターネットが自分を受け入れてくれたことによってネガティブなダメな自分がポジティブに変わることができました。そのポジティブな発想が大事だったなと思います。

また、それと同時に、先ほど「中間」の話をしましたが、ネガティブとポジティブの中間を考えていくことがすごく大事なのではないかと思います。これを考える時に、例えばFacebookのように、シェアで“いいね”と言ってくれるというのは、とても大事だと思います。君はここが良いだとか、ここが駄目なんだではなくて、“いいね”って押してもらえただけでもホッとする瞬間があるのですね。面と向かっていると、君いい表情だねとか、良いこと言っているねとは言いづらいんですけれども、Facebookで“いいね”って言ってくれるだけで、ああ僕が考えたことを周りの人が評価してくれたと思えて、心がすごく安らかになっていくのを感じます。

では最後に、私の現在の活動を紹介させていただきます。来月劇場公開する「ノーヴォイス」という映画の話なのですが、日本では、年間17万頭もの犬や猫が殺処分されています。これは行政が悪いというふうに捉えがちな人も多いのですが、行政の方々も捨てられた犬や猫を殺したくはないんですね。問題は、犬や猫を物のような感覚で飼ってしまうこと、そして飼い方が分からなくて捨ててしまうことです。犬猫が捨てられる気持ちというのは、今回のようなテーマの長編映画の初監督作品として携わっていることは、とても感慨深いものがあるなと思っております。詳しくは、皆さんのお手元の資料に同封されているチラシを御覧ください。

また、現在私が取り組んでいることは、いろいろな所で、演技をしながら体験型でお芝居をしてもらったり、映画の制作を体験してもらってコミュニケーションを培ってもらう、といったようなことにも取り組んでいます。そういった参加型の体験を通じて、人々が触れ合い、大人が無邪気に走り回ったりするようなワークショップをやらせていただいています。そこには、実は、Facebookの“いいね”

に通じるような笑顔のような、インターネット上で、チャットの中で知らず知らずの内にやっていたコミュニケーションの在り方が、今度はリアルな空間の中で展開されています。

そして、先ほども申し上げましたが、FacebookやTwitterを通じて全国の様々な人たちから連絡があって、福島県相馬市の「相馬野馬追」の映像化のお手伝いをしました。東日本大震災発生以降、開催が危ぶまれたこの行事を、映像の力で紡いでいって、あちこちに避難されている方々にDVDをお届けするという活動も、ボランティアとして携わらせていただきました。

それでは、最後に、私の初長編監督作品「ノーヴォイス」のできたてほやほやの予告編をお持ちしましたので、こちらを見ていただいて、最後の締めにつなげたいと思っております。

＜映画「ノーヴォイス」予告編ビデオ上映＞　http://no-voice.com

来月（2013（平成25）年11月）キネカ大森、再来月（12月）にはオーディトリウム渋谷で劇場公開することになりました。

1時間という短い時間ではありましたが、私の半生をざっと振り返ってまいりまして、やはり私は教育が重要なのではないかと思っています。私は子どもの頃から勉強は好きでした。ただ何か違うんじゃないかと感じ続けてきました。大学で物理学科に進んだのは、通っていた大手予備校の先生になりたいなという思いからでした。その後、カウンセラーを目指し、いろいろなことがあって絵本を書いて、そして今は映画の業界に来て、監督になった。本当に人生って不思議だなと思います。19歳の頃の私が、引き籠もりから世の中に踏み出すきっかけとなるチャットを作ってくれたテリーさんに心から感謝をしながら、私が多くの人々に伝えてきたいのは、子どもたちが生き生きと笑顔でポジティブにいることができる社会を、というところですね。

インターネットというものは、リテラシーやセキュリティの面では、有識者、専門家の方々が中心となってしっかりと構築しなければならないことが、まだまだあると思います。しかし、私のように人生が閉じられた空間からオープンなものに変わった、ネガティブからポジティブに大きく変わることができるきっかけとなったインターネットにはとても大きな可能性があります。インターネットは、人類の数千年という歴史の中では10～20年程しかない浅い浅い歴史です。ですので、まだまだ確立していないこともたくさんあるわけでして、インターネットが一つの要因となって殺人事件までも起きてしまうような本当に怖い時代であるからこそ、逆にインターネットをポジティブな側面からどのように使っていけば良いのかということを積極的に考えて、それを子どもたちに伝えていきたいと思います。

僕のように人生だめだな、第一志望の大学に落ちちゃって苦しいな、自殺してしまおうかなと思った時に救ってくれたインターネット。こういうふうに自分自身の可能性を受け入れてくれる場所としてのインターネット、そしての自分がやりたいことへ一歩踏み出すきっかけとなったインターネット上での人々との出会い。大きな可能性を与えてくれたインターネットに本当に感謝しています。

あっという間の1時間でしたが、本日は御清聴ありがとうございました。

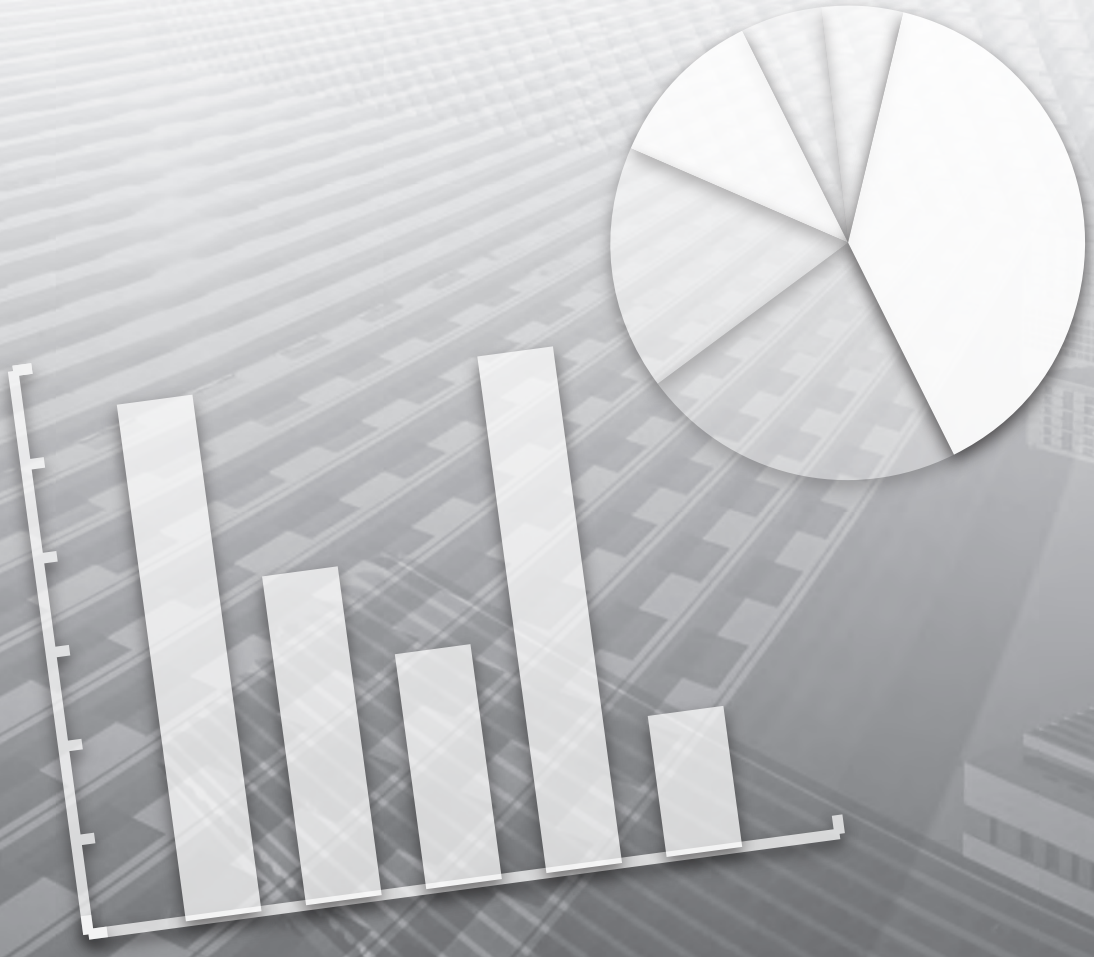
＊このトークショーの模様は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。
https://www.youtube.com/jinkenchannel

●関連情報

＊コスモボックス株式会社　http://cosmobox.jp/
＊ひきこもり卒・映画監督ブログ　http://coneyshun.blogspot.jp/
＊古新舜 ツイッター　https://twitter.com/coneyshun
＊映画「ノー・ヴォイス」フェイスブック　https://ja-jp.facebook.com/novoice.movie

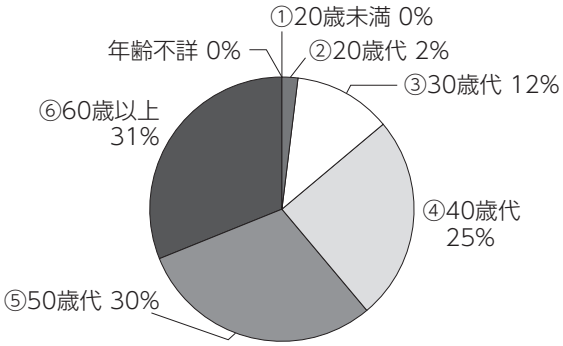
東京会場

アンケート集計結果



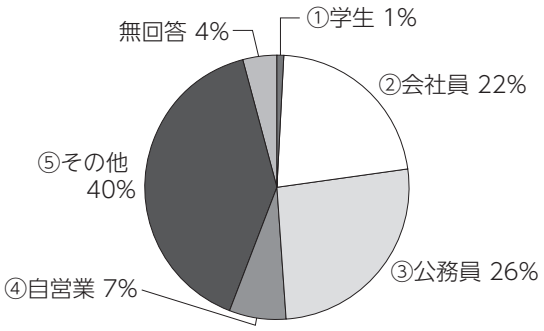
1　年齢構成

① 20歳未満	0 人
② 20歳代	2 人
③ 30歳代	10 人
④ 40歳代	22 人
⑤ 50歳代	26 人
⑥ 60歳以上	27 人
年齢不詳	0 人



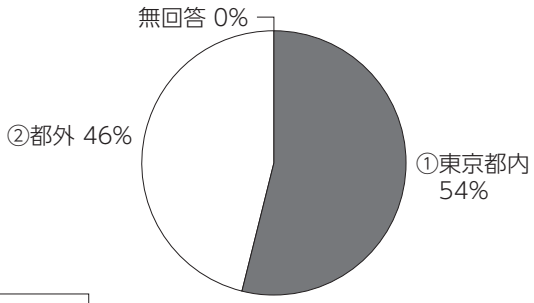
2　職業構成

① 学生	1 人
② 会社員	19 人
③ 公務員	23 人
④ 自営業	6 人
⑤ その他	35 人
無回答	3 人



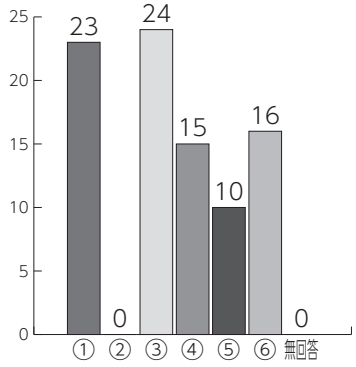
3　住まい

① 東京都内	47 人
② 都外	40 人
無回答	0 人



4　本シンポジウムを知ったきっかけ（複数回答）

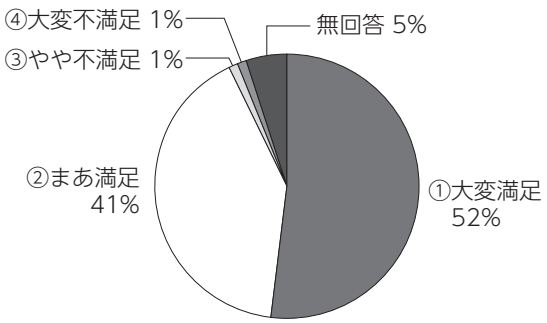
① 新聞	23 人
② テレビ	0 人
③ チラシ	24 人
④ インターネット	15 人
⑤ 知人・家族	10 人
⑥ その他	16 人
無回答	0 人



5　本シンポジウムについて

(1)　全体満足度

① 大変満足	45 人
② まあ満足	36 人
③ やや不満足	1 人
④ 大変不満足	1 人
無回答	4 人



(2) 自由記入欄より

各々の視点からの報告、問題提起があり、参考になった。被害者、加害者にならないような予防対策を考えていきたい。

いずれも密度の濃い内容で多くの気付きがありました。古新さんのお話もわかり易く、挫折あってこその実感のこもった内容、そしてネットのメリットを語って下さったことにも感謝しています。

パネリストの基調報告において最新の状況・情報を得られた事はよかった。特にLINE（ライン）についての子ども達の実態をお教えていただいた安川先生の報告に迫力があった。

・パネリストによる報告
・ネットによる人権問題は急速に大きな社会問題となっており、今回のテーマは、タイムリーでよかった。以前から少しの知識と関心をもっていたが、本日のシンポジウムでより理解が深まった。今後においてもタイムリーなテーマによるシンポジウムをお願いします。

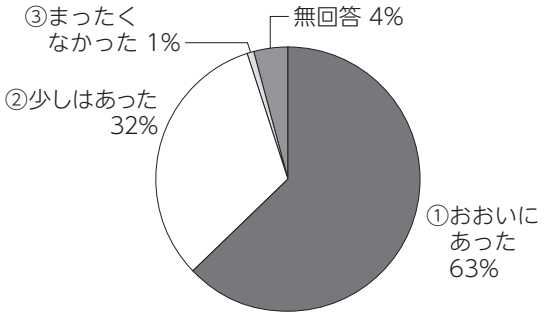
全体的に具体的で事例の多い話だったので、理解し易かった。インターネットの進歩になかなか追いついていけずにいるので、このような講演会に参加すると大変有意義である。

・吉川誠司氏・渡辺真由子氏の基調報告とレジュメが充実していた。
・安川氏の親の役割、果たすべき事柄の指摘は親子の本質についての貴重なアドバイスである。
・古新氏の「インターネットからの授かり物10」は、体験に基づき説得力があった。

※主な回答を抜粋

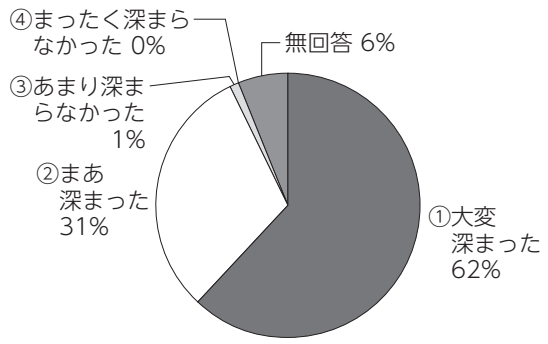
6 本シンポジウム参加以前に、人権問題についてどのくらい関心や理解があったか

① おおいにあった	55 人
② 少しはあった	28 人
③ まったくなかった	1 人
無回答	3 人



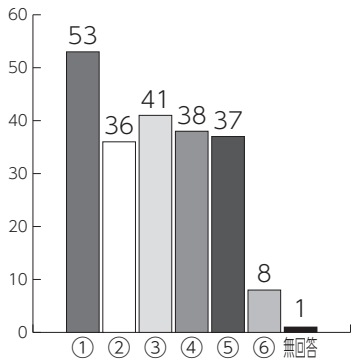
7 本シンポジウムに参加して、人権問題についての関心や理解は深まったか

① 大変深まった	54 人
② まあ深まった	27 人
③ あまり深まらなかった	1 人
④ まったく深まらなかった	0 人
無回答	5 人



8　本シンポジウムに参加して、何か行動しようと思ったか（複数回答）

① ネット上で起こる人権侵害の被害者・加害者にならないよう気をつけたい	53 人
② 人権問題に関心を持ち、偏見を持ったり、差別をしないようにしたい	36 人
③ 人権問題について、もっと知識を深めたり、勉強したりする機会をもちたい	41 人
④ 今回のイベントの内容を、友だちや家族に説明し、話し合いたい	38 人
⑤ ほかの人権問題に関するイベントにも、機会があれば参加したい	37 人
⑥ その他	8 人
無回答	1 人

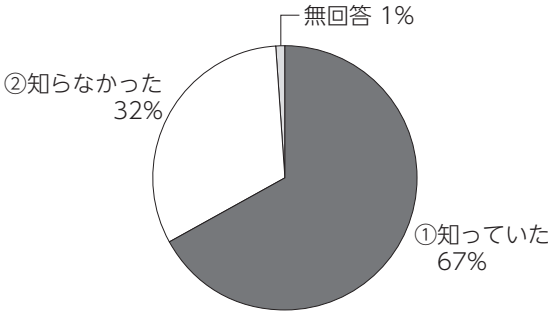


⑥ その他の内容

30歳代	・会社の人権イベントにつなげる。 ・個人を特定するような情報は控えたいと思いました。
40歳代	・仕事に活かす－県の施策に反映。 ・子どもの学校の先生にも伝えたい。大学で心理学を学んでいるので、インターネット依存や集団心理、犯罪心理などについて研究を深めたいと思う。 ・私は全国で70超の団体が実施している子ども専用電話チャイルドラインに携わっているのですが、もちろんネットに関わる子どもたちの悩みの話は多いです。電話の受け手の研修等、ご支援頂けるとありがたいです。10/26・27早稲田大でチャイルドライン全国フォーラム、11/16･17に同大で子どもの権利条約フォーラム等あるので、資料提供等頂ければ幸いです。
60歳以上	・人権擁護委員として頑張ります。 ・研修実施の参考にします。 ・ネットのマイナス面はしょせん防ぐことはできないもののようだ。ネットの基本政策の再考が必要。

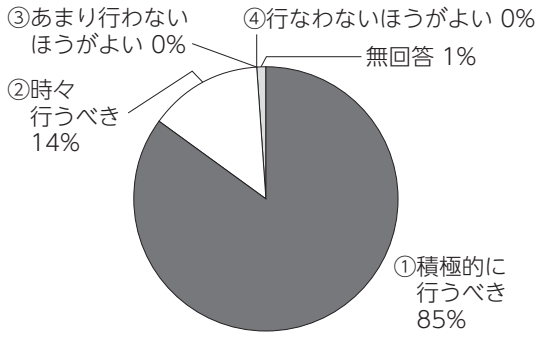
9　国や地方自治体が、広く人権啓発事業を行っていることは知っていたか

① 知っていた	58 人
② 知らなかった	28 人
無回答	1 人



10　今後、このようなシンポジウムを行なうべきだと思うか

① 積極的に行うべき	74 人
② 時々行うべき	12 人
③ あまり行わないほうがよい	0 人
④ 行なわないほうがよい	0 人
無回答	1 人



11 今回のシンポジウムについてのご意見や今後開催してほしいテーマなど（自由記入）

今回のシンポジウムマはとてもためになった。特にパネルディスカッション最後のパネリスト及びコーディネーターによるまとめは、端的で分かりやすくインターネットと人権の問題について説明されていた。ネットと人権の関係について、ネガティブだけでなくポジティブな面の視点は新たな気付きだった。今後開催してほしいテーマについて。各人権課題、女性、高齢者etc…の啓発活動は盛んに行われているが、そもそも話として、人権とは何か？人権侵害とは何か？が人権の仕事をしていても、その基本が難しく分からないと感じることがあるので、その2つについて普遍的かつ統一的な定義はないが、何か示唆のあるシンポジウムがあるとよいです。

インターネットによる人権侵害は、今後も大きな問題となるので、引き続き「インターネットと人権」をテーマにシンポジウムを開催してもらいたい。

インターネットの問題はまだまだインターネットと人とのつきあいが短いので、まだまだ予測できない問題が潜んでいるようにも思います。又、法律なども後追いであるので、今後も意識的に光と陰の両方に目を向けていきたいと思います。

インターネットと人権については、今回のメインテーマである「子ども」以外にも様々な問題があると思うので、そういったものを取り上げてほしい。例えば同和問題もあるし、横田先生が少しふれられた高齢者の問題もあると思う。

事件、事故等の被害者について氏名を公表しない（メディアで）とかがもっと一般的になると良い。子どもや学生に対する教育・啓発について研究が進んでほしい。インターネットではデータが残る！拡散するということを利用する前に知っているとよい。がしかし、そうではない状態を改善する方向を目指してほしい。利用する人々のルール作りは本当に大切！そのベースを作ってほしい。

※主な回答を抜粋

広報内容

広報実績

No.	事　　項	実施内容
1	新聞広告	・4紙に半5段広告を掲載。 読売新聞都内版、朝日新聞都内版、産経新聞都内23区版及び東京新聞都内23区版：平成25年10月6日（日） ・1紙に15段1/3広告を掲載。 読売新聞西部本社版：平成25年10月12日（土） 北陸支社版：平成25年10月12日（土） 東京本社版：平成25年10月13日（日） 北海道支社版：平成25年10月13日（日） 中部支社版：平成25年10月13日（日） 大阪本社版：平成25年10月14日（月） ・1紙に小枠広告を掲載。 読売新聞東京本社版：平成25年10月7日（月） 平成25年10月17日（木）
2	ＷＥＢ広報	・人権シンポジウム in 石巻採録及び人権相談窓口広報ＷＥＢページ中に掲載。平成25年10月12日（土）～ 20日（日）
3	広報用チラシの配布	・広報用チラシを関係機関等に配布、掲出を依頼。 東京法務局（500部） 全国の法務局・地方法務局（490部）※東京法務局を除く 東京都（250部） 東京都内市区（580部） 東京都内図書館（1,020部） 後援団体（300部） 東京都内大学（720部） 東京都内私立中学校（368部） その他、全国の自治体などに配布。 ※チラシ印刷部数：10,000部
4	イベント情報サイトへの広報記事掲載	・インターネット上のイベント情報サイトに広報記事を投稿、掲載。全国イベントガイド、WAMNET（ワムネット）など計16サイトに掲載。
5	メールマガジンの配信	・本シンポジウムの開催を案内するメールマガジンを計３回配信。
6	人権ライブラリーホームページへの広報記事掲載	・人権ライブラリーホームページのイベント情報コーナーに広報記事を掲載。
7	人権センターホームページへの広報記事掲載	・人権センターホームページのイベント情報コーナーに広報記事を掲載。

新聞・WEB広告







【半5段広告】
（上）
読売新聞都内版　平成25年10月6日（日）朝刊掲載
エリア：東京都
部数：938,710部
朝日新聞都内版　平成25年10月6日（日）朝刊掲載
エリア：東京都
部数：841,271部
産経新聞都内23区版　平成25年10月6日（日）朝刊掲載
エリア：東京都
部数：215,841部
（下）
東京新聞都内23区版　平成25年10月6日（日）朝刊掲載
エリア：東京都
部数：181,275部

【15段1/3広告】
読売新聞西部本社版
平成25年10月12日（土）朝刊掲載
北陸支社版
平成25年10月12日（土）朝刊掲載
東京本社版
平成25年10月13日（日）朝刊掲載
北海道支社版
平成25年10月13日（日）朝刊掲載
中部支社版
平成25年10月13日（日）朝刊掲載
大阪本社版
平成25年10月14日（月）朝刊掲載
エリア：全国
部数：9,938,209部



【小枠広告】
読売新聞東京本社版　平成25年10月７日（月）朝刊掲載
　　平成25年10月17日（木）朝刊掲載
エリア：茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、
　　山梨県、静岡県、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、
　　福島県、新潟県、長野県
部数：6,527,511部



【ＷＥＢ広告】

実施内容の周知

YouTube 人権チャンネル

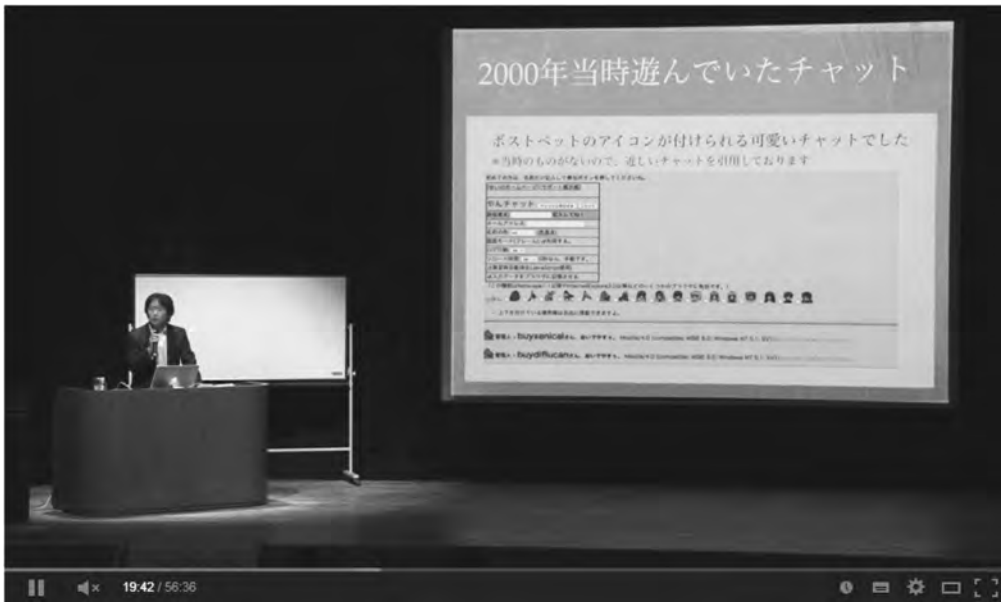
人権シンポジウム in 東京の模様は、YouTube人権チャンネルにおいて、動画を配信した。
https://www.youtube.com/jinkenchannel











採録記事





読売新聞・朝刊において、人権週間等の広報記事とともに、人権シンポジウムin東京の採録記事が掲載された。

【掲載日】

全国共通：平成25年11月30日（土）



YOMIURIONLINE（読売新聞）にて採録記事が掲載された。

採録記事・新聞広告の効果測定結果

読売新聞の採録掲載については、広告の効果を把握するため、首都圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）、近畿圏（大阪･京都･兵庫･滋賀･奈良･和歌山）、北海道、中京圏（愛知･岐阜･三重）、福岡県に居住し、読売新聞を定期購読する15 ～ 69歳の男女個人を対象にパソコンを利用したウェブ調査を実施した。調査結果の概要は以下のとおりである。

■接触度は、71.4％

※「確かに読んだ（見た）」又は「読んだ（見た）ような気がする」と回答

■理解度は86.9％

※設問「広告（記事部分を含む）が理解できた」に対し「あてはまる」又は「ややあてはまる」と回答

■関心度は66.6％

※設問「広告（記事部分を含む）に興味を持った」に対し「あてはまる」又は「ややあてはまる」と回答

■好感度は69.1％

※設問「広告（記事部分を含む）に好感を持った」に対し「あてはまる」又は「ややあてはまる」と回答

■「人権シンポジウムin東京」の記事内容についての理解度は53.6％

■「12月4日～ 10日は『人権週間』であること」についての理解度は75.8％

■「相談窓口やサイトなど」の認知度は「いずれもこの広告を見て初めて知った」が56.1％。

■人権イメージキャラクター「人KENまもる君」「人KENあゆみちゃん」の認知度は32.2％

※「具体的なキャラクター名まで知っていた」又は「見たことはあったが、具体的なキャラクター名について初めて知った」と回答

■人権シンポジウムへの参加経験者は1.5％

■人権シンポジウムへの参加意向者は67.1％。うち、参加意向の条件は、「自宅近くの開催なら参加したい」が37.7％、「興味のあるテーマなら参加したい」が31.9％、「一人ではなく、友人、家族、会社の同僚等と一緒ならば参加したい」が13.0％

■「広告閲覧後の人権問題に対する関心・理解度」は85.5％

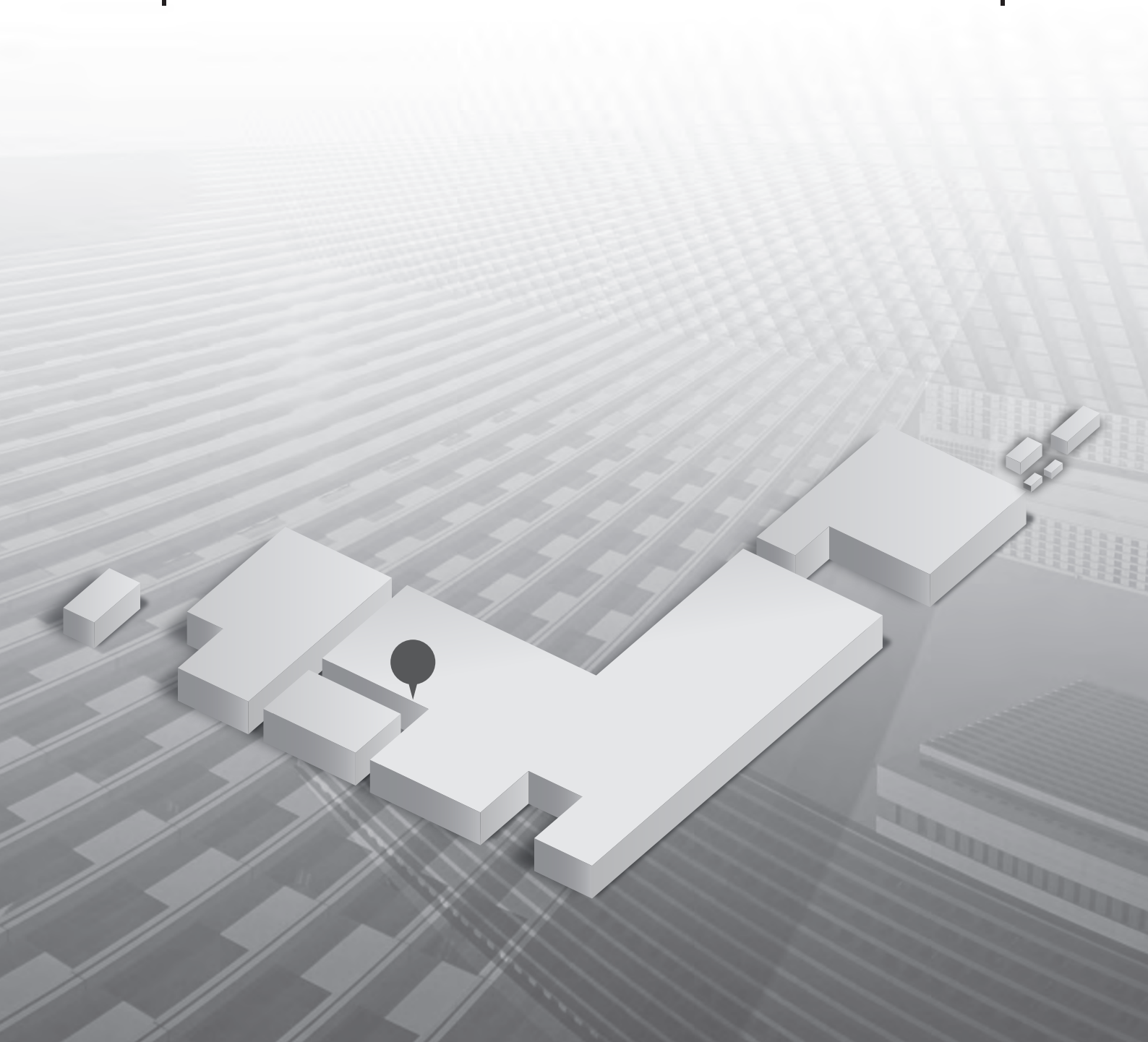
■設問「広告閲覧後、人権について何か行動をしようと思ったか」について、「人権に関する意識を深めたい」が75.8％、「人権に関するイベントに機会があれば参加したい」が52.7％

■「新聞広告の継続」について、「継続すべき」が91.5％

※「積極的に行うべき」又は「時々行うべき」と回答

シンポジウム報告

神戸会場



会場結果報告

【名　　称】　人権シンポジウム in 神戸

【地域テーマ】　震災と人権 ～阪神・淡路大震災から『心の復興』を学ぶ～

【日　　時】　2014（平成26）年1月11日（土）　13：30 ～ 18：00

【会　　場】　けんみんホール
（兵庫県神戸市中央区下山手通4－16－3　兵庫県民会館9F）

【来 場 者 数】　119人

【主　　催】　法務省、全国人権擁護委員連合会
神戸地方法務局、兵庫県人権擁護委員連合会
公益財団法人人権教育啓発推進センター

【後　　援】　兵庫県、神戸市、兵庫県市長会、兵庫県町村会、神戸新聞社、朝日新聞神戸総局、毎日新聞社神戸支局、読売新聞神戸総局、産経新聞社、日本経済新聞社神戸支社、共同通信社神戸支局、時事通信社神戸総局、NHK神戸放送局、サンテレビジョン、MBS、朝日放送、関西テレビ放送、読売テレビ、ラジオ関西、Kiss FM KOBE

プログラム

13：30～13：35

主催者挨拶　　林田　雅隆（神戸地方法務局長）

13：35～15：00

第１部　　シンポジウム「震災と人権 ～阪神・淡路大震災から『心の復興』を学ぶ～」

＜パネリストによる基調報告＞

■パネリスト

加藤　　寛（兵庫県こころのケアセンターセンター長）

冨永　良喜（兵庫教育大学大学院学校教育研究科人間発達教育専攻臨床心理学コース教授）

小林　郁雄（兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科特任教授）

菅野　澄枝（岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会代表）

緑上　浩子（岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会メンバー）

■コーディネーター

横田　洋三（法務省特別顧問、国際労働機関（ＩＬＯ）条約勧告適用専門家委員会委員、公益財団法人人権教育啓発推進センター理事長、元・国連人権促進保護小委員会委員）

15：00～15：15　　～休憩15分～

15：15～16：20

＜パネルディスカッション＞

（会場からの質問を中心にコーディネーター主導による自由討議）

16：20～16：30　　～休憩10分～

16：30～18：00

第２部　　映画上映　　映画『雄勝～法印神楽の復興』

監督によるトークショー「被災地の祭から見えてくる心の復興」

手塚　　眞（ヴィジュアリスト、有限会社ネオンテトラ代表取締役、株式会社手塚プロダクション取締役、イメージフォーラム映像研究所専任講師）

主催者挨拶

神戸地方法務局長
林　田　雅　隆

本日は、お忙しい中、多数の皆様に御来場いただきまして、誠にありがとうございます。

本日、震災に関する人権シンポジウムが、阪神・淡路大震災の被災地であるここ神戸市におきまして開催されますことは、誠に意義深いものであると思っております。

御承知のとおり、東日本大震災は、地震そのものに加え、その後の大津波、そして、これに伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故により、東北地方を中心として甚大な被害をもたらしました。既に、震災から約2年10か月が経過しましたが、依然として多くの方が仮設住宅等での避難生活を余儀なくされており、震災に起因する生活不安・ストレス等の影響による様々な人権問題が生じています。

このような中、全国の法務局、地方法務局及び人権擁護委員を中心とする、法務省の人権擁護機関は、原発事故に伴う風評に基づく差別的取扱い等、震災に伴って生起する様々な人権問題に対処するとともに、新たな人権侵害の発生を防止するため、震災に関する人権シンポジウムの開催を始め、各種の人権啓発活動に取り組んでおります。また、仮設住宅を訪問するなどして、被災者の心のケアを含めた様々な相談にも応じており、このような活動を通じて、人権侵害の疑いのある事案を認知した場合には、被害者の救済のため、速やかな対応をすることとしております。

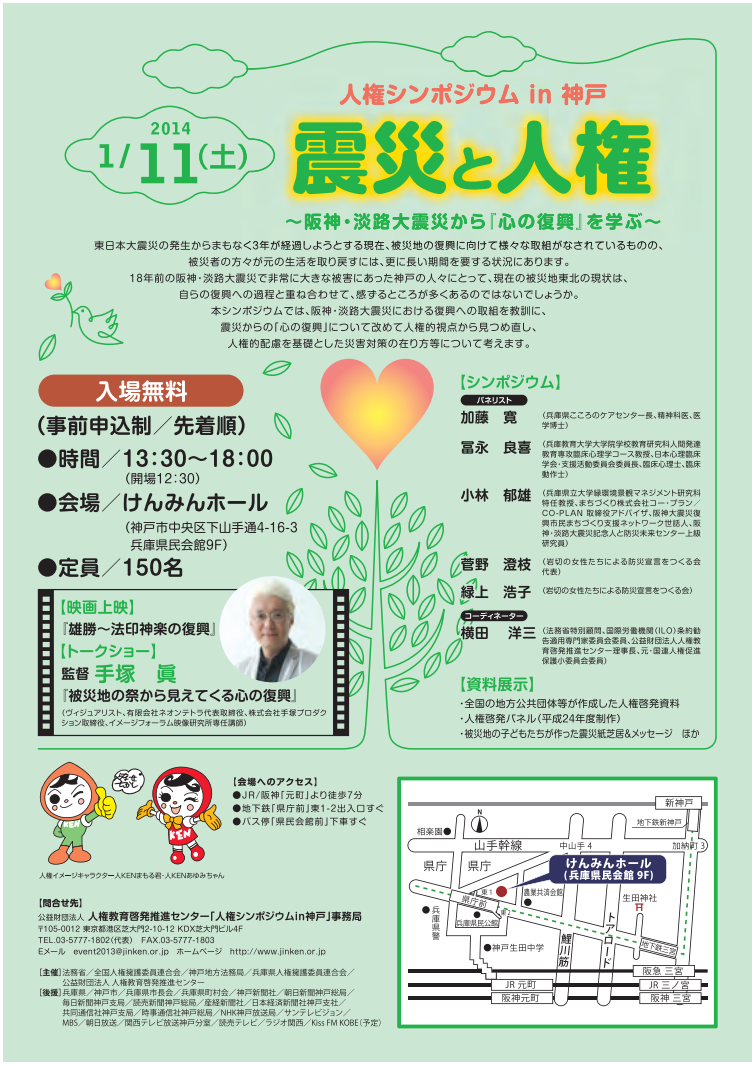
さて、本日の人権シンポジウムのテーマは、「震災と人権～阪神・淡路大震災から『心の復興』を学ぶ～」です。東日本大震災の被災者の方々が元の生活を取り戻すには、更に長い期間を要するという状況の中、阪神・淡路大震災における復興への取組を教訓に、震災からの「心の復興」について改めて見つめ直し、人権的配慮を基礎とした災害対策の在り方等を考える機会としたいとの思いから、このテーマを選定いたしました。

本日のシンポジウムのパネリストは、復興支援に関わる学識経験者・実務者など、いずれの方もこのテーマの議論をするのにふさわしい方々であります。また、第二部として、フェニックスマークを活用した広報事業を実施するなど、震災の経験と教訓を継承・発信する取組を支援している、ヴィジュアリストの手塚眞さんによるトークショー及び製作映画の上映も予定されています。どうか最後まで御参加いただきますよう、お願いします。

なお、本日のシンポジウムの模様は、後日、インターネット上のYouTube の人権チャンネルなどに掲載することを予定しています。本日この会場にお集まりいただいた皆様だけでなく、更に多くの皆様に、本シンポジウムの内容を共有していただきたいと思っております。

最後になりますが、本日のシンポジウム開催につきまして、各方面から賜りました多大の御支援、御協力に対し、心から感謝申し上げ、私の挨拶といたします。

神戸会場



広報用チラシ



受付風景



人権啓発パネル（平成24年度制作）と被災地の子どもたちが作成した震災紙芝居（エレベーターホール）

兵庫県、神戸市が作成した「震災と人権」に関するパネルの展示





全国の地方自治体等が作成した人権啓発資料の展示（ホール内）

第1部　シンポジウム



会場風景

コーディネーター
横田洋三さん





パネリスト
加藤寛さん



パネリスト
冨永良喜さん



パネリスト
小林郁雄さん



パネリスト
菅野澄枝さん



パネリスト
緑上浩子さん

第2部　映画上映＋トークショー

手塚眞さん



映画『雄勝～法印神楽の復興』



神戸会場

登壇者プロフィール



第１部
シンポジウム「震災と人権 ～阪神・淡路大震災から『心の復興』を学ぶ～」



パネリスト

加藤　寛（かとう　ひろし）

兵庫県こころのケアセンターセンター長兼診療所長
みやぎ心のケアセンター顧問
ふくしま心のケアセンター顧問
東京都精神医学総合研究所客員研究員
精神科医・医学博士

1995年まで東京の公立病院で精神科救急の実践を行っていた。震災後、神戸に戻り、阪神・淡路大震災の被災地におけるメンタルヘルスを担う新しい公的機関「こころのケアセンター」に2000年3月まで勤務した。その活動は、これまで精神医学が余り対象としてこなかった災害のもたらす様々な心理的影響に関する新しい取り組みであった。その活動の延長として作られた兵庫県のシンクタンク「こころのケア研究所」に2000年4月から所属し、メンタルヘルスに関する研究と施策提言を行ってきた。2004年からは「兵庫県こころのケアセンター」として活動を拡大し、トラウマやPTSDに関する臨床と研究に携わっている。
同センター開設以降、JR福知山線脱線事故、平成21年台風9号災害、スマトラ沖地震津波、中国四川大地震、ニュージーランド地震などの国内外の災害に対してスタッフを派遣し、支援を行ってきており、2011年の東日本大震災では、兵庫県チームの中心的メンバーとして、支援活動に参加している。また、災害以外の犯罪、暴力、虐待などの多くの被害者への支援も行っている。

【主な著書等】
「生き残るということ　えひめ丸沈没事故とトラウマケア」（星和書店）
「消防士を救え！～災害救援者のための惨事ストレス対策講座～」
（東京法令出版）
「心のケア　阪神・淡路大震災から東北へ」（講談社）　ほか

○兵庫県こころのケアセンター　　http://www.j-hits.org/



パネリスト

冨永　良喜（とみなが　よしき）

兵庫教育大学大学院学校教育研究科
人間発達教育専攻臨床心理学コース教授
日本ストレスマネジメント学会理事長
日本心理臨床学会・支援活動委員会委員長
臨床心理士
博士（心理学）

自然災害・虐待やＤＶなどの暴力・犯罪により傷ついた子どもたちへの心理的支援に関する研究、予防教育としてのストレスマネジメント教育に関する研究、トラウマへの心理療法としてのイメージ動作療法の研究を行っている。社会的活動としては、犯罪遺族の支援、地震や津波・台風災害などの自然災害後の心のケアに従事。2005年インド洋大津波後のインドネシア・アチェでの世界教職員組合主催教師研修講師、2009年JICA四川大地震こころのケア人材育成プロジェクト専門家。2011年4月岩手県教育委員会・いわて子どものこころのサポートチーム・スーパーヴァイザー。
1984年に兵庫教育大学学校教育学部助手就任、その後、1991年兵庫教育大学学校教育学部附属障害児教育実践センター助教授、1999年兵庫教育大学学校教育学部附属発達心理臨床研究センター教授、2004年兵庫教育大学学校教育学部教授を歴任。

【主な著書等】
「大災害と子どもの心―どう向き合い支えるか」（岩波書店）
「かばくんのきもち――災害後のこころのケアのために (絵本で学ぶストレスマネジメント 1)」（遠見書房）
「動作とイメージによるストレスマネジメント教育 基礎編・展開編―子どもの生きる力と教師の自信回復のために」（北大路書房）
「日常生活・災害ストレスマネジメント教育―教師とカウンセラーのためのガイドブック」（サンライフ企画）
「トラウマとPTSDの心理援助―心の傷に寄りそって」（金剛出版）　ほか

○ブログ「ストレスマネジメントとトラウマ」
http://traumaticstress.cocolog-nifty.com/



パネリスト

小林　郁雄（こばやし　いくお）

兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科特任教授
まちづくり株式会社コー・プラン／ CO-PLAN取締役アドバイザ
阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク世話人
阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター上級研究員

株式会社都市･計画･設計研究所を経て、まちづくり株式会社コー・プランを設立、代表取締役を経て現職。阪神・淡路大震災の際、民間プランナーを中心とした「阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク」を立ち上げ、復興まちづくりの支援活動に尽力する。東日本大震災の復興に関しても、阪神･淡路大震災の復興まちづくりの経験から、多くの提言・支援を行っている。

また、復興まちづくりによる功績等が認められ、数々の賞を受賞している。1996年兵庫県さわやかまちづくり賞神戸市景観ポイント賞特別賞、ロドニ-賞。1999年日本建築士会連合会業績賞、第1回関西まちづくり賞（日本都市計画学会関西支部）、2004年21世紀のまちづくり賞（兵庫地域政策研究機構）、2005年兵庫県功労者表彰(震災復興)、復興まちづくり支援活動賞(兵庫県建築関係団体震災10周年事業共同開催委員会)。

【主な著書等】
「きんもくせい」（阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク）1995～2005
「都市計画とまちづくりがわかる本」（彰国社）
「地域を元気にする実践！コミュニティデザイン」（彰国社）　ほか

○まちづくり株式会社　コー･プラン／ CO ･ PLAN
http://www8.plala.or.jp/co-plan/



パネリスト（写真左）

菅野　澄枝（かんの　すみえ）

岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会代表
岩切洞ノ口防犯協会婦人部部長
岩切学校支援地域本部スーパーバイザー
学校評議員
仙台市洞ノ口補導員
保護司
仙台市地域防災リーダー
元・仙台市立岩切中学校PTA会長（2009年～ 2012年）
元・仙台市PTA協議会副会長（2010年）

パネリスト（写真右）

緑上　浩子（みどりかみ　ひろこ）

岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会メンバー
みやぎ生協岩切店エリアリーダー
岩切社会学級運営委員
岩切洞ノ口防犯協会婦人部
仙台市地域防災リーダー
岩切地区学校支援本部地域コーディネーター
元・仙台市立岩切中学校PTA副会長（2009年～ 2012年）

仙台市宮城野区の岩切地区では、通常、防災訓練に参加するのは年齢の高い層ばかりで、防災活動もメンバーが固定していたため、「昼間に大地震が起きたら、家にいるのは女性が多い。ならば女性の視点で宣言をつくれば、防災対策として意味が深まる」との宮城野区長の提案を受け、年代や立場を超えた女性たち約20人が集まり、ワークショップを通じて互いの意見を出し合い、問題点を整理し、宣言づくりを行った。

その成果は、2010（平成22）年6月に開催された仙台市総合防災訓練において、「岩切・女性たちの防災宣言」として発表された。宣言文は、「あなたの大切な人は誰ですか?」という言葉から始まっている。
防災宣言の作成にかかわったのは、小・中学校ＰＴＡ、婦人防火クラブ、子育てサークルのメンバー等。
2011（平成23）年3月に発生した東日本大震災では、宮城野区は震度6強を観測し、津波被害により、区の面積の35%が浸水した。発災直後より、指定避難所のほか、指定避難所以外の施設にも被災者が避難して避難所が開設された。

発災後、岩切地区の女性たちの頭の片隅には、「女性たちの防災宣言」があり、「自分たちががんばらなければいけない」、「女性も災害時に積極的に動いてよいのだ」と考え、女性たちが率先して避難所や地域で活躍した。宣言づくりにかかわったメンバーの中には、実際にリーダーとして、子どもやお年寄りに配慮した避難所の運営を行った者もいた。



コーディネーター

横田　洋三（よこた　ようぞう）

法務省特別顧問
国際労働機関（ILO）条約勧告適用専門家委員会委員
公益財団法人人権教育啓発推進センター理事長
元・国連人権促進保護小委員会委員

1969年　国際基督教大学教養学部専任講師
1971年　国際基督教大学教養学部助教授
1974年　世界銀行法務部法律顧問
1979年　国際基督教大学教養学部教授
1983年　アデレード大学客員教授
1984年　コロンビア大学客員教授
1988年　国連差別防止及び少数者保護小委員会代理委員
1991年　国連人権委員会ミャンマー担当特別報告者（1996年まで）
1995年　東京大学法学部・大学院法学政治学研究科教授
2000年　国連人権促進保護小委員会委員
2001年　中央大学法学部教授、国連大学学長特別顧問
2003年　ILO条約勧告適用専門家委員会委員
2004年　中央大学法科大学院教授
2006年　財団法人人権教育啓発推進センター理事長
2010年　ILO条約勧告適用専門家委員会委員長（2013年6月まで、同年7月からは委員）
2012年　公益財団法人人権教育啓発推進センター理事長

◆主な担当分野　国際法、国際機構論、国際人権法、国際経済法

◆研究テーマ　国際経済法と国際公共政策、国際機構法の体系的研究、国際人権法の強行法規性

【主な著書】
「歴史はいかに書かれるべきか」（翻訳）（講談社学術文庫）
「二〇世紀と国際機構」（国際関係基礎研究所）
「日本の国際法事例研究（1）～（5）」（共著）（慶應義塾大学出版会）
「新版国際機構論」（共著）（国際書院）
「国連再生のシナリオ」（共訳）（国際書院）
「国連の可能性と限界」（共訳）（国際書院）
「国際法入門」（共著）（有斐閣）
「国際組織法」（共著）（有斐閣）
「国際機構の法構造」（国際書院）
「日本の人権／世界の人権」（不磨書房）　ほか

第２部
映画上映＆トークショー「被災地の祭から見えてくる心の復興」



手塚　眞（てづか　まこと）

ヴィジュアリスト
有限会社ネオンテトラ代表取締役
株式会社手塚プロダクション取締役
イメージフォーラム映像研究所専任講師

高校時代から映画制作を始め、数々のコンクールで受賞。大島渚監督ら映画人に絶賛される。大学時代に８mm 映画『ＭＯＭＥＮＴ』を発表、学生映画のヒット作となり現在もＤＶＤが発売されている。以後、映画・テレビ・ＣＭ・ＰＶ等の監督、イベント演出、ＣＤやソフト開発のプロデュース、本の執筆等、創作活動を全般的に行っている。

1981年角川映画『ねらわれた学園』に俳優として出演。テレビ『もんもんドラエティ～お茶の子博士のHORROR THEATER』が人気となる。1985年『星くず兄弟の伝説』で商業映画監督デビュー。Ｖシネマの草分け『妖怪天国』を監督して話題となり、開発初期のハイビジョンで『東大寺伝説・金剛奇譚』を撮る。1991年黒澤明監督に取材したドキュメンタリー『黒澤明･映画の秘密』を演出。10年をかけた大作『白痴』で1999年ヴェネチア映画祭招待・デジタルアワード受賞。2004年『ブラックキス』は東京映画祭招待。2003年からテレビアニメ『ブラック・ジャック』の監督を行い、東京アニメアワード優秀作品賞受賞。映像以外では1995年富士通のＰＣソフト『ＴＥＯ～もうひとつの地球』をプロデュース。世界19か国で50万本のヒットとなる。2001年には「東アジア競技大会大阪大会」開会式の総合演出を務める。マンガ『ＰＬＵＴＯ』（浦沢直樹×手塚治虫）の監修を行い、同作はメディア芸術祭ほかを受賞。2005年愛知万博にてダンスオペラ『ＵＺＭＥ』演出。2009年ニコニコ動画にて「ニコニコ国際映画祭」ほかを企画・出演。

また手塚治虫の遺族として宝塚市立手塚治虫記念館、東京江戸博物館「手塚治虫展」、手塚治虫公式ホームページ等の企画、プロデュースを行う。
著作に『ブラックキス』（幻冬舎）『ヴィジュアル時代の発想法』（集英社新書）『父・手塚治虫の素顔』（新潮社）『トランス位牌山奇譚』（竹書房）ほかがある。

○有限会社ネオンテトラ　　http://www.neontetra.co.jp
○ブログ「Tezka Macoto' 6D」　http://tzk.cocolog-nifty.com

映画『雄勝～法印神楽の復興』（2012年撮影/60分）

宮城県石巻市雄勝町。すべてを流し去った東日本大震災から1年。
町の復興には目途が立たず、生活は元には戻らない。それでも人々は、祭りの復興を望んだ。
600年の昔、羽黒修験者がこの地にもたらした雄勝法印神楽。その伝統の神楽の復活を通して土地と共に生きることを喜び、人間同士の結び付きを大切にする雄勝の人々の生き方、自然観を描く。東北再認識のドキュメンタリー。
監督：手塚 眞
企画：公益社団法人日本ユネスコ協会連盟　　特別協賛：日本テトラパック株式会社
音楽：松岡政長　　プロデューサー：北村皆雄／三浦庸子　　協力：雄勝法印神楽保存会
制作：ネオンテトラ／ヴィジュアルフォークロア

神戸会場

レジュメ



レジュメ

加　藤　　寛

人権シンポジウム

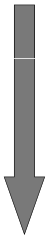
心の回復と生活再建

兵庫県こころのケアセンター　加藤　寛

「こころのケア」をする理由

被災者は、さまざまな心理的苦悩に直面している。

- 恐怖、衝撃から生じる反応；PTSD
- 喪失による反応；悲嘆と抑うつ
- 二次的ストレス；慢性的な心身の変調



災害による心理的影響は多彩

- 基本的にはすべてが「正常な反応」であり、回復は可能
- 人間には回復力があり、多くの場合自然回復する
- 医学的な介入（治療）が必要となる例は少ない

心理的回復の礎になること

- 安全、安心できる環境
- 生活再建
- コミュニティの再建
- 役割の回復

平成10年度調査の概要

- IES-R　総得点25点以上の割合
  - 仮設住宅住民：34.9%　　復興住宅住民：26.0%
  - 女性、近親者の喪失がある人で高い
- うつ尺度（オリジナル）　総得点12点以上
  - 仮設住宅住民：10.4%　　復興住宅住民：6.3%
- KAST　（問題飲酒群、重篤問題飲酒群の割合、男性のみ）
  - 仮設住宅住民：21.4%　　復興住宅住民：18.1%

孤独死

- 仮設住宅で誰にも看取られず死亡し、死後数日から数ヶ月後に発見された者、年間100名程度あった。
  - 最初の報告は1995年3月
  - 死から発見まで最長の者は10ヶ月

中壮年の孤独死の特徴

- 一人暮らしの無職の男性
- 慢性の身体疾患を持病としている
- 年収100万円以下の低所得者
- アルコール依存

額田勲「孤独死-被災地で考える人間の復興」岩波現代文庫

人間の復興

- 孤独死を発生させない仮設住宅には一つの特徴があって、隣近所の連帯が密で、小さな集団なりに要介護者、独居老人などの存在をしっかりと位置づけた共同体の場合である。
- 本質的な救済がありうるとしたら、地域の福祉、医療の担い手が、その人たちのもとに誠実に足を運ぶことが欠かせない。

額田勲「孤独死-被災地で考える人間の復興」岩波現代文庫

阪神・淡路大震災後の行政が行った生活支援策

- 高齢者見守り体制の強化
  - 生活援助員（LSA）：戸別訪問、電話での安否確認
  - 高齢世帯生活援助員（SCS）
  - 見守り推進員
  - 交番相談員（警察官OB）
- 住宅再建・購入支援：基金が利子を補填
- 災害復興住宅の家賃減額
- カムバック兵庫プラン

役割を取り戻す





こころのケアの基本的戦略

- 回復力を高める支援
- 受け入れやすくする工夫
  - アウトリーチ
  - 他のサービスと連携する
- 支援者へのアドバイス・コンサルテーション
- 啓発と心理教育

レジュメ

冨　永　良　喜

震災と人権
阪神・淡路大震災から「心の復興」を学ぶ－子どものサポートの視点から

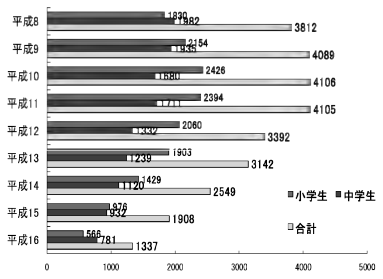
1、阪神淡路大震災から学ぶ
2、東日本大震災被災地の子どもたちと取り組み
3、わが国に必要な教育政策－道徳教育と心の健康教育の融合を



冨永良喜（兵庫教育大学大学院・臨床心理士／いわて子どものこころのサポートチームスーパーバイザー）
tominagayoshiki@gmail.com

人権シンポジウム　in　神戸　　けんみんホール（兵庫県民会館9F）
2014年1月11日（土）13：30－18：00

1、阪神淡路大震災から学ぶ

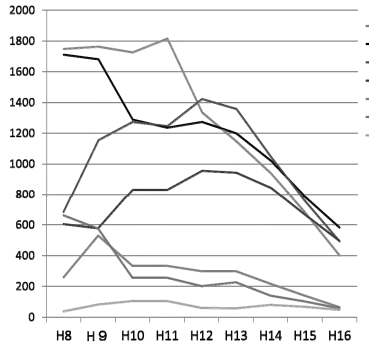


阪神淡路大震災後の心のケアが必要な児童生徒数の推移　（兵庫県教育委員会）

子どもへのアンケート、保護者へのアンケート、教師の日常の観察、総合的に

震災をきっかけに、個別に配慮を要する児童生徒数を毎年報告

→震災復興担当教諭、スクールカウンセラー配置数の根拠データになった



二次的被害（経済環境や家族友人関係の変化など）の増加によって、個別の配慮児童生徒数が５年間変わらなかった

要因別の児童生徒数の推移（兵庫県教育委員会）

災害後の心理支援の知識と方法を知らなかった－試行錯誤の日々

アメリカの心のケアのグループ「『恐い感情をはき出しましょう』それがPTSDを予防する」（ディブリーフィング）
→学校では、震災作文、絵を描くことが推奨された。→教師も被災、表現された体験を抱えきれない。→**教訓**：ある程度気持をコントロールする方法（リラックス法）を身につけ、安心できる場で、体験の共有・ねぎらいを！



阪神淡路大震災／リラックス動作法

ディブリーフィングは、間違いだと思った。まず必要な体験は、からだからの「安心感」。

国連の災害後の心のケア委員会（2007）で、「ディブリーフィング」は災害後はやってはいけないことと明記。

調査公害：研究者のための研究者によるトラウマストレス調査－個人に還元されない調査、アンケートをするたびにつらいことを思いださせた　⇒四川大地震後にも世界レベルで繰り返された

支援の方法と理論の不足：被災体験の表現の方法や時期についての混乱

人的システムの未構築：スクールカウンセラー調査活用事業は1994年のいじめを苦にした自殺を契機に1995年からスタート。被災地の教師のスクールカウンセラーへの相談は皆無だった。

⇒国内外の災害の子どもの心理支援の経験から、西洋の知識と方法を参考にしながら、わが国独自の災害後の子どもの心理支援の方法と理論を構築していった。
キーワードは、安心安全、表現活動、防災教育

災害で被災した人への心のケア

1993.7.12	北海道南西沖地震
1995.1.17	**阪神・淡路大震災**
1998.8	那須大水害
2000.3	有珠噴火災害
2000.9	三宅島噴火災害全島民避難
2000.10.6	鳥取西部地震
2001.3.24	芸予地震
2004.10.20	**台風23号豪雨災害**
2004.10.23	新潟中越地震
2004.12.26	**スマトラ沖大地震・インド洋津波**
2005.3.18	福岡西部沖地震
2005.9.5	台風14号豪雨災害（宮崎）
2007.7.16	新潟中越沖地震
2008.5.12	**中国・四川大地震**
2009.8	**台風9号豪雨災害**
2011.3.11	**東北地方沖地震**
2011.3.12	**長野県北部地震**
2011.3.15	**福島原子力発電所爆発**

心のケア・臨床心理士・ディブリーフィングの推奨

災害後の心のケアモデル
心理教育・ストレスマネジメント・アンケート・個別相談

Education International
EARTH派遣（教師と臨床心理士チーム）

日本心理臨床学会・日本臨床心理士会派遣チーム／JICA中国四川大地震こころのケア人材育成プロジェクト

2、東日本大震災被災地の子どもたちと取り組み　7

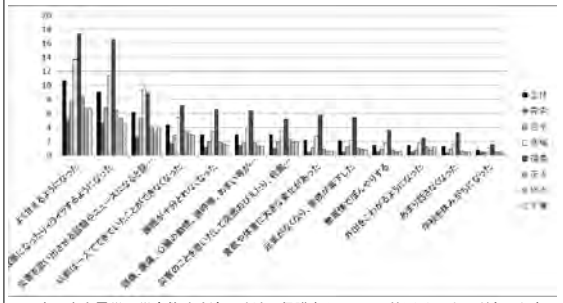


Fig.東日本大震災の災害救助法適用地域の保護者（335784件）からみた子どもの心身反応（文部科学省、2012）

岩手は、茨城と同程度の子どものストレス。被災が厳しいにもかかわらず、この結果は、岩手の教職員のサポート体制がしっかりしていることを示している。

不登校の中学生、宮城県が全国最多　震災が影響か

（2013年8月7日、朝日新聞より）

学校基本調査で、昨年度中に中学校で不登校になった生徒の割合を都道府県別にみると、宮城県が最多だった。宮城県教委の7日の発表によると、県内の中学生全体の**3・08%（前年度2・92%）（0．16%↑）**が30日以上欠席していた。全国平均は2・56%で、担当者は「東日本大震災の影響」としている。

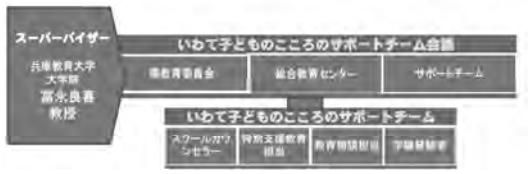
全国では、昨年度中に不登校だった小学生が2万1175人（前年度比1447人減）で前年度比6%減。中学生（中等教育学校の前期課程含む）は9万1262人（同3574人減）で、4%減っていた。

宮城県の中学生の不登校は07年度以降、減少していたが、5年ぶりに増加に転じた。県内では、5千人超が仮設住宅から通学。県教委は「窮屈な生活が意欲の低下や将来の不安を招いている」としている。

被災地では、福島県が2.34%（前年度2・16%）（0.18%↑）と増え、
岩手県は1.91%（前年度1.97%）（0.06%）とほぼ横ばいだった。

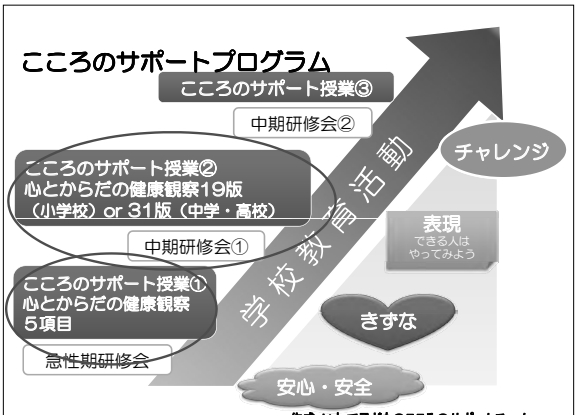
8

いわて子どものこころのサポートチームとは



岩手県スクールカウンセラー（6名）
特別支援教育担当（1名）（総合教育センター）
教育相談担当（1名）（総合教育センター、臨床心理士）
学識経験者（1名）（岩手大学、（兼）SC

こころのサポートプログラム



作成：いわて子どものこころのサポートチーム

こころのサポート授業

・心とからだの健康観察19版・31版
・トラウマの心理教育
・ストレスマネジメント
→担任教師やスクールカウンセラーによる個別相談
2011年9月~10月
2012年9月~10月
2013年9月~10月
8年継続
岩手の小・中・高・特別支援学校14万人児童生徒



心のファイル



スライド提供：山田北小学校・佐藤久美子先生

12



http://shakai-ouen.com/sc.html

監修：日本ストレスマネジメント学会



日常ストレス編
ストレス対処を学び体験しよう
上手な話の聴き方
3つの言い方
気持ちの仕組みを知ろう
試験や試合を乗り越えるためのイメージトレーニング
災害ストレス編
避難訓練とこころのサポート
ふりかえる表現活動
分かち合い乗りこえるための学級ミーティング

DVD「こころのサポート映像集」を活用した「こころのサポート授業」例

1、導入：自己紹介
2、「気分チェック12項目」
3、①緊張したときどうする？　を討議
　（事前にアンケートに回答してもらいます。）
　②オリンピック選手の談話（DVD使用）
　②眠りのためのリラックス法を体験
4、①つらいこと・大変なことがあったあとの心と体の変化と対応　を討議。
　②植松さんのメッセージ（DVD使用）
　③強いストレス（トラウマ）と回復と成長の話／語り継ぐ防災教育の大切さ
　④絆のワーク
5、気分チェック12項目と授業の感想

・いやなことから回避するのではなく、少しずつでもいいから向き合っていくことが大事ということが分かった。（18→9）
・最後にやったのがここちよかった。心と体がふわっと軽くなった。（3→0）
・昨日の津波注意報で、3月11日を思いだして少しこわかったけど、今日話を聴いたりして、けっこう落ち着けた。（5→1）
・今日の授業でリラックスするための方法はあまり知らなかったので知ることができてよかったです。（2→1）

植松秋さんからのメッセージ（阪神淡路大震災で中１のとき中3の姉を亡くす）

国立大学・心理学コースに進学

強いPTSD症状出現

エクスポージャー療法にて完治
（呼吸法、心理教育、語りつくす、避けていることに段階的チャレンジ）

兵庫教育大学大学院

臨床心理士取得

10年間、①「姉」、「震災」の話を一切しなかった
　　②「自分が姉を殺してしまった」と思い込んでいた

担任に自分だけ、「だいじょうぶか」と呼び出されるのがとてもいやだった

A４・２枚の手記：ホームページ：いわて子どものこころのサポート（岩手県総合教育センター）

トラウマとPTSD

・フラッシュバック（思いだしてつらい）
・悪夢
・津波ごっこ遊び
（再体験）

凍りついた記憶

・よく思いだせない
・楽しいことが楽しくない
・心がマヒしたよう（マヒ）

・避ける（その話題・場所・人を避ける）（回避）

トリガー（きっかけ刺激）
・季節
・揺れ
・災害のニュース

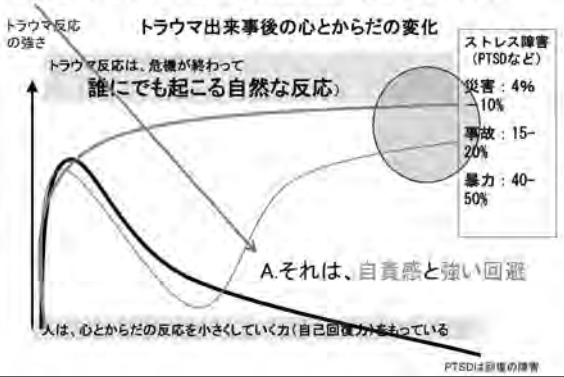
・生き残った自責感
（サバイバル・ギルト）
・孤立感
・無力感
（マイナスの考え）

・非常に警戒
・イライラ
・身体が緊張する
（過覚醒）

トラウマの記憶の箱　**思いだしたくない記憶であり、忘れられない記憶**

・トラウマ反応は、トラウマ体験をした人は強弱の差はあれだれにでも起こる反応
・PTSDは、トラウマ反応が強く、日常生活に支障ができている（仕事ができない、学校に行けない、成績がガクンと落ちるなど）

Q.なぜ植松さんは10年後にPTSDになったのでしょう？



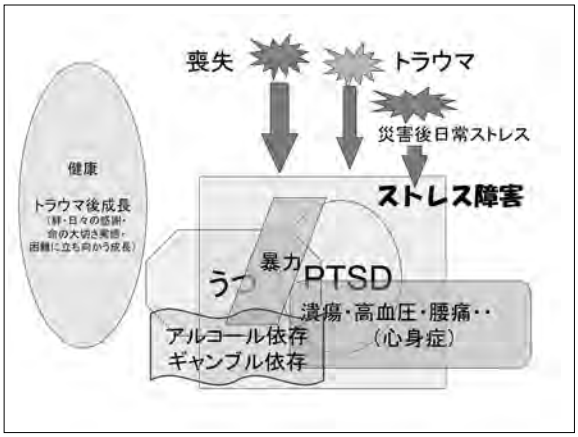
おじま　みぎわ
小島汀さんからのメッセージ



関西大学

人生まれる前に父・仙蔵さんを病気で亡くしたという星野監督の励ましの言葉だった。「私と同じ境遇なのに、なんて堂々としていて温かいんだろう。星野監督の背中を見て前を向こう、と自然に思えた」と振り返る。読売新聞　2013年5月13日

⇒小6の学校での阪神淡路大震災の追悼の会で語る



デブリーフィング（Debriefing）
（Mitchell,1983）

1. Introduction　導入（目的、守秘など）
2. Fact　事実「あなたはその時何をしていましたか？」
3. Thought　感情「今、どんな考えや感情をもっていますか？」
4. Reaction　反応「今、どんな反応が起こっていますか」
5. Symptom　症状「どんな症状が起こっていますか」
6. Teaching　教育「自然な正常な反応ですよ」
7. Re-Entry　再帰還　今後の対処を話し合う。情報提供。

→「デブリーフィングが有効であるというデータはない」
(Emmerik etal,2002) Lancet 360,766-771

→「災害後にディブリーフィングはやってはいけない」
IASC(2007): IASC Guidelines on Mental Health and Psychosocial Support in Emergency Settings.Geneva:Inter-Agency Standing Committee.

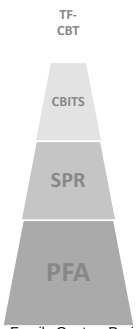
サイコロジカル・ファーストエイドの内容 （訳：兵庫県こころのケアセンター・明石加代・研究員）

1. 被災者に近づき、活動を始める　Contact and Engagement　目的：被災者の求めに応じる。あるいは、被災者の負担にならない共感的な態度でこちらから手を差し延べる
2. 安全と安心感　Safety and Comfort　目的：当面の安全を確保し、被災者に心と身体を休めてもらう
3. 安定化　Stabilization　目的：圧倒され混乱している被災者が、落ち着きを取り戻せるようにする
4. 情報を集める―今必要なこと、困っていること Information Gathering: Current Needs and Concerns　目的：周辺情報を集め、被災者が今必要としていること、困っていることを把握する。そのうえで、その人に合ったサイコロジカル・ファーストエイドを組み立てる
5. 現実的な問題の解決を助ける Practical Assistance　目的：今必要としていること、困っていることを解決するために、被災者を現実的に援助する
6. 周囲の人々との関わりを促進する　Connection with Social Supports　目的：家族や友人など身近にいて支えてくれる人や地域の援助機関との関わりを促進し、関係が保ち続けられるよう援助する
7. 対処に役立つ情報　Information on Coping　目的：苦しみを軽減し適応的な機能を高めるために、ストレス反応と対処の方法について知ってもらう
8. 紹介と引き継ぎ　Linkage with Collaborative Services　目的：被災者が今必要としている、あるいは将来必要となるサービスを紹介し、引き継ぎを行なう

①心理サポートを受け入れやすい活動、②被災にともなう体験の表現、③防災教育が記載されていない

CBITS（Cognitive Behavior Intervention Trauma in School）(Jaycox,Langley,& Dean,2009)
1.概要（Introduction）
2.トラウマに対する一般的反応とリラックス方法（Common Reactions to Trauma and Strategies for Relaxation）
3.思考と感情（Thoughts and Feelings）
4.有益な思考（Helpful Thinking）
5.恐怖に立ち向かう（Facing Your Fears）
6.トラウマ経験を語る1（Trauma Narrative, Part One）
7.トラウマ経験を語る2（Trauma Narrative, Part Two）
8.問題解決（ Problem Solving）
9.人間関係の問題とホットシート練習（ Practice with Social Problems and the Hot Seat）
10. 将来の計画と終了式（Planning for the Future and Graduation）

SPR（Skills for Psychological Recovery）
(Berkowitz, etal.2010)
1.情報を集め支援の優先順位を決める（Gathering Information and Prioritizing Assistance）
2.問題解決のスキルを高める(Building Problem-Solving Skills)
3.ポジティブな活動をする(Promoting Positive Activities)
4.心身の反応に対処する(Managing Reactions)
5.役に立つ考え方をする（Promoting Helpful Thinking）
6.周囲の人とよい関係をつくる（Rebuilding Healthy Social Connections）
継続面接（Multiple Contacts）



Douglas W.Walker:Clinical Director - Mercy Family Center Project Director - Project Fleur-de-lis New Orleans, Louisiana USA

つらいことを思いだして苦しくなったとき







思い出して苦しくなったら、凍りついた記憶のアルバムがとけはじめている、良いことが起こっていると思ってね！

Step1　コントロール
①眠りのとき：額に力をいれて力をぬく（「考えないようにしよう」という対処はうまくいかない）。体のいろんな部位に力をいれて、力を抜きましょう。力がぬけると、楽しいイメージが浮かんできます。（漸進性弛緩法）（仰臥位or椅子座位）
②勉強をしているとき：今は集中！と背を立てる。そのことはいまはストップ。（椅子座位：動作法での軸づくり）
③合唱・部活動・地域の踊りなど集中できることをすること。
③踏みしめ（動作法）・グラウンディング（立位）

Step2　向き合う（椅子座位）

スクリーンを思いうかべます。映画館のスクリーン。あなたは、真ん中の席に座っています。あまりスクリーンが大きかったら、もっと離れましょう。
なにが起こったのか、離れて、自分が経験したことをながめます。

いま、落ち着いているあなたが、がんばってきたあなたに、ねぎらいのメッセージを送ってあげてください。

このことを一人でするのは、つらいので、信頼できる人に話を聴いてもらうといいでしょう。



語り継ぐ防災教育へ、
世界へ発信しよう

3段階こころのサポートモデル（回復と成長のためのトライアングル）

Ⅱトラウマ対処体験　心とからだの健康観察19版・31版
①向き合い距離をとる：動作法・インドフルネス・フォーカシング/ストレスマネジメント　災害から3か月~6か月、事件の3週間後
②心理教育
③分かち合う：語り継ぐ防災教育
④考えを変える：認知療法・EMDR
⑤なれる：暴露療法・段階的練習
⑥はきだす：ディブリーフィング・カタルシス

Ⅲ服喪追悼体験
①よき思い出を浮かべる
②心のなかでお話をする

Ⅰ日常生活体験
「眠る・食べる・学ぶ（働く）・遊ぶ」という生活体験を充実させる　災害の急性期、事件の直後期

健康アンケート（睡眠、食欲、体調、イライラ）・ストレスチェック

防災教育とこころのサポートを一体で

こころのサポートに配慮した避難訓練の実践：海に近い甫嶺小・越喜来小・崎浜小3校合同で授業開始：4月25日　津波を想定した避難訓練の実施：一人も心身の不調を訴える児童がいなかった。
前日、クラス単位で、学校から山に上がる避難経路を確認していた。 ← 段階的練習、安心感、信頼感　甫嶺小・西條剛志教諭から

避難訓練、防災学習、防災講演会などは、被災を体験した人にとっては、つらいことを思いださせるトリガーとなる

強い回避と自責感がストレス障害のリスク因子であることを知り、お互いを労り、認め合い、そしてチャレンジしていく社会をつくろう

防災学習と心のサポートアンケート　今日は　年　月　日

なまえ　　年　組　番　男・女

あなたはつぎのことについてどれくらい苦しい（いや、こわい、つらい）ですか？あてはまる数字に○をつけてください。　0＝全く苦しくない　10＝さいこうに苦しい

1	避難訓練をする	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
2	"つなみ"ということばを聞いたり見たりする	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
3	"つなみ"の映そうを見る	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
4	つなみの仕組みについて学ぶ	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
5	心とからだの健康かんさつアンケートをする	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
6	つなみのあとに経験したことを作文に書く	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
7	つなみのあとに経験したことを話す	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
8	津波注意報・津波警報のサイレンを聞く	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
9	強い地震や長い時間のゆれがあったすぐあと	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10

3、わが国に必要な教育政策－道徳教育と心の健康教育の融合を

保健体育の教科書に、心の健康、ストレスへの対応のページがあるが、小学校5・6年で4時間、中学3年間で、3時間ほどの授業時数である。

いじめ防止に、道徳の教科化が検討されているが、道徳の時間は、読み物教材により主人公の身になって道徳的価値（節制、勤勉、勇気、誠実、向上心、愛国心など）を学ぶのであって、暴力・いじめ・災害による心身の打撃とその回復は学ばない。

⇒文部科学省の新たな動向

小学4年　道徳　花をさかせた水がめインドの水汲み男の話
毎日、川から汲んだ水を、二つの水がめに入れて、天秤にしてかついで、家まで運びます。
右側の水がめは、ひび割れもなく満杯の水を毎日運びます。ところが、左側の水がめは、ひび割れがあって、主（あるじ）の家に到着した頃には、半分しか運べないのです。それを気にした水がめが、主（あるじ）に、自分を壊してくれと頼みます。主（あるじ）は全く取り合わず、毎日その二つの水がめで水を運ぶのです。
何年かたったある日も、またひび割れのある水がめは、主（あるじ）に自分は役に立たないので、壊してくれと頼みます。すると、主（あるじ）は、毎日通る道をみせて、
「君が通ってきた側にだけ、花がさいている。ひび割れから滴った水のおかげで花を咲かすことができたんだ。」と教えました。
左側の水がめは、右側の水がめと比べ、ひび割れのある自分が大嫌いだったけれど、ひび割れのあるおかげで、花を咲かせることができ、自分を誇りに思えるようになりました。

ひび割れた水がめの気もちを考えよう！　**読み物教材**

物語を読み解くことに大半の時間を費やし、児童生徒が自分のことに向き合う時間がほとんどない
欠点・短所　⇒①どう変えていけばいいか　②それが他者の利点や自分の利点になっているところはないか？　⇒心の健康や心理学を取り入れた授業だったら？
ネガティブメッセージが心身に及ぼす影響

2013年12月2日、文部科学省・道徳教育の充実に関する懇談会は、報告書（案）を掲載した。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/096/shiryo

・道徳の時間の指導が道徳的価値の理解に偏りがちで、例えば、自分の思いを伝え、相手の思いを酌むためには具体的にどう振る舞えば良いかというような技法的な側面に関する教育が不足している。（10p）

・道徳の時間において、一定の道徳的価値を理解させようと読み物の主人公の心情を単純に理解させるような授業よりは、例えば、善悪の問題も立場によって見方が異なる場合もあることや、自分の思うようにならない複雑で困難な状況に遭遇したときにどのように対応すべきかなどについて、多角的・批判的に考えさせたり、議論・討論させたりする授業を重視することが必要であろう。

・道徳の時間においても、例えば、児童生徒に特定の役割を与えて即興的に演技する役割演技（ロールプレイ）や実生活の中での振る舞い方などのスキル的な学習、問題解決的な学習などの動的な活動がもっとバランス良く取り入れられるべきと考える。（12p）

⇒道徳の時間に

上手な話の聴き方、3つの言い方、親と子のコミュニケーション、いじめとストレスなど、ロールプレイや落ち着くための動作体験などを活用した授業が実践できる

中国　「心理健康教育」は2003年に不登校・インターネット依存の対応として、道徳とは別に、科目として設定された。



心理健康教育の授業をすることで、子どもたちが、地震の恐怖を閉じ込めないで、自然に話すようになったこと、「心理訪談室」を訪れてくれること、を話してくれた。

＜苦労することはありませんか？＞と尋ねると、「とてもやりがいがある。自分ではむつかしい子どもは、必ず（中国心理学会・中国科学院心理研究所の）祝（卓宏）先生に相談します」と言っていた。
本当に彼は生き生きとしていた。

綿竹・九龙小学校（九龍小学校）の心理訪談室にて心理健康教育師と
2008.11.12　Blog綿竹婦女連合会（绵竹市妇联的博客绵竹的妇女儿童将铭记您的情谊。）より

長期的なこころのサポートプログラムを！

放射線不安、トラウマストレス、日常ストレスを可視化し、国・県をあげて、長期的な支援体制の確立を！

スクリーニングモデル（ハイリスク者をアンケートで発見、スクールカウンセラーや医療につなぐシステム）だけでは十分ではなく、セフルケア・成長モデル（すべての児童生徒・教師・保護者がストレスについて体験的に学び望ましい対処を個人・組織が実践し次世代に語り継ぐ）を。

道徳教育とストレスマネジメントを活用した心の健康教育の融合を！

心の健康教育と防災教育の融合を！

レジュメ　小　林　郁　雄

災害対策全書　4. 防災・減災
（2011年5月ぎょうせい）

第4章　防災計画と復興計画

2　災害復興が示す新たな防災・減災まちづくり

2.2　復興事例からみた防災まちづくり（都市）

神戸山手大学環境文化学科教授
小林　郁雄
Ikuo Kobayashi

キーワード
- 松本せせらぎ
- 地域のやっかいもののせせらぎは防災まちづくり装置
- 野田北ふるさとネット
- 住民自らのネットワークの役割は防災・減災

1　都市防災環境の改善

防災・減災のための都市環境の改善として、まず考えられるのは災害に強い都市構造の整備である。すなわち、幅員や線形がしっかりした道路河川、適切に配置・整備された公園広場、構造的にもネットワークとしても災害対策を考慮した電気・ガス・上下水道といった供給処理施設、こうした都市基幹施設が整備、管理されていることが基本である。それに加えて、住宅・商店などの建築物が適切な密度で配置され、耐震・防火などの性能を十分に有するとともに、それらが継続的にメンテナンスされていることも重要である。

もちろん、地盤や土壌、斜面や埋立などしっかりした地形地質、大雨や暴風を緩和する水路緑地の保全涵養など自然環境において災害対策の基本的条件が整っている前提でのことである。

こうした、都市環境基盤の整備改善が防災の基本ではあるが、経済的効率や政治的判断などから、都市機能とのバランスの上で必ずしも防災最優先で資本投下がなされるわけではないし、当然、一朝一夕に整備が終わるようなものでもなく、長期にわたる継続的整備が必要なことにもなる。

こうした都市環境の抜本的な改善に向けた努力とともに、日々の防災環境改善運動として防災まちづくりに取り組んでいくことが、とりあえず、重要である。すなわち、日々の防災環境改善運動とは日常的な街の環境への関心を確認し、高めることである。都市環境基盤が防災的に完璧に整備されていたとしても、それを上回る大災害が襲いかかってくる可能性はあり、自然の脅威は底知れない。ハードな環境整備と合わせて、ソフトな環境運動が必要な理由であり、日常的にはそちらの方が重要である。

2　自律生活圏の確立

阪神・淡路大震災からの1995年1月～3月の3ヵ月間を、私たち被災民は「震災ユートピア」と呼んだ。突然の大災害にアッケにとられ、呆然の日々からようやく立ち直った時、多くの不自由と様々の困難な状況に満ちてはいたが、それに倍増する自由自律と相互連帯からなる自律連帯市民社会が、そこにあった。

その震災ユートピア期に、被災現場で私たちが学んだのは「巨大なものは脆い／やってないことはできない／自分でできることを自分でする」という3つの教訓であり、その総合解としての「小規模で分散した自律生活圏が多重にネットワークした社会」という将来都市像であった。

近隣住区を超え、環境的にも地域経済としても自律循環を目指し、自己決定できる生活圏域として「自律生活圏（＝コンパクトタウン、まち住区）」の確立こそが、住民主体のまちづくりのゴールであり、災害に強い（うたれ強い）市街地の基本であると確信した。

そして、そうした自らの生き方を自らで決定できる小規模分散自律生活圏（コンパクトタウン）の多重にネットワークされている形（コンパクトシティ）が重要である。施設面でも情報面でも、人間関係や行政組織も含めてのネットワークである。国際・広域のネットワークが地域・個人と直結する形で、生活圏の多重ネットワークとして形成されていること、それが地方自治体であり、国家であるという構図である。

自律生活圏の確立が、自分たちの手で防災まちづくりを進めていくための基本条件である。

2.2　復興事例からみた防災まちづくり（都市）



写真１　通学路のため子どもの遊ぶ姿が絶えない松本のせせらぎ



写真２　松本のせせらぎと定例の清掃をする沿道住民





写真３　情報共有の場である野田北ふるさとネット定例会議

（1）復興事例：松本せせらぎ（神戸市兵庫区）

松本地区は神戸市兵庫区の中央部にある面積約 9ha の木造長屋などの住宅が密集した地区であった。

阪神・淡路大震災の大規模な火災により 80％が焼失し、壊滅的な大被害を受けた。神戸市による震災復興土地区画整理事業によって復興が進められた地区の一つである。

松本せせらぎは、協議会活動の中である住民の「火事のときに水があったら…」のつぶやきから発想発展したもので、都市計画道路松本線（幅員 17m）の歩道に設置された水路である。流れる水は、北方 3km の鈴蘭台下水処理場の高度処理水を活用したもので、常に水量豊富なせせらぎとなっている。途中で小規模水力発電にも利用されている。

松本せせらぎは震災火災の教訓から作られた水路であり、初期消火用水・災害後の生活用水として確かに役立つであろう。しかし、最も重要な役割は、この面倒な水路の維持管理を沿線住民が自律的継続的に行うことによって、地区環境への関心を高め、相互の人間関係を深める装置として「せせらぎ」があり続けることである。究極の防災まちづくり装置といえよう。

（2）復興事例：野田北ふるさとネット（神戸市長田区）

野田北部地区は神戸市長田区最西部にあり、多くの木造長屋住宅が密集した約 13ha の典型的な神戸の下町地区であった。阪神・淡路大震災で地区の東部は大規模な火災にみまわれその復興に震災復興土地区画整理事業が、焼失を免れたが大部分の家屋が倒壊した鷹取駅に近い西部は街並み環境整備事業で復興整備が進められた。いくつもの事業に対応して多くの地元組織が立ち上がっていった。

震災後、コミュニティの各団体の活動が多様化するなかで、情報共有が困難になっていった。そこで、多くの復興都市基盤環境や地域防災組織などの整備が進められたなかで、①ゆるやかな連携、②地域の総合窓口、③情報共有の場、としての機能を担うべく、多くの地域団体をゆるやかにつなぐ「野田北ふるさとネット」が結成された。

この自律的継続的な住民自らのネットワークが果たす究極の役割は〈防災・減災〉にあることを、ふるさとネットの構成員は特に意識していないが、それもまた、防災まちづくりにおいては重要なことかもしれない。

レジュメ　菅野澄枝・緑上浩子

岩切･女性たちの防災宣言

岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会

代表　菅野　澄枝

緑上　浩子

１．　宮城県仙台市岩切の様子

２．　岩切・女性たちの防災宣言

３．　東日本大震災を経て

４．　人まかせにしない

「わたしたちの防災・減災」

岩切・女性たちの防災宣言



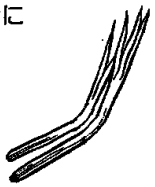
あなたの大切な人は誰ですか？
今何かをすることで、大切な人の命を守れるなら、
すぐにそれを始めませんか？

もし、大災害が起こったら、小さな子供を抱えてどうしよう？
避難所はどこ？　　何を持っていくの？　夫と連絡がとれなかったら？

考えることが怖くて止めてしまっている、そんなあなたの不安を話してください。
私たちはあなたの心配を一緒に考えます。
考えることで、きっと怖さが減るでしょう。

隣に住んでいる人は誰ですか？

あなたが関心を持つだけで、何かが変わるはず。
ほんの少し勇気を出して声をかけてみたら、おすそわけの曲がりねぎと一緒に
情報が入ってくるかもしれません。



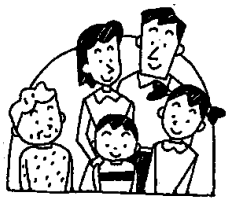
一戸一戸の家庭で防災の話をしてみませんか？

いざという時、どうやっておじいちゃんを助ける？
中学生の息子だって、みんなを守る側にたつことができる。
いろんなことを家族で話します。
大好きなみんなを守りたいから。

ちょっと自分たちの備えを心掛けることができたら
周りの人のことを考えてみます。
誰かにあてにしてもらえることで、がんばれるような気がします。
でも、がんばりすぎないで。

互いに認め合うことでつながっていきたいから、
感謝の気持ちをたくさん伝えます。
ありがとう、ありがとう、ありがとうの貯金をします。

岩切にはいろんな人が暮らしています。
親子四代共に暮らす人
新しくこの地域に住み始めた人
宮城県沖地震を体験している人、いない人。



私たちは、この岩切にある安心を伝えます。
地域防災マップがあることや
自宅の井戸や機材を「いつでもいいよ」と言って貸してくれる人がいることを。

私たちは、防災について考え続けるために語り継ぎます。
昭和53年の宮城県沖地震で、からくも命拾いしたことや復興までの苦労を。

私たちは、ここ岩切でみんなが安心して暮らすために、
自分たちでできることを考え行動します。
大切な人の命を守るために。
この地域で育つ子供たちのために。

平成２２年６月１２日

神戸会場

内容紹介



第 1-1 部　パネリストによる基調報告

加藤　寛（兵庫県こころのケアセンターセンター長）

【横田】

皆さんこんにちは。本日は土曜日の寒い中、人権シンポジウムin神戸に足をお運びいただきまして、深く感謝申し上げます。私は公益財団法人人権教育啓発推進センターの横田洋三と申します。シンポジウムのコーディネーター、進行役を務めさせていただきます。

本日のシンポジウムは、「震災と人権」というテーマです。東日本大震災が、間もなく3年を迎えるという状況になってまいりました。その間、国、自治体、そして様々な民間組織の協力を得まして、様々な復興に向けての取組が進んでおります。道路や建物など、そういった物理的なものの復興もまだまだ先は長いのですが、しかし目に見える形で日に日に改善が進んでおります。しかし、被災者の心に残っている震災の跡というのは、なかなか目に見えないだけに復興に時間も掛かりますし、また様々な人の協力や本人の努力というものが必要です。その辺りのことにつきましては、今から18年前に、阪神・淡路大震災で神戸を中心に関西の方々が被災されたわけですが、その時の経験に基づいて、様々なことが分かってきました。そのことを踏まえて、東日本大震災については、やはり心のケアが非常に大事だということを、多くの関係者が声を上げました。その結果として、関西での18年前の経験、その後の動きを踏まえて、関西の人たちが、今度は東日本大震災の被災者に向けて、こういう点を気を付けると、こういう点を努力すると、より良く心の復興が進むよというようなことを協力して語ってくださっているというのが、今の状況なのです。今日はそうした方々の中から、パネリストとして5人の方をお呼びして、御登壇いただくことにいたしました。

精神医学や臨床心理学という分野の専門性をお持ちの加藤寛さんと冨永良喜さん、まちづくりという観点から、震災と復興の問題に取り組んでこられた小林郁雄さん、仙台市の岩切地区というところで、市民として、女性として、また主婦として、防災対策や復興活動に取り組んでこられたお二人の方、菅野澄枝さん、緑上浩子さんです。これから、お一人お一人基調報告をしていただき、会場からの御質問あるいは御意見を伺いつつ、お互いの考え方を交換し合っていきたいと思っております。まず、加藤寛さんからのお話をお伺いします。よろしくお願いいたします。

【加藤】

加藤でございます。私は、精神科の医師をしておりますので、被災したことによる心の影響とはどのようなものなのかをまずお話しして、そこからどのように回復をするのかということについてお話をさせていただこうと思っております。

大きな災害が起きますと、大体１週間目ぐらいから心のケアの必要性が叫ばれます。最初は、被害程度の大きさについて報道されるわけですが、報道のネタが尽きてくると、心のケアの必要性が言われていくわけです。それがどうして必要なのかを最初に考えてみますと、これは比較的単純です。というのは、被災することによって、いろいろな心理的影響を持たれる方がいるからです。


加藤寛さん

例えば、まず恐怖感や衝撃的な体験から来る反応です。恐怖がいつまでも消えないとか、ちょっとしたことで体験を思い出してしまって怖くなることが残ってしまわれる方がいて、それがずっと残ってしまうと非常に有名になりました「PTSD」と言われている、精神的な病気と認識されます。また、それだけではなく、災害によって大切な方を亡くすとか、大切な家や物を無くす経験をしてしまうと、悲しみが非常に深く残ってしまい、それが何年経っても変わらない悲しみ

として続いてしまう。こういった問題も当然、起こります。

それともう一つは、災害の規模が大きくなって、生活の基盤、コミュニティへの影響が強くあればあるほど、生活再建の難しさに直面することになります。そうしますと、日々の生活を送ること自体がとてもストレスフルな記憶になりますので、これらの心身への様々な影響が、問題になってくるのです。このように心の影響というのは多面的ですので、そういったことを忘れないでサポートしていくことは、大事な視点になっていくわけです。

今申し上げたように、非常に多彩な心理的影響が残るわけですが、大事な視点をいくつかここに挙げております。それは、確かに被災者にはいろいろな反応が出るのです。ところが、ほとんどの反応は、基本的には当たり前のことです。例えば、怖い体験をしたら怖さが残るのは当然ですし、何かを無くしたら悲しいのは当然ですので、そういったものは、当たり前の反応、正常な反応と言っていいわけです。ですので、正常な反応ですから、被災者の全てが心の病気になるという考え方をすると、とても大きな間違いをすることになります。これらは、当たり前の反応ですので、多くの方は自然に回復していくことを認識しておく必要があります。逆に考えると、例えば精神科の医師が出て行って、何か介入しなければならない事態というのは、限られたケースであるということも認識しておく必要があると思います。

多くの被災者は徐々に心身への影響から回復していくのですが、回復をするための基盤に着目しなければなりません。それは、まずは安全で安心できる環境に身を置くことです。いつまでも危険で不安な状況に身を置いていることは、回復のスタートラインにも着けません。今、福島は、そういった状況だと言ってよろしいかと思います。

もう一つは、きちんと生活が再建されていくことです。3年経った被災地、神戸と東北と比べてみると、やはり残念ながら東北の方が、復興が遅れています。そうしますと、生活が再建されないことで発生するストレスの影響が強く見られる可能性も出てくるわけです。ですから、生活をどう取り戻していくかということは、心理的回復にとってとても大きな要因になります。同じように、地域社会の力、コミュニティの力を取り戻していくっていうことも、とても大事なことであると言えると思います。

もう一つは、被災された方御自身のやるべきこと、心掛けることとして、自分自身の役割を取り戻していくことがとても大事です。それは仕事という役割もありますし、家庭の中での役割かもしれませんし、コミュニティの中での役割かもしれませんが、ともかく、ずっと被災者という立場に身を置くのではなく、自分の力で自分の役割を取り戻していくことが、非常に大事なことになります。こういった点を強化してく取組は、何よりの心のケアになると言っても過言ではないと思います。

その一つの証拠に、いくつかの調査がそういったことを少し裏付けております。これは平成10（1998）年度に兵庫県が行った、阪神・淡路大震災後の仮設住宅、復興住宅の調査なのですが、ここにありますように、仮設住宅の方と、仮設から出て復興住宅に移った方の心理的な影響の大きさというのを比べてみると、やはり仮設住宅の方の方が、影響が強く残っていることが分かります。少しでも生活が立ち直っていった方の方が、やはり心理的な影響も減っているということが、ここで言えるわけです。ですから、先ほど申し上げたような生活の基盤を取り戻す、再建をしていくことはとても大事であるのです。

では、その生活の基盤が回復できないとどういう事態が引き起こされるのか。非常にセンセーショナルな問題になったことについて、次にお話ししたいと思います。阪神・淡路大震災の時に、復興の過程の中で、マスメディアが競って取り上げたエピソードがあります。それは、孤独死の問題です。孤独死というのは、都会では日常的に起こります。一人暮らしの方が誰にもみとられることなく亡くなり、数日間や数週間経ってから発見されるということは、最近でもよく報道されますが、残念ながら、都市部では日常的に起こっていることです。ところが、震災後の孤独死というのは、数自体は震災前から比べて増えたわけではないのですが、数が仮設住宅に凝縮されてしまったという点で、とても社会的な関心を集めてしまったわけです。

ここに挙げてありますように、年間100名程度の孤独死が仮設住宅で発生しましたし、最長の方は、

なんと亡くなってから10か月経ってから発見されたこともありました。ですから、非常に被災者の置かれている悲惨な状況をクローズアップさせる出来事だったわけです。

ただ、皆さんのイメージとして、孤独死をされる方の背景というのは、たとえば70歳代、80歳代になり、持病を悪くしてひっそりと亡くなる高齢者というお考えをされるかもしれませんが、実はそうではなかったということが、様々な調査で分かっております。もちろん、3割、4割ぐらいは、一人暮らしの高齢者という方だったのですが、同じような割合、つまり3割、4割の方は、実は壮年層の男性だったのです。

孤独死をされた壮年層（31歳～ 44歳）の男性には特徴があります。それは、一人暮らしの無職の男性であって、かつ、なんらかの慢性の身体疾患を持病とされていて、かつ、非常に経済的に困窮されていた方が多い。年収が100万円以下の方たちがとても多かったことが分かっています。それと、そういった方たちの多くが、アルコール依存、お酒の問題を抱えておられたことも分かっています。ですから、このように都会の片隅で、細々と一人暮らしをされてきた方たちが、仮設住宅に集められてしまって、何年経ってもなかなか次のステップに行けない中で、お酒に溺れていって、残念ながら、誰にもみとられることなく、亡くなったというようなことが、孤独死の背景として指摘をされたわけです。

このことは、神戸市の長田区で病院を経営されていて、最近亡くなられた額田勲（神戸生命倫理研究会代表、医療法人社団倫生会会長）先生が非常に詳しく本にまとめられています。仮設住宅における孤独死の問題について彼はこのように、いくつか指摘しています。孤独死の可能性がある方に対して、予防的に介入することがなかなか難しい中、一方で孤独死を発生させない仮設住宅は存在している。それは仮設住宅でもコミュニティが、きちんとしているところ、隣同士がきちんと支え合うような取組をしているところだと指摘しました。そして、もし医療関係者や福祉関係者にできることがあるとすれば、どんなことだろうか、彼は非常に苦悩しました。例えば、アルコール依存の方を病院に入院させて、「お酒をやめなさい」と言っても、退院したとたんに飲まれる方が多いので、なかなか救済にならないのです。そうすると、では何が必要なのかというと、ともかく、自分たちの方が地域に出掛けて行って、地域の中を自分たちが歩いて、問題を発見し、援助することをし続けなければならない。そのことこそが、孤独死に陥りそうな社会の底辺に住む方たちをサポートする大切な点であるということを、彼は指摘しました。

行政も、コミュニティの力を強化し、生活の再建をさせていく、進めていくような様々な対策を行いました。ここに挙げてあるように、当時、現在の介護保険がありませんので、介護保険に代わるような形で「ＬＳＡ（高齢者向け住宅等及び生活援助員）」を先取りして導入したり、あるいは高齢世帯を見守るような役割の人を作ったりということもしました。当時は今とは違い、災害後、国が被災者に個人補償はしませんので、それに代わるような経済的支援も行っていたわけです。

それ以外に、神戸の場合は、多くの民間の団体、ＮＰＯ、ＮＧＯの方たちが仮設住宅の中で被災者を孤立させないような取組を長期間してきたことが、当時の大きな支援となったわけです。その中で、時間が掛かりましたが、徐々に徐々に生活を再建していって、回復された方たちもおられたわけです。

初めに、被災後はどうしても被災者の役割をずっと担ってしまって、なかなか自分の元の役割、新たな役割を取り戻せないということが問題だと申し上げました。それをどう取り戻していくかというのは難しいのですが、一つの例がございます。

これは、2008（平成20）年に起きた中国・四川大地震後のあるエピソードです。私も冨永先生も、JICA（独立行政法人国際協力機構）から派遣されまして、四川の被災地に今年度まで行っておりまして、その時に見た一コマです。四川の仮設住宅は凄まじい数が建っておりまして、一つの仮設住宅群だけで7万戸ある規模でした。その片隅に、そこに住んでいる女性たちが集まって、手仕事を学んでいる場所がありました。これは刺繍を学んでいる写真です。この人たちは元々、農家の主婦で、農地が奪われたために仕事がなくなってしまったので、少しでも手間賃を稼げるような役割・能力を見つけるための訓練をしている状況です。

このように自立するための援助をすることも大事な点なのですが、実はこの方たちというのは、子

どもさんを亡くされたお母さんたちなのです。一人っ子政策で、たった一人しかいないお子さんを亡くされたお母さんたちなのです。そこで、そういった方たちに「さぁ、集まって。悲しいでしょ、お話しましょ、共有しましょう」と声を掛けても、なかなか集まってもらえないのです。そうではなくて、自分の役割を取り戻していく、役割を見いだしていく中で、自然発生的に自分の苦しみを共有する場になっていることに対し、とても感心しました。私は、いつもこの役割を取り戻すことについてお話しする時には、この写真をお見せしています。被災者がずっとその被災者の役割を担うのではなく、やはり自立することを援助するということがとても大事だということを強調しておきたいと思います。

これは最後のスライドですが、心のケアとは何をするのか、ということを最後に申し上げます。例えば、何か特別なカウンセリングをするとか、特別な治療をするとか、そういった意味合いは、一部は含まれていますが、それほど濃くはありません。むしろ大事なのは、先ほど申し上げたような、回復力を高めるための支援です。ですから、精神医学や臨床心理学とは余り関係のないような支援をし、生活の場に充実させていくような支援をすることはとても大切な支援になりますし、診察室とか、カウンセリングルームで待っているのではなく、こちらからどんどん出掛けて行って、生活の場に足を踏み入れて、その方の問題を一緒に考えるというスタンスを持つということが心のケアの基本になっていくということがあります。

それともう一つは、被災された方御自身に、御自身の心の問題に気付いていただく働き掛けをすることも大事な視点になっております。それが心理教育と言われることで、多分、次に冨永先生が詳細にお話しになると思いますが、とても重要です。心のケアというのは、メディアが取り上げるような華々しい活動ではなく、とても地味で地道で余り目立たない取組であるということを最後にお話して、私の話を終わりたいと思います。どうも御静聴ありがとうございました。

【横田】

加藤さん、ありがとうございました。精神科医という御専門の立場から、単に理論だけではなくて、被災された方とのふれあいを通じて、実際に効果のある心の取り戻し方というのを分かりやすく説明してくださったと思います。

冨永　良喜（兵庫教育大学大学院学校教育研究科人間発達教育専攻臨床心理学コース教授）

【横田】

続きまして、臨床心理士としても臨床動作士としても御活躍の冨永さんから、お話をお伺いします。よろしくお願いいたします。

【冨永】



冨永良喜さん

私は、阪神・淡路大震災から何を学ぶのか、そして今、東日本大震災被災地の子どもたちへの取組、そして被災地に限らず、日本の教育政策に欠けていること、必要なことについてお話ししたいと思います。

兵庫県教育委員会は、阪神・淡路大震災の次の年（1996（平成8）年）から毎年、個別に心のケアが必要な児童生徒数を継続して調査しているのですが、これは、その数をグラフ化したものです。このグラフを見て分かるように、5年間、その数が変わっていません。要因別に見ると、地震時の恐怖によって個別のケアが必要となった児童生徒はだんだん減っています。ですが、いわゆる家庭環境、経済環境の変化、それから家族・友人関係の変化というものの要因によって、個別のケアが必要となる児童生徒数が増えていったために、結果として変わりませんでした。すなわち、震災で職を失った、二重ローンを抱えた、親のケンカが絶えない、そして、親がアルコール依存になった、そういったようなことの結果によって、子どもにダメージが与えられていったということが考えられます。今回の東日本大震災では、これを全力で止めることが私たちの使命ではないかと考えています。それが子どもたちの人権を守ることではないかと考えています。

阪神・淡路大震災当時の私たちは、心のケアの知識と方法をほとんど知りませんでした。当時、推奨されていた方法は、その後、2001（平成13）年の9.11テロの後には、そのような方法はやってはいけませんと否定されました。どのような方法かというと「できるだけ早く怖い感情を吐き出せば、それがPTSDを予防します」といった考えです。現在は、先ほど加藤先生がお話された、基本的な安心、安全、コミュニティの回復、そういったものが大切であるとモデルが変わっております。そしてその当時、調査公害も人権侵害になったのではないかと思います。四川大地震後も行われました。繰り返しアンケートが取られる。その度に、子どもたちはつらいことを思い出す。そして、なんのフィードバックもされない、研究者の研究者による研究者のための調査が繰り返された。東日本大震災ではこれも、全力を挙げて止めたいとも思いました。

それから、人的システム。当時、スクールカウンセラー活用事業がちょうど始まった年です。それは、前年（1994（平成6）年）のいじめを苦にした生徒の自殺が一つの契機だったようです。たまたま、1995（平成7）年1月に阪神・淡路大震災が起きたわけです。その当時、被災地の教員たちは非常に疲れて大変な状況でした。しかしスクールカウンセラーに相談しませんかと県教育委員会の方が勧めても相談は皆無だったそうです。東日本大震災ではこの状況が変わってきています。

そして私どもは、度重なる災害後に、様々な取組をやってきており、そのノウハウを今回の東日本大震災で伝える努力をしています。これは、お手元の資料にありませんが、兵庫県で構成している「EARTH（アース）」という教員と臨床心理士が構成するチームが、インドネシア・アチェやスリランカで支援した時の様子です。現地のカウンセラーの方で、親を亡くし2人の子どもさんも亡くされた方が、とてもいい試みをされていました。子どもの身近にいる教師やカウンセラーを私どもが後方支援することで、その地域のサポート力を引き出すという活動を行いました。これは、外部から支援に入っていく時の一つのポイントではないか、直接被災者に支援するというよりも、被災された方を支援している方を支援するということも、とても大事だということを学びました。

そしてもう一つ、これは教員の神田英幸先生というEARTHの隊員なのですが、語り継ぐ防災教育をインドネシアでも伝えていきました。先ほど、加藤先生が紹介されましたが、中国・四川大地震では、日中の専門家がこのようにチームを組んで、心を合わせて、被災された方を支援し続けています。

そして、東日本大震災の子どもたちの取組を次に紹介したいと思います。これは、震災から約1年後の2012（平成24）年に、文部科学省が行った33万人の保護者を対象とした、親から見た子どものストレス調査の結果です。福島県が非常にそのストレスが高い状況が分かります。そして、その次が宮城県です。岩手県は茨城県と同程度のスコアになっています。

先日、不登校数が報告されましたが、2012（平成24）年度の不登校数は、宮城県は0.16％増で、全国一位の不登校の率になっています。福島県はもともと不登校数が少なかったのですが、これも0.18％増と、福島県も不登校の児童生徒が増えています。岩手県は横ばいであるというデータです。

私は発生直後から、岩手県教育委員会からスーパーバイザーの依頼を受けて、「いわて子どものこころのサポート」をサポートするということで、今日まで活動してきています。岩手県はこのようにチームを作りました。危機の時には、トップによる決断とチームによるアプローチ、それから適切なプログラムの実行、そして情報公開、その4つが危機の対応の主要なポイントだと言われていますが、それを岩手県教育委員会はシステム化したわけです。そしてまず、その年間プログラムを作りました。これは私どものアドバイスによって、チームが率先して、まず発生直後の5月6月7月、その頃のこころのサポート授業、それから半年後のこころのサポート授業2 、そして1年を迎える頃のこころのサポート授業3といったような、授業案を提案して、これを8年間、継続して実施することになっています。

半年後に行われたこころのサポート授業2では、チェックリストを活用しながら、それだけをすると傷を与えますので、どうすれば元気になれるのか、どのような反応があって、どうすればそれを収めることができるのかということを学んだり、その反応を収めるための、眠りのためのリラクセーションや、絆を深めるようなワークを併せてやって、そしてそれらの個々の子どもたちの結果は、各学校にこういう「心のファイル」を届けて、それを毎年、申し送っていく。この中にはどのような被災状況だったかということも記載されていますので、次の年に先生が交代したとしても、詳しくまた聞き取らなくていい。もちろん、このことは保護者に了解を得た上で、システムを動かしています。ですから、岩手県から転校してくる子どもがいれば、その情報を保護者の了解を得て、次の学校に送るといったようなシステムです。

そしてもう一つ、これは文部科学省の事業として「こころのサポート映像集」というＤＶＤを作成しました。これには、教師とカウンセラーのためのこころのサポート授業の「日常ストレス編と災害ストレス編」と「子ども編」があります。先ほど加藤先生がお話された、災害後には日常ストレスが非常に強くなって、それに対処しなければならないということなのですが、そういった日常ストレスへの対処のこころのサポート授業を収録したものを作成しました。

災害ストレス編では、避難訓練とこころのサポートとか、振り返る表現活動、分かち合い乗り越えるための学級ミーティング等が収録されています。授業の感想として、「嫌なことから回避するのではなく、少しずつでもいいから向き合っていくことが大事だということが分かった」私はたまたま、津波注意報が出た日にこの授業を岩手県でやったのですが、「注意報で311を思い出して怖かったけれども、今日の話を聞いたりして、結構落ち着けた」といったような感想を子どもたちが残してくれています。

どのような授業かといいますと、阪神・淡路大震災で家族を亡くした方のメッセージがこのＤＶＤの中に入っているのですね。植松秋さんと小島汀さんのメッセージです。それを見てもらって、子どもたちに私からメッセージを送る、そしてリラクセーションの方法を提供するといったような内容です。

植松さんの手記は、加藤先生の『心のケア－ 阪神・淡路大震災から東北へ』（講談社）という本の中に実名で書いてくれていますので、ぜひ御覧下さい。彼女は、中学1年生の時に阪神・淡路大震災で中学3年生のお姉さんを亡くしました。そして、10年後に強いPTSD症状が出まして、エクスポージャー

療法というものを受けて、完全に回復し、うちの大学院に来られて、臨床心理士を取得して、今福島県のいわき明星大学のカウンセラーをしています。彼女がなぜ10年後にPTSDになったかというと、お姉さんや震災の話になると、その場をすっと離れて、そのことに一切触れて来なかった、これは強い回避と言います。もう一つは、自分がお姉さんを殺してしまったんだという、思わないでいいメッセージをずっと抱えていた。それがカウンセリングで明らかになって、そのように思わなくていいんだと、それで彼女は回復していったのです。

彼女が寄せてくれているメッセージを聞いてもらって、そして、回復する人とそうやって日常生活が立ち行かなくなる人と何が違うのでしょうか、ということを子どもたちに問い掛けて、それは強い自責感と強い回避なのですと教えています。ですから、津波という言葉を聞くと、とっても嫌な気持ちになるのはとっても自然ですよ、でも津波っていう言葉が人の命を奪うことはありません、少しずつ、安全な刺激にチャレンジする方が、心の健康にとってはプラスになりますよということを子どもたちに伝えています。

それからもう一人、小島汀さんは、3歳の時に震災でお父さんを亡くしていまして、彼女は神戸のレインボーハウス（震災遺児の心のケアの家）で同じ立場の仲間に出会って、様々な思いを初めて語ります。そして、小学3年生でしたでしょうか、現在、東北楽天ゴールデンイーグルスの監督を務める星野仙一さんと出会うのです。星野さんは、彼が生まれる前にお父さんを亡くしているというエピソードをお持ちの方だったようです。それで、「同じ境遇なのになんて堂々として温かいのだろう」と、星野監督との出会いが自分をプラスの方向に動かす力になったと語ってくれています。災害はPTSDだけではなくて、様々なストレス障害を引き起こします。それと同時に、それだけではなくて、トラウマ後成長という災害の苦しみから立ち上がっていくプロセスの中で、人間は成長して地域の復興を力強く押し進めていく、そういった力も人は持っているのだよというメッセージも伝えています。

ここからは、少し理論的なお話をしておきます。当時「被災体験をできるだけ早く語った方がよい」とのデブリーフィングという方法は、今、否定されています。急性期には、まず安全、安心だよと、それから必要な情報を集めるとか、適切に紹介するということが必要ですよ。中期では、それが障害化した時にはトラウマ経験を語るということが大事ですよ、でもその前に、きちんと日常のストレス等に対処する力を学びましょうよ、というのが世界的なモデルです。それで今、そのモデルを参考にしながら、被災地では「つらいことに出会った時にどうしたらいい？」という授業を進めています。

急性期につらいことを無理に語らせるのは心の傷を深めますが、語れないでずっと心の中に封印し続けることも、植松さんのように誤ったメッセージを抱えてしまって、ストレス障害化に移行することがあるわけです。すなわち、自然な文脈の中で、暖かい人間関係の中で、もうこの人にだったら、お話ししてもいいなぁといったような社会を築くこと。そして、それには個人差がそれぞれあるので、個人差を大事にしながら、その語りを尊重すること。それが語り継ぐ防災教育につながっていくよ、というモデルです。ちなみに、アメリカの様々な心のケアのガイドラインには防災教育は入っていません。今回、まだ理論的にも方法論的にも明確になっていないのが、防災教育と心のサポートの一体的な取組です。防災教育は防災教育、心のケアは心のケアと分かれています。ですが、被災直後にいち早く避難訓練した学校がありました。避難訓練の仕方によっては、つらいことを思い出させて、泣きじゃくってしまう子どもがいる。そういったようなことも、現実に先生方は直面していました。ですが、避難訓練の前日にクラス単位で避難経路を散策する、これはGradual　Exposure（グラデュアルエクスポージャー）、徐々に立ち向かうといったような手続きにぴったし合っている取組なのです。また避難訓練の時に、つらいことを思い出してドキドキする、それはとっても自然なことなんだよという情報提供、いち早くきちんと避難ができて、まだドキドキしていたら、落ち着くためのリラックス法をしてみようね、といったことも併せて提案する。そういった防災教育と心のサポートを一体的に進めていく必要があろうと今、考えています。

そして、避難訓練をするというのは、今、被災地の子どもたちはそんなに苦痛ではないのです。もう繰り返しやってきていますから。ですが、津波の映像を見て、防災学習を進めるとか、津波の後に

経験したことを作文に書くといったようなことは、ごく一部の子が、苦痛度に非常に高いスコアを選択しています。それは震災当時、おじいちゃんおばあちゃんを目の前で亡くして自分は助かった、そういったような子どもたちがたくさんいるわけです。そういった子どもたちは、なお苦しみを抱えています。ですが日常は、元気に学校に登校してきているわけです。その苦しみは問題行動であったり保健室に行って身体の不調を訴えるといったことで表れる。ですから震災のストレスによる子どもの苦しみはよく見ないと見て取れない。そして、その苦しみを個別にきちんとサポートして、その子どもの悲しみや苦しみに寄り添い、それを一緒に乗り越えていくという仕組みが、今必要ではないかと考えています。

そして最後に、これは被災地のことだけではないと、今、道徳の教科化が叫ばれていますが、道徳の時間にいじめや災害、暴力についてほとんど学びません。やっと今度改訂される心のノートには、いじめという頁が少し入りますが、今までの心のノートにはいじめという頁すらありません。これは、道徳の時間では読み物教材により、主人公の身になって道徳的な価値を学ぶのですね。直接、怒りを抱えて、人を傷つけそうになった時にどうしたらいいかということは学ばないのです。それはむしろ、保健体育の教科書の心の健康、ストレスへの対応という頁で学ぶことに今の学習指導要領ではなっているのです。

ですがこの保健体育の時間のコマは、小学校6年間でわずか4時間しかありません。中学校3年間で3時間ほどなのです。それが日本の現状なのです。被災地の子どもたちだけではなくて、全国の子どもたちに、怒りを、人を傷つけないで表現する方法を具体的に学ぶ、そういうことが今、求められています。文部科学省でも、去年（2013（平成25）年）の12月に読み物教材に偏った道徳の時間では駄目ですよ、ということを専門家が提言しています。ですから、そういったことが日本の教育の中に入れられるようになると思います。中国では、2003（平成15）年に道徳とは別に心理健康教育という科目が立ち上がっています。

最後に、虐待やＤＶ、親子による暴力トラウマが現在満ち満ちています。そして子どもの人権が侵害されています。災害トラウマを乗り越える知恵とシステムが今、兵庫県や東北地方には培われています。そのシステムを、暴力トラウマを乗り越えるために、子どもの人権侵害をストップするために暴力と決別する教育を、教育の中にきちんと心の健康教育を、そういったものを取り入れていくのが、今課題ではないかと思っています。以上です。

【横田】

冨永さん、ありがとうございました。加藤さんのお話、それから冨永さんのお話に、一つ共通しているところがありました。心のサポートをする場合、重要なことはまず、安心、安全な環境を保障すること、そして、コミュニティや家庭、人との繋がりの場を早く回復すること。こうしたことと、次の小林さんのお話が、多分、重なる部分があるのだろうと期待して、お話を伺おうと思っております。

小林　郁雄（兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科特任教授）

【横田】

小林さんの場合には、まちづくり、ただ単に建物を建てる、道路を作るという物理的なことではなくて、そこに多分、人間の要素を取り入れたことをやろうとしておられるし、またやってこられたと思っております。そのようなことを含めて、今のお二人のお話も踏まえた、小林さんのお話をお伺いしたいと思います。よろしくお願いします。

【小林】


小林郁雄さん

小林でございます。今御紹介いただきましたように、私はまちづくりや都市計画、住宅建設という分野を専門に行っておりまして、先ほどの心のケアや心のサポートとは対極にある分野なのですが、今、御紹介にありましたように、安全・安心な環境、そういった生活の状況が被災者にとって最も重要であるということにおきましては、結論としてはほとんど同じことになるのではないかと思っております。

阪神・淡路大震災からもうじき19年になります。淡路島から神戸辺りに非常に大きな震災があり、かなり多くの火事が西神戸を中心に起こりました。そこでその後、震災復興から防災まちづくりを展開していくことになるわけですが、防災のまちづくりというのは一体何をしていくのか？基本的には地域にいる市民の方々が、その地域の環境を防災に向けてどう改善していくかを考え続け、やり続けるという形を防災まちづくりだと私は思っております。ですので、防災や減災を目指した日常の取組が非常に重要になります。

ただ、都市環境という面からしますと、現在東北地方で始まろうとしております、高台に移転するとか、その場所に住宅を作るとか、あるいは防潮堤など津波や高潮を防ぐための施設を作る、あるいは地盤をかさ上げしてそこに新しい町を作るというようなことが、都市環境を改善するスタートになるかと思います。それは防災の基本としては重要な面でありますが、ではそれだけで、すべての災害、津波や地震に対応できるかというと、それは当然無理なわけです。例えば、20mの防潮堤を作っても30mの津波が来る可能性はありますし、では30mの防波堤を作れば大丈夫かというと、40m級の津波が来る可能性はないとはいえない。自然の脅威というのはそういうものであります。ですから、都市環境インフラの都市構造、都市施設だけで頑張ってみても、結局は安心・安全までには至らない。それは、阪神・淡路大震災の時にも薄々感じていたわけですが、東日本大震災の津波の様子を見て、確信しました。

では、その都市環境整備、道路や鉄道、上下水道といった整備というのは、河川堤防、海岸堤防などよりも当然必要でありますし、現在東北地方でやろうとしているわけです。神戸で言いますと、火災が非常に大きな被害を生みましたので、それに対応するために広い道路を作って、耐震・防火に強い建物を建てることが行われていったのですが、それはそれで当然必要です。が、それで本当に安心・安全な町かというと、そうではないのではないかというのが、私たちの経験からの結論であります。

二つの事例を御紹介します。一つは、神戸市兵庫区の松本通という地区であります。ここは、非常に住宅が密集した町だったのですが、80％近くが燃えてしまって、震災後にはその地区の東の方にだけ少し建物が残っている状況でした。ここに、広い道を作って、あるいは緑の公園を作るという土地区画整理が都市計画事業で行われました。東北地方でも、都市部では同じような事業があちらこちらで進められようとしております。

この松本地区にせせらぎ（水路）を作る計画も立ち上がりました。今、この地区は広い歩道ができて、その半分ぐらいが水路になっているわけです。震災時の火災を教訓に、この水路を作ろうと地元の人

たちの中から声が上がったのです。東北地方とは大分様相が違うのですが、水さえあればこんなに火事は燃え広がらなかった、水さえあったら、というつぶやきから、水路が作られたわけです。

この水路ができたおかげで、確かに小火が起こってもすぐ消せる、あるいは、大きな断水や災害が起こってもその後のトイレ用水などに対応できるようになりました。4億、5億円余分に事業費が掛かっていますが、この水路は防災施設として作ったわけですが、実はこれが、今、この地区の防火に役に立っているのかというと、私はそうは思っていません。この地区は、広い道がたくさんできて、建物もほとんど全部耐火性能の高いものに建て替えられていますから、まず多分、100年以内に大災害が起こっても火事は大きく燃え広がらないと思います。

ではなぜこの水路が防災施設かと言いますと、月に1回、みんな出てきて、掃除をしなければいけない。下水の処理水を使っていますので、水温が少し高く、藻の繁茂が非常に多いのです。放っておくとすぐに緑の沼のようになってしまいますので、夏には月2回ほど、掃除をしなければいけない。この周りに住んでいる人たちは皆、それぞれの家の前のところを掃除するという約束で、この水路を作ったことになっています。多くの方は嫌々やっておられるようです。冬なんか嫌ですよね、夏はいいとしても。日曜日の朝、9時から1時間ほどやられます。ですが、これは防災にとって非常に大事なことです。都市の真ん中ですから、隣に住んでいる人をよく知らない人が多く、例えば隣のおばあちゃんが今、どうなっているのかなんて余り興味もなく、同じ町内会でありながら、余り関係ないわけです。しかし、この水路のようなややこしいものをみんなで掃除しなければいけないという状況を作ってしまったおかげで、やらざるを得ない。そうしますと、月に1回は嫌々でも顔を合わせるということになるわけです。これが非常に重要なことで、これが最も重要な安心・安全のための防災施設だと私は考えております。

それからもう一つ、神戸市の長田区の一番西側のところの話です。長田区は火災がたくさん起こったところで有名です。その一番西端に野田北部という地区があります。ここも非常に老朽木造建物が密集していた町で、先ほどの松本地区と同じような感じです。路地があって戦前長屋が並んでいた町でしたが、大震災でほとんど、火事で燃えてしまいました。7割程度が全焼、全壊です。ここもやはり、都市計画で復興事業が行われて、路地も広くなっているわけですが、地震の2年前、1993（平成5）年にまちづくり協議会という地域の人たちが町をどのようにしていこうかと考える組織ができまして、地区のまちづくりに取り組み始めたところで地震が起こり、火災が起こって町が壊滅しました。しかしこの地区は、震災後今こそみんなでまちづくりを進めなければいけないのではないかと、非常に早くから復興のまちづくりに取り組み、神戸市でも最も早く復興が進んだ地区と言われております。1995（平成7）年の地震から7年後、2002（平成14）年には既にほとんどの復興状況が整って、建物などは全てできました。では、それからどうするのだということで、2002年に、みんなで安心して暮らせるような環境を日々、考えていくような集まりを持とうではないかということで、「野田北ふるさとネット」という集まりをはじめました。

これには、この地区の様々な組織が参加しています。住民だけではなく、例えば、仕事でいる人、あるいは、関心だけ持っている人、あるいは周辺のＮＰＯの方々とか、いろいろな組織、関係者がいます。そのような人たちが緩やかにつながり、みんなで町のことを月に１回集まって情報交換する集まりです。多分、この部分の話は次の仙台の方のお話につながってくるかと思いますが、そういったことをやっていることが、非常に重要な防災への取組だと私は思っています。しかし、これがまた大事なところなのですが、そういったふるさとネットのメンバーの方々、自治会の方、婦人会の方、あるいは防犯協会の方、ＰＴＡの方、まちづくり協議会の方どなたも、そんなことは思っていないわけです。防災のため、減災のために集まっているとは、誰も思っていない。日々の暮らしから、日々の生活環境を安心してみんなで共有していくためには、そういったことを緩やかに月に１回集まって相談しようという、それが非常に大事なことで、それを続けていくことがまたもう一つ大切です。

松本地区のせせらぎ（水路）の掃除も同じく、長期的にやり続ける装置を作る、それこそが、都市環境の防災や減災のための仕組みとして一番重要なことではないかと思います。防潮堤を作っても、あるいは高台に移転しても、そこでどのような生活が、どのように継続して進められていくかという、

そういったようなことをみんなで考えてやっていくということが最も重要な防災環境改善運動だと思います。野田北部地区の例で申しましたように、なるべく防災・減災を意識せずに行う仕組みが非常に重要です。それが冨永さんの言っておられたような、語り継ぎの重要さにかなり合致すると思います。

これらのことを、震災が起こる前からやっていたところは、非常に回復は早いし、その後もうまく続いていると思います。ただそれは、地震や津波に対抗できるかと言うと、全くできません。なんの役にも立たないというふうになりますが、それはそれで、対抗するような設備と併せて、そういったソフトな仕組みをみんなで作っていくということの方が、基本です。それを日常的な活動の中で継続して進めていくということが、もっともっと強い安全・安心の町の防災になると私は考えております。

以上で、私の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

【横田】

まちづくりは、当然道路が整備される、建物が新しく建てられるということなのですが、小林さんのお話では、多分そういうことが地域の人々の協力のないまま進んだのでは、それは防災のための準備にならない。むしろ、そこに住む人たちとうまく連動して、日常生活の中で、共同生活が日頃から培われるような、そういう状況ができることが非常に大事だということを強調されたように思っております。それは、これからの防災のための様々な施策にとって参考になると思いました。

菅野　澄枝（岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会代表）
緑上　浩子（岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会メンバー）

【横田】

3人の先生方からのお話の後、次は仙台市の岩切地区で、一般市民、主婦、女性の立場から、地道に地域のために活動してこられているお二人の方に、お話をお伺いします。菅野さんと緑上さん、よろしくお願いいたします。

【菅野】


菅野澄枝さん

皆さん、こんにちは。まず始めに、東日本大震災からもうすぐ3年経ちます。その間、皆さんがこのように心を寄せて下さって、私たちの話を聞きにおいでくださったこと、それから、変わらぬ御支援を続けてくださっていることに心から感謝を申し上げます。本当に東日本を助けてくださってありがとうございます。

今、先生方からいろいろなことを教えていただきました。小林先生がおっしゃってくださったことが全てで、私たちの原稿を見てくださったのではないかと思いました。ですがそれで終わるのでは身も蓋もないので、少しお話させていただきたいと思います。

私たちは、宮城県仙台市の岩切地区、すごく小さい、人口17,636人の町からやって参りました。菅野と緑上と申します。よろしくお願いいたします。

今、スクリーンに映しているのは、町を二分する七北田川という川になります。写真で見ると美しい川ですが、2011（平成23）年3月11日、東日本大震災の際には、私たちにとって脅威でした。岩切は宮城野区の蒲生や若林区の荒浜の海沿いから約10キロ離れています。ですがすぐ近くまで自転車が流れてきていました。津波の影響がすぐそばにも来たということです。

3月11日の地震を本震と呼びます。本震でやっと持ちこたえてくれた、もう駄目だろうなと思いながら、持ちこたえてくれた家や建物、堤防が、余震と呼んでいる4月7日の地震では、崩れ落ちました。

仙台市では毎年、宮城県沖地震（1978（昭和53）年）が起きた6月12日に総合防災訓練を行います。2010（平成22）年の4月、宮城野区総合防災訓練を前に、当時の宮城野区長である木須八重子さんから一本の電話がありました。岩切で行う防災訓練で、女性の目線を活かした防災宣言を出してみない、という電話でした。今日ここにお邪魔した肩書きでは「岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会」となっています。この会の参加資格に、肩書きなんて必要ありません。誰でもいいので集まってと言ったら、岩切が好きで、そこで一生懸命生きてきて、災害があった時にお互いを守り合いたいと思っていてくれている方々が集まりました。子育てサークルのメンバーや婦人防火クラブ、ＰＴＡ、社会学級生、本当にいろいろな立場を超えた女の人たちが集まりました。

数回のワークショップをファシリテートしてくれたのが、ＮＰＯ法人イコールネットさんで、男女共同参画に取り組んでいる団体です。そちらの宗片恵美子代表理事と木須区長がずっとワークショップを主催してくださりました。これには、奥山恵美子仙台市長も応援してくださり、災害時に限らず、地域を支えるネットワーク作りというものに、当時から、そして今もエールを送ってくださっています。

このように男女共同参画を進めることが、実は社会的弱者を支えることにつながるんだなぁ、とその時やっと気付き始めた頃に、私たちの生の言葉でつながれた「岩切・女性たちの防災宣言」ができ上がりました。

その宣言を読み上げたいと思います。今日の資料の中にも入っているかと思いますので、どうぞ御覧になりながら、聞いてください。

【緑上】


緑上浩子さん

岩切・女性たちの防災宣言。あなたの大切な人は誰ですか？今何かをすることで大切な人の命を守れるなら、すぐにそれを始めませんか？

もし大災害が起こったら、小さな子供を抱えてどうしよう？避難所はどこ？何を持っていくの？夫と連絡がとれなかったら？

考えることが怖くて止めてしまっている、そんなあなたの不安を話してください。私たちはあなたの心配を一緒に考えます。考えることで、きっと怖さが減るでしょう。

隣に住んでいる人は誰ですか？

あなたが関心を持つだけで、何かが変わるはず。ほんの少し勇気を出して声をかけてみたら、おすそわけの曲がりネギと一緒に情報が入ってくるかもしれません。

一戸一戸の家庭で防災の話をしてみませんか？

いざという時、どうやっておじいちゃんを助ける？中学生の息子だって、みんなを守る側にたつことができる。いろんなことを家族で話します。大好きなみんなを守りたいから。

ちょっと自分たちの備えを心掛けることができたら周りの人のことを考えてみます。誰かにあてにしてもらえることで、がんばれるような気がします。でも、がんばりすぎないで。

互いに認め合うことでつながっていきたいから、感謝の気持ちをたくさん伝えます。ありがとう、ありがとう、ありがとうの貯金をします。

岩切にはいろんな人が暮らしています。親子四代共に暮らす人、新しくこの地域に住み始めた人、宮城県沖地震を体験している人、いない人。

私たちは、この岩切にある安心を伝えます。地域防災マップがあることや、自宅の井戸や機材を「いつでもいいよ」と言って貸してくれる人がいることを。

私たちは、防災について考え続けるために語り継ぎます。昭和53年の宮城県沖地震で、からくも命拾いしたことや復興までの苦労を。

私たちは、ここ岩切でみんなが安心して暮らすために、自分たちでできることを考え行動します。大切な人の命を守るために。この地域で育つ子供たちのために。平成22年6月12日。（以上原文ママ）

この宣言が大勢の地域住民、行政関係者、学校職員、マスコミ、そして何より守りたいと願った子どもたちや家族に届けられた9か月後、東日本大震災は起きました。

写真を御覧ください。これは我が家です。上の段と下の段で同じ写真を使っているのではないのかと思う方もいらっしゃるかもしれませんが、上は3月11日の本震、下の段が4月7日の余震の時のものです。個人的な話ですが、私の主人は当時、単身赴任で埼玉県へ行っておりました。私は高校3年生の息子と、中学2年生の息子と3人で暮らしておりました。3月11日の震災後、主人は帰ってくることができず、主人が戻ってこられたのが4月7日の余震後でした。1か月間、息子二人と頑張って、頑張って、部屋をきれいに片付けたのです。高校生の息子は、大学進学のために県外に出ることになっていました。一生懸命、一生懸命片付けて、無事、大学に送り届けて、ほっとしたのもつかの間、ガラガラとうちの中がまた崩れました。余震後、中学生の息子がぽつんと言いました。「心が折れるよね」本当につらい経験でした。

【菅野】

そうですね。一生懸命片付けた人こそ、余震の時にがっかりしたのです。私のうちは、本震後ほぼそのままだったので、ダメージは少なかったです。

ですが、瓦と屋根はどっさりと落っこってしまったので、見た目は悪いのです。基礎は大丈夫でしたので住んでいたのですが、まず見た目が悪くて。道路際に建ててあるので、前を通る人たちが、う

ちに電気がついているのを見て「あらー、なんだべ、このうちさ、住んでるっちゃ」と言うのです。道路歩きながら、心配してくれているのです。「あら、菅野さんち大丈夫なの」と言ってくれるのです。ところが、うちは道路際にトイレが設置されているのです。あ、ごめんなさいね、こんなところで、そんな話。子どもたちがトイレ入っていると、そういうつぶやきが聞こえてくるようです。じいちゃんばあちゃんとかが「このうちに住んでるの？」と言ったのを、子どもたちが聞こえたというのです。ですが、悲しいとかくそーとかと思っているわけではなくて、そこで今、水流したら、じいちゃんばあちゃんが気にするから、じいちゃんばあちゃんの足音が聞こえなくなるまでじっと座って我慢しているのです。壊れてしまったもの、無くなってしまったものを、ずっとずっと無くなってしまったと思っているより、子どもたちのようにそうやって自分に思いを寄せてくれる人のことをいたわったり、素直に気持ちとして受け止められるということって、すごく嬉しいなと思ったエピソードでした。

本震後、防災宣言を作ったメンバーは、自然に避難所に行きました。途中の橋が隆起したこともあったのですが、当時、私はＰＴＡ会長でしたし、緑上さんは副会長だったこともありまして、避難所に行ったのですが、他のメンバーは私たちが指示したわけでもなく、メンバーはそれぞれ、小学校や中学校、コミュニティーセンター、公民館などに行きました。避難所では、なんかちょっと炊き出ししてるとか、なんか物資の仕分けしてるよー、とか、よく分からないけど搬送しているんだな、なんて噂を聞いたりしましたが、それを誰かがリーダーとして行ってくださいと言ったわけではなかったのです。

いつも見る、地域のお母さんたちだから、信頼してくれる部分、それをその場で感じられるから、また次の日もその次の日も、足を運ぼうという気になってくれたのではないかなと思います。

先ほどから先生方が言われているとおり、私たちは全く防災に特化して生活していたメンバーではありません。プログラムの中には、私たちの肩書きがいくつか書かれていると思いますが、その関わりの中のごく一つとしての防災だったのです。この場に呼んでいただいたのに、申し訳ないくらいのことなのです。

子どもも高齢者も大人も、障害者も、男性、女性関係なく、私たちが大切だと思う人を守るために動き出す、という気持ちがあっただけなのです。気持ちから動いたことなので、それだけに、実際避難所に携わった際に起きたトラブルは、心がかなり痛かったです。人間関係の亀裂がなかったとは言いません。若い女の人が意見を出したら、怒鳴られちゃったとか、そういうこともありました。これは当時としては当然のことかもしれません。誰もが疲れ切っている中、避難所を運営していかなければいけない時に、ぐずぐずと言われたら誰だってそうなります。でも、それがやはりつらかった。子どもやペットがうるさいと言われた。お世話をしていた人が、さっき先生方が言ってくれたように、人の心のケアもサポートしてくれる、それはすごく有り難いなと思いました。

避難している人の要望がエスカレートしている。自分では判断できないことがどんどん増えてくる。岩切というふるさとを愛して、そのふるさとを守る為に集まってきた人たちが、岩切を嫌いにならないで欲しい。ただただそう思って、同じことを何回も繰り返さないために、これから私たちに何ができるのだろう。これから何かやらなければいけない。そう思いながら、今まで生活してきました。

【緑上】

私たちは震災の半年後、仙台市が展開している学校支援地域本部での活動から、子どもたちへの働き掛けを始めました。一緒に歩いていく復興への道として、ボランティア活動の参加、避難訓練、地域行事への参加、そしてNPO法人イコールネットさんの呼び掛けに賛同して、女性防災地域リーダーの育成に参加しました。その中の地域開催講座として、防災講座を開催することができました。「いわきり・わたしたちの防災講座」と銘打って、2回の連続講座を実施しました。第1回目は、「防災に役立つコミュニケーション・スキルを磨こう」と題しまして、NPO法人イコールネットさんから講師をお迎えしました。震災時、コミュニケーション不足によるトラブルは、実際にたくさんありました。ですので、緊急時に上手に自分の思いを伝える方法を学ぶことにしました。また、そのためには普段から心掛けておくべきことがたくさんあるということも一緒に学ばせていただきました。2回目の講座で

は、「みんなで避難所を作ろう」と題しまして、ワークショップを行いました。会場となった市民センターの体育館を避難所に見立て、グループごとに分かれてレイアウトを考えました。グループごとに様々な特徴が出まして、人それぞれで考え方が違うということがはっきり分かりました。

この写真は、仮設トイレを組み立てているところです。仮設トイレの組み立てというのは体験してみて初めて分かったのですが、初見ではなかなか上手に組み立てられないということを実感しました。1回でも組み立てたことがあると、実践の場でどれだけ役に立つのかということも実感させていただきました。震災時の後悔を無駄にせず、万が一の災害が起きた時に、知識と判断力を持って活動できる人間でありたい。私たちならではの目線と地域への思いが込められると思います。子どもたちにはどんな時も、地域の大人は君たちを守るから安心して大きくなりなさい、というメッセージを、普段のＰＴＡ活動や健全育成、防犯の取組からも届けていきます。自己肯定感を持ち、他も認めていける心を育てることで、地域全体がつながっていきます。

【菅野】

2013（平成25）年、私たちは仙台市地域防災リーダーとして動き始めました。地域での活動を根底に、各町内会連合会から推薦を受けたメンバーが2日間の講習を受けている資格です。町内会が私たちを応援してくれている形となっています。現在、町内会ごとの防災マニュアルの作成、そういうことにも携わらせていただいています。

こちら、みやぎ生協エリアリーダー研修会と書いてあります。これは企業さんやＮＰＯさんなどが、私たちに、学びの場や思いを伝える場を提供してくれています。私たちはどんどん利用させていただいております。行政さんも活動を支えてくれています。消防局さんはよく連絡をくださって、どんどんどんどん、活動していって下さいねと言っていただきます。やはり励まされれば大人でも嬉しいもので、私たちは褒められて育つタイプです。それにＮＰＯさんや教育機関の皆さんが、知識や、例えば阪神・淡路大震災の経験を私たちに伝えてくれていること、それに加えて私たちに寄り添ってくれていること、それをやはり地域住民として、そこにずっと住んでいく住民として受け止めていくこと。それを自分の学びとして深めて、次世代に伝えていくこと。そういうことを防災活動だとか、肩肘張らなくても日頃の生活の中から、伝えていけたらいいなと思います。特別なことでは決してない、ただただ君たちのことを大事だよという、そういうメッセージをずっとずっと伝え続けていけたらいいなと思っています。

いろいろな機会を通して、こうやって大人が、大人になっていきます。私たちの防災、私たちのまちづくり、震災前の防災宣言と、東日本大震災の経験で私たちが明確にした思い、そういうことを踏まえて、今もし宣言を出すとしたら、どんな宣言になるのだろう。是非、そういうことに取り組んでみたいと思います。私たちの中に一つ、課題が生まれています。

今日は、奈良市教育委員会の皆さん、それから、学校支援に携わる松瀬さんに来てくださっています。奈良の皆さんは、被災地交流ということで、岩切中学校においでいただいた方です。皆さん方は、被災地を支えてあげようという気持ちで来てくださったと思いますが、私たちは、それ以上の思いがあります。震災から1年くらいの時に、うちの学校に来てくれるという関西の学校さんがいらっしゃったのです。ですが、放射能の心配で、子どもさんたちが来られなくなった。その学校の校長先生はすごく涙を流して、ごめんと言ってくださりました。中止になった理由は分かります。保護者としてはその校長先生の思いにも応えたいと思います。1年2年経ってから、奈良市の皆さんが子どもさんを大勢連れて、来てくれました。大人も先生方もいろいろと経験し、学びました。受け入れること、それから子どもたちに何か伝えていくことができたということで、少し安心した部分もありまして、本当に嬉しく思いました。今日もそのような関連でおいでいただいたということで、本当に有り難く思っています。それから、ここの会場にお集まりいただいた皆様、先ほども申し上げましたように、本当に感謝しております。またどこかで私たち岩切の町の様子をお話できることを心から願って、そして、皆様の健やかな毎日をお祈りして、お話を終わらせたいと思います。御静聴、ありがとうございました。

【横田】

菅野さん、緑上さん、どうもありがとうございました。お話を伺ってびっくりしたのですが、この防災宣言は、東日本大震災の9か月ほど前に、その前の宮城県沖地震を踏まえて、皆さんが自然に集まって作ったのですね。そして、そこから少しずつ活動が開始されたところで、あの地震があった。そしてそれがまた、地震を踏まえて、みんなで活動するようになった。その過程では、いろいろと御苦労があったけれども、やはりみんな力を合わせて動くという、そういうコミュニティができていましたので、次々と新しい試みを行い、今ではいろいろ訓練に参加したり、他の地域の人たちとも協力してやっているということですが、それは先ほどの3人の先生が説明されたことの実践版を伺っているような気がして、本当にいいお話だったと思います。どうもありがとうございました。

＊このシンポジウムの「基調報告」の模様は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。
https://www.youtube.com/jinkenchannel

第 1-2 部　パネルディスカッション

【横田】

会場の皆様から大変多くの御質問をいただきました。これからそれらを御紹介しながら、パネリストの方にコメントをいただこうと思います。まずは､加藤さんへの御質問を御紹介させていただきます。「災害の前から、回復力を高める具体的な方法や取組があれば御教示ください」という御質問です。そして、その場合に災害時のショックに対しての回復力を高めるということを特に念頭に置いています、という御質問ですが、加藤さんお願いします。

【加藤】

いろいろな取組が考えられると思いますが、一つは、災害の影響を受けない準備をしておくことが、とても大事だと思います。あとはやはり、そういった状況に陥った時に、どのような心の問題が出る可能性があるのかということをきちんと知っておくことが大事だと思います。冨永先生が御紹介されましたが、今、神戸の学校等では、必ず命を大切にする教育を実施しております。

私も中学生の子どもがいるのですが、彼らが小学生の頃というのは、必ず年に数回は、命について考える時間があり、その中でも災害のことを学ぶことがあったのですが、例え自分が影響を受けないにしても、周りの人が影響を受けた場合に、どのようなことを考えなければいけないかということも含めて学ぶということは、とても意味があると思います。そういう準備性を高めておくことは、とても回復に向けては重要ではないかと思います。もちろん、それはもう少し小さなコミュニティでも必要なことで、家族の中で災害について話をし、それこそ備蓄などについても話をしておくことも大切なことだと思います。

【横田】

加藤さんに御質問が追加で来ていますので、もう一つ続けてよろしいですか。「安全・安心な環境、生活を確立するというためには、社会は具体的にどのような対応が必要か、また、受け入れる一般の人はどのように対応したら良いのか」という加藤さんへの御質問です。

【加藤】

非常に難しい御質問で、答えに窮します。これは多分、インフラの復旧だけを考えるのではなくて、やはりその被災した後の生活の再建というのが、まず被災された方の安全・安心を高めるのだと、考えることだと思います。例えば、いくら高い防潮堤を作っても、そんなものは何十年、何百年に一度の備えにしかならないわけであって、今の生活を取り戻していくことの方がよほど大事なわけです。生活を取り戻していくということが、安全・安心につながるという認識を持つことが、現状を踏まえると、必要なことではないかと思います。

【横田】

もう一つ追加で、加藤さんに質問が来ました。摂食障害のある方だということなのですが、「食べることに関して、理性のコントロールがつきません。震災時には救援物資の食べ物が町中にあふれていて、食べる物がどこでも手に入るという状況で、自分としては人格が崩壊するような危機感を覚えます。実際には何も食べていないのに、自分は途方もなく過食していると思い込んで、水も飲まなくなるような、飲まなくなって衰弱するというような状況もあり、実際、入院もしました。このような人の訴えというのは、こういう緊急時、災害時に、どう受け止めてもらえるのだろうか」という質問です。多少、専門的かもしれませんが、よろしくお願いします。

【加藤】

非常に切実な話だと思います。やはり障害や病気を抱えられた方の声というのは、なかなか非常時には伝わりにくいです。そういった方たちが声を出せない状況になってしまう。こんな大災害なんだから、あなたの個人的なことなんか蓋をしておきなさい、といったことを言われてしまうので、とても苦しい境遇がますます苦しくなっていくという状況になります。ですので、障害を持たれている方の意見もきちんと聞くことが大切です。特に、避難所の環境では、障害を持たれている方は非常に遠慮されます。高齢者もそうですが、自分が迷惑にならないような振る舞い方をされてしまうので、とてもしんどい思いをされることが多いのです。ですので、それを少しでも支援する側が知っておいて、そういった声に耳を傾けるということも必要でしょう。

また、被災後というのは、糖尿病など食事を管理しなければいけない病気を抱えられた方は、とてもそれが難しくなります。どんどん支援物資が提供されて、カロリー制限ができない状況の中で、糖尿病などを非常に悪くされた方たちも多いのです。そういうことも認識をしなければいけない。別の例では、阪神・淡路大震災の時には、支援物資の中にアルコールが入っていたのです。これで少し心を癒やして下さい、ということで、支援物資のセットの中に日本酒が入っていたりしたのです。これは、一見とても心が安らぐように思われるかもしれません。しかし、これによってアルコール依存の傾向を持っておられる方たちは、ますます問題をひどくしましたし、避難所の中で、お酒が元でトラブルになってしまった事案が起こったりしたのです。ですから、そういうよかれと思ってすることが、いろいろな弱さを持った方にとっては、あだになってしまうということも、知っておく必要があるのではないかなと、今、御質問から少し思い出しました。

【横田】

ありがとうございました。次に、冨永さんへの御質問が2、3ございます。一つは、1年ほど前に、岩手県にボランティア活動に参加した方からの御質問です。そこで印象に残ったことは、「被災地の子どもたちは、自分の家族がどのくらい被害に遭ったのか、遭わなかったのか、同じ被災した場合でも、仮設に入った人と入らない人、そういう異なった状況に対して、非常に敏感に反応する。そんな中、子どもたちを安心させるためにはどのように取り組んでいったらいいのだろうか。私は元の生活を取り戻すこと、そして社会で自分が必要とされていることを自覚することが必要だと思いました」という御質問です。

【冨永】

必要とされる存在ということでは、岩手県のある地域なのですが、「虎舞（とらまい）」という代々伝わる踊りがありまして、子どもたちが一生懸命踊るのです。そこでは、地域の方たちがそれを見て、勇気付けられると言います。子どもたちはその声を聞いて元気が出るといいます。そういった仕組みが展開されています。それから被災についてですが、今回の津波は、津波が来た地域、来ていない地域ではまるで世界が違うのです。ですので、それぞれの子どもたちに、それぞれの思いがあり、それを語ってはいけないという雰囲気がどうしても出てしまう。それを乗り越えるためには、まず信頼できる人にその思いを語ることができる場が必要です。それを岩手県では、教育相談週間や、心と体の健康観察でこころのサポート授業をやった後、チェックリストを踏まえながらも担任の先生が一人一人の子どもと、全員に面談する時間を作っています。

それと同時に、その地域を支えるスクールカウンセラーが巡回して、必要とする子どもの声を聞くという仕組みができています。もう一つ、できていないのは、クラス単位でそういうことを落ち着いて語り合って、お互いを認め合って励まし合うような場がなかなかできないのです。理由は私がお話ししたように、日本の教育課程の中で、そのような時間が非常に限られている。学級活動の時間でしか、その時間がない。道徳の時間はそういうことには使ってはいけないというのが、道徳学者の弁です。ですが、子どもにとって必要な体験ですので、道徳の時間でもそういうことが行われるようにするの

が今からの課題だと思います。ですから、日本は道徳の教科化に向けて、今、メディアを通じてメッセージが流れていますが、マスコミの方も教育現場に行って何が課題なのか、それを見極めて記事を書いて欲しい。そして日本を変えていって欲しいと思います。

【横田】

次の質問は、既に冨永さんにある程度、お答えいただいていると思いますが、もし更に付け加えることがあればお願いします。「阪神・淡路大震災の時と、それから東日本大震災とで、子どもたちの心のケアに取り組んでこられた御経験から、そこに大きな違いがあるように思われますが、これからの学校での防災教育の新たな課題はあるでしょうか」という御質問です。もう既に触れられていますが、改めてこの御質問にお答えいただけたら幸いです。

【冨永】

先ほどのお話の中でも申し上げましたが、防災教育の中に、心のサポートの考えや実践を統合して子どもたちに伝えて欲しいというのが、私たちの考えです。2011（平成23）年4月末の読売新聞でしたでしょうか、小学5年生の教科書の中に防災教育の物語があるのですが、被災地の先生方はそのことを授業でなかなか取り上げにくい。いわゆる津波を扱っている「稲むらの火」の物語です。河田惠昭（関西大学社会安全学部教授・社会安全研究センター長）先生が書かれたものです。それを取り上げると、子どもたちにつらいことを思い出させてしまって、悲しくなる。この教材をどうやって取り上げていったらいいだろうと、被災地の先生方は苦悩したのです。そういうことについての指針は、やはり文部科学省が取りまとめていく必要があると思います。避け続けることは、傷を深めます。ですが、急性期にいきなりそのことを取り上げることは、一部の子どもたちにとってはつらすぎるかもしれない。

ただし、心のサポートを取り入れた避難訓練は、急性期にも積極的にやっていく必要があるだろうと思います。そして、ある程度、中期になっていくにつれて、地域防災学習や津波についての学習を進めていく。その時も心のサポートの観点をきちんと取り入れて、支援の必要な子どもを事前に個別にアクセスして、心のケアの仕組みについて情報提供をする。

震災後、1年半後にある小学校でこういうことがありました。内陸にある小学校で、被災地から10人以上の子どもが転居してきていました。親を亡くした子どももいました。震災後1年半経ったからと被災地で震災を経験した人を呼んで防災講演会を企画しました。「こんなふうに津波が、こんなところまで来たのだよ」と講師の先生が話し始めたとたんに、沿岸部から来ていた子どもたちが、ぞろぞろと体育館を出て行ったのです。そして、保健室に行って、ある子どもは号泣したそうです。子どもたちは、そのように心の傷を抱えているので、事前にそのことをきちんと把握してアクセスして、「つらいことを思い出してドキドキしたり苦しくなったりすることがあるよ。でも、津波という言葉や津波の映像は人の命を奪いません。何回かチャレンジしていくうちにドキドキは小さくなります。でも、余りに苦しいことから始めないで、少し苦しいことを選んでチャレンジしましょう。子どもの心のペースを守りながら対応していくという、防災教育と心のサポートを一体的に進めて欲しいのです。これは被災地の中でも、そういうプログラムを防災教育の中に織り込んで展開して欲しいということです。

【横田】

今のお話の中に、既にこの次の御質問のことが関係しております。「先生のお話では、つらい経験というものを否認したり、それから過去の苦い経験を話させないということは、良い場合もあるし、良くない場合もあって、ケースバイケースだと思われます。しかし、話させないことによって良かったケースと、話させたことによって良かったケースについて、もし事例があったら教えていただきたいです」という御質問です。

【冨永】

急性期は、非常に興奮するわけです。過覚醒というのですが、話し出したら止まらないということがある。そして、話し過ぎた後で、あんなに話すんじゃなかった、話さない方がよかったと思ってしまうことがあります。これは、身近な人のサポートだけではなくて、取材においても同じです。一見、気丈に取材を受けた人が、その後ものすごくしんどくなるという事例があるのです。大切なことは、やはり急性期に安全･安心な環境を与えることなのです。そして、感情のコントロールができるように、自分自身がそういう方法を身に付けていく。周りの人がそのことを理解する。そして、中長期に少しずつ震災以降体験したこと、最近頑張っていることを含めて、話す機会、表現する機会を折々に持って行く。そういった仕組みを作っていくことが必要ではないかと思っています。

【横田】

ありがとうございました。では次に、小林さんに御質問がございます。「まちづくりはとても良い取組だと思います。そこに学校は入ってくるのでしょうか。もう少しその点について詳しくお話を伺いたいです」ということです。

【小林】

学校は大変重要です。災害で一番被害を受けるのは弱者と言われておりまして、東日本大震災も阪神･淡路大震災もそうですが、やはり高齢者が大きな被害を受けておられます。また、所得の低い方々や子どもも非常に災害に対して弱い存在で、それは常識です。阪神・淡路大震災では、ほとんどの学校は鉄筋コンクリートで、それほど大きな被害を受けていませんし、受けても直撃的な倒壊まで至っていない学校が大半でした。これらの学校は火災にも強いということで、ほとんど全ての小・中学校が避難所になり、逆にそれがために、学校の先生たちが思いも寄らないいろいろなケアや避難所の運営をしなければいけなくなってしまった例があります。

東日本大震災についても、（宮城県石巻市立）大川小学校などいくつか例外もありますが、やはり新しくできた学校は高台にありますし、様々な面で学校が防災の拠点になりました。日本の場合はそういった学校がコミュニティにおいて非常に大きな避難拠点・防災拠点になっている状況は、今までの経験の蓄積の結果だと思います。これは関東大震災の時から、回復・復興の拠点として学校をなるべく防災・防火に強くし、あるいは隣に公園を設置して一緒に災害時に使えるようにすることが行われてきた結果だと思います。

中国の四川や台湾などでの地震の時がそうでしたが、学校がまず一番弱い。そこで子どもたちがたくさん亡くなられている、一番被害を受けるというのが、その世帯や町にとっても、最も悲惨な状況だと思います。ですので、学校をとにかく強くしようということは、日本の防災の歴史の中では、延々とやってきたことの結果ですので、当然、御質問にありますように、町の中で学校をどのように考えるかというのは、非常に大きなテーマです。幸いにも今それを声高く叫ばなくても、今まできちんとやってきたので、余り言う必要がないかと思います。しかし、今までの経験の蓄積があるということは、忘れずにやっていくべきだと考えております。

【横田】

ありがとうございました。おっしゃるとおり、日本では、防災の観点はまず最優先で学校作りが考えられて、建物をしっかり作るという伝統がありますし、行政側も必ずその点を強調した学校作りを行っております。ですから、今の点については、日本の場合は他の国と比べて、よく取り組んでいるという感じはしますが、東日本大震災の場合には、小学校が津波に流されたケースがありましたので、学校までもがやられてしまう事態というのも想定することが今後必要だと思いました。その点については何かございますか。

【小林】

今、学校が駄目になるのであれば、町の全てが駄目になると思います。ですから、そこまでの事態は今のところ想定する必要はないと思います。ただ逆に、防災のためにしっかりとコンクリートで学校を建ててしまうと、地域の懐かしい木造の校舎がどんどん無くなってしまっています。普段から、少し親しみ深い伝統的な木造空間がどんどん町からなくなり、特に子どもたちが育つところにもそういった伝統的なものが無くなっている。これは、ここ数十年間の建築側の考え方だったのですが、阪神･淡路大震災や東日本大震災の事例を見ますと、そういう軟弱なことは言っても始まらないのですが、やはりそういうことも当然、日常的な空間として重要だと考えています。

【横田】

ありがとうございました。次も小林さんへの御質問です。まちづくりについて、「町ができて何年かすると、住んでいる人が変わり、コミュニティが変化することがあると思います。20年、30年経っても持続できる、そういう防災・災害に強いまちづくりについて、どのような考え方があるかお教えいただけますか」という御質問です。

【小林】

正にそこが防災の最大の問題だと思っています。神戸でも、特に東神戸の辺りは大阪に近いので、随分と転勤族がいまして、阪神・淡路大震災から約19年前のような人口に戻っているわけですが、住民は半分以上入れ替わっています。ですから、震災を全く誰も知らない、親も知らない、子どもも知らないという人が半分以上いるわけですから、被災体験を知っている人の方が少ない。

西神戸はまだ下町が多いので、まだまだ地域住民を把握されている方がたくさんおられます。基本としては、忘れ去られるという前提で物事を考えた方がいいと思っております。関東大震災から約90年経ちますが、ほとんど震災後10年ほどの間に言われていた防災に対する心構えなんて、今は誰も覚えていないです。一番簡単なのは、火鉢を頭の近くに置いて寝ろ、上から梁が落ちて来ても頭だけは助かる。そのようなことを皆、常識としてやっていました。ですが、今は火鉢を持っている人もほとんどいない。阪神・淡路大震災の時も、19年間多くの教訓がインターネットや書籍などで発信されましたが、多分あと20年もしないうちに皆、忘れてしまうのではないかと思います。東日本大震災の教訓も、多分100年後には覚えてない。1896（明治29）年明治三陸津波の多くの石碑なども、ほとんど忘れられていました。

この状況を打開するために、ずっと私は人と防災未来センターなどでいろいろと相談していたのですが、やはり記録はあかんぞと思っております。プロ野球でも、三冠王の記録を持っている人は忘れられても、長嶋茂雄の記憶は忘れられない。やはり記録よりも記憶をきちんと持つ。身に付いた震災文化をもっと大事にしないといけません。いくら一生懸命口酸っぱく当時の状況を伝え、対応策を記録として残していっても忘れられる。語り継いでいくこと、言い伝えや紙芝居、歌などで身に付けてもらう、これは子どもの頃からずっと忘れません。一番有名な例では、インドネシア・スマトラ島のアチェで起きた津波の時、20万近くの方が流されて亡くなられたのですが、シムル島の人たち8万4千人はほとんど助かっている。シムル島では100年に1回ぐらいは大津波が来ていまして、津波が来たら逃げろという歌が作られ、島民の方は皆、よく歌っていた。ですので、津波が来た時、シムル島では皆、高台に逃げることができた。和歌山県広村（現在の有田郡広川町）の「稲むらの火」も同じですね。歌や紙芝居、教科書などで、身に付いたことが非常に重要な役割を果たす。それは多分、遺伝子のように子どもに受け継がれていくことで、50年100年経っても核となるところは残る。ですから、そういったことを語り継ぐというのが一番重要なことになります。今、世界災害語り継ぎネットワークTeLL-Net（Transfer Live Lessons Network：テルネット）という活動を10年ぐらい行っております。津波だけではなく、様々な自然災害に対する記憶を、広く世界の人と共有すると同時に、後世の人とも共有できるようなものにしていこうとしています。

災害の教訓などは、基本は忘れてしまうものだという前提で、物事を考えた方がいいと考えております。

【横田】

もう一つ、小林さんに御質問があります。この質問された方の実家は宮城県石巻市にありまして、「津波で集落がきれいに流され、土台だけが残りました。しかし、避難所から仮設住宅に移った方は元気にしています。心の中の確執もほぼ元の生活サイクルに戻りつつあります。国を始め、全国の方々からの支援にも感謝しております。ところで、牡蠣の養殖などでは、風評被害などによってそれまでの職場が成り立たなくなり、お先真っ暗です。そういった面では、どのような支援が可能なのか、まちづくりという観点で考えてもいいと思いますが、小林さんに御質問したい」とのことです。

【小林】

これも一番大変な話です。神戸も全く同じ状況です。神戸の場合、港が壊滅しました。それまで、世界のベスト10に入っていた港の扱い量が、震災後約20年経ち、今は40位以下辺りまで低迷している。それと同時に、西神戸の靴の地場産業も壊滅しました。ほとんど回復していません。このようなことは、震災を機に、自由競争の資本主義社会で弱者を尻目に、他でも稼いでしまうという連中が中心に、牡蠣でしたら他所の牡蠣を買うようになる。皆さんは、三陸の牡蠣生産が回復したら、三陸の牡蠣をもう一度昔のように買うのが当たり前だと思われるのでしょうが、実際にはなかなかそうはいかないのです。資本主義の冷徹な食い合いといいますか、一度落ちたところは放っておかれる。それは先ほどの話とよく似ているのですが、そういうことを前提に物事を考えた方が良いのです。ですから、牡蠣を養殖していて、震災などの影響で駄目になって客がいなくなり、また回復しても風評被害で駄目な状態が続く。いつかそういうことになるのだ、ということを前提に物事を組み立てれば、また違う見方が出てくるのではないかと思います。東北の方々には少し冷たい言い方になるかもしれませんが、神戸の人たちも全く同じことを経験してきています。日本全体が高度経済成長期であれば、そのようなことは吸収されてしまって、なんとかなってしまうことができるのですが、全体が下降気味にあるところでは、人口もどんどん減っていき、そこはさらに経済が下降する。これは資本主義経済社会の中で生きる以上、しょうがないという前提で、それでも頑張れることはあると考えた方がいいし、そのことをもっと社会的に共通認識していくような形で、マスコミや産業界の活動に入り込んでいかなければならないと考えております。

10年ぐらい前から言っているのですが、三陸などの東北の沿岸部は、住まいと漁業とか、住まいと農業を一体化したところが被災を受けていますから、仮設住宅よりも仮設店舗、仮設工場を先に作らないと駄目です。これは随分といろいろな人たちが言って、実際そういった活動は行われています。神戸に比べたらはるかにたくさんそういうことが取り組まれていますが、まだまだ弱いと思います。これから新しい家ができてくると、なんとかなるのではないかと言われていますが、雇用や労働についてのてこ入れが、本当は一番大事だと考えております。

【横田】

ありがとうございました。それでは次に、仙台市の岩切から来られた菅野さん、緑上さんに、御質問が多く来ていますので、紹介させていただいた上で、御回答いただければと思います。最初の質問は、「避難所でペットはどのように扱われたのでしょうか」という短い御質問です。御存じの範囲で結構ですが、いかがでしょうか。

【緑上】

知っている範囲ですが、避難所によって対応は様々でした。ペットは避難所である体育館の中には入れず、そばにテントなどを設けて、そこでまとめて世話をする形がありましたし、ペットも家族だ

からと一緒に過ごすことができたり、部屋を分けて、ペット連れの方とそうではない方を分ける形であったり、いろいろありました。中には極端な例ですが、ペットも家族だから、家族（ペット）を受け入れられない人の方が出て行ってください、というパターンもあったというお話も実際に見聞きはしました。

【横田】

基調報告では、ペットがうるさいという苦情もあったようですが、避難所や仮設住宅では、普段の生活スタイルとは違って、自分でコントロールできない身近さで隣の人と住むわけです。ですから、ペットの問題も深刻に出てくるのだろうと思います。これはその時のその場所によって、みんなで話し合ったり、問題解決したりしながらやっていく以外に、今のところ名案はないのではないかと思いました。ありがとうございました。次に、やはりお二人に御質問なのですが、「お二人はリーダーとして動く心構えを持っておられたと感じました。ところで、お二人だけでは全体を動かせないわけで、手となり足となりお二人の下で気持ちよく働いてくださる方がどのくらいいらっしゃったのでしょうか」という御質問です。

【菅野】

私たちの下で働いた人はいません。私たちに学びを提供してくださったＮＰＯ法人イコールネットさんは、人生の先輩でもあります。仙台市には社会学級という成人の生涯学習を応援するシステムがあります。各小学校に一つありまして、教育委員会さんの支援の上、一般の学級生が運営するシステムです。そこでは、イコールネットの宗片さん、それから顧問として私たちの支援をしてくださった油井さん、その他たくさんの先輩から、つながりや学びをいただきました。私たちはそれを活用させていただいています。私たちは、いつもどの活動の時も、一緒にやっていこうというスタンスでして、先ほどのパワーポイントの最後のスライドに、私と緑上さんの他に映っていた方がいますが、あの方も一緒に仙台市地域防災リーダーとして一緒に講座を受けて、一緒に活動してくださっています。とにかく基本は、岩切で気持ちよく生きていこうよ、というものです。子どもをすくすく健やかに育てていこうよ、というメッセージから、つながっていった仲間たちです。特段、私たちが押し付けることはなく、リーダーについてきてねと言っていません。みんなの資質といいますか、みんなの気持ちを集めて、活動しているのです。

【横田】

そのように自然に集まってくることは、すばらしいことだと思うのですが、大体何かやろうと思う時に、皆さんはどのくらい集まってくれるものなのでしょうか。

【菅野】

岩切の女性たちによる防災宣言をつくる会自体は、20人が集まりました。そのうち、仙台市地域防災リーダーは3人でした。先ほど申し上げたとおり、いろいろな立場の人たちが集まってくれているという感じです。

【横田】

そうすると、自然に声を掛けた時、割合にまとまって集まる場合もあるわけですね。

【緑上】

割合にあります。いろいろな活動、テストケースなどが行われる時、大体菅野さんにお声が掛かって、菅野さんが御自身の携帯電話のアドレスに入っている人に一斉メールをばーっと送るのです。そうすると、都合がつく方がその場に集まる。宣言を作った方は20人と言いますが、計4回のワークショップ中、

全て出られた方はほんの僅かで、それぞれ自分の都合のいい時間帯に合わせて参加する活動が多かったです。

実際、避難所や炊き出しの時も、ＰＴＡの役員さんや保護者の方が自分の都合のいい時間に合わせて、学校を訪れてお手伝いをしてくださいました。ですので、その時たまたま来たメンバーの中で、前日の引継ぎをしている人がいれば、その人がある程度指示をするだけで、本当に上も下もない関係で動いております。

【横田】

よく分かりました。次の御質問ですが、一般的な質問です。「仙台市の被災地の復興の現状はどうなっているのでしょうか」という御質問です。例えば、「岩切と他の地区、隣の名取市等はどうなったのでしょうか」とも尋ねています。

【菅野】

分かる範囲でお答えしますが。沿岸部はまだ切ない感じです。仙台市の中央部である青葉区や泉区辺りにいる人たちは、多分気付いていないと思います。昨日、私は20年振りに飛行機に乗って、神戸にお邪魔したのですが、仙台市を飛行機から見下ろしたら、茶色い部分がいっぱいでした。元々、茶色ではなくて、家が建っていたところが何もなくなったためです。それが名取市だったり若林区だったり宮城野区だったり、それからずっとつながっていく沿岸部の状況なのだということを再認識しました。空港近辺はまだまだ復興関係の車両で込み合っています。岩切においては、建物がどんどん新しくなっています。そういう部分では、復興は進んでいると言いたいと思います。

【横田】

ありがとうございました。次の御質問は、「子どもに東日本大震災の経験を伝える、大人にも伝えていくということで、防災講座でそのようなことを行うのでしょうが、その場合に、どのような点に注意しているのか」という御質問ですが、どうでしょうか。

【菅野】

一緒にやろう、ですね。私たちはずっと一緒に年を取っていくし、一緒に君たち（子どもたち）が大きくなるのを見ているおばちゃんだから、一緒にやろう、ということですかね。特に子どもたちには、あんたたちの町だから、あんたたちの未来だからね、だから、一緒に作ろうよ、と防災講座で伝えているメッセージです。

【横田】

よく分かりました。次の御質問は、実際ボランティアとして東日本大震災で現地に入られて活動してきた方なのですが、「災害直後、ゴールデンウィーク等を使って、個人で宮城県に行き、現地ボランティア活動に参加しました。2年目の夏には、兵庫県から子どもたちを連れて、グループで現地の子どもたちや地域の人々との交流を行いました。でもやはり何かまだまだ不十分だなという印象が拭えないのですが、私たちの立場でまだ何かできることがあるのではないかという気がします。現地におられる皆さんの方から見て、どういうことを私たちに期待していますか」という御質問です。

【菅野】

来てくれただけでも本当に嬉しいです。本当にありがとうございました。そのように思っているだけでも本当に必要なことだと思います。ただ、もしできたら、その思いを被災地の人たちに伝えていただけないでしょうか。それはすごく私たちの力になるのです。今日、こうやって皆さんが集まってくださったことで、皆さんの思いがすごく伝わってしまって、何かしんみりしてしまったのですが、

本当に、思いを伝えていただくことというのが有り難いなと思うのです。

旅行で被災地に来てくださるのも嬉しいです。被災地に行くのはどうかな、と思われている方いらっしゃると思いますが、私たちのことを分かろうと努力してくれる人がいるというのは嬉しいです。先ほどのトイレの話ではないのですが、心配して、どんな様子だべって見てくれる人を、なんだべ、そんな人のことじろじろ見て、と思う人はいないと思うのです。特に子どもさんは、うちらのことを見ていただいて、交流していただいて、その経験を地元に持ち帰って、いろいろなこと、いろいろな思いを広げていってくださる。それは本当に有り難いと思っています。

【横田】

もう一つ、御質問があります。この方は現在、災害時における要介護者支援体制作りに取り組んでいらっしゃるようです。「岩切の経験から何か、私たちにお伝えしたいことがあれば教えてください」という御質問です。

【菅野】

私は、防災などの学びを深めていくことで、震災時、知識不足だったことを知りました。今、被災地等に向かうボランティアさんたちの一つの基準である「スフィア基準（災害支援や人道支援に関する最低基準)」を学ばせてもらっているのですが、自分たちがしてきたことは本当に足りなかったし、思いが至らなかったという後悔があります。ただせっかく学ばせてもらったので、次には活かせるという気持ちもあります。

当時のごたごたっとした避難所を、要支援の皆さんと、一般の皆さんを分けることとか、妊婦さんを別室に移動してもらうこととか、そういうことをスムーズに、当然やるべきこととして、果たしてやれたかどうかとなると、一言で言えば、やれなかったと思います。一人一人への対応として、寒くないですか、奥に行ってください、もし、移動してもらえるのだったら、あっちの避難所の方が寒くないと思いますよ、とか、そういう働き掛けしかできなかった。私たちとしてのすごく反省点で、先ほども申しましたように、今私たちは防災マニュアルを作っているところです。そこには、仙台市さんからいろいろと御指導もいただいています。防災マニュアルによって本当により良い、快適になるということは多分ないと思いますが、でも私たちにできることとは、お互いに力を出し合うことです。ですので、防災マニュアルにどうそのことを盛り込めるかを、私たちは今考えているところです。

【横田】

これは大事な点です。恐らくこの点については、他の登壇者の方も御意見があるかと思いますので、もし御発言があれば伺いたいと思います。まず差し当たって、小林さんから、高齢者や入院中の方たちのように一人で逃げられない人たちが相当被災しましたが、これを今後、防災に活かしていく場合に、どういうことを、例えばまちづくりの観点で反映できるのか、お考えを伺わせていただければと思いますが、いかがでしょうか。

【小林】

先ほども申しましたように、災害は弱い人により重く掛かりますので、要介護者の方が最も災害を受けやすいです。多分、東日本大震災で亡くなられた方の多くは、そういった方ではなかったのかと思います。そもそも、今一番問題となっているのは、個人情報の保護という問題で、介護が必要な方々に対して、いろいろな部門ごとに情報を持っておられますが、その情報の利用は、その部門内だけに限られています。個人情報のため、共有化させることは難しいといわれるのですが、防災の面では、そのような情報を共有化しなければいけません。誰がどこにいるのか分からなかったら助けようがない、という話もありますし、そういう情報がなかったら、そういった方たちを思い浮かべることもないわけですから、支援も始まらないわけで、そうした個人情報保護の問題が解決できるのは多分、地域・

近隣の人たちの中でしかできないと思います。

ですから、先ほどからお話に出ています地域防災リーダーや自主防災組織などでは、いろいろな知恵があるのです。災害に非常に弱い要介護者や歩くのが困難な人、車椅子の人、寝たきりの人などがいる位置を把握できるような地図を作る。でもそれは、犯罪等に悪用される可能性があるかもしれないので公表は難しい。ではどうするかというと、ある地区では、災害に弱い方を知っている人の分布図作りました。民生委員の方々は生活保護を受けている方を知っている、ヘルパーの方は担当の要介護者のことを知っている、そのような人たちがどこにいるのか、これくらいは公表してもそんなに問題はありません。そのような地図を作ったコミュニティもありました。また、神戸市長田区の真野地区では、介護を受けたい人が名乗り出るシステムがありまして、それは当然、地域で情報共有できるようになっています。

では誰が助けに行くか。これは役所が決めるとものすごく問題がありますので、やはり地域ベースでみんなで話し合って、この町内は彼がなんとかするとか、そのようなことを決めておくといいと思います。ただ、1年2年経てば、町はどんどん変わります。住んでいる人も介護する人もされる人も変わります。ですから、ずっとそのような取組はやり続けないといけない。半年に１回ぐらいは更新しないといけないと思いますが、それが続くかどうかという問題の方が大きいです。

知恵はいくつか出てきますが、それをずっと続けていくのは、やはり地域の力が必要でして、それをみんなでどうやって高めていくかが課題なのです。しかも、大都市では地域の人たちが自発的にというのは、なかなか難しい。神戸では、それを無理矢理やらないといけないシステムを作らない限りは、続いていかないのではないかなと思っており、頭を悩ませているところです。

【横田】

冨永さん、加藤さんにもお伺いしたいのですが、今のこととの関連でもあります。とりわけ、精神障害者のような方は、自分から判断できないことも多いと思いますが、ケースによってはそういう方たちを含めて災害時にどのように対応したらいいか、ということについて何か具体例があるかお考えがあるか、教えていただければと思います。また、要介護者、身体が不自由な方の中に、当時御自身の精神的な障害があるために、他の人とコミュニケートできないなど、様々な事情のある方がいると思うのですが、そういう方たちについて、どのように社会が取り組んでいっているのか、教えていただけないでしょうか。

【冨永】

子どもの支援に携わっていると、自閉性障害のある子は避難所で生活できなかったと聞いています。ですから、このシンポジウムは法務省主催ですので、障害のある方に優しい避難所や仮設での生活をバックアップするような法律の制定が必要だと思います。今、そのような法律がどのようになっているか、知識がないのですが、そういうことが求められているのではないかと思っています。

【横田】

ありがとうございました。今日、神戸地方法務局の局長さんも見えておられますので、ただ今の御意見、検討してくださると思います。それでは加藤さん、この点についてはどうでしょうか。

【加藤】

確かに、東日本大震災の状況を見ると、介護が必要だった方たちに支援が行かなかったという点はあると思うのですが、ただもう少し小さな災害のケースを考えると、阪神･淡路大震災の時とは随分違っていて、進歩しています。要するに、介護保険などが非常に発展したことによって、介護している方の情報というのは、地域の地域包括支援センターや保健センター等が持っていますので、どこに誰がいるかというのを、行政はよく知っています。少し小さな規模の災害ですと、すぐに動くような制度

になっているので、その点は阪神・淡路大震災の時よりは随分進んだなと感じています。

ただ、東日本大震災のような災害になると、支援する側が被災してしまうので、支援者がどこにいるかという情報が分からなくなってしまう問題が発生する。ですので、それをどうバックアップするか。例えば、外部から来た人たちにその情報を提供することは可能なのか、ということも考えなければいけないと思います。

もう一つは、介護する側は、こういう場合とてもしんどいのです。ずっと自分の家族を介護している人たちや、施設の中で介護している人たちというのは、災害が起きた後、そのよう人たちを守りながら、かつ自分のことも考えなければいけないので、とてもしんどい立場に立たされます。そういった方たちのこともサポートするようなことが必要ではないかなと思います。

【横田】

これは必ず社会で取り組んでいかなければいけません。恐らく、先ほど冨永先生がおっしゃってくださったように、法律によって国、自治体が取り組まなければいけない部分があると思うのです。これから日本も高齢化が進み、この問題は小さな災害であっても取り組まなければいけない場合が出てくると思います。大きな災害の場合はより大変だと思いますので、また御一緒に考えていきたいと思います。最後になりますが、菅野さんと緑上さん、「この皆さんの活動、今度どのようにしよう、していこうと思っていらっしゃいますか」という御質問が入りましたので、短期、中期、長期、どういう形でも結構なのですが、お考えをもしできましたら、お願いいたします。

【菅野】

はい、基本は岩切をいい町にしていこう、子どもたちを育てていこう、それを基本目標におきまして、防災だよ、命を守るよという方面からだけではない、いろいろな方面からの働き掛けで活動していきたいなと思っています。今一つ、基調報告でも発表しましたが、新しい女性たちの防災宣言を作りたいのです。実際に起きた震災を踏まえて、私たちが辿ってきた道、それから岩切が変わってきた道を踏まえて、新しい防災宣言を作るというのが、まず一つ目の課題だと思っています。

【横田】

ありがとうございました。これで全ての御質問に答えさせていただきました。まずパネリストの皆さんにもう一度、感謝の拍手をお送りしたいと思います。

それから会場の皆様、最後まで熱心に御参加いただいてお礼を申し上げます。それでは、私どものシンポジウムはこれで終了させていただきます。

＊このシンポジウムの「パネルディスカッション」の模様は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。
https://www.youtube.com/jinkenchannel

●関連情報

＊兵庫県こころのケアセンター　http://www.j-hits.org/
＊みやぎ心のケアセンター　http://miyagi-kokoro.org/
＊ふくしま心のケアセンター　http://kokoro-fukushima.org/
＊東京都精神医学総合研究所　http://prit.igakuken.or.jp/

＊兵庫教育大学大学院学校教育研究科 人間発達教育専攻臨床心理学コース
http://www.hyogo-u.ac.jp/course/cli_psy/
＊冨永良喜 ブログ「ストレスマネジメントとトラウマ」
http://traumaticstress.cocolog-nifty.com/
＊日本ストレスマネジメント学会 http://jassma.org/
＊日本心理臨床学会・支援活動委員会 東北地方太平洋沖地震と心のケア
http://heart311.web.fc2.com/

＊兵庫県立大学大学院 緑環境景観マネジメント研究科 http://www.awaji.ac.jp/gs-ldh/
＊まちづくり株式会社 コー・プラン／CO - PLAN http://www8.plala.or.jp/co-plan/
＊阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク http://www.gakugei-pub.jp/kobe/
＊阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター http://www.dri.ne.jp/

＊平成２４年度第２回仙台市男女共同参画推進審議会 議事録
http://www.city.sendai.jp/shimin/danzyo/shingikai/H24dai2kai/dai2kaigiziroku.pdf
＊内閣府 男女共同参画局『共同参画』2013年8月号
http://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2013/201308/pdf/201308.pdf
＊男女共同参画の視点からの防災・復興の取組指針 解説・事例集
http://www.gender.go.jp/kaigi/senmon/kansi_senmon/wg01/pdf/giji_03_3.pdf

第２部　映画上映＋トークショー
「被災地の祭から見えてくる心の復興」

手塚　眞（ヴィジュアリスト、有限会社ネオンテトラ代表取締役）

（映画『雄勝～法印神楽の復興』上映後）

【手塚】


手塚眞さん

皆さん、こんにちは、手塚眞です。本日は映画『雄勝～法印神楽の復興』を御覧いただきまして、本当にありがとうございます。

作品が全てを語っておりますので、余り補足することもないのですが、この映画が作られました事情と、そしてこの映画の意図につきまして、お話させていただきたいと思います。昨年（2013（平成25）年）の8月、宮城県石巻市でも人権シンポジウムを開催されたそうですね。この映画の舞台は、正にその石巻なのですが、そもそも石巻と私は特別に何か縁やつながりがあるわけではございません。まず、この映画を作るきっかけとなったのは、4年前、震災より1年前に、東京の国立劇場で行われた雄勝法印神楽の公演です。東京で上演されるのは初めてで、当然私も初めてそこで見させていただきました。お分かりのとおり、神楽と申しますのは、元々、祭りの中でこそ意味があるもので、舞台芸術ではございません。ですから、国立劇場で上演されるというのは、非常に特別な機会だと思います。また、劇場で上演することから、本来の神楽の形とは少し変わってしまうのですが、ただそこで、初めてこの神楽を拝見しまして、私は大変驚きました。その様式にしても、描かれた内容にいたしましても、他の神楽と比較できないような、非常にユニークなものだと感じたのです。もしかしたら、皆様も神楽を御覧になったことがあるかと思いますが、大抵祭りの中の神楽は、意図はあるにしても、少し見ていて退屈してしまうような、だらだらとしたものが多いです。しかし雄勝法印神楽は、御覧になったとおり、非常に娯楽性が豊かで、歌舞伎の舞台を見るような、そのぐらい楽しませてもらえる部分がありつつ、なおかつ、神楽本来の形を非常にきちんと残しているのです。

神楽は、元々は山伏が伝えたと言われておりますが、明治時代に神仏分離令（神仏判然令）が引かれまして、これによって全国の神楽がその元の形を崩されてしまったと言われております。ほとんどの神楽は、その時に、原型を変えてしまい、中には滅んでしまった神楽もあります。ところが、雄勝法印神楽は比較的原型をとどめております。そういう意味でも、歴史的にも、貴重な神楽だと思っておりまして、この神楽を見た後、ブログに「今日、非常に面白い神楽を見た」と書きました。すると、この神楽の保存会の方からコメントをいただきまして、次はぜひとも地元で見て下さいと、お祭りの誘いを受けたのです。行こうと思っていたのですが、あいにくその年は時間が合わず、祭りに行けませんでした。では翌年に行けばいい、毎年やっているのだからと思っていましたら、翌年に東日本大震災が起きてしまったのです。

先ほど、映画を御覧になったとおり、雄勝は甚大な被害を受け壊滅しました。もうお祭りどころではない。もう神楽を見ることはできないのかなと非常に残念な思いでした。しかしその後、全国のいろいろな方々から、この神楽を支援しようという動きがありまして、私も多少協力しました。すると、東北の文化芸能を支援しておりました日本ユネスコ協会連盟様から、雄勝の祭りが地元で復興するので、それを是非とも映画に撮ってくださいと依頼を受けました。私は、前々から気になっていた神楽でもありましたので、映画を作るということになりました。

ただ、お話を受けた当初は、非常にためらいまして、また不安もございました。震災から1年経ったとは言え、震災直後の状況をまだまだとどめている地域に、記録とはいえ他人がカメラを持って入って、地元の方々を撮ることは、なかなか勇気がいることでございます。特に、祭りというのは、その地域地域の方々が本当に大事にされている習慣です。地元の人ではない私からすると、貴重なものだという認識だったのですが、地元の人たちにしてみると、貴重というよりは、祭りは町のために大事なもの。そこに他人がカメラを持って入っていいのかと懸念いたしました。

すると、日本ユネスコ協会連盟様から、その祭りの復興を記録したこの映画は、今後いろいろな地域で上映し、被災地以外の人たちには、雄勝で実際に起きていることを見ていただける機会になり、また同じように被災した方々には、励みや勇気、また何か考えを得られるきっかけになるのではないかとおっしゃってくださいました。もちろんそれは非常に意味のあることでありますし、東北全体に何か励みになるような、そのようなお手伝いができるのであればと思い、これをお引き受けいたしました。

ただ、引き受けた後も、少し不安が残っておりました。それは、こちらがそのような意義を感じていても、地元の皆さんが私たち映画を作る人間を受け入れてくれるかどうかという問題です。特に、祭りという非常に限られた場所、空間と時間、そこにお邪魔するわけです。さらに、震災後初めての祭りで、雄勝の人たちにとって重要な時期でもありましたので、とにかく邪魔をしてはいけない気持ちで、悩みました。ですが、もうこれは引き受けたので、やるしかないだろうと思い、撮影の前に、何度か雄勝を訪れました。私は初めて雄勝を訪ねた時、非常に美しい景色のあるところだなと思いました。被災地に行って美しいなんて言うと失礼なのかもしれませんが、とてもすばらしいところで撮影をさせていただけるのかと思いました。

私は、ずっと映画の仕事をしておりますので、地方で撮影をすることは結構多くあるのですが、地方に撮影でお邪魔した時に、最初に必ずやることがあります。それは、その土地の中心に御挨拶をすることです。中心というのは、県庁や市役所ではございません。その土地そのものの中心になるようなところを探すわけでございますが、これが便利にできておりまして、大体神社なのです。どこの土地にも、その土地を守っている神社がございます。その土地にとって大事な神社です。土地によってはいくつもあったりしますが、その神社に必ず御参拝することにしております。

ですから、雄勝に初めて行った際、まず訪れたところは神社でした。雄勝に神社はいくつもあるのですが、今回、特にお邪魔する地域の主要な神社をまず巡りまして、どうぞここで撮影をさせてください、と神様にお願いをするわけです。もちろん、被災地の神社ですから、全部崩れてしまって、無いようなところもあるのですが、そのようなところを全て巡りました。それが済みますと、次は実際にお世話になる町の方々と交流です。この神楽を舞っていらっしゃる保存会の皆さん方に集まっていただき、御挨拶をする機会をいただきました。

神楽は御覧いただいたとおり、神社に保存会がございます。半分倒壊している神社だったのですが、社務所も倒壊しており、プレハブが建っておりました。そのプレハブは6畳ぐらいの本当に狭い空間なのですが、そこに保存会の皆さんに集まっていただいて、私たち映画制作のスタッフと面会して御挨拶させていただきました。お邪魔になるかもしれませんが、今回は本当によろしくお願いします、という話をしました。

私はその時はまだ非常に緊張しておりました。被災地にカメラを持って入るということに関して、まだ疑念が払えない状態だったのです。ですが、この時、すごいことが起きました。御挨拶している途中で、神楽師の皆さんが、一斉に窓の外をハッと御覧になりました。皆さん、あっと言って驚かれているのです。私は、何があったのだろうと、窓の外を見たところ、なんとそこに人間ではないものがいたのです。大きくて白くて毛むくじゃらで角が生えたものがいたのです。本当にびっくりしました。

ニホンカモシカだったのです。雄勝という地域は、歴史書によると、昔は野生のシカがたくさんいたようです。しかし、ニホンカモシカが生息しているという記述はどこにもございませんし、またその地域にたくさんいることもないそうです。どちらかの山から流れてきたのかもしれませんが、雄勝

でニホンカモシカに会えることは、大変珍しいことでした。当然、神楽師の皆さんも地元で見ることがないと驚かれたのですが、そうやって皆さんが見ている前で、ニホンカモシカもこちらをじっと見ているのです。それから、悠然と山に戻って行ったのですが、私は大変嬉しいショックを受けました。私は、これは山の神様が使いを寄越したのだと、本気で思いました。御挨拶している時に、ニホンカモシカが目の前に来るというのは、余りにもすごいタイミングなのです。これはつまり、私がここで仕事をさせていただくお許しを得たのだと思いました。これでやっと気持ちが晴れまして、そこでこの映画を撮らせていただいたわけでございます。少し変な神掛かったお話ですが、そのようなことを本当に感じさせてくれる場所で、神楽が奉納されているわけです。ですから、雄勝に行く度に、なんとなく浮き世を離れた、不思議な、神秘的な気持ちに今もなっております。

さて、もう見ていただいたとおり、お祭りというのは単純に季節のけじめの騒ぎではなく、神様と人間の結び付きのために行っております。また、地域の結び付きのためにあるのが、本来のお祭りの姿です。町の人たちがみんな手を結び合って一つになる､その一体感を体験するのです。それと同時に、神様という言葉を使いましたが、環境、自然に対しても、ここに住まわせていただき、ここで生きていける、ありがとうございますという感謝の気持ちを抱かせてくれるのがお祭りでございます。その中心になるものが神楽で、神楽がどれほど地域にとって大事なものか、生活にとって大事なものかが分かっていただけると思います。

都会で生活しておりますと、お祭りは季節の付随的な単なるイベントと感じられますが、地方によっては、お祭りが中心となって１年のサイクルが成立しています。お祭りを復興することは、イコールそこに町が残っていることを意味しますので、大変大事なものなのです。実際に、この映画にありますとおり､お祭りが復興したことで､ここにもう一度人々が集まり､ここはやはり自分たちの町なんだ､ここで頑張っていこうと思う人たちが結構いました。非常に前向きな気持ちになったともお聞きしております。それから2年経ちましたが、まだまだ町は復興しておりません。しかし、町の皆さんの気持ちの中で、お祭りができるのだから、自分たちも頑張っていこうという気持ちを抱いていると、お聞きしております。

今日は、心の復興というテーマではあるのですが、私がこの仕事を通して、被災地のお祭りの復興を見て感じたことは、まず私たちはこの作品を作ることで、被災した皆さんに何かの励みになればと思っていたのですが、逆にこちらが励まされた結果になりました。日本人として、あるいは人間としての心の在り方は何かというのを、見つめ直す非常に大きな機会になったのです。

日本のようなある意味で非常に豊かに見える社会で暮らしていますと、どうしても人間は利己的になりがちです。自分たちの損得勘定であったり、自分たちの利益、あるいは自分たちの身の保全であったりを第一に考えるようになっております。それも大事なことだとは思いますが、ただ、震災のような状況の中で、まず人々が思うことは、自分たちの身の保全だけではなく、周りは大丈夫なのか、というような周囲に対する思いというのが非常に強くなってくるわけです。そもそも人間は、社会的な生活を営む生き物でございますから、周囲と共に生きているということを、やはり第一に感じていなければいけないわけなのです。ところが、得てして私たちはどうしても、個人個人という見方をしてしまいます。私が雄勝で一番感じたことが、そのことでございまして、ここの人たちはお祭りを通して本当に地域一体となっていくことを考えている。一人一人ではなくてみんなが、ということをまず考えている。そればかりか、このお祭りという要素の中には、自然、環境、古い日本人の言い方で言えば、神様があるのです。それに対しての感謝という気持ちが結構強いのではないかと思います。

都会で暮らしていると、ここが一番薄れてしまうのです。自然、環境、つまりは神様。人間同士の結び付きというのは、当然ながら皆さん誰でもが感じることだと思うのですが、人間だけではないのです。今回の仕事をやらせていただく時、最初にニホンカモシカと出会ったことは、本当に運命的なことでございまして、ここにいるのは人間だけではないよと教えられました。私は、神社を巡ると言いました。もちろん神社は人間が作ったものですが、そこには山があったり、自然があったりする。これらが人間を守って下さっているのだと取れるわけです。そういう自然や環境、そして神様を含む

全てのものに対して、まず感謝をする、ありがとうございますという気持ち、それからそれらのものを慈しむ、大事にするという気持ちが重要なのではないかと思います。「いやお祭りなんかどうでもいいんだよ」などと経済を優先するような言葉をスローガンにしている方もいらっしゃいますが、そういうお祭りをやって、みんなが一緒になって楽しむ場を用意するという、そういう気持ちも非常に大事だと思います。また、「ありがとうございます」を、一日一回でも神様や周りに対して言うということも大事なことではないかと思います。これこそが、私は人間にとってとても重要な心の要素なのではないかと思いまして、その人間の本質的な気持ち、心、これを復興させる機会に、私たちは直面しているのだと思った次第でございます。ですから、単純に震災前に生活を戻すとか、その時の平穏な心に戻すのだということではなく、もっとそこから遡って、今、日本人として生きていくために、心の中に何を持っていくのが良いのか、を考える時期になっているのかなと思っております。

私はこの法印神楽という、たまさか一地域の神楽ではございますが、それを通して日本人の心というものを、もう一回考えさせられることになった次第でございます。非常にいい経験をさせていただいたと思っておりますが、実際、この雄勝という地域がその後どうなったかと申しますと、報道等でも御覧になっている方いるかと思いますが、現在では、がれきはほぼ片付いております。町の復興計画などは進んではいるようですが、随分時間が掛かると聞いております。

ただ、お祭りはその後も続いて行われております。お祭りになれば必ずこの神楽も奉納されております。全国の方々が、この神楽の復興を支援いたしまして、1枚また1枚と面が復興していって、今やほとんどのお面、それから装束が、全て震災前と同じ状態に復元できたそうです。もちろん、御本人たちも、周りの人たちも大変苦労しながら神楽を存続させているわけですが、非常にこの神楽師たちが、自分たちの意義を感じております。つまり、ただ祭りで神楽をやればいいということではないと、神楽が町を引っ張っていってるんだと、町の人たちを集めるために自分たちはやっている、そしてその町の人たちを今後もそこに住まわせて、平穏に過ごさせるためには、自然や神様の力も必要なんだ、だから神様を忘れちゃいけないんだと、もう一度敬虔な気持ちになって、この神楽を奉納しようという心構えに変わりました。もちろん今までも真面目に神楽をやっていた方々なのですが、誰よりもそのことを強く感じられたようでございます。

この神楽はその後、大変注目されることになりまして、昨年（2013（平成25）年）は高円宮妃久子殿下が総裁を務めています、地域伝統芸能活用センターが主催しております、地域伝統芸能大賞を受賞いたしました。東京でも昨年にもう一度、国立劇場で上演されまして、その時は、皇太子御夫妻も御覧になられて、神楽師とお話を交わされるという場面もございました。非常にいい結果に結び付いております。ただこれは、一地域の一神楽に過ぎません。まだまだこのように注目されていない地域の文化がたくさんございますし、このようにうまく復興できないでいるところが大半でございます。ですから皆様も、ここは神戸でございまして東北からは遠く離れておりますが、何か感じられることがございましたら、足をお運びになって被災地を御覧になられる、地域の方々とお話されると、そこでいろいろと思うこともあり、とても意味のあることになると思っております。

私も今、お祭り毎に、東京から雄勝に行っております。時間が余り無いのでゆっくりできませんから、自分で車を運転して行きます。片道500キロの距離なので、大体、神戸から東京までと同じくらいの距離です。6 ～ 7時間のドライブになりますが、日帰りでもお祭りに行くようにしています。日帰りで1000キロドライブすることになるので、もうへとへとになるのですが、それでも、遠いとは感じません。なぜならば、このような仕事を通して、地域の皆さんと親しく心の交流もさせていただいて、皆さんと強い絆ができた地域ですから、遠いと感じないのです。どんなに距離があっても、時間が掛かっても、必ずお祭りに行っております。こういうことで、結び付いていくというのも、また人間らしい面白い心の働きだなと思っております。

今日は短い時間ですが、少し映画の補足的なお話をさせていただきました。本来でしたらこの後、質疑応答の時間があればと思っていたのですが、今日は非常に長い時間、イベントに参加していただいておりまして、お疲れだと思いますので、お話はこのぐらいにさせていただきたいと思っております。

それでは、今日は長時間本当にありがとうございました。この映画を制作していただきました、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟様と日本テトラパック株式会社様には大変感謝をしておりますので、この場もお借りしまして、厚く御礼申し上げます。そして、今回、この映画の上映、そして私をお招きいただきました、法務省の皆様、公益財団法人人権教育啓発推進センターの皆様、そして兵庫県の皆様にも、本当に感謝しております。ありがとうございました。何よりも、今日、長時間参加していただきました皆様、本当にお疲れ様でございました。私から感謝の気持ちと、それから皆様の御多幸をお祈りしたいと思います。本当に今日はありがとうございました。

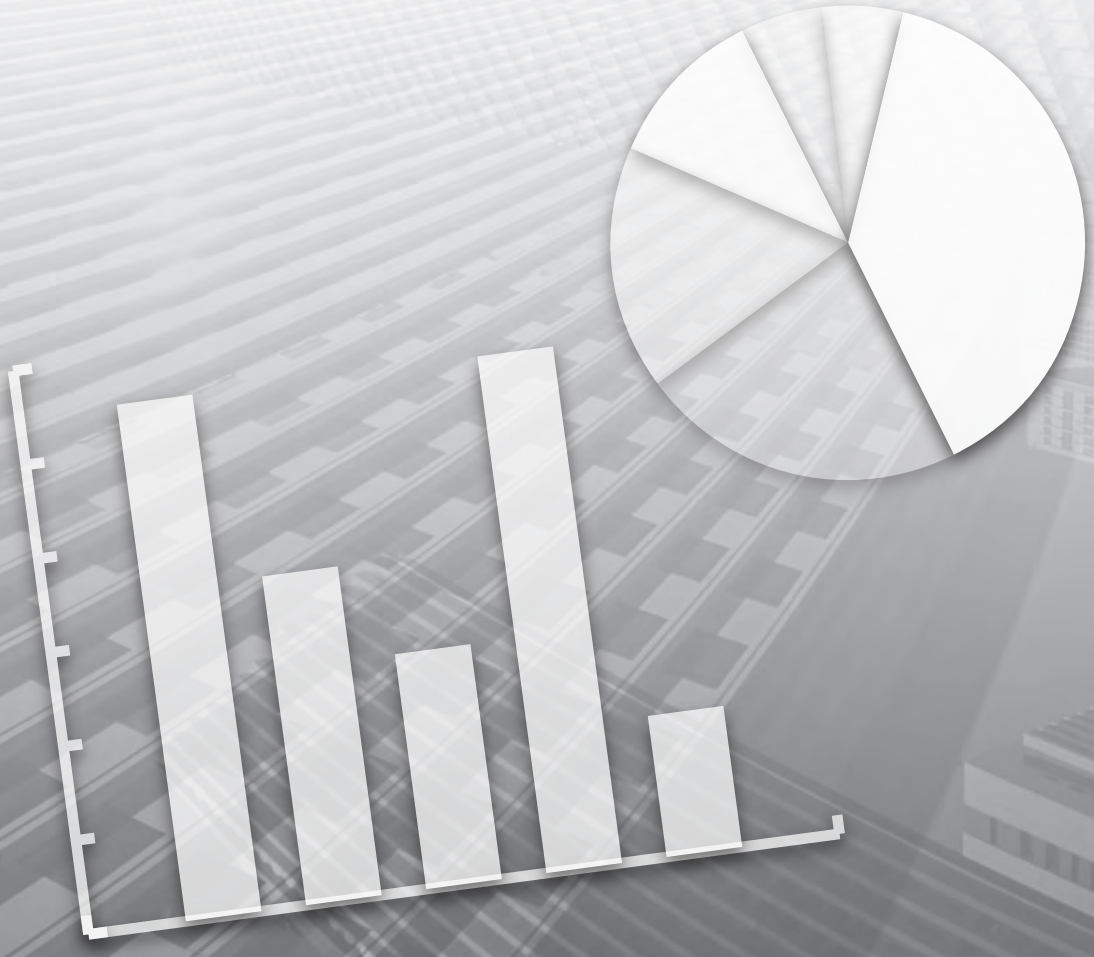
＊このトークショーの模様は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。
https://www.youtube.com/jinkenchannel

●関連情報

＊有限会社ネオンテトラ
http://www.neontetra.co.jp
＊手塚眞　ブログ「Tezka Macoto' 6D」
http://tzk.cocolog-nifty.com
＊日本ユネスコ協会連盟文化復興支援「雄勝～法印神楽の復興」90秒PR映像
http://youtu.be/45QgceZ8IMQ

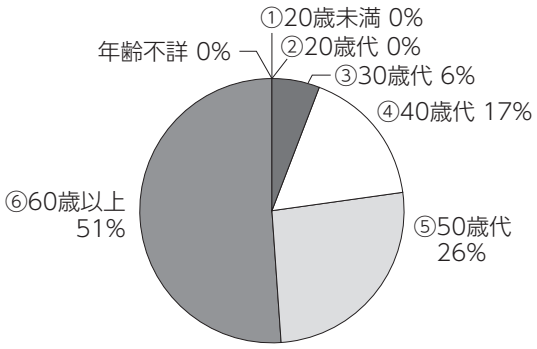
神戸会場

アンケート集計結果



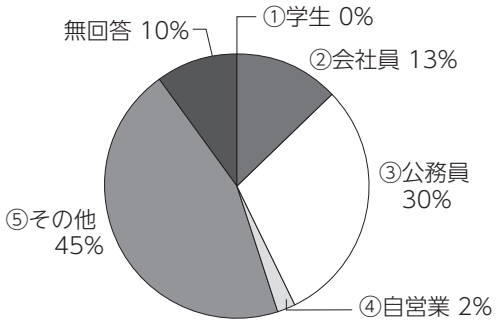
1　年齢構成

① 20歳未満	0 人
② 20歳代	0 人
③ 30歳代	3 人
④ 40歳代	8 人
⑤ 50歳代	12 人
⑥ 60歳以上	24 人
年齢不詳	0 人



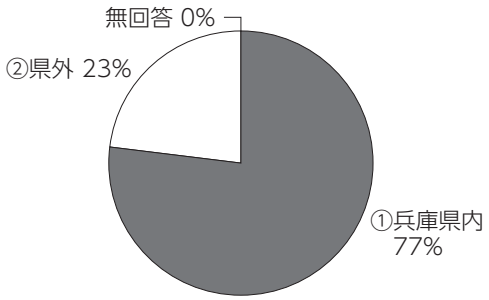
2　職業構成

① 学生	0 人
② 会社員	6 人
③ 公務員	14 人
④ 自営業	1 人
⑤ その他	21 人
無回答	5 人



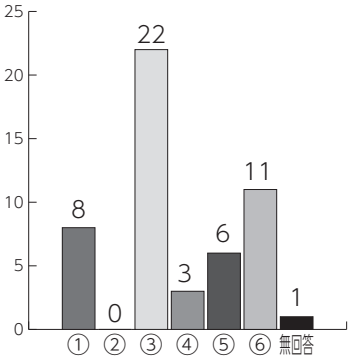
3　住まい

① 兵庫県内	36 人
② 県外	11 人
無回答	0 人



4　本シンポジウムを知ったきっかけ（複数回答）

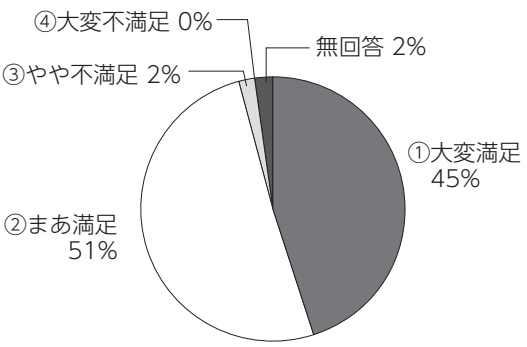
① 新聞	8 人
② テレビ	0 人
③ チラシ	22 人
④ インターネット	3 人
⑤ 知人・家族	6 人
⑥ その他	11 人
無回答	1 人



5　本シンポジウムについて

（1）全体満足度

① 大変満足	21 人
② まあ満足	24 人
③ やや不満足	1 人
④ 大変不満足	0 人
無回答	1 人



(2) 本シンポジウムについて特に良かった演目（自由記入）

東日本大震災の現場から来られた方のお話が印象に残りました。大人も子どもも「一緒にやっていこう」この気持ちが大切で心が打たれました。

パネリストによる発表、ディスカッション、上映、トークショーと内容に変化があり、どの演目も良かったと思います。

シンポジウムでパネリストそれぞれの立場から震災時、復旧復興時の人々の様子、取り組み、課題の発表があり、大変勉強になった。特に阪神淡路大震災と東日本大震災との比較にも言及され、非常に奥深いご意見を伺えた。人権の尊重されるまちづくりを考える良い機会になったと思います。

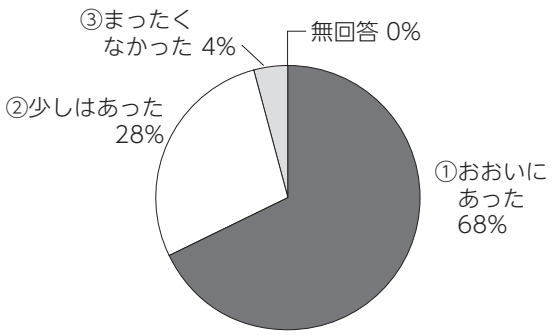
地震活動期に入った今、被災者の方々の感情のこもったあからさまな体験談や具体的な対処法のお話はまだ被災を受けていない地域に住む私にとって「これから体験すること」と有難く、また真剣な関心をもって拝聴しました。

岩切の女性のお話を聞きながら、1.17を思い出しました。家も仕事も無くしたときは、なんで～と思いました。まだ命だけがあったので良かったと思うようにしていますが…1.17のメモリアルウォークには毎年参加し、忘れないようにしています。1.17、3.11を忘れないようにしたいと思います。先生方のお話分かりやすく、また学びたいです。ありがとうございました。

※主な回答を抜粋

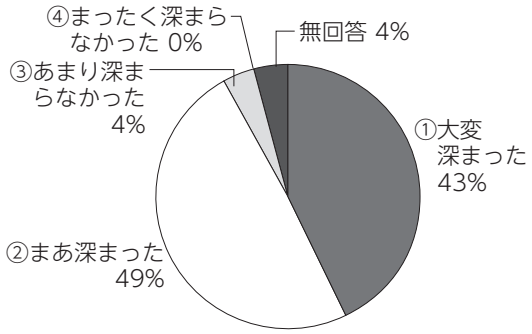
6　本シンポジウム参加以前に、人権問題についてどのくらい関心や理解があったか

① おおいにあった	32 人
② 少しはあった	13 人
③ まったくなかった	2 人
無回答	0 人



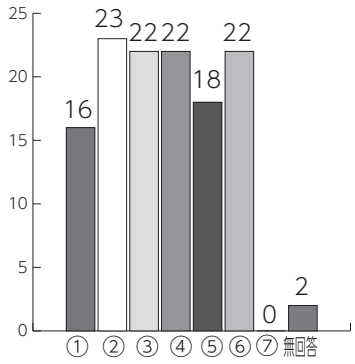
7　本シンポジウムに参加して、人権問題についての関心や理解は深まったか

① 大変深まった	20 人
② まあ深まった	23 人
③ あまり深まらなかった	2 人
④ まったく深まらなかった	0 人
無回答	2 人



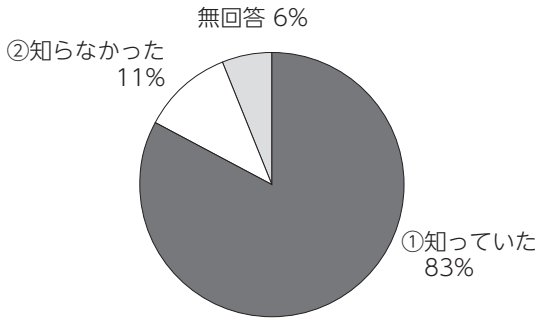
8　本シンポジウムに参加して、何か行動しようと思ったか（複数回答）

① 被災地支援を行いたい	16 人
② 今後起こりうる震災・災害に備え、防災対策を行いたい	23 人
③ 人権問題に関心を持ち、偏見を持ったり、差別をしないようにしたい	22 人
④ 人権問題について、もっと知識を深めたり、勉強したりする機会をもちたい	22 人
⑤ 今回のイベントの内容を、友だちや家族に説明し、話し合いたい	18 人
⑥ ほかの人権問題に関するイベントにも、機会があれば参加したい	22 人
⑦ その他	0 人
無回答	2 人



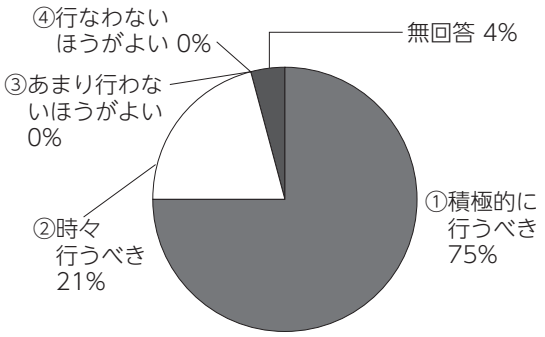
9　国や地方自治体が、広く人権啓発事業を行っていることは知っていたか

① 知っていた	39 人
② 知らなかった	5 人
無回答	3 人



10　今後、このようなシンポジウムを行なうべきだと思うか

① 積極的に行うべき	35 人
② 時々行うべき	10 人
③ あまり行わないほうがよい	0 人
④ 行なわないほうがよい	0 人
無回答	2 人



11 今回のシンポジウムについてのご意見や今後開催してほしいテーマなど（自由記入）

同和問題　運動団体が主催する研究会や講演会は多いが、一般の方々が参加しにくい。子どもたちの教育や結婚、ネット上の差別等、今も多くの課題が大衆の知らないところで進行している。行政や国民がどう対応していくべきかについてのテーマでシンポジウムを開催していただきたい。

本日の内容全体を通して、人と人とのつながり作りをどう工夫して深めて広げていくか、という点が重要であると感じました。お世話になりました。ありがとうございました。

今回のシンポは、1.17と3.11を重ねる意味と時宜を得て、タイムリーな適切な企画であった。「震災と人権」をテーマとした人権啓発は、とても大変な視点であると考える。語り継ぐ人権教育・啓発と語り継ぐ防災教育を結びつけて考えていきたい

・防災教育と心のサポートを一緒にと言うお話でしたが、ぜひお願いしたいと思います。
・道徳の時間も少なすぎるように思います。「記録より記憶」小林先生のお話強く感じました。その通りだと思いました。
・思いを伝える経験したものでなければ分からないと強く思います。「雄勝の法印神楽」ドキュメンタリー映画、感動しました。硯の町と言う事も知りました。
・終了時間がちょっと遅いと思います。せっかく手塚さんが来られているのに、途中で帰られた方もおられ残念でした！

地域ネットワークや男女共同参画などが今後の日本の社会生活の中で、大変重要な事になります。このような内容のセミナーをもっと希望します。

※主な回答を抜粋

広報内容

広報実績

No.	事　　項	実施内容
1	新聞広告	・1紙に半5段広告を掲載。 神戸新聞：平成26年1月4日（土） ・折込チラシを実施。 読売新聞・朝日新聞：平成26年1月5日（日） 部数：71,350部 エリア：東灘区、灘区、中央区
2	ラジオ広告	・ラジオ関西に20秒CMを10本放送、60秒生CMを2本放送。 平成26年1月1日（水）～1月6日（月）の期間。
3	バナー広告	・開催2週間前よりMarketOne（兵庫県内）を実施。 クリック保証型：1,000クリック／1,500,000imps
4	広報用チラシの配布	・広報用チラシを関係機関等に配布、掲出を依頼。 神戸地方法務局（1,000部） 全国の法務局・地方法務局（980部）※神戸地方法務局を除く 兵庫県（1,500部） 神戸市（2,000部） 兵庫県内市町（1,200部）　※神戸市を除く。 後援団体（540部） シンポジウム実施会場（50部） その他、全国の自治体などに配布。 ※チラシ印刷部数：13,100部
5	イベント情報サイトへの広報記事掲載	・インターネット上のイベント情報サイトに広報記事を投稿、掲載。全国イベントガイド、WAMNET（ワムネット）など計16サイトに掲載。
6	メールマガジンの配信	・本シンポジウムの開催を案内するメールマガジンを計3回配信。
7	人権ライブラリーホームページへの広報記事掲載	・人権ライブラリーホームページのイベント情報コーナーに広報記事を掲載。
8	人権センターホームページへの広報記事掲載	・人権センターホームページのイベント情報コーナーに広報記事を掲載。
9	各種ボランティア団体等への案内メール配信	・震災関係を中心とした各種ボランティア団体等に対して、案内メールを配信。配信先は約700件。

新聞・バナー広告



【半5段広告】
神戸新聞　平成26年1月4日（土）朝刊掲載
エリア：兵庫県
部 数：555,003部





【バナー広告】

実施内容の周知

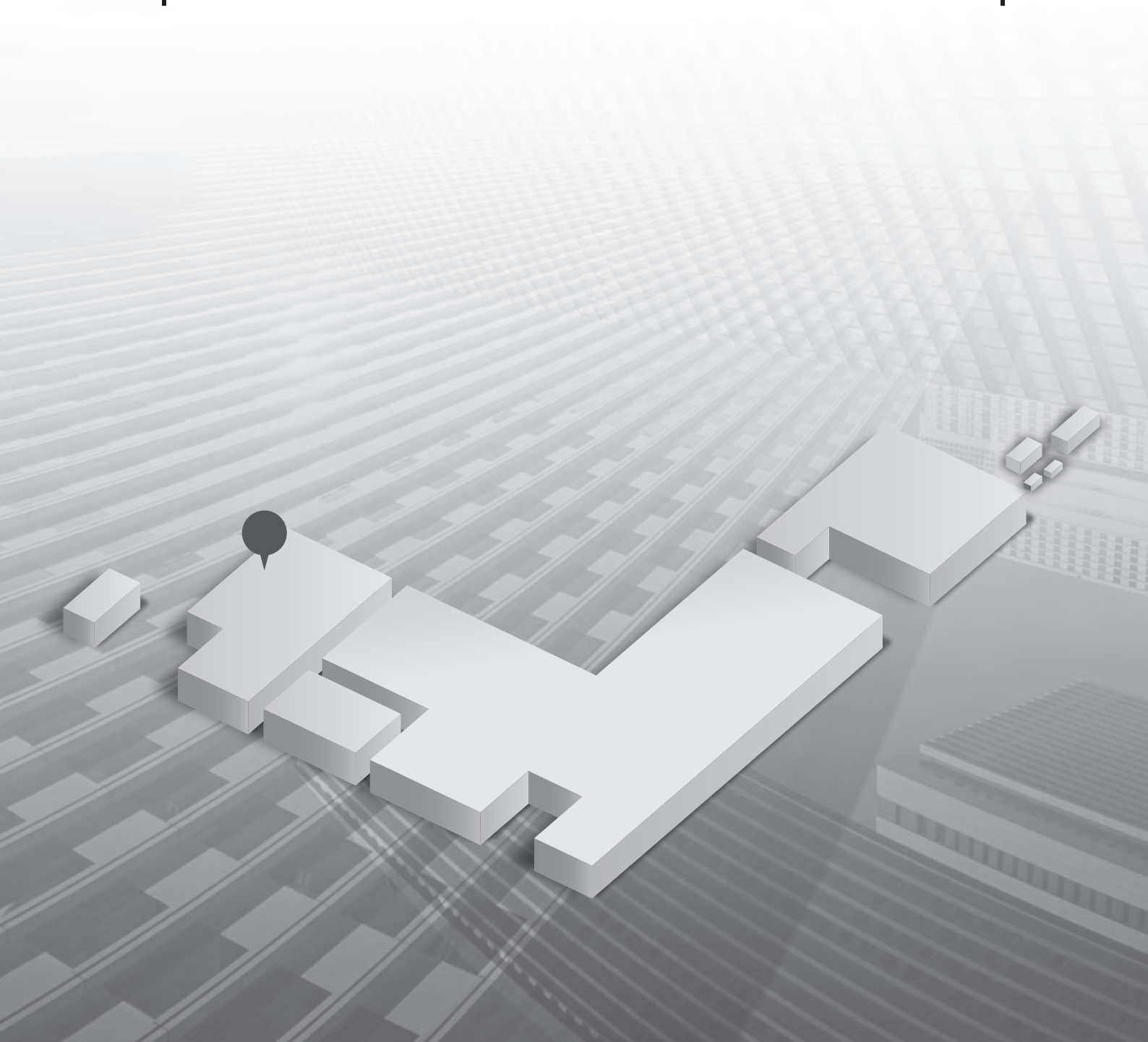
YouTube 人権チャンネル

人権シンポジウム in 神戸の模様は、YouTube人権チャンネルにおいて、動画を配信した。
https://www.youtube.com/jinkenchannel



シンポジウム報告

長崎会場



会場結果報告

【名　　称】　人権シンポジウム in 長崎

【地域テーマ】　子どもと人権 〜いじめ・体罰・虐待のない社会を目指して〜

【日　　時】　2014（平成26）年1月26日（日）　13：30 〜 17：30

【会　　場】　チトセピアホール
（長崎県長崎市千歳町5－1　チトセピアビル2F）

【来 場 者 数】　112人

【主　　催】　法務省、全国人権擁護委員連合会
長崎地方法務局、長崎県人権擁護委員連合会
公益財団法人人権教育啓発推進センター

【後　　援】　長崎県、長崎市、長崎県市長会、長崎県町村会、長崎新聞社、西日本新聞社、朝日新聞社、毎日新聞社長崎支局、読売新聞西部本社、産経新聞社西部本部、日本経済新聞社長崎支局、共同通信社長崎支局、時事通信社長崎総局、NHK長崎放送局、NIB長崎国際テレビ、NBC長崎放送、KTNテレビ長崎、NCC長崎文化放送、エフエム長崎

プログラム

13：30～13：35

主催者挨拶　　藤田　進（長崎地方法務局長）

13：35～15：00

第１部　　シンポジウム「子どもと人権 ～いじめ・体罰・虐待のない社会を目指して～」

＜パネリストによる基調報告＞

■パネリスト

小森美登里（特定非営利活動法人ジェントルハートプロジェクト理事、滋賀県いじめ対策研究チーム

菅原　哲朗（弁護士、日本体育協会国民体育大会委員会委員、国立スポーツ科学センター倫理審査委員）

山口由美子（親の会「ほっとケーキ」代表、子どもの居場所「ハッピービバーク」代表）

吉田　恒雄（駿河台大学法学部教授、特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク理事長）

■コーディネーター

横田　洋三（法務省特別顧問、国際労働機関（ILO）条約勧告適用専門家委員会委員、公益財団法人人権教育啓発推進センター理事長、元・国連人権促進保護小委員会委員）

15：00～15：15　　～休憩15分～

15：15～16：20

＜パネルディスカッション＞

（会場からの質問を中心にコーディネーター主導による自由討議）

16：20～16：30　　～休憩10分～

16：30～17：30

第2部　　講演（トークショー）

「いじめを乗り越えた 子どもの明日はすばらしい！」

志茂田景樹（よい子に読み聞かせ隊隊長、作家）

主催者挨拶

長崎地方法務局長
藤　田　　進

本日は、お忙しい中、多数の皆様に御来場いただきまして、誠にありがとうございます。

本日、子どもと人権をテーマとする人権シンポジウムが、ここ長崎市におきまして開催されるという機会を得ましたことを、大変喜ばしく思っております。

さて、現在、子どもたちの間には、いじめ、体罰、児童虐待などの様々な問題が生じており、このような問題に直面した子どもたちは、不登校やひきこもり状態になったり、最悪の場合、自ら命を絶つケースもあります。また、平成24年8月に内閣府が実施した「人権に関する世論調査」によると、子どもに生じていると思う人権問題の種類について複数回答で聞いたところ、「いじめを受けること」を挙げた方の割合が76．2％と最も多く、以下、「虐待を受けること」が61．0％、「いじめ、体罰や虐待を見て見ぬふりをすること」が55．8％でこれに続くという結果となっています。

このような中、全国の法務局、地方法務局及び人権擁護委員を中心とする法務省の人権擁護機関では、啓発活動の中でも、特に強調して啓発すべき課題として、「子どもの人権を守ろう」を含む、17の課題を掲げ、学校、地域社会、職場など様々な場面を通じて、各種の啓発活動に取り組んでいます。また、このような活動を通じて、人権侵害の疑いのある事案を認知した場合には、被害者の救済のため、速やかな対応をすることとしています。

本日の人権シンポジウムのテーマは、「子どもと人権～いじめ・体罰・虐待のない社会を目指して～」です。子どもたちが直面している問題に取り組む専門家を招き、人権的観点から議論いただくことにより、次代を担う子どもたちの健やかな育成のために、私たちに何ができるのかを考えていただきたい、との思いから、このテーマを選定いたしました。

本日のシンポジウムにおけるパネリストは、いじめ、児童虐待、体罰、不登校等の問題に関わる学識経験者･実務者であり、いずれもこれらの問題に造詣の深い方々です。また、シンポジウムに引き続き作家の志茂田景樹さんのトークショーも予定しており、童話の読み聞かせボランティアやtwitterによる人生相談における御自身の体験談等について語っていただくこととしております。どうか最後まで御参加いただき、「子どもと人権」という大切なテーマについて改めて考えていただければと思います。

なお、本日のシンポジウムの模様は、後日、インターネット上のYouTubeの人権チャンネルなどに掲載することを予定しています。更に多くの皆様に、本シンポジウムの内容を共有していただきたいと思っておりますので、本日この会場にお集まりいただけなかった方にも、是非お伝えいただきますようお願いいたします。

最後になりますが、本日のシンポジウム開催につきまして、各方面から賜りました多大の御支援、御協力に対し、心から感謝申し上げ、私の挨拶といたします。

長崎会場



広報用チラシ

受付風景





長崎地方法務局、長崎県が作成したパネル及び全国の地方自治体等が作成した人権啓発資料の展示(エントランスホール)

第1部　シンポジウム



会場風景

コーディネーター
横田洋三さん





パネリスト 小森美登里さん



パネリスト 菅原哲朗さん



パネリスト 山口由美子さん



パネリスト 吉田恒雄さん

第2部　講演・トークショー



志茂田景樹さん



長崎会場

登壇者プロフィール



第１部
シンポジウム「子どもと人権 〜いじめ・体罰・虐待のない社会を目指して〜」



パネリスト

小森　美登里（こもり　みどり）

特定非営利活動法人ジェントルハートプロジェクト理事
滋賀県いじめ対策研究チーム会議委員
元・文部科学省いじめ問題アドバイザー

2003（平成15）年3月　特定非営利活動法人ジェントルハートプロジェクト設立、理事

私の一人娘、香澄は1998年7月27日いじめにより自死しました。
今、子ども達の世界にどうして多くのいじめが存在しているのでしょう?いじめる側といじめられる側、そして傍観している人。誰もがどの立場にもなりえます。子どもたちは「いつ自分が標的になるか」と怯え、緊張した学校生活を送っています。親もまた、ある日突然、被害者の、加害者の、傍観者の親になる可能性があります。
この「いじめ」という大きな社会問題に、第三者は誰一人としていないのです。
決して切り離すことが出来ない「こころ」と「いのち」。この二つの大切さを私たち大人は子どもにきちんと伝えているでしょうか。
人は皆、幸せになる権利を持って生まれてきているはずです。粗末に扱われてよい命など、一つもありません。
「やさしい心が一番大切だよ。」は、いじめに苦しんだ香澄が亡くなる数日前に残した言葉です。この問題を皆さんと一緒に考えていきたいと思います。（小森美登里）

【主な著書】

「いじめのない教室をつくろう―600校の先生と23万人の子どもが教えてくれた解決策―」（WAVE出版）
「いじめの中で生きるあなたへ―大人から伝えたい「ごめんね」のメッセージ―」（WAVE出版）
「わが子のいじめ自殺でわかった今、子どもたちと教師に起きている本当のこと」（WAVE出版）

○特定非営利活動法人ジェントルハートプロジェクト
http://npo-ghp.or.jp



パネリスト

菅原　哲朗（すがわら　てつろう）

弁護士
日本体育協会国民体育大会委員会委員
国立スポーツ科学センター倫理審査委員

1975（昭和50）年4月	日本弁護士連合会弁護士登録、第二東京弁護士会弁護士登録　弁護士開業
1999（平成11）年	文部大臣表彰（社会教育法施行50周年記念社会教育功労者）
2000（平成12）年8月	中国大連市外国法弁護士事務所開設
2012（平成24）年4月	独立行政法人国立国際医療研究センター理事
現　在	キーストーン法律事務所代表　　http://www.keystone-law.jp/

役職は、日本弁護士連合会スポーツ法プロジェクトチーム幹事、第二東京弁護士会法政策研究会代表幹事、日本スポーツ仲裁機構顧問、日本スポーツ法学会元会長、日本スポーツ法学会スポーツ法検討専門研究会委員長、日本スポーツ少年団前常任委員、公益法人日本体育協会国民体育大会委員、同医事部会委員、国立スポーツ科学センター倫理審査委員、中国北京交通大学客員教授、日中法務交流・協力日本機構理事、独立行政法人国立国際医療研究センター理事を務める。

スポーツ法においては、2011（平成23）年8月24日施行された「スポーツ基本法」の解説、スポーツ指導者やスポーツドクターへの教育講演、アンチ・ドーピングを説いてスポーツ医科学倫理審査なども積極的に扱っている。

大相撲については、「ガバナンス（組織統治能力）の整備に関する独立委員会」のメンバーであり、国民体育大会については、「国民体育大会の参加資格に関する第三者委員会（聴聞会）」の議長代行であった。

医療法においては、医師向けに病院や医師への個人的な賠償請求の現況、スポーツドクター・整形外科・小児科医など医師をとりまく保険賠償のさまざまな問題を取り上げ、訴訟事件の豊富な経験から、2003（平成15）年11月・日本臨床スポーツ医学会学術集会教育講演「スポーツ法学から見た医療訴訟」、2004（平成16）年11月・第103回中部日本整形外科学会特別講演「整形外科医師をとりまく保険賠償の諸問題」及び日体協でのスポーツドクターへの講演、(社)日本口腔インプラント学会基礎系指導者として歯科医師へのインプラント治療に関する医療過誤訴訟の実務を指導している。

講演講師は、ジュニアスポーツ法律アドバイザー弁護士としてスポーツ少年団育成指導員への講演、スポーツ・青少年局主催:2001（平成13）年9月･スクールヘルスリーダー全国連絡協議会「学校スポーツ事故の法的危機管理」、2011（平成23）年7月・全国学校保健・養護教諭主事会講演など、2012（平成24）年2月・生涯スポーツ・体力つくり全国会議2012（文科省）、全国のスポーツ団体、地方自治体が主催するスポーツ指導者、養護教諭への講演会における、親しみにくい法律をスポーツルールとして噛み砕いた「法リスクマネジメント」講座が分かりやすく好評である。

【主な著書】
「スポーツにおける真の勝利―暴力に頼らない指導」(編集代表：菅原哲朗・望月浩一郎)（エイデル研究所）
「詳解スポーツ基本法」（共著）（成文堂）
「スポーツ法への招待」（共著）（ミネルヴァ書房）
月刊健康教室「学校スポーツ事故の救急措置と法的諸問題」（東山書房）2010年4月～2011年3月雑誌連載
「スポーツ法危機管理学」（エイデル出版）
「スポーツの法律相談』（共著）（青林書院）
「臨床スポーツ医学（スポーツ医の役割と法的責任）」（共著）（文光堂）
「少年スポーツ指導者の法律相談―スポーツ事故に備える知識Q＆A」菅原哲朗（著）／日本体育協会日本スポーツ少年団（編集）（大修館書店）　　ほか共著及び講演多数



パネリスト

山口　由美子（やまぐち　ゆみこ）

親の会「ほっとケーキ」代表
子どもの居場所「ハッピービバーク」代表

1970（昭和45）年～	中牟田洋裁専門学院教員（1977年まで）
2000（平成12）年	西鉄高速バスジャック事件に遭遇し、重傷を負う 参議院法務委員会において少年法厳罰化反対の立場で意見を述べる
2001（平成13）年	親の会「ほっとケーキ」を仲間と共に立ち上げ、代表となる
2002（平成14）年	親の会を母体に、不登校の子どものための居場所「ハッピービバーク」開設
2006（平成18）年～	佐賀少年刑務所に「被害者の視点に立った教育」で、月一回講話 小・中学校に於いて保護者向け講演会、人権・同和問題についての講演会等

○親の会「ほっとケーキ」　http://www1.bbiq.jp/hp_hotcake/

○子どもの居場所「ハッピービバーク」
http://www1.bbiq.jp/hp_hotcake/hb/



パネリスト

吉田　恒雄（よしだ　つねお）

駿河台大学法学部教授
特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク理事長

1981（昭和56）年～　明星大学教授
1994（平成 6）年～　駿河台大学法学部教授
1996（平成 8）年～　駿河台大学法学研究科教授
1980（昭和55）年～　早稲田大学講師を兼任
2007（平成19）年～　特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク理事長

【主な著書】
「児童虐待への介入―その制度と法―」（編著）（尚学社）
「親族法・相続法」（共著）（尚学社）
「子どもオンブズパーソン」（共編著）（日本評論社）
「児童虐待防止法制度―改正の課題と方向性」（編著）（尚学社）　ほか

○特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク
http://www.orangeribbon.jp/zenkokunet/



コーディネーター

横田　洋三（よこた　ようぞう）

法務省特別顧問
国際労働機関（ILO）条約勧告適用専門家委員会委員
公益財団法人人権教育啓発推進センター理事長
元・国連人権促進保護小委員会委員

1969年　国際基督教大学教養学部専任講師
1971年　国際基督教大学教養学部助教授
1974年　世界銀行法務部法律顧問
1979年　国際基督教大学教養学部教授
1983年　アデレード大学客員教授
1984年　コロンビア大学客員教授
1988年　国連差別防止及び少数者保護小委員会代理委員
1991年　国連人権委員会ミャンマー担当特別報告者（1996年まで）
1995年　東京大学法学部・大学院法学政治学研究科教授
2000年　国連人権促進保護小委員会委員
2001年　中央大学法学部教授、国連大学学長特別顧問
2003年　ILO条約勧告適用専門家委員会委員
2004年　中央大学法科大学院教授
2006年　財団法人人権教育啓発推進センター理事長
2010年　ILO条約勧告適用専門家委員会委員長（2013年6月まで、同年7月からは委員）
2012年　公益財団法人人権教育啓発推進センター理事長

◆主な担当分野　国際法、国際機構論、国際人権法、国際経済法

◆研究テーマ　国際経済法と国際公共政策、国際機構法の体系的研究、国際人権法の強行法規性

【主な著書】
「歴史はいかに書かれるべきか」（翻訳）（講談社学術文庫）
「二〇世紀と国際機構」（国際関係基礎研究所）
「日本の国際法事例研究（1）～（5）」（共著）（慶應義塾大学出版会）
「新版国際機構論」（共著）（国際書院）
「国連再生のシナリオ」（共訳）（国際書院）
「国連の可能性と限界」（共訳）（国際書院）
「国際法入門」（共著）（有斐閣）
「国際組織法」（共著）（有斐閣）
「国際機構の法構造」（国際書院）
「日本の人権／世界の人権」（不磨書房）　ほか

第２部
講演（トークショー）「いじめを乗り越えた 子どもの明日はすばらしい！」



志茂田　景樹（しもだ　かげき）

よい子に読み聞かせ隊隊長
作家

2013年 4月	「よい子に読み聞かせ隊」の読み聞かせ公演が1,600回に達する
2011年 2月	志茂田景樹著『蒼翼の獅子たち』を元にした映画「学校をつくろう」が公開される
2006年12月	「よい子に読み聞かせ隊」の読み聞かせ公演が1000回に達する
2003年 4月	帝京短大客員教授となる。
2003年	絵本「ぞうのこどもがみたゆめ」をホームページにて公開
2002年12月	「よい子に読み聞かせ隊」の読み聞かせ公演が500回に達する
2002年	絵本「つきとはくちょうのこ」をホームページにて公開
2001年	絵本「ひかりのにじゅうまる」をホームページにて公開
1999年 9月	「よい子に読み聞かせ隊の絵本シリーズ」刊行開始
1999年 8月	初の原作･絵本「つきとはくちょうのこ」発表
1998年11月	「よい子に読み聞かせ隊」を結成、隊長となる
1996年11月	九州福岡市の書店「リーブル天神」で、初の読み聞かせを行なう
1995年　春	（株）志茂田景樹事務所内に、出版部門 KIBA BOOK創立／オリジナル著作400冊を突破
1994年10月	阪神大震災1年間義援金ツアーを始める
1994年 4月	第13回「日本文芸家クラブ特別大賞」を受賞
1994年 4月	日本テレビ「横浜心中」に初のレギュラードラマ出演
1991年12月	「鳥居ユキ・93 ～ 94秋冬東京コレクション」にモデル出演
1991年10月	「ソードワード 」でＴＶCM初進出
1990年10月	「笑っていいとも」でバラエティー番組にレギュラー初出演
1986年 4月	原作の「それゆけ孔雀警視」でＴＶドラマ初出演、「元気が出るＴＶ」などバラエティー番組に多く出演
1984年12月	コメンテーターとしてＴＶワイドショーに初登場
1984年 5月	原作の映画「制覇」（東映）に特別出演
1981年10月	「汽笛一声」で第４回文芸大賞受賞
1980年 7月	山本寛斉ファッションショー「元気主義」にモデルとして出演
1976年 9月	「やっとこ探偵」が第27回小説現代新人賞を受賞、作家活動をスタートさのこどもがみたゆめ」（志茂田 景樹 (著)・柴崎 るり子 (イラスト)）KIBA BOOK ／ 2001年　　ほか

【主な著書】
「人生は、もっと簡単にうまくいく ～カゲーキフの61 の教え」（宝島社）
「キリンがくる日」（志茂田景樹（著）・木島誠悟（イラスト））（ポプラ社）
「ぼくらの街にキリンがやってくる チャイルズエンジェル450 日の軌跡」（ポプラ社）
「きっとうまくいく 人生、今が出発点」（ナツメ社 ）
「失敗したって、いいんだよ ～希望をつくる40 の言葉～」（青志社）
「人って、みな最初は石ころだもの」（ポプラ社）
「自信をつくる。働く君へ贈るカゲキの檄文」（ベストセラーズ ）
「黄色い牙」（KIBA BOOK）
「まんねんくじら」（KIBA BOOK）
「ぽんちとちりん」（志茂田 景樹（著）・藤井 智子（イラスト））（KIBA BOOK）
「ぞうのこどもがみたゆめ」（志茂田 景樹（著）・柴崎 るり子（イラスト）（KIBA BOOK）

長崎会場

レジュメ



レジュメ　小　森　美登里

いじめの現状とその対応

小 森　美 登 里
特定非営利活動法人ジェントルハートプロジェクト理事
滋賀県いじめ対策研究チーム会議委員
元・文部科学省いじめ問題アドバイザー

- 大人に相談出来ない子どもたちの心理とは
- いじめられる子にも原因はあるのか
- 傍観者は加害者か
- 心と命について、子ども達と一緒に考えよう！

レジュメ

菅　原　哲　朗

演　者　紹　介





菅原　哲朗（すがわら　てつろう）
キーストーン法律事務所代表弁護士
Tetsuro Sugawara, Attorney at Law

第二東京弁護士会スポーツ法政策研究会代表幹事
国民体育大会委員・日本スポーツ法学会元会長
（独立行政法人）国立国際医療研究センター理事

スポーツと法の視点から、「少年スポーツ指導者の法律相談」、「スポーツ法危機管理学」などを執筆

2014年1月26日

スポーツと体罰

・・・体罰・暴力行為等の根絶をめざしたスポーツ指導について

キーストーン法律事務所
弁護士　菅原　哲朗

目　次

- 第1章　スポーツ少年団の標語（小さな危険と大きな安全）
- 第2章　スポーツ暴力事件
- 第3章　体罰判例の動向
- 第4章　まとめ（日本スポーツ法学会の活動）

第1章　スポーツ少年団の標語
（小さな危険と大きな安全）

スポーツ競技・・・楽しいが、ケガをする危険がある。






安　全　配　慮　義　務

- 人の故意・過失責任としてスポーツ指導やスポーツ施設を利用するにあたって安全配慮義務を尽くしたか、どうかが責任問題なる。



スキーヤーの衝突事故

学生A：小回りターン、主婦Bさん大回りターン、激突しBさん大けが。

＜札幌高等裁判所の判断＞

- 「スキー場での滑走には相当の危険を伴うものである。したがってスキー滑走を行う者にはそれぞれにそのような危険を回避する注意義務がある。
- その一方，スキーは，レクリエーションにとどまらず，スポーツとしての側面が大きく，特に高度の技術を駆使する上級者の滑走に際してはそのような危険が常に随伴することを承知の上で滑走しているものと解すべきである。



スキーヤーの衝突事故

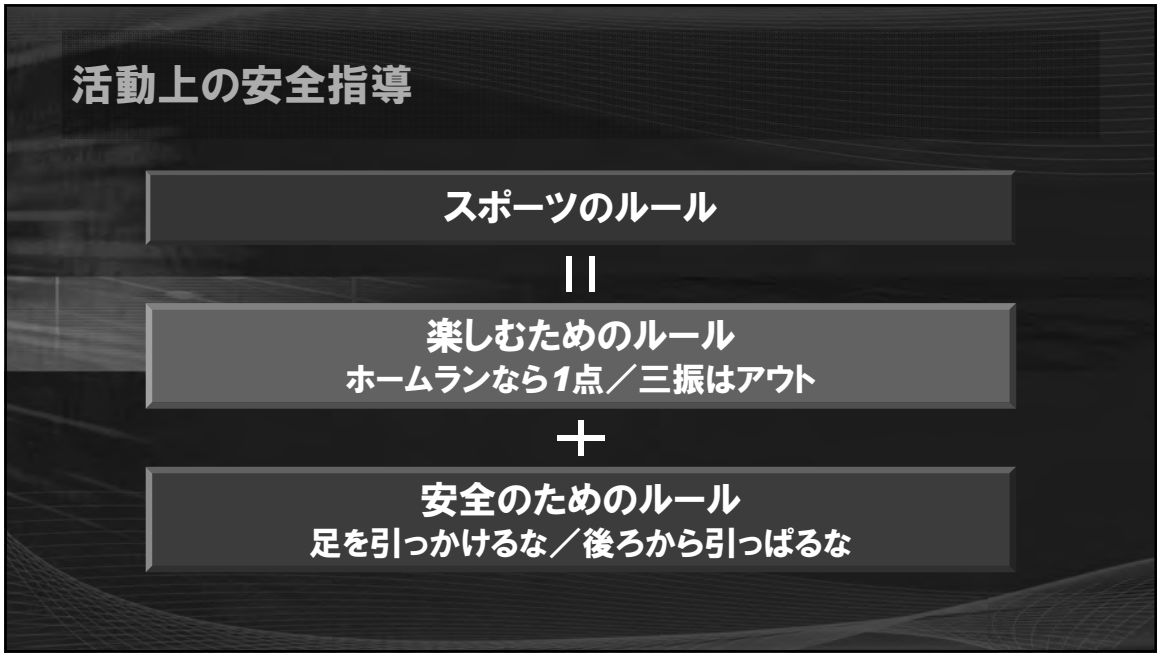
学生A：小回りターン、主婦Bさん大回りターン、激突しBさん大けが。

＜札幌高等裁判所の判断＞

- とすれば，スキーの滑走がルールや，当該スキー場の規則に違反せず，一般的に認知されているマナーに従ったものであるならば，他の滑走中に傷害を与えるようなことがあっても，それは原則として注意義務の違反と目すべきものではなく，また行為に違法性がないと解するのが相当である。」




違法性
ルールに基づいてプレイする限り
正当行為説
相手への加害が起きても正当行為とされる
違法性阻却説
相手に障害を負わせても違法性がないとされる
危険引受説
競技者仲間からの障害による危険を互いに引き受けていることになる
加害行為の承諾説
その障害が予測される動作によるものに限って、違法性はないとされる


活動上の安全指導
スポーツのルール
＝
楽しむためのルール
ホームランなら1点／三振はアウト
＋
安全のためのルール
足を引っかけるな／後ろから引っぱるな

スキーヤーの衝突事故の訴訟

（最判平成7年3月10日判例時報1526号99頁）

しかし最高裁判例は，

- 現地のバーンは、学生Aが主婦Bさんを見通すことが可能と責任を負わせた。
- スキー場を上方から滑降するスキーヤーには，
- 下方を滑走するスキーヤーの動静に注意して，接触・衝突を回避できるよう速度・進路を選択してスキーをなす注意義務がある

と判断した。



事故（つまり　過失）の責任問題

過失＝注意義務違反

予見可能性

回避可能性

小学校でのサッカー事故

大分地裁昭和60年5月13日（判例時報1184号102頁）

- 別府市立小学校5年生の生徒が、体育の授業でサッカー競技中、他の女子生徒が蹴ったボールが左眼に当たって失明し、担当教師の法的責任が問われた事件で次の通り述べている。

- 安全に関する環境を形成するのは、人と人の信頼関係である。
- 「危険の存在が、体育授業に参加する児童に危険予知やその回避能力を養成し社会生活上必要なものを体得するという児童の体育授業の意義や効用に寄与するものというべきである。」「（児童の体育といっても、すべてなにがしかの危険の存在は避け難く、安全性が完全に保障されているわけではなく事故の発生を完全に防止できるとは限らない）」

小学校でのサッカー事故

大分地裁昭和60年5月13日（判例時報1184号102頁）

- 「サッカーゲームは相手ゴールポストに向けてボールを蹴ることがゲームの基本的な事柄であるから、ボールを蹴返すことも絶えず反復されるプレーであり、この場合ボールのコントロールが悪く、そこに駆け寄った相手方児童にボールが当たることもよく起こり易い事態である。」
- 「危険が存するからといって、ボールを蹴返すことを禁じるとすれば、サッカー・ゲームはなりたたない」



小学校でのサッカー事故

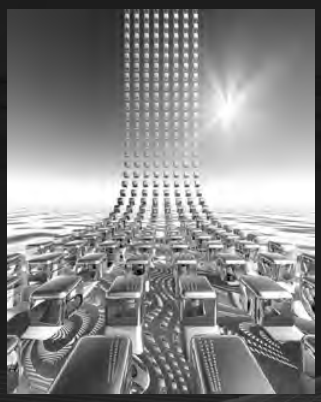
大分地裁昭和60年5月13日（判例時報1184号102頁）

- つまり判例は、子どものスポーツ活動において危険を知り、それを回避する能力を高めることが社会に役立つスポーツの有用性と認めているのである。
- スポーツには楽しみだけでなくこの有用性があるから危険が許されているのだと、ルールに従ってスポーツをする限り、社会的に正当な行為と判断している。



スポーツ少年団の善意の無償活動（ボランティア）

- スポーツ少年団のボランティア指導者が、様々な成長段階、様々な個性を持つ少年少女達に、スポーツを通じて創造力ある自主性に富んだ健全な心身を教育しようという「善意の無償活動」であっても、ひとたび事故が発生すれば社会的・法的責任が問われることになる。



＜事故防止・安全確保のための6の指針＞

- ①子供にスポーツルールを守ることを教えよう。（安全指導）
- ②絶対に子供にケガをさせない心構えをもった活動計画の立案と実行をしよう。（安全管理）。
- ③危険を感じたらすぐに安全対策に立ち上がろう。
- ④最悪を想定し，活動の中止を恐れない。
- ⑤地域の実情に応じた安全指導マニュアルを創り上げよう。
- ⑥保険に加入しよう。



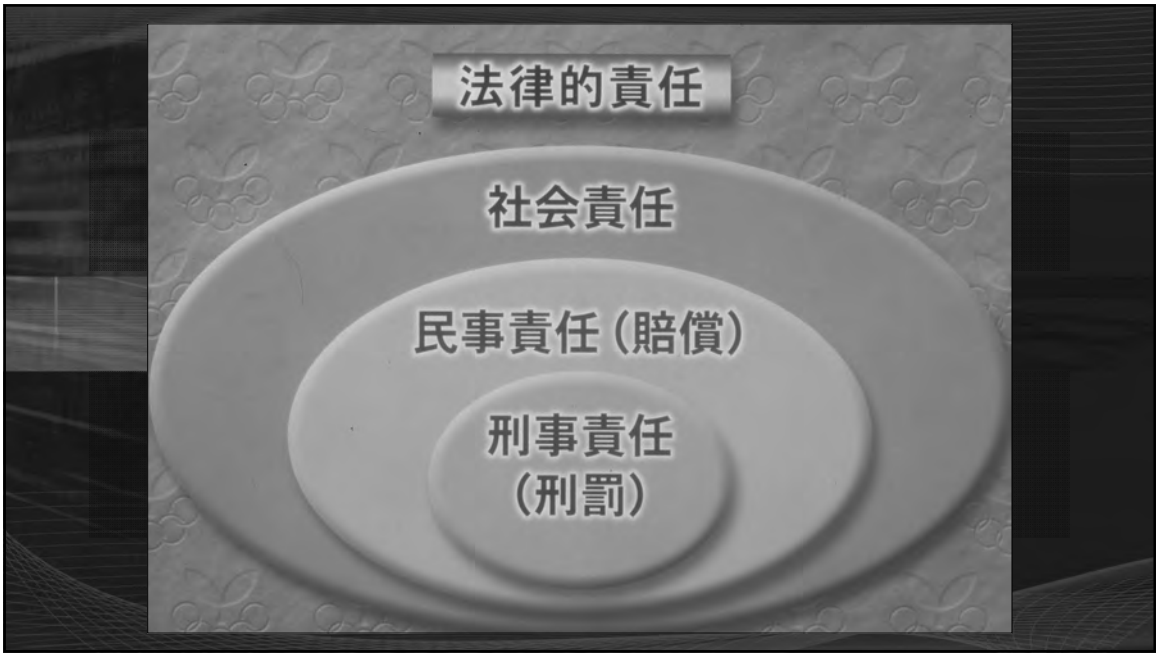
スポーツ体罰の生まれる日本の土壌

- ロンドンオリンピック代表を含む女子柔道の国際試合強化選手15名が、暴力の実態を把握しながら対処しない全柔連には自浄能力がないと2013年1月29日、全日本女子ナショナルチーム監督である園田隆二を始めとした指導者の暴力行為やパワーハラスメントを訴えていたことが発覚した。
- 暴力の内容としては、竹刀で背中や尻を叩いたり、頭部にゲンコツ、顔面に平手打ちを食らわせる。髪の毛を鷲づかみにしながら「お前なんか柔道やってなかったら、ただのブタだ」、「死ね」などといった暴言も合わせて浴びせていたことが分かり、柔道の創始者である嘉納治五郎の柔道精神と理念に反し、同年2月1日に園田は暴力行為を認めて謝罪し監督を辞任した。

故意と過失

- スポーツにおける故意と過失はどの場面で生ずるのか？
- 体罰事件が多数報道され、顕在化するまで、体罰問題はスポーツ界の無意識下にあり、「　故意　」の事例は考慮外だった。





高校の部活動（バスケットボール部）で起こった 2012年12月桜宮高校体罰事件

- バスケットボール部主将が自殺した。
- 体罰が情熱的で効果のある指導と誤解され，体罰が容認される、という雰囲気が学校内で醸成されてきたと考えられる。
- 体罰は，指導が通らないことについての教師の苛立ちに基づく，指導ともいえない理由での単純な暴力というべきものがほとんどである。
- このように，部活動での体罰は先輩から後輩へと悪習慣として受け継がれていき，その連鎖を止めることが容易ではない。



スポーツ体罰の生まれる日本の土壌

教師も親も「子どもの躾」と「スポーツ指導」は別だ、と理解していない。

- 怒りの感情むき出しの「叱る・怒る」（さらには暴言・暴力の体罰）には、子どもをスポーツ嫌いにさせる効果はあっても、スポーツの楽しさを味あわせることはない。

スポーツは身体活動の遊びだが「生きる勇気と喜び」を与える。

- しかし、現実には優勝を目指す監督・顧問・コーチの多くが「スポーツ体罰」に効果があると信じ、新聞テレビの暴力事件のマスコミ報道がされている。

顧問を務めていた元教諭をかばう声

バスケットボール部顧問教諭を「熱血漢」としてかばう、教え子、保護者もいる。

- （1）手を上げることもあるけれど、ちゃんとフォローしてくれた。
- （2）暴力のための暴力ではなかった。
- （3）また遠くから通学している子には、奥さんに弁当を作らせ、それを配ったりもしていたと聞く。
- （4）マスコミは顧問教諭を一方的に叩きすぎ。
- （5）スポーツの世界をわかっていない。

処分経過

＜ 大阪市教育委員会 ＞

平成25年

- 2月　　・・・顧問を務めていた元教諭を懲戒免職。
- 3月　　・・・校長・教頭を停職。
- 5月28日　・・・教育長と教育次長を戒告処分。

「（理由の概要）外部からの体罰情報をいかせず、未然に防げなかった」

＜ 大阪地方検察庁 ＞

- 7月4日・・・顧問を務めていた元教諭を傷害罪と暴行罪で、在宅起訴。元教諭は容疑を認めている。

「（書類送検の報道）元教諭は生徒の顔や頭を平手で十数回なぐり、口の内部に全治2ないし3週間のけがを負わせた」

判決（刑事事件）

傷害と暴行の罪に問われていた元教諭の小村基被告（懲戒免職）に対し

☆　大阪地方裁判所は平成25年9月26日

懲役1年、執行猶予3年の判決を言い渡した。

☆　学校内は「体罰」と語られるが、暴力は学校外では「暴行・傷害罪」と司法が断罪した。

体罰は故意である。

つまり、体罰でケガをさせたら、刑法の罪に問われる。

- 刑法204条（傷害罪）人の身体を傷害した者は、15年以下の懲役又は50万円以下の罰金に処する。
- 刑法205条（傷害致死罪）身体を傷害し、よって人を死亡させた者は、3年以上の有期懲役に処する。



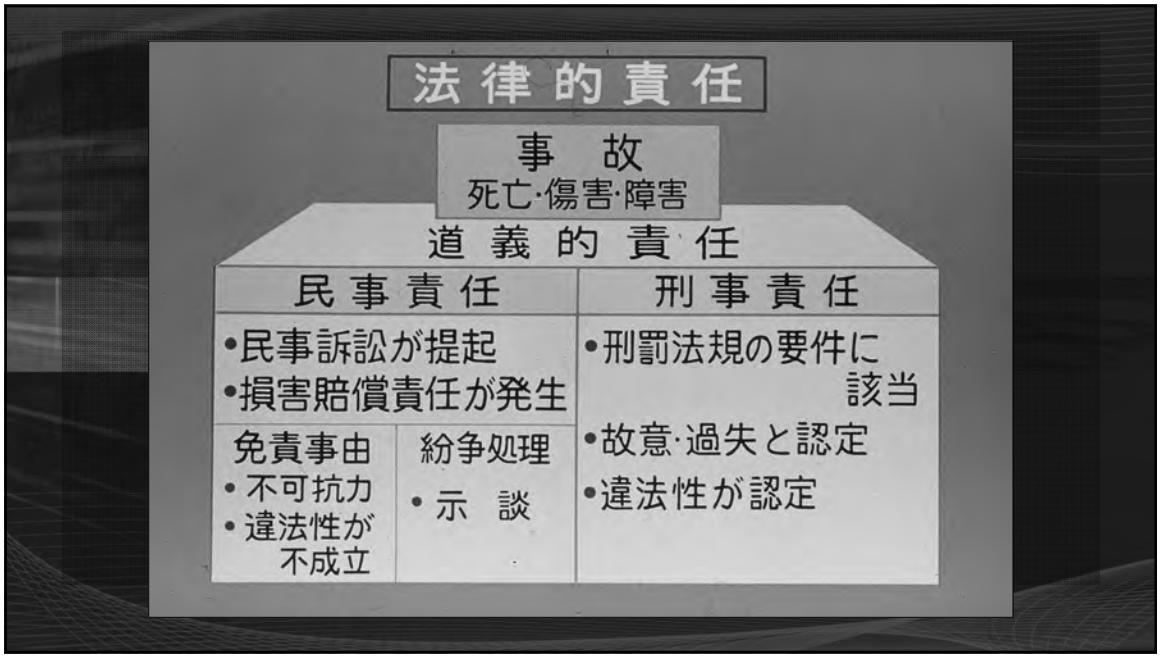
学校教育法　第11条（体罰の禁止）

- 校長及び教員は、教育上必要があると認めるときは、文部科学大臣の定めるところにより、児童、生徒及び学生に懲戒を加えることができる。
- ただし、体罰を加えることはできない。



体罰は故意である。

- 法律で禁じられている以上、「よい体罰、悪い体罰」はない。
- 刑法208条（暴行罪）暴行を加えた者が人を傷害するに至らなかったときは、2年以下の懲役若しくは30万円以下の罰金又は拘留若しくは科料に処する。
- 愛情・熱意があっても体罰は刑法の暴行行為に該当する。
- スポーツの場面で殴る・蹴るなどの暴力や暴言に頼るのは、指導者コーチの指導力のない証拠だ。
- 顧問と生徒との間にいかなる信頼関係があっても、どの様な形の体罰もあってはならない。


法律的責任
事　故
死亡·傷害·障害
道義的責任
民事責任
刑事責任
•民事訴訟が提起
•損害賠償責任が発生
•刑罰法規の要件に該当
•故意·過失と認定
•違法性が認定
免責事由
• 不可抗力
• 違法性が不成立
紛争処理
• 示　談


第3章　体罰判例の動向

①教員でサッカー部の部長から体罰の不法行為を受けた判例

鹿児島地方裁判所平成24年1月12日判決

X君（高校1年）　＜―・・・・・―＞　Yら（学校法人）

- 高校サッカー部に所属していたX君が教員でサッカー部の部長の被告から体罰等の不法行為を受けたと主張し，慰謝料を求めた事案

【裁判所の結論】…165万円を支払え。

X君の腹や胸の辺りを五，六回蹴りつけたこと等の行為は、学校教育法によって禁止されている「体罰」に該当し、故意による不法行為に該当するとした。

Keystone Law Office

①教員でサッカー部の部長から体罰の不法行為を受けた判例

＜判例要旨＞

- 原告X君は，被告学園高等部の寮に入って生活をしており、被告Y教師は，その寮の寮監を務めていた。
- 高校サッカー部のYが、1年生キャプテンX君に対して他の1年生部員の数名が寮に帰らず寄り道をしたことを理由に腹や胸のあたりを5～6回蹴りつけた。
- またノートを提出せず顔を洗わず朝食会場に来た1年生がいるということで他の生徒の代表と称して1年生キャプテンのX君の顔を濡れタオルで数回はたき、練習の際にミスをしたことからグラウンドから出るように命じたが、これに応じないと外へ連れ出し、お菓子を投げつけ、下半身を10回以上蹴り続けた各行為について、裁判所は、体罰に該当し，故意による不法行為であるとして、165万円の損害賠償を認めた。

Keystone Law Office

②県立高校陸上部の顧問教諭の体罰
女子高校生が自殺

岐阜地方裁判所平成5年9月6日判決判タ851号170頁

X父母（Aさん）　＜―・・・・・―＞　Yら（県立高校）

- X1とX2の子Aは、昭和58年4月、Y1の設置する県立高校に入学し、陸上競技部に所属して、保健体育担当教諭Y2の指導の下に毎日やり投げの練習に励み、県高校選手権大会で優勝するなどして活躍していた。
- 昭和60年3月23日早朝、Y2の過酷な練習、暴力・暴言等に耐えかね、自宅の自分の部屋で首をつって自殺するに至った。

高校設置管理者の国家賠償責任が認められた事例

【裁判所の結論】・・・精神的損害に対する慰謝料として300万円を支払うよう命ずる。

Keystone Law Office

②県立高校陸上部の顧問教諭の体罰
女子高校生が自殺

- 教諭Y2がAさんの頭部を竹の棒で数回殴打したこと、やりで頭部を腫れるほど殴打したこと、顔面を殴打し大腿部を強く蹴ったことなどは、明らかに違法な体罰である。
- 長時間土下座ないし起立させたまま行った説諭は違法な身体的拘束であるほか、侮辱的発言も違法な行為に該当するとして、Y1の国家賠償責任を肯定した。
- 本判決は、高校陸上部の指導教諭の生徒に対する体罰等について学校側の損害賠償責任を認めたが、右体罰と生徒の自殺との因果関係を否定した事例
- 教諭Y2については公務員個人の責任は問えないとし、その損害賠償責任を否定した。

Keystone Law Office

③　女子生徒に対する指導が刑事事件になった事例

福岡高裁平成8年6月25日判決判タ921号297頁

検察官　＜―・・・・・―＞　被告人（教師）

- 私立大学附属女子高校において、追試験を受ける必要のなかった生徒が必要なく教室にいたため教諭が教室から出そうとした際に、スカート丈が校則違反となっていることに気づき、これを注意したところ、口答えをしたことから、生徒の肩部付近を2回連続して力を込めて突き、更に右側頭部付近を突き上げるなどの暴行を加えたことによって生徒を傍らのコンクリート柱等に激突させ、その結果生徒を死亡させた事件

【裁判所の結論】
…判決は，傷害致死罪により懲役2年の有罪判決を下した（控訴審でも維持）

Keystone Law Office

③　女子生徒に対する指導が刑事事件になった事例

- 弁護人は、執行猶予付き判決を求めた。
- 本判決は、被告人が危険の大きい場所で怒りのあまり我を忘れて手加減を加えず、いきなり強い暴行を加えたこと、被告人は、日頃から体罰禁止は建前にすぎないと思って安易に力に頼る指導をしており、本件においても激怒に駆られて短絡的に暴行を加えた。
- 動機はもっぱら「私的な怒りの感情」に基づくこと、本件の結果が重大であること、本件が社会に与えた衝撃が大きいことなどの理由をあげ、被告人を懲役二年の実刑に処した（求刑懲役三年）。

Keystone Law Office

④私立高校野球部監督の暴行・強要罪

（懲役1年6月・執行猶予3年）

岡山地方裁判所倉敷支部平成19年3月23日判裁判所HP引用

野球部監督X ＜—・・・・・—＞ Y（私立高校）

① 野球部監督Xは部員間の暴力事件や掃除を怠ける部員に対し生活指導と称して部員2名の顔面を手拳で殴打した。
② Xの指示に従わないとして、部員11名を全裸でランニングさせるなど強要した。

【裁判所の結論】・・・Xを暴行罪と強要罪として懲役1年6月、執行猶予3年の有罪判決を下した。

Keystone Law Office

④学校という限られた社会の体罰
（暴行・強要罪で有罪）

- 野球部監督の暴行は教育的活動として節度を有しておらず、父母の賛同を得られない行き過ぎた行為で学校教育法の禁止する体罰である。
- 全裸ランニングは黙示の脅迫により、部員の畏怖状態で敢行され、生徒に嫌悪感を与え、尊厳を傷つけた。部員や父母の同意を到底得られない義務なき行為をなしたことは明らか。

Keystone Law Office

⑤公立小学校教員の懲戒行為の範囲
（体罰に該当しない）

最高裁判所第3小法廷判決（判例タイムズ1299号124頁）

X君（小学2年生）父母　＜―・・・・・―＞　Y（市）

- X君は小学2年生で悪ふざけをした。Y教師は追いかけ胸元をつかみ壁に押し当て、大声で「もう、すんなよ」と叱った。X君はPTSDになった。
- 国家賠償法1条1項に基づく損害賠償請求。

【裁判所の結論】・・・請求棄却。Y教師の懲戒行為は、学校教育法１１条但し書きにいう「体罰」に該せず、違法性はない。

Keystone Law Office

⑤ 最高裁平成21年4月28日第3小法廷判決（体罰ではない）

＜懲戒行為と認定＞

公立小学校の教員が、悪ふざけをした2年生の男子を追い掛けて捕まえ、その胸元を右手でつかんで壁に押し当て、大声で「もう、すんなよ。」と叱った行為。

男子が、休み時間に、通り掛かった女子数人を蹴った上、これを注意した上記教員のでん部付近を2回にわたって蹴って逃げ出したことから、このような悪ふざけをしないように指導するために行われたもの。

悪ふざけの罰として肉体的苦痛を与えるために行われたものではないなど

Keystone Law Office

⑤ 最高裁平成21年4月28日第3小法廷判決（体罰ではない）

＜最高裁判決の理解＞
その目的、態様、継続時間等から判断して、教員が児童に対して行うことが許される教育的指導の範囲を逸脱するものではなく、学校教育法11条但書にいう体罰に該当せず、国家賠償法上違法とはいえないと判決した。

ただし、本判決は、事例判断であって、一般的にこの程度までは体罰ではないとした裁判例ではないと解されるので、一般化して理解しないことが重要である。

Keystone Law Office

⑥教育的な指導と調査報告義務
女子児童が自殺

札幌地裁平成25年6月3日（判例時報2202号82頁）

X父母（Aさん） ＜—・・・・—＞ Yら（北海道・町立小学校）

- 北海道Y町立小学校5年の女子児童Aが、女性教諭Bの違法な指導により精神的な苦痛を被り自宅で自殺したとA子の父母Xが教師の責任を訴える。
- Y町および北海道に対し「真実解明調査・報告義務」を怠ったとして国家賠償法に基づき損害賠償を求めた事件である。

【裁判所の第1判断】
- 判決は、被告B教諭について、持ち物・忘れ物・ドリルのやり直し・アコーディオン練習等の指導は「小学校5年生に対するものとしてやや厳しい」しかし「指導による教育的効果を期待し得る合理的な範囲内のもので、正当な指導」と請求を棄却した。

Keystone Law Office

⑥教育的な指導と調査報告義務
女子児童が自殺

札幌地裁平成25年6月3日（判例時報2202号82頁）

X父母（Aさん）　＜―・・・・・―＞　Yら（北海道・町立小学校）

【裁判所の第2判断】

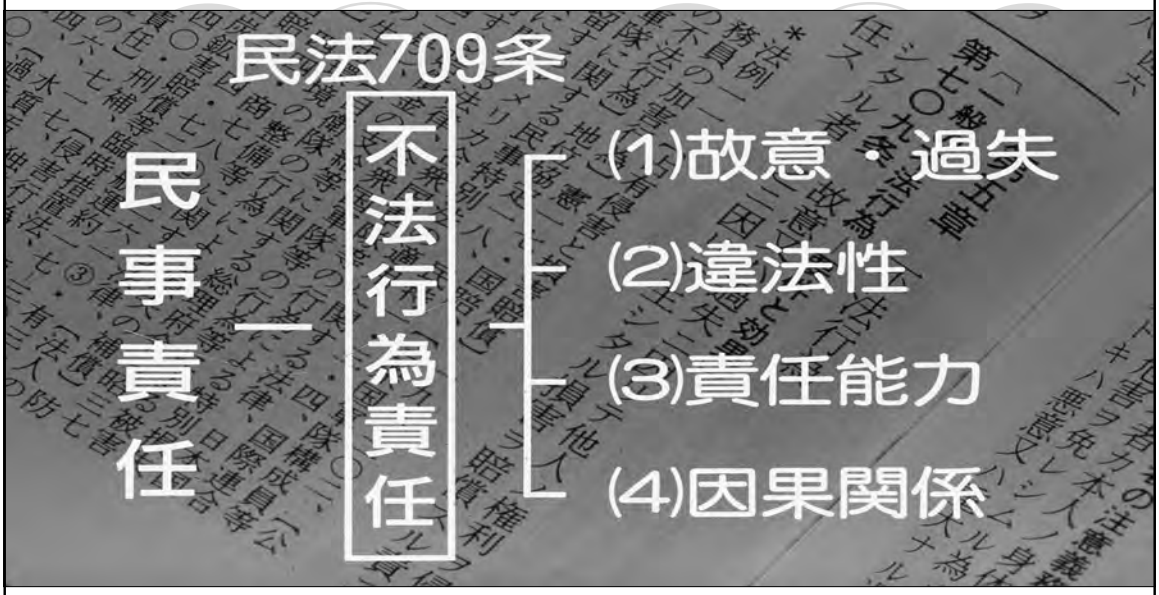
- 被告Y町および北海道については小学校関係者およびY町教育委員会教育長以下の公務員が「真実解明調査・報告義務」を怠ったとして国家賠償法に基づき損害賠償を認めた。

判決は、

（1）学校設置者は自殺した児童の保護者から自殺の原因の報告を求められたときは、「信義則上、在学契約に付随して、当該児童の保護者に対し調査義務に基づいた結果を報告する義務を負う。」

（2）小学校関係者およびY町教育委員会教育長以下の公務員は、「A子の父母Xから報告を求められたのに適切な調査を行わず、合理的説明」もしていない。

Keystone Law Office





スポーツ法学の課題

- スポーツ法学は、スポーツに内在する可避的な危険が顕在化しないために、「事故防止」「安全対策」の視点に立ち、どのような法的注意義務をスポーツに参加する者に要求するか、が予防法学的な課題になる。

＜＜安全配慮義務違反＞＞

過　失

危険の予見可能性

危険の回避可能性



言葉通り、この日の横綱は朝稽古から支度部屋まで、付け人も驚くほどの気合の入れようだった。出番の前まで支度部屋で立ち合いを何度も確認。すべては先場所に黒星をつけられ、出稽古で頻繁に指名する稀勢の里を倒すため。「今日の一番にベストを尽くすだけ」といういつものフレーズを繰り返したが、楽勝に見えるのは、十分な備えがあったからである。

横綱昇進場所だった昨年11

東西トーザイ

稀勢

基本法では不十分

暴力防止を明確に

スポーツと体罰 10

弁護士　菅原　哲朗氏（64）

すがわら・てつろう　1…年生まれ、東京都出身。キ…ン法律事務所代表で、専門…ポーツ法、日弁連スポーツ・…ターテインメント活性化プロジ…トチーム幹事、日本スポーツ…会元会長、日本体育協会団体…員。

体罰の根絶は現実的には不可能だと思う。過去の文部科学省のデータを見ても、暴力的な指導者は一定数いると言える。

法的な危機管理の観点で言えば、まず、体罰はなくならないことを前提にする。そのうえで、重大な問題に発展しないうちに早めの公表、早めの対処を繰り返すしかない。重大な事件が起きた時に非難を集中させるだけでは、問題は解決しない。

スポーツ界には上下関係がある。権利侵害が起きやすく、問題も隠されやすい。現在も表沙汰になっているのは氷山の一角だろう。隠された問題を表に出すシステムが必要だ。

2011年、「すべての人にスポーツを楽しむ権利」を保障したスポーツ基本法が成立し、スポーツ界の責任は重くなった。昔のようにルールを守り、フェアプレーを心がけるだけでは不十分。一般企業と同じくガバナンス（組織の統治）とコンプライアンス（法令順守）が求められるのに、意識が足りない。

基本法の立法に向けて日本弁護士連合会は10年に意見書を出した。「スポーツ団体は閉鎖的な特殊社会で、法の支配が及びくい」と指摘。暴力を防止するとともに、ガバナンスやコンプライアンス（法令順守）を明確に定め、イドラインや倫理綱領をくるべきだと訴えた。

暴力根絶に向けたスポーツ法学会の活動

- 2013. 1. 29･･･女子柔道の国際試合強化選手15名が、全日本女子ナショナルチーム監督である園田隆二を始めとした指導陣による暴力行為やパワーハラスメントを訴えていたことが発覚した。
- 2013. 2. 8･･･日本オリンピック委員会（JOC）が五輪競技31団体にヒアリング調査をしたが、「暴力問題はない」との回答だった。
- 2013. 2. 14･･･日本スポーツ法学会は緊急アピール「理事会声明：スポーツから暴力・人権侵害行為を根絶するために」
- 2013. 2. 19･･･日本スポーツ法学会スポーツ基本法立法専門委員会は参議院議員会館で「アスリートの尊厳を守るためのシンポジュウム」を開催する。

暴力根絶に向けたスポーツ法学会の活動

- 2013. 2. 23･･･部活動のスポーツ体罰に対し、弁護士によるホットラインを東京・大阪・名古屋で開設
- 2013. 3. 9･･･日本スポーツ法学会は早稲田大学で緊急シンポジウム「高校の運動部活動においてなぜ体罰は生ずじるか」を開催。
- 2013. 4. 25･･･日本体育協会・日本オリンピック委員会・日本障害者スポーツ協会・全国高等学校体育連盟・日本中学校体育連盟共催の「スポーツ界における暴力行為根絶に向けた集い」で「スポーツ界における暴力行為等根絶に向けた宣言文」が採択された。

暴力根絶に向けたスポーツ法学会の活動

- 2013. 11. 8･･･第18回弁護士業務改革シンポジウム：神戸ポートピアホテル：

「スポーツ基本法と弁護士の役割～体罰・セクハラ・スポーツ事故の防止 グッドガバナンスのために～」

300人余りの参加者があり、マスコミの関心も高かった。

「体罰問題」など2013年に相次いだ不祥事による関心の高まり

☆　スポーツ団体がガバナンスを無視できない時代だ。

スポーツにおける体罰問題、暴力問題は古くから指摘されていた。

「強くなるためいはある程度の体罰は必要だ。」

「愛のある体罰であれば許される、弛んでいる心が引き締まる。」 等々

☆　スポーツ界だけが別の論理が支配する別世界

暴力を振るった関係者への簡単な処分だけで済ます。

従来の社会の意識は変化し、スポーツ界だけが別世界なのではなく、むしろ逆にスポーツ界こそ社会の構成員の一人として、法の支配の模範生として法令順守を貫くことが期待されるように変わってきている。

「体罰問題」など2013年に相次いだ不祥事による関心の高まり

☆　荒れた学校を戻す為には体育教師がある程度の暴力を振るうことは必要悪とされた時代は過去のものだ。

☆　強くなるためにはスポーツの世界ではある程度の体罰は必要とされた時代からの変化を如実に示している。



2020 東京オリンピック 決定

- 文部科学省と厚生労働省に所管が分かれる五輪とパラリンピックを一本化した。
- 2020年東京五輪開催を契機にスポーツ庁の設置が検討されている。
- 東京五輪開催追い風に、基本法の定めるすべての人にスポーツを楽しむ権利を保障する「スポーツ権」を具体化することだ。



楽しいスポーツへ意識改革の必要性

- 体罰による強制と服従では強いスポーツチームはできない、と理解できるか、否か、が分水嶺である。

＜意識改革＞

① 教師も親も体罰が刑法で処罰される暴力だという認識の甘さとスポーツ体罰が厳しい指導として正当化する世間の声は変わった。

② 名選手は直ちに名コーチになり得ない。言葉で説明できないもどかしさが思わず手がでるのでスポーツ指導力の不足を自覚し、学ぶ努力。

③ 選手本人のためとの愛情と学校の名誉のため勝ちたい・勝たせたいとの勝利至上主義の意識改革

良きガバナンス（組織の統治）と コンプライアンス（法令遵守）

- 2011年に成立したスポーツ基本法は、前文において、スポーツを世界共通の人類の文化と認識し、スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であるとした。
- 第2条の8で「スポーツは、スポーツを行なう者に対し、不当に差別的取り扱いをせず、また、スポーツに関するあらゆる活動を公正かつ適切に実施することを旨とし、・・」と適切な対応を求めている。

Keystone Law Office

地域のスポーツ少年団やクラブチームでの体罰防止

- 学校と違い、指導者以外の大人が存在せず、体罰等の問題を相談できる機会が少ないと思われる。
- 弁護士、弁護士会が体罰相談窓口として、地域のスポーツ少年団やクラブチームに関わっていくことが考えられる。



終わり

ご静聴ありがとうございました。

演 者 紹 介





菅原　哲朗(すがわら　てつろう)
キーストーン法律事務所代表弁護士
Tetsuro Sugawara, Attorney at Law

第二東京弁護士会スポーツ法政策研究会代表幹事
国民体育大会委員・日本スポーツ法学会元会長
(独立行政法人)国立国際医療研究センター理事

スポーツと法の視点から、「少年スポーツ指導者の法律相談」、「スポーツ法危機管理学」などを執筆

レジュメ　　山　口　由美子

人権シンポジウム in 長崎　　レジュメ　　2014.01.26

山 口　　由 美 子
親の会「ほっとケーキ」代表、子どもの居場所「ハッピービバーク」代表

１．　バスジャック事件の概要とバスの中の様子

―少年を殺人者にするわけにはいかない―

２．　不登校・引きこもりの親の会「ほっとケーキ」のこと

―話を聴いてくれるだけでいい、こたえは自分で……―

３．　親の会を母体に、不登校の子どもの居場所「ハッピービバーク」開設

―子どもたちのありのままを認めるとは……―

レジュメ

吉　田　恒　雄

人権侵害としての児童虐待



吉田恒雄
（駿河台大学・
児童虐待防止全国ネットワーク）

児童虐待とは

- 身体的虐待
- 性的虐待
- 心理的虐待：言葉の暴力、DVの目撃を含む
- ネグレクト（保護の怠慢・放棄）
  - 積極的ネグレクトと消極的ネグレクト

（児童虐待防止法2条による定義）

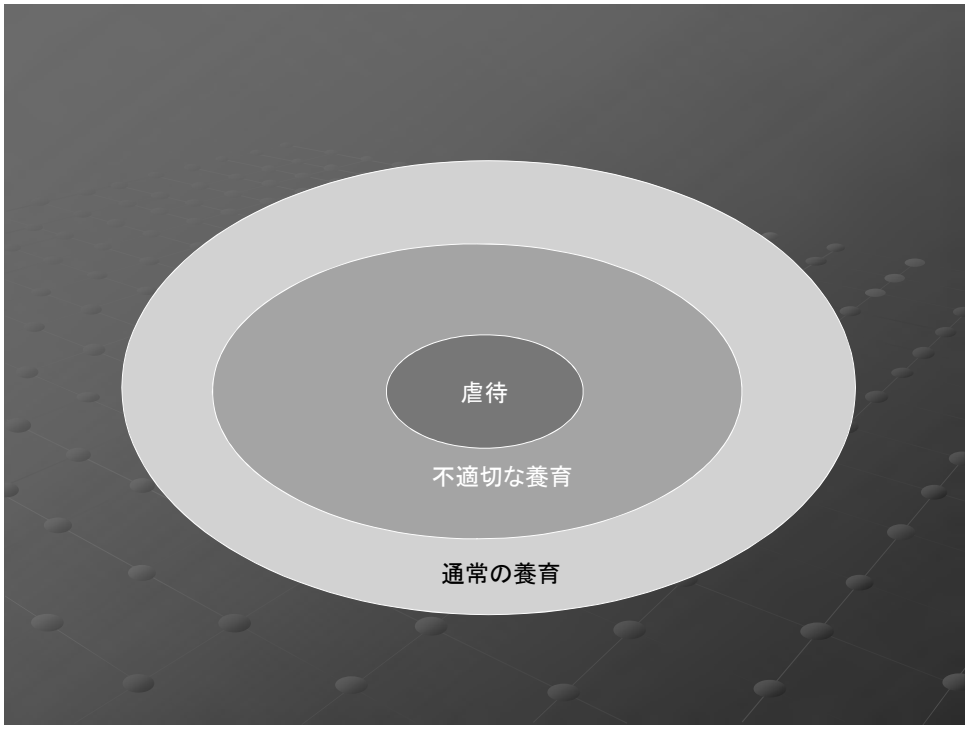
◎　実際のケースは複合的、流動的

◎　不適切な養育

「しつけ」と「虐待」の違い

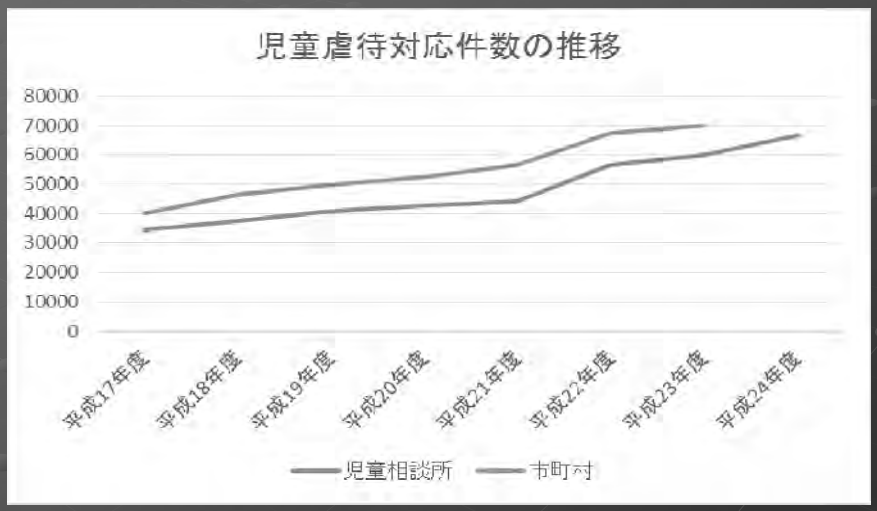
- 子どもの視点から考える。親の意図・目的により虐待は正当化されない（児童虐待防止法14条１項）。
- しつけの目的：子どもが自分で社会生活を送れるように、自らを律し、自ら立つことができるようにすること。親の権限の濫用＝Child Abuse
- 視点
  - 子どもがそのしつけを受け入れているか？
  - 子どもの自己肯定感の向上に資するか？
  - 子どもの意見表明を尊重しているか？

（森田ゆり「しつけと体罰」から）



児童虐待の現状

（児童相談所　平成24年度：66,807件
厚生労働省資料より作成）



虐待は増加しているのか？

- 児童虐待防止法の制定等による虐待の認識の向上
  - ・専門家による虐待の発見、通報の増加
  - ・一般の人の認識の向上（オレンジリボン運動）
- 子どもを育てにくい環境
  - ・貧困、保育所等の不足による子育て環境の未整備、相談相手の不足、ストレスフルな状況、育児をつらいと思う人の増加
- 親の養育力の低下
  - ・子育てを見る機会の少なさ

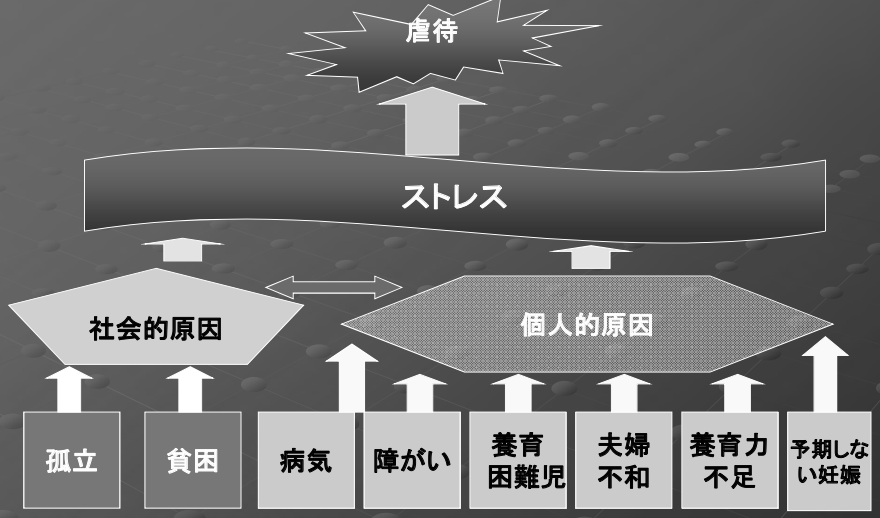
虐待死亡事例（心中を除く）の特徴

- 死亡児：0歳児が43．1%、2歳未満67．2%
- 日齢0日死亡：7人、0か月死亡4人
- 実母の特徴：若年妊娠、望まない妊娠、母子健康手帳未発行、妊婦健診未受診
- 児童相談所がかかわっていた事例：30.4%
- 市町村がかかわっていた事例28.6%

→予期しない妊娠、妊娠期・出産早期からの対応が重要

（虐待死亡事例検証第9次報告書から）

児童虐待の原因



虐待の原因の多様性に応じた、多様な機関のかかわりが必要

児童虐待の原因・背景：ストレス 親の側の原因　1

①社会的・経済的原因
- 親族や地域から孤立した育児
- 経済的困難（失業、貧困、借金、不十分な住宅環境・・・）

②個人的原因
- 夫婦間の不和（DV、離婚・・・）
- 未熟な親（若年出産、キレやすい親）
- 犯罪傾向ある親：性的虐待
- 養育能力不足

児童虐待の原因・背景：ストレス 親の側の原因　2

- 疾病（精神疾患、薬物依存、アルコール依存・・・）
- 障がい（知的障がい、過去の被虐待経験等・・・）
- 誤った「しつけ」観：厳しいしつけの肯定
- 男女の役割意識：強い父親イメージ
- 家族構成の変化によるストレス（別居、再婚、同棲開始、親子同居の再会・・・）

児童虐待の原因
子どもが抱える課題

- 養育が困難な子ども
  - 多胎
  - 障がい（発達障がい、知的障がい・・・）
  - 疾病
  - 愛着障がい（望まない妊娠による出産）・・・

◎　複合的な原因によるストレスの発生・増幅

児童虐待の特徴

- 圧倒的力関係の差による暴力（おとな→子ども）
- 反撃できない暴力
- 密室での出来事（目撃者がいない、助けてくれる人がいない、逃げられない）
- 継続的・反復的・不規則な暴力
- 長期間にわたる暴力・ネグレクト
- 信頼すべき人・依存すべき人による暴力・ネグレクト
- 被害が表面化しにくい。（子どもの表現能力、依存関係、恐怖、無力感、構造的支配）
- 自分の力で状況を改善するのが難しい

→特有の症状

→独自の対策の必要、人権の視点の重要性

児童虐待の影響
－子どもへの影響－

- 死亡、身体的障がい、人格障がい、精神障がい、愛着障がい、自殺、リストカット、薬物依存・・・
- 凍り付いた表情
- 非行との関係

  少年院在院者、児童自立支援施設入所児童の5～6割が被虐待経験有り
- 人生の可能性を狭める＝貧困へのつながり





子どもの人権侵害としての虐待　1

- 児童虐待の特徴から～弱者としての子ども～

（1）加害親・被害児童ともに人権侵害を無自覚
　・おとなの言い分：しつけの名による虐待
　◎「子どもにとって良かれと思ってする人権侵害」
　・子どもの認識：「私が悪い子だから、叩かれても仕方がない」
　・こういう状況に置かれているのだから仕方がない。

（2）保護すべき立場にある者による侵害
　・構造的・継続的・閉鎖的関係から生ずる暴力
　・被害が表面化しにくい。（表現能力、依存関係、恐怖、構造、家庭の平和維持の圧力、密室）
　・利益対立関係（保護者によるSOSは期待しがたい）

子どもの人権侵害としての虐待　2

- 人権意識：誤った「しつけ」観、体罰肯定意識
- 社会で取り組む課題
- 児童虐待防止法1条：目的

　この法律は、児童虐待が児童の人権を著しく侵害し、その心身の成長及び人格の形成に重大な影響を与えるとともに、我が国における将来の世代の育成にも懸念を及ぼすことにかんがみ、児童に対する虐待の禁止、児童虐待の予防及び早期発見その他の児童虐待の防止に関する国及び地方公共団体の責務、児童虐待を受けた児童の保護及び自立の支援のための措置等を定めることにより、児童虐待の防止等に関する施策を促進し、もって児童の権利利益の擁護に資することを目的とする。

子ども虐待防止対応の概観

発生予防
　一般の子育て支援
進行予防＝介入
　要支援家庭の
　　早期発見、介入
　（在宅、親子分離）
世代間連鎖予防
　虐待親、被虐待児への支援、
　家族再統合、自立支援

発生予防：子ども・子育て支援
子育てしやすい社会の実現

- 育児不安・困難に対する対応：子育て支援
- 地域による敷居の低い支援
  育児サークル、ファミリーサポートセンター、保育ママ、養育支援（育児技術・知識）、育児相談（保健師、保育所）、保育所・学童クラブの活用、地域の児童クラブ、子育て情報の提供、ホームスタート事業・・・
- 家族（夫を含む）支援
  - 夫の育児休暇、労働時間の見直し⇒夫の育児参加
  - 経済的支援
    児童扶養手当、児童手当、生活保護、就労支援、住宅支援、債務整理・・・
- 主な支援機関：児童相談所、市区町村による支援（情報提供、社会資源の利用援助・調整）、保健所、保健センター、民間機関等

発生予防：母子保健の役割
虐待の発見

- 妊娠期の発生予防：母子保健による虐待のおそれが大きい妊婦の発見
  ・望まない妊娠、薬物摂取・飲酒妊婦、配偶者暴力への対応→医療、保健、福祉分野との連携が必要
- 出産後の発生予防
  - 乳幼児健診による虐待の発見
    →未受診家庭への訪問
  - 家庭訪問による虐待の発見
    →保健師による相談、支援、養育状況の把握

◎「こんにちは赤ちゃん」（乳児家庭全戸訪問）事業
◎発生予防の重要性＝社会全体の取組み

介入・進行予防

- 家庭への介入（児童相談所、市町村等による介入）
  発見→通告→介入（安全確認、調査、一時保護等）
- 在宅での親支援（治療的支援、社会的支援）
- 親子分離の方法による子どもの保護
  - 親の同意による分離と強制分離
- 介入後のケアの確保（治療、生活支援等）
  →親子再統合に向けて
  →再統合が不可能なとき＝社会的養護（児童福祉施設、里親、養子縁組）
- 犯罪としての児童虐待

世代間連鎖予防

- 被虐待経験ある人への援助（治療的援助、治療環境の整備）
  - 分離された子どもへの援助
  - 治療的援助、生活環境の整備（施設環境の整備、里親委託の推進、自立支援）
  - 家庭引き取りとその後の支援＝再び地域で生活することの大変さ

◎ 自立支援
生活支援、進学支援、自立後の相談、就労支援、就労先の確保）、生活技術の習得等

市民の役割　1
児童虐待防止の啓発

- 児童虐待のない社会をめざして！
  オレンジリボン運動
- 児童虐待についての広報＝正確な理解







市民の役割　2

- 子どもと子育てにやさしい眼差しを！
- 子育てをしている親へのねぎらいの言葉を！（3分子育て:こども未来財団）
- 親が安心して楽しく子育てできる社会を！
- 「虐待かな？」と思ったら、市（または児童相談所）へ通報を
  - 通報は、親子への支援のスタート
  - 虐待に気がついたつらさを抱え込まない。
  - 通報者の秘密は守られる。
- 子ども虐待防止の啓発活動（オレンジリボン運動）

子どもへの啓発

- 子ども自身のエンパワメントを図れるようにすること:
  CAP活動:虐待されていることを話す力
- 子どもに虐待について教えること
- 児童虐待が人権侵害であること、被害を訴えてよいことを伝える。
  - 自分がされていることが虐待にあたる行為であること
  - 虐待の相談先、通報先

人権啓発

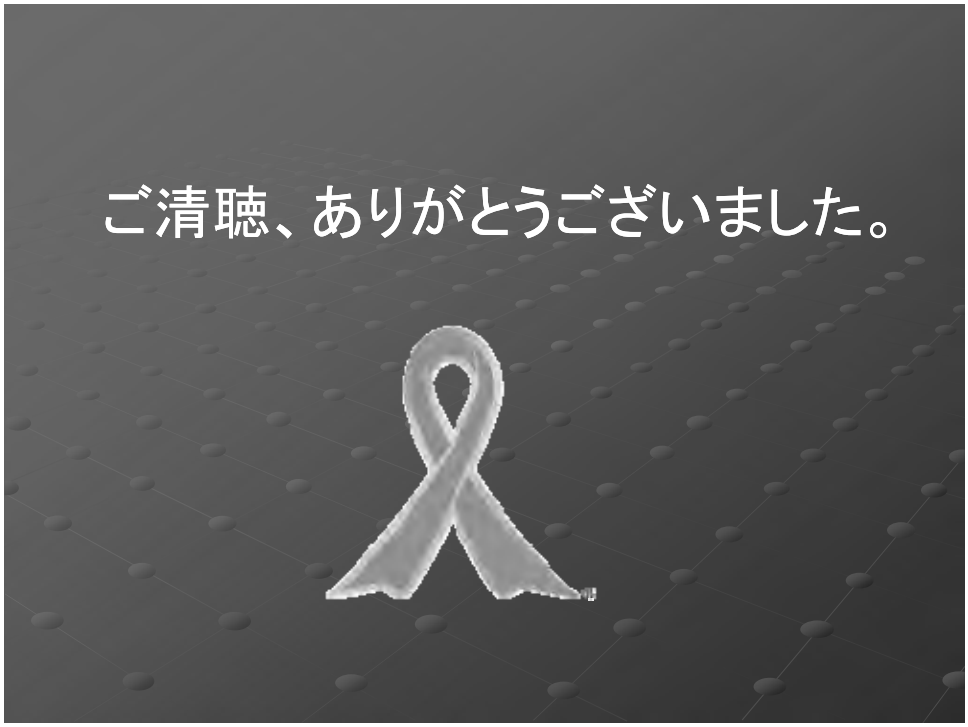
- 「いのち」の尊さを社会全体で確認する。
- 「児童虐待はあってはならないこと」との共通認識の再確認
- 子どもへの暴力、放置、傷つける言葉、性的加害がもつ危険性を認識
- 児童虐待が及ぼす悪影響を認識
- 虐待された子どものその後にも目を向ける

連携の必要性

- 虐待問題の複雑性、困難性、広域性
- 多職種による複合的対応の必要性
- 情報の共有
- アセスメントの共有
- 専門的対応の必要性
- 個人的努力、単一の機関だけの努力では限界がある。
- 「しんどさ」の共有
- 機関連携による対応の有効性

むすび
児童虐待のない社会をめざして

- 子どもが安心して安全に暮らせる社会を！
- 親が楽しく安心して子育てできる社会を！
- 子どもの人権と尊厳を認め、寛容な気持ちをもって社会全体で子どもを育てられるように！
- 市民一人ひとりができることを通じて、虐待についての理解を深め、地域で子育てをともにする。
- 児童虐待は、社会の病気＝社会全体で取り組むべき課題！


ご清聴、ありがとうございました。

長崎会場

内容紹介



第 1-1 部　パネリストによる基調報告

小森　美登里（特定非営利活動法人ジェントルハートプロジェクト理事）

【横田】

皆様、こんにちは。本日は子どもの人権がテーマの本シンポジウムに御来場いただき、感謝申し上げます。法務省主催の人権シンポジウムが長崎で開催されるのは、恐らく今回が初めてとなります。

皆様既に御存じかとは思いますが、今子どもたちは、虐待、いじめ、体罰、差別、あるいは性的嫌がらせ、その他様々な人権侵害の被害者として苦しんでいます。自らを守る手段を持たない子どもたちにとって、本来は私たち大人が守る立場にあるべきです。ところが、子どもに対する人権侵害事例のうちかなりの割合で、子どもたちが信頼すべきはずの大人が加害者である場合が多く、被害者となった子どもたちは周囲の大人を相談する相手として考えることができないのですね。むしろ、大人が加害者になっているということで、持って行き場のない苦しみ、悩みを心の中に抱え込んで、どうしようもない状況に置かれるということを、最近の多くの出来事の中から、実感しております。

そういう経験を通じて、子どもたちは、身体的肉体的に様々な形で追い詰められていまして、その結果として、先ほども長崎地方法務局長の御挨拶の中でも触れられましたように、様々な形で子どもたちの心の悩みが現れる現象というのが、私たちの目の前に突き付けられます。それが不登校であったり、引き籠りであったり、あるいは場合によると、自ら命を絶つというような不幸な出来事にもつながりかねない、そういう状況にあります。

現在、子どもたちが抱えているこうした人権上の問題について、人権に携わる者として、非常に深刻に受け止めております。本日このような形で、ここ長崎において、「子どもと人権」の問題を本シンポジウムで扱うことができることを、私どもといたしましては、大変貴重な機会であると考えております。

今日、御登壇いただく4人のパネリストの皆様は、いずれも、子どもと人権に関わる活動を展開され、それぞれの御専門の分野で経験を積んでこられた方々です。パネリストの皆様のお話を伺い、休憩時間の後には、会場の皆様からの御質問や御意見を伺って、現代社会が抱えている子どもと人権の問題について、お互いに考え、この問題への理解を深めていきたいと思っておりますので、御協力をお願いいたします。

まず最初は、私のお隣に座っておられる小森美登里さんのお話をお伺いしたいと思います。これまで、小森さんがどういう背景でどのような活動をしてこられたのかということも含めたお話を伺えると思います。小森さん、よろしくお願いいたします。

【小森】


小森美登里さん

初めまして。神奈川県の横浜市から参りました、小森美登里と申します。私は、一人娘をいじめによる自殺で失いました。いじめ自殺遺族です。15歳の時に娘は亡くなり、今年で16年目になりましたので、もし誕生日を迎えられていたとしたら、31歳になっているはずでした。もし31歳まで生きていたら、娘はどんな経験をしたんだろう、といろいろなことを考えます。彼氏が欲しかったかな、結婚もしたかったかな、きっとウェディングドレスを着たかっただろうし、家族も欲しい、子どもを産みたかっただろうな。後は海がとても好きな子でしたので、ダイビングをやりたいと言っていました。そんなふうに、あの子ができなかったこと、失ったものを一つずつ探していると、悲しみがあふれ、そして大きな怒りを覚えます。この問題をなんとか解決したい、そんな思いを込めて、私は思い付くことを

いろいろやっていました。ただ、思い付くことをやっている中で、様々な思いも掛けない言葉を浴びせ掛けられ、傷付くこともありました。しかし一方で、多くの出会いも生みました。そしてその多くの出会いの中で、「小森さんの活動、学校の中に入ってやりたいね」と言ってくれた人がいたんですね。そして、NPO[1]を立ち上げようということで、みんなでいろいろなことを考えて、ジェントルハートプロジェクトを立ち上げることを決めました。

NPOを立ち上げるとなると、やはり出さなければいけない書類もありますし、私たちは一体何をやるんだということも明確にしなければなりません。そんな中で、いじめの定義を決めました。私たちは、「心と身体への暴力」をいじめと定義して活動を始めました。ところが、いざ活動を始めますと、なんだか違和感を覚えました。「心と身体への暴力」というこの言葉、決して間違ってはいません。今も変えたわけではないのです。しかし、活動を開始して、全国の学校の中で、どのような事件が起きているんだろう、どのようないじめがあるんだろう、ということを調べ始めましたら、とてもいじめという表現では言い表すことができない、虐待といっても過言ではない肉体への暴力が数多くありました。これはどう考えても刑事事件なのではないか、という事象が次から次へと、私の目に留まったんです。そして、心と身体への暴力をいじめと言っていたのですが、どうやらこれは間違いなく、虐待であると実感しました。会場にお越し皆様の中にも、いじめと聞くと子ども同士で、言葉でからかったり、ちょっとふざけているぐらいの軽いイメージをお持ちの方もいらっしゃるかもしれません。そんな方は、ぜひ一度、新聞記事の中でいじめに関するニュースを見付けられたら「いじめ」という言葉を「虐待」に置き換えて読み直してみてください。死亡事案でなくて結構です。小さな記事で結構です。そうしますと、それまでの印象が変わってくると思います。そして、子どもたちがいかにこの問題で苦しみ、学校において極度の緊張の中で過ごしているということを、御理解いただけるのではないかと思います。

どうしてこの問題が解決しないまま今日まで来てしまったんだろうということを考えながら、私にはいくつか、思い当たることがあります。一つ目は、私たち大人は今まで、心の存在をないがしろにして来たのではないだろうかということです。心ってなんなのだろう、命ってなんなのだろう、そのことを考えますと、これは哲学のようなものかもしれませんから、一生、答えが見付からないかもしれません。でも、心ってなんなのか、そのことを、子どもたちと一緒に考えることだったら、私はできると思います。

私は学校で講演させていただく機会が多くありますが、小学生に対しても「心ってなんなのだろうね」という問い掛けをしています。子どもたちも、それまでにいろいろな感情を持って生きてきているはずです。楽しいこともあった、つらいこともあった、余りにも悲しくて涙をぽろぽろ流したこともあった。そんなことを、子どもたちと話しながら、自分にも、そう言えば、感情があったなということを思い出してもらうんですね。そして、自分にあるこの感情、これは、どこで感じているんだろう、どこがその感情をキャッチしているのか考えると、おぼろげながらかもしれませんけれども、なんとなく心の存在を感じてもらえるようなんですね。

私たちは、目で肉体をはっきりと見ることができます。触ることもできるし、きちんと確認ができるんですね。でもそこにもう一つ、目には見えないけれど、色も付いてないし、香りも付いてないし、確認するのは難しいけれど、心がある。目に見える肉体、そしてもう一つ目に見えない心。肉体と心、二つがそろって一つの命なのではないか。私たち大人は、子どもと一緒に命について確認し合うことだったらできると思います。

そして、この心の存在をないがしろにし続けていますと、被害者責任論というのが生まれてくるんですね。なぜかと言いますと、自殺する人は弱いんだとか、心が傷ついて死ぬ人は弱いんだ、などというふうに、被害者の弱さを浮き彫りにさせる、被害者側に責任があるという考えが浮かび上がってきます。

どうして被害者責任論が、今こんなに社会でまん延してしまったのか。思い当たることとしましては、

1 「Nonprofit Organization」又は「Not-for-Profit Organization」の略。広義では非営利団体のことを指し、狭義では、非営利での社会貢献活動や慈善活動を行う市民団体のことを指す。日本では、特定非営利活動促進法（1998（平成10）年12月施行）により法人格を得た団体（特定非営利活動法人）のことを指す。

いじめの報道が過熱した時、もう朝昼晩と一日中いじめに関する報道ばかりやってることが時々ありますよね。最近の例で申しますと、滋賀県大津市のいじめ自殺事件[2]が挙げられます。事件が発覚した当初は、朝昼晩と一日中報道されていました。しかし、この事件も、今では全国ネットでは取り上げられないんですね。先週、あの裁判に関して画期的かつすばらしい判決[3]が出たのですが、私が住んでいる横浜の方では、余りニュース等で取り上げられていませんでした。ところが、関西圏では、ワイドショーなどで、15分やそれ以上の時間掛けて特集が組まれ報道されていたんですね。一時は全国ネットで繰り返し報道されていたものが、時間とともにどんどん収束していった。でも1年以上過ぎても、地元とその周辺では、継続的に報道されているというのは、逆にすごいなと思いました。特定の地域だけだけれども、報道し続けてくれているっていうのはすごいことだなと思って、私は今回驚いています。

このように、いじめに関する報道が連日ワイドショーやニュースなどで繰り返されますと、様々なコメンテイターや司会の方が、いじめについての持論を展開されるんですね。その持論の内容が、かなり被害者責任論に偏っているわけです。私の手元に、いくつかメモしたものがあるので御紹介します。「自殺する人は弱い、訴える力が弱い」。いじめられるってつらいですよね。それをお家の人にも学校の先生にも言わない子は、訴える力が弱い子だって言うんです。本当にそうなのでしょうか。あと、「命の大切さを知らない」「想像力が欠けている」「卑怯者」「社会性がない」「親がちゃんと教育していない」、だから子どもは自殺するんだ、と言うんですね。また、「病気で死ぬ人もいるのに…」というコメント。この「病気で死ぬ人もいるのに…」については、結構多くの方の中に、何も疑いもなくすっと入ってくるようなんですね。でも、私が思うには、この言葉に何の疑いも持たないことこそ、心への暴力、肉体への暴力、肉体と心、この二つがそろって、一つの命なのだというところが理解されていない方だと思います。肉体が傷付けば、最悪の場合死に至ります。怪我をして亡くなる方もいらっしゃいます。そして、病気で臓器が働かなくなって亡くなる方もいます。事故や怪我、病気等で亡くなった方は、最後まで精一杯頑張った命だったと、亡くなった後、褒めていただけます。ところが、自殺した子どもたち、自殺した人に対しては、弱い人だったんだよね、いじめられていたんだって、いじめられる側にも原因があるんだよね、なんていうふうに、亡くなった後もまたいろいろ、後ろ指を指されるようなことを言われてしまうんですね。そのために、自殺遺族は、その後、また頑張って立ち上がって、そうじゃないんですってなかなか言えない状況になり、落ち込んでいってしまう方が多いのです。

このように新聞やテレビ、ラジオなどの様々なメディアから被害者責任論が日々あふれ出てくる状況を見ていますと、私は一つ心配していることがあるんです。学校でとてもつらいことがあって、いじめられていて、教室が危険な場所、学校が危険な場所になってしまい、通うことできなくなり、お家で引き籠っている子がいますよね。引き籠っている家の中で、ニュースを見て、いじめられる子が悪いんだよ、原因があるんだよ、弱いんだよと被害者責任論を言われ続けていたら、その子、もしかしたら、生きるか死ぬかギリギリの綱渡りしているわけですから、死の方向へとぽんと背中を押されてしまうんじゃないかなって心配しているんですね。

WHO[4]において、報道について警鐘を鳴らしている事例があるのですが、私は亡くなった子どもたちの写真をメディアで映し出すことや遺書を公開することなどが、次の自殺の誘発になるとはちょっと思えないんですね。被害者責任論、この感覚こそ、今苦しんでいる人を死に追い詰めてしまうよう

2　2011（平成 23）10 月 11 日に滋賀県大津市内の市立中学校の 2 年生（当時）の男子生徒が、いじめを苦に自宅で自殺するに至った事件。事件前後の学校と教育委員会の隠蔽体質が発覚、問題視され、大きく報道された。翌年には本事件が誘因となっていじめ防止対策推進法が国会で可決された。

3　自殺した男子生徒が在籍していた中学校が全生徒を対象に実施したいじめに関するアンケートの大部分を非開示としたことに対し精神的苦痛を受けたとして、生徒の父親が市に 100 万円の損害賠償を求めた訴訟の判決で、大津地裁は 2014（平成 26）年 1 月 14 日、30 万円の賠償を命じた判決。市側は「自殺原因を知りたいという遺族の痛切な心情を損なった」として責任を認めた。「いじめが自殺の原因」として市や加害者とされる生徒らに対する賠償を求めた訴訟は、現在も係争中。

4　World Health Organization（世界保健機関）：人間の健康を基本的人権の一つと捉え、その達成を目的として設立された国連機関。1948 年設立。本部はスイス・ジュネーヴ。設立日である 4 月 7 日は、世界保健デーになっている。

な気がしてなりません。皆さん、ぜひ一度、自分が苦しい時、誰かに相談することを想像してみてください。

いじめられた時、最初のいきさつから逐一全部誰かに報告する人なんていませんよね。あれ、なんだろうとちょっと疑問に思って、ああやっぱりこれはいじめだと確認はできるのですが、その後、もういじめなんてやめてくれないかな、いい加減にしてくれないかというふうになってちょっと時間を置いちゃうんですね。そして、いよいよもうこれ以上我慢できないという状況になって、あの人だったら聞いてくれるんじゃないかなと目星を付けて信頼できる人に、実は私今ね、こんなことがあってね、つらいの、苦しいのと相談したとします。相談した時には既にかなりの時間が経っていますから、心の傷は深まっているんですね。やっとの思いで人に相談した、にも関わらず、そのお友達から「でもあなたにも何か原因あるんじゃないの」と言われたとしたら、その時の思いを、イメージしてみてください。「あなたにも原因あるんじゃないの」、本当に厳しい言葉です。死へと追い詰めてしまう言葉かもしれません。

ところが、この被害者責任論、この言葉が学校の中でも、大人から子どもに対して投げ掛けられ、あとメディアの中でも氾濫しているわけです。私は今、心の存在をないがしろにしたことが、いじめを解決できない大きな原因じゃないかと言いました。

もう一つ、私は思い付くことがありました。それは、当法人で大人の皆さんに御協力いただいて、子どもたちを対象としたアンケートを実施しました。その結果を見ると、「やられたらやり返していい、やり返すぐらいの強さが大切だ」といったように、やり返すことをいじめの解決策として教えている大人が半数いました。半数の大人が子どもたちにやり返せと教えていました。私は、多くのいじめによる自殺遺族に直接お目に掛かっていろいろな話を聞いたのですが、我が子をいじめ自殺で亡くした親御さんのほとんどがお子さんに対して「自分がされてつらかったことは、ほかのお友達にしちゃいけないことなんだよ、やり返しちゃだめだよ」と教えていました。「やり返しちゃだめだよ、自分がされてつらいことをほかのお友達にしちゃいけないことなんだよ」と、そう教わった子がその教えを守る中で、もし自殺へと追い詰められているとしたら、それは、何か一つのいじめの構図が見えてくるのではないでしょうか。

「思いっきりやり返せば、やり返してこないよ、解決するよ」とお思いの方がいると思います。でも、思いっきりやり返されてしまった子どもは、悔しいです。悲しいです。つらいです。その悔しさは心の中に争いの種として残ってしまいます。この争いの種は時間とともに大きく成長してしまうことがあるんです。小学校の頃、思いっ切りいじめられた、中学校になって体格も変わった、人間関係も変わった、あの時の恨み晴らしてやるということで、中学生になってから刑事事件を起こしてしまう。そして相手を殺してしまう、そんな事件が実際に起きているんです。やられたらやり返せ、世の大人たちの半数が子どもたちにこう教えている。でも、私は、全ての大人が子どもたちに「自分がされてつらいことはほかのお友達にしないようにしようね、やり返しちゃだめだよ」という、そんな教育をこの日本が徹底できたらな、というふうに思っています。

子どもたちは、いじめられてもなぜ友達や周囲の大人に相談をしないのでしょうか。その理由を、多くの子どもたちから聞きました。最も多いのが、大事にしたくない。その理由は、大人に相談して、問題を大きくされるぐらいだったら、現状維持の方がまだまし、そんなふうに思っている子どもたちがほとんどでした。ほかにもいろいろな思いがあります。自分がいじめられているって知ったら、親は心配するだろうな、可哀想で相談できないな、そんな優しい心から言えない子もいます。親子の関係がとても良好で、仲が良くて、大好きだから言えない、そういった子も居ます。親子間のコミュニケーションが普段から取れていて、いつも話し合える親子関係だったら、なんでも話してくれるはず、そんなふうに誤解している大人もいると思います。でも、大好きだから言えない、親にだけは言えないんだよ、そう言った子どもがいました。

また、いじめをしている子どもたちも、実は様々な苦しみを抱えているんです。これも私ども（ジェントルハートプロジェクト）で実施したアンケート結果から分かりました。いじめている子の約7割が、

自分もその時つらいことを抱えていたと回答しています。私たち大人は、いじめというものを知っているようで実は知らないことがいっぱいありました。子どもの言うことに耳を傾ける。そのためには、ぜひ、皆さんが子どもだった頃、大人に言われたくなかった言葉、そう言えば自分も相談してなかったかも、そんなことを思い出して、相談してくれた子どもに寄り添っていただけたらなと思います。

【横田】

小森さん、ありがとうございました。御自身の大変悲しい体験、それを乗り越えて、私たちに大変貴重なメッセージをいくつかお伝えいただいたと思います。後ほど、また、ここで発言されたことについて、いろいろな形で議論を深めたいと思います。

菅原　哲朗（弁護士、日本体育協会国民体育大会委員会委員、
国立スポーツ科学センター倫理審査委員）

【横田】

それでは次に菅原さんのお話をお伺いします。菅原さんは、スポーツと法という、法律の中でも珍しい分野の御専門の方です。しばらく前に日本でも大きな問題になりました、スポーツ界における体罰についてお話しいただきます。体罰は教育訓練の一環だという言い方もされてきましたが、他方でこれは暴力、虐待であるということで、全体としてはそれをやめようという方向に動いております。しかし、その実態はどうなっているのかということについて、恐らく、菅原さんは私たち以上に見識を持っておられると思いますので、お話をお伺いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【菅原】

※パネリストの御要望により、レジュメを基調報告の内容に代えさせていただきます。

――体罰・暴力行為の根絶をめざしたスポーツ指導について――

菅　原　哲　朗
弁護士、キーストーン法律事務所代表、日本スポーツ法学会元会長

第1　現代における「スポーツ権」を取り巻く問題点

1　スポーツ基本法が定める基本的人権たるスポーツ権


菅原哲朗さん

2011（平成23）年8月24日施行されたスポーツ基本法（平成23年法律第78号）は、前文で「スポーツは、世界共通の人類の文化である。スポーツは、心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自律心その他の精神の涵養[5]等のために個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動であり、今日、国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠のものとなっている。スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であり、全ての国民がその自発性の下に、各々の関心、適性等に応じて、安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、又はスポーツを支える活動に参画することのできる機会が確保されなければならない。

スポーツは、次代を担う青少年の体力を向上させるとともに、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い、実践的な思考力や判断力を育む等人格の形成に大きな影響を及ぼすものである。」とスポーツ文化の中で基本的人権である「スポーツ権」の重要さを定める。[6]

5　かんよう：水が自然にしみこむように、少しずつ養い育てること。

6　スポーツ振興法を全面改正して，スポーツ基本法が 2011 年 6 月 17 日に成立し，8 月 24 日に施行された。

スポーツ基本法の概要は次のとおりである。

（第 1 章　総則）

スポーツ基本法は，スポーツに関する基本理念と国及び地方公共団体の責務，スポーツ団体の努力等を明らかにし，スポーツに関する施策の基本となる事項を定めることにより，スポーツに関する施策を総合的かつ計画的に推進し，国民の心身の健全な発達，明るく豊かな国民生活の形成，活力ある社会の実現及び国際社会の調和ある発展に寄与することを目的とする。

国民が生涯にわたりあらゆる機会とあらゆる場所において，自主的かつ自律的にその適性及び健康状態に応じてスポーツを行うことができるよう推進されなければならないこと等，スポーツに関する 8 つの基本理念と，国及び地方公

時流は現代スポーツ界に透明性･健全性を求めており、弁護士は「法の支配」を貫徹すべく、スポーツ選手の人権擁護のために新聞記者やアンチ・ドーピングの専門医等との連携がますます重要な時代になっている。

暴力根絶問題は、いまだ着手されたばかりである。日本の体育そして競技スポーツ界が暴力問題を根絶した時こそ、日本のスポーツ界がガバナンス整備の初期の段階を越えて、進むことのできるときであり、スポーツ先進国たる欧米諸国に追い付くべく法的整備と個人の遵法意識の確立に向けて邁進しなければならない。

2　欧州スポーツ法の調査と法の支配

スポーツの世界には、フェアプレイの精神、スポーツマンシップ、健全な心は健全な肉体に宿るなど、人々の心に美しく響く言葉がある。「体育･スポーツの実践は、全ての人間にとって基本的人権である。」(1978年10月：ユネスコ第10回総会：体育・スポーツ国際憲章第1条）と定められた。

2013（平成25）年5月、日本弁護士連合会の欧州スポーツ法調査研究視察団は、英国・オランダ・ベルギー・フランスの4か国を歴訪し、スポーツ法を専門とする学者や弁護士さらにはオリンピック委員･非営利スポーツ団体の役員・関係者から欧州スポーツ界の様々な現状を聴取し、「スポーツにおけるガバナンス（組織の統治)」が欧州において重要な要素としてスポーツ法の骨格を形成している事実を正に肌で知り、帰国した。

2013(平成25)年5月28日､オランダ(首都アムステルダム)から英国(首都ロンドン)に戻る際､英国ヒースロー空港の出入国検査官が私が記載した入国申告書の職業欄の弁護士表示を見て、どの様な種類の専門業務をしているか尋ねてきた。

専門は「スポーツ法」だと話すと若い女性の公務員は眼を輝かせ「すごい、私も学んだ」と質問よりも自分の経歴を言い始めた。つまり英国では法律科目の一つに「スポーツ法」が一般法と同じく普及し、現代のスポーツ文化の発展とともに将来ますます期待される先進的な法分野だという一つの事実を示唆している。

スポーツ法に関わる様々な問題に関して､「法の支配」という言葉をスポーツ人が聞くと、一瞬難しいと見構えるが､内容は「自由と正義」の貫徹であり､よく知るフェアプレイの精神やスポーツマンシップと同様に理解して良い。基本はスポーツ界のトラブル紛争を身内のなれ合いではなく、適正な法的手続（デュープロセス）に従い解決される道筋なのである。

3　スポーツ法におけるガバナンス

ガバナンス（governance）とは組織における意思決定、執行、監督に関わる経営管理システムのこ

共団体の責務，スポーツ団体の努力等について定め，政府による法制上，財政上又は税制上の措置を講じなければならないとした。

（第２章　スポーツ基本計画等）

文部科学大臣に，スポーツに関する施策の総合的かつ計画的な推進を図るため，スポーツの推進に関する基本的な計画を定めなければならないこととし，教育委員会に地方スポーツ推進計画を定めるよう強めるものとした。

（第３章　基本的施策）

国及び地方公共団体に対し，指導者等の育成等，スポーツ施設の整備等とスポーツ事故の防止と国に対して紛争の迅速解決と科学的研究の推進等の施策を，学校設置者に対してスポーツ利用に供することなどを，義務づけた（努力義務)。

（第４章　スポーツの推進に係る体制の整備）

政府，都道府県及び市町村，教育委員会におけるスポーツ推進のための体制の整備を構築した。

（第５章　国の補助等）

国は地方公共団体，学校法人又はスポーツ団体に対し，地方公共団体はスポーツ団体に対し，スポーツの振興のための事業に要する経費の一部を補助することができることとした。

とで、「統治」「組織の統治」「統治能力」などの訳文がある。

スポーツ基本法第5条（スポーツ団体の努力）第2項は「スポーツ団体は、スポーツの振興のための事業を適正に行うため、その運営の透明性の確保を図るとともに、その事業活動に関し自らが遵守すべき基準を作成するよう努めるものとする。」とし、同第3項で「スポーツ団体は、スポーツに関する紛争について、迅速かつ適正な解決に努めるものとする。」と定める。

弁護士感覚からすると「コンプライアンス（法令遵守）」と「ガバナンス（組織の統治）」は表裏一体だ。組織はビジネス企業でも、公益・一般財団法人や社団法人、音楽・芸術文化団体、スポーツ競技団体でも社会的な責任を果たし、健全な組織を維持する基本は同じといえる。

建築物に例えてみれば、ガバナンスは鉄筋コンクリート造の堅固な建物の骨格で、鉄筋がない手抜き工事なら建築物は軽度の地震で簡単に瓦解する。

もとよりコンプライアンスの重要性はいうまでもないが、法は最低レベルのモラルにすぎない。法は裁判規範であるとともに行為規範でもある。身体に例えてみても、ガバナンスという骨格が弱ければ、頭のコンプライアンス意識も希薄となる。

ガバナンスのない組織内部には公金不正請求・背任横領事件・賭博事件・大麻事件・暴力事件・セクハラ・パワハラなど犯罪行為・法令違反・社会的非難を受ける不祥事が必然的に生じる。

暴力行為はスポーツに名を借りても個人の基本的人権を侵害するもので、違法として法的処罰の対象となる。スポーツ界は市民社会の枠の中に存する以上、法の支配は当然の前提なのである。スポーツ界内部のルール・定款・規約などに守られた組織原則が選手個人の基本的人権を侵害することは許されない。

ドーピングによって得られた勝利がフェアな勝利ではないという認識は、いまや世界共通の認識であり、そのような認識に基づいて、スポーツ界がアンチ・ドーピング活動に全世界的に取り組んでいることはいうまでもない。これと同じように、体罰・暴力によって得られた勝利は、フェアな勝利ではなく、真の勝利ではないということを、スポーツ界が強く認識する必要があるものと考える。

4 子どもが安全・安心となるスポーツ環境の構築

(1) スポーツ活動において思わぬ事故やケガを防ぐリスクマネジメントはヒューマン（ひと）・ハード（用具・施設）・ソフト（プログラム）の三つの視点から考えるべきである。

つまり、安全管理システムを構築するには安全配慮義務を考えねばならない。スポーツがいつ、どこで、誰が、どのような、5W1H[7]での「スポーツ環境条件」でなされたのか、常に考察されることになる。

それとともに、ハード・ソフト・ヒューマン（スポーツ施設・スポーツプログラム・スポーツ人）の観点から、事故が生じたのはスポーツの準備段階、試合などの実施段階、終わった後の段階かの時差別の条件、初心者、体育の授業か、プロ選手の試合か、など教育条件、職業条件も含めたスポーツ主体の条件等が、過失責任を判定するときに考慮される要素となる。

スポーツ活動とかかわりをもつ施設・用具、方法、人について安全指導・安全管理を十分に尽くすことが重要である。この安全に関する環境づくりは、選手の自己管理も含めて、常に配慮することが大切なのである。

(2) スポーツ基本法は、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは，全ての人々の権利」と

7 When（いつ）、Where（どこで）、Who（だれが）、What（なにを）、Why（なぜ）、How（どのように）」という6つの要素をまとめた、情報伝達のポイントのこと。元々は新聞記事を書く際の原則で、5W1H に沿って整理し、5W1H にあたる内容を相手に伝えるようにすると、情報を分かりやすく、もれなく伝達することができる。

位置付け，基本理念を定めた第2条1項は「スポーツは，これを通じて幸福で豊かな生活を営むことが人々の権利である」と定めた。

スポーツに参加するもの同士には特別な信頼関係があり、競技中多少のケガが生じても、プロ野球チーム乱れての殴り合いの暴力行為がテレビで報道されても、法がスポーツの世界に介入しない。つまり、「スポーツの世界は固有のルールを持つ私的自治に任され、公序良俗に反しない限り、国家法は介入しないのを原則とする」という理由だ。

他方、日本のスポーツ界は、まだまだ監督･コーチと選手が先輩後輩という「文句の言えない」「泣き寝入り」等暗黙のルールで身分の上下を規律する非近代的な封建的残滓をもつ体質といわれる。大人が子どもにスポーツ指導をなす際にも大人社会の暗黙のルールは同様だ。

今、日本のスポーツ界は、殴る、蹴る、突き飛ばすなどの身体的制裁、言葉や態度による人格の否定、脅迫、威圧、いじめや嫌がらせ、さらに、パワー･ハラスメント、セクシュアル･ハラスメントなど、様々な不正や暴力行為が生じ、学校体育や競技スポーツ団体がスポーツの価値を否定し、基本的人権たるスポーツ権を侵害する事態が生じている。

いわば大地震・津波のような暴言・暴力に対する批判が日本スポーツ界を覆ったといえよう。正に現代ではスポーツにおけるフェアなかつ民主的な手続きを求めるガバナンス（組織の統治）が問題となっている。

第2　暴力根絶への社会運動とスポーツ界の対応

1　スポーツと倫理

公益財団法人日本体育協会は今から7年前の2004（平成16）年4月1日「財団法人日本体育協会及び加盟団体における倫理に関するガイドライン」を制定した。

スポーツ指導の際に問題解決の手段として暴力や脅迫的な言動を厳に戒める。親しみの表現であっても、個人によって受け止め方が異なり、安易に性的言動、表現を行うことを厳に戒める。上司と部下、先輩と後輩などの上下関係を利用し、立場の弱い者に、人道的に反する行為を強要しないこと。補助金の不適切な会計処理や横領など金銭管理に関する健全化等々、留意すべき点を指摘し、倫理や社会規範に関する意識の啓発と問題の発生を未然に防ぐために「倫理に関するガイドライン」がまとめられた。

もとより、スポーツ指導者は指導に当たりスポーツ参加者の名誉を尊重して個々のプライバシーを配慮しなければならないことは当然である。

一般的にスポーツに関わる全ての人々の自由かつ平等な人間関係を形成しなければならない。しかし、往々にして当たり前の感覚として、スポーツ指導者は権威的に選手との間に主従関係を作り勝ちである。それゆえ、暴力・セクシュアル・ハラスメント・地位利用など不適切な言動を防止するため自覚的な意識改革が求められている。

2　暴力と体罰のマスコミ報道

今、スポーツ体罰事件がマスコミに次々報道され、さらには競技スポーツ団体内部の関係者による助成金流用事件など、日本のスポーツ界を形成する役員・コーチを含め団体組織にガバナンス問題が生じていることが明らかになってきた。

契機は、2012（平成24）年大阪桜宮高等学校における運動部活動の現場で、指導教師によって暴力を受けたバスケットボール部主将の高校生が自殺する痛ましい事件が起こった。

また、女子柔道における15名のトップアスリート選手への指導者による暴力行為が顕在化した。

その後、学校におけるスポーツ体罰事件が次々マスコミに報道され教育界・スポーツ界における暴

力行為が大きな社会問題として世間の大きな注目を集め、日本のスポーツ界から暴力行為を根絶しなければスポーツ界は国民の支持を得られないという社会運動が生じている。

スポーツ界を震撼させた柔道日本代表女子選手に対する暴力・パワー・ハラスメント問題で、暴行した警察官たる園田隆二巡査部長（元柔道全日本女子代表監督）に対し所属先の警視庁は懲戒処分より軽い内規に基づく警務部長の訓戒として、暴行罪の立件を見送る方針にしたと報道された（朝日新聞2013-4-27）。

その理由は、暴言・暴行行為が「合宿で練習態度が消極的だと5選手に対しほうきの柄で尻をたたく、世界大会に負けた20代の選手を平手打ちにした、『消えろ』『家畜じゃないんだから自分で動け』等暴言を吐いた」行為であること、人事課の調査によると「痛みや恐怖で成長させる指導方法は道から外れていた」と反省していること、被害者側15名の女子選手が代理人弁護士を通じて刑事事件を現在では望まないこと等から人事課は指導の一環として指導の行き過ぎの行為と考慮し、暴力・パワー・ハラスメントとして立件せず先例に基づく警察組織の内部処置だという。

法律実務家の判断としては、暴行した警察官として立件可能な事件で、警視庁が検察庁に送検する必要もない軽微なものと裁量できるか、世間の動向から同意できない判断である。

他方、新聞・テレビで報道された通り、学校教育の場で本来生徒の生命・身体の安全を配慮する義務を負う教師が、生徒の生命・身体を脅かす体罰事件が後を絶たない。その背景には鉄拳制裁やビンタが「教育への熱意の余り」「多少の厳しさも必要」といった体罰容認の雰囲気があるからだ。

大阪市立桜宮高校の体罰自殺が社会問題化してから教員や学校の自主申告が増え「2012年4月から2013年1月までの全国公立小中高校・特別支援学校における体罰をした教員は合計840人」に及び「バカ・死ねの暴言、グランド10周命令のしごき、顔の平手打ち・頭突き・足蹴りなど体罰行為」は様々生じ「体罰教員の数は2011年度の2.1倍で、840人のうち懲戒処分が84人、免職2人」と文部科学省の中間調査結果を報道した（朝日新聞2013-4-27）。

学校教師は学校教育法（昭和22年3月31日）第11条（学校生徒等の懲戒）で「校長及び教員は、教育上必要があると認めるときは、文部科学大臣の定めるところにより、児童、生徒及び学生に懲戒を加えることができる。ただし、体罰を加えることはできない。」と定める。

しつけの一環としての懲戒と、体罰との区別の判断は微妙だが、「よい体罰、悪い体罰」はない。いくら教師に愛情・熱意があっても体罰は故意の刑法犯である。有形力の行使である暴行行為は法律で禁じられている以上、未成年者の親権者父母の承諾でも違法性を阻却しない。

3 今スポーツ現場からの改革が進む

スポーツ法からの視点は、スポーツにそもそも「体罰」という言葉はなく刑法の該当する「暴力」という言葉のみだ。

このような暴力行為問題全体を競技スポーツ団体の「スポーツガバナンス」として把握し、組織の土台から改革すべき観点から正しい解決を導く必要がある。

中学・高校の教育現場で生じる「指導の行き過ぎ」たる学校体育や部活動体罰事件と金メダルへの「勝利至上主義」を目指すトップアスリート指導の競技スポーツ現場の暴行事件とは場面が全く異なり「質が違う」という点だ。

ここでの問題は、過去スポーツ界において暴力行為が存在することが周知の事実であり、十分に認識しながら、多くの競技スポーツ団体では、何ら対策をとってこなかった、という事実である

まずは暴力問題を解決するため競技スポーツ団体は暴力排除宣言で意思表明をなし、さらに声なき声を把握するため解決の糸口を見いだすべく実態調査をする努力すらなかったというのが日本スポーツ界の現状であった。

2013（平成25）年4月25日、日本青年館で「スポーツ界における暴力行為根絶に向けた集い」が開催され、日体協、JOCなど5団体により「暴力行為根絶宣言」が採択された。

宣言文は「私たちの愛するスポーツを守り、これからのスポーツのあるべき姿を構築していくためには、スポーツ界における暴力行為を根絶しなければならない。指導者、スポーツを行う者、スポーツ団体及び組織は、スポーツの価値を守り、21世紀のスポーツの使命を果たすために、暴力行為根絶に対する大きな責務を負っている。このことに鑑み、スポーツ界における暴力行為根絶を以下のように宣言する。」と唱う。

この暴力行為根絶宣言に従い、各競技スポーツ団体においては、暴力など不正実態調査や、被害者から安心できる窓口の設置、暴力行為の有無を調査すべく公の第三者機関の設置、暴力根絶に向けての啓発活動が行われなければならない。

グッド・ガバナンスを作り上げる主体は、スポーツ界に活動している内部の人々、外部の利害関係人である。単にスポーツ人の個人的な間違った性格といった「小さな個別問題への対応」ではなく、競技スポーツ団体制度、組織、慣行あるいはコンプライアンス（遵法意識）など、「大きな組織の体質の根幹」を改革しなければ解決ができない。

第3　暴言・体罰・セクハラ・パワハラなどの判例

1　スポーツ体罰について

(1) 暴力行為の違法性

暴力行為はスポーツに名を借りても個人の基本的人権を侵害するもので、違法として法的処罰の対象となる。

スポーツ指導者がスポーツ活動の結果、誤って人身事故を起こした場合、刑法的には過失犯、つまり過失傷害罪、過失致死罪、業務上過失致死傷罪となる。

しかし暴力や体罰による事件は、故意犯として暴行罪または傷害罪と刑が重いのである。

民事上の損害賠償では、体罰を行ったスポーツ指導者に不法行為責任（民法709条）、使用者がいる場合には使用者責任（民法715条）が発生し使用者も損害賠償責任を負う。[8]

8　刑法：
（過失犯）
- 過失傷害罪・刑法第 209 条「過失により人を傷害した者は、30 万円以下の罰金又は科料に処する。」
- 過失致死罪・刑法第 210 条「過失により人を死亡させた者は、50 万円以下の罰金に処する。」
- 業務上過失致死傷罪・刑法第 211 条「業務上必要な注意を怠り、よって人を死傷させた者は、5 年以下の懲役若しくは禁錮又は 100 万円以下の罰金に処する。重大な過失により人を死傷させた者も、同様とする。」

（故意犯）
- 暴行罪・刑法第 208 条「暴行を加えた者が人を傷害するに至らなかったときは、2 年以下の懲役若しくは 30 万円以下の罰金又は拘留若しくは科料に処する。」
- 傷害罪・刑法第 204 条「人の身体を傷害した者は、15 年以下の懲役又は 50 万円以下の罰金に処する。」
- 傷害致死罪・刑法第 205 条「身体を傷害し、よって人を死亡させた者は、3 年以上の有期懲役に処する。」

民法：
- 民法 709 条（不法行為による損害賠償）
「故意又は過失によって他人の権利又は法律上保護される利益を侵害した者は、これによって生じた損害を賠償する責任を負う。」
- 民法 715 条（使用者等の責任）
「1　ある事業のために他人を使用する者は、被用者がその事業の執行について第三者に加えた損害を賠償する責任を負う。ただし、使用者が被用者の選任及びその事業の監督について相当の注意をしたとき、又は相当の注意をしても損害が生ずべきであったときは、この限りでない。
2　使用者に代わって事業を監督する者も、前項の責任を負う。
3　前 2 項の規定は、使用者又は監督者から被用者に対する求償権の行使を妨げない。」
- 民法 415 条（債務不履行による損害賠償）
「債務者がその債務の本旨に従った履行をしないときは、債権者は、これによって生じた損害の賠償を請求することができる。債務者の責めに帰すべき事由によって履行をすることができなくなったときも、同様とする。」

(2) 懲戒権の内容

法的には、父母は親権者として「必要な範囲内で、自ら子を懲戒できる」(民法822条) と規定する。また学校教師は学校教育法 (昭和22年3月31日) 第11条 (学校生徒等の懲戒) で「校長及び教員は、教育上必要があると認めるときは、監督庁の定めるところにより、学生、生徒、及び児童に懲戒を加えることができる。ただし、体罰を加えることはできない。」と定め、体罰ではない懲戒は、間違いを正すため叱ったり、強く注意したり、教室内に立たせる等の事実行為たる懲戒は心身の発達が未成熟な少年たちを、教化育成するために法律によって許されている。

法務省法務調査意見 (昭和23年12月12日) は体罰に該当する具体例について「懲戒の内容が身体的性質のものをいい、例えば殴る、蹴るのような身体に対する直接の侵害を内容とするものはもちろん、端座、直立、居残りをさせることも、疲労、空腹その他肉体的苦痛を与えるような懲戒」を挙げている。

(3) スポーツ指導契約

スポーツ指導者の場合、「スポーツ指導契約」の合意の一つとして、保護者たる法定代理人親権者父母から、スポーツ指導に必要な範囲で少年たちを懲戒することの了承を得ていれば懲戒は許される。ただし、この場合でも「体罰」は許されない。なぜなら体罰とは少年に対して「生の暴力」で行われ、明らかに懲戒を越えて肉体的苦痛を与えるものであり、体罰をもって少年に恐怖心を与え規律に従わせるという、正に非教育的な行為だからである。

しかも、体罰が法律要件で許容されていない結果、例え両親との契約で許されていても親権の乱用である。体罰の範囲や程度が個々の少年スポーツ指導者の自由裁量とすれば、例えばハードトレーニングがシゴキとなり感情も込められて傷害の可能性は極めて高く、どんなに注意しても身体事故は不可避となる。

2 参考判例……体罰について

判例は体罰に関して厳しい判断を下してきている。

① 福岡高裁平成8年6月25日 (判例タイムズ921号297頁)

私立大学附属女子高校において、生徒が必要なく教室にいたため教諭が教室から出そうとした際に、スカート丈が校則違反となっていることに気付き、これを注意したところ、口答えをしたことから、生徒の肩部付近を2回連続して力を込めて突き、さらに右側頭部付近を突き上げるなどの暴行を加えたことによって生徒を傍らのコンクリート柱等に激突させ、その結果生徒を死亡させた事件で、判決は傷害致死罪により懲役2年の有罪判決を下した (控訴審でも維持)。

弁護人は、執行猶予付き判決を求めたが、裁判所は、被告人が危険の大きい場所で怒りの余り我を忘れて手加減を加えず、いきなり強い暴行を加えたこと、被告人は、日頃から体罰禁止は建前にすぎないと思って安易に力に頼る指導をしており、本件においても激怒に駆られて短絡的に暴行を加えたこと、動機は専ら「私的な怒りの感情」に基づくこと、本件の結果が重大であること、本件が社会に与えた衝撃が大きいことなどの理由をあげ、被告人を懲役二年の実刑に処した (求刑懲役三年)。

裁判所は「学校教育法11条がただし書で体罰を禁止しているのは、体罰がとかく感情的行為と区別し難い一面を具有している上、それらを加えられる者の人格の尊厳を著しく傷付け、相互の信頼と尊敬を基調とする教育の根本理念と背馳しその自己否定につながるおそれがあるからであって、問題生徒の数が増え問題性もより深化して教師の指導がますます困難の度を加えつつある原状を前提としても、その趣旨は学校教育の現場においてなによりも尊重、遵守されなければならないことはいうまでもない。ましてや、生徒が反抗的態度を取ったからと言って、教師が感情的になって暴行を振るうことは厳に戒められるべきことである。」と体罰禁止の意味づけを述べている。

② 鹿児島地裁平成2年12月25日判決（判例時報1395号124頁）は「ところで鹿児島市においては、傷害が発生しないにせよ、本件体罰に近い程度の体罰がしばしば行われ……学校関係者や保護者の一部で、やむおえないこととしていわば容認されていることは、公知の事実ともいえることを考慮すると……原告の精神的打撃を些少に見るべきではない。」と体罰を生み出す社会構造を指摘する。

③ 千葉地裁昭和55年3月31日（判例時報1112号58頁）は、千葉県立高校一年の女子生徒が「必殺宙ぶらりん」と称する懲戒懸垂で落下負傷した事件で、損害賠償請求は認容したが「教師が生徒に傷害を与える意思で懸垂をさせたのではない」「ことさら長時間にわたって生徒らに懸垂したままの状態を保持させようとはしていない」として体罰は否定した。しかし、損害賠償が認められたのは体罰はないとしても「体育授業の本来的目的から外れるものであるから、それを行う必要があり、その方法が通常行われているもの（例えば運動場内のマラソン、うさぎ跳び、正座など）にして社会通念上相当にして、かつ危険を伴わないことを要する」と裁判官は判断し、懲戒の限度を越えた違法性があると認定したからである。

④ 鹿児島地裁平成24年1月12日判決

高校サッカー部の寮監が、1年生キャプテンに対して、他の1年生部員の数名が寮に帰らず寄り道をしたことを理由に腹や胸のあたりを5～6回蹴り付け、またノートを提出せず顔を洗わず朝食会場に来た1年生がいるということで他の生徒の代表と称して1年生キャプテンの顔を濡れタオルで数回はたき、練習の際にミスをしたことからグラウンドから出るように命じたが、これに応じないと外へ連れ出し，お菓子を投げ付け、下半身を10回以上蹴り続けた各行為について、裁判所は体罰に該当し、故意による不法行為であるとして、165万円の損害賠償を認めた。

⑤ 県立高校陸上部の顧問教諭の体罰女子高校生が自殺・岐阜地方裁判所平成5年9月6日判決（判タ851号170頁）

X1とX2の子Aは、昭和58年4月、Y1の設置する県立高校に入学し、陸上競技部に所属して、保健体育担当教諭Y2の指導の下に毎日やり投げの練習に励み、県高校選手権大会で優勝するなどして活躍していた。

昭和60年3月23日早朝、Y2の過酷な練習、暴力・暴言等に耐えかね、自宅の自分の部屋で首をつって自殺するに至った。

【判決の概要】精神的損害に対する慰謝料として300万円を支払うよう命ずる。

教諭Y2がAさんの頭部を竹の棒で数回殴打したこと、やりで頭部を腫れるほど殴打したこと、顔面を殴打し大腿部を強く蹴ったことなどは、明らかに違法な体罰である。長時間土下座ないし起立させたまま行った説諭は違法な身体的拘束であるほか、侮辱的発言も違法な行為に該当するとして、高校設置管理者Y1の国家賠償責任を肯定した。

しかし、本判決は、高校陸上部の指導教諭の生徒に対する体罰等について学校側の損害賠償責任を認めたが、右体罰と生徒の自殺との因果関係を否定し、また教諭Y2については公務員個人の責任は問えないとし、その損害賠償責任を否定した。

⑥ 私立高校野球部監督の暴行・強要罪（懲役1年6月・執行猶予3年）・岡山地方裁判所倉敷支部判決平成19年3月23日（裁判所HP引用）

野球部監督Xは部員間の暴力事件や掃除を怠ける部員に対し生活指導と称して部員2名の顔面を手拳で殴打した。野球部監督Xの指示に従わないとして、部員11名を全裸でランニングさせるなど強要した。

【判決の概要】野球部監督Xを暴行罪と強要罪として懲役1年6月、執行猶予3年の有罪判決を下した。学校という限られた社会の体罰で、野球部監督の暴行は教育的活動として節度を有しておらず、父母の賛同を得られない行き過ぎた行為で学校教育法の禁止する体罰であること。全裸ランニングは

黙示の脅迫により、部員の畏怖状態で敢行され、生徒に嫌悪感を与え、尊厳を傷付けた。部員や父母の同意を到底得られない義務なき行為をなしたことは明らか、と判断した。

⑦　最高裁平成21年4月28日第3小法廷判決（判例タイムズ1299号124頁）

公立小学校の教員が、悪ふざけをした2年生の男子を追い掛けて捕まえ、その胸元を右手でつかんで壁に押し当て、大声で「もう、すんなよ。」と叱った行為は、男子が、休み時間に、通り掛かった女子数人を蹴った上、これを注意した上記教員のでん部付近を2回にわたって蹴って逃げ出したことから、このような悪ふざけをしないように指導するために行われたものであり、悪ふざけの罰として肉体的苦痛を与えるために行われたものではないなど判示の事情の下においては、その目的、態様、継続時間等から判断して、教員が児童に対して行うことが許される教育的指導の範囲を逸脱するものではなく、学校教育法11条但書にいう体罰に該当せず、国家賠償法上違法とはいえないと判示した。

本判決は、一般的にこの程度までは体罰ではないとした裁判例ではないと解されるので、一般化して理解しないことが重要である。

3　ハラスメント（セクハラ・パワハラ）

(1)　1997年9月12日より14日まで神奈川県立伊勢原射撃場での、クレー射撃競技国体リハーサル大会で起こった事件について、テレビ及び新聞各紙は補助員として参加した県立伊勢原高校の女子生徒が一部の選手や役員から淫らな言葉を掛けられるなどセクハラ行為を受けていたことを報じた。さらに、2年後の1999年10月の熊本国体で、日本クレー射撃協会の競技役員二人が手伝いの女子中学生に「胸が大きい」などと言ったり、体を触ったりした問題により、2000年1月7日に理事20名全員が辞任した。

(2)　モラルの欠如と法的責任

いままで泣き寝入りで表沙汰にならなかったが、最近のスポーツ界において問題視されているのが、セクシュアル・ハラスメントと言われる男性スポーツ指導者による女子選手や女性指導者への性的モラルの欠如である。

通常セクシュアル・ハラスメントとは、相手の意に反する執拗な性的な言動と言われ、「相手を不快にさせる性的な言動により、スポーツに携わる環境や、日常生活を送る環境を悪化させることをいう」と定義される。

セクシュアル・ハラスメントは、その行為態様によって、刑法上の強姦罪、強制わいせつ罪、痴漢行為等に該当する。

民事上は、性的自由ないし性的自己決定権等の人格権を侵害するものとして違法となり不法行為に該当し（最判平成11年7月16日労働判例767号14頁，（原審）名古屋高判平成8年10月30日判例タイムズ950号193頁）、損害賠償請求権を発生させる。

この場合、加害者に不法行為責任（民法709条）が生じるのはもちろんであるが、その使用者がいる場合には使用者責任（民法715条）が成立し、被害者との間に雇用等の関係があるときは債務不履行責任（民法415条）が成立し、使用者にも損害賠償責任が発生する。

(3)　商業スポーツ施設など企業における雇用契約関係であれば、平成11年4月1日改正施行された、雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律（男女雇用機会均等法）第21条（職場における性的な言動に起因する問題に関する雇用管理上の配慮）が、「事業主は、職場において行われる性的な言動に対するその雇用する女性労働者の対応により当該女性労働者がその労働条件につき不利益を受け、又は当該性的な言動により当該女性労働者の就業環境が害されることのないよう雇用管理上必要な配慮をしなければならない。」とセクシュアル・ハラスメントの防止義務を

定め、違反行為は裁判沙汰に発展する事態というのが一般常識である。

従って、企業はセクシュアル・ハラスメントが生じないようにする配慮義務があり、もし上司と部下が仕事に関連してセクシュアル・ハラスメントが発生したときは、使用者責任が追求され、複数の加害者がいるときは共同不法行為責任が問われる。

労働法の観点からは、加害者に対する懲戒処分事案（解雇、降級･降格、配置転換、戒告）となる。

4　参考判例・・・セクハラ・パワハラについて

① 東京地裁平成12年3月10日（判例時報1734号140頁）は会社代表者から入社以来長期間にわたり性的嫌がらせを受け、不当に解雇された事件で、不法行為たる強姦未遂行為により心的外傷ストレス障害となったことを考慮して慰謝料を180万円と算定した。

② 千葉地裁松戸支部平成12年8月10日（判例時報1734号82頁）は市議会で男性議員が女性議員に「男いらず」と呼び掛けた行為が、議員として保持すべき品位を欠いた女性蔑視の侮辱的な発言であり、女性議員の人格権、名誉を侵害した不法行為となること。男性議員の発行する情報誌の記事に「オトコいらず」と記載し不特定多数に配布する行為は名誉毀損・人格権侵害として執拗さ・害意の強いセクシュアル・ハラスメントに該当し、金40万円の損害賠償を認容した。

③ 仙台高裁平成13年3月29日（判例時報1800号47頁）は大学の女子職員が大学教授から性的嫌がらせを受けたことは不法行為（民法709条）に該当するとして慰謝料200万円を認容した。

裁判所は大学教授の合意に基づく性的関係との抗弁に対し、「被控訴人（女子職員）が控訴人（大学教授）を信頼し、また、その指示・要求に従わざるを得ない立場にあるのを不当に利用して本件行為に及んだものというべきであって、その行為は非難されなければならない。」と判断し、控訴人（大学教授）の行為は「意に反する性的行為ないし性的関係を強要したものというべきであり、右行為は被控訴人の性的自由を侵害するものとして不法行為に当たる」と認めた。

ただし、女子職員の慰謝料請求金1000万円を第一審は600万円と認容したが、控訴審が200万円に減額する理由として、「被控訴人（女子職員）の行動も無警戒にすぎ、本件現場においても、被控訴人が控訴人の要求を断固として拒否する態度に出たならば本件行為にまで至らなかった」と指摘した。

④ 宮崎地裁平成22年2月5日（判例タイムズ1339号97頁）

公立中学校の教員が陸上部女子生徒にセクハラをしたことにより懲戒免職処分になったことに対して、その取消を求めた事案で、裁判所は、女子生徒にキスをした行為（3回）などの事実を認め、懲戒免職処分を相当として取消を認めなかった。

⑤ 鹿児島地裁平成24年2月15日判決

市立中学校に通っていた被害者が、校長から、わいせつ行為をされたことにより、多大な精神的苦痛を受け心的外傷後ストレス障害を発症したと認め、約67万円の損害賠償を市に命じた事案である。

第4　ガバナンスに対する弁護士の役割

1　ガバナンスと国際規格ISO26000

民間の非政府組織である国際標準化機構（ISO・本部ジュネーヴ）から国際社会で求められる組織の

社会的責任についてガイドラインISO26000が2010年11月1日に発行した。

ISO26000は、従前の第三者認証規格と異なり、ガイダンス文書（手引書）である。異なる文化･価値観、歴史・慣習などの違いを越えて、営利・非営利を問わず組織及び社会がますます強く求めてきている社会的に責任のある方法に関して、組織規模の大小または存在する国・地域に関係なく、ビジネス企業だけでなくあらゆる種類の組織が適正かつ健全な運営を行うため取り組むべき必要のある課題は何かを、世界的な共通理解として「社会的責任規格」を提示している。

例えば、根本部分である「第4章　社会的責任の原則」では、次の7つの基本的な社会的責任の原則について示している。

①説明責任　②透明性　③倫理的な行動　④ステークホルダーの利害の尊重　⑤法の支配の尊重
⑥国際行動規範の尊重　⑦人権の尊重

また、アクション部分である「第6章　社会的責任の中核主題に関する手引」では、次の7つの社会的責任に関連する中核主題、およびその課題について示している。

①組織統治　②人権　③労働慣行　④環境　⑤公正な事業慣行　⑥消費者課題
⑦コミュニティ参画および開発

つまり、上記の「社会的責任規格」の各要因を参考にして、持続可能な発展を目指すスポーツ競技団体の各種活動が、市民社会からかけ離れて独善的なものになっていないか、国際的なスポーツ競技団体であれば、世界的な視野を踏まえて偏りや欠陥がないか等を組織の現状を検証し、取り組むべき緊急課題が明確になるのである。

キーポイントは、組織の行動様式に係る3原則（説明責任、透明性、倫理的な行動）とともに、法規範の尊重に関する3原則（法の支配の尊重、国際行動規範の尊重、人権の尊重）が重要で、ISO26000が、法令遵守が組織の社会的責任の土台部分であるとの認識に立ち、組織が法令遵守を超える活動に着手することを奨励することを意図している点である。

ガバナンスに関して言えば、「①組織統治」は7つの中核主題の一つだが、組織が他の中核主題に取り組む際の土台部分であるという、ガバナンスの特殊な性格が強調されていることである。

例えば、スポーツ競技団体が社会的責任に対処するために効率的・効果的な組織統治は、社会的責任の7つの原則に基づいたもので、特にリーダーシップは効率的・効果的な組織統治に不可欠であり、さらに組織の健全化にとって「デューディリジェンス（Due Diligence・投資リスク調査）」が不可欠である。

2　スポーツガバナンスを確保する第三者独立委員会の設置

(1) 大相撲におけるスポーツガバナンス

大相撲の野球賭博事件など一連の不祥事を受けて、2010年7月10日、財団法人日本相撲協会は組織の改革を目的とした弁護士を含む外部11名の有識者による「ガバナンスの整備に関する第三者独立委員会」を設置した。

(2) 国民体育大会におけるスポーツガバナンス

公益財団法人日本体育協会は2010年9月14日、第65回国民体育大会「ゆめ半島千葉国体」に山口県からエントリーした成年選手が山口県に住民票を登録しただけで居住実態がない可能性があるとの外部指摘を受け、国体の参加資格を調査するために弁護士7名による第三者委員会を設置した。

国体の参加規定は、成年選手は、①居住地を示す現住所、②勤務先、③ふるさと選手制度が定める出身地、のいずれかがある都道府県から選手として出場できると定めているが、山口県の複数選手に「県での居住実態がない」とする資格違反の疑いが出たもので、これまで日体協は参加資格に

対して柔軟に対応してきたが、参加規定の解釈の相違が限界に達した可能性もあり、第三者委員会は弁護士7名で構成し、日体協の組織規定に従い「聴聞会」として組織された。

(3) 組織を巡る諸問題は、スポーツ競技団体に共通している。

相撲及び国民体育大会の問題だけでなく、他の様々なスポーツ団体などでも不祥事が発生してきたように、ガバナンスが欠落した公の組織内部には公金不正請求・背任横領事件・賭博事件・大麻事件・暴力事件・セクハラ・パワハラなど犯罪行為・法令違反・社会的非難を受ける不祥事が必然的に生じることを念頭におくべきである。

通常、ガバナンス機能不全に陥ったスポーツ組織の膿を出すには、当該団体自身が不祥事の原因など実態を解明し、自助努力で再発防止の抜本的な対策を講ずることはもちろんであろう。

しかし、大きくマスコミ報道された事件では、身内のみの調査・対策では到底世間の信頼を得るのが困難で、ファンに支援され、歴史と伝統ある国技大相撲が健全な組織に生まれ変わるために第三者による独立委員会の積極的な意義がある。

3　第三者委員会における弁護士の役割

第三者委員会は、不祥事を生じさせた者の法的責任を訴求する組織ではない。また、依頼する組織団体から独立し、中立かつ公正の立場を貫き、現在の組織経営者に例え不利な事実であっても公表し、ステークホルダー（利害関係人）のために調査・提言をなすが、もとより法的強制力を持たない組織である。

つまり、弁護士の論争場所として定められた裁判所における地位保全の仮処分・損害賠償訴訟やADRたるスポーツ仲裁機構のスポーツ紛争と異なり、法的強制力を持たない第三者委員会の発信はマスコミを通じた世論やステークホルダーに対する提言だ。

最終的に不祥事を引き起こした現在の組織経営者自身のためではなく、ステークホルダーさらには世論一般に向けて事実を調査・公表し、根本から不祥事の原因を排除して、スポーツ団体を健全化させて未来への存続と信頼回復の理解を得ることにある。

サッカーの熱狂的なサポーター（イングランドのフーリガンも然り）・野球の私設応援団を出すまでもなく、それぞれの国の国民性にもよるがテレビで観戦する各種スポーツファンの熱き思いや期待は様々で、全員一致の理解を得ることは不可能だ、という認識に立ちつつ、弁護士としては他分野の専門家たる有識者と協力しつつ、より良き組織再建策を探ることになる。

今後、司法の担い手たる弁護士の活動領域は裁判所における地位保全の仮処分・損害賠償訴訟やADR（裁判外紛争解決機関）たる「日本スポーツ仲裁機構」のスポーツ紛争だけでなく、スポーツ団体におけるフェアプレイ・スポーツマンシップを再構築すべく、スポーツガバナンスとしての第三者委員会も視野に入れる必要がある。

第5　体罰・暴力行為根絶をめざしたスポーツ指導の要点・・・日本スポーツ少年団活動を参考に

1　法律知識の必要性

スポーツ指導者は指導にあたって、事故防止に万全の配慮をしなければならない。もとよりスポーツに危険が伴う限り、スポーツ指導者が事故に直面することも避けられない。もし、スポーツ指導者が事故に直面した場合、まず、なすべきことは救護である。

不幸にして、事故が発生し、重傷者や死亡等重大な結果が生じたら、当然に責任問題が生じ、それが紛争、事件に発展することは、我々の見聞することである。

この場合、事故発生時点でのスポーツ指導者の適切な対処が、その後の問題の円滑な解決に決定的な影響を及ぼすといってよい。

それゆえ、事故時における措置およびその後の措置を適切なものとするためには、少なくとも事故の責任についての基礎的な法律知識を持ち、法的責任がいかなる場合に発生するかについて、十分に理解しておかなければならない。

児童虐待の防止等に関する法律第3条は「何人も児童に対し、虐待をしてはならない。」と定める。[9]

しかしながら、学校教育の場で本来生徒の生命・身体の安全を配慮する義務を負う教師が、逆に生徒の生命・身体を脅かす体罰事件が後を絶たない。

その背景には鉄拳制裁やビンタが「教育への熱意の余り」「多少の厳しさも必要」「口で説明するより手の方が分かりが早い」といった体罰容認の雰囲気があるからである。

2 日本スポーツ少年団の標語「小さな危険と大きな安全」

(1) 日本スポーツ少年団では「小さな危険と大きな安全」を標語としている。

ジュニア期のスポーツ指導者ほど楽しいものはない。

目の前にいる少年・少女は、純真無垢で、スポーツを愛する心を持ち、将来はオリンピック代表選手あるいは偉大なプロスポーツ家として活躍するかもしれない。自ら果たし得なかったこんな夢を抱きながら、ワイワイ・ガヤガヤと動き回る子どもたちを整列させる。我が子の指導を見つめる母親の熱いまなざしを意識しつつ、ときおり頭の角をよぎるのはケガや事故の心配だ。

大人の世界ならスポーツ事故は「自己責任」が原則である。

しかし、危険に対する判断能力が未発達のジュニア期のスポーツ指導者には、「安全配慮義務」という保護責任がある。安心して指導するための安全対策、つまりリスクマネジメントは、何だろうか。

子どもたちの健康状態を確認すること。眼の輝き、肌の色、衣服など指導者が確認するだけでなく、体調を自己主張のできる子どもに育てる。

用具・施設を安全点検すること。事前に器具の正しい取り扱いの指導や施設管理者からの危険情報の入手なども大切である。

無理のない活動・運動のプログラムが心の余裕を生む。子どもの能力に合わせて楽しい計画を立てるなど、安全なスポーツ環境に配慮している。

(2) 殊更スポーツ事故の危険性を強調し、危険のない音楽や文学を身に付け教養を高めれば良いのだ、と発言するのは余りに消極的な姿勢である。事故を恐れて、24時間保護の完璧な仮想空間を大人が造り上げても、少年たちを社会の荒波に生きる一人前の人間に成長させることはできない。ここでの積極的な安全対策は、スポーツに危険が伴う限り、完全な事故防止は不可能であるという事実認識に立つことだ。

少年たちの心と身体の状態を把握し、危険を予知し、いかにすれば事故の発生を少なく、事故の被害を小さくできるか、とのリスクに立ち向かう実践的な指導法から、回答が導き出される。

(3) 少年スポーツは人との競技・健康増進や遊び・楽しみという個人の面と同時に教育的な社会的有用性を持っている。

---

9 ・虐待の意義について、保護者が、監護する児童（18歳に満たない者）に対して「児童の身体に外傷が生じ、又は生じるおそれのある暴行を加えること」(2条1号)

・「児童に対する著しい暴言又は著しく拒絶的な対応、児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力（配偶者（婚姻の届出をしていないが、事実上婚姻関係と同様の事情にある者を含む。）の身体に対する不法な攻撃であって生命又は身体に危害を及ぼすもの及びこれに準ずる心身に有害な影響を及ぼす言動をいう。）その他の児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと」(2条4号) と定めている。

そこで日本スポーツ少年団では少年スポーツ指導に「小さな危険と大きな安全」という標語を掲げ、安全指導のキーワードと考えている。子どもたちは両手でつかみ損なったボールが顔に当たれば痛い、という経験を通じてスポーツが持つ「小さな危険」を体得する。

危険なボールに積極的に立ち向かい両手や足で上手に扱うテクニックや、危ないときは自己の身を守って避ける技術を習得することで危険を回避する能力を磨くのだ。

つまり、危険を管理する能力がスポーツを通じて自然に獲得できるわけだ。大人になった時、危険なボールは自動車や火災・病気等大きな危険に変わり、様々な事故・危機に直面したときに冷静に対処できる一助になる。

その意味でスポーツを通じて「小さな危険」を子どもの時から知ることは、将来の「大きな安全」を得る実益があるのである。

日本スポーツ少年団は、このような「少年スポーツにおける危機管理学（リスクマネジメント）」をスポーツ医学・スポーツ法学・スポーツ体育学が協力したネットワークの中で専門知識を活用し、一つの解決の道筋を構築している。

3　参考：ジュニアスポーツ指導の指針について

＜＜　スポーツ少年団における安全確保のための6の指針　＞＞

① 子どもにスポーツルールを守ることを教えよう。(安全指導)
② 絶対に子どもにケガをさせない心構えをもった活動計画の立案と実行をしよう。(安全管理)
③ 危険を感じたらすぐに安全対策に立ち上がろう。
④ 最悪を想定し、活動の中止を恐れない。
⑤ 地域の実情に応じた安全指導マニュアルを創り上げよう。
⑥ 保険に加入しよう。

＜＜　スポーツ少年団における紛争に対処する6つの指針　＞＞

① 人命救助など果たすべきことをまず果たす。
② 事故の事実関係を把握する。
③ 先例を学ぶ。
④ 説得と論証。
⑤ 仲間・父母後援会の信頼を得る。
⑥ 自己の行動に正しいという確信を持つ。

第6　スポーツ法の危機管理は逆転の発想から

1　法リスクについて

生きている限り、人は事故や紛争・トラブルに必ず巻き込まれる。

信頼しきった人に裏切られたと知るほど悲しいことはない。社会問題となった振り込み詐欺で若者に騙され老後の貯金を送金した老人、地下鉄駅前の貧者の一燈のボランティア募金活動が中間搾取されている事実、これは誰もが体験する現実だ。

他人の目から見て順調に人生を送っているように思える人でも、人知れず心の悩みがある。いま自分は幸せだと語る人に、突然不幸が襲ってくる。未来は予測できない以上、どうも人生に、法リスクは憑きモノだ、と割り切るしかない。

東日本大震災やバブル崩壊の経済不況など自分の手に負えない出来事ならば、初めから諦めもつく。常識的に窃盗や強盗など常習犯罪者でない限り、誰も積極的に法を犯すリスク負わないものだ。

つまり、金銭に関するトラブルなど法リスクは何時も、突然で、受け身で巻き込まれる。この時、ドギマギしても仕方がない。

安易で消極的な安全対策は、危険から逃れることであり、不可避的な危険を内在するスポーツを辞めればよいことになる。

これではスポーツの楽しみ、有用性を獲得できない。スポーツを楽しむ積極的な安全対策は、スポーツに危険が伴う限り、完全な事故防止は不可能であるという大前提を認識することである。スポーツ参加者の心と身体の状態を把握し、危険を予知（予見可能性）し、いかにすれば事故の発生を少なく、事故の被害を小さくできる（回避可能性）か、とのリスクに立ち向かう実践的な発想が安全を創りだす。

発生時のリスクコントロール……まずは事故・事件の被害が拡大することを防止し、リスクの除去と軽減（例えば、応急措置・救急医療を施す）を目標にする。ポイントはリスクをいかにできるだけ短い時間と少ない労力・費用でコントロールし、被害を回復するか、である。もちろん、損害保険・傷害保険の活用などスポーツ保険も有用である。

2 自助努力が道を拓く

それでは、事前に法リスクに対処できないものだろうか。トラブルは千差万別で同じものはない。確かに臨機応変に変化に対処するしかない。

しかし、事故や紛争・トラブルには、実は前兆があるのだ。

スーパーでの目玉商品289円のハムを買い忘れたと、慌てて買い物袋を置いたまま足早に冷凍売り場に戻った。わずか1、2分の差で2つの買い物袋は無くなった。隣に居た主婦は荷物の管理人ではない。衆人環視のなか置き引きされたのだ。

冷静になってみると、重い2つの買い物袋を置いたまま離れる時、盗まれるのではと一瞬不安を感じた。しかし、荷物は重いし、すぐ戻るので「マーいいや」と安易に決め付けたと悔やんだ。

社会は日々の連続関係にあり、人間関係が崩れる時にはきしみの音が出る。あなたの第六感は既に、相手の顔つきや態度から、何かおかしいと感じている。いくら性善説に立つあなたでも、相手を盲信してはならない。この危機感を感じたらすぐに安全対策に立ち上がることだ。

「マッチ1本火事のもと」小さな火種のうちに消火するのが鍵だからだ。法リスクへの対処も同じだ。裁判を体験したクライアントから話を聞くと皆それぞれ前兆を知り、後からあれが前兆だったと話す。そのときは大火にならないと軽く考えていたのだ。

3 危機管理は逆転の発想から

真の法治国家は、法秩序により誰でもが守られていることを意味する。法というルールは強者がごり押しをするためにあるのではない。弱者の人権を底上げすることこそ「法の下の平等」の意味だ。

日本人は何となく「安全と水」はタダと信じてきた。しかし、東日本大震災を境に「安全と水」にはコストが掛かると市民は自ら感じている。

① 「天災は忘れたことにやってくる」……事故・トラブルは本来予想できない。常に我が身に振り掛かるという意識が大切だ。つまり、スポーツに危険が伴う限り、完璧な事故防止は不可能なのだ。

② 「マッチ一本火事のもと」……リスク管理の基本は初期コントロールだ。「初動を制する」ことが被害の拡大を防止する。指差し確認が心と身体の基本。日常的な慣れと危険を感じても「まー、いいや」がミスを生む。

③ 「予見可能性と回避可能性」……リスク情報収集のコツは新聞を毎日見ること。他山の石、人の振り見て我が振り直そう。過失とは注意義務違反である。注意義務違反の構造は、予見可能性と回避可能性で成り立っている。

④ 「小さな欲が大きな危機をよぶ」……嫌な情報ほど第三者に公開する。内部の小さな秘密が外部の不信を拡大させる。身内の恥をオープンにできる度量が安心を生む。

⑤ 「危機管理は逆転の発想から」……誰でも不幸な事態を考えることは、楽しくない。しかし、リスクマネジメントは、立場を入れ替え、死亡事故・トラブルが発生することを大前提に、逆に安全対策を組み立てることがミスをなくす。

第7　最後に……2020年東京オリンピック開催にむけて体罰防止と人権擁護……

1　2020年東京オリンピック開催

2013年9月7日、アルゼンチンのブエノスアイレスで開かれたIOC総会で、2020年夏季五輪の開催地に東京が決定し、マスコミは喜びに沸く東京招致をトップニュースとした。

日本のスポーツ界は、体罰で揺れている。殴る、蹴る、突き飛ばすなどの身体的制裁、言葉や態度による人格の否定、脅迫、威圧、いじめや嫌がらせ、さらに、セクシュアル・ハラスメントなど、様々な不正や暴力行為が生じ、学校体育や競技スポーツ団体がスポーツの価値を否定し、スポーツ権を侵害する事態が生じている。

いわば東北大震災に比肩すべき大地震・津波のような暴力根絶批判が日本スポーツ界を覆ったといえよう。

東京五輪の成功の真価は、「スポーツにおけるガバナンス（組織の統治）」問題が握っている。

2　スポーツ庁

政府は2020年東京オリンピック開催に備え、「スポーツ庁」設置の検討に入った。

スポーツ行政を一元化するメリットはない、と言われつつスポーツ庁の創設構想は、平成23年8月24日に施行された「スポーツ基本法」の付則に記載がある。

文部科学省・厚生労働省・国土交通省・経済産業省など各省庁にまたがるスポーツ関連の行政窓口を統合したスポーツ庁でスポーツを国家戦略として位置づけ行政を整備する。

スポーツを主管する文部科学行政の力に頼り、競技スポーツ団体が行政指導を受けるだけの時代は過去のものになってきている。

新聞などマスメディアは、「スポーツは、我が国社会に活力を生み出し、国民経済の発展に広く寄与するもの」（基本法前文）として東京五輪を日本経済復興の旗印に、「日本のスポーツ界は長年、日本オリンピック委員会（JOC）が「強化」、日本体育協会（日体協）が「普及」と役割が分担されてきたことから、政府はスポーツ庁を新たな「司令塔」に据え、国家戦略としてのスポーツ振興を図る構えだ。」と報道する。

確かに、国立競技場をはじめ老朽化が進むスポーツ施設のインフラ整備計画から競技スポーツ中心

とするスポーツ環境はオリンピック招致でよくなると言えよう。

他方、「スポーツは、人と人との交流及び地域と地域との交流を促進し、地域の一体感や活力を醸成するものであり、人間関係の希薄化等の問題を抱える地域社会の再生に寄与するもの」（同前）とコミュニケーションの確立、さらに「スポーツは、心身の健康の保持増進にも重要な役割を果たすものであり、健康で活力に満ちた長寿社会の実現に不可欠である。」（同前）との生涯スポーツ確立の役割がある。

3 五輪の趣旨を全国に広めるスポーツ自治と基本的人権の擁護

スポーツ庁が設置され、競技スポーツ団体のガバナンス（組織の統治）は改善されるだろうか？

オリンピックに出場する15人の女子柔道アスリートへの体罰は、競技スポーツ界に警鐘を鳴らした。スポーツ界の組織役員が自らの責任と努力で旧態依然とした封建的な体質を、いかに改革に着手するか、個々の選手が自ら声を上げ、先輩後輩という上下の立場から選手の自立・自律でスポーツ組織を活性化させるか、2020東京五輪への目標を金メダル獲得への努力だけでなく、日々の選手生活を有意義にさせるべく競技スポーツ団体のグッド・ガバナンスを念頭に置かねばならない時代を迎えている。

五輪が国民のスポーツへの関心を高める良いきっかけになるが、国際的にも、日本がスポーツの価値をしっかり認めているとのイメージを作り、2020東京五輪というイベントをやって終わり、巨大な国立競技場を建て替えて終わりではなく、国民一人一人にスポーツが根付くようにすべきである。

取り分け、大人のスポーツ指導者が将来の日本スポーツ界を背負う子どもたちのスポーツ権が確保される基盤を整備することが必須となる。

<< 参考文献 >>

『詳解 スポーツ基本法』成文堂，2011年・日本スポーツ法学会編
『スポーツ法危機管理学』（エイデル出版2005年）
『スポーツの科学』（共著、日本学術協力財団2007年）
『スポーツにおける真の勝利・・暴力に頼らない指導』（エイデル出版2013年）

【横田】

菅原さん、ありがとうございました。御専門のスポーツと法の関係を、これまでスポーツ界というのは、やや一般常識と違った世界で、勝つためにはとか、あるいは、熱心に練習に取り組むというそういう雰囲気の中で、暴力もある程度、許されていた、許容されていた、そういう状況にあったわけですけれども、最近のいくつかの事例をきっかけに、スポーツ界でも暴力との取組が真剣に行われるようになってきました。また、裁判所もこの動きに対して厳しく対応するようになって、裁判においても損害賠償を認める判決が出たり、場合によっては刑事罰を認めるという状況にもなりつつあります。現在、スポーツ界における暴力撤廃の動きが急速に進んでいるという状況を御説明いただきました。まだ完全に問題は解決していないと思いますけれども、一時に比べるとスポーツという閉ざされた世界の中で起こっていることが我々の目にも見えるようになり、そして状況が改善される方向に向かうのではないかと思います。

菅原さんは、2020（平成32）年の東京オリンピックに向けて、さらにその点で改善が進むと良いという御期待を込めて発言をされたと思いますが、そういうことも含めて、この後のディスカッションの中で、スポーツ界と暴力の関係について考えてみたいと思います。

山口　由美子（親の会「ほっとケーキ」代表、子どもの居場所「ハッピービバーク」代表）

【横田】

次は、山口さんの基調報告です。山口さんは、ここ長崎のお隣の佐賀県の佐賀市内で、周囲になじめなかったり、自ら周囲と距離を持ったりしているお子さんあるいは不登校の子どもたちや親御さんたちのための居場所づくりの活動をされています。そういった子どもたちがどうしてそういう状況になったのか、何が原因なのか、そしてそれをどう克服していったらいいのかということについて、事件の被害者・加害者という両側面から、御自身の体験を含めて、考え、活動してこられた経験を基にお話いただけると思います。それでは、山口さん、よろしくお願いします。

【山口】


山口由美子さん

こんにちは、山口です。お隣の佐賀県からやって来ました。2000（平成12）年の西鉄高速バスジャック事件[10]、皆さんも御存じだと思うのですが、私はその被害者の一人です。この事件に遭遇したことがきっかけとなり、その後の不登校、引き籠りの親の会の創設や居場所の開設へとつながっております。その経緯をお話しできたらと思い、本日ここに登壇させていただきました。

まず、バスジャック事件のことからお話しいたします。2000（平成12）年の5月3日、私は佐賀駅バスセンター、11時50分ぐらい発の福岡・天神行きのバスに乗りました。この事件でお亡くなりになった塚本達子先生と一緒でした。バスに乗って、天神で行われるコンサートに向かっていたのですが、高速道路に入ってしばらくした時に、一番前に座っていた少年が突然立ち上がり、牛刀なる大きな包丁を振りかざし、「このバスは乗っ取った。荷物を置いて後ろに行ってくれ」と言いました。何事だろうと思いながら、私はほかの乗客と一緒に車内の後ろの方に下がって座っていたのですが、一人だけ居眠りをしていて気付かない乗客に、その少年が切り付けました。その時、初めて本気だったんだっていうことに気付きました。私は、本気で人を殺したいとか傷付けたいとか思って生きている子どもたちはいない、何かつらいことがあって、そういう状況に追い込まれたのかなと考えました。私は気功を学んでいましたので、今のこの少年の心は本来の心ではない、本来の心に戻ってほしいっていう気持ちで、気を送り続けました。

そのような状況の中、バスは東に向かって走り続け、運転手さんがトイレ休憩も必要じゃないかと提案してくださり、サービスエリアに停車したんですね。ところがバスの前に乗用車が1台2台と停まり始め、それに気付いた少年は、慌てて、バスを早く出せと言って、バスが出発したのを確認して、私たちが座っている後ろの方に来ました。そして、一人だけトイレ休憩に降りてらっしゃったのですが、その降りた方が高速道路を走っている車に知らせたのだと勘違いしたのか、本当にそうだったのか分からないのですが、少年は私の前に立ち止まり、「あいつは裏切った。連帯責任です」という言葉とともに、私のいろいろなところを切り付けました。私は座席に座っていられなくなり、通路に転がり落ち、座り込んで自分の流した血を見ながら、切り付けられた傷を感じながら、少年の心はこんなにしなければいけないぐらい傷付いていたんだ、ということを感じました。

そして、なぜか“この少年を殺人者にするわけにはいかない”、そういう思いが自分の中から沸き上

10　2000年（平成12年）5月3日に発生したバス乗っ取り事件。佐賀駅バスセンターから出発した福岡・天神行きの西日本鉄道高速バス「わかくす号」が、17歳の少年に乗っとられ、東に向かって走りつづけるバスの中で、少年は3人の女性客を切り付け、1人を殺害した。2ちゃんねる（インターネット掲示板）に犯人の少年による犯行予告の書き込みが残されており、その時のハンドルネームからネオむぎ茶事件（ネオ麦茶事件）とも呼ばれる。

がり、自分の身体を倒れないように支えて、なんとか倒れないで済んだんですね。その時、同時に、このまま死んでしまうんだなぁ、とも感じました。精神的にも肉体的にも追い込まれた時、人って生と死の、どっちでもいい状況にあるんだなぁっていうことを感じたんですね。

その後、乗客の一人が窓から飛び降りて逃げることができたのですが、先ほどお話した塚本先生が刺されていました。そういう状況の中で、バスはどんどん東に向かって走り続け、広島でようやくバスが停められました。バスが停まった時に、怪我人だけでもバスの外に出してくれという警察の要望に対して、少年はピストルに弾一発入れて持って来いと要求しました。警察の方は、ピストルは渡せないということを丁寧に説明され、その後、少年は防弾チョッキに要求を変えました。飽くまで、私の主観ですが、この時の少年は本当に人を殺す又は自殺するかのどちらでもいい状況にあったのではないかと思いました。ピストルに弾を一発込めて渡せというのは自殺しようという思いが、防弾チョッキというのは殺されたくないという思いが現れていたのではないか。本当にそういう何とも言えない、どちらに転んでもおかしくない状況を生きていながら、こういう事件を起こしてしまったんだろうということを感じました。

私はそれまで、人を殺したら、殺した人は、人の命を奪ったんだから、死刑だ、短絡的にそう考えていました。しかし、この事件に遭遇して、被害者と加害者の関係の中で、そういうものでもないんだなっていうことを実感しました。

少年は、中学時代にひどいいじめを受けたそうです。その後、高校になんとか進学したけれども、高校に通えない、という状態が続いたようです。そういう状況の中で、少年は、中学でいじめさえ無ければという思いから、中学校への襲撃を計画していたそうです。しかし、その計画が両親の知るところとなり、それだけはさせてはいけないという親の愛情だったと思うのですが、高名な精神科医に相談され、強制入院をさせられたんですね。不登校になる、不登校してる、ということは、子どもにとってとてもつらいことだと思います。学校に行けない惨めな自分、いつ親から見捨てられるだろうか、そういう不安の中を生きてきて、強制的に精神科に入院させられた時に、見捨てられたと感じたようです。両親に入院のとき、最後に言った言葉は、「覚えていろよ」だったそうです。私は、不登校を発端に、こういう事件が起こってしまった、どうしてだろう、という思いがあります。バスジャックの犯人の少年が包丁を振りかざした時に、とてもつらい厳しい状況を生きているんだなってことを直感的に感じることができました。なぜ、そのように感じることができたのか。実は私も娘の不登校の経験があるんですね。私が、不登校を受け入れられない間、愛情を感じさせない、つらい状況を生きていた時の娘のその時の状況と、犯人の少年の姿をオーバーラップしていたのかなと、後で思いました。

私は娘に聞きました。あなたの不登校のこと、大勢の人の前で話していい？話してほしくなかったら、お母さんはこのバスジャック事件について一切話さない。あなたの不登校のことを話さないと、少年のつらかった思いや、なぜ事件を起こしたのか、多くの人に分かってもらえないと思う。だから、あなたの不登校のこと、話してもいい？と聞きました。娘はしばらくして、いいよ、私は、お母さんやいろいろな人に話を聞いてもらったから良かった。あの少年は誰からも話を聞いてもらえなかったんだろうね。とてもつらかったと思うよ。だから、話していいよ、って。話を聞いてもらうだけでいい。答えは自分で出すから、ということを言ってくれました。

事件後、たくさんの方々の支援を頂きながら、私は少しずつ元気になっていきました。その過程で、私はカウンセリングを受けていたのですが、カウンセラーの先生から、あの子（犯人の少年）にも居場所があれば良かったのにねというお話を聞いた時に“居場所”だと思いました。そして、徐々に元気になって体調も回復した時に、居場所をしよう（作ろう）、と考えたんですね。ただ、居場所をしようと思っても、場所探しなどのいろいろな問題があったので、取りあえず家庭が居場所になればいい、という思いで、親の会（ほっとケーキ）を始めました。引き籠っていたり、学校に行けない子どもたちを持つ親同士が語り合って、共感的に子どもを受け入れるようになった時に、子どもって劇的に変わっていくんですね。そういう姿をいろいろな場で見せてもらいました。

一つの例ですが、引き籠りのお子さんをお持ちのお母さんが、親の会に相談に来られました。その

子は、お父さんとの関係も余り良くなかったということでした。学校に行けなくなり、一日中家に居て、寝間着のまま、着替えもしない。昼夜逆転も当たり前、そういう状況の中で、お母さんがとても疲弊して来られました。実は、私もバスジャック事件の後、寝間着を着替えるなんて考えられなかったんですね。普通に生きている人にとって当たり前の行為が、心も身体も疲れ切った時、傷ついた時には当たり前ではなくなるんですね。当たり前だと思っている全てのことに、ものすごくエネルギーが必要なのよ、そういうふうに話をした時に、お母さんは、それまで、自分のつらさ、自分がこうあってほしいという思いだけでお子さんを見つめていたとおっしゃったんですね。親子共々苦しかったと思います。でも、親の会の帰りに、お子さんのつらさに初めて気付かれ、涙が止まらなかったそうです。そのお母さんは、家に帰って「ただいま」と言ったら、初めて子どもが玄関に、お帰りって出てきてくれて、びっくりしました、とおっしゃっていました。お母さんの「ただいま」という声の違いに、引き籠っていた子どもさんは何かを感じられたんでしょうね。引き籠ってつらい思いをしている状況の子どもというのは、親や周囲の大人たちの感情的な部分にとても敏感になっています。私たちは親の会の活動を通じて、母親の「ただいま」の一言で変わっていくお子さんの姿を目の当たりにして、ほかの会員共々、親と子の関係の在り方など、たくさん、学ばせてもらっているんですね。子どもってすごいなぁ、本当にそう思いました。そのお子さんも、そうなったからって、すぐ動けるものではありませんが、少しずつ変わっていって、5～6年後には横浜に住むお姉さんのところに一人で行ったり、神戸まで旅行に行ったりするようになりました。そして、ずっと着替えることのなかった寝間着のファスナーを自分のかばんに付けたということを最近聞きました。自分がつらかった時にずっと一緒にいてくれた服への愛着もあるんだろうなと思いました。そういうふうに変わっていく娘さんを、そのお母さんと一緒に共有できたっていうのでしょうか、そういう物語を紡いでもらえるというのは幸せだなと、親の会の代表として感じております。

話が前後しますが、親の会の活動を続けていく中で、やはり子どもの居場所が必要だよね、ということになって、バスジャック事件の1年後に親の会を始め、さらにその1年後に、子どもの居場所ハッピービバークを開設しました。ここで、DVDを御覧いただきたいと思います。

（子どもの居場所「ハッピービバーク」の活動の様子が分かるDVD上映）
※以下、山口さんによる映像の解説

この映像は2006（平成18）年にKBC（九州朝日放送）で放映されたものですが、子どもの居場所の活動を約1年近くに渡って取材されて、まとめられたものです。これは市の青少年センターの体育館を借りて、バドミントンをやっている様子です。子どもたちが自主的に運動したいという発言が発端となって、スタッフが場所を探しだして、体育館を借りてバドミントンをやっています。

そしてこれは、ジャグリング[11]をやっている様子ですが、ここに映っている子は中学も高校も行かなかったんですけど、この映像からもう13年経っていまして、今は群馬にあるサーカス学校に通っています。

私たちは、ここに映っている小さな小屋を拠点に活動しています。ここは以前は焼き鳥屋さんだったらしいです。ここでは、私たちは子どもたちと一緒に御飯を食べることを大切にしています。子どもたちに何が食べたかを聞いて、材料の都合なんかも考えながら、スタッフが作っています。でも、中には、食べられない子もいるんですね。でもそういう子には強要はしません。この日は、そばとうどんを作って食べました。

保護者の方も何人か参加されているのですが、そういう人たちも一緒に、楽しく過ごしています。この日はたまたま誕生日会をしているところですね。この小屋は狭い部屋なのですが、でもこの距離感がいいのかなと思っています。子どもの居場所は持ち主の御厚意で無料で貸してもらっているので

11　複数の物を空中に投げたり取ったりを繰り返し、常に１つ以上の物が浮いている状態を維持し続ける技術を指す。

すが、持ち主の御都合もあり何か所かを転々としております。
これで、映像を終了します。ありがとうございます。

（DVD上映終了）

御覧いただきましたように、このような感じで楽しい時間を過ごしています。子どもたちは、皆、自分が学校に行かない、行けない、駄目な人間なんだというふうに思ってここに来る子が多いですね。スタッフは、子どもたちに対して、ここに来たのはあなた自身の意志で来たの、ということを確認します。もし、親の希望で連れて来られたのなら、無理に来なくてもいいんだよ、でもあなたが来たい時はいつでも来ていいよということを伝えます。先ほどの映像に映っていた子どもたちは、子どもの居場所の活動を始めてから3～4年経った頃のものでしたので、子どもたちのかなり元気な姿を見ていただきました。しかし、元気になっていく子もいれば、なかなか元気にならない子もいます。私たちの活動の基本は親の会であると思って、子どもの居場所も続けています。家庭が子どもたちの居場所にならない限り、なかなか子どもたちは元気になることができないのですね。仮にここで一週間に一回か二回元気になったとしても、本当の意味で元気にはなれない。家庭にも学校にも居場所がないというのは、とてもつらいことです。バスジャック事件を起こしたあの少年もそうだったのではないでしょうか。“あの子に居場所があれば”という精神科医の言葉……。子どもたちがありのままの自分で居ることができる、安心で安全な、そういう場が、居場所が、本当に必要なのだと感じています。

それから、私は被害者の視点に立った教育ということで、少年院や少女苑にも講話に行っていますが、私の話を聴いた子どもたちの感想文があります。その感想文の一部を紹介させていただきます。「山口さんはとても優しいと思いますが、それは同時に痛みでもあるんじゃないですか」ということが書かれていました。私は、初めは書かれていた“痛み”という言葉を見て、とても嫌な気がしたんですね。でも、しばらくその痛みというものを抱えながら生きてきて、私にはこの痛みがあるからこそ、今このような活動をしているのだな、動かしてもらっているんだな、と思うようになりました。きっと私の話と、感想を書いてくれた彼女の痛みとがどこかで共鳴したのかもしれません。そのような子どもたちの感受性、様々な問題を抱えながらも必死で生きようとする子どもたちとともに、これからも生きていきたいなと思っています。

【横田】
山口さん、ありがとうございました。皆さんもよく御存じの西鉄高速バスジャック事件で、山口さんは被害者として大変苦しい経験をされました。その大変な御経験の中で、加害者であった少年が一体どうしてそのようなことになったのか、少年も場合によってはつらい思いをしてここまで来てしまったのではないかと考えられた。やがて、同じような問題を抱える子どもたちの親御さんたちに呼びかけ親の会を立ち上げられ、子どもたちの居場所も作られた。DVDで見せていただいたような活動を続けておられる。私は大変元気付けられるお話だったと思います。

山口さんのお話の中で、加害者の少年が中学時代からいじめに遭っていて、高校に通うことができず、やがて親から精神科の病院に強制入院させられることになってしまう。その時に少年が親に「覚えていろよ」と言ったということを非常に印象深く話されました。このことは、最初に御報告いただいた小森さんのお話にありました、子どもに言ってほしくないこととして、いじめられたらいじめ返せ、やられたらやり返せっていうことは決して言ってほしくないということをメッセージとして出されたと思うのですが、それとつながっているのではないかと思います。

昨年、テレビドラマや小説で「倍返し」という言葉が流行語になり、世間の注目を集めていました。あの時の世間の受け止め方を思い返すと、特段何の批判もなく、大人の世界にもいじめがあって、会社ではああいうことがあるよな、という形で受け止められていました。しかし、あれを子どもの世界に置き換えると、大人の世界だと軽く聞き流されてしまっていた言葉が、子どもにとってはとても深

刻な言葉になるんだっていうことを、お二人のお話から感じました。大人が日頃考えている普通の人間関係で、大したことではないと思っているようなことであっても、子どもにとってはものすごく重いものになることがあるんだということを考えさせられる事例として触れられましたので、私の方からコメントさせていただきました。それについてどういうふうに考えたらいいかというのは、私もすぐに答えは出ないのですが、とても難しい問題だと思います。

吉田 恒雄（駿河台大学法学部教授、特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク理事長）

【横田】

次にお話いただく吉田さんは、子どもの虐待、不登校などを始めとした子どもの様々な問題について、大学の先生として研究をすると同時に、NPO法人における実践的な活動、そして子どもを保護する法令の作成などにも関わってこられました。そういう立場から、児童虐待の問題を中心にお話を伺いたいと思います。それでは、吉田さん、よろしくお願いいたします。

【吉田】


吉田恒雄さん

こんにちは。吉田でございます。私からは、人権侵害としての児童虐待というテーマでお話をさせていただきます。今、御紹介いただきましたように、私は大学で教鞭を取る傍ら、NPO法人児童虐待防止全国ネットワークにおいてオレンジリボン運動という活動をしております。皆さんは、オレンジリボンを御存じでしょうか？まだまだ知名度が低くピンクリボン[12]には及びませんが、児童虐待防止のシンボルマークであり、これを着けて子ども虐待のない社会を目指そうという活動をしております。オレンジという色は、様々な事情で親から離れて暮らさざるを得ない子ども、特に里親さんの元で生活している子どもたちが、自分たちの明るい未来の象徴としてオレンジという色を選んだと聞いております。そうしたことも含めて、虐待のない社会を一日も早く実現したいと思っております。

それでは、まず虐待とは何だろうかということ、それから何故起きるのか、虐待を受けた子どもはどのような影響を受けるのか、そして私たちに何ができるのかといったお話をしたいと思います。先ほど、この会場のロビーを通り掛かった際に、児童虐待に関するパネルが展示されていました。かなり詳しい内容の良いパネルがありますので、後ほどそちらの方も御覧いただければと思います。

まず児童虐待の定義についてお話します。虐待は、「身体的虐待」、「性的虐待」、言葉などによる「心理的虐待」、そして「ネグレクト（保護の怠慢、養育の放棄・拒否）」の4つが挙げられます。

この中で、「心理的虐待」については、DV[13]を目撃すること、広く解釈すると暴力的な環境の中に子どもを置くということも含まれます。そして、「ネグレクト」については、親ができるのに保護しない場合もあるし、残念ながら、子どもを保護することができない状況にあるという場合もあります。また親が行う場合だけが虐待ではなくて、その親の元に来ている他人が子どもに暴力を振るっている、これを制止しないという場合もネグレクトに分類されます。

このように4つに分類されている虐待ですが、現実にはこれらが複合的に発生します。暴力を伴う性的虐待であったり、身体的虐待からネグレクトに移行したりといったような例があります。ここで言っている虐待は比較的深刻な内容のものですが、虐待であるかどうかを判断する際に難しいのは、「しつけ」と何がどう異なるのかというところです。ここに図で表しましたけれども、最も深刻な虐待があって、その周囲に不適切な養育、さらにその周囲に通常の養育とあります。しかし現実は、必ずしもこのようにきれいに分かれるわけではないのです。実際にはグラデーションになっております。そして、

12 1980年代にアメリカで始まった運動で、乳がんの正しい知識を広め、乳がん検診の早期発見・早期診断・早期治療の推進などを目的として行われる世界規模の啓発キャンペーン、もしくはそのシンボルのことを指す。

13 Domestic Violence（ドメスティック・バイオレンス）：同居関係にある配偶者や内縁関係の間で起こる家庭内暴力のこと。近年ではDVの概念は同居の有無にかかわらず、元夫婦や恋人など近親者間に起こる暴力全般を指す場合もある。

これが順次、虐待に向かっていくのではなくて、通常の養育であっても、悪い条件が重なるといきなり虐待に至るということもあります。この辺りが、虐待対応の難しいところです。言い換えれば、虐待が発生したからなんとかしなければならないのではなく、その前の段階から対応しておかないと、虐待に発展してしまう恐れがあるのです。

虐待の現状ですけれども、こちらのグラフにもありますように、児童相談所と市町村に対する通報件数は年々増加しています。しかしこの数値は、必ずしも虐待が増えていることを示しているわけではありません。虐待は家庭という密室で発生する場合が多いため正確な数値が分かりにくいこともありますが、児童虐待防止法[14]ができて、虐待に対する世の中の認識、関心の高まりに伴って、虐待に気が付いた人が、児童相談所や市町村に通報しているということが結果として表れているのではないでしょうか。そういう意味では、オレンジリボン運動などの啓発の効果が上がっているのではないかと思います。同時に、子育てという観点で世の中を見てみると、貧困や保育所等の不足による子育て環境の未整備を始め、相談相手が少ない、ストレスの多い生活などが、虐待が増える要因ではないか、といった意見もありますが、数値のみでは、はっきりしたことは申し上げられません。

次に虐待による死亡事例ですが、年間約50 ～ 60件発生しています。子どもの数が減っているにも関わらず、この数値はこのところ変わっていません。社会の虐待に対する認識が広がっているにも関わらず、死亡事例の件数が変わらないというのは、相対的に見ると増えているのかなという懸念もあります。

児童虐待は様々なストレスが要因となっています。親の孤立や貧困、親の病気や障害、養育が難しい子ども、夫婦の不和、子どもの育て方が十分理解できない、自分たちが望まないところで子どもができてしまい可愛いと思えない、といったようなことなどが原因になります。

親の側の原因として、まず親族や地域社会などから孤立した育児といった社会的なもの、そして親の失業や借金、貧困、不十分な住環境といった経済的な事情が挙げられます。また、個人的な原因として、夫婦間の不和や親の未熟さ、養育能力不足が挙げられます。中でも、犯罪としか言いようがないというのが性的虐待です。日本では虐待全体では6%ぐらいしか通告されていません。これは氷山の一角どころか、表に出てきているのは本当にごくごく僅かであります。取り組むのが非常に難しく、表面化しにくい課題なのですが、子どもたちが性的虐待によってどれほど傷ついているのかということを考えると、一刻も早く本格的な対応をしなければいけない課題であります。ほかにも、親の側の原因として、精神疾患や薬物・アルコール等のへ依存などがあります。それから、親御さんに障害がある場合、御自身のことで精一杯で、ほかのことにまで手が回らず、子どもの養育についての理解を持ちにくいということもあります。それから、先ほどの菅原さんのスポーツと体罰に関するお話と同じように、厳しいことが子どものためなんだという誤った「しつけ」観というのも虐待の原因になると思います。さらに、ジェンダー[15]の視点からしますと、例えば父親は強くなければならない、といったような考え方も、虐待を深刻なものにする原因になるかと思います。また、別居や離婚、再婚、親子の同居の再開といったような家族構成の変化により、家族内の力関係が変わることなどによるストレスも虐待につながる原因となります。

次に、子どもの側に原因がある場合ですが、これは子どもに障害があったり、病気があったり、子どもの数が多いとか、望まない妊娠によって生まれてきた子どもであったりといったような、養育するのに難しい問題がある場合があり、それが親のストレスになっていくようです。

ここで児童虐待の特徴についてお話します。まず大人と子どもの間では圧倒的な力関係の差があります。これは、スポーツ指導者や教師による体罰と似ています。それと子どもは反撃できません。それから虐待が起こるのは自宅などの密室ですから、目撃者がいないため誰も通報してくれない、助けてくれないということもあります。加えて、継続的、反復的に、そして不規則に親からの虐待が続く

14　正式名称は「児童虐待の防止等に関する法律」。2000（平成 12）年 11 月施行。

15　gender：社会的・文化的な性のありよう。「男は仕事、女は家庭」といったように、性別によってこうあるべきという捉え方。

のです。どういうことかと言いますと、親の気まぐれで子どもが暴力を受けてしまうんですね。長期間に渡ると、子どもが逃げられるようになるまで暴力が延々と続いていきます。最悪の場合、子どもが自分で命を絶ってしまうということも考えられます。本来であれば、信頼すべき人、依存すべき人による虐待ですから、子どもは大人に対する信頼感を失っていきます。それがその後の子どもの成長に大きな影響を与えていきます。その被害は表面化しにくく、また子ども自身の力で状況を改善するのが難しく、虐待を受けた子どもに特有の症状が出てきます。また、そういった子どもを救出するには、当然、周りの人々の力が必要になってくるわけですね。こうした特徴から、虐待の問題の解決には、個人の問題、その家庭の問題ではなくて、社会全体の問題であり、人権の問題であるという視点が不可欠であり、とても重要であるということです。

次に、児童虐待が子どもに及ぼす影響についてお話します。最悪の場合は、自死ということになります。また、虐待によって命を奪われる子どもがおりますし、身体やメンタル面に大きな禍根を残すことになります。また少年院や児童自立支援施設等に入っている子どもの5 ～ 6割は深刻な虐待を受けているという調査結果もあります。

今、スクリーンに投影しているのは、「凍りついた瞳」というので有名な写真です。虐待を受け、つらい体験から意識を切り離そうとする反応であり、焦点が合っていない瞳の子どもの写真です。こういった子どもは、自分の周りに起きていることに関心を持とうとせず、成長したときに他人との信頼関係を持つことができにくく、平気で人を裏切るような、そういう行動を取るようになる可能性があります。

次はネグレクトを受けた子どもの写真です。小さなお子さんの手足が細く痩せている中で、お腹だけがぽっこりと大きく膨れています。かつてのアフリカで飢餓に苦しむ栄養失調の子どもたちにこうした症状が見られましたが、このネグレクトを受けた子どもも同じような状況になっています。

人権侵害という観点で見ると、弱者としての子どもが被害を受けるのです。こういった虐待の被害者である子ども、そして加害者である大人の両方に共通して言える特徴的なこととして、これが人権侵害なんだという自覚に乏しいことがあります。あなたのためだからと言って、体罰を行ったり、食事を与えなかったりする。それからもう一つは自分が悪い子だから親から叩かれても仕方がないというように子どもが思い込んでしまい、虐待傾向が固定化されていきます。

それから、保護すべき立場にある者による人権侵害があります。本来頼るべき信頼すべき大人からの虐待となると、子どもはもう逃げ場がないと思ってしまうという点があります。こうして自己肯定感や自らの尊厳が奪われていきます。こうしたことは、DV被害者の女性と同じような感情の持ち方に似ています。

先ほどもお話ししましたが、子どもへの虐待について人権侵害という点から見てみますと、誤った「しつけ」観、体罰肯定意識というものがあります。学校においては、体罰は法律で禁止されていますけれども、家庭では禁止されていないのです。良くないとは思っていても、法律上は禁止されていない。現在、世界的の30か国以上で、体罰を法律に基づいて禁止していますが、日本ではこれがまだできていません。

児童虐待防止法が2000（平成12）年に作られましたけれども、この法律は虐待した親を罰するという視点ではなく、子どもの人権を守るという観点から作られた法律、子どもを中心にして考えられた法律です。

子どもの虐待防止をどのように行うのか、何をすればよいのかというとき、通常は3つの段階で考えます。まず最初は、そもそも虐待が起きないようにするための「発生予防」。次は虐待が起きてしまった場合に問題を深刻化させないための「進行予防」。そして3段階目は問題が深刻になってしまって、どうしても子どもを親御さんの下に置いておけないという場合には、子どもを保護して、施設なり里親さんの下に置くといった「世代間連鎖予防」。この3段階目の施設や里親さんでの養育をきちんと行うことによって、子どもが成長し、そして自分が家庭を持ち、子どもを持ったときに、虐待をしなくて済むという、そこでまた発生予防の段階に戻る。こういう「世代間連鎖予防」のサイクルを作って

いかないと、本当の意味での児童虐待防止は実現できません。非常に時間が掛かり、裾野の広い対応が必要、これが虐待の対応問題であります。

虐待の問題は、かつては特殊な家で起こることといった捉え方をされていたのですが、ここ20年ほどでのその認識は大きく変わりました。どんな家庭でも、悪い条件が重なれば虐待が起きてもおかしくはない。そのためにはお子さんが生まれた段階から支援をしていく、つまり子育て支援をする。その延長線上として、虐待防止につながるということであります。だから、子育て支援策と虐待防止策というものをつなげて考えていくということが大事であります。

それから、発生予防という点で、母子保健、保健師さんの役割は大変大きなものがあります。かつては子どもの健康というところを重点的にやっていたようですけれども、最近は母子保健の健康診査、いわゆる健診の中でも、早期に虐待のリスクを発見するということを重視しているようです。

それでも、残念ながら虐待が起きてしまった場合の介入、進行予防ですけれども、これは発見、通報、介入という流れで進んでいきます。特に、介入に関しては、専門家からの通報だけではなくて、一般市民からの通報がとても大事になります。今日、皆さんのお手元の資料の中にオレンジリボンの小さな袋と私ども（児童虐待防止全国ネットワーク）のチラシを入れておきました。そこには周囲で虐待かなと思われることがあった時にはここに電話してくださいという電話番号が入っています。全国共通の児童相談所の番号（0570-064-000）です。虐待は密室で行われますから、子どもは逃げようがない。だから、周りの人々が気が付かなければ、子どもは救われない。そういう意味で、通報というのはとても大事な機能を果たします。

その次に重要なのが市民の役割。これは、虐待の問題は専門家だけで対処できる問題じゃない、私たち一人一人が虐待防止をすることができるんだということです。その一つがオレンジリボン運動。虐待に対する認識を深めていきましょうということで活動しています。それから二番目が子どもと子育てに対する「優しい眼差し」、これは行政ができることではないですね。我々市民だからこそできることです。電車の中で子どもが泣いてうるさいなぁと思うこともあるかもしれません。でもそのお子さんを抱っこしているお母さんやお父さんは、それ以上につらい思いをしている。ここにいらっしゃる皆さんも経験されたことがあると思います。そういった場面に遭遇したときに、少しでも優しい眼差しで、また、一声掛けるだけでどれだけ負担が軽減されるだろうかと、こういうことを私たちは続けていきたいと思っております。

もう一つは、子どもへの啓発です。子ども自身が虐待について理解するということです。先ほどのいじめのお話と同じかと思うんですね。自分がされてることは虐待なんだ、自分は虐待を受けない権利があるし、こういうふうにしてほしいんだということを子どもが自分の声で訴えられるようにしていく。そういった啓発とエンパワーメント[16]が必要になります。なかなか声を出せない子どもに対して、親が「お前が外でこのことを話すとウチはバラバラになっちゃうんだよ」ですとか、性的虐待をしている父親が子どもに対して、「お前がこのことを言うと、お父さんは刑務所に入らなきゃいけないんだよ」と、こういった言葉で、子どもの口を封じようとします。でもその時に、話してもいいんだよ、あなたは虐待から逃げる権利があるんだよ、ということを周囲の大人たちはきちんと教えていく必要があると思います。

そういう意味での人権啓発ですね。まずは親が、そして社会全体が、子どもの命の大切さを改めて確認し、虐待はあってはならないことなんだという認識を持つ必要がある。虐待はあってはならないこと、そしてその延長線上に体罰禁止ということも念頭に置いておかなければいけません。

そしてちょっとした子どもへの暴力や放置、傷つける言葉を投げ掛けること、これらが子どもにとってとても危険なことなんだと認識する。夏の暑い時期に、少しの時間だから大丈夫だろうということで車内に子どもを残して、親はパチンコに夢中になり、子どもを殺してしまう。これくらいなら大丈夫だろうという軽い気持ちが、簡単に子どもの命を奪ってしまう。ちょっとした暴力が頭蓋内の出血

16　Empowerment：目標を達成するために、個人やグループに対して、自律的に考え行動することを促し、支援すること。

につながるといったような、様々な危険も知ってもらう必要があります。虐待を受けた子どもの人生、子どもの心に長く残り続ける傷を負わせるといった大きな悪影響を及ぼすものだということを、十分に理解する必要があるかと思います。

虐待への対応をしていくには、様々な専門職種、そして市民を含めた連携がとても大事になります。虐待の原因は多様であるだけに、いろいろな人の関わりが必要になってくるわけです。

そうした意味で、私たちは、虐待のない社会というのを実現し得るはずです。現に北欧のスウェーデンでは体罰の禁止ということに取組を続けた結果、今では虐待の問題はあり得ないというような認識が一般的になっているというところまできているという話を聞いたことがあります。まずは子どもが安心して、安全に暮らせるように、そして親が楽しく安心して子育てできる社会を作っていきましょう。

子どもの尊厳、子どもの人権を認め、そして寛容な気持ちをもって社会全体で子どもを育てる、そして虐待についての理解を深めていく。そして、虐待というのは社会の病気なんだと、社会全体で、私たち一人一人が取り組むべき課題なんだという共通認識を持ちたいと思っております。

【横田】

吉田さんには、虐待という概念を明確に定義していただき、また虐待の種類とかその原因、特徴といったようなことについて分析をされて、最後に非常に具体的な対策についての御提言があったと思います。吉田さんのお話の整理の仕方は、その前の3人のパネリストの御説明とうまく重なり合う部分が多かったと思いますので、後ほど会場からの御質問を受ける中で、その点の関係を深める形で議論が進むのではないかと思います。

例えば小森さんのお話の中で、いじめと簡単に言うけれども、自死にまで追いやられてしまうような子どもにとってのいじめは、もういじめというレベルではなくて虐待と言っていいということもおっしゃられましたけれども、確かにそういう側面が実際にはあると思います。ですから、私たちが問題を理解する場合に、簡単にいじめという言葉だけである問題を解決しようとするのではなく、より深いところを理解する必要があるということだと思いますが、その点については吉田さんの分析である程度、位置付けが分かってきた気がいたします。この後、一旦休憩を取らせていただき、その後、会場からの御質問を中心にさらに議論を深めたいと思いますので、御協力お願いいたします。

＊このシンポジウムの「基調報告」の模様は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。
https://www.youtube.com/jinkenchannel

第 1-2 部　パネルディスカッション

【横田】

会場の皆さんにたくさんの質問を寄せてくださいましたことについて、感謝申し上げます。

まず最初に、菅原さんへの御質問です。質問の内容は、「加害者が体罰を行ったことを認めないと話が進展しないのではないでしょうか。そして、解決も見付けられないのではないでしょうか」というものと、「加害を認めない親や子どもの対応をどう進めていったら良いでしょうか」というものです。菅原さんの立場そしてこれまでの経験から御回答いただけますでしょうか。

【菅原】

加害者が加害の事実を認めないというのは、弁護士が常日頃遭遇している場面です。我々は証拠を固め訴訟に持って行く、証拠を固め刑事告訴をする、といったように、様々なパターンを取っております。

日本スポーツ振興センターという組織がございまして、昨年条文の一部が改正されました。これはスポーツ基本法に伴うものなのですが、現在スポーツ体罰をなくすための仕組みを作っている最中です。東京・大阪・名古屋、そしてその他の都市でも、人権相談的な窓口を作っていこうという話になっています。

そのポイントとなっているのが、スポーツにおける体罰の被害を受けた選手、これには子どもだけでなく大人も含まれますが、その人たちがどうしたら救われるのか。まずは、そういった人たちの話を聞くというところから出発するのだろうと思います。

体罰の被害があったことを認めるか否かについては、対応した弁護士の判断になるのだろうと思います。

刑事事件と違って、現実に犯罪を行ったというわけではありませんので、自白を勧めるということはほとんどありません。以上です。

【横田】

今の点については、また後で出てくるかもしれませんが、次の質問に移らせていただきます。

次は、吉田さんへの御質問です。「いじめや虐待が、社会の病気であり、その解消に向けて、社会全体で取り組む必要があるとの指摘は同感である。こういった問題の解消のために、各種メディア、特にテレビは大きな役割を果たすものであると考えるが、バラエティ番組などを見ていると大人としての見識が疑われるような場面が多々あると感じている。そこで、児童虐待とメディアとの関係性について意見を聞かせてほしい」吉田さん、よろしくお願いいたします。

【吉田】

ちょうど今、「明日、ママがいない」[1]という、児童養護施設を舞台にしたテレビドラマが物議を醸しています。児童虐待に関わる学会も声明を出すことを検討していたり、全国児童養護施設協議会や全国里親会が抗議の声明を出しました。私は、これまでに放送された最初の2話について、どちらも見てはいないのですが、見た人から話を聞いてみると、内容的には、現実離れしたストーリーが展開されているとのことです。人々の中には、社会に児童養護施設のことを広く知ってもらうきっかけになっているのだからいいじゃないか、最後まで見ないといいか悪いかの結論が出せないじゃないか、という人がいるようですけれども、私はそうは思わないんです。脚本家の意図として、制作者の意図として、

1　2014（平成 26）年 1 月から放送されている日本テレビ制作のドラマ。児童養護施設を舞台に、様々な事情で親と離れた子どもたちの目線から「愛すること」・「愛されること」をテーマにしたドラマ。

伝えたいことがあるというときに、そのようなストーリー展開でなければいけないのか。そのような筋立てが果たして自分の言いたいことを表すために必要なのかどうか、ということを考えるべきなのではないでしょうか。ましてやそれによって、子どもたちが傷ついているとすれば、それはやはり適切ではないということで、きちんと抗議をすべきだろうと思っております。

逆に言えば、ここでマスメディアがきちんとした対応をして、状況を踏まえたドラマ作りをしているということであれば、子どもたちにとってとても大きな力になっていくはずですので、そういった方向でメディアの力を使っていただければと思っていました。ですので、今回の件はとても残念です。

もう一つ、メディアの影響という点では、ドラマなどの中で体罰を肯定的に扱っている、特に親による体罰というのが平気で描かれているんですね。また、バラエティ番組の中で頭を叩くシーンがよく出てきますけれども、ああいった暴力を簡単に表現してしまったり、またそれを笑いで流してしまっている。これは番組を見ている我々の中にそうした暴力や体罰を容認するという意識を植え付けてしまうでしょう。また、これは小森さんの方のお話になるかと思いますが、遊びとしての暴力が実はいじめにつながるということにもなりかねないとすれば、やはり多くの人々が触れる機会が多いメディアから、暴力は望ましくないんだということを普段からきちんとメッセージとして伝えていく必要があると思います。

同じように、DVもジェンダー意識と結び付いて、男は強くなければいけないと、力で女性を支配するというような、そんな誤ったマッチョ意識が映画の中で多く見受けられます。それがDVの大きな原因の一つになっているという指摘もあるということからしますと、マスメディアの責任はとても大きいと思っております。

【横田】

ありがとうございました。もう一つ吉田さんへの質問があります。

「子どもの権利条約[2]について、どのように考えたらいいでしょうか」という質問です。

【吉田】

今回のシンポジウムのテーマから考えますと、子どもの権利条約の持つ意味はとても大きいと思います。虐待に関しても、虐待防止に取り組むべき国の責任に言及されておりますし、虐待された子どもの心身の回復のための施策を講じるとか、施設で暮らす子どもに対する特別な配慮等が権利条約で規定されております。その他、様々な内容が盛り込まれておりますが、子どもの権利条約をどう広めるか、どう理解をするかという時に、子どもに対してどうするかという以前に、大人が子どもの権利条約をどのように受け止めるかということが問題なのですね。私のこれまでの経験の中で、地方自治体において子どもの権利条例を作るに当たって、お手伝いしたことがあります。その過程で、子どもの権利を認めるとわがままを助長することになるから、子どもの権利条例を作ることには反対だという大人の方の話を何回か聞いたことがあります。そのような意識が大人の側にある以上、子どもの権利条約の受け入れというのは難しいものがあると思います。

例えば虐待されている子どもが誰にも相談できず、親から日々つらい目に遭わされている。そして場合によっては、その子ども自身が解離症状で人格障害になってしまう、そのような子どもが今置かれている状況を考えれば、決してわがままとかいう問題ではないのです。命に関わるような問題から子どもが守ってもらうという当たり前のことを条約は規定しているだけなんです。そうした内容のもの、そうした性格のものであるということを、まず大人がきちんと正確に理解しないと、子どもの権利、また子どもの権利条約の普及は、非常に難しいのではないかと思います。

そして、子ども自身に子どもの権利について、また権利条約について知ってもらうという時に、単

2 正式名称は「児童の権利に関する条約」。児童（18歳未満の者）の権利について定められている国際条約。1990（平成2）年9月発効。日本では1994（平成6）年5月22日から効力が発生した。

なる知識として、入試に出るとか、定期試験の範囲だとかいうことではなく、自分自身の権利なんだ、自分自身が使うことができる条約なんだ、という視点で教える必要があります。そうでないと、子どもは単にきれい事にしか過ぎないんじゃないかということで終わってしまうのではないでしょうか。

私が以前関わったことの中に、子どもの権利条約について学校で学ぶための教材作りに、子どもたちに参加してもらったことがあります。自分たちはこの問題についてどういう時につらいと思うのか、どのような内容にしてほしいのか、といった子どもの意見を聞きながら、まとめていきました。このように、教材を作ったり、イベントを企画したりといったことを、当事者としての子どもの意見を踏まえながら進める。それが、権利条約の普及という部分で、とても大事ではないかと思っております。

【横田】

ありがとうございました。子どもの権利条約は、実は私の専門である国際人権法という分野でも扱われておりまして、吉田さんの話と重なる部分があるかもしれませんが、私の方でちょっとコメントさせていただきます。今の吉田さんのお話に加えて、子どもの権利条約は子どもというものを扱っているために、ほかの人権条約と比較していろいろな点で配慮されていて、丁寧に分かりやすく書かれています。一番大きな点は、子どもは実は自分で自分の権利を認識して、それで、裁判所に訴えるなり、どこか人権の相談所に訴えるなりっていうことができる立場にはないわけですね。自分がそういう権利を持っているっていうことを知らない子どもたちがほとんどです。条約の中には、まず、先ほどおっしゃられた、大人が子どもの権利をどう理解してどう尊重するかということが非常に大事であるということが書かれています。

子どもは自分で何もかもできるわけではありません。自立しているわけでもありません。しかし、一個の人間としては、大人と同じように尊厳を持っている、ということが書いてあるんですね。一個の人間として大切な存在だということ。それから、同時に大人が持っているのと同じような、ものを考える自由、あるいはそれを口で表現する自由、そういうものは、子どもたちも持っていますよということが書いてあります。これが第一の点ですね。

それから第二の点は、子どもは発達の度合いによって自分がやりたいこと、そしてやれることが分かっていないので、それに合わせて大人は子どもに適切に対応しなければならないということです。条約の中に、親の権利として、教育の面における適切なしつけが記載されている。また、学校におけるしつけ、これも学校の権利として認められているんですね。つまり子どもが自由勝手にすればいいということが書いてあるわけではないのです。しかし、発達段階に応じて子どもの人格は尊重しなければいけないということが書いてある。これが非常に重要な点だろうと思います。

このように、子どもという、大人と同じ人間なんですけれども、成長過程にある、そして生まれてすぐには自分では何もできなくて、人に頼らざるを得ない存在、それが少しずつ自立に向かっていくプロセスにいる存在だということを捉えた内容になっています。日本はこの条約を批准していますので、やはりこういうことをきちんと守っていく必要があるのだろうと思います。

それでは、菅原さん、弁護士として子どもの権利条約についてこれまで関わったことがあれば、お話を聞かせていただければと思いますが、いかがでしょう。

【菅原】

私自身が子どもの権利条約について直接関わったということはないのですが、横田さんの話を聞いて、スポーツに関連してお話ししたいと思います。子どもの指導を行っている時、一番大切なのは「子どもにルールを守らせる」という言い方を必ずするんです。一番大事なことは、スポーツ少年団のような小学校低学年の子どもについては、コーチ、スポーツ指導者自身がルールであると言います。子どもたちがいる場面では、仮に赤信号の横断歩道に差し掛かって、車が通っていなくて事故が起こることはあり得ない状況であっても、子どもと一緒の時には渡るなと。禁煙と書いてある場所について、子どもが禁煙っていう言葉を読めなくても、そこでは煙草を喫うなと。それは、先生自身が、指導者

自身が子どもにとってルールだということなんです。ルールを守ろうと子どもたちに伝えるのならば自ら実践する。ところが、子どもたちが中学生ぐらいになった時に、相手のチームがルール違反をしている場面に遭遇した場合、間違ったことをやっているのに、うちのコーチ、うちの監督はなんの抗議もしないのか、長いものに巻かれろ、唯々諾々[3]としているのかとなったのでは、ルールを守ったことにならないんです。つまり、その発達段階に応じて、「スポーツルール」をどう守るかということをきちっと教えていく。これが一番のポイントであろうと私は思っています。

【横田】

ありがとうございました。それでは次に、小森さんへの質問です。「個人的な質問になりますが、小3の男児を持つ母です。私は子どもが学校でいじめを受けた時、あるいはいじめを受けたと相談をされた時、これは言葉の暴力なんですけれども、嫌なことを言われたら、言った相手に自分がどんなに悲しくてつらい気持ちかを伝えたらどうかと言いました。それは軽い気持ちで人が傷つく言葉を言ってしまう子どもが多いと、日頃から感じていたからです。自分が言った言葉が相手の心をどんなに傷つけるかを知ってもらいたいという気持ちで、子どもにそう伝えましたが、これは自分の子どもに無理をさせてしまうことになるのでしょうか。どのように子どもに言ってあげれば良いでしょうか」という非常に具体的で、同時に大事なポイントを突いた御質問です。

【小森】

私個人としては通常相談はお受けしていないのですが、それでも（ジェントルハートプロジェクトの）ホームページなどに電話番号やメールアドレスを公開しているので、様々な相談が来たり、私のところに直接私に相談しに来てくださることがあります。その時、ほとんどの方が、大人も子どもも、同じ言葉から話し始めるんですね。「あの、いじめってほどじゃないんだけど……」とか、「大したことじゃないんだけど……」というふうに、これから話す内容のことを小っちゃく小っちゃく言おうとするんですね。そして話を聞き始めると、とてもひどいいじめを受けていて、ぼろぼろになっているというような場合がほとんどです。お子さんが言葉の暴力を受けているんだということを話してくれるわけですよね。そして、「よく言ってくれたね」と、話を受け止めます。最初に話したことが全てなのか、それともももっと話に裏があるのかというところを引き出すためにも、「よく話してくれたね」という受け止め方がすごく重要なんですね。

そして、子どもから相談を受けた大人がつい言ってしまうことがあります。いじめている相手に対して「嫌だって言えばいいじゃない」とか「その子どうせ変わらないよ、割り切りな」といった、こうあるべきということをつい言ってしまう。これは、大人の勝手な“あるべき論”なのですね。どうして相談しに来たかって言ったら、嫌だと言えないから相談しに来ているわけで、そこで割り切れと言われても、簡単に割り切れるものではありません。それが大人であれば割り切ることができる人もいるかもしれませんが、子どもの場合は割り切ることもできなくて、やっとの思いで相談しに来てくれているという認識の方が正しいと思うのですね。

私は子どもたちからいろいろな声を聞いています。そこで、子どもたちに「どうして嫌だって言えないの」と聞くと、圧倒的な恐怖を前にすると動くことができない、嫌だという言葉も怖くて言えない、と言うんですね。このように、圧倒的な恐怖を抱えて相談しに来てくれている子どもに対して、大人の“あるべき論”で返してしまうと、その子にとっては先が見えなくなってしまうということがある、という点を私はとても心配しています。

3 いいだくだく：物事の善悪・価値を深く考えることなく、簡単に相手の意見に従って言いなりになってしまうこと。他人の主張・要求に対して、自分の頭でしっかりと考えて判断せずに、盲目的にただその主張・要求に従ってしまうこと。

【横田】

小森さんに別の質問も来ています。「先ほどのお話の中で、いじめは虐待だと話されていましたが、それでは余り重みが感じられない、軽過ぎるのではないか。自分の観点では、いじめは暴行傷害であるとさえ考えています」という質問です。

【小森】

私は、いじめと暴行、虐待を別々のものであると考えているのではなくて、本当に心と身体への暴力を虐待であると定義したら、全てのものがここに含まれてくる。殴る、肉体を傷つけて血を流すということだけが虐待ではないし、心を傷つけるということだけが虐待でもない。そもそも、理由があれば人は人を傷つけてもよいのかという質問の答えを、まずは大人が見付ける必要があります。そして、肉体だろうが心だろうが、人は人を傷つけてはならない。全ての暴力を包含するという意味合いで、私は虐待という表現でよいと思っています。

【横田】

物事の重みをどう感じるかということですね。暴行傷害というのは刑事上の責任を問うような重大なことです。

ここで菅原さんにお聞きします。暴行傷害は、刑事事件の判例で言いますと、実刑判決が下るという状況になると思いますが、法律上、いじめ、虐待、さらには暴行傷害、どういうふうに言葉の上で整理されていますか。

【菅原】

私自身は的確に整理はできていないというのが正直なところです。今回のシンポジウムのテーマは「子どもと人権」です。ですから、スポーツ体罰の活動に関連して、どこまで参考になるか分かりませんが、違う立場からお話をさせていただきます。

先ほどの小森さんのお話の中で、逆らえない恐怖というものがございました。これは、昨年大きく取り上げられた女子柔道強化選手15名による暴力告発問題[4]も同じことが言えます。これが話題になった時に記者会見を行ったのは、スポーツ法学会の大阪の仲間の弁護士でした。当時、全柔連（全日本柔道連盟）は大きな力を持ち、選手たちはパワハラ[5]の恐怖の中にあったと思われます。告発した15人は名前を出すこともできなかった。しかし、15人でまとまったことによって訴え出ることができた。その際、筑波大学准教授の山口香さん[6]や静岡文化芸術大学准教授の溝口紀子さん[7]をはじめとする、柔道家の先輩やメダリストに相談し、アドバイスをもらったからこそできたわけです。

つまり、相談するというのは当事者にとってはとても怖いことなのです。選手たちにとっては、自分が暴力を振るわれているのか、あるいはいじめになのか、虐待なのかは、絶対分かりません。

スポーツ界というのは、メダルを取るといった目標があって、その中で先輩・後輩の力関係というのは強烈なものがあるのです。また、各競技団体の役員や指導者の力関係もまた違ったものがある。そういった環境の中で、選手たちが勇気を振り絞って訴え出ることができるかというのは、今スポー

4　2013（平成 25）年 1 月 29 日、女子柔道の国際試合強化選手 15 名が、全日本女子ナショナルチーム監督をはじめとする指導陣による暴力行為やパワー・ハラスメントを訴えていたことが発覚した問題。同年 2 月 1 日に監督は暴力行為を認めて辞任した。

5　パワー・ハラスメント：一般的には、職場において、地位や人間関係で弱い立場の労働者に対して、精神的又は身体的な苦痛を与えることにより、結果として労働者の働く権利を侵害し、職場環境を悪化させる行為のこと。

6　やまぐち・かおり：元女子柔道選手、柔道指導者。現在は筑波大学大学院准教授、全日本柔道連盟女子強化委員。元筑波大学柔道部女子監督。

7　みぞぐち・のりこ：元柔道選手。バルセロナオリンピック女子柔道 52kg 級銀メダリスト。日本人女性初のフランス代表柔道チームコーチ（アテネ五輪）。フランス語が堪能で、スポーツ文化論の研究者。現在は静岡文化芸術大学准教授。

ツ界が直面している問題なのです。失礼かもしれませんが、子どもの問題以上に深刻かもしれません。
そういう意味で、今日のこのシンポジウムに登壇させていただきました。

【横田】

ありがとうございました。今、菅原さんがおっしゃったことは、非常に大事な点だと思います。女子柔道界における男性の指導者による女性の選手たちへの暴力を告発した方たちというのは、子どもというよりも、もう大人になっている、あるいは大人になりかけている若い人たちです。そういう人たちが名前も出せない、一丸とならなければ出せなかったという、ゆがんだ上下関係の中で、これ以上我慢できないというところまできて初めて問題提起している。そうだとすると、小学校の児童と先生あるいは中学校の生徒と先生の関係、あるいは家庭における親と子の関係などのように、もっと圧倒的な上下関係があるところはどうなるのでしょうか。そういった強い上下関係の中で、子どもに対して「いじめられているっていうことを話しなさい」と言っても、言えないのが普通であって、子どもから話が出てくるというのはよほどの時なんだというふうに考えざるを得ないというのが、私の受け止め方です。
このことについて、吉田さん、何かコメントをいただけますか。

【吉田】

子どもの権利救済を考えますと、例えば施設の中での体罰があった、いじめがあったとします。これは、学校で起きるいじめ以上に、子どもにとっては深刻な状態なんです。施設にいる子どもたちは、学校よりも長い時間ずっとそこにいるわけですから。ですので、もし体罰があったことを子どもが外部に漏らしたことがばれたら、子どもに対する暴力、体罰が更にひどくなるかもしれません。つまり、そのような状況にある子どもは、相談することだけでも命懸けなんです。だから子どもを守るということを、まず優先するのです。そして、先ほどもおっしゃっていたように、訴え出た子どもに対して、よく言ってくれた、その勇気すごいと思うよ、と言ってあげる。それと同時に、私たちがあなたを守るからね、というメッセージを伝えていくというのが、権利救済を行っていく上でのポイントかと思っております。
それからもう一つは、性虐待に遭った子どもは外部の人に相談することが大変難しい。そういった子どもに、お母さんに相談できなかったの？と聞くと、子どもながらに母親を裏切ったという気持ちを持っているとのことです。自責の念が出てきて、それによってさらに子どもが傷ついてしまう。だから、母親にも相談できない。一番信頼すべき人にすら話せないというのが、性虐待被害者なんです。ですので、子どもが自分の被害を外に対して訴えるというのは、それほど大きなことなのです。だからこそ、子どもの訴えを受け止める側としては、子どもの勇気をきちんと受け止めなければならない、大きな問題だと思います。

【横田】

今のお話も本当に大事な点だと思います。特にただ単に怖いという側面だけではなくて、逆に母親等に、自分に対する信頼を裏切りたくないという、母親を思うからこそ言えないという、そういう心理というのはやはり子どもの中にあるのだろうと思いますね。
次は、「いじめの傍観者を加害者と同罪とするような風潮があるようですが、これについてはどう思われますか」という質問です。小森さん、お願いします。

【小森】

いじめに関わっている人はというと、加害者、被害者、傍観者の3つぐらいに分けられると思います。私は、この3つとも、いじめに関わる被害者であると思っています。いじめている子もいじめられている子も傍観者も全部が被害者であると。いじめに関わって幸せになる人は一人もいないと思っていま

す。いじめられている人は正に被害を受けているのですが、中には昔誰かをいじめていて、やり返されているという場合もあります。いじめにおける立場が逆転する場合があるんですね。ですから、いじめが起こった場合、どういう事態なのかっていうのをしっかりと正確に調べる必要があります。

そして、いじめの傍観者ですが、なぜ傍観者の子どもが被害者であるかと言いますと、昔のいじめと今の子どもたちの社会で行われているいじめの質、内容が大きく異なるからです。先ほども話がありましたが、子どもたちは圧倒的な恐怖を前にしたら、嫌だと言えない、動けないのですね。その圧倒的な恐怖とは一体なんなのかということを、大人たちは余り知らないんですね。友達がいじめられている、そんなことしちゃ駄目じゃないかと助っ人に入ったら、帰りがけにぼこぼこと殴られるということは昔からあったかもしれません。しかし、今は殴らなくても、数人で羽交い締めにされて、下着を脱がされて、裸の写真を1枚撮られてしまうと、その次の日から加害者グループの言いなりになるしかないわけですよね。そこで、大人がいやいや裸の写真撮られるぐらいは覚悟して友達を守ってあげなさい、私にはできますよ、などという大人はそうそういません。ですから、実はいじめの中に、性被害みたいなものが非常に増えている現実を、まず大人が認識することが重要だと思います。

当法人（ジェントルハートプロジェクト）の理事に篠原という者がいるのですが、その理事の息子さんは自殺したんですね。いじめられていていた友達を守ろうと精一杯頑張りました。ところが、今度はその子がいじめのターゲットになったんですね。これは一般的に多くみられる流れです。ターゲットになった彼が何をされたかと言いますと、精神的ないじめ、肉体的ないじめ、性的ないじめ、いじめのフルコースを全部やられました。そして、彼の遺書の中には、「僕は友達も守れなかった」って書かれていたのですね。これが現実です。

傍観者は加害者と一緒だ、正義感がないのはだめだ、などといつまでも言っておりますと、その言葉が子どもたちを本当に追い詰めます。今のいじめの実状を知らない大人たちの無責任な発言である、と私は思っています。

【横田】

いじめの傍観者と言われる子どもも実は苦しんでいる。なぜ自分があの時に被害者を助けなかったのだろうと後になって苦しんでいるというケースも耳にします。それを考えると、傍観者は加害者と同罪であるという言い方は決してできないのであって、むしろ私たち大人が子どもたちを苦しみからいかにして解放できるのかという方法を考えなければならないという側面があるのかなということを、小森さんのお話を伺って感じました。

それでは、次に山口さんへの質問です。「山口さんはバスジャックの際、犯人の少年に気を送っていたというようなことをおっしゃられていました。それは祈りとかそういうことに通じることだと思いますが」というコメントなのですが、その時の心境と言いますか、どういうふうになってほしいと思っておられたのか説明していただけますか。

【山口】

そうですね。その少年の本来の心に戻ってほしいという気を送りつつ、やはり祈っていたのかな、と今の質問を受けて感じました。ありがとうございました。

【横田】

次も山口さんへの質問です。「『居場所』という言葉をお使いになったのですが、『居場所』というのは子どもたちにとって、具体的にどのような存在なのか、大人の自分にはよく分からないんですが、もう少し詳しく説明していただけますか」という質問ですが、いかがでしょうか。

【山口】

私は今、どこの自治体でも子どもたちの居場所が必要だなと思っています。それはなぜかと申しま

すと、子どもたちはいつも期待されているんですね。管理、監視されているという現状があるんじゃないかなと思いますけれども、皆さんはどう思われますか。幼稚園に入る前から塾に通わせたり、小中学校は私立を受けなさい、勉強しなさいといったような、そういう状況の中に子どもたちがいる。そういう状況下になくても、幼い子を連れ去る事件が起きることを考えると、やはり管理、監視しなければならないという状況に子育ての環境はあるのですね。長崎でも今から10年程前に中学生が幼い子を連れ去って殺害するという事件[8]がありました。管理、監視しなければいけない子育ての状況の中で、本来の子どもらしさ、自分が自分らしくいられる場所ってあるのかなと考えてしまうんですね。それは、本来、家庭にあるべきなのですが、親の方も忙しくて日々の生活に追われていて、子どもは本当の自分を受け入れてもらえず、一緒にいるという実感がないまま、大人になってしまっているのではないかなと思うんですね。そういう状況がある中、たまたま不登校になった子どもがいたら、居場所（ハッピービバーク）においでということにしています。

ハッピービバークの概要をお話しますと、子どもが安心してのびのびと過ごせる居場所です。主体は子ども自身です。今子どもたちは主体的に生きているんだろうかという疑問があったことから、主体は子ども自身で、子どもが自らやりたいという気持ちを大切にし、自分で決めること、自分で想像することを通じて、仲間作りを実践できる場を作って、実践しているところです。活動の中では、日々、様々な出来事があります。始めた当初は次々といろいろなことが起こって戸惑っていたんですけれども、3～4年経過した頃からは逆にいろいろなことが起こる場だからいいなと思えるようになって、今も活動を続けております。

【横田】

今、山口さんが言われたことは、本日の皆さんのお話に共通する大事なことだと思います。ちょっと私の方から補足させていただきますと、山口さんがおっしゃられた大事な点は、今の子どもたちは自分たちがやるべきこと、やっていること、そして場合によっては将来やることまでもが、周りの大人が決めたことを押し付けられている。親から決められ、学校から決められ、要するに管理されている。自分のやっていること全部が誰かに監視されているという中で、子どもたちがやりきれなくなってしまって、不登校になったり、いじめに関わったり、いろいろな問題が起こってくる。そして、問題が起こると、親や先生は更なる管理としつけを強めてしまう傾向があります。つまり、押さえ付けることが足りなかったからもっとやろうと。しかし、実はそれが逆の悪い方向に向かってしまっているのではないか。山口さんがやられている居場所というのは、それとは違う場所を子どもに提供していると感じたのですが、その点についてはいかがでしょう。

【山口】

うまく答えられるか自信がないのですが、いつも周囲からの期待を受けながら、学校の成績を最優先にしか捉えてもらえないという子どもたちの現状があるということをお話ししました。不登校の子は別にしても、引き籠りの子どもたちは正にそういう状況に置かれている子が多いんですね。とても優秀なお子さんが多いんですよ。親は何も言ってないって言うけど、そういう親のメッセージ、学校のメッセージを背負い続けて、ある日突然、緊張の糸が切れるように引き籠らざるを得ない状況に陥ってしまう。“自分”を生きてこれなかった若者が多いなというのを親の会の活動の中で感じています。質問への答えになっていないかもしれませんが。

【横田】

いえいえ、そんなことはありません。私もそういう趣旨で理解しました。ありがとうございました。

8 長崎男児誘拐殺人事件：2003（平成15）年に、男子中学生が大型電気量販店にいた幼児を誘拐、連れ回し、暴行を加えた後、大型駐車場の屋上から突き落とし殺害した事件。

次は「本日はよいお話を伺わせていただき、ありがとうございました。不登校となった子どもにとって、学校そして教師はとても大きな存在であると思います、山口さんが学校や教師に一番訴えたいことはなんですか」という質問です。

【山口】

居場所に来る子どもたちは、取りあえず学校から距離を取りたいという意思表明ができたんですね。学校や先生方は、子どものことを思ってまた学校に戻したいっていう気持ちでいらっしゃると思うんですけれども、そこは取り外さないといけないのかなと思います。でも、関係を、縁を断ち切って欲しくはないんですね。やはり子どもは学校に行かなければいけない、学校に行けば仲間がいるということは十分分かっています。しかし、その子どもが学校から撤退せざるを得なかったという状況の中で、もう一度、学校が、そして先生がやるべきことは、その子からの信頼を得ることしかないのかなと思います。そういう中で、先生としてではなく、人として、同じクラスの仲間として接する必要があると思います。子どもはなかなか会ってくれないかもしれませんし、時間も掛かるかもしれません。でも、そういうことを続けていると、“あっ、この先生なら大丈夫”と思った時に、実際に、先生と会えるようになった子がいます。そこまで、親子や、御家族の方と関係を続けていただいたら有り難いなと思うんですね。

うちも娘が小学5年生の時に不登校だったのですが、先生が何度も家まで足を運んでくださいました。私が、「先生が来られたけど、今日は会えそう？」と聞いて娘が「今日は会いたくない」と言ったときは、私は先生にお願いして、帰っていただきました。そんなことが続いたんですが、来続けてくださる先生で、とても有り難かったです。そして、ある時娘が先生と会って話ができました。休み始めて約1か月後に学校に戻りました。それが良い例とか悪い例ということではなくて、そういう例もあるということで聞いていただければと思います。

【横田】

今のお話ともちょっとつながるかもしれませんが、「バスジャックした少年の親は、少年が中学校に仕返しをしようとしているっていうことが分かった時に、少年を強制的に精神病院に入院させました。精神病院に入れないとすれば、どういう選択肢があると思いますか」という質問です。

【山口】

精神病院に入れるという選択もあっていいと思うんですよ。でも、そこに至るまでに、その子の同意があったのかということがとても重要な問題です。親も苦しんでいる、あなたも苦しんでいる、だから精神科のお医者さんにお手伝いしてもらおうよ、といったような会話があればよかったのではないかと思います。しかし実際は、警察が介入して半ば強制的に入院させられたということで、少年は非常に傷ついたと思うんですね。自分の人格を傷つけられたのではないでしょうか。

御両親も、少年がいじめにあっていたことを御存じで、学校にも相談に行かれていたようなのです。しかし、その相談がうまくいかなかったようです。では、どこで誰が何をすればよかったんだろうと私なりに考えてみました。私は、親がどうすることもできないのであれば、学校の先生が彼の話を聞いてくれればよかったのではないか、そして精神病院に入院していたのであれば、精神科のお医者さんが彼の話をきちんと聞いてくれればよかったのではないか。周りの大人たちが誰も少年の話に耳を傾けなかった、何もできなかったということが、この事件の最大の問題なのではないかと思っています。

【横田】

ありがとうございました。次は、小森さんと山口さんに対して、そして主催者に対してのものでもあります。最初にパネリストの方に御意見をお伺いした上で、私の方の考えを御説明しようと思いますが、質問をちょっと読ませていただきますと、「子どもをいじめが原因で亡くした親と、子どもを虐

待してしまう親の話を同じステージでパネリストに話をさせることに違和感を持ちます。子どもをいじめで亡くした親も、子どもの悩みに気付くことができなかった親と同列に論じることになりそうです。つまり、子どもの悩みに気付くことができなかった親というのは、ある意味でネグレクトになるのではないか」というコメントをいただいています。このことについて、まず小森さん、次に山口さんに御意見を伺います。そして、その後に私の方から、主催者がどういう意図でこのシンポジウムを企画したのかということを説明させていただきます。

では、小森さんからお願いします。

【小森】

個人的な観点でしかお話できないんですけれども、私の娘の場合、いじめられていることは知っていました。ですので、学校に相談したり、相談センターに通ったり、病院に行って安定剤を飲んだりとか、いろいろなことをやっている中で、子どもが亡くなったのですね。それでは、私はなぜ娘を守ってやれなかったのかというと、いじめへの対処方法を全く知らなかったんです。いじめは、いじめている子がその行為を止めてくれれば解決するのですけれども、私や学校の先生、周囲の大人たちは、いじめている子たちの行為を止めることができなかったんですね。私がやっていたことは、いじめられている香澄に対してばかりいろいろなことをやっていたんですね。

そして、娘が亡くなった後、自分がやっていたことの間違いをたくさん知りました。それと同時に、いじめはなぜ起こるのだろうと考えた時に、虐待そして愛着障害というところに行き着きました。愛着障害という言葉は、聞いたことがある方が余りいらっしゃらないかもしれません。いじめの加害者の子どもは、生きる証といった精神的なものを満足に与えてもらえなかったのではないか。そして、そういう子どもたちがいじめの加害者となっているのではないか。いじめの原因として、虐待、そして愛着障害というところに行き着きました。ですから、私はいじめ自殺遺族ですが、常にオレンジリボンを付けています。虐待防止のバッジを付けて、虐待防止活動を展開されている方々としっかりつながって、これからも活動を続けていきたいと考えております。

本日のシンポジウムで、それぞれの立場で様々な活動を展開されておられる方々と同じステージに立たせていただいていることについて、私個人的には全く違和感はありません。一緒につながらなければならない人たちに、今日また新たに出会えたと感じています。

【横田】

ありがとうございました。それでは、山口さん、お願いします。

【山口】

虐待してしまう親の心理というのは、実は、私の中にもあります。これはバスジャック事件を起こした少年の両親だけの問題ではなく、私たちの誰の中にでもあるものだと思います。そういった観点で、改めて自分を見つめ直すということは、とても大事なことであると考えます。親という立場で、私たちがここに登壇させていただいたのは、そういうことも含んでいるのかなと思っています。

【横田】

いじめや虐待が新聞等で報道される際には、誰が被害者で誰が加害者なのかが初めから色分けされています。しかし、問題を深く掘り下げてみると、実はそんなに簡単に色分けできなくて、先ほどの小森さんのお話にもありましたように、加害者である子どもも実は過去にいじめに遭っていた被害者だというデータもある。そういうことを含めて、非常に複雑な状況にあるのですね。それから、ネグレクト、あるいはいじめにおける傍観者も実は悩んでいて、それがまた自分の苦しみとなって、精神的に追い詰められる人もいる。単純に、悪い子、良い子といったように、善悪のカテゴリーで分けられないということが、この問題の背後にあるというのが、今日のお話で分かりました。そういう意味で、

お子さんをいじめによる自殺で亡くされたという御立場、そして子どもへの虐待について活動されている御立場の両方の方に御登壇いただいて、それぞれの立場のお話が伺えたということは、私にとっては、非常に参考になりました。いじめや虐待も、複雑な背景がある場合もあり、そう簡単に良し悪しを決められないというお話を伺えたというのが、このシンポジウムを企画した側の立場としての印象です。

そして、このことは、吉田さんや菅原さんの御専門とも関わってくるのではないかと思います。裁判では、誰が被害者で誰が加害者なのかを法律に基づいて判断してしまうのですが、現場では実は簡単には定義できないという問題も抱えておられるかと思います。その辺りのことについて、お一人ずつ、2～3分程度でコメントしていただけますか。

【吉田】

正に問題はそこなんですね。世の中の人は、虐待されている子どもは気の毒だと言います。でも、その子どもが大きくなって街の中をふらふらしたり、ちょっと悪いことをしたりすると、けしからん、あの子どもたちをなんとかしろ、となる。コンビニの前で溜まっている子どもたちは目障りだということになってしまうのですね。では、なぜその子どもたちはコンビニの前に居るのかというと、家には居られないんです。家に居れば暴力を受けたり、性虐待を受けたり、親が食事も与えてくれないといったようなことがあるかもしれない。その子どもたちが、生き延びるためにコンビニで万引きしているかもしれないんです。そうした子どもたちを一概に責めることができるのでしょうか。

虐待の被害を受けた子どもは、例えば、人格障害になったり、リストカットをしたり、場合によっては自らの命を絶ってしまう。これらと同様に、その現れの一つが非行なんです。これを切り離しては考えられません。だから、そういう状況になる前に、子どもたちの居場所が必要なんです。家に居られない子ども、学校で先生に相談できない子どもが、親でも先生でもない第三者の方に受け止めてもらえるようなそういう場所が必要なんです。それが今、足りないんです。

小さな子どもを保育園や幼稚園で受け入れてもらっているということはあるのですが、小学校の高学年、中学生が自分が自分らしく居られるような場所をどうやって作っていくのか。そして、行政がそれを十分に提供できない状況の中で、今、NPOをはじめとする民間がそうした場を様々な形で提供しているというのが実情であると思います。

【横田】

それでは、菅原さん、お願いします。

【菅原】

私のレジュメに「スポーツ少年団における安全確保のための6つの指針」というのを掲げてあります。先ほど1番目に『子どもにスポーツルールを守ることを教えよう』とお話したのですが、今のような問題についていつも私が申し上げるのは、指針の3番目の『危険を感じたらすぐに安全対策に立ち上がろう』という言い方でまとめているんです。小さな子どもの場合、誰が被害者、加害者になるのか分からない。これは、医療事故の場合でも、今問題になっているJR北海道の事故や不祥事[9]についても同じだと思うんですが、大きな事故が起きる前には、たくさんの「ヒヤリハット」があるわけです。小さな問題が必ず起こっている。小さな問題の時に、誰かが気付いて、まず自ら立ち上がる必要がある。スポーツ少年団の指導者には、子どもたちの中で小さな危険を見付けた時にまず立ち上がってというのが、この指針の3番目なんですよね。リスクマネジメント、危機管理の根本というのは、小さな危険に誰かが先に目を留める、小さな火種のうちに消し、チームワークを使ってお互いに共有していく、

9　2013（平成25）年4月以降、JR北海道において、特急列車の発火事故や貨物列車の脱線事故、運転士によるATS（自動列車停止装置）の破壊、レールの検査データの改ざんが発覚するなど、事故や不祥事が相次いだ。国土交通省による保安監査が2度にわたって実施され、同社に対して緊急の改善指示が出される事態となった。

そのことによって、大きな危険をできるだけ排除していこうではないかと、これがスポーツ少年団の考えた一つの原理なんですね。

弁護士の発想から言ってしまいますと、被害者、加害者というのは大事なものなのですが、私は自覚をしながら、被害者、加害者を見付ける前に、まずは小さな危険を取り除こうじゃないか、ということなんです。

【横田】

ありがとうございました。最後に、「戦争は最大の差別、いじめであるということについて、どう思われますか」という質問です。これについては、私の方から回答させていただきます。

結論から言いますと、それはその通りです。戦争というのは敵を想定して、その敵を徹底的に差別し、場合によると敵を殲滅する、殺す、危害を加えるわけです。その意味では、戦争というのはやっぱり、我々が日常生活の中で、社会のルールを守って人に優しくしましょう、親切にしましょう、いじめをなくしましょうと言っている話とは全く違った次元で事が起こるのですね。国際社会においても、日本一国で解決できないので、いろいろな国と一緒になって国連のような場で、議論が続いています。したがって戦争はやめるのが一番いいのですが、残念なことに、まだ戦争がなくなる状況にはありません。戦争をやめるためのいろいろな工夫がなされて、仕組みも作られて、国連の場でそれが進展しておりますけれども、残念なことに、まだ戦争はなくならない。この問題は、私たちにとって、大きな課題として課せられています。私の専門分野の国際法、関連分野の国際政治学、そして国にとっては、外務省を含む外交の問題として、国としても取り組んでいる問題ですので、今後の課題として、心に留めていっていただきたいと思います。

ちょうど時間になりましたので、以上をもちまして今日のシンポジウムを終了させていただきます。

会場の皆さん、御静聴ありがとうございました。

＊このシンポジウムの「パネルディスカッション」の模様は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。
https://www.youtube.com/jinkenchannel

●関連情報

＊特定非営利活動法人ジェントルハートプロジェクト
http://npo-ghp.or.jp/
＊滋賀県いじめ対策研究チーム会議 最終報告書 ～いじめ問題の本質について～
http://www.pref.shiga.lg.jp/edu/gakko/seitosidou/ma05/ijime/files/2013-11-11.pdf
＊文部科学省　いじめ
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1302904.htm
＊文部科学省　いじめ問題への文部科学省の取り組み
http://www.mext.go.jp/ijime/
＊文部科学省　いじめ問題に関する取組事例集について
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/07022615.htm

＊キーストーン法律事務所
http://www.keystone-law.jp /
＊公益財団法人日本体育協会 国民体育大会
http://www.japan-sports.or.jp/kokutai/tabid/62/Default.aspx

＊国立スポーツ科学センター 倫理審査委員会
http://www.jpnsport.go.jp/jiss/gaiyou/gaiyou/iinkai/iinkai_rinri/tabid/163/default.aspx
＊弁護士菅原哲朗　ＷｅｂＳｉｔｅ
http://stlo.jp/
＊弁護士 菅原哲朗 ツイッター
https://twitter.com/ted04sugawara

＊親の会「ほっとケーキ」
http://www1.bbiq.jp/hp_hotcake/
＊子どもの居場所「ハッピービバーク」
http://www1.bbiq.jp/hp_hotcake/hb/

＊駿河台大学 教員紹介
http://faculty.surugadai.ac.jp/sudhp/KgApp?kyoinId=ymemyyoiggy
＊特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク
http://www.orangeribbon.jp/zenkokunet/
＊吉田恒雄　フェイスブック
https://ja-jp.facebook.com/tsuneo.yoshida.90

第２部　トークショー／講演
「いじめを乗り越えた子どもの明日はすばらしい！」

志茂田　景樹（よい子に読み聞かせ隊隊長、作家）


志茂田景樹さん

志茂田景樹でございます。昨日、長崎入りしましたけれども、とても暖かかったですね。「長崎は今日も暖かかった」です。

今日は、普段より地味な格好をして参りました。いじめられないかと危惧しまして。いじめるっていうのは、弱い者、変な者、そして訳が分からない者、大体そういう感じだといじめられるんですね。僕もだから、変でしょ？普通の感覚で見るとこういう格好はね。だから、随分いじめられてきたんですよ。その源流を辿ると、ずっと昔の子どもの時になりますけれども。東京に表参道（渋谷区）というところがあります。若者から、そして意外と30代、40代、50代ぐらいの人たちも含めて、流行の先端を行く人たちが歩いている街なんですけれどね。その表参道に30分も立っていると、僕のように髪の毛を二色、三色に染めている若い人が結構通ります。でも、道行く人たちは、別にそれをいぶかしい目で見たり、え？なんだろうこれは、というような表情になりません。全く普通にすれ違っています。でも、24 ～ 5年前はそうではなかったんですよ。

僕がこういう格好になったのは、実は、作家になって直木賞を受賞[10]して、これからはサラリーマンの人よりも自分を解放させようと思えばいくらでもできる状態じゃないかと、そういうふうに思ったんですね。なぜそう思ったのか。人間って生まれた時、無垢ですよね。真っ白です。でも成長していくに従って、いろいろな知恵を付け知識を付けて、たくましくなっていきます。ある意味で、悪い知恵も付けていくかもしれません。世の中というのは、きれい事ばかりじゃ生きていけませんから。無垢だった、真っ白だったところに、次々といろいろなものを塗っていくわけです。

でも、僕、作家になってから思いました。自分は心に随分と不要なお札を貼り付けてしまったのではないのか。心が重かったんですよ。なんか、自分自身が息苦しい。物を書いて生きていけるという自分の目標は（作家になることで）達成しました。でも達成した時に思ったことは、なんと自分の心は重いだろうか。不要な札を貼り付けている。例えば、虚飾、虚栄[11]の札。例えば、人を陥れたり人の足を引っ張ったりする、そういうような札。あるいは、自分を偽る欺瞞[12]の札。いろいろな不要な札を貼り付けている。それで何だか息苦しい。そういう不要な札を一枚でも二枚でもいいから剥がしていきたいと、そう思ったんですね。

ちょうどその頃に、ニューヨークに数か月、仕事で滞在していた知人が日本に戻って参りました。アパレル業界の女性の知人ですね。そしてその知人と会った時、僕に小さな包みをくれました。これ、あなただったら似合うかもしれませんよ、と。その時に、その包みを開けてみれば中身が何かすぐに分かったのですが、お互いにその後用事があったので、いずれゆっくり会おうなっていうことで、数分の立ち話だけで別れました。そして僕は家に戻ってみてその包みを開けました。そうしたら、マリリン・モンローの顔が足首から太腿までプリントされたタイツが2足入っていたんですね。当時、ニューヨークの若い女性たちの間で流行っていたらしいんです。24 ～ 5年前の僕は、そのタイツを広げて、

10　1980（昭和 55）年、志茂田氏が 40 歳の時に「黄色い牙」で第 83 回直木賞受賞。
11　きょえい：外見だけを飾りたて、実質が伴わないこと。みえ。
12　ぎまん：人をあざむくこと。だますこと。

「おぉ、これはすばらしいタイツだ、すぐに履くぞ」と、そういう意識ではありませんでした。「えー、なんでこんな物くれたんだろう」と思ったんですね。第一、これは男が履くものではないじゃないかと。そういう意識でした。今の僕とは違いましてね。ですから、それを放り出しておきました。

でも、何かの時にもう一度、そのタイツを手にとって、しげしげと見たんですよ。するとなんとなく履きたくなった。履いて鏡を見ると、結構かっこいいじゃないかと思ったんですね。それで、1本のジーンズを裁ちばさみで短く切りまして、そしてそのタイツの上から履きました。これ（今日穿いているオレンジ色のズボン）もそうですよ、長いものを切ってあります、暖かい陽気の頃だったので、上には気に入っていたTシャツを着ました。そうしたら、その格好で外を歩きたくなったんですね。ちょうどその頃、麻布十番（東京・港区）に事務所を開いたばかりの頃で、たまたま事務所に居たんです。そして、その格好で外に出ました。すると、すれ違う人々がぎょっとした表情になったり、なんだこいつはといった感じの白い目を向けてきました。24 ～ 5年前はそういう時代だったんですね。

その時、僕は3人連れのサラリーマンとすれ違いました。40代半ばぐらいの男性です。当時は上着のスーツの襟の部分にバッジを着けているサラリーマンが多かったのですが、そのバッジを見ると、仮名にしておきますけれども、○○物産のバッチでした。皆40代半ばということは、当時の○○物産では同期の課長といったところですね。彼らは、僕とすれ違う時、3人とも一瞬表情をゆがめました。でも、なんでもなかったようにすれ違ったんですね。紳士ですから。その時、僕は、あの3人はきっと立ち止まって僕を見ているぞと思ったので、6 ～ 7歩歩いてさっと振り返りました。すると、案の定3人は立ち止まって、ひそひそ話をしているんですね。それでそのうちの一人がこういうふうに人差し指を僕に向けていた。後ろ指を指すっていう言葉がありますね。正にこれが後ろ指を指す、です。さすがの僕も、ちょっと落ち込みました。事務所に戻って普通の格好に着替えようかと思いましたよ。でももう事務所から1km以上も歩いて来ていました。進むも地獄、引くも地獄、ならば進んでやろうじゃないかと開き直ったんですね。

その開き直ったことで、その代償として、僕の心にいっぱい貼り付いていた余計な札の2 ～ 3枚が剥がれ落ちたと思います。自分を偽らず、自分を出せばいいじゃないかと。ブランドとかなんとかそんなものにこだわらず、自分が身に着けたい物を身に着ければいいじゃないかと。飾らない自分になる、そういう札を剥がしたのかなぁと。知らない人から見れば、逆にあいつは飾り立てていると見えたでしょう。心の不要な札を少しでも剥がした結果が、1枚でも2枚でも剥がした結果が、僕にとっては、こういう格好になっていった。つまり、自分を解放したいという引き金になったんですね。そのタイツが。でも、その引き金になるためにはその前に、僕自身が、今の自分をもっと解放させたい、自分自身を出して生きていきたいと、そういう思いがあったからだと思うんです。

僕の父は国鉄職員でした。その関係であちこちの官舎を転々としました。父は、僕が小学校を卒業する年の春に退職しました。そして、隣町に家を建てました。ですから僕は、中学生の時からその町に入りました。誰一人、知っている者はいませんでした。でもほかのクラスメートたちは、いくつかの小学校から来ていますけれども、それぞれ顔見知りの、小学校時代からの友達が、同じクラスにも、ほかのクラスにもいました。僕のクラスにたまたま、同じ小学校から来た、ちょっと悪ガキふうの3 ～ 4人のグループがいたんですね。入学式が終わって2 ～ 3日目のことです。4月で割と暖かかった日だと思います。お昼休みに僕は、当時の中学生がよく着ていた学童服というんですかね、学生服と似ている襟のついたやつがあったのですが、それを脱いだんです。そうしたら、僕がその下に着ていたシャツを見て、その3 ～ 4人の悪ガキグループが、「なんだなんだお前、お前なんでそんなもの着ているんだ」と、僕のところに駆け寄って来ました。僕には姉が二人いました。すぐ上の姉と8歳も年が離れています。昭和27（1952）年に僕は中学1年生です。この頃は、日本が朝鮮戦争[13]の特需で少し工業が活発化

13　1950（昭和 25）年 6 月～ 1953（昭和 28）年 7 月に、成立したばかりの大韓民国（韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の間で、朝鮮半島の主権を巡り、北朝鮮が国境を越えて侵攻したことによって勃発した国際紛争。

してきて、これから上昇していこうっていう時代でした。でも、まだまだ生活は貧しかったです。庶民の生活と言いますかね。僕の母は、二人の姉たちのお古のブラウスを僕用のシャツに仕立て直してくれたんです。ですから、学童服を脱ぐと、花柄がこういうふうに付いているんですよ。ただの白いシャツじゃなくて、元々はブラウスですから。それで、そのシャツを見付けた悪ガキグループが、なんだお前と駆け寄って来て、僕の頭を小突いたということなんです。それで済めばよかったんですが。当時の僕は、身体が小さくて、クラスでは前から2番目でした。そして、腺病質[14]で虚弱だったんですね。しかも、ただ身体が小さいだけではなくて、どこか身体が不自然な感じの虚弱児という、そういう印象だったと思います。その週の土曜日に学校から帰ると、母から「買い忘れた物があるから買いに行ってくれる？」と言いました。当時、土曜日は会社も学校も半ドンだったんです。「おからを買ってきてほしい」と言われました。卯の花料理を作るためのおからを。それで僕、買いに行ったんですよ。一番近い商店街では、豆腐屋さんと魚屋さんが隣り合わせだったんです。僕は慌てていたこともあって、隣の魚屋の方に飛び込んで、「おから下さい」と言ったんですね。そうしたら、魚屋のおばさんが、「うちは魚屋だよ、豆腐屋は隣だよ」と言いました。たまたまその時に、クラスの悪ガキグループが通り掛かって、僕が間違えて魚屋に入って、おから下さいって言っていた時の一部始終を見ていたんですね。

日曜日を挟んで次の月曜日に学校へ行きました。すると、その悪ガキグループが、おから、おから、おから、おからとはやし立てました。その連中がはやし立てるものですから、クラスのほかの者も一緒になってはやし立てました。しかも、ただはやし立てただけではないんですね。腕を引っ張って、自分のグループのところに連れて行って、小突いたり、膝蹴りしてきたんです。僕を取り囲んで、おから、おからとからかいながら。でも、今のいじめと違うのは、蹴られたり小突かれたりした僕が、手加減しているなと分かる、そういう小突き方、蹴り方だったんですよ。

昔、例えば、八百屋さんで、人参やジャガイモを買うと、今みたいに大きさや形がそろっていませんでした。なんだかチビッこいのもあったし、丸くなくて変な形のジャガイモもありました。人参だって、今はきれいに洗ってあって、きれいな色をしていて、形もそろっているじゃないですか。でも当時は、八百屋さん行くと人参が並べてはあるんですけれども、形も大きさも不ぞろいでした。しかも、こんなふうに曲がっているのもあった。でも、食べてみりゃ皆同じなんですね。中身は変わらんのです。だから、ちょっとなんか不格好だけど、まぁいいだろうということで店に並べていたんです。ところが今は、大きさや形がそろってないとはねてしまいますよね。これは、今のいじめにちょっと似ているんですよ。

昔は手加減したいじめでした。だからいじめられてつらかったけれども、もともと少し貧弱であっても、我慢して勉強できた。今のいじめとちょっと違うところがあるんですね。ある意味では、歯止めが掛からない。中身は同じ味でちゃんと食べられるのに蹴り飛ばしてはねてしまう。そういういじめから、陰湿な結果が、悪くすれば死に至るような結果が生まれるのではないかなと、僕はちょっと違う視点から思ったことがあります。

話を元に戻します。僕は、ほかのクラスの子たちからも、おから、おからとからかわれるようになりました。校庭の裏門から歩いて30秒くらいのところに、小さな文房具屋さんがあったのですが、そこに消しゴムを無くしたか、忘れたかしたので買いに行くために校庭を横切っていたら、2階の窓から、おから、おからと何人かがはやし立てました。するとたちまち、学校の全ての窓に鈴なりになって、おから、おからの大合唱が起こりました。本当に嫌だったですね。学校に行くのは本当に嫌でした。でも、嫌だからと言って、当時は学校に行くのをやめようっていうそういう意識を持つ子どもはいなかったんですね。不登校なんて言葉もありませんでした。

ただ、僕のクラスにも長期欠席している生徒が二人いました。一人は結核で療養所に長期入院していました。当時は国民病と言われたぐらい結核患者が多かったんですね。そして、療養生活も長かっ

14 せんびょうしつ：体格が小さく、貧血や湿疹などを起しやすい虚弱で神経質な子どもの体質。現在ではほとんど用いられない。

たんですね。1年あるいは2年ぐらい遅れて復学してっていう子どももいました。でも、当時は、病気ではなく、別の理由で長期欠席している子どもの方が多かったんですね。何が理由だと思いますか。家の仕事の手伝い、家事の手伝いなんですよ。

僕のクラスのもう一人の長期欠席者は、お父さんが八百屋をやっていたんです。店舗はなくて、リアカーに野菜を載せて引き売りをしていたんです。彼は、お父さんが引くリアカーの後ろを押していたんです。そして、リアカーを押すことだけではなく、例えば、どこかの社宅に入って、お父さんがメガホンで、八百屋で～すと大声を出すと、みんな主婦たちが集まって来るでしょ。そしてあれこれ手にとっていろいろ買うのですが、お父さん一人では対応しきれないんですよ。お釣りの計算もしっかりやらなきゃいけないんで。それで、彼が買ってもらった野菜を新聞紙で包んで渡したりするので、結構忙しいんです。このように、家が貧しくて、家の手伝いをするために学校を長期欠席していた子どもが多く見られた時代でした。

今は、学校でいじめられた、嫌になった、じゃ行くのやめようかな、とある意味では、今の不登校の子どもたちはとても幸せかもしれません。こんなこと言うと、誤解されるかもしれないけど、最後まで話を聞いてください。

僕が中学生の時は、先ほどお話したような状況でした。ある時、昼休みに校庭を横切ることになったんです。学校の外に出なくてはならない用事があったんでしょうね。そうしたらまた、案の定、窓から、おから、おからの大合唱が始まりました。当時の僕は、身体が小さくて虚弱児だったと言いました。だから、駆ける時に変な手の振り方をするんですね。それで、早く校舎に入りたくて駆け出したら、おから、おからという大合唱がもっと強くなったんです。その時、僕は、「どうせ、おから、おからと言われるんなら、もっと言われてやれ」というふうに、どこかで開き直ったのかもしれません。もともと、普通に走っても変な手の振り方になるのに、わざとうんと変な手の振り方をして駆け出したら、大爆笑が起こったんですよ。さらに、その大爆笑が起こる前に、僕に対するはやし立ての言葉が「おから」から「おけら[15]」に変わったんです。最初は、数人の悪ガキグループが変えたんだと思いますが、それがどんどん伝染して、「おから」がたちまち「おけら」になったんです。僕が変な手の振り方で走っている姿からケラという虫を連想したんでしょうね。一般的におけらと呼ばれていますけれども、もぐらみたいに前足だけが太い虫です。捕まえるとその太い前足をすごく変なふうに勢いよく振るんですね。学校の2階から見ると、僕が駆ける姿がそのおけらを連想させたんだと思います。数人が言い始めたおけらコールが、あっという間に伝染し、大爆笑が起きた。そして僕は、どうせはやし立てられるならのならば、開き直ってやれというような気持ちになったのかもしれません。わざともっとおかしく手を振った時に、さらに大爆笑が起きたんです。でも、その大爆笑を契機として、悪ガキグループの僕を見る目がちょっと変わったんですね。からかう表情や笑い顔はそのままだったのですが、それにどこか親近感を持ったような感じで僕に接するようになりました。彼らが、お前ちょっと来いよって言うので、側に近寄って行くと、変な雑誌のグラビアを見せる。当時の大人がひそかに読んでいた、いわゆるエロ雑誌というんでしょうか、そういうもののグラビアを僕に見せて、その反応を見て喜ぶ。それを機に、小突かれたり蹴られたりすることは、ぴたっと止んだんですね。卒業するまで、おけらというあだ名は僕に付いて回りました。まだおからなら良かったな、なんていうふうに思いましたけれどもね。

後から振り返ってみると、僕自身は自分がいじめられたことを受け入れて開き直ったことで、乗り越えることができたのかななんて思っております。でもこれは、今とは時代が違う、あの時代における僕の体験です。先ほども言いましたが、数人に囲まれて頭を小突かれたり、膝蹴りされたりしたけれども、どこかで手加減していた。つまり、あの時代の子どもたちは、学校から帰ってもガキ大将グループの中に混じって遊んでいた。年齢はまちまちです。ガキ大将っていうのはやっぱり、グループ

15　ケラ：バッタ目・キリギリス亜目・コオロギ上科・ケラ科に分類される昆虫の総称。地下にトンネルを作って住居とし、採餌行動も地中で行う。日本では、「おけら」という俗称で呼ばれることが多い。

の全体を見ているんですね。喧嘩が始まっても黙って見ているんですよ。ずっと見ているかというとそうじゃない。どっちかが確実に劣勢でやられ放題で、このまま見ていたら怪我するぞというところで、やめろよ、そこで、と割って入るんですね。

子どもの世界にもそういう歯止めの機構があったんですよ。大人たちも、たとえ隣の子であろうが、官舎に入っていて上役の子であろうが、悪いことをやっているのを見たら、何してるんだ、こら、と、すぐ止めた時代だったんですよ。そういう中で、子どもたちは無意識のうちにルールを身に付けていった。だから、歯止めが掛かるんですね。今はそうではないんです。

今から17年ほど前のことになりますけれども、フリースクール[16]があっちでもこっちでも、まるで雨後の竹の子が地表からすーっと芽を出すようにたくさんできました。そのうちの一つから、うちのフリースクールで特別講師をやってくれないかというオファーがありました。90分の枠で2コマ、月に1回でいいから、授業を行ってほしいという依頼でした。授業の内容はお任せしますということで。そして僕は、作家としてフリースクールに興味がありましたので、引き受けました。月に1回であればいいかなということで。

その年の4月、第1回目の授業に行きました。そこには12～3人の生徒が居ました。授業の内容はなんでもよいと言われていました。国語の話でも、文学の話でも、その時社会で起きているあるいは注目されている事柄についてでもよいということだったのですね。その時は、スポーツの話題なんかも含めて、その時に世間の注目を浴びていたものについて話をして、それに関連した文学作品に話題を移したりして、その後作品をコピーしたものを渡して、僕がそれを読んだり、生徒に順番に朗読してもらったりといったような授業でした。

授業の一つの枠が90分でぶっ続けでやりますから、時間が経つにしたがい、みんな心を開いてくれました。でも一人だけ、どうしても心を開かない男子生徒がいました。視線が合うとすっと背けてしまう。ここを朗読してくれよというつもりで、指を差すとうつむいてしまう。こちらが話しかけても一言も回答がないままに、4月の授業は終わりました。

5月の授業の時です。僕の担当する授業を行う教室は2階にありました。1階のトイレに入って、その階段を上って2階へ行こうとしたら、僕を追い抜いていった生徒がいたんですね。追い抜かれ様に見たら、僕にとって、いいなぁと思うピアスを、その生徒が耳に付けていたんです。僕は、耳にピアスの穴は開けていませんけど、ピアスに近い小ぶりのイヤリングは時々付けていました。生徒が付けていたのは、本物のプラチナではないでしょうけど、プラチナ風の素材で、星をすごくうまくあしらったデザインでした。本当にいいなと思ったので、そのピアスいいじゃないかと、追い抜かれ様に言ったんですね。すると、その生徒がニコっと笑ったんですね。1か月の間、とうとう心を開くことなく無表情のままに終わった彼でした。でも、ニコっと笑っただけです。結局、その日の授業の中でも、彼は心を開いてくれませんでした。

6月の授業の時です。このフリースクールでは、情操教育というのを重視していたこともあって、外のカラオケルームに行ったんですね。十数人が入れる部屋を貸し切ってあるので、そこで、生徒と一緒にカラオケをやってくださいという学校側の要望でした。生徒をカラオケに連れて行って、そこで90分歌っていればいいということですから、僕はこれは楽でいいなぁと思いまして、喜んで、生徒を引き連れて行きました。そして、皆着席して、飲み物が配られて、もちろんアルコールじゃないですよ、飲み物が配られた時に、僕は誰か先陣切って歌う人はいないかな、いなきゃ僕が歌うよ、僕すごい音痴だけどねと、GLAY（グレイ）[17]の曲でもいいじゃないかと、そう言ったんですね。GLAYは当時、

16 日本においては、不登校の子どもの受け皿として、その学習権の保障や安心してすごせる居場所を提供する施設や通信制高校での学習をサポートするサポート校などを指す。不登校の子どもを対象とした、既存の学校とは異なる機関、施設が、フリースクールと総称される。

17 日本のロックバンド。1994（平成6）年メジャーデビュー。「グロリアス」「BELOVED」「口唇」「HOWEVER」などのヒット曲がある。

人気急上昇中で、若者の間で人気が沸騰していた、あのGLAYです。GLAYでもいいじゃないかと言った時に、2か月間、とうとう心を開くことのなかった彼が、僕が歌いますと言って、立ち上がったんですね。その時、僕は内心で、えーっと思ったんですけど、歌ってくれるの、じゃ頼むよと言って、彼に初っ端に歌ってもらいました。彼は、すごく心地良い感じで、切々と歌っていました。歌い終わると、もう1曲歌っていいですかって言うんですね。ああいいよ、どんどん歌ってと僕は言いました。すると、彼は、もう一曲、GLAYの曲を歌いました。また心地良さそうに、感情を込めて歌ったんです。うーん2曲も歌ってくれたよと、僕は内心びっくりしていたんですけれども、歌い終わったら、またもう1曲だけいいですかって言うんですね。ああいいよ、と答えました。とうとう3曲、GLAYの曲を彼は歌いました。それが、彼が僕に初めて心を開いてくれた時だったんですね。

それからの数か月間、彼は本当に変わっていきました。そのフリースクールは、ある学校に併設されていました。ですから、その学校と一緒になって文化祭を行うんですね。そして10月の文化祭の時、フリースクールの生徒だけのブースを出したり、フリースクール独自の企画をやりました。例の彼がリーダーになってやったんですね。

僕が1年間の特別講師の契約が終わってそこを去るまでの間に、彼がどういうことで不登校になって、どういうことでフリースクールに来たのかが、彼の家庭の状況も含めて、はっきりと分かりました。でもそれは、僕が彼から聞き出したわけではないんです。僕は、そのフリースクールを去るまでの間に、彼自身が問わず語りに言ったことを、僕の胸の中で集大成しただけです。彼のお父さんは、ある学校の校長をしていました。彼のお母さんも元教育者でしたが、彼が生まれた時に、育児に専念するために、教壇から去りました。彼のお父さんは、日本では最高学府と言われている大学の出身でした。彼が幼稚園に通っていた時から、お父さんはこう言っていたそうです。お前はお父さんが出た大学に入ってくれるよな、楽しみにしているぞ、と。幼稚園の時にそんなこと言われたって、別に重圧は感じないでしょう。大学入学まで、はるか彼方ですからね。小学校の時もさほど重圧には感じないですね。ただ、そのお父さんが、本当に口癖のように彼に対してそう言い続けてきたことを念頭に置いて、後の話を聞いてください。彼は学校の成績はよかったんです。高校も屈指の進学校の一つに入りました。それでお父さんは喜んじゃってね。これでもうお前はお父さんが出た大学に入学できるよな、頼んだよ、よかったな、なんていうような言い方がすごくリアルな感じになって、期待度が100％で言うと98％ぐらいな、そんな言い方になってしまったんですね。この頃の彼は、お父さんのその口癖にとても強い重圧を感じていました。実は、彼は中学3年の頃に、自分が将来進みたい道、ある志望を胸に抱いていたんですね。その時それをお父さんやお母さんに伝えていれば、これから話すようなことは起きなかったのではないかと思います。その時、お父さんが、お母さんが、彼の話に耳を傾けて、彼の希望を認めていたら、その後の悲惨なことは起きなかったと思います。

彼は、高校1年の1学期は無事に終えたのですが、夏休みが明けて2学期になって間もなく不登校になりました。学校でいじめを受けたんですね。彼はすごく無口な人間です。そして、話し掛けられても小さくうなずくだけの時があったんですね。それで、周囲から誤解を受けるところがあったんでしょうね。それと、周囲の誰もが、彼のお父さんが学校の校長で、お母さんも学校の先生だったということも知っていた。そして、休み時間や昼休みになると、ほかの生徒が見たこともないようなこんな大判の新聞紙ぐらいの大きさの本を広げて見たりしている。実は彼は中学3年の頃からデザイナー志望だったのですが、それに関連する書物を区の図書館で借りて、学校には無いから、教室で広げて見ていたんですね。そんないろいろなことが、彼がいじめを受ける原因になったのかもしれません。

ある朝、彼がなかなか起き出してこないもので、お母さんが彼の部屋に行って毛布を剥いで、起きなきゃ駄目じゃないの、学校に遅刻するわよと急かした。彼は渋々起きて、だらだらと朝食を取って、普段だったら家を出る時間になってもトイレに入ってなかなか出てこない。お母さんは焦って、トイレのドアをどんどんと叩きながら、何をしているのよ、遅刻するわよ、というとやっと出てくる。そうしてトイレから出てきて、かばんを提げて、うちは出て行きました。でも学校へ行ったわけではなかったんですね。公園に行ったり、図書館に行ったり、いろいろなところで時間をつぶして夕方家に帰っ

て来る。翌日も、かばんを提げて家を出て行きました。でも学校には行っていなかった。

二日目に担任の先生から電話があって、お母さんは彼が不登校である事実を知ったんですね。お母さんは驚いて、彼を問い詰めて、行かなきゃ駄目よと、学校に行くことを約束させたんですけれども、三日目も四日目も行かなかった。はじめは、お母さんはお父さんに彼の不登校のことを言わなかったんですね。でも、一週間経っても、不登校が続いた。そこで、いつまでも隠しておけないということで、お父さんにそのことを伝えたんです。それを聞いたお父さんは、がく然としたんですね。自分が出た大学に入学してくれるものと思っていましたから。そして彼が勉強すれば、それは十分に可能だと楽観視して、そのつもりになっていましたから。激情に駆られたお父さんは、生まれて初めて、彼をぶん殴ってしまったんですね。でもそれによって、彼の逆ギレを呼んで、家庭内暴力が始まったんです。その家庭内暴力がどんなに凄まじいものだったかは、今日のテーマとは違いますので、詳細はお話ししません。でも、なぜ彼の家庭内暴力がなくなっていったのかについては話してみたいと思います。

その後、お父さんの心からも、お母さんの心からも、お父さんが出た大学に彼が入るという期待が全くゼロになりました。全くゼロになれば、本人にもよく伝わります。その時に彼の家庭内暴力が止みました。そして彼は、自らフリースクールの門を叩いて、入学願書を取ってきて、ここへ行っていいかなと、お父さんとお母さんに言ったんですね。当時は、子どもが自分でフリースクールに行って、自ら入学の意志を示すということはほとんど無かったんです。保護者が行って、こういうところがあるから行きましょうねということで通う子どもたちがほとんどでした。

ちなみに、当時のフリースクールの生徒全員が100％不登校の生徒たちだと想定してください。ごくまれに違うケースがありますけれども。なぜ不登校になったのか。当時は、その内の約3分の2がいじめが原因でした。残りの3分の1は情緒不安定が原因でした。現在の状況は、僕は正確な統計上の数値は知らないんですけれども、よい子に読み聞かせ隊の活動や中学や高校などに行った時などに聞いた話、知った事実などから判断すると、いじめがまだ多いかもしれませんが、心のリズムを崩して不登校になる子どもたちが増えているなというのが実感です。そのくらいの割合かは分かりません。これは僕が思っている、実感していることです。

話を元に戻します。そういうわけで彼は、僕に心を開いた。いじめを受けて、学校から帰ってきた時から、そして不登校を始めてから、彼が自室に入って束の間でも心が解放できるのは、GLAYの曲を聴いていた時だったんですね。だからカラオケに行った時に、僕が「GLAYでもいいじゃないか」と言った時に、ぱっと反応したんです。その後、彼はデザイン関係の学校に行って、今はデザインの仕事をやっております。そのうち、どこかで彼の名前を聞くこともあるんじゃないかなと期待しております。最近は年賀状のやり取りもなくなりましたけれども、そんなものない方が、彼がぐーんと成長している時だと思いますので、僕は全然心配していませんけどね。

彼が不登校を始めた時代というものを考えてみましょうか。日本の家庭の多くが、子どもたちに部屋を与えた時代です。子どもたちは、自分の部屋という城を持ちました。子どもたちには意外と親には心配掛けまいという意識があるんですね。学校でいじめが始まって、嫌だ嫌だ、つらいつらい、そう思っても帰ってくる時は、ただいまと元気よく帰ってきます。そして自分の部屋にすぐ入ってしまうんですね。親は子どもが自室に入ってどんな顔しているかは分かりません。あるいは先ほどお話したフリースクールの彼がGLAYで救われたように、何かで心を癒やしているかもしれませんが、周囲の人にはそれは分かりません。朝も、行ってきますと元気に学校へ出掛けて行きます。親は学校で子どもがどういう目に遭っているのかを知りません。その間に今はいじめがどんどんエスカレートしていきます。気が付いた時は深刻な状態になっているんですね。そういうパターンが多いようです。

僕らが子どもの頃はどういう状況だったでしょう。商店街から続いた住宅街なんかの道を歩いていると、当時はよく、お父さんの怒鳴り声が聞こえました。怒鳴り声だけじゃありません。卓袱台[18]をひっ

18 ちゃぶだい：日本において、和室などで床に座って用いる、短い脚のついた木製の食卓。折り畳み式のものが多く、形は正方形・長方形・円形と様々である。明治時代以降に使われるようになり、1920年代後半に全国的に普及したが、1960年ころから椅子とセットになったダイニングテーブルが普及し始め、卓袱台の利用家庭は減少していった。

くり返して、がらがらがっちゃんという食器が割れる音も聞こえてきました。こんなもの食えるかっ！なんていう声も聞こえてきました。何かで腹を立てて卓袱台をひっくり返したんでしょうね。でもそういうお父さんが、子どもの変化をいち早く見付けたんですよ。お前、この頃、顔色よくないな、学校で何かあったんだろう、というように。お父さんの勘は鋭いんです。なんかあったんだろう、言えよ、言えよっていうから、子どもも実は……ということで話す。まだまだいじめと言っても、5段階だったら1ステージの段階です。それで、お父さんは、それじゃ俺が学校に行って先生に言ってやるというふうに、そんな感じになったんですね。では、お父さんが学校へ行ったかというと、実際には最初はお母さんが行ってやんわりと言ったのかもしれません。いずれにしても、今よりも当時の先生の方が、対応がよかったような気がいたします。モンスターペアレント[19]なんていませんもの。僕が小学生の時には、いじめられても意外と泣くことはなかったんですけれども、普段いじめられてないのに、けんかで負けるとワーワー泣いてそのまま家へ帰っちゃう同級生がいたんですよ。すると、お母さんがその子の手を引っ張ってきて、担任の先生に、ぺこぺこ頭を下げてお詫びしていました。今は逆でしょ？何かあると、うちの子がこんな目に遭っているということで学校に乗り込んでくる。学校はどう責任を取ってくれるんだといったような話になるからややこしくなって、問題解決もなかなかできない。教育委員会がどうの、なんて、ややこしいことばっかりになってしまって、時間ばかりが掛かって、ちゃんとした対策も進まずに、問題を複雑にして、結果的には大きな事件にしてしまうこともあります。学校の方も当時のように良い意味で世間慣れしている先生が少なくなったという状況もあるかもしれません。昔は、皆ガキ大将グループやなんかでけんかしたりいじめられたり、そういうことで鍛えられていることもあってか、いじめられている子どもにはそれならお前こうすりゃいいじゃないかとか、あるいはいじめている子どもには急所をつかんだような指導ができたんですけれども、そういう先生もいなくなりましたね。

だから、ある意味では、今はいじめが教育の矛盾を露呈している。いじめ事件が起きる、あるいはいじめということが、学校で問題になっている　時は、そういうことではないかなと。だから、我々がいじめを社会全体の問題として取り組んで、少なくとも陰湿で極端ないじめはなくさなければいけません。そういう意味で、僕はここ2～3年がいじめの、いじめをなくすための本当のスタートに立ったばかりではないのかなと考えています。そういう意味では、これからたくさんの論議を重ねていく必要がある。そこから、新しいいじめの対策がきっと生まれるのではないかなと確信しています。そしてそのことに期待を込めて、絶対に成し遂げなければならないことだということを締めの言葉にして、僕の今日の講演を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

＊このトークショーの模様は、動画共有サイトYouTubeの「人権チャンネル」にて視聴可能です。
https://www.youtube.com/jinkenchannel

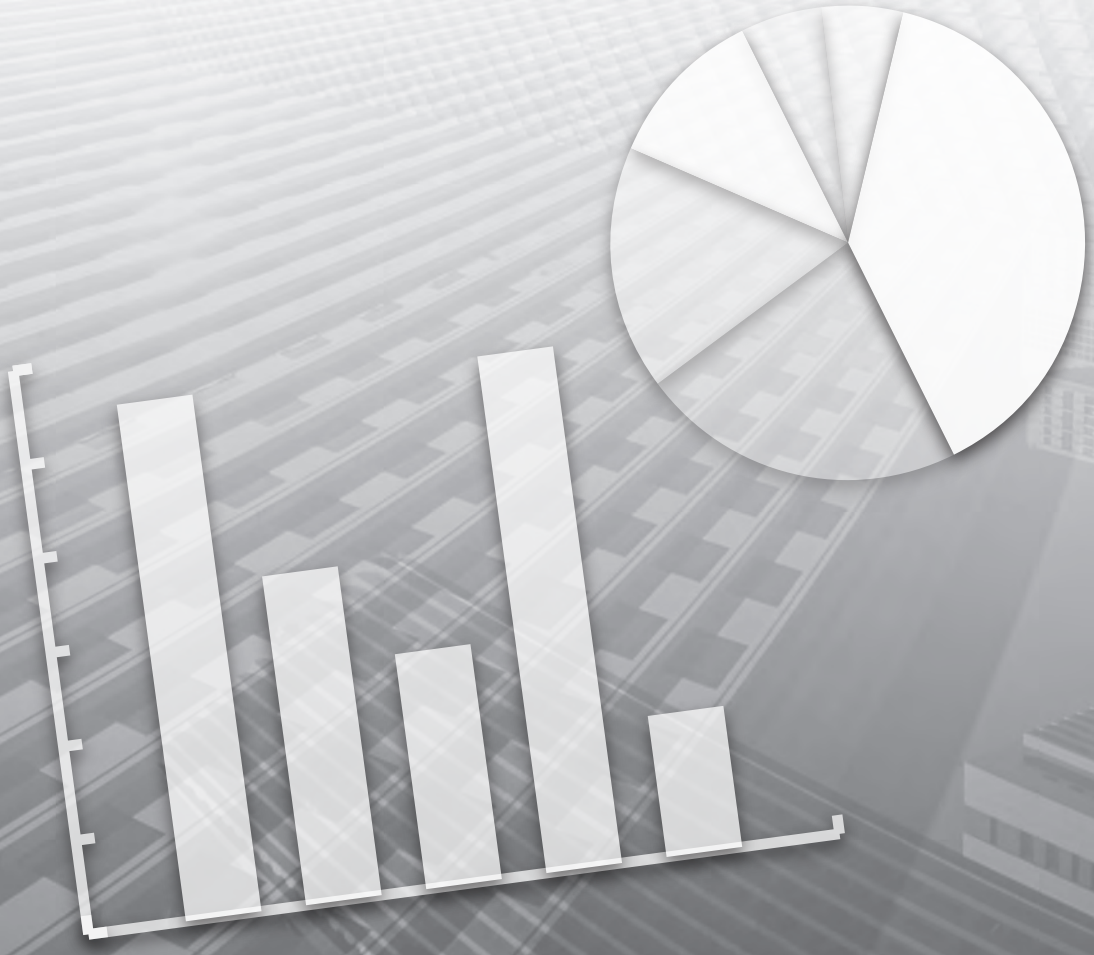
19　学校などに対して、言い掛かりとも自己中心的ともいえる理不尽な要求や苦情、文句、非難などを行う保護者を意味する和製英語。日本では、1990年代後半から増え始めたといわれており、深刻な社会問題となっている。担任の教師に対して行われる場合が多いが、学校長や教育委員会などのより権限のあるところにクレームを持ち込み、教員に対して間接的な圧力を掛けるといった事例も増えている。略して「モンペ」とも呼称される。なお、当該の要求が常識の範囲内にあり、かつ然るべき理由を明示してくる場合は「モンスターペアレント」とは呼称されない。

●関連情報

＊直木賞 絵本 児童書 作家/志茂田景樹のWEB絵本・読み聞かせ劇場
http://www.kageki.jp/
＊絵本・読み聞かせ 講演 全国 旅日記　No.322
http://www.kageki.jp/tabi_nikki/322.html
＊志茂田景樹のふだん着ブログ
http://plaza.rakuten.co.jp/odata325juk/diary/
＊志茂田景樹　ツイッター
https://twitter.com/kagekineko

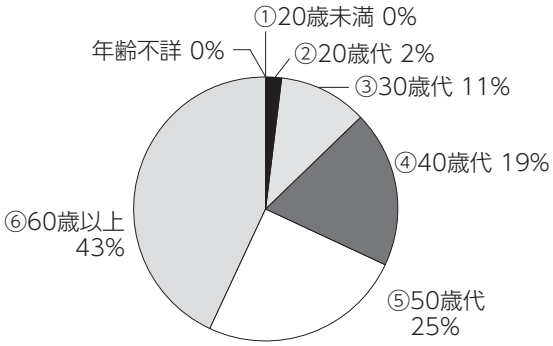
長崎会場

アンケート集計結果



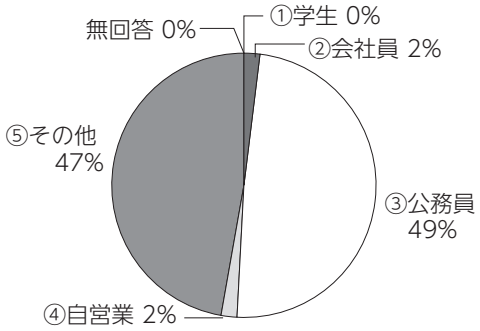
1　年齢構成

① 20歳未満	0 人
② 20歳代	1 人
③ 30歳代	5 人
④ 40歳代	9 人
⑤ 50歳代	12 人
⑥ 60歳以上	20 人
年齢不詳	0 人



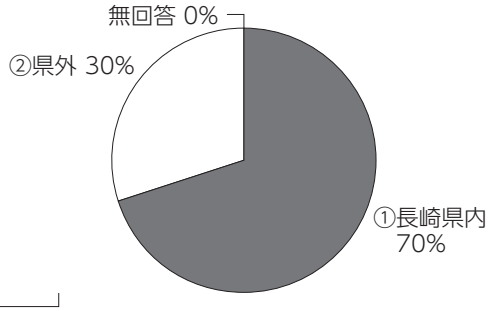
2　職業構成

① 学生	0 人
② 会社員	1 人
③ 公務員	23 人
④ 自営業	1 人
⑤ その他	22 人
無回答	0人



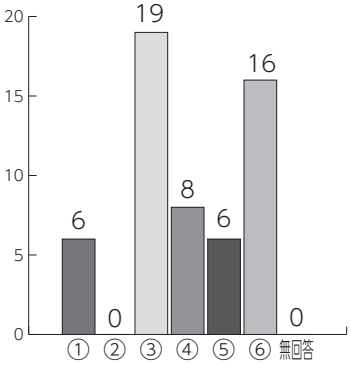
3　住まい

① 長崎県内	33 人
② 長崎県外	14 人
無回答	0 人



4　本シンポジウムを知ったきっかけ（複数回答）

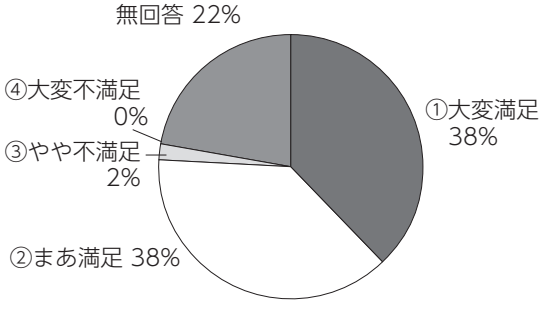
① 新聞広告	6 人
② テレビ	0 人
③ チラシ	19 人
④ インターネット	8 人
⑤ 知人・家族	6 人
⑥　その他	16 人
無回答	0 人



5　本シンポジウムについて

(1)　全体満足度

① 大変満足	18 人
② まあ満足	18 人
③ やや不満足	1 人
④ 大変不満足	0 人
無回答	10 人



(2) 自由記入欄より

シンポジウムの参加も初めてでしたが、各種の専門の方々のお話を聞く機会を頂き、有意義でした。質問にもありましたが、加害者の気持ちを考える立場の方と、被害者のご遺族でいらっしゃる立場の方と同じ場でお話をすることは、違和感があるようにも当初思われましたが、とても深くつながり、どちらともつながっていないとならないことだと話されていたのが印象的でした。

パネリストによる基調報告が大変良かったです。それぞれの立場から人権について語っていただき、深く考えさせられました。

パネルディスカッションで、いろいろな立場の方のお話（考え）を聞くことが出来たこと。ただやはり、限られた時間で広いテーマを論じるのは難しいですね。でも、パネリストの皆さんがとても努力されているのが伝わって来ました。

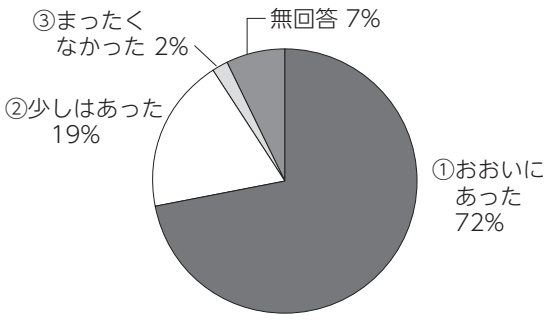
・いじめや虐待の原因の多くは、親をはじめとする大人の側にある事を改めて感じた
・その大人達は何故そうあるか？本当に根本的なメスを入れなければならないのは、そこら辺だと思う。

山口さんの話は心に響いたし、吉田さんのパワーポイントはよくまとめられており、今後の啓発にも役立てたいと思った。パネルディスカッションの内容はとても参考になった。

※主な回答を抜粋

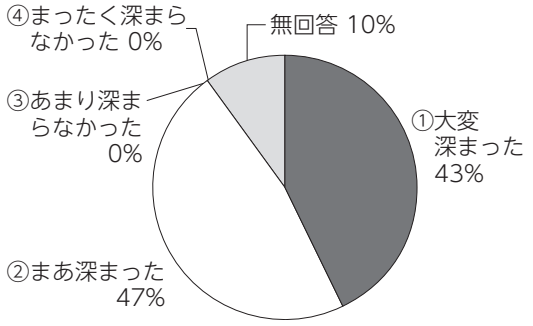
6　本シンポジウム参加以前に、人権問題についてどのくらい関心や理解があったか

① おおいにあった	34 人
② 少しはあった	9 人
③ まったくなかった	1 人
無回答	3 人



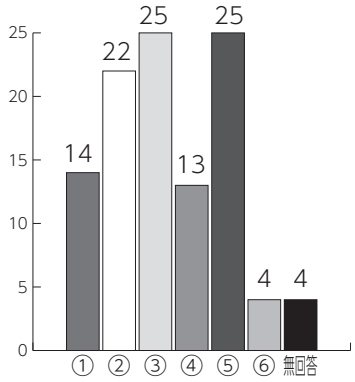
7　本シンポジウムに参加して、人権問題についての関心や理解は深まったか

① 大変深まった	20 人
② まあ深まった	22 人
③ あまり深まらなかった	0 人
③ まったく深まらなかった	0 人
無回答	5 人



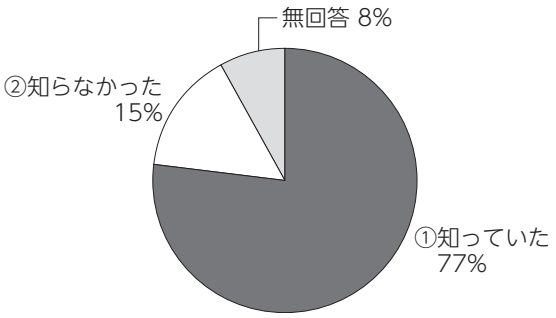
8　本シンポジウムに参加して、何か行動しようと思ったか（複数回答）

① 人権侵害の被害者・加害者にならないよう気をつけたい	14 人
② 人権問題に関心を持ち、偏見を持ったり、差別をしないようにしたい	22 人
③ 人権問題について、もっと知識を深めたり、勉強したりする機会をもちたい	25 人
④ 今回のイベントの内容を、友だちや家族に説明し、話し合いたい	13 人
⑤ ほかの人権問題に関するイベントにも、機会があれば参加したい	25 人
⑥ その他	4 人
無回答	4 人



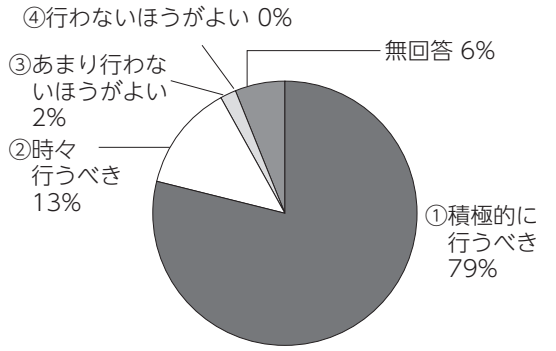
9　国や地方自治体が、広く人権啓発事業を行っていることは知っていたか

① 知っていた	36 人
② 知らなかった	7 人
無回答	7 人



10　今後、このようなシンポジウムを行なうべきだと思うか

① 積極的に行うべき	37 人
② 時々行うべき	6 人
③ あまり行わないほうがよい	1 人
④ 行なわないほうがよい	0 人
無回答	3 人



11 今回のシンポジウムについてのご意見や今後開催してほしいテーマなど（自由記入）

異質なものを受け入れる、共存する、そういう事が当り前の社会に日本が成熟したら良いなと思いました。志茂田さんはそういうテーマを体全体で表現している方だと思います。また後日UPされるYouTubeを観たいと思います。ありがとうございました。

小学校中学年の娘を持つ１人の母親として、たくさん参考になる言葉、反省すべき点を見つけました。仕事をしながらの子育て、特に親の心の余裕がないゆえに厳しい言葉を発したり、後で後悔の念にかられます。子どもの“居場所”を無くさないよう、肩の力を少し抜いて子どもと向き合っていけたらいいなと思います。ありがとうございました。

子どもの人権を引き続きお願いすると共に、大人（社会人）でも悩んでいても誰にも相談できず、またはどのように対処して良いか分からない問題（セクハラ、パワハラ、雇用差別、退職強要ｅｔｃ）などをテーマにしたシンポジウムも開催できないでしょうか？

一番関心のある人権課題なので、他県でもしていただきたいです。せっかくの素晴らしいシンポジウム、たくさんの人が参加していただけるともっと良かったです。

素晴らしいパネリストの方々なのに観客が少ない。もっと今、子育てしている人に聴いて欲しかった。志茂田景樹さんのお話、解かりやすく、聴きやすく、とっても良かった。今まで少し偏見を持ってましたが、ファンになりました。今回は素晴らしい話、ありがとうございました。

※主な回答を抜粋

広報内容

広報実績

No.	事　　項	実施内容
1	新聞広告	・2紙に全5段広告を掲載。 朝日新聞長崎県版：平成25年12月12日（木） 平成25年12月21日（土） 西日本新聞長崎県南版：平成25年12月14日（土） 平成26年1月18日（土） ・1紙に半5段広告を掲載。 長崎新聞：平成26年1月11日（土） ・1紙に半2段広告を掲載。 朝日新聞長崎県版：平成26年1月1日（水・祝）
2	ラジオ広告	・NBCラジオに20秒CMを30本放送、60秒生CMを2本放送。 平成26年1月6日（月）～1月19日（日）の期間。
3	バナー広告	・開催2週間前よりMarketOne（長崎県内）を実施。 クリック保証型：1,000クリック／1,500,000imps
4	広報用チラシの配布	・広報用チラシを関係機関等に配布、掲出を依頼。 長崎地方法務局（1,000部） 全国の法務局・地方法務局（490部）※長崎地方法務局を除く 長崎県（1,300部） 長崎市（1,100部） 長崎県内図書館（1,140部）※神戸市を除く。 後援団体（340部） その他、全国の自治体などに配布。 ※チラシ印刷部数：11,000部
5	イベント情報サイトへの広報記事掲載	・インターネット上のイベント情報サイトに広報記事を投稿、掲載。全国イベントガイド、WAM NET（ワムネット）など計16サイトに掲載。
6	メールマガジンの配信	・本シンポジウムの開催を案内するメールマガジンを計3回配信。
7	人権ライブラリーホームページへの広報記事掲載	・人権ライブラリーホームページのイベント情報コーナーに広報記事を掲載。
8	人権センターホームページへの広報記事掲載	・人権センターホームページのイベント情報コーナーに広報記事を掲載。

新聞・バナー広告



【全5段広告】
（上）
朝日新聞長崎県版
平成25年12月12日（木）朝刊掲載
平成25年12月21日（土）朝刊掲載
エリア：長崎県
部数：46,764部

（下）
西日本新聞長崎県南版
平成25年12月14日（土）朝刊掲載
平成26年１月18日（土）朝刊掲載
エリア：長崎県南部
部数：37,794部



【半5段広告】
長崎新聞
平成26年1月11日（土）朝刊掲載
エリア：長崎県
部数：182,704部





【半2段広告】
朝日新聞長崎県版
平成26年1月1日（水・祝）　朝刊掲載
エリア：長崎県
部数：46,764部





【バナー広告】

実施内容の周知

YouTube 人権チャンネル

人権シンポジウム in 長崎の模様は、YouTube人権チャンネルにおいて、動画を配信した。
https://www.youtube.com/jinkenchannel





人権ジンポジウム開催実績一覧

年度	開催日	場所	シンポジウムテーマ
平成25年度	平成25年8月31日	宮城県石巻市	震災と人権　～一人一人の心の復興を目指して～
	平成25年10月20日	東京都港区	インターネットと人権　～今、ネットで何が起きているのか～
	平成26年1月11日	兵庫県神戸市	震災と人権　～阪神・淡路大震災から『心の復興』を学ぶ～
	平成26年1月26日	長崎県長崎市	子どもと人権　～いじめ・体罰・虐待のない社会を目指して～
平成24年度	平成24年7月28日	岩手県盛岡市	震災と人権　～一人一人の心の復興を目指して～
	平成24年10月28日	東京都港区	性の多様性を考える　～性的指向と性同一性障害～
	平成24年11月3日	福岡県福岡市	震災と人権　～私たちにできること～
	平成25年1月19日	福島県福島市	震災と人権　～一人一人の心の復興を目指して～
平成23年度	平成23年10月23日	東京都港区	震災と人権　～私たちに出来ること～
	平成24年1月22日	大阪府大阪市	震災と人権　～私たちに出来ること～
	平成24年2月11日	宮城県仙台市	震災と人権　～一人一人の心の復興を目指して～
平成22年度	平成22年9月25～26日 ※9月20日プレフェス	岩手県盛岡市	超高齢社会と人権
	平成22年11月5～6日	大阪府大阪市	真の多文化共生をめざして
平成21年度	平成21年9月19～20日	岐阜県岐阜市	今こそ身近な視点から人権問題に注目する ～女性差別撤廃条約から30年、子どもの権利条約から20年、そして日本は今～
	平成21年10月3～4日	京都府京都市	人権の視点からハンセン病を考える
平成20年度	平成20年10月7～8日	東京都新宿区	「人権の世紀」の実現に向けて　みんなではぐくむ人権文化 ～世界人権宣言から60年～
	平成20年11月17～18日	宮城県仙台市	「人権の世紀」の実現に向けて　みんなではぐくむ人権文化 ～世界人権宣言から60年～
平成19年度	平成19年10月7～8日	福島県郡山市	「人権の世紀」の実現に向けて　みんなではぐくむ人権文化 ～子どもたちとともにつくる輝く未来～
	平成19年11月17～18日	和歌山県和歌山市	「人権の世紀」の実現に向けて　みんなではぐくむ人権文化
平成18年度	平成18年9月30日～10月1日	大分県別府市	「人権の世紀」の実現に向けて　みんなではぐくむ人権文化
	平成18年10月1～2日	北海道札幌市	「人権の世紀」の実現に向けて　みんなではぐくむ人権文化
平成17年度	平成17年7月23～24日	愛知県名古屋市	「人権の世紀」の実現に向けて　みんなではぐくむ人権文化 ～子どもたちと共につくる輝く未来～
	平成17年10月1～2日	栃木県宇都宮市	人権の世紀」の実現に向けて　みんなではぐくむ人権文化 ～子どもたちと共につくる輝く未来～
平成16年度	平成16年8月28～29日	岡山県岡山市	「人権の世紀」の実現に向けて　みんなではぐくむ人権文化 ～子どもたちが輝く社会づくり～
	平成16年10月30～31日	埼玉県さいたま市	「人権の世紀」の実現に向けて　みんなではぐくむ人権文化
平成15年度	平成15年8月29～30日	東京都新宿区	「人権の世紀」の実現に向けて　みんなではぐくむ人権文化
	平成15年10月4～5日	福井県小浜市	「人権の世紀」の実現に向けて　みんなではぐくむ人権文化
平成14年度	平成14年10月13～14日	宮崎県宮崎市	「人権の世紀」をむかえて　みんなで育む人権文化
	平成14年11月9～10日	埼玉県さいたま市	「人権の世紀」をむかえて　みんなで育む人権文化
	平成14年12月7～8日	広島県広島市	「人権の世紀」をむかえて　みんなで育む人権文化
平成13年度	平成13年8月4～5日	兵庫県神戸市	「人権の世紀」をむかえて　－市民ネットワークがつくるハートピア－
	平成13年9月15～16日	滋賀県大津市	「人権の世紀」をむかえて　－はぐくもう　人とのつながり　自然とのかかわり－
	平成13年11月10～11日	神奈川県相模原市	「人権の世紀」をむかえて　－変貌する都市における「普遍文化」としての人権－
平成12年度	平成12年10月21～22日	島根県松江市	「人権の世紀」を実現するために　－心のバリアフリーを目指して－
	平成12年11月25～26日	千葉県千葉市	「人権の世紀」を実現するために　－心のバリアフリーを目指して－
	平成12年12月9～10日	徳島県徳島市	「人権の世紀」を実現するために　－心のバリアフリーを目指して－
平成11年度	平成11年9月4～5日	和歌山県白浜町	21世紀に向けて　－人権の世紀にふさわしい人権意識を育てるために
	平成11年10月23～24日	鹿児島県鹿児島市	21世紀に向けて　－人権の世紀にふさわしい人権意識を育てるために
	平成11年11月10～11日	神奈川県横浜市	21世紀に向けて　－人権の世紀にふさわしい人権意識を育てるために
平成10年度	平成10年7月23～24日	東京都新宿区	－
	平成10年9月5～6日	新潟県新潟市	暮らしの中の人権を考える　－世界人権宣言50周年によせて－
	平成10年11月28～29日	京都府京都市	人権文化の構築に向けて
平成9年度	平成9年7月24～25日	東京都新宿区	これからの人権文化の創造に向けて
	平成9年9月13～14日	鳥取県鳥取市	人権尊重の社会づくりに向けて
	平成9年12月6～7日	奈良県奈良市	共に生きる社会を目指して
平成8年度	平成8年7月24～25日	東京都新宿区	「人権教育のための国連10年」の取組みを考える
	平成8年11月30日～12月1日	鳥取県鳥取市	人権の新しい時代を考える　－「人権教育のための国連10年」によせて－
	平成9年2月1～2日	高知県高知市	人権の世紀に向けて　－人権教育のための国連10年への提言－
平成7年度	平成7年7月27～28日	東京都新宿区	日本人の人権意識とその課題
	平成7年10月28～29日	福岡県北九州市	国際社会における日本の人権問題解決への取組みと課題
	平成8年2月17～18日	静岡県浜松市	「人権の時代を拓くために」　－21世紀への提言－
平成6年度	平成6年7月26～28日	東京都新宿区	国際潮流の中で人権問題を考える
	平成6年10月15～16日	熊本県熊本市	同和問題の解決に向けて
	平成6年12月1～2日	大阪府大阪市	今後の人権意識のあり方に付いて

(注1) 平成22年度までは、人権啓発フェスティバルの中でシンポジウムを実施した。
(注2) 平成22年度までの「開催日」は、人権啓発フェスティバルの開催日である。

人権に関する資料をお探しの方、借りたい方、
人権に関する視察・研修や打合せスペース（無料会議室）をお探しの方は、
人権ライブラリーを御活用ください。
遠方の方でも、郵送等による資料の貸出しも行っています。

詳細は下記までお問い合わせいただくか、
人権ライブラリーのホームページを御参照ください。

人権ライブラリー

※公益財団法人人権教育啓発推進センター併設

〒105－0012　東京都港区芝大門2－10－12　KDX芝大門ビル4Ｆ
TEL　03－5777－1919　／　FAX　03－5777－1954
Ｅメール　library@jinken.or.jp
ホームページ　http://www.jinken-library.jp

※ シンポジウム当日の模様は、
YouTube 人権チャンネル（https://www.youtube.com/jinkenchannel）
でも御覧いただきます。

公益財団法人 人権教育啓発推進センター

〒105－0012　東京都港区芝大門2－10－12　KDX芝大門ビル4F
TEL 03－5777－1802（代表）　　FAX 03－5777－1803
URL　http://www.jinken.or.jp

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。